
忍の剣士

銀閣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忍の剣士

【Nコード】

N24800

【作者名】

銀閣

【あらすじ】

子供を助けるために変わりに車に轢かれた男・・・その男の名前は桐野銀次。しかし死んだ理由は天使の手違い！それを謝罪するために神様が転生させてくれるとのこと！銀次は刀語の能力を手に別の世界に！！

はたしてどうなる世界！そしてどうする転生者！忍法、剣法を駆使して生き残れ！！

プロローグ(前書き)

ネギま小説初投稿です。ちょっと文法がおかしい、内容がよくわからない、更新が遅い等々あると思います。がよろしくお願ひします。

プロローグ

『まじすんませんでしたアアアアアアアアアアアツ!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!』

いきなり目の前で土下座する変なおっさん……誰？

くく時は遡ること三分前くく

「ふんふんくん」

初めまして、俺の名前は桐野銀次^{きりのぎんじ}。武術と漫画とアニメを愛する男
さ!!そんな俺がなんでいま何をしているかって?それは

「ありがとうございます」

アニメイトで『刀語』の十二巻を買ったのさ!!刀語は前から知
ってたんだけど読む機会がなかったんだよね。でも、この前たま
たまお金と時間に余裕があったから一巻の『絶刀・鉤』を買って読
んだんだ。いや、おもしろいね!刀語!

「いや、幸せだね」

俺は鼻歌を歌いながら帰路につく。そして信号で待っていると、

「!?!危ない!?!」

子供が車に轢かれそうになっていた!俺はすぐに駆け寄り子供を助ける。そして

キキイイイイイツ!?!?!?!!

跳ねられた。受身は取れたと思ったんだけど……打ち所が悪かったらしい。ああ……意識が……。

「そして現在にいたります」

『あの、誰に説明しとるんじゃ?』

「なぜ俺がこんなところにいるのか分からない読者のために」

そういうのは大切だよね!

「まあ、それはいいや。それで?あなたは誰ですか?見たところちよつと頭イカれた人に見えるんだけど……」

『なんじゃ頭イカれたとか!?ワシはいたって正常じゃ!』

そのですか……。一応そうしときましよう。

『……いま、失礼なこと考えなかったかの?』

「いえいえ全然 それで?なぜ私はこんなところにいるんですか?

確か私は子供が車に轢かれそうになったところを助けようとして・・・」

『ふむ、轢かれたの』

ああ、やっぱり。

「子供は大丈夫でしたか？」

『ふむ、擦り傷とかは出来ておつたがそんな大した傷ではなかったからの。安心せい』

それは安心です。

「それではさっさとあの世とやらに連れてってください」

『む？生き返らせるとかいわんのか？』

なにを馬鹿なことを言ってるんですか？

「人の命は一人に一つ。死んでまた戻るなんて実際に起きるなんていやですよ」

そう、喚いたところで生き返りはできない。それに俺はちゃんと自分が轢かれたときのことを覚えている。

『うむ・・・実はそのことでなんじゃが・・・お主、別の世界にいつてはみんか？』

『・・・は？』

いまなんと？

『実はの、お主は本当はまだまだ死ぬはずじゃなかったんじゃが、部下の手違いでお主を殺してしまっただらしくてのう。じゃから、その詫びでお主を転生させようと思ってるの。あ、もちろんその天使にはそれなりの罰則は掛けたからの怒らないでくれ』

「……普通は怒りますけどね」

これで転生がないと言われたら流石に切れてたぞ？

『それで転生させる先は正直ランダム方式での。どの世界に行くかは分からのじゃ』

「憑依とかはやめてくれよ？他人の人生なんか歩みたくはないからな」

第一、それではつまらないし。え？さっきと言ってることが違う？転生ならいいんですよ転生なら。

『ああ、そこなら大丈夫じゃ。転生してもその原作に出てくるキャラに憑依はまずせんし、自分から接しないようにすれば原作とは関わらんからの。それとプレゼントで三つだけ願いを叶えてやるう。ああ、容姿なんかは設定してやるから願いのうちに入らんからの』

それはありがたいな。それじゃどうするか………うん、決めた。

「それじゃ容姿は刀語の宇練銀閣で。身体能力は通常の人間の倍に

してくれ」

『うむ、承知した。それで願いは？』

「それじゃあ

一つは刀語に出てくる完成形変体刀十二本のすべてを扱えるようにして欲しい

二つ目はオリジナルの変体刀を作れるようにして欲しい。

三つ目は刀語のキャラクターの能力を使えるように……これくらいかな？」

『ふむふむ……なにやらだいぶ偏っているような気もせんでもないがよろう。これでいいのかね？』

「はい、問題ありません」

俺は頷く。神様はなにやら紙に書き込み。

『うむ……これでよし。それでは新たな人生を楽しんでいきなさい』

「おう、じゃあな神様」

そこで俺の意識が途切れた。

さてさて、俺のいく世界はどんな世界なのかな・・・？

プロローグ（後書き）

さてさて始まりました初ネギま小説！読みにくくて駄文で更新亀だ
と思います。がよろしくお願ひします！

第一話

やあみんな俺は桐野銀次。天使の手違いで死んでしまったが神のおかげで転生したんだ。それで転生先なのだが……、

「ギン殿。お腹がすいたでござる」

「あ、もうちょい待ってろって」

俺は釜の前で飯を炊きながら近づいてきた細目の少女を宥める。……
・・みなさんわかりましたよね？細めであの独特の喋り方……
そう我らが忍者『ネギま！』の長瀬楓さまです。

〓時は遡ること十年前〓

俺がこちらの世界で自我を取り戻したのは五歳になったときだ。最初は戸惑ったが、着ていた着流し（宇練銀閣がきていたやつ）の袖の中に一枚の紙が入っていたので見てみると、

『この手紙を読んでいるということは無事に転生できたということじゃな？何よりじゃ。さて、なぜ五歳で自我を取り戻したか教えよう。まあ、最初は生まれた当初からあってもいいかなと思ったんだけど、それじゃ可哀想じゃと思っただから五歳からにしたいんじゃない。まあ、それはさておき今のおまえさんの身体能力じゃが……ぶつちやけた話まんま刀語のキャラの身体能力じゃ。刀語のキャラの能力ならなんでも使えると思ってもいいぞい。あ、でも鑢七実の『見取り稽古』は別じゃ。あれはチートすぎるから却下された。』

あと変体刀じゃがあれば刀の名前を呼べば出てくるようにしてあるからのいつでも呼び出せるぞい。

それでは第二の人生を楽しんでくれ 神より

P.S .

その世界はどつやら『ネギま!』の世界らしいからがんばってくれ
い』

「ネギま・・・ねえ。まあいいか好きだし」

俺はその神からの手紙を丸めて着物の袂に投げ込んだ。そして俺はさっそく稽古を始めようと思う。

「まずは・・・『絶刀・鉦』」

まずはちゃんと変体刀が出てくるかやってみる。鉦は成功だな。

「なら・・・『斬刀・鈍』 『千刀・?』」

おお、成功だ。特に斬刀は俺の刀語の中で一番好きな刀なんだよな。

その後も残りの『薄刀・針』 『賊刀・鎧』 『双刀・鎚』 『悪刀・鏢』
『微刀・釵』 『王刀・鋸』 『誠刀・銓』 『毒刀・鍍』 『炎刀・銃』

の楓をみたのだ。

くくそして現在くく

現在、俺は十五歳、楓は十歳。この十年間、俺は楓の子守をしていた。一緒に飯を作ったり、忍者の修行をしたり、一緒に勉強したり・・・まあ、お互い頭は悪かったが。それでもそれなりに楽しい生活を送っていた。

でも一つだけ問題が・・・、

「ギン殿！また薄刀を見せて欲しいでござる！！」

そう、実は以前剣の修行をしていたら楓に見つかってしまったのだ。しかも変体刀で練習しているときに。

もともと俺は剣術が得意だったので里の中でも一番異色の存在だった。しかし『忍法骨肉細工』や『忍法足軽』といったものを見せたらそこは忍者とあつてか天才とか神童といわれた。

さて、まあ、それはどうでもいいとしてだ。問題は楓が変体刀・・・特に『薄刀・針』をいたく気に入っているのだ。たぶん綺麗だからだろう。

「まてまて・・・しょうがないな。ほら『薄刀・針』」

「ありがとつでござるー！」

楓に薄刀を貸す。え？貸して壊れたらどうするのかって？一度戻せば元通りになります。

俺は斬刀で素振りをしながら呟く。

「ああ……平和だなア……」

銀次は空を見上げながら平和を嚙締める。

第一話（後書き）

楓が変体刀の虜に……（笑）でも大丈夫！まだ毒は回ってない・
……はず！！

それではまた次回！！

第二話

やあ、みんな。みんなの主人公桐野銀次だよ。前の話から早三年・
・俺はいま

「銀次殿と一緒になければ嫌でござる！」

「わがママを言うな楓！銀次殿には銀次殿の使命というものがあるのだ！」

「やだ銀次殿と一緒にがいい！！！」

俺に腕に巻きついて離さないのは今年で十三だけど十三歳には見えない楓と、その父親の挟まれている。

・・・なぜこうなった？

くく十分ほどまえくく

「零閃編隊——五機」

俺は自宅の庭で斬刀を使って零閃の練習をしていた。そこまでなら大したことはない。いつも通りだ。しかし・・・、

「銀次殿——！！！！！！！」

て、俺が関係しているのは間違いないようですが……」

「話を聞いてます」

「ふむふむなるほどねエ……」

話を纏めるところだ。

今朝、楓が起きて朝食を摂っていると、隼人さん（楓の父親の名前）に話があると言われ朝食後、楓はすぐに隼人さんの部屋に向かった。そしてこういわれたらしい。

『麻帆良学園に行つて来い』

うん、まあ年齢的に行かなきゃ行けないもんね。第一行って貰わないと話が進まないし……。え？小学校はどうしたって？……。なんのことやら。対する楓は、

『銀次殿と一緒にいいでござる』

楓のその一言が事の発端らしい。隼人さんは俺には俺の都合があると言つてそれを却下。

楓は俺と一緒にじゃなきゃ麻帆良には行かないと言っている……。嬉しいのやら恥ずかしいのやら……。

「まあ……。できれば楓と一緒に行っても「銀次殿!!」落ちて着け楓。俺はまだ話してるから。しかし俺にも俺の仕事がある。そ

れを放るわけにもいかん……さて、どうしたものか？」

俺は考える。確かに楓といたいののは本音だ。一緒にいて楽しいし、何より血が繋がってないとはいえ兄妹分なのだ。……しかし俺にも仕事がある。いくら平和な時代だからといって『裏』の仕事がないわけではない。実際俺もかなりの回数の『裏』の仕事をこなしている……それでも心が壊れず、狂わないのは刀語のキャラの能力かそれとも変体刀のおかげ……か。

「ならば拙者、銀次殿の仕事が終わるまでここにいてござる！」

「なにを言っておるか！！それでは逆に銀次殿に迷惑だろう！！いい加減駄々を捏ねるでない！！！」

「またもや始まってしまった……。しょうがない……。」

「わかった楓……俺も麻帆良に行こう」

「銀次殿！！！」

楓が顔を輝かせながら楓が抱きついてきそうになったのを止める。

「ただし！！一年後だ。俺はまだ未熟だからなでできれば年内の仕事をやり終えたらだ……つまりは来年のお前の進学のときに俺が麻帆良に向かう」

「今年は仕事の予定でいっぱいだ。だから今年は我慢してもらおう。」

「……分かったでござる。そのかわり来年にはちゃんと来るでござるよ……」

ちよつと不満顔をしながらも、楓は麻帆良に行くことを認めた。そのまま楓は稽古に向かった。

「……本当によかつたのかね？銀次君」

「何がですか？隼人さん」

俺は隼人さんに聞き返す。

「……正直な話、今回の楓を麻帆良学園に入学させようと考えたのは君のためでもあるんだ。楓は君に依存している。それでは君に迷惑が掛かると思ったのだが……」

俺はそこまで聞いて苦笑いして答える。

「確かに楓は私と一緒にいる時間が多いですが……私は迷惑だと思つていませんよ？それどころか愉快なほどです。確かに楓は甘えています……楓はまだ十と三。まだまだ甘えたい年頃でしょう。どんな見えた目が大人でも中身はまだ幼い子供なんですから、それは仕方がないことです」

それを聞いて隼人さんは驚いたようにこちらを見て、

「……たまに君が同年代かそれに近い年代に感じるよ」

苦笑しながら言ってきた。……正直傷つく。

「ま、いまはいいとしてちよつと楓を宥めてきますね。納得させたいえあまり機嫌がよろしくなかつたので」

俺はその場を後にした。

くく隼人sideく

銀次君が出て行つて部屋が静かになる。

「まいったな……親の私より楓のことを理解しているな」

それはそれでキツイなア……。と、思いながら私は過去に楓がいったことを思い出した。

『せつしゃ、ぎんじどのの伴侶になるでいじめる』

そのときは冗談だとして笑い飛ばしたが……。どうやら楓は本気らしい。でもまあ……、

「銀次君なら楓をやつても構わないなア……」

頭こそ悪いが忍としてはピカイチ、申し分ないし次期長候補として上がっている程の実力者でもある彼なら……。

「……少し桐野と話すか」

手土産を手に、私は友人のところへと赴いた。

第三話（前書き）

今回は短いです。

第三話

〓〓麻帆良学園・四月〓〓

長かった……。楓はそう思った。自分がこの真帆良学園に入学してこの一年……。楓はまるで地獄のような生活だった。もちろん楽しい。たくさんの友人も作ったしかし……。足りなかった。今まで満ち足りていたものがなかった。今まで一時も離れずにいた人物が今日……。やってくる。

「ふふふ 早く会いたいでござるよ銀次殿」

楓は一年ぶりの再会を楽しみにしていた。

〓〓昼ごろ・麻帆良学園中央駅〓〓

「つつわけで……。俺in麻帆良学園!！」

シユタツとかつこよく決めつつもりだが、宇練銀閣の容姿もあつてかあまりにも似合わない。

「まあそれはどうでもいいや。それよりどうしようかな?」

ここまで来たんだから原作には入りたいよね。そう思いながらどうしようか悩んだ。ぶつちやけ楓には今日来るとは言っといたけど正確な時間はいつてない。はてさてどうしたものか……。そんなことを思っている。

「銀次殿~~~~!!!!!!」

「ん？この声はかえ『ゴシヤッ!!』ぐべ!？」

聞き覚えのある声。そう思い振り返った瞬間に楓の石頭が腹に減り込んだ。長瀬家はなぜか代々石頭が多く楓もその例外なく石頭だ。

「会いたかったぜござるよ~~~~!!銀次殿」

「わ、わかったから頭をグリグリするな。腹に頭が減り込んでる……!!」

今はなんとか我慢しているが、そろそろやばい……!!

「すまなかってござる。……でも、銀次殿と久しぶりに会えたからつい……」

……え？名にこの子？とっても可愛いんだけど？

「ははは、そうかそうか。でも、安心しろ少なくとも今年一杯は仕事はないはずだから」

そう、俺は去年の内に今年の仕事も全部終わらせたのだ。

「本当にござるか!？」

「ああ、まあさすがに急の任務とかはあるだろうけどな……それより」

ジロリと楓を見やる。楓はその視線で何か感じ取ったのか、普段は開かない目を開いている。

「ちゃんと鍛錬はやっていただろうな？」

「もちろんでござるよ」

楓の身体を改めて見る。女性としては高い身長。そして中学生とは思えない体躯。しかし俺が見ているのはそこではない。忍として働ける筋肉がちゃんとしてるかみているのだ。

「ふむ・・・ちゃんと鍛錬は怠ってないようだな」

「もちろんでござるよ！拙者はいつか銀次殿と共に最強の忍を目指すでござる！」

「ははは・・・そうか、それは楽しみだな」

楓の頭を撫でながら俺は微笑む。楓が昔から似たようなことを言うたびにこうする。・・・さすがに『伴侶になるでござる〜!!』と迫ってきたときは首筋に手刀を叩き込んだのはいい思い出だ。

「・・・信じてないでござるな？」

「いやいや。楽しみにしているよ。それよりも案内してくれないか？俺もあんまり詳しくないからな」

「了解でござる」

こうして、楓と銀次の麻帆良探検が始まった。

くくおまけくく

「そういえば、お前朝何時からいたんだ？」

「うん？時間が分からなかったでござるから朝の五時から張り込んでいたでござるよ」

「……………」

「ん？どうしたでござるか銀次殿」

「……………いや、何でもない。今日は好きなもん買ってやるぞ」

「本当でござるか！？なら拙者特大プリンを……………」

その後、銀次の財布が短時間で消費されたのは言うまでもない。

第四話（前書き）

三話が短かったため連続投稿します。

第四話

〳〳麻帆良学園到来初日の夜〳〳

「うん、とても楽しかったでござるな」

「ああ・・・財布が寂しくなつたがな」

楓が伸びをする横で銀次は財布を逆さまにして振る。中身が一気に減ったせいかカスが中から零れ落ちる。楓はそれを見て薄く笑いながら答える。

「一年間もほつたらかしたのでござるよ？それぐらい当たり前でござる」

「・・・そういうものなのか？」

そういうものでござる　と言いながら楓は先を歩く。銀次はそれを見て肩を竦め歩き出す。

「ま、いいけどよ・・・それよりお前門限とかいいのか？もう時間も時間だが・・・」

銀次は腕時計を見る。時間は夜の9時を指している。なお銀次は左利きのため腕時計を右腕につけている。

「む・・・もうそんな時間でござるか？」

「ああ・・・早いもんだな」

昼からとはいえ、時間的には九時間は一緒にいた。久しぶりの再開ともあってか話が止まらなかったのだ。

「まあ、なに。まだ時間は腐るほどある。また明日にしよう。俺も久しぶりの長期休暇だと思って休むよ」

銀次は楓の頭を撫でながら言う。楓は唇を尖らせながら不満の色を見せる。

「…………約束でござるよ?」

「ああ、約束だ」

銀次は微笑む。楓はそれを見て顔を赤く染めている。しかし、そんな時、

「…………ん?この音は…………?」

「なんで…………ござろうか?」

そう遠くないところで剣戟の音が聞こえた。それ以外にも銃撃もだ。何かで遮られているのか常人では聞き取れないだろう。

銀次はまさか…………。と思いながら音のする方へと歩き出した。楓もそれについてくる。

「楓…………準備はいいか?」

「もちろんでござる」

二人はゆらりと音のほうへと向かった。

「（初めての共同作業でござる）」

「（！？今一瞬悪寒が……！！！気のせいか……？）」

〳〵森林〳〵

九時の森の中はかなり暗い。そんな暗い森のなかで剣戟の音と銃撃が響く。

「くっ……流石にキツイな……！」

剣戟の音の主は小柄な少女で黒い髪をサイドポニーテールにしている少女。

「ああ、でもやるしかあるまいよ……！」

片や銃撃の音の主は小柄な少女と比べて大柄で、褐色の肌をした口ングセミの少女だ。

少女たちはそれぞれの得物を使い目の前の『異形』の者達……
鬼と戦っている。

「嬢ちゃんたち中々やるやんけ」

「でも流石にこれだけの数を相手にするのはもう無理やないか？」

かれこれ二人は五十体ほどの鬼を倒しているが、一向に減る気配がない。

「くっ……」

「言い返せないのもまた事実だね……」

二人は互いに背を合わせ、呟く。そろそろまずいと思ったとき、

「お？なんだか楽しそうなことしてるじゃないか。俺も混ぜるよ」

どこからもなく声が聞こえた。

「（まさかと思ったら……やっぱり……か）」

銀次は二人を一瞬だけ見て目を離す。しかし二人は銀次のことをガシ見している。銀次は二人のことを知っていた。

「こんばんわ……桜咲刹那さんに龍宮真名さん」

「「!？」」

銀次が二人の名前を言うと二人は驚いたように目を見開き、こちらを睨んだ。どうやらかなり警戒度を上げてしまったらしい。

「あゝ・・・うん、まあ安心してよ二人とも少なくとも俺らは君達の敵じゃないよ」

「俺ら？つまりほかにも「失礼するでござるよ二人とも」ってな！」

「か、楓！？何でここに！？」

二人は急に現れたクラスメイトに驚きが隠せず、楓の思うがままに連れて行かれた。残されたのはただ一人・・・

「なんや？あんちゃん。おまえさんも敵か？」

「だとしたらだいぶ舐めているやろ？よく見たらあんちゃん気が少ししか感じへんぞ？さっきの神鳴流の嬢ちゃんと比べたら月とスッポンのレベルやな」

鬼達が好き勝手に言い出す。銀次はそれを聞きながら鬼達に余裕な笑みを浮かべる。

「舐める？違うな、これは余裕というものだ」

銀次は一步踏み出し、空間に手を伸ばす。

「さあ、お前ら準備はいいか？・・・Let't party
！！」

某独眼竜のセリフを吐きながら、銀次は鬼達に突っ込んでいった。

くく楓sideくく

「ふむ・・・ここまでくれば被害はそこまでないでござろう。して二人とも怪我のほうは大丈夫でござるか？」

拙者が銀次殿に頼まれたのは二人をできるだけ『安全圏』に置いて戦いを見させること・・・一緒にやないでござる(怒)

「それよりも長瀬さん。なぜここに・・・？」

「そつだぞ楓。なんでお前がここに・・・それにあの男は誰だったんだ？」

「拙者らはたまたま通りかかっただけでござるよ。そしてあの男性は桐野銀次と言って拙者の大事な人でござるよ」

「つまりはお前と同じ忍者・・・か？それにしては気がまったく感じなかったが」

真名が言う。うむ、その質問がくるとは・・・予想していたでござるが。

「うむ、銀次殿は生まれつき気がほとんどないでござる。それこそ瞬動一回で終わるくらいでござる」

「な、それでは助けに行ったほうが・・・！！」

刹那が立ち上がるうとする。拙者はそれを止める。

「止めとくでござるよ刹那」

「なぜだ！？いくら忍者とはいえ気もまともに使えずどうやって鬼と戦えるというのだ！？」

「人の話は最後まで聞くものでござるよ。確かに銀次殿は気が使えん……が変わりに他の誰もが使えない特殊な『技』と『武器』を持つてるでござる」

「特殊な『業』？」

「特殊な『武器』？」

二人は頭を傾げる。

「うむ、これは口で言うより実際に見たほうがいいでござるな……ここからなら十分見えるでござるから見てみるでござるよ」

それを聞いた二人はさっきまで自分達がいた森を眺める。

〳〳銀次 side〳〳

「さて……と。やりますか」

銀次はその場で息を大きく吸い込む。鬼はそれを見ると鼻で笑い。

『なんや？いまさらたすけでも「ボコッ」……なん、や？』

鬼は途中で話すのをやめた。なぜか？それは目の前の『男の胸が大きく膨らんだのだ』

「いくぜエ……鬼ども!!」

銀次は『飛んだ』。その高さは常人の三倍・いや、五倍だろうか？気づいたときには五十メートルぐらいの高さだ。そして、

「特大手裏剣砲!!」

溜めに溜めた空気を吐き出す。その際に手裏剣と一緒に吐き出す。通常の手裏剣砲の四十五本が基本なのだが、『特大手裏剣砲』はその六倍……つまり二百七十本の手裏剣が襲い掛かる。そしてその一本一本の威力は装甲を施した車を簡単に貫き通す。

さらに銀次がいるのは空中。発射する方向は『下』だ。

「威力は倍率ドン……かな?……ハアツ!!!!」

ドゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ!!!!!!!!!!!!!!

『うぎゃあああああ!!!!!!』

『た、助けてくれー!!』

『な、なんやこれは!?!』

下では鬼達が喚いて逃げ回っている。しかし手裏剣砲からは逃げられず次々に餌食になっている。地面に降り立ったときにはすでに三分の一が手裏剣砲の餌食になっていた。

「ん、意外とすくないな……なら」

銀次は空間に手を伸ばし、呟く

「千刀・？」チナイ

すると、一瞬空間が歪み、地面に刀が突き立った。

「な、なんや！？急に刀が……！！」

刀は一振りではなく数え切れないほど地面や木に突き刺さっている。
「千刀・？」は多さに主眼を置いた刀。その数は千本だが、この刀は千本で一本なのだ。

すると銀次は近くにある刀を二振り引き抜き、構える。

「さあ……いくぞ！！」

駆ける。銀次は手近にいた鬼へと斬りかかった。

「はあああつ！！！！！！」

一気に身を沈め、二体の胴を薙ぐ。肉を断つ感触が伝わったがそんなのは慣れている。

『ぐぎぎや！？』

二体は体を変な風に曲げ辺りに血を噴出しながら倒れる。しかし銀次はそれに構わず、飛ぶ。飛んだ先には鬼が一体。

「ふっ!!」

刀を二振り投げる。鬼はそれに驚き持っていた棍棒で防ぐ。そして油断した。

「なに油断してんだよ!!」

『な、なに!?!』

銀次は鬼のすぐ足元で身を沈め、近くに刺さっていた刀を握り鬼の足を薙ぐ!!

『うぎゃあああッ!!!!』

鬼の足から鮮血が飛ぶ。片足の軸を無くした鬼は仰向けに倒れた。銀次はすぐさま頭のほうに周り、刀を振り上げ、

「ふんっ!!」

振り下ろす。ゴツッ!、と鈍い感触で手に伝わり顔に鬼の血と脳漿が掛かる。銀次はそんなのにもかかわらず、刀を振るう。

「おらおらおらっ!!!!」

銀次は刀をとつかえひっかえしながら次々と鬼を斬る。鬼の手が足が胴が頭が血や臓腑をぶちまけながら倒れていく。銀次は全身を鬼の血で赤く染めながら斬り続ける。そして頭らしい巨大な鬼を見つける。

「あんたが頭か?」

『ああ、ようやるやんけあんちゃん。あんちゃんだけで残りの百体ぐらいやられたかのう?』

「ふうんそんなにいたのか?どつりで千刀の数が減るわけだ」

銀次は辺りを見回す。辺りにあつた千刀のほとんどが鬼を斬つた際に刃が欠け、刀が折れてだいぶ数が減っている……が、それでも百本程度だ。

『くつくつく、中々面白いやんけ。……ほんならやるか』

鬼はニヤツと笑い、持っている金棒は肩に担ぐように持つ。

「戦闘狂かよ……まあいいや……いくぜ!」

俺は両手に持っていた刀を投げる。しかしそれを腕で払う。

『利くかいな!』

金棒を横薙ぎに払う。銀次はそれを飛んで避ける。その際突き刺さっていた刀を一振り引き抜いていた。

「喰らえ!空中一刀・億文字斬り」

刀を高速に振り連続して敵を切り裂く。鬼もこれには対処仕切れなかった。

『ぐおおおおおおっ!!!!!!!!!!!!!!』

金棒で何とか防ぐ。しかし億を超える斬撃には対処しきれない。銀次はそれに感心して

「やるな……だが、これで終わりだ」

『なに！？』

銀次は素早く鬼の背後に回り込み空中で刀を振り上げる。

「喰らえ！報復絶刀！！」

本来は絶刀で行う強力な斬撃。『多さ』を主眼に置いた千刀では一撃で碎けてしまう。しかし、

グワシャツ！！

鬼の頭を一撃で潰すのならそれで十分だ。鬼はなんの反応も出来ないまま頭を碎かれ還っていった。辺りを静寂が包む。

「さて……とお話の内容でも考えておくか」

顔についた血やらふき取り、銀次は呟く。今晚間違はなく銀次と楓は学園長室に呼び出されるだろう。

しかし、銀次にとってそんなものは酷ではない。むしろ望んでいたのだ。

こうして桐野銀次と長瀬楓は『裏』の世界に携わることになった。

第四話（後書き）

戦闘シーンを書いているときって、頭の中で創造しているのと同じか
しら違つところあるから大変ですよね。

それでは次回！！

第五話

〓〓学園長室〓〓

銀次はいま目の前にいる個体を見て絶句していた。

「楓……この学園はエイリアンが仕切っているのか？」

「うむ……残念でござるがまさにそうでござるよ」

「いや違うからね？わしこれでも人間だからね？れっきとした純人間だからね？楓君もなに言ってるの？」

このやり取りを見たらわかると思うが、エイリアンと言うのは麻帆良学園の学園長近衛近右衛門だ。

「嘘だ！」

「嘘じゃないから！？」

一度はやってみたいやり取りをやり、銀次は落ち着く。

「まあ、あなたが人間化どうかは追々説明するとしてだ」

「じゃからワシ人間！ヒューマン！」

「あの……学園長話がまったく進まないのですが……」

先ほどからまったく同じやり取りをしている二人に苦笑しながら諭

すのは目の前のエイリアンと一緒にいたダンディズムな男……
いわずと知れた高畑・T・タカミチだ。ついでに言うといまこの場
にいるのは銀次、楓、近右衛門、タカミチ、そして当事者として刹
那と真名だ。

「うむ……そうじゃの。本題に入ろうか」

そこでやっとまじめな話に入る。

「まずは君の誰かの？見たところ楓君と知り合いのようじゃが……

」

「甲賀中忍・桐野銀次だ。楓とはまあ幼馴染だよ」

「そうでござる。未来を約束し「はいはい、また今度ねー」……」

楓が何やらよからぬことを言いそうだったので銀次は遮る。楓は何
やら睨んでいたが銀次はそんなのを気にしない。

「なるほどなるほど。やはりそうであったか。まあそれはさておき
おぬしは変わった刀を使っていたそうじゃが……済まんがちと
見せてくれぬかの？」

「別に構わんぞ？でも千刀はちとキツイな」

千刀は千本あるから千刀なのでありこの部屋ではあふれてしまふ。

「む？その言い方からするとまだ他にもありそうな言いかたじゃが・

……」

「ビンゴ。俺は全部で千本の刀・・・特にその内の十二本を使う。先ほど使ったのはそのうちの一本だ」

「一本？ちよつと待ってください」

そこに刹那が乱入してくる。

「ん？なんだい桜咲君」

「さきほどの刀ですが・・・明らかに百は越えていましたが・・・」

どうやら刹那は先ほど見た千刀が銀次の武器だと思っただらしい。

「正確には千本だ。あの刀は千本あることにより始めて一本になる」

「はあ！？千本で一本!？」

そこにいた楓以外の連中が騒ぐ。まあ千本で一本といわれればそう思うだろう。

「あ、あの・・・いくらなんでも無理が・・・」

「それをやらかしたのが先ほどの千刀を作った四季崎記記・・・完成形変体刀十二本だ」

銀次は四季崎記記について語る。

「『人が刀を使うのではない。刀が人を作るのだ』その思想の元に

作られた刀はすべてで千本。そしてその中でも選り過ぎなのを完成形変体刀と呼ばれる……つまり千本の内の十二本だ。その他の九百八十八本はその十二本の秀作だと思って構わない」

「十二本のための……千本」

「狂ってると思うか？しかし刀鍛冶はより優れた刀を鍛える。前打った刀よりも、他の刀匠よりも、名刀と呼ばれる刀よりも、ただただその魂を槌に乗せて叩く。ま、俺が思うに四季崎はただ優れた刀を作りたかっただけだと思うがね」

大抵のことには動じない学園長も流石に驚いている。あまりの狂いっぷりに驚いているのだ。しかし、

「し、しかしじゃ。ワシは今まで四季崎記紀なんて刀鍛冶は聞いたことないぞい？そのような変体刀などと言う刀も知らんし……」

「まあ、当たり前だな。何せこいつはこの世界とは別の世界の刀……いわば異世界の刀だ」

「ひよ？異世界とな？」

「ああ、魔法があるんだ。異世界があってもおかしくはあるまい」

「た、確かに……」

学園長はそこで考え込む。何を考えているのか？それは……、

「のう桐野君とやら……どうじゃね？ここで警備員として働いてみないかね？」

その言葉にその場の人間達が驚く。

「学園長！！本気ですか！？」

「ふむ。本気じゃ。それに見たところ彼はかなりの腕前じゃ。問題はなかるう」

「しかし……！！」

「おやおや？なんか信用されていないかな？」

刹那の反対つぷりに少し傷つくも一応聞いてみる。

「当然だろう！！いくら楓の知り合いだからといって『お嬢様の近くには置けないってか？』！？」

「何を驚いている？俺は忍者……情報収集くらい簡単にできる。まあ、なに安心しな。手を出したりはせんよ。俺も仕事人だからな信用は大切だと理解しているよ」

腕のほうは大丈夫だろう？といいながら銀次は刹那を見る。そこに楓が参戦した。

「正直に申すが……刹那殿、銀次殿は本気を出さずに刹那殿は十も数えないうちに殺されているでござるよ？それこそ銀次殿が本気になったらこの麻帆良の一般人を含めた人間を……抹殺することができるでござる」

楓のその言葉にその場の全員が凍りつく。楓の表情が嘘を言ってい

る表情ではないのだ。おまけに冷や汗までもかいている。

「おいおい、それじゃまるで俺が人を殺すのが大好きな人間みたいじゃないか……」

「……この前の任務のとき笑いながら一国のゲリラを潰しといてよく言うでござるよ」

あつたな〜そんなこと〜と笑いながら答える銀次。そこに今まで入ってなかった真名が入る。

「……もしかしてそのゲリラって『賛歌の宴』という組織じゃなかったかい？」

「おお、よく知ってるね……って当たり前か。君は職業柄だもんね」

「知ってたのかい……でも、まさかあの『賛歌の宴』が潰されたとは聞いてたけど……まさかあんたが潰したとはねえ」

真名は引き攣った顔で銀次を見る。刹那はそんな真名を見て聞く。

「龍宮？『賛歌の宴』とはなんだ？」

「ああ、刹那が知らないのも無理ないがね……中東を中心としてテロ活動をしていたゲリラたちだよ。人数は数百を越えて装備も一国の軍隊並だつて噂だつたんだが……」

「ああ、戦車出てきたときは流石に驚いたけどね。手裏剣砲で穴だらけにしてやったぜ」

「……………もはやバクキャラだね」

真名は驚きを通り越して呆れた顔になっている。そして学園長に向き、

「学園長、この人はかなりの戦力になるよ。私が保証しよう」

「龍宮！お前まで……………！！」

「まあまあ、そういうもんじゃないぞ刹那君。銀次君どうじゃね改めて、働いてみる気はないかね？」

「そうだな……………」

もともと楓と一緒にいるために来たようなもののため、副業ついでにいいかも知れないと思った銀次はその仕事を請けた。

「いいだろう。あと、楓と一緒にいいか？こいつも鍛えなきゃいけないからな。鍛えて一番身に付くのは実戦だからな」

「拙者は銀次殿と一緒にならどこでもいいでござるよ 修行にもなるし」

楓は修行よりも銀次とならどこでもいいらしい。学園長はそれを見てフオフオフオと笑いながら二人を見る。

「ああ、でも悪いが二、三日待ってもらっていいか？まだ部屋すら取っていないからな」

「それなら安心せい。職員寮に空きがあるはずじゃから、そこに泊まってもらってもかまわん」

「それなら遠慮なく……。それなら明日でも大丈夫かな？」

「わかった。では明日の夜八時に世界樹の前に楓君と一緒に来てくれぬか？『こちら側』の紹介とどのくらいの力があるのか見させてもらいたいからのう」

「承知した。それでは明日に……」

「ふむ、ではタカミチ君案内を頼むぞい」

「わかりました」

銀次はタカミチに続き部屋から出て行った。楓もその後が続く……
・真名もなぜか続く。刹那は不承不承の体で部屋を出て行った。
学園長はひげを撫でながら呟く。

「ふうむ……はたしてどれほどの腕前なのか……気になるのう」

ふおふおふお、と笑いながら学園長は笑う。

そして、明後日その場にいた者達は戦慄する。彼が……銀次が『ただの』忍者ではなく『異常な』忍者であり、『ただの』剣士ではなく『異常』な剣士であることに……。

第五話（後書き）

次回は遂に手合わせ！！

相手はタカミチ、はたして主人公はどう戦う！？

それでは次回を乞うご期待！！

第六話（前書き）

ん、やっぱり戦闘描写は難しいですね。

それでは六話目どうぞー！

第六話

〱翌日・夜八時世界樹前〱

世界樹・・・麻帆良学園にある巨大な大木。その大木の前にいま、数十人の人間が集まっている。

「学園長。今日収集を掛けたのは新しい警備が入ると聞いたのですが・・・本当ですか？」

その中の一人、色黒の外人教師であるガンドルフィーニが目の前にいる老人学園長に質問をした。

「ふむ、誠じゃ。しかもそれ相応の使い手じゃ。今日は顔あわせと同時に実力を見せてもらおうと思ったんじゃ・・・む、着たみたいじゃの」

学園長の一言で全員が後ろを見る。するとそこには、

「ほゞ随分と沢山いるな」

「本当でござるな。これなら強い輩が一人ぐらいは居るでござろうか？」

ゆっくりと近寄ってきたのは二人の男女だ。両者共に忍び装束に身を包んでいる。知つての通り桐野銀次と長瀬楓だ。

「ああ、学園長どうも」

「ふおおおお、よく来てくれたのう銀次君、それに楓君」

学園長が笑いながら受け入れる。しかし周りのものは驚いているだけだった。二人はそれを軽い笑みを浮かべながら流す。

しかし、そこで一人の生徒……もちろん魔法生徒が気づく、

「あ、あの……学園長……」

「ん？なんだね佐倉君」

佐倉と呼ばれた少女……今年の一年生に名を連ねる佐倉愛衣だ。佐倉はおずおずと聞く。

「あの……その男の人のほうから魔力……それどころか気もまったく感じないのですが……」

それを聞いて周りの魔法教師や生徒達も調べる。……確かにまったくない。それを察してか、銀次は頭を掻きながらいう。

「あゝ、俺は生まれつきでね……魔力がないんだよ。気もまったく持っていない」

「有るとすれば瞬動一回分でござる」

こら、いちいち付け加えるな。と楓に怒りながら銀次は言う。しかしそれを聞いた魔法使いたちは何やら憤っている。

「な、魔力どころか気もほとんど無いですって！？ふざけないでください！！」

そう声をあげたのは麻帆良学園高等部所属高音・D・グッドマンだ。周りの者達もそれに続く。

それを聞いた銀次はさすがにイラツときたのか、

「煩せなア……学園長、嫌いからここにいる全員殺してもいい？問題ないだろう？」

「いや、問題大有りじゃから止めておくれ」

学園長は止める。内心銀次の实力を知っているもの……この場では楓、真名、刹那の三人組だ。その三人組にとっては冷や汗ものだ。学園長は昨晚の大量の鬼をほとんど無傷で倒していることを知っているものの、それぐらいなら魔法使いでも出来ると思いただ腕の立つ忍者としか思っていない。

「ま、まあ、實力を見てもらえばわかるじゃろ。それではタカミチ君頼むぞい」

「はい、わかりました」

そういうと、タカミチが前に出てきて、手をポケットに入れ戦闘態勢に入る。

「それじゃ……適当にがんばるかねえ……」

銀次は懐に手を入れ大振りのクナイを構える。互いに間合いの一步外だ。

「……」

「……………」

互いに構え………といってもタカミチはポケットに手を入れるというほとんど無形の構え。銀次も右手にクナイを持ち、ダラリと腕を下けている。

しかし、互いに隙はない。

「……………ふわア」

「ッ！！」

欠伸、銀次は眠くなってしまったせいかわたせいか欠伸をかました。タカミチはそれを見逃さなかった。

ヒュン！！

「ぐべー！！」

タカミチが放った居合い拳は銀次の鼻を捕らえ、そのまま後ろに吹き飛ばす。そして銀次はそのまま飛んでいき、壁にぶつかり、盛大に砂埃を舞い上げた。

ドゴンッ！！

「……………は？」

誰からともなくそんな声が上がった。それは目の前の戦いが余りにも早く終わってしまったからだ。タカミチでさえ驚いている。

「だ、大丈夫かい!？」

その中で一番早く戻ってきたのはタカミチだった。タカミチは即座に銀次のもとに駆け寄った。しかし、

「あゝ、高畑殿。一つ言っておくでござるが……」

タカミチが駆け寄ろうとしたところに楓が話しかける。楓はその場を動かさず、今までの状況を見ていたのだ。真名や刹那はそこでおかしく思った。本来ならあそこに駆け寄るのはタカミチではなく楓のはずなのに……、

「銀次殿は剣士でもあると同時に……『卑怯卑劣』を売りにしている忍者でもあるというのを忘れないで欲しいでござるよ」

「っ!!まずい、高畑先生そこから離れる!!」

『卑怯卑劣』……それを聞いて一番最初に気づいたのは真名だった。しかし、真名が気づいて呼びかけたのは……遅かった。

「カツ!!!!!!!!」

砂埃の中からタカミチ目掛けて飛んできたのは大振りの手裏剣が四十五本。砂埃とタカミチまでの距離は十数メートルで遠くもないし近くも無い。しかし手裏剣砲の殺傷射程範囲内だ。

「くっ!!!!」

タカミチは急いで居合い拳を放つ。拳をポケットから抜いたとはいえ、そこはプロ。素早く拳をポケットに収め飛来してくる手裏剣を叩き落しに行く……しかし、

「つなに!？」

手裏剣はびくともせず、そのままタカミチに飛来する。当然だ、銀次が放つ手裏剣砲の手裏剣の威力と速度は戦車の装甲を簡単に貫く鉄甲弾に匹敵する。タカミチの居合い拳は威力があるとはいえ鉄甲弾は止められない。

「ぐわああああつ!!!!!!」

タカミチはその場にとどまり、頭を腕で防ぐ。これはこれで正解だ。下手に動けば手裏剣砲の餌食になり骨すら残らない。

そしてすべての手裏剣をやり抜いたが、身体のうちらこちらに裂傷が見られる。

「ほう、あの距離で手裏剣砲を喰らって立っていられるか……少しばかり手加減したせいかな？」

「……あれで手加減してたのかい？」

銀次の呟きにタカミチが驚愕の表情で見る。銀次が本気を出したら今頃ミンチが出来上がっていただろう。

銀次は一人でうんうん唸りながら何やら考え事をしている。

「ふむ……決めた。あなたには俺の『本気』の一本を使ってやるわ」

「『本気』の一本……」

それを聞いてタカミチが動きを止め、警戒に入る。本気の本……つまり銀次は変体刀の……しかも完成形変体刀を使う気なのだ。なお、この場で使う銀次の本気とはあくまで『試合』としての本気だというのを先に述べておく。

「そうかい……君が本気でくるなら……僕も本気で行く」

そういうと、タカミチは両手をポケットから出し、

「右腕に気」

右腕が輝く。

「左手に魔力」

左手が輝く。それを見た銀次はにやりと笑う。

「いいねエ……こいよ『咸卦法』」

「合成」

気と魔力、二つの力が合わさりそれは強大な力へと生まれ変わる。

「それじゃ君が『本気』を出さないうちに……本気でいかせてもらおうよ」

タカミチはまた手をポケットに入れる。そして

「豪殺居合い拳!」

ドゴンッ!!!

砲撃。何かに例えるならまさしくそれが一番だろう。タカミチが放った豪殺居合い拳はその強力な威力を秘めながら銀次に当たった。

「ほほう……なかなかの威力でござるな」

離れた位置で楓は真名と刹那と一緒に試合を見ていた。

「楓……いいのかい？」

「む？何がでござるか真名」

のほほんと、試合を眺める楓に真名が聞く。その顔には珍しく多少の戸惑いが浮かんでいる。

「あの銀次さんと言う人だよ……おそらく今の一発で内臓破裂……よくて粉碎骨折だよ？いくらあの人が強くても刀を出す前にやられてしまったら意味がないよ」

真名の意見ももつともだ。タカミチが放った豪殺居合い拳はたとえ手加減しても十分人を殺せる威力を持っている。

楓はそれを聞いてしばらくきよとんとした表情になるも、

「真名は銀次殿を心配してくれてるのでござるか？それなら拙者としては嬉しいが……」

「いや、逆に心配していないお前をどうかと私は思うが……」

楓はそれを片目を開けて答える。

「昨晚、言ったと思うでござるが……変体刀はそれぞれ目的があつて作られているでござる」

「ああ、それは昨晚聞いたよ。でもそれとこの戦闘にいつたい何の関係が……」

「まあ、そう焦らないで欲しいでござるよ……。昨晚、銀次殿が鬼に使った変体刀は『千刀・？』は『多さ』を主眼に作られたいわば消耗品として作られた刀。他にも『頑丈さ』『切れ味』『薄さや軽さ』など……様々なものがあるらしいでござる」

拙者も正直よく分からぬが……。と、肩を竦めながら言う楓。真名はまだよくわからない。

「おそらく今回銀次殿が使おうとしている変体刀は……。おそらくは『防御力』に主眼を置いた刀……。つまり」

楓は一旦そこで切り、銀次が先ほどまで立っていたところを見る。

「その刀は……」

「『賊刀・鎧』」

楓と、銀次の声が重なり響く。

「……冗談……かい？」

タカミチは目の前に立っている人間を見て絶句している。先ほど放った豪殺居合い拳は力を抜いたとはいえそれなりの威力があったはずだが……、

「いや、冗談じゃねえよ。これが現実……そしてこれが四季崎記紀が完成形変体刀十二本が一本『賊刀・鎧』だ」

タカミチの目の前にいる人物……それは言わずとした桐野銀次だ。しかし銀次は先ほどとは違い、その身に甲冑……否、『刀』を纏っている。

「『どのような攻撃も無力化する刀』……それがこの『賊刀・鎧』だ。こいつはちよつとやそつとの剣戟や銃撃はもちろんあんたらの放つ『魔法』とやらも跳ね返してしまう。滅多やたらは攻撃では傷一つつけられんぞ」

「……みただね」

しかし、豪殺居合い拳は滅多やたらは攻撃ではない。手加減とはいえ、その威力は迫撃砲に匹敵する。

「しかしそれが刀かい？どこからどう見てもただの鎧に見えるが……」

「……なら試してみな。これが『ただの鎧』かどうかを」

銀次はそう言うのと体勢を低く保ち、

「……否崩れ」

突進。右肩を突き出し銀次はタカミチ目掛けて体当たりを仕掛けた。その速度は常人の何倍もある筋力と賊刀の重さで車の速度となんら変わらない。

「ッ豪殺居合い拳!!」

放たれる豪殺居合い拳。それは先ほどとは比べ物にならない位の威力を秘めている。しかし、

「効くか!!!」

『絶対的なる防御』を誇る賊刀の前にはタカミチの居合い拳は無意味だった。そしてあと数メートルというところで

「それまで！！！！！」

学園長の声が響く。しかし速度の付いた銀次は急に止まることはできず、

「ちいいいいいいッ！！！！！！！」

寸でのところで足を止め方向転換。地面は速度と重さで削られ悲鳴を上げている。そそいてタカミチの身体ギリギリのところを滑りる。

「ッ！？」

しかし、そのとき肘の関節がぶつかり、タカミチは腕を『斬られた』。そこで理解する、この鎧は『刀』であると。

「まったく・・・止めるならもっと早く止めてくれないかい？危うくミンチにするところだったぞ？」

「といよりもミンチになるほどの威力を出ほつがどうかと思うが・・・」

学園長の意見も最もだ。しかし、

「いや、賊刀を使うのは久方ぶりだな・・・やっぱり使い慣れているやつを出せばよかったかな？」

「・・・あれで使い慣れていない？」

「ああ、俺の得意とするのは絶対的な切れ味を有する斬刀だからな。それに賊刀は体当たり以外の技があまり使えないから滅多に使わな
い」

それを聞いて回りのものは驚愕する。魔法を弾くという刀だけでも驚愕なのにそれ以上に得意とする・・・絶対的な切れ味を持つ刀があるということに驚いた。

「まあそれはいいとして・・・どうだ？学園長、俺はあんたのお眼鏡に掛かったかい？」

「ふ、ふむ、十分すぎるほどじゃ・・・明日から早速警護に付いておくれ」

「ふむ、了解した・・・帰るぞ楓」

「あいあい」

二人はその場をゆっくりと去っていった。

「高畑先生！！大丈夫ですか！？」

その後姿を見送った魔法使いたちはしばらく呆然としていたが、その中にいた一人の少女・・・昨晚銀次に助けられた桜咲刹那が夕カミチに駆け寄る。それに続き、ほかの者達も続く。

「ああ、大丈夫だよ・・・比較的ね」

そういうタカミチの身体はあちらこちらに裂傷を負っていた。特に深かったのは先ほどの体当たりである『否崩れ』で負った裂傷だった。

「そんな・・・ただの体当たりでここまでの傷が・・・」

周りのものはなぜただの体当たりでこのような傷が付くのか頭を捻る。

「いや・・・これは『刀傷』だよ・・・あの賊刀のね」

周りのものは何を言っているのか分からない様子だった。

「さつきすれ違ったときに見ただけだね。あの賊刀は繋ぎ目が刃になっているんだよ・・・もし本当に体当たりされたらと考えると・・・」

周りの者も考える。あの体当たりをまともには喰らえば・・・全身を切り刻まれ、まるでボロ雑巾のようになって死ぬだけだろうと・・・。

「学園長！！彼を雇うことには私は反対です！！彼は危険すぎます！！」

そう最初に声を上げたのはやはりと言うかなんというか、『正義の魔法使い』をよく口にするガンドルフィーニだった。それに続き、回りも賛同する。この中で賛同していないのは真名ぐらいだろう。刹那は小乃香に危害が及ぶのではないかと思いい今は賛同と反対の間地点だ。

しかし、学園長はそんな声を上げる連中を

「ならばこの中の誰かが彼に勝てるというものはおるかの？彼の強さはタカミチ君を凌ぐほどの実力差じゃ。しかも先ほどの言葉を聞く限り彼は本気を出しとらんじゃろう。そのような彼をいま敵に回したくはない。今はこちらに引き込むことに専念するべきじゃ」

それを聞いて渋々とした表情で納得する面々、それでもいまだ納得しきれない。

「それでは今日はこれにて解散じゃ。各々戻ってもらってもかまわん」

その言葉で全員が帰って言った。その場に残ったのは学園長とタカミチだけだった。

「ふむ……正直大変な者を雇ってしまった様な気もするが……まあ大丈夫じゃろう」

「ええ、でも彼はこちらに入るでしょうか？」

学園長の呟きにタカミチが呟く。タカミチは銀次の目を見てわかった。あの目は自分が一度決めたことはそう簡単に変えることをしない目だ。そのような目を持った相手をこちら側に引き込めるのだから……と。

「ふむ……まあ何とかなるじゃろうて」

「相変わらず楽観的ですね……」

ふおふおふおと笑う学園長を苦笑いしながら見るタカミチ。しかし確かに実質問題銀次を取り込むのは難しいそれこそよほどのことが無ければ曲げないだろう。しかし、一度で曲げれないのならゆつくりと時間をかけて曲げればいい。学園長もタカミチもそう思った。

そして後日二人は気づく。銀次は一度守ると決めたものは命を張つても守るといふことを。

第六話（後書き）

え〜と謝罪を一つ。

ほかの変体刀楽しみにしていた方々ごめんなさい！！

なぜ今回『賊刀・鎧』を選んだのかと言うと、それは『賊刀ならタカミチの豪殺居合い拳を防げんじゃね？』というまあ思い付きです。

当初は斬刀や絶刀でパパツと倒したり、さらには真庭忍法だけでも考えたんですが・・・それじゃ味気ないしインパクト必要かな〜と思い今回は賊刀を選びました。

今後はほかの完成形変体刀もちゃんと出す予定ですので賊刀以外の変体刀を待っている人も待っていてくださいね！！ちゃんとオリジナル変体刀も出しますんで楽しみにしてください。

それでは次回！！

第七話（前書き）

今回は主人公が2 - Aに行きます。ちょっと妄想が膨らみすぎて長いです。

それではおつぎ

第七話

〃〃翌日・早朝教師寮銀次の部屋〃〃

「zzzzzzzz」

昨晚の戦闘もあつてか、銀次は爆睡していた……もちろん座つて。しかしその銀次の睡眠を邪魔する音が、

トントントントン

「〃〃」

軽快なリズムで出される音。そして何やら鼻歌も聞こえる。銀次は億劫そうな顔で音源を探して、

「……はあ」

軽いため息を漏らし、銀次は居間へと向かった。

〃〃銀次の部屋・台所〃〃

「ふふふ、朝から銀次殿に朝餉を作る……久しぶりでござるな」

楓は出刃包丁で菜っ葉を切りながら呟く・・・その声はかなり嬉しそうである。でも正直包丁を持って顔をニヤ付かせていると危なく思うのはなぜだろうか？

「むむむ？魚はこれぐらいでいいでござるな」

楓は横のコンロから漂ってきた臭いを嗅ぎ、魚を皿に移す。今朝ここに来る前に山で撰ってきた岩魚だ。火に掛ける前に前に塩を振つといたが、さらに塩をまぶし味をつける。

余談だが銀次は前世が関東出身だったためか濃い味・・・しかも異常なほどの濃い味が好みだ。

「味噌汁もそろそろいいでござるな」

ちようどいい具合に暖かくなった味噌汁の中に菜っ葉を入れる。菜っ葉は火の通りが早いので長時間煮込まなくても大丈夫だ。

「よし・・・完成でござる！！」

本日の朝食メニューー

玄米ご飯

岩魚の塩焼き

味噌汁

沢庵

豪華、と言うほどでもないが、銀次はこのように質素な和食を好む。それを理解している楓は早速朝食で実行した。

「さてさて、後は銀次殿を呼びに「来てるから大丈夫だぞ」おろ！？」

驚き、机を見る。先ほどまで誰もいなかったはずの机に楓の思い人・
・銀次が座っていた。

「い、いつの間に……」

「菜っ葉切ってるあたりから」

つまりは最終段階の一手手前らへんだ。銀次は気配を消すのが異常なほどうまい。それこそ死人でもなければ消せないほどの上手さだ。

「拙者もまだまだでござる……」

「まあ、俺の域に入るのは用意じゃないわな」

自身でもバクキャラを認識しているため銀次は一人納得する。

「むう~~~~いつか絶対に追いつくでござる!!」

「はいはい、楽しみにしているよ。それよりも飯にしようぜ」

何気に小ばかされている様で気に入らない様子の子の楓であったが、銀次が飯を食べようと言っやいなや

「うむ、そうでござるな」

すぐに機嫌を直し・・・単純だ。

「それじゃ・・・いただきます」

銀次は茶碗を右手に箸を左手に・・・銀次は刀を扱つ以外はほとんど左利きだ。銀次はまず岩魚の塩焼きを突き始める。

「そういえば楓。お前今日は学校どうした？」

「これから行くでござるよ」

楓はおいしそうに次々と料理を掻き込む。口いっぱい溜め、それをモグモグと食べる姿はリスのようだ。

「なるほど、それは済まなかったなわざわざ朝早くから飯を作ってもらって」

銀次はむかしを思い出す。里にいたころ楓は色々なことを身につけようとした。忍術もそうだし、料理や狩りと。生きてゆく上で大切なことを学び、伸ばしてきた。

その中でも楓が腕を上げているのは料理だ。最初は魚を焦がし骨まで炭に（もちろん完食）米は何やら隕石に（もちろん完食）。でも歯が何度も折れそうになった）しかし今ではそんなこともせず、立派な食事を作れるようになった。

「あいあい　そういつて貰えると嬉しいでござるよ・・・これで伴侶への一歩が築けたでござる（ボソッ）」

「!?(な、なんだいまの悪寒は!?)」

楓の思考を感じ取ったのか銀次は辺りを見回す。しかし、周りには特にこれといったことはない。

「むう・・・気のせいかな?」

「どうしたでござる? 銀次殿」

「いや・・・なんでもない」

頭を捻るも分からず、銀次はそのまま楓と他愛ない会話をして食事を進めた。

〳〵三十分後〳〵

「ほら、忘れ物はないかな?」

「大丈夫でござる」

食後二人はお茶を飲みながら時間を過ごした。しかし話しているとあっという間に時間が過ぎてしまい、楓は残念そうに登校準備をしている。

「それじゃあな。今晚は初仕事だからな、遅れるなよ」

「分かってるでござるよ それよりも銀次殿、今晚は何を食べたいでござるか?」

「……………て、おい晩飯も作るきか？」

「もちろんでござる」

楓は当たり前だと言わんばかりに言う。銀次はその姿を見て、苦笑しながら

「悪いな……そうだな、ホツケが食べたいかな」

「あいあい、それでは玄米ご飯に味噌汁にホツケに沢庵でいいでござるな」

楓はそれを手に持った日記帳らしきものをに書き込みながら呟く。どうやら銀次の今までの食事のメニューが書かれてるらしい。

「それでは帰りに商店街で買い物でござるな。それでは行って来るでござるよ」

楓は玄関……ではなく窓から出て行った。なぜか知らないが窓の鍵枠の部分のガラスが綺麗に切られているのだ。

「……まあ、なぜそんなところに穴が開いているのは後で『きつちり』と聞くとして……気をつけていけよ」

窓から飛び降りる楓に軽く手を振りながら銀次は欠伸をかます。

「ふあゝあ……さて、読んでない本でも読んで夜まで時間を……ん？」

銀次は買い溜めしていた本を読もうと寝室兼書斎に向かう途中、居間に包みが置いてあることに気付く。

「なんだこりゃ………?」

先ほどまではなかったものだが……そう思い銀次はその包みを持ち上げ、匂いを嗅いでみる。

「ふむ……これはもしかして楓の弁当か?」

食事を作ってるさなか、楓が重箱に何かを詰めているのに気付いたが……あれは弁当だったらしい。

「やれやれ……何が何も忘れてない……だ。思いっきり忘れてるじゃないか」

銀次は時計を見る。時間は先ほどより二十分程度過ぎている。楓はもう学校の近くか到着しているだろう。

「……しゃあねえ昼時に持っててやるか」

銀次は後頭部を掻きながら寝室に入り、『この姿』の平常時の服装・宇練銀閣が着ていた着流しに着替える。

そして近くにおいてあった本をとり、

「時間まで本を読んで時間を潰そう」

そういつて本を読み始める。そして読みながらふと疑問に思ったことを口にした。

「そついやあの弁当なんか『二人分』あつたような気が……楓はあそこまで大食漢だったか？」

何やら嫌な予感が……と思ったが銀次はまあいいか、とまた本を読み始めた。

〳〳麻帆良学園女子中等部・2-A〳〳

「あれ〳楓ねえお弁当わ〳〳」

「おや、忘れてしまったでござるか」

いつもどこでも何時も、騒がしいこのクラスの生徒達の中に三人固まった集団がいた。

一人は長身の中学生には見えない女子、もう二人は双子なのか顔が瓜二つで髪型を除けばまったくわからない。そう、この三人は麻帆良学園さんぽ部種族の長瀬楓と鳴滝風香と鳴滝史伽だ。

「ん〳？なんか楓姉えお弁当忘れたのに喜んでる？」

「いやいや、そんなことはないでござるよ？」

「本当にですかー？」

二人はジーと楓を見るも、楓は笑って流すだけだ。

「ふうんな〜んか妖しいなあ〜」

「妖しいです」

「はっはっはっ」

そんなやり取りをしていると、教室の前の扉が開いた。別段不思議ではないのだが、

「やあ、みんな楽しそうだね」

「た、高畑先生！？どうしたんですか急に!？」

その扉を開けたのが担任のタカミチとあって約一名トキメク人間が一人・・・まあ、わかると思うが神楽坂明日菜だ。しかしなぜ昼休みに教室に来たのだろうか？そう思う生徒の疑問を感じ取ってか、タカミチが答える。

「ああ、実はね長瀬君にお客さんが来ていてね・・・どうぞ、入ってもいいよ」

「悪いな」

タカミチが扉から身体をズラすとそこから現れたのは男だった。その男は髪のとつ辺が白くそこ以外の場所は若干蒼く髪をそのまま伸ばしている。着流しを着ているが胸のところ若干肌蹴ている。その肌は白いようで土気色・・・まあ、あまり健康的には見えない顔つきでしかも目元に隈がありとても健康そうには見えないが・・・

「「「「「かつ」「」「」」

「か？」

「「「「「かつこいい！！！！！！！」「」「」」

「・・・煩せえな」

銀次は片耳を押さえながら呟く。もう片方も押さえなかったが残念ながら弁当を持っていたのでそれは叶わなかった。その間にも2 - Aの生徒は押しかけた。

「名前はなんですか!？」

「どこ出身ですか!！」

「彼女はいますか!！」

「長瀬さんとの関係は!？」

「私と勝負するアル!！」

若干一名質問をしていないような気がするが・・・まあ、それはいいだろう。あまりの口撃にたじたじな銀次の前に一人の女子が現れた。

「はいはいみんな!!こんなときは麻帆良学園のパパラッチこと朝倉和美さまの出番だよ!!！」

「げっ」

銀次は遂身構えてしまう。朝倉和美、銀次が前世にいたころネギまの漫画を読んでそれなりに気に入ってるキャラなのだが……どうしてもこの人のプライバシーを抉るようになる質問が少しばかり苦手だ。

まあ、そんなの気にしないパパラッチはどこからだしかわからないマイクを突き出しながら質問をし始めた。

「まずは名前を教えてください！！」

「桐野銀次だ」

「では桐野さんの身長、体重、趣味、特技を教えてください！！」

「さすがにそれはプライバシー」「身長は190センチ、体重78キロ、趣味は鍛錬と読書で特技は剣術を中心に拳法、鎖鎌、手裏剣術と様々な武術が得意でございますよ」「って、おい楓。趣味、特技はお前が知ってもなぜ身長と体重をお前が知ってるんだ？あとそのお前、武術が得意といった時点で目を輝かせるな。相手しないからな」

何やらこちらを見て今にも飛び掛らんとする女子を抑え、なぜ楓がそこまで詳しく知っているのか恐ろしく思う銀次。

「むふふ、何をいまさら……銀次殿と拙者の間にはもう何も隠すものはないでござるよ」

「いや、色々と思うんだが……」

「ふつむ……やはり和風のほうがいいでござるうか？」

「なんだ和風って……料理か？」

銀次の突っ込みをなんとも美しくスルーする楓。

「……やはり初旅行は熱海でござろうか？」

「おい楓戻って来い。なんなんだ熱海って」

流石にそろそろ危ないと思った銀次であるが、楓は帰ってくる気配がない。はア、とため息をついた銀次は

「おい楓。ここに弁当置いとくからな。俺は帰るぜ」

弁当を置いてさっさと帰ることにした……が、

「まつでいぢわるよ」

ガシッ

後ろ襟を楓に掴まれ帰れなかった。

「……なんだよ楓」

「一緒に食べるでいぢわるよ」

弁当を掲げながらいう楓。しかし銀次は

「いや俺は帰っ」食べるでいぢわるよ」……

、
どうやら帰す気はないらしい。銀次はタカミチの方を見るが……

「うーんまあ、食事を取るぐらいなら別に問題ないよ。でも、食べ終わったらさすがに帰って貰わないと困るけどね」

「いいのかよ」

駄目だろうと思ったが……さすが麻帆良学園。将来子供を先生にする学校だ。

「……まあ、今回だけだぞ」

「やったでござる!!」

楓が飛びつく。周りのものはそれを見て冷やかしを始めるが、銀次も里で冷やかしを何度もされているので馴れっこだ。

離れる気配が無いので片手で器用に包みを開く。重箱を開けてみると、中には筑前煮や卵焼きといった和洋中が揃った弁当だ。これを見ると流石の銀次も喉を鳴らす。しかし、

「おい楓、離れる。飯が食えん」

「ふふふ、大丈夫でござるよ銀次殿。こうすれば……」

そついうと楓が何やら妖しい笑みを浮かべ、箸を手に持ち筑前煮の鶏肉を掴み、

「あーんでござるよ」

「……………」

それを見た周りは「きゃー！」だの「長瀬さんやるうー!!」だの「ラブ臭キターー!!!!」だの……とにかく騒がしい。銀次も騒ぐのは嫌いではないが、これは流石に騒がしいと思う。

「む？食べぬでござるか？なんなら口移しでも……」

「いやこのままをお願いいたします楓さま!!」

流石の銀次もこんなところで口移しでされたら……ていうか、どこでも嫌なのだろうが。微かに舌打ちしている人間が多数いたが、気にしないことにする。

「それでは……あ〜んでござる」

「……………」

銀次はなんとも気恥ずかしそうな表情で口を開けそれを食べる。羞恥で味が微妙な気がしたが、以外に美味しかったらしい。

「どついでござるか？」

「ああ、うまいよ楓。ありがとな」

「あいあい それではもう一度……」

「いや、流石にもう一人で食うから」

強行手段で楓を自分の上から下ろす銀次。楓はかなり不満そうな顔をしているが……それも銀次は馴れっこだ。

「ほら、そう拗ねるな。さっさと飯食うぞ」

「む、わかったでござるよ」

そういいながら楓はおにぎりにパクつく。ついでに言うと今回のおにぎりは、周りに味噌を塗りそれを焼いたものだ。

それからは周りのものも合わせてそれなりに楽しい会話をする。そしてほとんどの弁当を食べ終えた後、

「さてと……昼休みもそろそろ終わりだな」

「もう帰るでござるか？」

椅子から立ち上がり時計を見ていた銀次に楓は下から上目使いで見ってくる。銀次は思わず後ずさりしてしまう。銀次は楓の上目使いに非常に弱い。いったい今までこの上目使いで銀次が何回負けたことか……数えられない。

「……安心しろよ楓。どうせいつでも時間は空いてんだ。後でまた相手してやるからよ」

銀次は楓の頭を撫でる。とにかく何かあったら頭を撫でる。楓も大抵のことはこれで機嫌が取れる。

「うへへ」

どうやら成功らしい。銀次はさらに撫でた後、チャイムが鳴ったの

で教室から出て行った。

その後の教室で楓が質問責めにあっていたのは言っまでもない。

第七話（後書き）

鳴滝姉妹の喋り方がわからん……。。

次回は戦闘を行います。主人公が遂に他の完成形変体刀を出します。また、オリジナルもいくつか出したいと思います。もちろん真庭忍法も使いますよ！！

それでは次回をお楽しみに！！

第八話（前書き）

え、まず最初に一言・・・今回はそれなりにグロイです。なんか書いてたらフィーバーしちゃって・・・、

そんなわけで！！グロイの上等！！と言う人はどうぞ！！

第八話

〱その晩・麻帆良学園森林近くの建物〱

学生が皆寝静まったところ……。学校の建物の屋上に四つの影がうつめく。

「やれやれ……。初任務と聞いたからフル装備できたのに……。何もこないじゃないか」

「本当でござるよ。銀次殿の勇姿を撮ろうと思ったのに……」

「何でんなもん持ってんだ？楓」

その内の二人は忍び装束……。と言うにはあまり忍んでない様なしのび装束を着た二人の男女……。言わずと知れた桐野銀次と長瀬楓だ。

ついでに言うといま銀次が着ているのは真庭忍軍が来ていた袖なしのしのび装束で真庭蝙蝠の装束に似ている。以前それを着ていたせいか楓が真似して袖なしのしのび装束を造り、それを成長するとともに大きくして今でも着ている。そしてなぜか楓の手にはカメラが握られている。

「二人とも少しは緊張感を持ってください」

「まあ、そういう刹那。この人と楓にそんなの求めても無駄だと思っぞ？」

そしてもう二つの影はこれまた対照的な身長と肌の色、さらには体

つきを持ったコンビ、制服を着た桜咲刹那とカウボーイに似たジャケットを着て、ハイレグのような黒い服を着た龍宮真名だ。

「緊張感もてって言われてもよう、こんなに敵が来ないならただ暇なだけじゃねえか・・・それで金が入るなら別にいいけどな」

「同感だね。何もせずに金が入るならそれに越したことは無いからね」

真名は持っているレミントンM700を肩にかけ直しいう。彼女もまた仕事人だ。

「龍宮まで・・・はあ」

「何を言っている刹那。何もせずに金が入るのなら雇われの身にはなんとも「っと、思ったらお客様だぞ」・・・なに？」

真名が喋っていると銀次が遮る。敵がきた。確かに銀次はそう言った。しかし真名はもちろん刹那も感知していない。

「ん？何だお前ら気付かないのか？」

「気付くも何も・・・まず入ってきた「刹那君、君達のほうの結果が破られたようだすぐにむかってくれ」！？」

突然聞こえた声と報告。声の主はどうやらタカミチらしい。銀次はその報告を受けると一旦伸びをして、

「やれやれ・・・誰もこなきゃただ働きできたのになア」

そういつて銀次は己の口の中に『手を突っ込んだ』

「「なっ!?!」」

さすがに驚く二人。それもそうだろう、いきなり目の前で口の中に手を『二の腕まで入れる』人間を見たら誰だって驚く、

「んあア……よしつとこれでいいな」

「……………」

「……………」

二人はさらに目を丸くする。何せ目の前でいきなり口の中に手を入れて出したと思ったら今度は五尺ちよいの長い刀……絶刀・鉦を取り出したのだ。

「……それもあんたが言っただ変体刀かい？」

「ああ、完成形変体刀十二本が一本『絶刀・鉦』だ」

真名に聞かれ銀次は答える。絶刀は直刀で五尺もの長さを持つ刀だ。そして同時に『硬さ』を主眼に置いてある刀のため、

「こいつは絶対に折れないし絶対に曲がらない……つまりは『硬さ』に主眼を置いた刀だ。一寸やそつとの攻撃では壊されないぜ？ 凄いだろう」

「……私はそれを収められるあんたの身体が凄いと思うよ」

「私もそう思います」

二人のツツコミに銀次は華麗にスルーする。絶刀で肩をトントン叩き臨戦体勢に入る。

「まあ、それはさておきさっさと行くうぜ。相手が逃げちまう」

「そうでござるな」

「わかりました」

三人はその場を離れる。真名は後方支援のためその場に残る。

しかし、二人は理解していなかった。『忍者』とはいかに残虐で『剣士』とはどれほど恐ろしいものなのか・・・そして『変体刀』とは何なのかということ。

〳〳森林〳〳

「・・・なんだ、思ったより弱そうだな」

「銀次殿いくらなんでもそれは言い過ぎでござるよ」

「・・・」

銀次たちは木の上に隠れ、下のほうを窺う。ここからそれなりに離れているのと小声で話しているため相手には聞こえないだろう。銀次たちの目の前にいるのは五人ほどの塊……。どれも西洋魔法使らしい。

「……相手は西洋魔法使いのようですこれは少し慎重に」よしさつさと終わらせるぞ「え？ちよ」

銀次の言葉を聞いて刹那は何をするのかと思ひ、銀次がいたほうを向いたがもういない。楓もいなくなっている。いつたどこに……。？そう思ってたら、

「報復絶刀！！」

「うぎゃあああああつ！！！！」

「な！？」

絶叫。刹那がその絶叫が聞こえてきたほうに慌てて向く。そこには刀を振り下ろしたのか、地面に刀の刀身を食い込ませている銀次とその刀に『斬られた』侵入者だったもの……。血と内臓を溢しながら倒れているモノは今の一撃で絶命したらしく動かない。

そう、『斬り殺した』のだ。相手の情報を聞き出すことや、人の命を奪うことにためらいも無く斬り殺した。刹那はそれが信じられなかった。

「なんだよ思ってた以上に弱いじゃねえか」

銀次は足元で肉塊になった侵入者を蹴り飛ばしながら呟く。しかしそうはいつでもこの斬られた侵入者はしつかりと障壁を張っていたのだが……意味を成さなかったらしい。

「な、何だお前は!？」

「あ、なんだ？それはこっちのセリフだ」

敵の一人が叫ぶ。しかしそれを銀次は逆に聞き返す。

「人様の縄張りに入ったんだ……死ぬ覚悟はできてるよなあ……」

「ひっ……」

銀次は軽く殺気を放つも、その殺気は常人の十倍はある。魔法使い達はすっかり飲み込まれている。それを見た銀次はさらに落胆する。

「（こんな奴らが相手かよ……そうだ、どうせだから変体刀の実験台にしよう）」

里では暗殺がほとんどの任務としていた銀次にとって敵は”実験台”でしかなかった。変体刀から忍法、さらには拷問の実験台だ。こゝ最近は使う機会が無かったため溜めに溜めた案を使おうと思う。

「さて……覚悟はいいか？油断はするな。油断したら……死ぬぞ？」

ドシユッ

「……は？」

急に響いた鈍い音……侵入者の一人の大柄の男の胸に……、

「『伸刀・槍』……どこまでも伸び相手を貫くまで追い続ける……
遠方の敵を貫くのはいいかな？ 技名は『遠敵必突』えんてきひつとつだな」

『伸刀・槍』どんな距離にいる敵でも貫くことを目的にした『長さ』に主眼を置いた刀……これはなかなか使えろと思いつながら刀を引き抜く。

「ぐわああああああっ！！！！！！！！」

「おや？ 心臓を刺したつもりだったが……ズレたか？」

やはりまだ扱いにくいな……といいながら脇差ぐらいの長さに戻った伸刀を弄ぶ。そんなことをしている間に男は事切れたらしくピクリとも動かない。

その姿を見た魔法使いが、

「貴様ア！ 喰らえ！ 魔法の射手連弾・炎の四矢！！」

どっおん！！！！！！！！

侵入者の一人が放った魔法の矢はすべて銀次に当たった。それを見た魔法使いは油断をってしまった。

「ははは！！どうだ！貴様如きに遅れを「取るわけ無いってか？でもだいたい遅れてるぜ？」な！？」

驚愕。侵入者達はまさにその一言だった。今さっき自分達の仲間を二人殺した人間を葬ったと思ったのに……、

「『玉刀・鋼』……『滑らかさ』を主眼において作られた変体刀……なるほどこれもなかなか……」

先ほどの伸刀は遠距離の敵を貫けるが、それは一方通行だけだ。対してこの玉刀は距離こそ5mぐらいだが、その刀の強度を保ったまま滑らかにしなり、攻撃する。さらにはその刀身のあまりの『滑らかさ』で敵の攻撃を捌いてしまうという刀だ。

「それじゃ早速……喰らえ『舞姫』」

「う……お!？」

銀次は玉刀を先ほど魔法を放った侵入者に巻き付ける。そして、

「踊れ」

ヒュンッ!!

「うぎゃあああああああ！！！！！！」

一気に引く。玉刀は独楽を回すための紐のように相手を回転させる。もちろんその『紐』は鋼の刃が付いている紐……。結果は無残なことになる。

ドサッ

「舞うように死んで行く……。ふむ、限定奥義は『舞姫』で決定だな」

体中を切り刻まれ、身体のいたる所から血をばら撒き、腹部にいたっては所々かあ内臓が飛び出している。『舞姫』を受けた侵入者は身体をキリモミしながら倒れる。

「よ、よくもレオンを……。！！」

「レオン？ああ、さっき殺したやつか……。ならお前もすぐに送ってやるよ」

銀次は玉刀をしまい、次の変体刀を取り出す。

「『電刀・鮫』」

そういうなり、銀次の手に一振りの刀が現れた……。いや、それはもはや刀といえるのだろうか？

「な……。んだ？それは……………」

電刀は金砕棒を軽々切り裂くと、その従者の身体を『削り』始める。グジュグジュと生々しい音をたてながら電刀は従者の身体を切り裂いてゆく。肉を削ぎ、骨を削り、内臓を磨り潰す。ゆっくりとそして素早く切り裂いてゆく。

「ふんっ！！！」

一息。最後は峰についているガードに手を当てながら一気に切り裂く。そこで銀次の手に肉の感触がなくなる。

「ふうむ……電刀は攻撃力じゃ他の変体刀より上位に食い込むな……。でも、これは後処理が大変になるな」

銀次はため息を吐きながら己の身体と電刀を見る。それはもう見るも無残なほど血に塗れた己と刀。しかも刀の方には何やらプニプニとした小さな塊が付いている。

「さてと……『炎刀・銃』」

銀次は四季崎記紀が完成形変体刀十二本が一本『炎刀・銃』を取り出す。右手には自動式拳銃、左手には回転式拳銃。その両手に持った銃の銃口を近くの茂みに向け、

ダンダンダンダンッ！！！！

両手に持った銃から火が吹く。片方二発、両方で四発の弾丸が飛ぶ。

「づぐ……っ！！！！」

「おっやっぱりそこに居たか？」

銀次は煙が出る銃を腰の位置で構えたまま近づく。まだ弾丸は残っている。茂みの中から倒れてきたのは一人の男、侵入者の一人だ。男は身体を這わすように動く。先ほどの四撃で手足を打ち抜いた。銀次は這っている男に近寄り、そして頭を踏みつける。

「ぐ……っ!!!」

「答える、誰に雇われた？それともお前らの独断か？正直に答えればそれなりの譲歩はするぞ？無論喋らなければ……わかつてるだろう？」

銀次が視線を向けた先……そこには見るも無残な先ほどまで人間だった『もの』……この男の仲間だったものだ。

「ぐ……!!喋ると思うか？それに俺にはまだ仲間が「こやつらのことでござるか？」っな!？」

「おう、楓ご苦労さん」

シユタツと現れたのは右手に紅く染まったクナイに後ろに縄で縛り、猿轡を噛まされている人間が三人。どうやら外で待機していた侵入者の仲間のようだ。

まったく動かないがどうしたのだろうかと思ったら、

「安心するでござるよ、手足の腱を切っただけでござるから」

「相変わらず器用なことをするなおい」

楓が地面に置いた三人の手足のちょうど臍があるところに刺し傷がある。おそらくは瞬時に近寄り、クナイで臍を切ったのだろう。銀次はその手際に惚れ惚れとしたように言う。残念ながら銀次にそのような技術はなく、銀次がやるうとするとそのまま腕を切落としてしまうときがあるのだ。

「さて・・・お仲間がああして生きてるから別にお前さんは用なしになっちまったな・・・はてどうするか」

「!?!」

男はその言葉を聴いて身体を硬直させる。『用なし』・・・つまり今居る仲間から情報は引き出せる・・・。それに気付いた男は恐怖に顔をゆがめる。この男ならやりかねない・・・いや、確実にやるだろう。

「ま、待ってくれ!! わかった話す!! 話すから命だけは・・・!!」

男は必死に命乞いをする・・・銀次はめんどくさそうに冷めて冷たくなつた銃口で頭を搔く。

「本当だろうな? 嘘だったり、隠したりしたら・・・わかってるよな?」

「ああ、ああ、わかったから命だけは「嫌いから黙ってる」「ぐはっ!?!」

男の命乞いが余りにも煩かったのか、銀次は男の後頭部を踏みつけ

て黙らせる。男はそこで黙る。どうやら気絶したらしい。

「よし完了だな・・・にしても余りにも弱すぎたな」

「死人に鞭打ちはやめるでござるよ銀次殿。いくら真実でもさすがにそこまで言う必要はないでござる」

「なんだかんだ言ってお前も言ってるような気がするけどな」

二人は軽く笑いながら話す。周りに内臓をブチ撒かしている死体があるが・・・二人にとってこれはどうと言うことは無い。そこに同業者が一人やってきた。

「やれやれ・・・もう少し綺麗に出来なかったのかい？これじゃ後片付けが大変じゃないか」

「おう龍宮。ああ、少しやりすぎたと思うが・・・まあいいんじゃないかね？」

「そうでござるようつやって証人もとれたこととござるし」

現れたのは龍宮真名だ。真名は遠方から援護射撃をするのがここでの主たる戦闘なのだが・・・銀次のそのハチャメチャな戦法で援護を必要しないと思ひ援護をしなかった。そして何より真名は銀次が先ほどだした物に興味を示した。

「まあ、それはどうでもいいが・・・それよりも銀次さん。なかなか良い銃を使ってるね」

「ああこれか？こいつは刀だよ刀」

真名に言われた銀次は炎刀をクルクル回しながら言う、真名はそれを聞いて、

「……それも変体刀という奴かい？」

「ああ、四季崎記紀が完成形変体刀十二本が一本『炎刀・銃』だ。『連射性と速射性と精密性』の三つを追求した『刀』さ」

「……もう無茶苦茶だねその四季崎記紀と言う人は」

見た目がどんなにちがくとも、炎刀は刀だ。まあ、今まで銃を扱っていた真名にとってはやはり銃のように見えるわけだが。

「ああ、俺もそう思うよ……て、あれ？そういえば桜咲はどこいったんだ？」

「むむ？そういえば居ないでござるな」

銀次と楓はこの場で唯一いない刹那を探したが見つからない。そして真名が、

「ああ、刹那ならさっき報告をしにいったが……あれはどちらかと言うとこの場に居なくなかったからだろうねえ」

「ん？なぜだ？どこが変わったところとかあるか？」

「いや、まあ普通はこんなの見たら誰だって居たくはなくなると思うよ……」

周りには無残に殺された人間の死体。それを作り出した人間がそこに居たのでは確かによほどのことが無ければ居たくは無い。

「お前は大丈夫なのか？」

「私は今も昔も戦場を生きてたからね。これくらいはどつてこと無いよ」

実際に目の前で人間が四散するところを見たことがある真名にとって、これくらいはどつて言うことではないらしい。

「ま、いいや・・・それじゃさつさとこの四人組連れてって仕事を終わりにするか」

「む？この死体はどうするでござるか？」

「あゝそうか、めんどくさいから放置でいいだろう。いくぞ」

「あいあい」

「そうだね」

死体をそのままに、三人はその場を後にした。後日、後処理に来た魔法先生が吐いたというのは余談である。

そして、この三人は後にこの学園で孤立することになり・・・同時に『仲間』になることになる。

第八話（後書き）

どうでしたでしょうか？今回は銀次と楓、そして真名の絆（？）が多少深まったような気がする話です。

というより真名が炎刀に……でも大丈夫だよ！！真名さんは毒されていないはずだから！！

変体刀解説

でんとう さめ
電刀・鮫

『削る』ことに主眼を置いた刀。幅は通常の倍ある。刀身の刃に当る部分が鮫の歯のような刃が連なっており文字通り相手を削ることができる。

峰側は物打ちと呼ばれる刀身の中で一番良く切れるところ以外の峰の部分にハンドガードが付いている。

鍔元にはハンドガードのようなエンジンが付いており、戦闘時にはこれを起動させる。

弱点としては音が鳴るのと、相手を削るため血やら肉やらが飛び散ること。しかし攻撃力では変体刀でも上位に食い込む。

元ネタとしましては『Gears of War』のランサーアサルトライフルを刀にしたものです。

そして最後にアイディアを下さったおにぎりさんパールパーパさん
ありがとうございました！！

第九話

〓〓麻帆良学園・男性寮銀次の部屋〓〓

あれから三週間。あの任務の一件以来銀次はかなりの数の魔法使いたちに危険視されている。まあ、理由はいわずと知れたあの残虐性と非道性、敵を見るも無残な死体に変えてしまったことが原因らしい。

中には銀次を麻帆良から追放、あるいは今後の脅威になる可能性から粛清する声まで上がったらしい。

「まあこの魔法使いどもが敵になろうがどうでもいいけどな〜てか口ばっかで誰も気やしないし」

「本当でござるな〜、腰抜けばっかでござる」

「まあ、そういうな銀次さん、楓。立派な魔法使いを目指している彼らには『人殺し』を生業にしている私らのことなんかわからないよ」

「まあな〜・・・でも俺はそれ以前にわからないことがある・・・」

銀次は睨っていたお茶の入ったコップを一旦置く、それを聞いた楓と真名と楓もコップを置き、聞く。

「・・・なんでお前ら極々当たり前のように俺の部屋にいの？
しかも日曜日の真昼間に」

「拙者は銀次殿の伴侶になるのでござるよ？いて当たり前でござる」

「うん、寝言は寝て言え楓」

楓の意見はまあ、ご存知の通り銀次のことが好きすぎての行動。まあ、銀次は冗談ととっているが、
対する真名は

「私はルームメイトとちょっとね……意見の食い違いがあつてね」

「ああ……桜咲か」

銀次はあの後刹那と喋ってない。というか話しかけても返事が無い。あの晩、銀次の戦いを見て完全に銀次を敵対視しはじめたのだ。あの後も楓の策略（弁当作戦）で教室に幾たび変な殺気をぶつけられるのだ。あれ以来任務もほとんど一緒にやってない。

「別に愛しのこのかお嬢様には手を出さんのに……あの百合っ子め」

「……否定できないのがあれだね」

「……そうでござるな」

刹那のこのかに対する愛(?)はそれこそ以上だ。原作を知っている銀次も予想以上だった。それを一日の大半を同じ教室……真名にしてみれば寮も一緒だからほとんど一日一緒にいる。

「まあ、別に百合だろうが何だろうが俺には関係ないね。俺は渡さ

れた任務を遂行するだけさ」

「そうでござるな」

「そうだね」

銀次の言葉に二人は頷く。この三人かなり息が合っている。

「それはそうとこれからどうするか……」

「今日は仕事もないからね……暇だね」

「そうでござるな」

三人は唸る。銀次はもうこの二人がいるのはどうでもいらしい。

「そうだな……どうせなら外行くか？ここで油売ってもつまらないしな」

「賛成でござる」

「ああ、私も賛成だ」

銀次の意見に二人は反対する意味はない。楓は銀次となら地獄の底までも付いていくだろうし、真名は暇だからだ。

「よし、それじゃ行くぞ」

銀次は財布と鍵を持ち外に出る。楓と真名も後に続く。

〱麻帆良商店街〱

「さてと・・・来たはいいが・・・どうするか？」

「まずは食事にするでござるよ」

「ああ、私も腹がすいたね」

三人はあの後どこへ行こうか？と話し合い、結局のところまだ麻帆良の地理に詳しくない銀次のために麻帆良商店街に来たのだ。

「てか、一番最初に来たような気が・・・まあいいか」

「気にしたらまけでござる。それでは早速昼餉をござ馳走になるでござるよ銀次殿」

「ござ馳走になるよ銀次さん」

「お前ら集るきだな？」

「当たり前だよ（でござる）」

「・・・まあ、いいけどよ」

こういう事態になるであろうと思った銀次は懐の財布に諭吉さんを十枚入れといた。しかしここまで予想通りになるうとは・・・本人も流石に呆れただろう。

「じゃあどこ良く？俺はここの辺の地理は詳しくないからな……
お前らに任せるよ」

「本当でござるか？ふむ……」

「ならあそこで良いんじゃないかな？」

真名がそういつてさした先にあつたのは小洒落たカフェテリアだ。

「ああ、そのオープンカフェで日に当りながら飯を食つのも悪くないな。そうするか」

三人はそのオープンカフェで昼食をとることにした。

～～～食事中～～～

「そういえば……」

銀次は昼食で頼んだサンドイッチ（カツ）を頬張りながら呟く。

「この町は何か異国情緒が溢れてるよな……」

「ああ、そのことかい？」

その目の前で銀次の奢り（ここ強調）でサンドイッチ（ツナ）を食べている真名だ。

「何でも学園都市を作る際に商店街もヨーロッパ風にしようと考えたらしいよ」

「ふうん、そうかそうか、そのおかげで俺はこんな風にウイてんのか」

「確かに溶け込めてないでござるな」

二人は銀次の服装を見ながら言う。銀次が今来ているのは普段着である着流しだ。楓と真名は年相応にどうか見た目と言うか、とにかくよく似合う服を着ている。

「煩せえな。俺はこれ以外は仕事服ぐらいしか持ってないんだよ」

「そういえばそうでござったな」

銀次は特に服の趣味はない。着て暑さ寒さを凌げればそれでいいと思っっている。唯一服の趣味があるとすれば、今着てる着流しぐらいだろう。

「でもまあいいんじゃないかな？似合ってるし」

「そうでござるな。銀次殿が洋服と言うのも・・・似合わないでござる」

「ふん、どうせ俺はお前らみたいに自分に似合った服なんか見つけれねえよ」

銀次は不機嫌そうにいいながら今度はハツシユドポテトを口の中に放り込む。そして、言われた二人組はと言うと、

「に、似合ってるかい？」

「め、面で言われると恥ずかしいでござるな……」

二人は顔を赤く染めモジモジとする。銀次は心の中で「え？何この子たち？」と思いながら見る。

「どうしたんだお前ら？どこか痒いのか？」

「頼めば搔いてくれるでござるか？」

「却下。自分で搔け」

「……チツ」

「おい龍宮、何で舌打ちしている」

楓はなぜか爛々と目を輝かせながら聞いてきたので即座に跳ね返す。するとなぜか真名が舌打ちした。どうしたのだろうか？

「まあ、それはどうでもいいや。それで？飯食い終わったらどうするっ」

「ふうむ……どうするでござるか？」

「正直商店街では特にすることないしね」

三人は唸る。特に作戦もなしで来たのでやることがない。そうして悩んでいると、

「むむっ！！見つけたアルよ桐野老師！！」

「ああ？」

いきなり話しかけられたので銀次が後ろを見ると、

「うげっ、戦闘狂チャイナ娘」

「おお、古ではござらんか」

「こんなところで何をやってるんだい？」

銀次の後ろに居たのはチャイナ服を着て、こちらを指差している中国拳法研究部部长であり麻帆良学園中等部2 - Aの生徒である古菲だ。

「今日こそ戦うアル！！」

「却下。帰れ」

「戦うアル！！」

「却下。帰れ」

「戦うアル！！」

「却下。てか、しつこい」

銀次はうんざりとした顔で言う。実は銀次、以前からこのように勝負を申し込まれているのだ。まあ、原因は最初会ったときに目を付けられた上に、麻帆良四天王の仲間である楓が強いと押したことも

ありさらに強いと疑う。

「まったく、お前が余計なことを言うからに……」

「本当のことをごさるからな」

「確かに、純粋な強さならそこら辺の奴には負けないね」

「むむ！？真名まで認めるほどの実力！！なら相当強いはずネ！！勝負するアル！！」

「……お前も火に油を注いでんじゃねえよ」

ジト目で真名を見る銀次。しかし真名はどこ吹く風か、口笛を吹きながらカツサンドを食べ始める。

「勝負するアルよ……！！！！！！！！！！」

「だアーーーーっ煩せえ！！！！！！！！誰が勝負するか！！そこらにいる格闘マニアと勝負してろ！！！！！！」

銀次は遂に我慢が出来ず叫ぶ。しかし、その叫んだのがいけなかった。

『なんだなんだ？』

『何があつたんだ？』

『あ、古部長だ！……』

『本当だ！！ということとは勝負事か！？』

『相手はあの男か！？』

『おお、余りにも空気に溶け込んでない奴だな！！』

『ああ、しかも洋服が余りにもにあわなそうだ！！』

「おいこら最後の二人！！でてこい頭力チ割ってやる！！」

銀次が叫んだことにより周りには人垣が出来上がった。それでしまったと改めて回りを見る。

「……………」

「……………わかってるよ。だからそんな目で見ないでくれ」

楓と真名が何やら微妙な視線を送ってきているのを感じてか、銀次は頭を押さえている。古は手をワキワキさせながら近寄ってくる。

「さあ、勝負するアルよ！！」

「は………わかったよ。勝負すればいいんだろう勝負すりゃあ……

……」

「銀次殿、ふあいとでござる」

「がんばってくれ銀次さん」

「……………止める気はなしかよ」

「「ないね（でいぢる）」」

「……はあ」

銀次は支払いを済ませ店を出る。楓と真名がその後続く。

〳〳近くの公園〳〳

「さあ、勝負ネー!!」

「はいはい……」

公園の芝生に当たるところに二人は対峙した。二人の周りには人垣が出来ている。その中にはもちろん楓と真名がいる。真名は対峙している二人を見て楓に聞く。

「楓、私は銀次さんが刀を使っている所しか見ていないからわからないのだが……銀次さんは徒手空拳でも強いのかい？」

そう聞かれた楓はふむ、と頷きながら答える。

「かなり、でござるよ。以前拙者が本気で武器ありで戦ったことがあるのでござるが……銀次殿は右手一本で拙者を倒したでござる。時間は三分も掛かっていなかったでござるよ」

「それは……かなり強いね」

真名も楓の強さは知っている。それゆえに銀次の強さがわかるのだ。

「それじゃ一般人最強の古菲と、忍者兼剣士最強の銀次さんの戦いをゆっくりと眺めるかな」

「そつでござるな」

二人は銀次と古の戦いを眺めることにした。

「（たく・・・めんどくせえ。なんでこんなことを・・・）」

銀次は表情では苦い顔をして、心の中では悪態を付いている・・・
ようはかなり機嫌が悪いように見える。

「（まあ、さつさと終わらせるか・・・）おらさつさと始めろ、俺は早く帰りたい」

「ふふふ！！そつは行かないネ！！たつぷりと楽しむアルよ～～～
！！！！！！」

「テンション高すぎだろうが・・・」

二人は構える。古はまるで新しいおもちゃを手に入れたような顔で構え、銀次はうざったそうに構える。腰を落とし、両腕は腰の位置で左手は握り、右手は開いた状態だ。古はその構えを見て、

「……見たことのない構えネ……どこの流派アルか？」

「それは秘密。何せ本来はお天道様の下で出来るような流派じゃないからな」

皮肉っぽく言ってみたものの、古は分かっただけならしく首を傾げる。

「はて？どういう意味アルか？」

「……いいや、さっさとやろつぜ」

呆れながらも銀次は構えを解かない。すると単純な古は、

「そうアルね！！それでは行くアルよー！！！！！！」

古はそう言うと、活歩を用いて近づいてきた。そして即座に銀次の懐に飛び込むと、

「馬蹄崩拳！！」

銀次の腹部目掛けて馬蹄崩拳を放つ。しかし、銀次は馬蹄崩拳を右手で受け流す。そして左手で突きを放つ。

「アイヤー！！！！！！」

「うお」

古は銀次の攻撃を今度は逆に捌き、今度は肘打ちを銀次の脇腹目掛けて打ち込む。

「八極拳・外門頂肘！！」

銀次の懐に入った古の肘打ちが当る寸前、身を少し後ろに移す。

「!？」

「.....」

古は驚いたように銀次の脇腹ギリギリに止まった肘を見る。この距離、速さで放った外門頂肘が紙一重で避けられるとは思わなかったのだ。
しかし、その止まったのがいけなかった。

「ふむ.....なかなかの腕前だな.....なら俺も仕掛けようか」

「!？」

ゾクリと、古の背中に冷たいものが走る。その場を即座に離れようとしたとき、

「真庭拳法・掌瘧ていせつ」

下がる古の額目掛けて掌打を一発軽く叩き込む。ぽふん、という音が鳴るぐらい軽い掌打だ。しかし、

「あ、うっう!？」

『く、古菲部長!？』

『ど、どうしたんだ!?!』

古が呻き、その場に崩れ落ちる。周りの者は何が起こったのかわからないようだ。それを見た銀次が淡々と説明をする。

「安心しろ、ちよつと掌打で脳みそを揺らして脳震盪を起したただけだ。二時間も休めばすぐ元気になるさ」

その説明を聞いた周りはホツとした顔になる。しかしその中で悔しそうな顔をする人間が一人……、

「ま、待つアルよ桐野師夫」

「ああ?なんだもう復活したのか?随分と頑丈な身体しているな」

銀次は素で驚いたように見る。先ほど銀次が使った『掌瘻』は本来、相手の脳みそを衝撃でグチャグチャにして殺すエゲツない技でたえ手加減していても良くて脳震盪、悪くてパンチドランカーになるほど強力な技なのだ。

古は震える身体を起し、

「桐野師夫……私を弟子にして欲しいアル!」

「却下」

「即答アルか!?!」

古の申し出に即座に返す銀次。銀次は耳を小指で穿りながら言う、

「だってめんどくさいし、めんどくさいし、めんどくさいし……」

・めんどくさいし」

「めんどくさいだけじゃないアルか!!」

銀次は小指に付いていた耳垢をフツと息で吹き飛ばす。

「当たり前だろうが、何で俺がお前を弟子にするなんていう、めんどくさいことしなくちゃいけないんだよ」

「私が強くなるからアル!!」

「はい却下。俺には何のメリットもない」

確かに強くなりたいと思う気持ちは銀次も持っている。でも、だからといって銀次は弟子を取るつもりはないし、弟子を取れるほど強いとは思ってない。

「そこを何とかして欲しいアル!!」

「却下。帰れ」

「何とかして欲しいアル!!」

「却下。帰れ」

「何とかして欲しいアル!!」

「却下。てかしつこいしさつきもやったぞこのやり取り……」

先ほどと同じやりとりをしながら呆れたように、銀次は呆れながら

古を見る。まだ回復しきつてないのか目の焦点がちゃんと合っていないが……その目には決心したような色がある。

「……はあ、おい古菲弟子にはしないが戦いたい時は戦ってやるってのなら手を打つぞ?」

銀次はこのように決心したような目を相手にするのは苦手だ。この条件もだいぶ譲歩したといってもいい。しかし、古菲にとっては、

「本当アルか!?それでも十分アルよ!!」

「そうかい、じゃあそうしてくれ」

古菲は弟子入りこそ出来なかったが、戦いの相手をしてくれるといっただけでも十分な修行になる。

「それじゃ早速やるアル!!」

「あほ、今日はもう止めとけ。これ以上やったら脳みそペアになるぞ」

さすがはと言っべきかどうか……先ほどまでフラフラだったのにも関わらず、古は多少足つきが覚束ないだけで後は大丈夫そうだ。でもさすがに脳震盪を起させたので銀次はそこで待ったをかけた。

「え〜でも〜」でももへマチもあるか。じゃないと今度は脳震盪じゃなくてパンチドランカーにするぞ「……それは困るヨ」

「そんじゃ今日は帰れ。じゃあな」

銀次はそういうと、後頭部を搔きながらその場を離れ、そのまま公園を後にした。

くくしばらく歩いてく

「しっかし……やっぱりめんどくさい約束をしてしまったな……」

「ふふふ、そういいながらもちゃんと引き受けたくせに……」

「煩いぞ楓……はあくあ、めんどくさい」

銀次はそう呟く。楓はそんな銀次を見ながら軽く笑い、からかう。この麻帆良で一番銀次と付き合いが長いのは楓だ。

楓にとってはあの古との約定はあまり嬉しいものではない。何せ下手したら銀次と自分のいる時間が減るかもしれないからだ。最近は何でか真名までも（要注意人物としてみている）よく一緒にいるのでなんだかねで二人つきりの時間は少ない。でも、古は楓にとっては好敵手だ。その好敵手が強くなるのは楓にとってはやはり嬉しいことでもある。

それに、

「銀次殿、そのときは拙者も一緒に手合わせ願うでござるよ」

「ああ、わかったよ。ついでだお前も相手になっていやる」

銀次は手をブラブラさせながら言う。楓自身も一緒に鍛えてもらえるのだ。するとそこに今まで黙っていた真名が、

「それじゃあ私も混ぜてもらってもいいかな？」

「え？お前もか？」

銀次は驚いたように真名を見る。まあ、無理もない。真名はスナイパーであり近接戦闘はあまり得意ではないはずだ。それを見てか、真名は軽くムツとした表情になり、

「なんだい？私が近接戦をしたらおかしいのかい？」

「いや、お前さんはスナイパーだと・・・ああ、そういえばお前ガンⅡカタも出来るんだったな」

ガンⅡカタとはその名の通りガン（銃）を使った戦闘技術だ。一二丁拳銃で戦うのを基本とする戦闘技術だ。

「ああ、だからだよ。銀次さんもガンⅡカタできるだろ？」

「まあ、それなりに出来るよ」

それなりとは言ったが、銀次のガンⅡカタは本来のガンⅡカタの戦術を中心に、刀語にでてくる相生拳法の『背弄拳』で敵の背中に回りこみ銃弾を浴びせる、といった戦法でかなりの成果を挙げている。

「それならいいよね？」

「ああ、わかったよ。でもお前さんとやる場合は時間と場所を考え

たほつがいいな」

二人が使うのは実弾を使用する実銃だ。特に場所を考えないと・・・
・即おまわりさんと仲良く手を繋ぐなければならない。しかし真名は、

「認識障害の魔法を掛ければ大丈夫だよ」

「俺は使えないぞ」

「私が使えばいい話だよ」

そうか、と答え銀次はテクテクと歩いていく。二人も一緒に歩いていく。

「・・・で、結局どうするよ?このあと」

「・・・どうするでしゅる?」

「・・・どうしようかね?」

三人はどうするか悩む、正直先ほどの古との戦いでだいぶ時間をとった（主に古の弟子入り志願で）。三人は考えた末、

「帰るか」

「そつでしゅるな」

「そつだな」

結局のところ、三人はそのまま銀次の部屋へと戻り、ゆっくりと時間を過ごすことにした。

そんな三人に、とある戦いがやってくる。『正義』を掲げる『立派な魔法使い』達との戦いが……。

第九話（後書き）

今回は日常編でした。

次回は銀次と楓と真名の三人組と、肅清を唱える魔法使い達の戦いを書きます。

それでは次回をご期待ください。

第十話（前書き）

お待たせしました。第十話です。読まれる前にまず一言……
今回はそれなりにグロイはず……『正義の魔法使い』側がそ
れなりに手酷くやられます。

それでもいい方はどうぞ……！

第十話

〓〓麻帆良学園・学園長室〓〓

いま学園長は頭を押さえない気持ちで一杯だった。学園長としてそして関東魔法協会会長である近衛近右衛門にとって今まで様々な問題を抱えてきたが……、

「ですから学園長！！桐野銀次の学園都市からの追放を！！」

「いや、追放など生ぬるい！！あのような危険人物は今すぐ始末するべきだ！！」

目の前で行われている口論。それはつい数週間前この麻帆良学園にやってきた甲賀忍者・桐野銀次についてだ。

知つての通り、銀次は職業柄『手加減』というものをしない。「捕まえる」と言われたら四肢を切り落としてでも捕まえるし、「徹底的に殺せ」と言われれば原型を留めて殺すのはもちろん、グチャグチャのミンチにだってする。

逆に言えばそれぐらいしなければ『裏』の世界では生きていけない。手加減などもつてのほかだ。古との戦いのように「稽古」なら銀次もまだ手加減ができるが、「仕事」なら話は別だ。

……しかし、残念ながら

「そうだ！！この世界のためにも我々魔法使いが……『立派な魔法使い』を目指す我々が危険の芽を摘まなければならない！！」

ガンドルフィーニが叫ぶ。残念ながら彼を初めとした大抵の魔法使い達は『現実』を見ず『理想』だけを見ている。ゆえに『戦い』と

は『殺し合い』だというのを理解できていない。だから銀次達の考えがわからないのだろう。

「（ふう……とても困ったわい）」

「学園長！聞いていますか！！」

「聞いたるわい。それで？君らは結局のところどうしたいんじゃ？」

「だから桐野銀次の学園からの追放、いや処分を！！！」

人間相手に処分と使う時点で『立派な魔法使い』を目指しているものたちはもうだめじゃの、と思いながらガンドルフィーニ初めとした桐野銀次始末派を見る。

いま学園都市にいる魔法使いたちは二派に別れている。一派は先ほどこから叫んでいるガンドルフィーニを中心とした『桐野銀次始末派』。もともと多くの魔法使いがこの派閥だったが、『追放派』も加わりその人数は激増、学園にいる魔法使いの三分の二はこの派閥だと思っ構わない。

そして、もう一つの派閥は学園長を初めとする『桐野銀次監視派』。これは確かに危険な人物である桐野銀次を監視をして何か起きたら対処するといういわば『保留』を進める派閥だ。銀次はタカミチでも勝てないほどの実力と武器を持っているため下手に手を出さず、こちらの仕事を手伝ってもらおうという考えを持った派閥だ。人数は少ないが学園長とタカミチが居るので何とか始末派との均等を取れている。

「じゃがのう、君達。タカミチ君でさえ勝てなかった相手にどうやって勝つというんだね？正直な話ここにいる全員では勝てる気がせんが……」

それを言われぐつと押し黙る始末派。確かにそうだ、タカミチでも勝てなかった相手にどうやって勝てようか？ましてや銀次は本気すら出していないのだ。本気を出したらそれこそ大惨事になりかねない。そこにさらにタカミチが追い討ちをかける。

「それに彼の側には彼と同じ甲賀忍者の長瀬楓君に、僕らも一緒に仕事をしたことがある龍宮真名君も向こう側についているんだよ？さっきの学園長の言葉を借りるわけじゃないけど、まず勝てないよ。それに勝率は皆無に等しいよ」

ついでに言う魔法使い達の真名に対する信頼はもうない。元々金で雇われた身であるからそんなに信頼を置いているものは居なかったが、今回の銀次との共に行動をしていることにより、信頼はかなり失墜している。刹那などはもうほとんど会話をしないくらいだ。そのせいで寮での生活では互いに枕元に常に武器を置いている状況だ。

まあ、真名自身はまったく持って気にしてないので全然問題はないのだが。

「たかが忍者と傭兵、とるに足らない存在です。そんなことよりも桐野銀次の始末を……！！！」

「それはならん。彼は確かに彼は危険じゃが、だからと言って殺すことだけは認めん。それに仮にも自分の教え子たちにそんなこと言

ってというのはどうかと思うぞい」

学園長の言葉に詰まるガンドルフィーニ。しかし、だからといって引くわけにはいかないし何より頭に血が上りつめている彼にとって……『理想』を求める彼らにとって今の学園長の言葉はどれも通用しない。

「学園長がいくら反対しても我々は彼を処分します！！それはかわりません！！あの桐野銀次と一緒にいる忍者と傭兵も処分対象です！！！」

さすがの学園長……いやタカミチや監視派の魔法使いたちも怒りを通り越して呆れの視線を始末派に送る。仮にも自分の教え子を処分するといっているのだ。

「……そこまで言うのなら好きにするがよい。ただし何かあってもわしは知らんからの」

「ええ、そうさせてもらいます」

そう一言言い残してガンドルフィーニと始末派の人間が去っていった。学園長はため息を吐く。

「やれやれ……まさか彼らがここまで『正義』に固執しているとはおもわなかったぞい……」

それを聞き、タカミチは相槌を打つ。

「ええ、そしてこれで彼らの僕らに対する信頼は限りなく……いや、完全に無くなったでしょうね」

「ふむ……間違いなくの」

学園長も頷く。たとえ組織の末端のものが不始末を起せばそれは組織の問題とされる。しかし今回動いているのは組織の二割はそれなりに重要な役割を持っているものたちだ。これでは逆に信じよというのが無理な話だ。

「……タカミチ君、済まないが」

「ええ、わかりました」

学園長の呟きに、タカミチは即座に反応して学園長室から出て行った。別に始末派を説得するためではない。もし、始末派が銀次を襲い返り討ちにあい銀次が殺しそうになったとき、タカミチがそれを止める所謂ストップパーとして行かされたのだ。

その後、その場にいた魔法使い達を帰し、一人残った室内でため息を一つ零して、

「やれやれ……これでは正義とはなんなのか……わからん
のう」

いまどきの魔法使いは……とため息を吐きながら、学園長はそのまま椅子に寄りかかり軽い睡眠を取ることにした。

「（どうせ、今晚あたりに知らせが来るであろうし……ここで
寝ていたほうがええじゃろ）」

実際にその考えが当ることになり、呆れはたした学園長を見るのは

数時間後のことだ。

くく同時刻・森林近くくく

さて、そんな物騒な話が行われているとは知らない三人組はと言つと、

「ふわア……ねみイ」

「まったくでござるな」

「きても困るけど、こなさ過ぎるのも困るね」

三人はほのぼのとしながら自販機で買った飲み物を飲んでいた。銀次はお茶で楓はココア、真名はコーヒーだ。

ココ最近はこの三人で警備につくことが多い……というか、ほとんどだ。まあ、三人とも嫌われているためしょうがないと言えるでしょうがないが……。

「はあ……正直バックれてもいいんじゃないかね？どうせそう何度も来ないんだしよ……」

「そうしたいのは山々だけど……そうすると金が入らないからし……」

真名はコーヒーをズズツと啜る。まだ春先だからか、肌寒いので真名はもちろん銀次と楓もホットの飲み物だ。

銀次は真名の言葉を聴き、頬を搔きながら返す。

「ああ、そういやそうだったな……でも、ここまで暇だとさすがに……なあ？」

「まったくでござる」

「まったくだね」

三人ともため息を吐く。ここ一週間辺りは敵が一人も来ていないのだ、さすがに暇である。

三人はそのまま他愛ない話をして、のほほんとしながら警備を続ける。そうしていると、銀次が腕時計を見て、

「お、もう交代の時間だな……やれやれ、やっとこの退屈作業も終わって……ないか？」

「「？」」

銀次は苦笑いするように学園側の方を見る。楓と真名もそれに気が付きそちらを見ると、

「おろ？あれは……」

「……やれやれだね」

二人は向いたほうを向きながらため息を吐く。三人の視線の先にいたのは……、

「これはこれは……『立派な魔法使い』の先生方ではありませ

んか。殺気をビンビンさせながら何事ですか？」

「ふん……やはり獣にもわかるんだなそういうのも」

銀次たちの目の前に現れたのは先ほど学園長室で銀次の粛清を唱えていた始末派だ。人数は五人ぐらいだろうか？

「いや、獣だからわかるんだろ？そういうの……」

「獣のほうはかなり敏感でござる」

「なに極当たり前のことを聞いているのだから……」

三人は呆れたように始末派を見る。それを見ていた始末派代表といつても間違いない男性教師・ガンドルフィーニはそれを見てか、額に青筋を浮かべる。

「ふん……減らず口を叩くな。この状況を見て君達は何が起きるかわからないのか？」

「この状況……ねえ」

銀次は始末派を見る。そこにはガンドルフィーニを初めとして、高音・D・グッドマン、その腰ギンチャク佐倉愛衣、修道服を着てこちらを睨むシスター・シャークティ。そして巨大な白鞘の野太刀を持った桜咲刹那もいる。おそらく、始末派の中でも戦闘力に優れた者を選びすぐったのだらう。

銀次は飲んでいたお茶の残りを一気に飲み干し軽い微笑を浮かべながら答える。

「自分の実力をよく理解できていないバカが五人見えるが……間違いはないよな？」

「なっ……」

銀次の言葉を聴き、五人は明らかな怒りを顔に表す。それを見て銀次は軽く手を振りながら言う。

「止めとけ止めとけ。人を『殺す』ことができるお前なら俺に勝てるかもしれないが……人を『倒す』ことしかできないお前らなんぞ、脅威にすらならない。さっさと帰って寝ることを進めるぞ?。」

さらに楓と真名が畳み掛ける。

「まったくでござる。銀次殿に勝とうとするなら甘い考えを捨てて出直すでござるよ。」

「まったくだ……。特に刹那、お前は一番わかるだろう?自分では勝てないということ……」

楓と真名の言葉を聞くも、始末派は退かない。それどころか自分達から『棺桶』に足を突っ込んでいるのも気付かずさらに激昂する。

「貴様ら如き血に飢えた獣どもに負けるなど、我ら『正義の魔法使い』が負けるはずが無い!!」

「なんだあいつ?自分で自分のこと正義って言ってるぞ?。」

「銀次殿あのような輩は世間ではイタイ」待て、楓。いくらなんで

もそれを言ったらかわいそうだ。・・・事実だが・・・真名もさりげに酷いことを言ってるでござるよ」

三人は目の前にいる五人を完全に笑いの肴にしている。それを見て業を煮やしてか、

「その余裕、今すぐ絶望にしてあげるわ!!」

高音が動き出す。何やら呪文らしきものを唱えると、

「『黒衣の夜想曲』!!」

一瞬、黒い影が高音の身体を纏ったと思ったら、すぐに無くなる。そこからでてきたのは黒衣に身を包み、後ろに何やらでかい人(?)みたいなものがある高音だった。

「なんだありや？」

「何やらでかい人間がいるでござる」

銀次と楓は高音の後ろにいるでかい人間を見あげる。真名はそんな二人に説明する。

「あれは魔法だよ。操影術といってね、影の使い魔を操る魔法だよ」

「へえ、そんなんあんだ。初めて知った」

もちろん、知っている。最近忘れがちだが銀次は腐っても転生者。

生前にネギま!の本を何回も読んだことあるのでそれなりの能力は覚えている。

高音以外の始末派も後ろで戦闘できるように準備する。ガンドルフ
イーニは銃とナイフを、シャークティは小さな十字架を、佐倉はア
ーティファクトを、刹那は夕凧を抜いた。
それを見た銀次は、はアとため息を吐きポキポキと指を鳴らせる。

「やれやれ……『細刀・弦』」

銀次は新たな変体刀を生み出す。しかし、現れたのはなんの変哲も
無い黒革のグローブのようなものだ。

それを見た高音が怒りで顔を歪め、突っ込んでくる。それがいけな
かった。

「そんな『ただの』手袋で私を倒せると思っているの!？」

「ああ、思っているさ……なんせ」

クイクイっと、右手の指を動かす。そして、

ズチャツ、

「……え？」

何が起きたのか？高音は急に倒れだす。周りの者も、高音本人もわ
からない。

「……なんせこいつは『ただの』ではなく『異常な刀』の変体刀
だからな」

パシッ、と銀次の左手に何やら長いものが握られた。それは、白く、柔らかく……、断面から流れでる赤い液体で飾るそれは、

『先ほど』まで高音の『膝から下』についていた右足その物だった。

「う、ああああアアアああアア鳴あああああッ！……！！……！！」

「高音君！……」

「高音さん！……」

「お、お姉さま！……」

高音は自分の右足が切り飛ばされているのに気付き、右足の断面を押さえ、地面に転げまわる。しかしそんなでは断面から飛び出る血は止まるはずがない。あたり一面に血を撒き散らしながら高音は喚きまくる。

『細刀・弦』目視し難さをを主眼に置いた変体刀だ。黒いグローブ状の指先には鋼系が付いており、指の微妙な力加減により切れ味が変わる。その気になれば50mmの鉄板を斬ることができる。また相手を拘束したり、緊急時の救助ロープにもなる。

「んだよ……煩いなア。『正義の魔法使い』目指しているやつがこれぐらいで喚いて良いのかよ？」

「ふ、ふああええれっふあだ……!!!!!!!!」

「……ちっ、もう終わりか……」

銀次は吐き捨てるように言うなり、高音から視線を外す。もう、興味を失くしたようだ。銀次は次に後ろにいる四人を見る。

「さて……次は誰だ？」

「ひっ」

銀次の抑揚の無い声に軽く悲鳴を上げる佐倉。残りの三人はただ睨むばかりだ。

「……まあ、こなくても」

ザシュッ

「あ……」

佐倉が何かがあったかのように声を出し、倒れる。

「こっちから行くけどな」

倒れた佐倉の目に飛び込んできたのは、

膝の辺りから斬られた己の左足だった。

「ッ!？」

シャークティは何やら悪寒がしてその場を飛びのいた。しかし、

ドサッ

「遅いな」

シャークティの右腕が斬り飛ばされる。しかし、そこはさすがは歴戦の戦士。歯を食いしばることによりその攻撃を耐える。それを見た銀次はへえ、と感心したようにシャークティを見る。

「へえ……『正義の魔法使い』の中にも骨がある奴がいるもんだな」

「……………」

「おいおい、だんまりは酷くないか？何かしゃべろよ」

「……………」

銀次が話しかけても反応がないため、銀次ははア、とため息を吐き
呟く。

「まあ、警戒するのはいいけどさア……………」

シャークティの前から銀次がいきなりいなくなる。どこにいったか

探すも……、

「背後がから空きだ」

ドスッ

「ぐっ!!」

シャークティの背後、そこに銀次はいた。銀次は相生拳法である『背弄拳』で背後に周り、

「『打刀・釘』……なかなかユニークな刀だろ？」

打刀で貫く。刀、といえば聞こえはいいが、打刀・釘は見た目は短槍でしかも矛先は釘状で石柄には両刃の大型ナイフがくっついている。

しかしそれよりもシャークティは不思議に思うことがあった。

「傷が……ない？」

おかしい。さきほどは刺さった感触があったのに……そんなことを思っていると、

「ぐっああああアアああアアアアアアアアッ!!!!!!」

刺された部分を押さえ、シャークティはその場に蹲る。高音や佐倉のようにのた打ち回らないまでもかなりの激痛が走っている。

それを見た銀次はシレつとした顔でシャークテイの元に歩き、

「『打刀・釘』は本来『戦闘用』の刀じゃない、本来は『拷問用』の刀だ。相手の身体を傷つけずに神経を痛めさせることができる・・・だから」

銀次は打刀をシャークテイの身体に何回か打ち込む。すると、

「ぐつあああああああアツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「こんな風に刺しまくれば神経はズタズタになるし、やりようによつては神経を斬ることができる・・・って聞いてねえか」

痛みのあまり発狂しているシャークテイをその場に残し、銀次はガンドルフィーニに向く。

「くつ・・・ここまで卑怯で残酷な攻撃をしてくるとは・・・貴様それでも人間か!？」

ガンドルフィーニが叫ぶ。『理想』しか求めない彼にとっては銀次の戦法はあまりにも卑怯で、あまりにも残酷だったのだろう・・・しかし、

「卑怯？残酷？ハハハツ!!褒め言葉だな!!」

銀次にとって卑怯や残酷といった言葉は褒め言葉以外のなんでもない。時には外道のようなことをした。時には邪道と呼ばれるようなことをした。時には虐殺した。

しかし、銀次は後悔していない。そうしなければ生きていけなかったし、何より・・・たとえどんな外道なことをしたとしても生き

残らなければ『泣いてしまうもの』もいたから……。だから銀次はどんな手でも使う。それが相手を死ぬより苦しい苦痛を与え、
るとしても、

「……やはり貴様は危険だ。ここで排除するほかないな」

「危険？俺が今まで貴様らに何をした？今日のこととて貴様らが最初に襲ってきたから迎え撃つただけだ。そこんとこちゃんとかわかってる言ってるのか？お前……。わかって言ってるんだったらかなりめでたい頭をしているなお前も『正義の魔法使い』たちも……」

今回のことを呆れながら言う。銀次はこの麻帆良に入ってきてから先の事件意外、人を殺していないし、何より一般人など古を相手したこと意外何もしていない。それよりも銀次は魔法使いのほうが危険だと思う。

「貴様らのほうが危険だろうが。忍びや剣士は武器を持って戦うのが当たり前でありそれが基本だ。しかし魔法使いは杖を使う。しかも手の平に収まるようなサイズはもちろん素手でも呪文が使えるやつがいる。そんな奴ら、『見えない拳銃』を持ち歩いているようなもんだ」

『見えない拳銃』、といったが広域破滅魔法を使えば『拳銃』から『大陸弾道ミサイル』になりかねない。それに比べたら銀次の危険など可愛い(?)ものだ。

「くっ……。減らず口を……。!!!」

「叩かないほうがいいぞ？」

銀次は両手をガンドルフィーニに突き出す。そこには、

「そら、お前の大好きなCQCで戦ってやる」

右手に自動式拳銃、左手に回転式拳銃が現れた。

「四季崎記紀が変体刀十二本が一本『炎刀・銃』……その連射性と速射性と精密性の味をとくと味わえ」

ドンドンドンドントツ！！！！！！！

自動式拳銃から火が吹く。自動式拳銃は連射性に優れてるため銀次はよく相手を翻弄するために乱射する。

「くっ！！」

ガンドルフィーニはその弾丸をナイフで弾き、身を翻して避ける。しばらく相していると、

ガキンツ！！

「お？弾切れか」

自動式拳銃の弾数は十一発。スライドが後ろに引かれた状態で止まる……つまり弾切れだ。もちろんガンドルフィーニはその隙を

つこうとして弾丸を放つ。しかし、

「こっちはまだ弾が残ってるぞ」

ドゴンドゴンドゴンッ！！！！！

速射と精密を兼ね備え、威力もある回転式拳銃でガンドルフィーニの弾丸を弾丸で『跳ね返す』

「なっ！？弾丸を跳ね返したと！？」

さすがのガンドルフィーニも驚いているようだが、それもそうだろう。亜音速を超える弾丸に正確に弾丸をぶつけて弾丸を跳ね返すなど、とてもじゃないがそう簡単に出来るものではない。

「『銃弾撃ち……とても名づけようか？相手の弾丸を弾丸で弾く銃技だ』」

これは生前読んだ『緋弾のアリア』ででてきた銃技だ。ライトノベルの中ではかなり好きだった。

「さて……まだまだ行くぞ」

銀次はさらに弾丸を放つ。その間に自動式拳銃の弾丸を込め撃つ。

キギキギキギンッ！！！！！！！

「ぐっ……!!!」

銀次の両腕から放たれる弾丸が、弾丸に当たり飛び、さらに弾丸に当たり様々な方向へと飛ぶ。ガンドルフィーニは負けじと打ち返すが、すぐに銃弾撃ちで跳ね返す。そして、

「これで……最後だ」

銀次は空中に弾丸を放つ。すると、今まで飛んでいた弾丸が一斉にぶつかり合い……、

「ぐわアあああッ!!!!!!」

合計三十発ほどの拳銃弾がガンドルフィーニの身体を……いや、左手を貫く。三十発の弾丸を喰らったせいですが、腕は千切れとぶ。恐ろしいほどの銃技だ。

「さて……残るは一人……」

銀次は炎刀に新たな弾丸を込めなおし、刹那に向く。刹那は殺気と怒りで顔を歪め、銀次を睨んでいる。

「そう睨むなよ。俺は極当たり前のことをしているだけだぜ？」

「……人を殺そうとすることが極当たり前だと？」

銀次の言葉に刹那が反応した。銀次は炎刀をクルクル回しながら続ける。

「ああ、少なくとも俺はそうやって生きてきた。じゃなきゃ死んでいたし……」守りたいもんも守れないからな」

「!？」

刹那が驚いたように銀次を見る。『守りたいものがある』……それがなんなのかは刹那にはわからない……しかし、

「だからといって人を殺していいとは限らないだろう!！」

刹那の叫びに銀次は首を振りながら答える。

「違うないね……、なあ桜咲。なんでお前は刀を持つ？誰かを斬り殺したいからか？ただ刀を振るいただけだからか？それとも、愛しのお嬢様を守りたいからか？」

「そんなの決まってる!!私はお嬢様を守るために刀を振るうのだ!！」

刹那の激昂が続く。しかし、

「そうか……だが駄目だな。そんなんじゃ……」

「どういう意味だ？」

ため息を付きながら銀次が続ける。

「『武力』をもって何かを『守る』……つまりこれは相手を殺すことも含まれる。お前にはそこが理解できていない」

刹那が目を見開きながら銀次を見る。武力を持って何かを守る・・・これはわかりやすく言ってしまうえば『相手を殺す』ということも同じになる。でも、

「しかし・・・！！相手を殺さずとも大切なものは「守れると思ったら大間違いだ」ッ！！」

「敵をただ倒すだけでは意味が無い。例えば『倒した』と思った人間がいきなり立ち上がり斬りかかって来たら？ただ拘束してあるだけの敵が、その拘束を破り大切な者を傷つけたら？」

銀次は淡々と話す。刹那はそれを聞いているだけだった。

「『倒す』では意味が無い。『殺して』初めて相手が動かなくなっただことがわかる。なによりそれぐらいの『覚悟』が無い奴に・・・大切なもんは守れんよ」

『倒す覚悟』と『殺す覚悟』・・・ほんの少ししか違わないこの二つの覚悟。しかし、その『少し』を踏み出すかどうかで勝負は決する。

「覚悟・・・」

「そうだ・・・まあ、お前にはわからないだろうけどな」

そう切ると銀次は炎刀をしまい、今度は

「絶刀・鉋」

四季崎記紀が変体刀十二本が一本『絶刀・鉋』を取り出す。五尺あ

る直刀の切先を刹那に向ける。

「こい……『倒す』ための剣技と『殺す』ための剣技……
どちらが上かを教えてやる」

絶刀を構えながら銀次は刹那と立ち会う。

「……すごいね」

「……そうでござるな」

少し離れたところでその戦いを見ていた二人は手に持っていた飲み物をちびちび飲みながら観戦していた。

「に、しても最初のあの……『細刀・弦』もすごかったけどあの炎刀を使った銃技……ぜひとも学びたいね」

真名は先ほどの銀次が使った銃弾撃ちを思い出しながら思う。あれが使えればどれほど戦略が広がるのだろうか。

「拙者もあの銃技には驚かされるばかりでござるよ……およ？
今度は刹那殿と戦うようでござるな……ああ、絶刀に変えたで
いじめる」

「なるほど、刹那の土俵で戦うということだね？」

二人は絶刀を持った銀次を見ながら話す。

「さてと……今度はどれくらいかかるかな？」

「さあ……、銀次殿は気まぐれでござるからなア……」

銀次はすぐに勝負を決めたいときはすぐに終わらせるが、それなりに楽しめそうな相手だと長引かせるといふ悪い癖がある。ゆえにか、たまに『接待好きの忍者』と仲間内から呼ばれることがある……どこかで聞いたことがあるのは間違いないだろう。

「今日はどちらでござろうかな……？」

楓と真名は銀次と刹那の観戦を始める。

「行くぞ！！報復絶刀！！」

「ぐっ！！」

空高く飛び振り上げた絶刀を刹那目掛けて振り下ろす。刹那はそれを夕凧で受け止める。

キギキギキッ！！！！！！

互いの刀が悲鳴をあげ、青い火花が散らす。そこで銀次はさらに追
い討ちを加える。

「オラオラオラオラッ！！！！！」

ギンギャンガキンッ！！！！！！

五尺ある絶刀をまるで小太刀のように振り回しながら刹那を追い詰
める。刹那は刹那で防ぐので精一杯のようだ。

「（ぐっっっ！なぜだ！？魔力どころか気すらほとんど持ち合わせ
ていないこの男に押されてるだど！？）」

魔力や気を用意して戦う相手とは幾度となく戦ったことはある。しか
し、魔力も気も使わずただ純粋な体力とただ純粋な刀だけで戦う銀
次に押されていることが刹那を驚愕させている。

「おらどうした神鳴流！！こんなもんか！？」

「くっ！！神鳴流奥義……斬岩剣！！」

本来は妖怪の類に向ける技なので、人に向けて良いような技ではな
い……しかし、しなければ殺されると思ったのか、刹那は遠慮な
しに放つ。しかし、

「フンッ！！」

銀次はそれを絶刀で受け止める。普通の刀ならここで真っ二つとな

り、銀次自信も真つ二つだが……、

「なっ!?!」

「何を驚いている?前にいったる絶刀は『頑丈さ』に主眼を置いた刀だ……んな剣戟では壊れんよ」

切り返すように絶刀を振るう。刹那はそれをバツク転しながら避ける。そして離れたところから、

「神鳴流奥義・斬空閃!?!」

刹那は気で斬撃を飛ばす『斬空閃』を放つ。

「ちっ!?!」

さすがの銀次も斬空閃は受け止めても自分が斬られると思ってか、その攻撃を避ける。そして軽く息を吸い込み、

「手裏剣砲!?!」

四十五本の手裏剣を刹那目掛けて飛ばす。限界まで吸ったわけではないので威力には欠けるが、空気銃で打ち出す弾丸とそう変わらない威力があるため問題ない。

「神鳴流奥義・百烈桜華斬!?!」

刹那は飛来する手裏剣を百烈桜華斬で打ち落とす。おそらく限界値まで息を吸い込んでいれば弾けないほどの威力になるのだが……今はそのような余裕はない。

「ハアアアアアアッ！！！！！！」

刹那が斬りかかって来る。銀次はその攻撃を絶刀で防ぐ。袈裟斬り、逆袈裟斬り、横薙ぎ、唐竹割り、刺突・・・あらゆる角度から斬撃を繰り出す刹那。銀次はその斬撃を絶刀で防ぐ。

「ほほう・・・なかなか良くなってきたじゃないか・・・だが」

ガキンッ！！

「ッ！？」

「まだまだ足りないなア・・・」

袈裟斬りを繰り出そうとした刹那の夕風を受け止め、銀次は鏝迫り合いを始めた。ギジギジと悲鳴を上げる二刀挟みながら二人は会話を続ける。

「確かにお前さんの太刀筋はよくなっている・・・しかし、まだ覚悟が足りない。俺を殺そうとする覚悟が・・・。そんなんじや大事な大事なお嬢様は守れんぞ？」

「っ・・・そのようなもの無くとも私はお嬢様を守る！！」

刹那はそこで離れ、気を練、

「神鳴流奥義・雷鳴剣！！」

雷を乗せた斬撃を銀次に放つ。

ズゴンッ！！！！

まさに雷撃。刹那の放った雷鳴剣は銀次のいた場所をほとんど吹き飛ばし、砂煙が舞う。

「はアはア……倒した……のか？」

流星の刹那も疲れたのか、肩で息をしながら砂煙のほうを見る。銀次は……、

「……」

でてこない。先ほどの雷鳴剣が効いたと思っただけか、刹那はそこで安堵のため息を吐く……が、

「報復絶刀！！」

「なっ！？」

砂煙の中から、銀次が突進するが如く現れた。銀次は絶刀の刃を横に刹那の腹部目掛けて突撃を喰らわせた。

ズシャッ！！

「ぐわッ!!」

油断していたこともあり、刹那は報復絶刀の刺突をモロに腹に受ける。刀身がズブリと腹に突き刺さり背中側へと抜ける。しかし、銀次は止まらず、そのまま突き進む。そして、

ズガンッ!!

「ぐわッ!!」

「おっとこれで終わりか」

校舎の壁に絶刀で縫い付けられる形になった。足は宙に浮き、ぶら下がっている。そこで銀次は右手だけで絶刀を持つ。

「……惨めだな」

「……」

「守りたいもん守りたいって言うとして……自分一人も守れねエ、よくもまあそんな体たらくでそんな大口を叩けるもんだ」

「……ッ」

刹那は苦痛と屈辱で涙を浮かべる。しかし銀次はやめずに続ける。

「『人を殺す』覚悟もねエ、自分のことすら助けられない……」

なんでもかんでも中途半端……お前の『身体』そのものだ」

そういつと刹那は驚いたように見る。

「な……ぜ、それを……知って、いる？」

「さあな？貴様みたいな奴に教える必要は無い。ましてや……

」

そこで言葉を切り、

「これから死ぬ『奴ら』に話しても意味はない」

「!？」

刹那は銀次の目と言葉、そして殺気を浴びて言葉に詰まる。そして銀次は言った……死ぬ『奴ら』と……。

「なんだ？まさか助けてやるとでも思ってたか？……バカか？さっきまで『人を殺す』覚悟をずっと唱えている俺にそんな甘いことでもしてやるとでも思ってたか？」

刹那を壁に縫い付けた状態で銀次は懐からクナイを取り出す。刹那は叫ぶ。

「貴様正気か！？そんなことしたらお前がどうなるかわからないのか！？そんなことしたら……学園中の魔法使いを敵に回すことになるんだぞ!？」

「だからどうした？そのときは俺がその全員を殺せばいい話だ」

さらりと答える。しかし、いくら何でも無理な話だ。学園中の魔法使いは少ないが見習いを入れても百は越える。それを全員相手取るうというのだ。

「・・・狂ってる」

刹那が呟く。百を越える魔法使いを、たった一人の忍びであり剣士である男が・・・たった一人で潰すといったのだ。狂ってるといわずになんと言おうか？

「狂ってる？何を言っている俺は極々普通さ」

クナイを振り上げ、

「いたって『普通』でいたって『異常』なだけさ・・・それが俺、桐野銀次だ・・・じゃあな桜咲。あとで後ろの奴らも行くからあの世で大人しく待ってる」

クナイを刹那に突き刺そうとしたその瞬間、

パン！！

「っ！？」

「おっと・・・」

クナイが急に弾かれる。誰かの銃撃か？と思ったが、火薬の匂いが

しないしなにより、銃を使うの真名とガンドルフィーニぐらいだ。
・ ・ ・ だとしたら、

「ちつ．．．なんだ？お前もこいつらと同じ『正義』を唱える人間
なのか？．．．．高畑先生」

頭を高畑に向けながら、銀次は話す。その先には高畑が立っていた。両腕をポケットに入れ、臨戦態勢だ。タカミチはタバコを吸いながら銀次を見る。そして、喋りだす。

「いや．．．、正直な話、僕は君の考えに賛成しているよ」

「なっ!？」

「ほほう．．．．」

ガンドルフィーニや刹那などは驚いたように見ている。それもそうだが、本国でもかなり有名でその名を知らない人間はいないと言われるほどののだ。なかには高畑を指摘している者もいるだろう。しかし、その高畑が人間をまるで何でもなしのように人を殺す人間と同じ考えを持っていると思うと．．．．驚きを隠せなかった。

「確かに君は危険だよ．．．人をまるで息をするかのように簡単に殺す。でも、それぐらいの気持ちが無ければ武力から大切な人など守れない．．．それは先の大戦で嫌と言うほど見てきたからね」

実際に先の大戦で『赤い翼』に所属していたタカミチは数多くの魔法使いを初めとした兵士を殺すところを見ている。最初こそ抵抗はあった。何で『倒す』では駄目なのか？なんで『殺さなければ』いけないのか？葛藤の、葛藤の葛藤の葛藤の末に．．．．やがて

悟った。

「戦いで何かを守ると言うのは相手を『殺す』ということ……僕は戦場でナギさんたちの戦いを見て思ったよ」

「ほほう……。それで？その悟った高畑殿は俺にどうしろと？タカミチの語りを聞きながら、銀次は頭を掻く。タカミチはポケットから手をだし、啞えていたタバコを地面に落す。

「なに……学園長に言われてね。そこにいる君達を始末しようと考えてる人たちを殺されないうちに回収しろと言われただけだよ……もうかなりボコボコみただけど」

「ああ、あと数十分ばかり早ければ五体満足の状態で回収できたのにな……ん？」

そんなことを言っていて、銀次は引つかかる言葉が出てきたので聞き返した。

「ちょっと待て……『君達』といったか？俺に……もしかして楓と真名もか？」

真名が魔法使いたちに完全に嫌われているのは知っていたのでおそらく入るだろう思い銀次が聞くと、タカミチはコクリと、無言で頷く。それを見た銀次はビキッと音が鳴りそうなほど額に青筋を浮かべる。

「ほほう……俺だけでなく、俺の仲間にまで手を出そうとは……いい度胸だなアおい？よほど死にたいと見えるか？」

「またもや懐からクナイを取り出し、刹那の首筋に当てる。一気に引こうとしたが、」

「ああ、確かに君の意見もわかる。でも、できれば彼らの処分は僕らに任してもらえないかな？」

「……なに？」

銀次の動きが止まる。クナイは刹那の首の皮一枚を裂いて止まっている。

「……自分を殺そうとした人間を……その殺そうとした人間がいる組織に引き渡すとも思っているのか？」

「（やはりそう来たか）……そこを曲げてどうにかしてくれないかな？流石に教師二人に生徒三人が死体で見つかるのはちょっとね……」

「ならミンチにして魚の餌にしてやるうか？」

「……それも困るからやめてくれないか？」

他のものが言えば冗談にも聞こえるが、銀次が言つと冗談に聞こえない。とにかくタカミチは食いつく。

「もちろん君達の条件も飲み込むし、君達ができるだけ納得できる処罰もこちらがとる……だからどうにか手を打って欲しいんだ」

タカミチが出した案は五人を助ける代わりにそちらの要求を飲み込

むというものだ。しかも上限なしで・・・つまり何でも願いを受け入れると言っている。しかし、銀次がそんなので動くわけがない。

「ふん、そんなので俺が動くことで「その条件飲んだでござるよ」・・・
・楓？」

銀次の後ろには瞬動でいきなり現れた楓だった。そして遅れて真名が表れた。

「拙者はそれでいいと思うでござるよ銀次殿」

「私もそれでいいと思うよ銀次さん」

「真名まで・・・いいのか？こいつらはお前らの命も狙ったんだぞ？」

銀次は二人に問いかけるが、二人は微笑を浮かべ、

「それを銀次さんが防いでくれたじゃないか・・・それでいいよ
私は」

「拙者も・・・それでいいでござる」

二人は銀次が守ってくれていることがわかり、それが嬉しいのだ。
それに・・・、

「「このよつな」共など元もと眼中にないからね（ないでござる）
」」

「・・・お前ら案外酷いな」

楓と真名のゴミ発言を苦笑いしながら聞く銀次。それを聞いた銀次は、

「まあ、こいつらがいいと言ってるから今回は見逃してやるう」

「うぐっ」

今まで突き刺さっていた絶刀を刹那から引き抜き、収める。そしてその場から立ち去ろうとするが・・・途中で立ち止まり、振り向かずにタカミチに告げる。

「・・・今回は貴様らの言う事を従ってやる・・・だがな、次に同じようなことをしようものなら・・・そのときは」

そこで銀次はタカミチのほうへと振り向く。その顔は恐ろしいほど冷たい表情だった。

「そのときは・・・襲ってきた奴らはもちろん、この麻帆良にいる魔法使い全員が殺されると思え・・・いいな？」

「・・・ああ、肝に命じておくよ」

タカミチが冷や汗を流しながら、頷く。銀次ならやりかねないため、頷くしかほかにないのだ。それを見てか、それとも飽きてか、銀次はその場を離れた。

「あ、まつでござるよ、銀次殿」

「置いてくとは酷くないかい？」

「煩いな。文句言わずにさっさと付いて来い」

楓と真名が銀次のあとを小走りで追いかける。そして、三人は並んで帰っていった。

三人は歩く。銀次を先頭に真っ直ぐ歩く。それが、血に塗られ、肉塊が転がっている道だったとしても……三人は歩き続ける。

第十話（後書き）

『人を倒す』ことしかできない『理想』を求める魔法使いと、『人を殺す』ことができる・・・つまり人を殺す『覚悟』がある銀次との戦いでしたが・・・いかがでしたでしょうか？

銀次は現実主義者で使えるものなら何でも使う。卑怯だろうが残酷だろうが生き残ればそれでいい。そういう思考の持ち主だとこのことを改めて書いてみました。

フルボッコにした魔法使いのキャラが好きだったという方申し訳ございませんでした！！というか、始末派に加わって尚且つ戦闘力がある男性魔法使いと言うとガンドルフィーニ以外思い浮かばなかった・・・。

さて・・・次回はほのぼの編を書くことと思います。楓と真名があるものを要求したり、一軒家に引っ越したり・・・そんなことを書くうと思いません。

それでは次回！！

最後に変体刀の案を下さった完全怠惰宣言さんとパルパレーパさま、ありがとうございました！！

第十一話（前書き）

どうもです。

今回は日常編を書きました。

第十一話

〃〃あれから一週間後〃〃

正義を掲げる魔法使いとの戦闘から一週間……銀次たち一向は、

「お〜い、楓それぞれに運んでくれ」

「あいあい、了解でござる」

「真名。その箱本だから落さないように頼むぞ」

「わかったよ……変な本はないね」

「おいこら。なに箱の中見てんだ」

引越しをしていた。

〃〃事件翌日の昼〃〃

「さて……何か弁解があるのなら言ってもらおうか?」

銀次は、目の前に座っている学園長をそれはとてもとても『素適』な笑顔で見っていた。でもにじみ出る殺気のせいで部屋の中にいる楓、真名、学園長、タカミチは冷や汗を流している（特に学園長とタカミチは滝のように汗を流している）。

今回、銀次が学園長室にきたのは昨夜起きた『襲撃事件』について

だ。

「・・・弁解はするつもりはない。彼らが勝手にやってしまったから」

「ああ、本来ならあいつらをあの場でバラバラのグチャグチャのミンチにでもして、海か川にいる魚のえさにでもしようかと思ったんだが・・・そこにいる高畑殿曰く『君達の要件を飲む代わりに助けて欲しい』と言われたからな・・・まあ、今回はその請求だ」

余談だが、あるとき手足を斬り飛ばされた四人はその後、治癒魔法により手足をくっ付けられた。しかし高音、佐倉両者は精神もやられたらしく今は治癒魔法で療養中。シャークティは全身の神経をズタズタにされていて、今だ治療中だ。ガンドルフィーニは弾丸で腕を千切られたようなものだが、あの後腕も何とかくっつき、肩から吊るす状態で授業に出ている。刹那はそれなりに軽く、今日は風邪として寮で療養中。明日には学校にくるらしい。

「・・・ふむ、どのような要求も呑もう」

学園長はゆっくりと深く頷きながら聞く。いまこの場に置いて、発言権を有しているのは銀次、楓、真名の三人だけだ。

組織とは大変で、一番下つ端の事件でも組織全体の事件になってしまふのだ。しかも今回は魔法教師が二人、に魔法生徒二名、神鳴流剣士一名・・・それなりに麻帆良学園の中枢にいるものたちだ。今回のことはどういわれようと学園側に非があるのは間違いないだろう。

「まず要求――軒家を貰い受けたい。これは言わずとしてわかると思うが、あんな風に襲ってくるやつらから避けるためだ。別に殺

してもいいんなら殺すが、借り物の寮を汚すのは気が引ける」

要求の最初は場所の移動。いくら血に慣れた銀次でも、目覚めたらいきなり血に濡れた部屋と肉塊が転がっていたら流石に目覚めが悪くはない。後々入ってくる人間も困るだろう。

「ふむ、わかった・・・ほかにはあるかね？」

これはしょうがない。と思いながら学園長も頷く。唯でさえ人数が少ないのに、これ以上減らされたら溜まったもんじゃない。

銀次はさらに続ける。

「要求二 昼夜に問わず、麻帆良にあるありとあらゆる施設への出入り許可。これは図書館島も含まれる。学園はもちろんのこと一般人立ち入り禁止区域も含まれる」

「・・・う、うむ・・・それはちと厳しいと思うが・・・わかった何とかしよう」

すべての要求を飲むと言ってしまった手前、これも受け入れなければ約定破棄になってしまう。

「それじゃ要求三つ目・・・これが一番重要だ」

ここで、銀次の空気が変わる。学園長もそれを感じ取ってか、息を呑む。そして、銀次が続ける。

「要求三つ目は・・・これから先、俺達を襲ってくる奴はその場で即殺害することを許可しろ。これが最後の要求だ」

その要求を聞いて、学園長はさらに冷や汗を流す。即殺害・・・読んで字の通り、銀次たちに襲い掛かってきた魔法使いたちをすぐに殺すと言っているのだ。

しかし、これもまたしょうがないこと。銀次達にとってもうここは『敵地』とでしか受け取れないのだ。その『敵』が襲ってきて、いちいち生きたまま捕縛して突き出す・・・そんなめんどくさいこと、このうえないのを銀次がやるはずが無い。来たら即抹殺。それで終わりだ。

「以上、が要求だ。飲めないのなら俺は容赦なく昨日の奴らを殺しに行くが・・・どうする?」

『助ける代わりにどのような要求も呑む』その条件で銀次は昨夜の連中を助けたのだ。しかし、要求を呑まない場合は昨夜の約束は破棄とされ、五人全員がああ世行きだ。学園長に選択の余地は・・・ない。

「わかった・・・その要求も呑もう」

「さすが、関東魔法協会会長だ。このような無茶振りの要求を飲む寛大な懐に感謝いたす」

皮肉った笑みを浮かべながら、銀次は軽く、頭を下げる。しかし、なぜかそれがどこか小馬鹿にしているようにしか見えない。

「さて・・・なら俺は帰ると「ちょっと待ってくれないかい? 銀次さん」・・・どうした真名? 何かあるのか?」

要求を言い終えた銀次はその場からさっさと帰ろうとしたが、なぜか真名に呼び止められた。銀次は怪訝な顔になりながら尋ね返す。

「忘れたのかい？高畑先生は『君達の要求を呑む』といったんだよ？なら私達の要求も呑むのが筋だろ？」

「これは銀次殿も一緒に居てくれた方が後々楽でござるからな」

真名が言い終えると、楓も話しに参加してきた。……銀次は何やら嫌な予感がしながらもその場に残ることにした。楓と真名はそれを見て、今度は学園長に視線を向けた。

「さて……学園長。私……というか楓も一緒のお願いなんですが……もちろん聞いてくれるよね？」

「も、もちろんじゃ……なんなりと言っとくれ」

学園長は頬を引き攣らせながら真名を見る。真名はかなり金にがめつい事を知っているからだ。おそらく億単位で金を請求してくるのではないか？と思い、頬を引き攣らせているのだ。

真名はそんな学園長を見ながら、要求を突き出した。

「私を銀次さんと一緒に住まわせてくれないかい？」

「もちろん、拙者も一緒にござるよ？」

「……は？」

学園長はもちろん……銀次でさえ何言ってるのこいつ？という顔をしている。最初に戻ってきたのは学園長だった。

「あ……、真名君、楓君……念のため理由を教えてください

もいいかね？」

学園長がもつともな質問をする。

「何を言っているんだい。私はいつたい誰と相部屋だと……？」

「……あゝ、なるほど」

それを聞いて銀次も何とか復活。真名は誰とルームメイトか？それは言わずと知れた……。

「刹那とは『元』仕事仲間だっただけにね、余計に神経を使わなければいけないんだ。今でも寝るときは枕元に愛銃を置いとかないとおちおち寝ていられないんだよ」

「確かにそれだとオチオチ寝ていられないよな」

真名のルームメイトといえば昨晚の奇襲に参加した桜咲刹那のことだ。銀次と一緒に居るといっただけで会話をまったくしなかった刹那だ。寝ている間にブスリとやられる可能性もある。

「ふむ……真名君はもつともじゃからわかるが……楓君はなぜかね？君の同室である双子の鳴滝姉妹は、魔法使いではないが……」

学園長は今度は楓に聞いた。真名はともかく楓はとくにこれといった問題はないが……、

「前にも言ったでござるが、拙者は銀次殿の伴り「だから冗談はやめような」……とにかく銀次殿が浮気をしないようにするた

めでござる・・・それに、どちらにせよ命を狙ってきた者と同じ屋根の下では暮らせんでござる」

楓の言葉をまた遮る銀次。それを睨む楓。そこで不機嫌そうにさらに続ける楓。真名はそれを苦笑いで見ている。

しかしまあ、前半の理由は不純だが後半の理由は正しいだろう。いくら部屋が違うとはいえ襲ってこないとは限らない。その場合、同室の双子も一緒に巻き込まれるだろう。

「同室の風香と史伽にはもう許可はとってるでござるよ・・・二人とも喜んで賛成してくれたでござる(ニヤツ)」

「・・・何やら悪寒を感じたのは気のせいか？」

あの楓にべつたりの二人が許可を下ろしたとはどのような話をしたのか・・・かなり気になるものだ。

そこで二人の要求は終りらしく、後ろに下がる。

「ふむ・・・ではその要求はすべて呑むことにしよう。家と出入り許可はもちつと待つてはくれんかの？流石に手続きが面倒じゃから」

「ああ、それは流石に譲歩するさ。俺とてそこまで鬼じゃないからな・・・じゃあな、学園長に高畑殿」

銀次はスタスタとその場を去っていった。楓と真名はその後ろを早足で着いていったそうな。

くくそれから一週間後の本日くく

とまあそういうことがあり、いまここに銀次、楓、真名の大引越し祭が行われているのだ。

「よつと……おい真名。お前このやたら重い箱はなんだ？なんか金属音がするが……」

「ああ、気をつけて扱ってくれ銀次さん。その箱のなかは弾薬が入ってるから」

「それを早く言え！！……ん？おい、楓。このお前の荷物の箱から飛び出している写真って……」

「はて？何のことでごさるか？」

「てめエ……後でじっくり『おはなし』をしような」

そんなやり取りをしながら、三人は着々と荷解きをしている。もともと荷物が少ない三人のため、もうほとんど終わっている。いまは個人個人の部屋の整理をしているところだ。

銀次が最後の箱から本棚に本を詰め終わると、部屋の外から楓が声を掛けてきた。

「銀次殿く、引越しそばができたでござるよ」

「おー、行くから先に待っててくれ」

了解でござる、と言いながら楓はその場を去る。銀次は最後の箱を畳み、立ち上がる。

「さて……にしても学園長殿も随分と広い一軒家をくれたものだ・
・・」

銀次が部屋を見渡しながら言う。部屋の大きさは軽く二十畳はある。一人の部屋あたりでこのサイズだ。それが大体十部屋。さらに庭がついていて地下室もあるらしい。そういうところが大雑把な銀次だが、ただ広いというのはわかった。

麻帆良学園までは歩いて十五分と近く。電車やバスなら五分も掛からない。

「まあいいや・・さつさと飯にするか」

細かい計算が苦手な銀次は後頭部を掻きながら居間へと向かった。

〳〳居間にて〳〳

「銀次殿、折り入って頼みたいことがあるでござる」

「私も頼みたいことがあるんだがいいかな？」

居間にて引越しそばを啜っていたところ、楓と真名が改まったように言ってきた。

「……なんだよ改まって……？」

銀次はその二人を怪訝な顔で見る。真名はよくわからないが、楓が

このように改まって頼みことをしてくるときは何かしらあると知っているからだ。

最初に切り出したのは楓だった。

「実は拙者に変体刀を作って欲しいのでござる」

「私もだよ楓。お願いできないかな？銀次さん」

銀次はなるほど、と思いつつ口を咥えていたそばを嚼む。二人にはすでに銀次がオリジナルの変体刀を作れることを話している。楓は前から知っていたが、銀次はこのことを心の底から信用の置ける相手以外には教えないようにしている。真名に教えたとき、なぜか楓が不機嫌になったのは今でもいい思い出だ。

銀次はそばを嚼り終え、一言。

「めんどくさいからやだ」

ズデッ！！

真顔できつぱりと言われた二人はそのまま、そばが零れないように器用にズツこけた。

「断り文句が『めんどくさい』とはあんまりではござらんか？銀次殿」
「！」

「せめてもう少し考えてくれ銀次さん！」

「……やだめんどくさい。これでいいか？」

「三秒だけじゃないか（でござるか）!？」

珍しくツツコミを入れる真名と楓。銀次は本当にめんどくさそうな顔をしながら答える。

「いやだってよ……お前らすでに武器あるじゃん？しかもどっちも強力な奴。あんまり必要ないと思うが……」

楓は風間手裏剣といった大型手裏剣。真名はデザートイーグルやレミントンといった強力な銃……まあ、変体刀にもよるが一般で戦うなら十分なほどの威力を有している。

「そこを何とかして欲しいでござる!！」

「頼むよ銀次さん。……あっちの銃だと弾代が馬鹿にならないんだ」

「……お前はそれが本音だろ？」

あまりにも現実過ぎる本音を吐いた真名に銀次はジト目で見る。もちろん真名はそんなの気にしない。

「手裏剣だろうと弾代だろうと、後で俺が出してやるからそれで我慢しろ。……俺は部屋に戻るぞ」

銀次は重い腰を上げるように立ち上がり、その場を去ろうとしたが……

ガシッ！！

「・・・何やってんの？お前ら」

銀次が自分の両足を見る。そこには

「逃がさないでござる」

「逃がさないよ」

右足に楓、左足に真名がくっついていて。すると楓は、下を俯いてたところをゆっくりと顔を上げ、

「・・・作って欲しいでござるよ〜銀次殿〜」

「うぐっ！！」

いつもは開かない糸目を開いて、涙目で上目遣いで見ながらせがむ楓。銀次は思わず後すざりしそうに・・・いやした。

「この通りでござるよ〜銀次殿〜」

「ぐわッ！！止める楓！！」

銀次はまるで刀か槍で突かれたような表情になりながら、楓を見る。これが、銀次の数少ない弱点でもある楓の必殺技『おねだり』。過去にこれをやられた銀次は楓の願いをほとんど（99、9%の確立で）聞き入れてしまっている。

それを見た真名も・・・、

「銀次さん……私もお願いだから作ってくれないかな？」

「ぐっ……！！真名、お前もか！！」

真名も若干の涙目で見上げながらねだる。楓と真名、普段とは待ったく違う性格の二人が纏めてこのように涙目で頼みに来られたら……、

「~~~~ツ！！！！わかつたわかつた！！作ればいいんだろ作れば！！」

「ありがとうでござる」

「さすがだね銀次さん」

先ほどまでの泣き顔はどこへやら。銀次は苦虫を百匹ぐらい噛んだ様な顔をしながら二人を睨む。しかし、二人はそんなの意に介さずそばを睨り始めている。

「……で？二人はどんな変体刀が欲しいんだ？」

ドカツと座りなおした銀次が二人に聞く。了承してしまった以上、作らなければいけない。……まあ、銀次がただ単に二人に甘いだけとも言えるが……。

「拙者は出来れば『薄刀・針』と言いたいでござるが……、生憎と拙者では扱えないでござるからな」

薄刀は『薄さと軽さ』を主眼に置いた刀。その刃は薄く、向こう側

が見えるぐらいだ。楓が得意とするのはどちらかといえばクナイや風間手裏剣などといった『使い捨てもできる』武器だ。ゆえに、

「『多さ』に主眼を置いた『千刀・ツルギ』に似た変体刀を作って欲しいでござる」

「なるほどな・・・確かにお前ならそれが一番だろうけどな・・・」

銀次も納得する。千刀は四季崎記紀が『刀は消耗品』と考え作った完成形変体刀だ。『投げて消耗する』武器を得意とする楓にとってはちょうどいい刀だろう。しかし、楓はそこまで刀の扱いが得意わけではない。ゆえに似た物を欲しいといったのだ。

「あいよ・・・真名はどうなんだ・・・って、そうは言ってもお前さんの場合は」

「ああ、炎刀・銃に似た刀を一つ頼むよ」

真名の場合には言わずとわかった銀次。普段から銃を使う彼女にとって炎刀はかなり相性のいい刀だろう。銀次はいはい、と言いながら立ち上がり部屋へと歩いていく。

「それじゃあ作ってくるから邪魔するなよ」

「あいあい」

「わかってるよ」

銀次は手をプラプラ振りながら居間から出て行った。残った二人は

残った食器を片付ける。片付けてる間、楓は真名に聞く。

「……真名、一つ聞きたいことがあるでござる」

「なんだい楓？聞きたいことは」

真名は隣で一緒に皿を洗っている楓に聞き返す。楓は口を開く、

「……真名は銀次殿を好いでいるでござろう……？」

楓は今までの行動を思い出しながら言う。それは、ただ『気に入っている』だけではまずありえないほどの行動だ。楓は今の今まで聞こうと思っで聞けなかつたことをいま、聞いた。対する真名は……、

「ああ、好いでいるよ。『恋愛対象』として……ね」

あつさりと、まるで水が流れるようにあつさりと真名が答える。

「……理由を教えてはくれないでござるか？……拙者と同じ土俵に上がった理由を」

楓が真名を睨みながら聞く。別に好きだといふのならどつと言つことはない。その程度の思いに負けるほど楓は弱くない。……しかし、真名は違つた。

「そうだね……惚れた、と確証が出来たのはあの夜の襲撃を受けたときだよ」

真名は洗っていた皿を籠に置きながら話し始める。

「最初あつたときは・・・まあ、変な男だとは思つたね。いきなり現れたと思つたらどこからともなく刀を出して笑いながら振り回し、楓の弁当を持つてきたと思つたら朝倉の質問攻めにタジタジになつていたり・・・気付いたらなぜか、目がいつもあの人のことを追つていた」

仕事の時も、日常の時も・・・真名は視界に銀次が入れば必ず追つていた。最初はなぜかわからなかった。でも、

「あの夜の晩・・・銀次さんが言ったあの言葉が嬉しかった・・・

」

「ちょっと待て・・・『君達』といつたか？俺に・・・もしかして楓と真名もか？」

「ほう・・・俺だけでなく、俺の仲間にまで手を出そうとは・・・いい度胸だなアおい？よほど死にたいと見えるが？」

楓だけならまだわかる。付き合いが長く、おそらく大事に思つている銀次のことだ。楓に何かあればすぐに駆けつけるだろう。でも、

「会つてまだ数週間しか経つてない私を・・・金さえ渡されればなんでもする傭兵である私を、銀次さんは『仲間』だと言ってくれた・・・それで惚れたんだろうね」

真名が麻帆良に入ってきたとき、魔法使い達はいい顔をしなかった。金さえ積みめばどんな汚い仕事もする傭兵は『間違った正義』を貫く魔法使い達にとつて真名の印象はここに来たときから底辺だった。そんなことをまったく気にせず、それどころかその『生き方』を否定もせず受け入れた銀次に、真名は惚れたのかもしれない。

「……………」

「ふふふ……まさか、私がまた誰かを好きになるとは思わなかったけど………」

真名は懐に収めてあったペンダントを取り出す。そこには一人の男性の写真が入っていた。……その男性は、真名が好きな……いや『だった』男の写真だ。

「……………もう未練は無いのでござるか？」

「ああ……それに、よくよく考えたら彼に対する好きは『恋愛対象』の好きではなくって『家族』としての好きだったからね………
・それに」

真名は楓を見る……その目には何か決意をした意が込められている。

「彼はこういったよ……『お前のことを大事にしてくれる、いい男を見つけて幸せになれ』……てね。私にとつてのその男が……
銀次さんだよ……楓」

「……………」

しばらくの沈黙……最初に破ったのは楓だった。

「……わかったでござるよ真名……認めるでござる。お主が銀次殿を慕うことを……でも」

そこで区切り、楓が真名を見る。その目は『ライバル』を見る目だった。

「拙者として幼き頃からの夢……銀次殿を好いてたでござるからな……絶対に負けないでござる」

「……上等だよ」

二人の顔に挑戦的な笑みが浮かぶ。

「絶対に負けないよ(でござる)」

二人はそこでさらに絆を深く強める……はたしてどうなることやら……？

〳〳麻帆良学園・裏山、某ログハウス〳〳

その頃、裏山にある某ログハウスでは一人の金髪少女……いや、

見た目幼女がある映像を見ていた。その傍らには緑色をした髪を持った、背の高い少女が立っていた。

「……くっくっくっ」

「どうなさいました？マスター」

急に不適に笑い出した己の主に、不思議そうに聞く少女。それに反応してか幼女も返す。

「ん？ああ、なに。この男は実に面白いと思つてな」

二人の目の前にある映像……それは魔法使い達が銀次に奇襲をかけ、返り討ちにあつた映像だ。幼女は銀次を見てさらに続ける。

「人の身体をバラすに躊躇をしない……実にいい。さらに聞いたか？この……」

『だからどうした？そのときは俺がその全員を殺せばいい話だ』

「はっはっはっ！！聞いたか茶々丸！！この男は殺すと言っているのだ！！しかも百を越える魔法使いを相手にするかもしれんと言つのにこの態度……よほどの悪かそれともよほどの馬鹿か……」

幼女は嫌らしい笑みを浮かべながら、映像に写っている銀次を見る。

「これほどの悪がこの土地にいるのだ……私が『挨拶』をし

なければ失礼だろうか？」

「そうですね。マスター……しかし、よろしいのですか？学園長は彼に下手な干渉をするなど言っていましたか……」

「ふん、あのようなジジイの言うことなど聞かんでもいいわ……さて、」

茶々丸と呼ばれた少女の言葉を遮り、マスターと呼ばれた幼女がその場に立ち上がる。

「さて……待っている桐野銀次……この私直々に挨拶に行つてやる……この『悪の魔法使い』エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルがな！！」

数々の変体刀を駆使用する剣士であり忍びである桐野銀次と、600年生き、『悪の魔法使い』と恐れられた真祖の吸血鬼であるエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの戦いが……切つて落されようとしていた。

第十一話（後書き）

はい、みなさんどうでしたか？銀次一行、一軒家に移るの巻でした！！

次回！遂に登場かの有名なあのお方！！そしてバトル開始！！はたしてどうなる！？

それではまた次回！！

第十二話（前書き）

どうも銀閣です。

今回はエヴァとの戦い前半です。今回もこのまま書き続けければ軽く
一万字越えると思います、前後半に分けました。

それではどうぞー！！

赤刀の温度変更しました。

第十二話

〱前話から三日後の夜〱

満月が輝くその夜。銀次一行はいつものように森林近くの校舎の屋上で侵入者を待っていた。そして、銀次一行である女子二人はとうと……、

「いや、本当にありがたいでござるな」

「本当だよ。ありがとう銀次さん」

二人は自分の手の中にある刀を見ながら嬉しそうに笑う。……もちろんただの刀ではない。それは……、

「まあ喜んでくれて何よりだ……でも、本家の変体刀を模して作ったからな。どこかしら劣るところがあるかもしれないが……」

二人の傍で座りながら自分の頬を掻く銀次。そう、二人が手に持っているのは以前二人が銀次に頼み込んで作ってもらった変体刀……いや、本家を模しているから『擬似変体刀』だろうか？それを持っていた。

「『擬似変体刀』……楓のは千刀を、真名のは炎刀を真似て作った……まあ、どちらもどこかしら失敗はしたが……」

「それでも十分でござるよ銀次殿」

「ああ、私もまったく問題ないよ」

銀次はちよつと済まなそうに言うが、二人はまったく気にしていない様子だ。

「ふむふむ・・・それにしてもこれはいいでござるな、名づけるなら『擬似千刀・楓』でござる」

『擬似千刀・楓』

『千刀・ツルギ』を元に作った変体刀。形状は刃渡り三十ｃｍで柄部が十ｃｍほどの長さのクナイだ。『遣い捨てる』ことも目的に置いた変体刀で、組み合わせると中型の十字手裏剣にもなる。・・・しかし、千刀とは言うが途中で集中力が切れてしまい、百本しかできなかつたのだが、楓はそれでも喜んでいたが・・・。ついでに銘々は楓本人。

「ふむ・・・なら私のは『擬似炎刀・銃式』かな？」

『擬似炎刀・銃式』

『炎刀・銃』を元に作った変体刀。本家は自動式拳銃と回転式拳銃だったので、銀次も同じように作った。現存する拳銃をモデルにしたため、自動式はスチエツキン・マシンピストル。回転式はS&W M298インチモデルだ。・・・しかし、これにも問題が発生。炎刀を模して作ったためか、『精密性』が炎刀よりも劣っている。これは持ち主の腕に頼ること以外ないだろう。

まあ、どこかしら問題はあるが、二人はそんなことはまったく気にしていないため問題はない。

銀次は満足そうにしている二人を見ながら軽く微笑を浮かべる。

「ふふふ、何だかんだいったが……そういつてくれるとやはり嬉しいな」

「……」

銀次の微笑を見てか、二人は顔を赤く染める。銀次はそんな二人を怪訝な顔で見る。

「どうしたんだお前ら？いきなり顔なんか赤くして……風邪か？」

「な、なんでもないのでござるよ銀次殿」

「あ、ああ私も何でもないよ……」

二人はそっぽを向いてしまう。それをさらに不思議そうになって見ている銀次。急に顔を赤く染めた二人を置いて、腕時計を見る。

「よし……今日はもうお終いだな。帰るぞ楓、真名」

「あいあい」

「ああ」

「……お前ら本当どうした？」

いまだ上の空の二人を本当に不思議そうに見る銀次。しかし、

「……ちっ、やっと終りだと思ったのよ……」

「「？」」

銀次がいきなり舌打ちをして校舎側を見る。二人も不思議に思いそちら側を見ると、二つの影がたっていた。片やローブを纏った小さい影、片や麻帆良学園中等部の制服を着たでかい二人組みだ。

「こんばんわ長瀬楓と龍宮真名……そして桐野銀次」

小さいほうに聞く。ローブの隙間から覗くのは金色の髪だ。銀次はふん、と鼻で笑い答える。

「ああ、こんばんわ。随分といい夜だな」

「ああ、満月が浮かぶいい夜だ……このような夜は……」

小さい影のローブに月の光が当り、

「『血』が恋しくなるな……」

「……同感だな」

互いに獰猛な笑みを浮かべる。ローブの下から覗いた顔……そこにいたのは六百年生き、『闇の副音』と呼ばれ恐れられた……、

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル……」

真名がポツリと呟く。そう、そこにいたのはエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルその人だ。ということは横にいるのは茶々丸だろう。

なぜ、かの人物がこのようなところにいるのか？それは……、

「ふふふ……なに、挨拶に来ただけだ……『挨拶』を……な」

「……その割には随分と殺気が溢れ出ているが……」

そう……エヴァは『挨拶』に来たのだ。しかし、その身体から流れ出る殺気は半端ではない。

「まあな……しかし、貴様はこれぐらいの挨拶がちょうどいいだろう？桐野銀次よ……」

「……ああ、それもそうだな」

銀次も殺気を放つ。二人の殺気が交じり合い、只ならぬ殺気が辺りを支配する。楓と真名は思わずあとすざりをした。それほど凄まじい殺気があたりを包んでいるのだ。

「楓、真名、……下がってる」

「いわれなくとも……」

「下がるでいじめるよ」

二人は素早くその場から離れる。凄まじい殺気もそうだったが・・・
・何より二人は『最強』同士の戦いを見たかったからだろう。
二人が離れたところに行つた所を確認して銀次はエヴァに向き直る。

「ほう・・・いいのか？大事なパートナー二人を退かせて？」

「ああ、問題ないさ・・・そういうお前らもいいのか？」

銀次はエヴァと茶々丸を見ながら聞く。

「ん？何がだ・・・？」

銀次の質問の意図がわからず、エヴァが聞き返す。銀次はエヴァたちを見ながら、

「学園長に聞かなかつたか？俺達に手を出したものは誰であろうと・・・その場で殺害されて、文句が言えないってな」

「・・・くつくつくツ！！貴様はやはり面白いな桐野銀次」

銀次の言葉にエヴァは本当に面白そうに笑う。それもそうだ、今までなら真祖の吸血鬼、『闇の副音』と恐れられ、数多くの魔法使いが襲いにきて、返り討ちにしたことがあるが・・・余裕も、焦りも、何も感じさせず。ただ邪魔な者は何であろうと排除するといった男と会つたのは・・・エヴァは何年ぶりだろうか？もしかしたら初めてかもしれない。

「さあ、始めようか桐野銀次！！『化け物』同士の戦いだ！！」

「おう！！行くぞ！！」

世にも奇妙な忍者と吸血鬼の戦いが、いま始まる!!

「茶々丸!! 引きつける!!」

「イエス、マスター」

エヴァが後方に飛び下がり、その入れ違いのように茶々丸が銀次の前に現れた。『魔法の従者』現在は恋人探しの口実にされているが、以前は強力な魔法を放つ際に呪文詠唱中の隙を守るための道具とされた。エヴァも以前はチャチャゼロを使っていたが、学園の結界によつて魔力を封じ込められているため、今ではその妹に当る茶々丸を使っている。

・・・そして、今のように従者を前に出させ自分が下がるといふことは・・・、

「魔法を使つてことかよ・・・」

銀次は目の前の茶々丸を見据えながらエヴァの様子を窺う。どうやら魔法詠唱しているようだ。すぐにでも止められるが、

「まずは目の前の障害を排除だ・・・『手刀・拳』」

「!?!」

右腕の肘の辺りまでを覆う漆黒の籠手。対する左手は肩口まで覆う

純白の籠手。『近接戦』に主眼を置いた完全形変体刀の一本だ。目の前に迫って来る茶々丸はどうやら素手のようだ。銀次も素手で対抗しようと思ったが、茶々丸は特殊合金やらの金属の塊。いくら銀次でもそんなのを素手で殴れば骨が砕けてしまふ。だから、

「悪いが、刀を使わせて貰うぞ」

「・・・一向に構いません。それではいきます」

茶々丸が突っ込んでくるところを、銀次も構えて迎撃体勢に入る。その構えは古との戦いで見せた構えではなく、ボクシングのサウスポーのように構えている。

「シッ！」

「!?!」

右腕のジャブ。そのスピードは拳銃弾を軽く越える。しかし、さすがは茶々丸。眼球から入ってきた映像を瞬時に分析して避ける。しかし、そこで止まるはずがない。

「まだまだアッ!!!」

シユシユシユシユシユツ!!!!!!!!

今度は左手も混ぜた左右の正拳突きをまるでサブマシンガンで打つかの如く、連射する。茶々丸は驚いたように避けまくる。

「ッ人間とは思えない速度ですね。これに当ればおそらく全身が砕け散るでしょう」

「ああ、何せ俺は『殺す』気でやってるからな」

銀次はさらりと答える。先ほど言ったとおり、銀次は茶々丸とエヴァを殺そうしている。先ほどから拳のスピードも速くなってきている。茶々丸も避けるので精一杯……のように見えた。するといきなり頭上に大量の瓶がばら撒かれる。

「茶々丸離れる！！来たれ氷精 大気に満ちよ 白夜の国の凍土と氷河を 氷る大地！！」

突然のエヴァの声、茶々丸は即座にその場から離れる。銀次はその場に留まったままだ。

ズゴンッ！！

地面が、凍る。比喻ではなく、地面から生えるかのように氷が出る。それはまるで氷河のようだ。

「ふん……これで終わりか」

やり過ぎたか？とも思わず、エヴァは『氷る大地』で氷りまみれになった地面を見る。そこには銀次の姿は……見当たらない。

「む？いないだと……？まさかふっ飛ばされ「マスター！離れてください！！」……!?」

ボオウツ!!!!

エヴァが先ほどまで立っていたところに灼熱の炎が巻き起こる。まさに間一髪。あと少し飛び遅れるのが遅かったら、丸焼き……いや、『消し炭』になっていたであろう程の焔が巻き起こった。

「お？惜しいな……もう少して消し炭に出来たのに……」
「貴様……!!!」

木の陰から……銀次は現れた。あとき銀次は氷る大地が来た際に飛び下がり、木の陰に隠れたのだ。そして、エヴァが油断して近づいてきたところを……、

「まさか燎原炎波れいげんえいばが避けられるとは思ってなかったな……今までの奴らならあれですぐに消し炭なのだが」

銀次は両腕に持っている二刀を軽く振りながら答える。その両腕に握られているのは……、

「な……んだ？その刀は……？」

エヴァが二刀を見ながら聞く。ただの二刀なら別に大したことはない……が、これは『変体刀』普通なわけではない。

銀次の手に握られている変体刀は刀身を始め、鍔、柄、すべてが真紅に染まった二振りの刀……、

「『赤刀・焰』・・・『灼熱』に主眼を置いた刀でな。常に高熱を発している鉱石を元に作られた・・・ゆえに」

銀次は赤刀の話をして右手に持った刀で木に突き刺す。すると、

ポウツ！！！！

「「！？」」

木が、燃え上がった。普通、木が燃え上がるにはかなりの時間が掛かる。しかし、この赤刀で突き刺した木はものの数秒で燃え上がってしまったのだ。そして、十二、三秒だろうか？それぐらいで木は『消し炭』になってしまった。

「・・・なるほど、あまりの高熱でどのような物体も焼き尽くしてしまうというわけか」

「その通りだ」

エヴァは思わず戦慄する。過去に何度か火あぶりに成りかけたことが幾度かあった。しかし、この刀はどうだ？少し、ほんの少し木に突き刺しただけなのに、木は跡形もなく燃え尽きてしまってるではないか。

すると、茶々丸がありえないような言葉を吐く。

「マスター・・・あの刀の温度を計測したところ・・・軽く1万を超えています」

「……………なに!？」

茶々丸が先ほどから静かだと思っていたが、サーモセンサーで赤刀の温度を測っていたらしい。

千、いくら吸血鬼でもそれぐらいの火で炙られ……いや、燃やされたら一溜りもない。

「さて……それじゃあ続きをしようか？」

「……………」

「……………」

エヴァと茶々丸が戦慄しているところを、銀次は刀を軽く振りながら二人に近づく。が、

「……………つまらん……………」

「……………なに?」

いきなり立ち止まると、そんなことを言い出した。エヴァも急にそんなことをしてどうしたのか?と思い、思わず聞き返してしまった。銀次は赤刀を両腰に差してある鞘に収め、顎に手を当てながら、何やら考えている。

「先ほどの攻撃はなかなかよかった。しかし、魔法薬に頼っている部分もあったものだから威力は通常よりも下だろう。おまけにお前さん自体が結界で魔力を封じられているからさらに威力が下がっている」

銀次は自分の顎を左手で撫でながら淡々と話す。しかし、そこにはエヴァが引つかかる言葉があった。

「ちょっと待て……結界とはなんだ？」

「ん？なんだ知らなかったのか？この学園に張り巡らされている結界があるだろう？あれはお前さんの魔力を封じるための結界なんだぞ？」

動力は電気らしいぞ、と言いながら、銀次はエヴァを見る。エヴァはと言うと驚いたように銀次に問いかける。

「なに！？そ、そうなのか！？私はサウザントマスターの呪いで魔力が……！！」

「『登校地獄』だろ？あれは『学校に行かせる』魔法であって『魔力を封じる』魔法じゃない。大方、昔の魔法教師か誰か不登校の生徒用に考えた魔法だろうが……まったく持って下らない魔法だな」

登校地獄は学校に行かせる魔法であって、決して魔力を封じるための呪いではないのだが……。どうやらエヴァは勘違いしていたらしい。

「そ、それじゃ……私が今まで魔力が封じられていたと思っていたのは……」

「ああ、サウザントマスターの呪いではなく結界による封印だったというわけであり、まったくの勘違いだった……というわけだな」

エヴァがその場にorzポーズをとる。茶々丸はそれを無言で慰める。そのエヴァに銀次が言葉をかける。

「さて……、なぜ戦闘中にこんな話をしたかだが……エヴァンジェリン。その結界と呪いを今すぐ解けるとしたらどうする？」

「なん、だと……？」

エヴァが目を見開きながら銀次を見る。

「だから俺がお前に掛かっている結界と呪いを解いてやろうかと言っているのだ」

「ふ、ふざけるな！結界はともかく、魔力がほとんどない貴様にこの呪いが「解けるぞ？ものの数秒で」……なんだと？」

サラリと答える銀次に、エヴァが聞き返す。

「俺は数ある変体刀と言う刀を使うことができな……そのほとんども人を殺すことを目的にした刀だ……だが、中には人を『治す』ことができる刀もある。もちろん呪いを解いたりできる刀もな」

そういつて、銀次は右腕を前に突き出し、呟く。

「『祝刀・癒』」

その言葉に呼ばれ、でてきた変体刀は……刀身から鍔、柄、鞘までもがすべて純白に包まれた美しい純白の刀。

銀次はその祝刀と呼ばれた刀を見せながらエヴァに説明する。

「この祝刀は『祝福を与える』ことに主眼を置いた刀でな。これで切り裂かれるとたちまちに傷が無くなる。さらに他にも呪いや封印といったものも消す力を携えている……だから」

銀次が瞬時にエヴァの背後に回りこみ、祝刀で斬り付ける。

ザシュツッ！！

「!?」

「マスター！！」

エヴァはいきなり背後から斬られた衝撃に驚き、茶々丸は自分のセンサーに反応しなかったことに驚いている。
しかし、血は出ていない。

「……なぜだ？斬られたと言うのに傷がない……なっ!？」

「マスター……!」

エヴァが斬られたところを触りながら確認していると、急に身体に魔力が満ちてくる感覚が蘇ってきた。茶々丸も、エヴァの魔力が上昇しているのを確認している。

「ふ、ふふ!!力が……力が漲ってきているぞ!!は、はっはは、はははははははッ!!!!!!!!!!!!!!」

「マスターの魔力がどんどん上昇していきます」

「おうおう、そいつはよかった」

高笑いを浮かべながら、エヴァは空を飛ぶ。茶々丸はそれを眺めている。銀次はそんな二人組みを見ていた。すると、エヴァが降りてきて銀次に頭を下げる。

「まずは桐野銀次よ、礼を言おう。お前のおかげで魔力が戻ったからな」まあ、それはいい。とにかく始めようぜ」・・・ほほう？」

エヴァの言葉を遮り、銀次が戦闘の続きを促す。それを見て、エヴァが目細めながら聞く。

「いいのか？封印と呪いを解いてくれたことには感謝するが・・・今の私は魔法薬なしであれ以上の威力のある魔法を放てるのだぞ？」

「別に構わんよ。さっきの呪いや封印を解いたのだからって気まぐれだ。『接待好き』の悪ふざけだと思え。・・・それに言っただろ？俺に、俺の仲間に手を出したら・・・殺すと」

それを聞いてか、エヴァがまた高笑いする。

「くくくっ！やはり貴様は面白いな桐野銀次・・・よからう！封印を解いてくれたお礼として私が全身全霊で貴様のことを『殺して』やろうっ！」

「ああ、そうしようぜ・・・さあ、」

「殺し合いの始まりだ!!」

忍者と吸血鬼の真の戦いがいま、始まる。

〳〵その頃の楓と真名〳〵

「ん？エヴァンジェリンの魔力が急に上がったな・・・なぜだ？」

森の中、楓と真名が先ほどまで銀次とエヴァンジェリンの戦いを観戦していたのだが、急に侵入者が入り、急遽出張ってきたのだ。

「やれやれ・・・弱いくせにぞろぞろと・・・って、真名どうしたでござるか？」

真名がエヴァの魔力が急に上がって不思議に思っているところに、両手を真っ赤に染めた楓が近くに降り立った。

「おう楓・・・って、お前ももう少し綺麗に出来なかったのか？」

「いやいや、拙者の『銀次殿から』頂戴した変体刀は『使い捨て』を目的に作られているモノだから、あまり無駄にはしたくないのでござるからな・・・。それにそれを言うのなら真名もそつでござるつ」

何やら『銀次殿から』の部分がやたら強調されていたように感じる

が……まあ、いいだろう。と、真名は思いながら辺りを見回す。辺りには煙を放つ木や地面、そして振り返り血を浴びた地面だ。今回侵入してきたのは西の陰陽師で三人ほど……。その陰陽師も二人は地面で冷たくなっている。残っている一人は楓に両肩を、真名に両足をやられて地面でイモムシのように悶えている。証人は一人でもいれば十分だ』という理由で銀次が次々と敵を殺していたためか、楓と真名もそれを実行している。

「私が『銀次さんから』貰った変体刀は『精密性』に欠けているからね。でもその分『連射性と速射性』が上がって『威力』も上がったよ」

スチエツキンはマシンピストルで、ストックなし片手撃ちというものもあってか『精密性』に欠ける。精密性は持ち主の腕前に左右される……。が、その分『連射性と速射性』が補われ、さらにはM29により『威力』が上がった。そして、真名も『銀次さんから』の部分を強調して言った。

「……真名」

「……楓」

二人の間に見えない火花が散る。互いに銀次から貰った大事な（血に濡れている）変体刀を握り締める。そして互いに動き出そうとした瞬間、

ズゴオオオツ……

「・・・・・・・・」

急に響く爆発音に、互いに突っ込むような体勢で止まる。その音源は銀次とエヴァが戦っているあたりだ。

二人は突っ込む体制を止め、

「こんなことしないで早く銀次殿さんの戦いを見に行くでござる（行こうか）」

侵入者を両手足が使えない状態でその場に放置された。二人にとっては侵入者が何をしようが構わない。銀次と一緒に入れればそれでいいと思っているからだ。

そして、二人がその戦いを見て戦慄する。その人知を超越した戦いに・・・・・・・・。

第十二話（後書き）

・・・やってもうた。エヴァの呪いを解いてしまった銀次！！はたしてどうなる！？でも後悔しない！！

次回決着！！はたしてどちらが勝つか！？次回をご期待ください！！

最後にオリジナル変体刀案をくれたふかやんさん、完全怠惰宣言さん、そして学校の悪友ありがとうございました！！

第十三話（前書き）

どうも銀閣です。

今回でエヴァ戦終了です。今回はちょっと難産だった・・・。。という戦いにしてどのようにならされるか悩みましたが、みなさんに気に入ってもらえると嬉しいです。

それではどうぞー！

第十三話

くく森林近くくく

夜。静寂が包むその空間を、ある二人の『化け物』が交差する。

「魔法の射手 連弾・氷の百矢!!」

「『守刀・鞘』」

エヴァが放つ魔法の射手を銀次は守刀・鞘で防ぐ。『守る』ことに主眼を置いた変体刀で、その形状は肉厚な刀が二本鎖で繋がっており、いざとなれば組み合わせて盾としても使える。絶刀に次ぐ強度はあるも、折れないとは限らない・・・が、いくらエヴァの魔法の射手なでも傷一つ付けられない。

「ちい・・・!!それは反則ではないか!?!」

「いいんだよ勝てれば・・・、いくぜ『爆刀・鐘』」

一旦、守刀をその場に置き、銀次は新たな変体刀を取り出す。それは岩を削ったような大剣とその峰には、巨大なモーニングスターが付いている。そして、爆刀を振り上げ、

「爆刀・鐘 限定奥義『天墜破撃』!!」

刀を振り下ろす。振り下ろされた勢いでモーニングスターも振り下ろされる。

ズンッ！！！！

元々が巨大な大剣とモーニングスターであつたため、その威力は半端なものではない。地面は捲り上がり、捲れたコンクリートの下からは土が覗いている。しかも、そこで攻撃が止まるはずがない。

「まだまだア！！」

「うお！？」

ズドン、ズンズンズンズンズドンッ！！

爆刀を連続して振り下ろす。神速で連続的に斬撃を振り下ろす。刃はもちろん、モーニングスターと鎖による波状攻撃で攻める。これが、爆刀・鐘の限定奥義『天墜破撃』だ。

「ちい……！！茶々丸！！」

「はい、マスター」

いつの間にか銀次の後ろに回りこんでいた茶々丸はガシャツという重たい金属音を構える音が聞こえた。銀次はチラッとそちらを見ると、

「……マジで？」

思わず頬が引き攣る。その茶々丸の手に持たれていたものは……、
「装弾完了……撃ちます」

銃身を六本持ち、7.62ミリNATO弾を毎分6000発放つ通
称『べいんれす Painless がん gun（無痛ガン）』の異名を持つ、

「ミニガンなんてどっから取り出した!？」

「禁則事項です」

銀次のツツコミをスルーしながら、茶々丸はミニガンの引き金を引く。

ブオオオオオオオツ!!!!!!!!!!!!!!

毎分6000発。毎秒に計算すれば100発の弾丸を吐き出すミニガンの銃声は、銃声というより獣の咆哮といったほうがしっくりと来る。

銀次が立っていた辺りは、たちまち砂煙で見えなくなる。しかし、茶々丸は攻撃を止めずに撃ち続ける。

「そのまま続ける茶々丸!!リク・ラクラ・ラックライラック 来れ氷精 闇の精!! 闇に従え 吹雪け 常夜の氷雪 闇の吹雪!」

ズガガガガンツ!!!!!!!!!!!!

7・62ミリと真祖の強力な魔法攻撃。通常ならもう跡形もないだろうが……、砂煙の中から声が聞こえた。

「『拒刀・盾』限定奥義『飛刀乱舞』」

その刹那、砂煙の中から多数……いや、大量の刀が飛んできた。

『拒刀・盾』賊刀・鎧の完成一步手前で作られた変体刀。見た目は盾だが、賊刀にもあつた機能『受けた衝撃を外に逃がす機能』を備われている。また、内部に別の変体刀を仕込み、それを打ち出すこともできるため、今回は千刀・ツルギ……完成形変体刀の一本だ。それを打ち出す。こちらを受ければ一溜りもないが……、

「魔法の射手 連弾・氷の三百矢!!」

「迎撃します」

悪の魔法使いとその従者。この二人とて普通ではない。エヴァは魔法の射手で千刀を打ち落とす。茶々丸は飛来してきた千刀を二本掴み、その二刀で飛んでくる千刀で払い落とす。

ガガガガガガギン、ガギン!!

「さすがだなア!!ならこれはどうだ!!『斬刀・鈍』」

完成形変体刀十二本が一本『斬刀・鈍』。銀次がもつとも得意とする変体刀の一本だ。
銀次は腰の帯に斬刀を佩び、茶々丸の下へと駆ける。まずは茶々丸を潰す算段らしい。

「近接戦に持ち込みます」

茶々丸も両手に千刀を握り突っ込む。銀次はそれを待っていたかのように、

「……零閃」

「!?!」

シャリンツ!!

響く金属音。茶々丸はその金属音の最初の音で嫌な気配……プログラムではない何か警告音を出し、その場から飛び離れる。しかし、それでは遅い。銀次は避けた茶々丸を見ながら言う。

「……今のを直撃しなかったのは褒めるぜ……だが」

ガシャンツ!!

「これが実戦だったらお前さんは死に体だぜ？」

茶々丸は切り落とされた右腕を見て驚愕する。それは驚くべきことだった。機械でできた彼女にとって人間の抜刀した瞬間が見えないはずがない。・・・しかし、相手は普通の人間ではない。

「抜刀したところが見えませんでしたかなぜでしょうか？」

茶々丸の戸惑いを含めたその声に、銀次は答える。

「零閃は高速に抜刀・納刀を行う神速の抜刀術だ……。だが、あれぐらいで驚いてもらっては困る。なんせ零閃の最高速度は……。光を越える」

「光速の・・・抜刀術」

不可能だ。茶々丸はそう思った。人間の身体でそのようなことすればバラバラになるのは目に見えている。機械の自分でもそんなことできないのにそう思った。・・・しかし、目の前の男ならやりかねないと思うのはなぜだ？そんなことで動きを止めていると、

「おい桐野！！私のことを忘れて貰っては困るぞ！！魔法の射手連弾・氷の十八矢！！」

「忘れてねエよ！！零閃編隊――十八機！！」

ガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！！

銀次の後ろから魔法の射手を連射するエヴァ。その矢には手加減など込められていない。まさしく殺そうとしている矢だ。しかし、銀

次も銀次。零閃を放ち、それを迎撃する。そのうちに茶々丸はその場から離れ、エヴァの横に立つ。

「・・・さすがは真祖の吸血鬼だ。今の矢はまさしく殺す気で放ったのがよくわかったぜ？」

「ふん、そういう貴様もなんだあの技は？抜刀したどころか、魔法の射手を打ち落とすとは・・・化け物か？」

それはお互い様だ。といいながら銀次は笑う。エヴァもそれもそう。だ。といいながら笑う。そこで銀次はあることを指摘する。

「しかし、いいのかい？お前さんの大事な従者は右腕が無くなっているようだが・・・戦えるのかな？」

そうだ。銀次が指摘したとおり、茶々丸は先ほどの零閃で右腕を斬り飛ばされたのだ。さらに銀次がその気になれば『分解』なんて朝飯前だ。

「ふんそのことか・・・なら心配しなくてもいいぞ。もうすぐ・・・」

「!？」

急に、背中から殺気を感じ、絶刀を取り出し、

ガキャンッ!!!

受け止めた。

「……………替えがきたぞ」

「ケケケケツ！！！」

「ちい…………マジかよ？」

さすがの銀次も冷や汗を流しながら後ろから襲ってきた人間……いや『人形』を見た。それは、エヴァがこの麻帆良学園に入る前に主従関係を組んでいた人形…………チャチャゼロだ。

「ヒサシブリニ、御主人ノ魔力が戻ッテ魔力の配給ガキタト思ッテ来テミレバ…………オモシロソウナコトシテンジヤネエカ！！！」

「うおっ！？」

ガギンツと金属音を鳴らしながら、二人は離れる。しかし、両手に巨大なナイフを持ったチャチャゼロは攻めに入る。

「イヤッホ……………ッ！！！！！」

「……………あんなに楽しそうなアイツは久しぶりに見たな」

「姉さんはかれこれ十五年も動けませんでしたから……………それででしょうね」

自分よりも自由に動けなかった者がいたことに何気に反省するエヴァだった。

その間も、銀次とチャチャゼロの斬り合いが続く。

では目に追いつけないほどの早さだ。
すると、銀次はいきなり漆黒の刀をチャチャゼロ目掛けて投げる。
チャチャゼロはもちろんそれを避ける。

「オツト残念!!」

隙を突いて投げたのだろうが、チャチャゼロはそれを見事に避けて
隙だらけになった銀次に斬りかかろうとしたが、

「いや、大成功だ」

銀次が不適な笑みを浮かべる。チャチャゼロはなぜかわからなかつ
ただが、

「チャチャゼロ後ろだ!!」

「ノワツ!?!」

エヴァの声が聞こえ、背後に嫌な気配がしたためチャチャゼロはそ
の場で身を翻す。バク転の要領で宙返りを行う。すると、先ほどま
でチャチャゼロの立っていた背中の中ちょうど心臓部のところを、

漆黒の刀が通りすぎた。

いったいどういう原理で? どういう仕組みでその刀が通り過ぎたの
かはわからないが、とにかく避けなかつたら串刺しになって居たの
だけは確かだろう。

「ほう・・・今のを避けるか」

「危ネエ危ネエ。モウ少シデ串刺シニナルトコロダツタゼ」

「チャチャゼロ!!一旦そこを退け!!氷爆!!」

「うおっ!?!」

ドゴンッ!!

氷を大気中に出現させ、一気に爆発させ凍気と爆風で攻撃する呪文。銀次は慌ててその場から飛びすぎる。爆発のせいで霧が立ち、辺りは一面真っ白になった。

銀次は咳をしながらその煙の向こうにいるであろうエヴァたちの方
向に視線を向ける。

「ちっ……こいつは驚くほどの威力だな……少し見くびって
たぜ」

霧は一向に晴れない。銀次が辺りを警戒していると、背後から声が
掛けられた。

「こちらだ。桐野銀次」

「っ!!」

背後からかけられた声。それは先ほどから対峙しているエヴァであ
ることがわかった瞬間、銀次は絶刀を取り出し、背後に切り下ろす。

ガキャンッ！！！！

目の前に迫るは光を棒状・・・いや、剣状に固めた光の剣。それはエヴァンジェリンが得意とする近接戦魔法の一つでもある。

「断罪の剣か・・・！！」

「ほう・・・よく知っているな」

銀次の目の前では絶刀と火花を散らしながら鏢迫り合いをするエヴァの断罪の剣。互いに片手、しかし互いに人外のような力を有しているため互角だ。

「ふんっ！！」

「はあっ！！」

ジャリンツ、と互いに離れ、にらみ合う。エヴァが宙に浮き、銀次が下から睨む。まるで竜虎の戦いのような絵だ。すると急にエヴァが笑い出す。

「ふふふ・・・ここまで手こずるのは何年ぶりだろうな・・・。

あのナギのとき以来か？」

昔を思い出すように・・・実際思い出しているが、エヴァは600年生き残った最強の吸血鬼。エヴァと対等に渡り合える魔法使いは一世紀に一人いるかないかだ。それも『魔法使い』限定であり、

「魔法を使わない人間・・・ましてや忍者であり剣士の貴様に手こ

「ずったのは初めてかもしねん」

「そうかい・・・そりゃどうも」

銀次はエヴァに集中しながら神経を研ぎ澄ます。・・・遠くからいくつかの人間がやってくる気配がわかった。エヴァもそれに気付いたらしく、舌打ちをかます。

「ちっ・・・ジジイ共め。人の楽しみを邪魔しておって・・・」

「空気を読めないのも”正義の魔法使い”・・・だろ？」

「ぶっ、確かにな」

軽く噴出しながらエヴァも答える。しかし、すぐに顔を引き締め、銀次と対峙する。

「それでは・・・そろそろ」

「ああ、決着をつけるか・・・」

銀次は絶刀をしまい、両腰に差したままの赤刀・焰に手を掛ける。赤刀は鞘に収めることにより熱を溜めることができるのだ。その抜刀から繰り出す焰は相手を『焼く』のでもなく『溶かす』のでもなく、『蒸発』させるのだ。対するエヴァは断罪の剣の出力を最大にして構える。

「赤刀・焰限定奥義！！」

「来るがいい、桐野銀次！！」

互いに、突っ込む。銀次の赤刀はすでに太陽をも凌ぐ熱を放ち、エヴァの断罪の剣はその一振りで山を崩すかのような大きさとまでなっている。そして、

「燎原炎波りょうげんえんは!!」

「エクスキューショナーソード!!」

決着が、つく。

〳〳その頃の楓と真名〳〳

銀次とエヴァが戦闘している少し離れた学校の屋上。そこでは楓と真名が観戦していたが……、

「……」

「……」

絶句していた。二人とも似合わなず口を開けながら二人の戦いを見ている。真名が楓に聞く。

「……なあ楓」

「……なんでござるか？真名」

「……銀次さんは戦車か戦艦かい？」

真名がそう思うのも無理はない。目の前では銀次が刀を振るって捲りあがった地面。そしてミニガンと闇の吹雪でぼろぼろになった壁。拒刀から発射された千刀に針のむしる状態になった地面と壁。そこからしばらくは斬り合いとが続いてはいるが……。

楓は真名の質問に素直に答える。

「……拙者も銀次殿と一緒に任務をしたとしても毎回後方支援でござったから……」

そう、銀次は楓を前線で戦わせようとしない。任務にこそ付いているが、大抵は後方支援ないし、コノ前のような逃げた残党狩りか隠れている敵の殲滅ぐらいだ。それには理由があるが……それはまたの機会にしよう。

「でも、銀次殿がかなり強いのは確かでござるよ……戦車20両と完全装備のゲリラ100人とともに戦えるでござるからな」

「……バクキャラだね」

生身で戦車と対等できるのはチートではないか?と思われる方も居ると思うが、それは変体刀を使ってこそその力なのであしからず。そんなやり取りをしていると、誰かが近づいてくる気配がした。

「む……真名」

「ああ……わかってるよ」

二人は擬似変体刀を持つ。楓はいつでも斬りつけられるように、真名はいつでも発砲できるように。そんなふう待ち構えていると、

「何が起きているのか教えてはくれんかの？二人とも」

二人の後ろに音もなく現れたのはこの麻帆良で一番の権力を持ち、
関東魔法協会の理事長である。

「これはこれは・・・学園長殿」

「いかがしたでござるか？」

二人は頭だけ後ろに向ける。二人の後ろに立っていたのは学園長近衛右衛門だ。そして、その後ろには高畑・T・タカミチだ。その後ろにも数人の魔法使い達・・・この前の襲撃に加わったガンドルフィーニなどもいる。二人は警戒する。

「もう一度聞こうかの。何が起きたのじゃ？」

「・・・なに、銀次殿とエヴァ殿が戦っているだけでござる。こちらの約定通りに・・・でござるよ」

楓が静かに答える。そう、約定通り。銀次は襲ってきたエヴァを殺そうとしている。すると、ガンドルフィーニがいきなり前に出てきた。その顔は怒りに歪んでいる。

「そんなことを聞いているのではない！！なぜエヴァンジェリンに掛けられた魔法が解かれているのだと聞いているのだ！！」

どうやら、エヴァの魔法が解かれていることにガンドルフィーニは怒っているようだ。楓と真名はそれに、

「さあ・・・？おそらく銀次殿が解いたのではござらんか？」

「その可能性はあるね」

二人は頷きながら答えた。銀次ならやりかねない・・・というかやりそうだ。しかし、ガンドルフィーニや他の魔法使い達は異論を唱える。

「そんなこと出来るわけ無いだろう！！あの男には魔力どころか気すらもないんだぞ！！馬鹿げたことを言うな！！」

「そうだ！！あのような男にできるわけがない！！」

「第一あの魔法を掛けたのはかの有名なサウザントマスターだぞ！！それをあのような男が・・・！！！！」

ギャンギャン騒ぐ『正義の魔法使い』たちを呆れた視線で見、楓は一言言った。

「まあ、別に信じるも信じないもお主らしだいでございますよ。拙者は銀次殿が解いたと確信しているでございますが・・・お主らには関係のないことでございますからな」

そういつて、また観戦に興じる。真名も一緒になって見始める・・・戦いも終盤だ。

「貴様ら・・・！！まだ話は・・・！！」

ドゴオオオオッ！！！！！！

「「「「!?!?!?!」」」」

響く轟音。そして飛び散る焰。その轟音もさることながら、飛び散る焰の量も凄まじい。飛び散った焰が建物を所々『蒸発』させてゆく。

「……どうやら決着がついたようでござるな」

「行ってみるか?」

もちろんでござる。といいながら、楓と真名はその場からいなくなる。瞬動によりその場から離れたのだ。

果たして結果はどうなっているか……??

~~~~銀次とエヴァが戦った森林近く~~~~

「……」

「……」

荒れ果てた道。先ほどの爆発で街灯、校舎の壁はドロドロに溶け。近くにあった木は蒸発して灰すら残っていない……まるで戦場のような惨状だ。

その惨状に一人の男が立ち、倒れている少女を見下ろしている。思わず知れた銀次とエヴァだ。

「……………さっさと殺せ」

エヴァがポツリと呟く。エヴァは身体の下半身が無くなり、左手も無い。普通ならすぐに再生するのだが赤刀の余熱でか、傷口はいまだ燃やされ煙を上げている。つまりは完全なる死に体だ。

対する銀次はからだのあちこちに裂傷が見られるが、大したものではない。唯一大きな怪我といえば斬り飛ばされた左手……しかし、これは『替え』を用意すれば何とでもなるので実質的な被害はほとんどない。

エヴァの言葉に銀次は感嘆の息を漏らす。

「ほう……さすがは闇の福音殿だ。だてに悪を名乗っていないな」

「私は誇りある悪だ。いずれは同じ悪に滅ぼされることぐらい覚悟している」

「それはそれは立派な心がけで……………」

銀次もエヴァの誇りある悪には賛同できる。銀次も何かを犠牲にして戦うのが普通だと思い、いずれは同じような人間に殺されるだろうと思っっているからだ。

銀次は絶刀を取り出し、エヴァに突きつける。

「さて……………なかなか楽しかったが、貴様は約定に反した。つまりは殺されても文句はない……………わかってるな？」

「ああ、それぐらいわかっている。さっさと殺せ」

エヴァのその潔さに感嘆しながら、銀次は絶刀を振り上げ、振り下ろそうとした……が、

「待つて……下さい」

「待テヨコノヤロウ」

止められた。さすがの銀次も驚き声のしたほうを向くと、そこには下半身が焼ききれた茶々丸と身体の右半身が燃えているチャチャゼ口がいた。

「ほほう……これはまた主人思いの従者じゃないか」

「お前ら……」

エヴァもそちらを驚いたように見ている。茶々丸とチャチャゼ口の二人は這うようにエヴァと銀次に近づいてくる。

「……殺させはしません……決して……マスターを殺させはしません……!!」

「御主人に生キテテモラワネエト、俺は生キラレネエシ……ソウナツタラ人八斬レネエシツマラネエ……ソレニ、御主人トハマダ一緒ニ居タイカラナ」

両者の目には明らかに『物』が持つものとは違う『光』が宿っていた。それを見た銀次は興味を引かれる。そしてさらに気付いたことがあった。



「（ふむ・・・別にここで殺してもいいが・・・。それをしたら原作が変わるかもしれない。それはそれで楽しそうだが、あまり未知なことはしないほうが今後のためにもなるだろう・・・それじゃあ）」

銀次はそこで絶刀を仕舞う。それを見たエヴァや茶々丸が驚いたように見る。

「貴様・・・どういつつもりだ？」

「いや、なに・・・さっきも言っただろ？ 『接待好き』の悪ふざけだと思え・・・それに」

そういうと、また新たな変体刀を取り出す。

「『闇の福音』に恩を売れるんだ。助けるのもまた一興だろう？ 『治刀・癒』」

「貴様・・・」

取り出した『治刀・癒』でエヴァの身体に触れる。この治刀は青空のように澄み渡った青色をしている。見た目はただの籠手で戦闘力はまったく持っていないのだが・・・この刀は『治癒』に主眼を置いた刀のため戦闘力は必要ないのだ。エヴァに当たった治刀はエヴァの身体に纏わりついている赤刀の熱を奪い、傷を癒していく。あとは勝手に回復するだろう。

「さてと・・・これで終り・・・と。茶々丸やチャチャゼロは済まないが俺の専門外だから、専門の奴に任せろ」

「……すまんな礼を言おう」

「ふん、言つたる？ただの悪ふざけさ」

かなりの大盤振る舞いではあるがな。といいながら、銀次はあたりを見回す。斬り飛ばされた腕を探してようだが……おそらく蒸発して灰すら残っていないだろう。

と、そんなところに楓と真名が現れた。

「ん？なんだ楓と真名か。いったいどうして」「銀次殿！？どうしたでござるか（どうしたんだい）その腕！？」「……すごいシンクロだなおい」

二人は銀次に駆け寄る。いまだ血が滴る腕を二人はあたふたとしながらどうしようかと慌てている。

「あゝ、とにかく落ち着け二人とも。楓はいい加減慣れる。過去にもいくらがあつたらうが……」

「そ、そうでござるが……やはり……」

確かに楓は銀次が任務でよく手足をなくすことがあるのは知っている。主に護衛任務で失くす事がおおい。でも、やはり慣れないらしく。

「そ、それでも！銀次殿はもう少し自分の身体を大事にして欲しいでござるよ……！」

「わかつたわかつた……次からは気をつけるからそう怒るな……」

楓の頭をポンポン撫でながらあやす。真名もそれを羨ましそうに見ている。銀次はそんな真名の視線を感じてか、

「真名も心配してくれてありがとうな」

「……」

楓の頭から手を離し、今度は真名の頭を撫でる。真名はくすぐったそうにそれを受けている。楓はなにやら不満顔になったが……。

「……桐野。腕はいいのか？」

「ああ、忘れてたでござる!!」

「どうすればいいんだ!？」

「……せつかく話を逸らしたのに戻しやがって……」

「ふん、意趣返し……とでも言っておこうか？」

また二人はあたふたと慌てだす。銀次はエヴァを睨むも、それをどこ吹く風かと流しながら茶々丸とチャチャゼロのところへと向かう。銀次はため息を一つついていまだ慌てている二人を静めようと近づいた。そして、一言呟いた。

「あゝ、めんどくさい」

そういうも、彼の顔には微かな笑みが浮かんでいるのに誰も気付かない。そのとき、

「？」

何か、見られているような感覚に襲われた。しかし周りには何も見当たらない。気のせいかと思い、銀次は二人を静めるために歩く。

〳〵離れた校舎屋上〳〵

銀次とエヴァの戦いから離れた校舎の屋上。そこに全身を覆うコートを着た一人の女子が立っていた。

「……さすが銀次さん。『過去』でもやはり最強種ネ」

フードを被り、片言の日本語で呟く少女ははるか先で起こっていた戦いを見ながら呟く。少女は銀次を知っているかのような口ぶりだ。しかもかなり前から……いつたい何者だろうか？

「……私の計画にはどうしても彼と彼の仲間が必要不可欠ネ……どうする力？」

少女はそこで少し考えたもの……、

「まあ……いいネ。時間はまだタプリとアルヨ」

少女はその場で身を翻し、その場を去っていった。その、少し見えたローブの下から見えたのは、かなり太い鎖が見え、『忍び装束らしき』ものが見えた。

少女の姿はもう、見えない。

こうして、『闇の福音』ことエヴァンジェリンとの戦いに勝利を収め、恩を売ることができた銀次一行・・・しかし、これが原因でさらに『正義の魔法使い』たちに危険視されたのだが・・・彼らには関係ないことだ。

### 第十三話（後書き）

今回は以上です。書いているのが楽しく、危うく今回だけでなく次回も戦闘シーンを書くことになると思った……。でも何とか一話に収めたよ、うん。

さて、次回は日常に戻り、のんびりのほほんを書こうと思います。早く原作入りたいな。

最後に変体刀の案をくださった、おにぎりさん、めだか194さん、完全怠惰宣言さん、ふかちゃんさん。ありがとうございました！！

## 第十四話（前書き）

最近ハイポジションの動画を見るのにハマっています。

ども、銀閣です。今回は日常編をお送りします。

それではぶじぞ。

## 第十四話

くくエヴァとの戦いの三日後・桐野邸くく

今日も今日とて平和な桐野邸。この家の主である銀次も、今は家の縁側でお茶を、

「はーはっはっはっは！やはり力が戻ったとは何と素晴らし  
いことだー！」

「ケケケ。御主人八楽シソウダナ」

「ああ、マスターがあんなにも楽しそうに・・・録画中録画中」

「・・・なんでお前らいんの？」

飲もうとしながら、目の前の庭にいる三人組(?)を見ながら銀次は呟く。その横には楓と真名が銀次の両側に座って茶を啜っている。

「さあ・・・なぜでござろうな？」

「なんでだろうねエ・・・」

二人はなにやら銀次とは違つたため息をつきながら茶を啜る。その間にもエヴァの高笑いが響く。

「・・・本当になんでここにいんだか・・・」



エヴァの呪いと結界を解いた張本人は、茶を啜りながら呟いた。

〳〵三日前・学園長室〳〵

「貴様らは何をやったのかわかっているのか!？」

ダンッ!と学園長の机を叩くはこの前銀次に襲撃をかけ返り討ちにされたガンドルフィーニだ。頭に青筋を浮かべながら目の前の銀次に問いかけるも、

「え?なにが?俺戦闘以外した記憶ないけど?なあ楓、真名」

「うむ、そうでごさるな」

「特に何もしていなかったよ?」

銀次はシレッと何もしてないといい。楓と真名もそれに賛同。それを聞いたガンドルフィーニは額に面白いぐらい青筋を十本ほど浮かべている。ついだが、銀次の左腕は今のところ調達していないのでまだない。

「貴様らがやったことは戦闘もそうだが何よりエヴァンジェリンの呪いを解いたことだ!！」

さらにダンッと学園長の机を叩く。それを聞いて銀次はああ、と思いついたかのように手を叩く……ふりをする。

「そついえばそんなことしたな。悪ふざけで」

「なっ！？悪ふざけだと！？」

銀次の態度にさらに青筋を浮かべるガンドルフィーニ。銀次はそんなのも気にしないでうんうんと唸りながら右手で顎を撫でる。

「いや、ちょうど呪いや結界を解ける変体刀があったからな。あのまま潰したらつまらないと思って解呪したんだ」

さすがに苦戦したな。といいながら笑う銀次。その態度にガンドルフィーニのみならず、桐野銀次始末派の連中も切れ始め、罵詈雑言を銀次に浴びせる。

しかし、銀次はそんなのまったくもって気にしていないらしく。

「で？結局のところあんたらは何が言いたいの？空気読めない戦闘弱い口先だけの魔法使いさんたちは？」

「貴様っ！！！」

「ええ加減にせんか！！！」

銀次のからかい（もちろん故意）に噛み付こうとしたガンドルフィーニを見かねてか、学園長は一喝する。その一喝に一気に部屋が静かになる。

学園長はそこでため息を吐き、

「銀次君。済まんがなぜエヴァンジェリンの呪いを解いたか教えてくれんかの？」

「まあ、強いて言えば本当にただの悪ふざけさ。だってよオ、ほぼ最強種に当る吸血鬼。ましてや真祖の吸血鬼となんか滅多にお目に掛かれないんだぜ？是非とも戦いたくなるじゃないか」

「その最強種の私に勝ってしまったしな。お前のほうが化け物だろっ？」

学園長室にあるソファで湯飲みを口に啜えながら呟いたのは、先ほどの戦いでボロボロにされたエヴァンジェリンだ。銀次はその言葉を聴き、心外だなくといいながら否定する。

「おいおい、それはないんじゃないか？エヴァンジェリン。俺はこう見えてれっきとした「人間とはいわせんぞ。真祖の吸血鬼を倒し」として、ただの人間でと通すなど私が許さん！！」・・・つまりは負けたのが悔しいんだな？」

そうではない！！といいながら暴れるも、茶々丸に押さえられジタバタと駄々をこねる子供のようだ。銀次はそれを放置して、学園長に向きなおす。

「まあ、本当にただの悪ふざけだよ学園長。別にあんたらに幼女監禁の趣味があるなら、それはそれで訴えるけどな」

「・・・どういことじゃ？」

その言葉に学園長が反応する。まあ、いきなり幼女監禁趣味疑惑を付けられてはそう言わざる終えないだろう。だが、

「だってそうだろう？いくら馬鹿でかい魔力を込められた魔法だからといって、解くことができなくても弱めることぐらい出来たん

じゃねえのか？でも、あんたらはそれをしなかった。あまつさえ結界などというもので麻帆良の外に出そうとさえしなかった・・・これを幼女監禁趣味のほかは何と言えと？」

誰が幼女だ！と叫んでいる者がいるが、銀次はあえて無視を決め込んだ。とにかく目の前の学園長の反応を待つことにした。

「し、しかし、あの魔法を掛けたのはあのサウザントマスターのしらねえよ、んなこと。俺はそんなのを聞きたいんじゃないんでお前らは呪いを弱らせることをしなかったかと聞いてるんだよ」・・・

そこでダンマリを決め込む学園長。銀次ははあ、とため息を吐きクルリと扉へと歩く。

「ふん、まあ理由なんぞどうでもいい。俺はただ単におもしろそうだから解いただけであり、それ以上でもそれ以下でもないからな。じゃあな幼女監禁趣味共。帰るぞ楓、真名」

「あいあい」

「わかったよ」

三人はその場から帰ろうとした。だが、途中で銀次が立ち止まり、学園長・・・いや、部屋にいる魔法使いたちに向かって言い放つ。

「・・・今回は俺も楽しめたからエヴァンジェリンの命を奪わなかった・・・だが、もし次誰かが攻めてくるものならば・・・殺す」

これが、銀次が放った『最終警告』……しかし、その最終警告も聞かずに行動を起してしまう馬鹿がいるのは……学習能力がないとしかいいようがないだろう。

〃〃そして現在・桐野宅〃〃

「で？結局のところお前らは何でここにいるの？」

銀次は居間の机に直面しているエヴァに来た理由を聞く。エヴァは茶を啜りながら答える。

「いや、なに。改めて礼を言いにきただけだ」

「俺八才前ノ刀ヲ貰イニ来タンダ」

「やらねえぞ、クソ人形。……お前さんも律儀だね〃たかだか呪いと結界を解いただけで……」

チツツマラネエ奴ダ。と言いながらチャチャゼロは居間を徘徊する。どうやら、ちゃんと動けるのがよほど嬉しいらしい。

エヴァはふん、と言いながら言う。

「たかだかと言うがな、お前はまかりなしにもサウザントマスターの呪いを解いたんだぞ？もつと喜んでもいいんじゃないか？」

「生憎と、幼女監禁趣味の野郎の魔法解いたところで何も嬉しくね

えよ」

「また貴様は……！！誰が幼女だ！！」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」

「そういうことを聞いているんじゃないわ！！」

があーッ！！と噛み付くように言つても、銀次はズズツと茶を啜るだけだ。んで、と銀次は聞く。なお、銀次は昨晚襲つてきて楓と真名が始末した呪符使いの腕を『忍法命結び』取り付けているため、左手はある。初めてそれを見た真名は驚いていたが、説明して納得してくれた。

「礼を言いに来たとはいうが、別段俺は礼を言われるようなことをした覚えはないし、本気のお前さんと戦いから勝手に解いたただけだ。それ以上でもそれ以下でもない。」

だから気にすんな。と手を振りながら答える銀次。エヴァはそうか、と言って軽く頭を下げたあと茶を啜る。

そして、気になっていたことを銀次に問いかける。

「おい、桐野。聞きたいことがあるのだが」

「ああ？なんだよ？」

かったるそうに聞く銀次。エヴァは銀次のそんな態度も気にせず、聞く。

「お前が使っていた変体刀という刀……あれはなんだ？魔法具で

もない、かといって呪具でもない・・・600年近く生きた私も聞いたことも見たことも無い刀だ。いったいなんなんだ？変体刀とは・・・？」

「・・・なるほど。どうやらそつちが本題のようだな」

銀次はニヤリと笑いながら湯飲みを置く。そして変体刀についてエヴァに教えた。

「まず、変体刀はこの世界の刀じゃないし、魔法世界の刀じゃない・・・どちらの世界の刀でもない、すなわち異世界の刀だ」

「異世界だと・・・？喧嘩売っているのか貴様？」

「いや、これ本当」

エヴァの舐めてるのか？という視線を銀次は手を振りながら簡単に返し、そして続ける。

「刀工の名前は四季崎記紀・・・聞いたこと無いだろう？戦ったお前さんならわかると思うが、あれほどの名刀を打つ刀工が今の今まで姿を現さないわけないだろう？だとしたら異世界の刀工のほうがまだ納得いくだろう？まあ、一部には俺が作った変体刀もあるが・・・」

「・・・あれは刀なのか？」

エヴァが唸りながら考える。今までエヴァが見た変体刀は確かに刀といえるものもあれば刀には見えない変体刀も見た。確かにぱっと見は刀と言うにはあまりにも可笑しい変体刀もあるが・・・、

「普通の刀と違うから変体刀なんだろうが」

「・・・まあ、確かにそうだな」

『普通の刀』じゃないから『変体刀』確かにそうなんだろう。エヴァはそれで納得することにした。あまり根掘り葉掘り聞いても答えるとは思わなかったからだろう。

「なるほどな・・・ふむ、なるほど。よくわかったよ」

「ああ、それで？ほかに聞きたいことはあるか？」

「いや・・・もうないな。さて、帰るとするか。茶々丸、チャチャゼロ帰るぞ」

「はい、マスター」

「ラジャー、御主人。テカ、刀ヲ寄越、銀次」

「断る馬鹿人形。細切れにされたくないならさっさと帰れ」

チツ、と舌打ちをしながらエヴァの後ろを歩き、茶々丸の頭に飛び乗るチャチャゼロ。いくら、動けるようになったとはいえ、外ではそうそう動くわけにはいかないからだろう。

すると、エヴァがそうそうといいながら銀次に向き直る。

「お前の大嫌いな『正義の魔法使い』の一部のものだが・・・また貴様らに奇襲を掛けようとしてるらしいぞ？」



「……またか？あいつらも懲りない奴らだ……」

あそこまで徹底的にやったのにも関わらず、まだ攻めて来る相手にある意味敬意表したくなると思った銀次。その顔はうんざりという顔をしている。

エヴァはその顔を面白そうに見ながら話を続ける。

「ああ、しかもコノ前みたいに小規模ではなく大規模的に、学園にいる粛清を唱える魔法使いのほとんどが貴様らを襲うらしいぞ？」

それを聞いてピクリと反応する銀次。学園の粛清を唱える魔法使いは八割九割を占める。そんな大群の魔法使いたちとどう戦うのか？エヴァが興味半分に聞いてみるも、

「ふん、だからなんだ？あいつらが攻めてきたらこっちはそいつらを殺せばいい話だ」

こともなくサラリと言う銀次。以前に刹那にいったとおりの言葉を吐く。エヴァはそんな銀次を本当に面白そうに笑う。

「くくくっ、そうだったな。貴様は確かにそういう人間だったな。

まあ、そのときはゆっくりと高みの見物とさせてもらおうよ」

「するのは構わんが、あまり近くで見るとどう？あまり近くで見ると巻き込むかもしれないからな」

「そうさせてもらおう。それじゃあな」

そこで三人(?)は帰った。残った銀次と楓と真名はズスツと茶を啜る。しばらくそうして銀次はんー、と伸びをして立ち上がる。

「さて・・・俺はちょっと自室で寝てるから、あとは勝手にやってくれや」

「わかったでござる」

「何かあったら呼ぶよ」

銀次はプラプラと手を振りながら自室へと戻った。残された二人は特にすることもないので茶を飲み終え自室へと戻っていった。

〳〵銀次の部屋〳〵

「・・・」

銀次は自室の畳の上に座り、考え事を始めた。それは先ほどのエヴァの話だ。

「（うむ・・・相手が少人数ならどうにでもなったんだが・・・多  
いと少し困るな）」

もちろん、困るとは戦闘の規模が広がれば広がるほど、被害が増えるから・・・というわけではない。銀次にとってはそんなことどうでもいいのだ。問題は・・・、

「あの二人をどうするかだな・・・」

あの二人とはもちろん楓と真名のことだ。別に足手まといというわ

けではない。むしろ呼吸も合わせられる最高の二人だ。でも、だからこそ、大切な仲間だからこそ、護りたい。できるだけ前線には立たせたくはない。

「汚れるのは俺一人で十分だ……」

銀次は立ち上がり、部屋の中を歩く。そして、掛け軸の前に置いてある刀掛けに置いてある木刀を手取る。その木刀は見た目は普通の木刀だ。しかし、その峰からは素人目でもわかるほどの禍々しい『何か』が見える。銀次はその木刀を手にしながら呟く。

「俺は……同じ過ちは絶対にしない」

しばらくその木刀を眺めた後、銀次は木刀を置き畳みの上で横になり、睡眠をとることにした。

「（まあ、奴らを護るにしてもまずはしっかりと休むとしよう）」  
思考が深くなるにつれて、銀次は意識を手放す。そのまま深い眠りへとついた。

『正義の魔法使い』との大決戦は……近い。

## 第十四話（後書き）

今回はちょっと短かったかな？今回はタダたんに銀次とエヴァの話し合いをさせたかっただけです。あとは銀次と魔法使いたちとの話し合いでボロクソ言いたかっただけです。

さて、次回はまた日常編を書こうと思います。エヴァから得た『正義の魔法使い』たちによる大粛清、銀次はそれに対抗するために新たな変体刀を取り出すことに・・・どんな変体刀かは次回のお楽しみです！！

それでは次回！！

追伸・テストが近いため、もしかしたら次回の更新は遅れるかもしれません。

## 第十五話（前書き）

え、まずは一言・投稿遅れて申し訳ありません。今回は投稿が遅れたのでグダグダしてると思いますが、楽しんでいただけたら幸いです。

それではどうぞ。

## 第十五話

くくそれから五日後く

「おら、忘れもんはないか？二人とも」

「大丈夫でござるよ」

「問題ないね」

早朝、桐野邸の玄関にて。銀次は今から学校へと向かう楓と真名の見送りをする。これは毎朝の恒例である。

「それでは行ってくるでござるよ、銀次殿」

「行ってくるね銀次さん」

「おう・・・弁当はちゃんと持っただろうな？」

銀次は二人が弁当をちゃんと持っているか確認を取る。この二人、弁当忘れの常習犯なのだ。そのたびに届けに行く銀次も二人に甘いというか・・・うん、とにかく甘いだろう。

そんな銀次の質問に残念そうに、

「残念ながら今日はしっかりと持っているのでござる」

「そこは残念がるところじゃねえよ」

「あと三日は開けないとね・・・」

「行かないぞ？弁当置いていっても届かないからな」

さすがの銀次もそこまで面倒見切れないといっているが、それでも届けてしまふ。本当、二人に甘い。

「それでも毎回届けてくれてるじゃないか」

「銀次殿は優しいでござるからな」

「・・・さつさと行きやがれ」

クルリと回転して、銀次はズンズンと居間へと向かう。傍から見たら怒っているようにも見えるが二人はそれが銀次なりの照れ隠しだと理解していたらしく、クスリと微笑して家をでる。

「それでは行ってくるでござる」

「いってくるよ」

その問いかけに銀次は無言で手を振りながら答える。

〳〵桐野邸・居間〳〵

二人が出て行き静かになった桐野邸。銀次はさて、と呟き腕を組み考え事を始める。その考え事とは、

「相手は多人数・・・それなりに多いと思うが・・・」

そう、その考え事とは以前エヴァから得た情報である魔法使いによる大粛清……つまりは自分達を襲ってくる魔法使いたちへの対処だ。相手が少人数なら別に構わない。すぐに殺せばいい話だ。しかし、今回は違う。相手は大軍、それこそ蟻のような波状攻撃で攻めてくるだろう。そうなると楓と真名を護れなくなるだろう。

「（二人は……後方で控えさせるか？しかし、それでも何十人が攻められたら終わりだ……むう）」

どんなに雑魚でもこの麻帆良学園で鬼や悪魔相手に戦っている連中だ。それらの一斉攻撃を喰らえば……一溜りもないだろう。

「（やはり、結界系の変体刀で護りつつ……あっ）」

一通り銀次が考えていると、あることを思い出した。銀次はニヤリと笑い、

「ああ……そうか。『奴ら』を呼び出せばよかったのか」

そこで立ち上がり、銀次は庭へと向かう。

〳〵桐野邸・庭〳〵

「さて……と」

銀次は首を軽く回し、準備運動のようなものをしている。それらが終り、銀次は両目を閉じ、両腕を前に差し出す。この方法は銀次が大量の変体刀を取り出すときに使う方法だ。一振りならそれこそ一瞬で取り出す事ができるが、大量になるとこのように精神を集中さ



せていないと取り出すのに苦労するのだ。

「……………」

統一。周りの音も、空気も、空間も、銀次に合わせるかのように統一されていく。そして、

「……………」

一言呟く。辺りに軽い光が走り、そこからいくつもの影が現れ、

「よう……久しぶりだな……お前ら……そして初めまして」

目の前にいる影……いや『変体刀』たちに再開と初会合の挨拶を済ませる。

このうちの何体かが原因で、この数時間後に激しい小競り合いが起きるのは……誰も知らない。

くくその頃の麻帆良学園くく

「……………ハッ!」

それは楓と真名が授業を受けていたときのこと……いきなり何かの気配を感じたのだ。別に命の危険などといった物ではないのだが……なにやらこつ……嫌な予感がしたのだ。

「(真名……)」

「(楓……お前もか?)」

「(うむ……なにやら拙者のリーダーに反応した感じがして……)」

「(私もだよ楓……何かあったのかな?)」

二人は素早くアイコンタクトを取りながら会話をする。この二人、こと銀次が関係するとこのように獣なみのカンが冴え渡る。とくにこのカンの触り方は……、

「「(銀次殿ぎんじだんの近くに女がいるような気がする(でいじわる)」」

それはもはや確信に近く、二人は落ち着かなかった。

「(まさか銀次殿が家に女子を……? いや銀次殿に限ってそれは……)」

「(ああ、あるとは思えないから……押しかけか?)」

近いようで近くない考えをする真名。しかし、やはり違うような気がする。二人はしばらく考え……、

「「(よじっ)」」

今は二時間目の授業が始まる三分前、そして次の時間は英語……つまりはタカミチの授業だ。……ここまで言えば大抵の人はわ

かるだろう。コノ二人、

「（仮病して早退しよう！）」「

早引けをするつもりだ。そして、そのタイミングを見計らったように扉からタカミチが入ってきた。

「やあ、みんな先生、体調が悪いので帰るでござる（ます）」「  
つて、へ？」

ダアアアアツ！！！！

足の裏にロケットブースターでもついてんじゃないか？と思える速さで二人は教室から出て行った。その掛かった時間は1秒・・・早業だ。教室にいたタカミチ始めとした生徒たちがそのあまりの速さに固まっている。

最初に戻ってきたのはタカミチだ。

「・・・あゝ・・・どうしようか？」

とても体調が悪いようには見えなかったけど・・・、と言いながら立ち呆けていた。

～～～そして数分後～～～

「・・・」

「……………」

楓と真名は全力疾走で走ってきたにも関わらず、まったく息が上がっていない。ただ、目の前にある自宅を睨みつけている。

「それでは・・・行くでござるよ」

「ああ……………」

二人は意を決したように門を開け、中に入った

モフツ

「「え？」」

なにやら赤茶色のような巨大な物体が見えたと思ったら、ぶつかり見えなくなった。何かと思い見上げると……………、

『グルルルルッ』

「……………くま？」

真名は思わず呟く。目の前に立っていたのは二足歩行している巨大な熊。外見はヒグマそのものだ。しかしなぜこのようなところに熊が……………？すると、急に楓の身体が震え始め、

「く、」

「く、？」

「熊吉——っ！——！！！」

『グオオ——っ！——！！』

ガシツ、と抱き合う。真名はいきなりのことだったため、何が起きているのか付いていけない。その光景をポカーンと見つめている。楓は熊の胸板に気持ちよさそうに頬摺りをしている。

「むふふ〜。久しぶりでござるな〜熊吉。会いたかったでござるよ〜」

『グオ、ゲルル』

「おお！他の子もいるでござるか！——それでは会いに行かなくては！！！」

『グオ、グオ——！！』

「ちよ、楓！待て——！！？」

熊と一緒に行くこととする楓に気付き、真名が追いかけてよとした瞬間、首に冷たい感触が触れる。それが刃物だと瞬時にわかった。

「.....」

まったくもって無音。何かを言うでもなく、何かをするでもなく、何も気配を感じず。ここまで無に徹する人間がいるのか？と思えるほどだ。真名はそのあまりの『無』に恐怖を覚えた。

すると、この家の家主が現れた。

「よせ、影。そいつは『仲間』だ。問題ない」

「銀次さん」

「……」

スツと、影と呼ばれた人物は刃を真名の首筋から外す。真名は首筋から感じる冷たい感触がなくなり、一気に身体が楽になったように感じた。冷や汗を流している真名に銀次は近づき、頭を撫でる。

「済まなかったな、怖がらせて……」

「ん・大丈夫だよ。銀次さん」

銀次に頭を撫でられながら真名は気持ちよさそうに目を細める。・  
・何気に役得だと今気付く。が、

「まあ、影にとっては認識がなかったからな・・・しょうがないといえましょうがないのか？でもよく殺さなかったな影」

「……」

「え？楓と一緒にいたから友人かも知れないと思って・・・なるほどな。つか、その選択だと楓と一緒にじゃないと殺していたということか？」

「……」

「・・・ああ、まあ『お前ら』はそういう奴らだったな」

楓と一緒にじゃなかったらどうなっていたことやら・・・。役得はあったものの、危険のほうが多かったりした。  
ところで、と銀次は真名に視線を戻す。

「ちょうどいい。お前にも新しい・・・いや古い仲間を教えよう」

「古い仲間・・・？」

真名は聞き返す。銀次はああ、と答え庭へと歩いていった。そしてポツリと言った。

「古い、俺や楓の仲間さ」

〃〃桐野邸・庭〃〃

真名は絶句していた。口をポカーンと開け、目をまん丸にしている。  
なぜか？それは・・・、

『グウウウウツ』

「おーよしよし。鱈吉も元気だったでござるか？」

『ギチギチギチ』

「おお、おお、蜘蛛助や。おぬしも元気だったでござるか？」

『カチンカチン』

「サソ太も元気だったでござるか？」

『シューッ』

「瘤武太も元気でござったかー？」

「・・・なんだいこれは・・・？」

真名の目の前に広がっていたのは大量の動物・・・その内の通常とは明らかに大きい鱈、蜘蛛、蠍、蛇だった。その後ろには先ほどの熊もいる。

銀次はその光景を見て多少苦笑いしながら真名に説明する。

「あれは『生物変体刀』といってな。変体刀の一つだ」

「・・・あれが刀？」

真名は疑うように聞く。まあ、無理もない。目の前にいる生き物達は大ささこそアレだが・・・パツと見・・・いや、じっくり見ても刀だとは思えない。さきほどの熊とぶつかったときも硬い感触ではなくモフツとした動物の感触だった。

「ああ、見た目ではわからんだろうがあいつらは・・・そうだな、一本で高畑十人分か二十人分の戦闘能力を持っているといっても過言ではない」

「・・・バクだね」



真名は正直な気持ちを呟く。見た目は普通の動物、しかし戦闘能力はタカミチ並……。どこのチートキャラだ？

「ついでに言うと、持ち主の俺よりもなぜか楓に懐いている」

そう言った銀次の横顔になにやら哀愁が漂っているのが窺われた。まあ自分が呼び出したのに知り合いのほうに懐いているのを見たら・  
・誰でもそうなるだろう。

そんな軽く落ち込んでいる銀次に、縁側のほうから声が掛けられた。

「フオフオフオ、まあそう落ち込みなさんな。銀次殿」

そういつて現れたのは、フードを被り、長い木の杖を持ち髭を伸ばした、まるで仙人のような老人がそこに立っていた。真名は最初、敵だと思っただけらしいがその喋り方だからして知り合いらしく、様子みをすることにした。

そしたら銀次がそちらを睨むように見る。

「……導士。そういうがな、やっぱり悲しいものではあるぞ？ 鰐はいまだ俺に懐かないわ、瘤羅は俺に懐いているとはいえ楓6の俺4……。蜘蛛と熊にいたっては俺じゃなくて楓が本当の主人と思ってるんだぞ？」

「その内いいことがあるじゃろう。そんなことよりも銀次殿、後ろのご婦人は誰かの？ 影の話では新しい同胞だと聞かすが……」

導士、と呼ばれた老人は銀次の後ろにいる真名を見て、髭を撫でながら聞く。銀次もああ、と答えながら説明する。

「こいつは龍宮真名といってな。この土地に来てから『仲間』にな

「つたんだ」

「龍宮真名です」

真名は軽く頭を下げる。老人が銀次の仲間とわかって安心したからだろう。導士はフオフオフオ、と笑いながら真名を見る。

「これはこれは礼儀正しい子じゃのウ。ワシは『魔法を使う刀』に主眼を置いた法刀・導士という『七星変体刀』の一人じゃ」

「・・・へ？」

真名はまた目を丸くした。それもそうだろう。いきなり目の前の老人が自らのことを変体刀と言ったのだから。それに気付いた銀次は真名に説明する。

「こいつらはこう見えて変体刀なんだ。さっきの門のところに居たのもその『七星変体刀』の『一人』だ」

まあ、俺は刀と扱ってないがな。といいながら縁側に座る。導士はその横によっこらせ、と言いながら座る。

「ふむふむ。ワシらをそのように人として扱ってくださいるのは四季崎殿とその伴侶に娘殿・そして銀次殿と楓殿だけじゃ」

「逆にお前らを刀として扱うほうが無理だっつての」

見た目どこから見ても普通の人間にしか見えないのにどうやって刀と扱えと？導士は髭を撫でながら笑っただけだ。

「フオフオ・・・やはりお主らしいのう」

「うるせえ・・・それより、他の奴らはどこいった？たぶん何人かは部屋か地下にいると思うが・・・」

銀次はあたりを見回しながら聞く。七星変体刀はその名の通り、七人（七本？）いる。導士は髭を撫でながら答える。

「土刀・剣は地下の鍛錬場で鍛錬を。射刀・鎚は他の変体刀と家事を。狂刀・鋸は部屋で睡眠を。戦刀・鉾は和歌を作るために部屋に引きこもっております。暗刀・影は門番を。駆刀・跨は『風を感じてくるぜ!』と申して愛馬の黒風とどっかに言っしまいましたわい」

「・・・なんつつか・・・相変わらず自由な奴らだな」

跨の奴捕まらなきゃいいけど・・・ど呟きながら答える銀次。そこでふと、銀次は気付いたことがあった。

「そついや楓と真名。お前らなんでココに居るんだ？今は確か二時間目の始まり・・・いや、中間ぐらいか？なのになんでお前らココに居るんだ？」

それを聞いて二人はビクンツと身体を揺らした。

「いや・・・なに。なにやら銀次殿に不穏な気配を感じたものでござるから・・・」

「不穏な気配？なんじゃそりゃ？」

銀次は怪訝な顔で聞く。楓と真名は声を揃え言う。

「女の気配」

「……はあ？」

それを聞いて銀次は素っ頓狂な声を上げる。そして呆れたように言う。

「女の気配って……変体刀のことか？それなら思い当たる奴らは何人かいるが……」

銀次は顎を指で撫でながら呟く。その銀次の言葉を聴いてか、楓と真名は安堵の息を吐く。

「ふう……確かに銀次さんがそんな女の人を連れ込むはずが無いか……」

「そうでござるな……やれやれ拙者らの思い過ごしでござったか……」

二人はふう、とさらにため息を吐く。熊などの生物変体刀は楓に『大丈夫？』といった感じで見ている。導士はフオフオフオと笑いながら髭を撫でているだけだ。  
……そのとき、

「銀次様？何かありましたか？」

「……は？」

居間のほうからお盆を持ったヘアバンドをつけた銀髪の女性が現れた……丈の短いメイド服を着た。女性は知的そうな顔立ちをして、銀次たちのことを見ている。

「おお、侍やうざいか。いや、なに。楓と真名が学校から……!?」

侍、と呼ばれた女性のほうを振り返り銀次は返事をしていたら、背中にもものすごい殺気を二つ分感じた……もちろん楓と真名だ。

「……えくと、楓サン？真名サン？なぜユエソノヨウニ殺気を放ッテラッシャルノデ？」

「……」

「……」

二人は絶対零度のように冷え切った目で銀次を見る。銀次は振り返りたくても振り返れない。すると、楓が話し出した。

「銀次殿……」

「は、はい」

差し詰め……数多くの修羅場を生き抜いてきた銀次もこれほど恐怖を覚えたのは久しぶりだろう。そして、銀次はわかっている。楓がこのように冷え切った声で話しかけてくるのは……かなり怒っているときだということ……。

「……その『みにすかめいど服』を着ているご婦人はどこのアバズレでござるか？」

「なにやら丁寧語と貶す言葉が混じってるような気がするのですが……」

どこでそんなこと覚えたんだ？と聞こうとしたが、今の銀次はそのような余裕はない。銀次は隣にいる導士に助けを求めようとしたが……、

『すまん、ワシには無理じゃ』

という達筆な文字で書かれた紙が置かれていた。

「（あ、あの腐れ導士……！！）」

銀次はプルプルと震えながら、今度は生物変体刀の方を向いたが、

『へっ、ザマア W W W W』

と言ってるような顔でこちらを見ている。さきほども言ったが、生物変体刀の中で銀次に懐いているのは、ほんの数体しかない。その大多数は楓に懐いている。

理由としては生物変体刀は四季崎記紀が作った変体刀で、この変体刀達は四季崎が愛した女性との間に生まれた娘の頼みで作られたのだが、その娘と言うのが楓に瓜二つでその娘とかなり仲がよかつたらしく、銀次が過去に呼び出したときも、持ち主である銀次よりも楓と仲よくなつた。また、法刀・導士を初めとした『七星変体刀』

も四季崎の変体刀を狙う輩から娘を護る為に作られた変体刀だ……  
・まあ、簡単に言えば四季崎は意外と親バカだったりしたのだ。

そしてそして、つまりわだ。いまこの場にいる生物変体刀達は銀次  
楓の奴らがほとんどで助けるものはいない・・・銀次、無念。

「あの・・・？どうなさったのでしょうか？銀次様？」

事件の発端となったこちらの変体刀は、何が起きてるのかよくわか  
っていないようだ。多少困ったような顔をしていて、それすらも上  
品に見える。・・・しかし、その上品さも二人にとっては火に油を  
注ぐようなものだ。

すると、奥のほうからドタドタと何人が走ってくるような足音が聞  
こえてきた。

「侍さん、どうしたんですか？」

奥のほうから現れたのは、一番最初に現れたのは赤髪を長髪にして、  
頭に星型のマークをつけた緑色の帽子をかぶり、同色の中華服を着  
た・・・楓や真名以上のプロモーションを持った女性と、

「何かあつたんですか？姉さん」

小柄で、鳴滝姉とあまり変わらない体格をした銀髪のショートヘア  
に黒いリボンをカチューシャのように結びつけ、白い袖の短いワイ  
シャツの上に緑色のベストを羽織、同じ色のスカートを着た少女。  
腰には太刀と小太刀が差されている。

「なんだ？何かあつたのか？」

そして最後に出てきたのは白いワイシャツに、札らしきものを何枚  
も貼ったモンペらしきものを着た、腰の下辺りまで白い髪を伸ばし  
てそれを白地に縁が赤いリボンをつけている女性。ぱっと見は高校

生ぐらいだ。

「……もちろんこの三人、楓と真名にとっては高純度の油……いや、もはやガソリンであるのは銀次も気付き始めた。」

「お、お前ら……！！このタイミングで……！！！」

「あら紅、夢、それに鳳姉さん。それがですね、楓様と真名様が帰ってらっしゃったんですが……なぜか怒ってらっしゃるのですよ……なぜかわかりますか？」

「んん？本当か？……あらア……本当だ」

「なぜ怒ってるんでしょうか？」

「……さあ？」

「……どうやら自分達が原因だとは思ってないらしい。それが楓と真名にとっては、

『あんだ達なんか私達の敵じゃないわよ！！』

と、言ってるように聞こえるのだ。楓と真名の中で何かが切れる音がした。

「……………」

「おい、二人とも……なに、擬似千刀と擬似炎刀取り出してんだ？……て、おいまで、なにこいつらに向けてんだ？やめとけよ。」



こいつらなんだかんだで強いからな？」

冷や汗を流しながら銀次は二人を宥める……侍を初めとした三人も警戒をし始めた。そして、

「「問答無用だ(でいぢる)」」

「のわっ!?!」

「迎撃しますか?」

「燃やすか?」

「どうでしょうか……?」

「え〜っと、とりあえず殴って気絶させて……」

「迎撃すんな!燃やすな、殴るな!!楓、真名!とにかく落ち着けっ!」

その後、なんとかして收拾したときには、縁側の一部が崩壊していたらしい。

〜桐野邸・居間〜

「……と、いつわけでございます」

銀次は居間の机を挟んで座っている二人に侍、紅、夢、鳳について説明をしていた……、

「……つまり、アレでございますか？あの毒婦たちは銀次殿が連れこんだのではなく……」

「四季崎記紀のほうの変体刀で『少女変体刀』と呼ばれる刀たちだ……と？」

「はい、その通りでございます」

……土下座で。その銀次の後ろには先ほどの三人が座っていた。そして、一番最初に事件の発端となった侍が頭を下げ挨拶をする。

「どうも始めまして楓様、真名様。私わたくし、四季崎記紀が造りし『少女変体刀』が一本、”奉仕”に主眼を置かれた『女刀・侍』でございます」

そしてその横で正座していた赤髪の紅と呼ばれた女性が軽く頭を下げる。

「同じく始めまして。侍さんと同じく『少女変体刀』が一本、”虚刀”に主眼を置かれた華刀・紅です」

とある部分の揺れを見て楓と真名がちよっと殺気だったのはしかたないだろう。

そして、その隣にいた小柄の銀髪の少女が頭を下げる。

「初めまして、姉さんたちと同じ『少女変体刀』が一本、”二刀流”に主眼を置かれた妖刀・夢です」

夢はそういうと頭を挙げ、楓と真名の胸を見て

「はあ……」

ため息をつく。その後「なんで四季崎様は私だけこんな胸小さくしたんだろう……？」と小声で呟いていた……。紅がその背を撫でている姿は差し詰め、子を慰める母親といったところだ。

そして最後にその隣にいた赤モンペを履いて頭の後ろで腕を組んでいる女性が挨拶する。

「初めまして。その三人とおなじ『少女変体刀』が一本、”再生”に主眼を置かれた永刀・鳳だ。ついでに言うと少女変体刀の中では一番の古参だ」

意外とフレンドリーに接する鳳。

「まあ、以上が今現在『ここにいる』少女変体刀だ……。他にもいるが呼んでいなかったり、どこかにほっつき歩いたりしているから俺にもわからんからな？」

『ここにいる』といっただけで、楓と真名は擬似変体刀を挿み出したので先に言うておく。二人はふう、とため息らしきものを吐き、銀次に向き合う。

「やれやれ……。銀次殿、それならそうと今朝言ってくればよかったのに……」

「本当だよ銀次さん。危うく、撃つところだったよ」

「……お前らのキレどころを是非とも教えて欲しいんだが……」

銀次は呆れながら言う。最近、コノ二人の沸点がわからなくて困っている銀次である。その二人を見ながら、銀次は咳払いをして改めて二人に説明する。

「まあ、こいつら少女変体刀もそうだが……生物変体刀、七星変体刀。あと出していないが軍兵変体刀といった自立式の変体刀を大量に出している。理由としてはこの前エヴァンジェリンから入手した情報、『正義の魔法使い』との戦いに対抗するためだ」

それを聞いて二人は納得する。この学園には魔法使いが教師、生徒含め百二十人……その内百人前後は始末派に回っている。これほどの数を相手にするのは流石の銀次も厳しいだろう……と二人は思っているが、本当はそんなことなくかなり余裕だ。その気になればこの『学園都市』を地図から消すこともわけない。ならば、なぜ銀次はこのように過剰なほどの自立式変体刀を呼び出したか？それは楓と真名を護るためなのだが……それは銀次の我侭にすぎないので言う必要もないだろう。

「なるほど……確かに熊吉たちがいたらすごい戦力になるでござるな……」

「ああ、あいつらもまさか動物や魔力の無い奴らが敵だとは思わないだろうからな……」

楓と銀次がうんうんと頷くなか、真名は銀次に聞く。

「あの・・銀次さん。少女変体刀と七星変体刀だったかな？その人たちも強いのはわかったけど・・・どれぐらい強いのかな？個人的にすごい気になるんだけど・・・」

真名の質問に銀次はああ、と答えながら真名の質問に答える。

「ああ、そういえば真名は知らなかったな・・・そうだな、こここの奴らで例えるのは難しいが・・・おそらく高畑の戦闘力百人分だと思つて構わない」

「・・・チートすぎるんじゃないかい？」

真名は頬を引き攣らせながら聞く。高畑の実力を知っているため、本当にそんな戦闘力があれば・・・それこそこの魔法使いなんぞ瞬殺だろう。そこは四季崎に文句を言え、と銀次は言つて二人を見る。

「さて・・・理解してくれたところでもういいか？」

「あいあい・・・済まなかったでござるよ銀次殿」

「私も・・・済まなかったね、銀次さん」

二人は素直に頭を下げる。さすがに今回はこちらに非があると思つたからだろう。銀次は頬をポリポリ掻きながら二人に言つ。

「ん・・・まあ、わかればいいさ」

銀次は二人に微笑みかけながら言う。・・・やはり銀次はこの二人に少しばかり甘い。その微笑みに一人が見ほれるなか、銀次はよいしょっと立ち上がり庭を見て、

「・・・・・・・・あいつらの食事どうしよう?」

庭でこちらを睨んで『飯まだかよ?』といってるように見える生物変体刀たち・・・・・・・・しかもその睨みがやたらと殺気立ってるように見えるのは・・・・・・・・銀次だけだろうか?

その生物変体刀の視線を感じてか、楓が立ち上がり、

「ふむ、気付けばいつの間にか昼でござったな。拙者、あの子達に食事を上げてくるでござる」

「それなら私も手伝うよ」

二人は立ち上がり、生物変体刀たちに食事を与えることにした。銀次は後頭部を掻きながら、女刀のほうを向き、

「あゝ、悪い侍。楓と真名の食事も作ってもらってもいいか?・・・こいつが奴らの弁当食っちゃまったみたいだ」

そっぴいなながら机の下を指差す。女刀はその下を覗き込んでみると・・・、

「・・・・・・・・たらない」

「あら、獲ったら、どこに行ったのかと思ったたらこんなところにいるの?」

机の下にいたのは体のいたるところに拘束具のようなベルトを巻き付け、囚人服のような服を着た口には大きめの黒いマスクをした銀髪の12歳ぐらいの少女だった。その少女は眠たげな顔をしながら口をモグモグさせている。その横には楓と真名の空の弁当箱が転がっていた。

喰刀・獾 『大食い』に主眼を置いた少女変体刀だ。その能力はお分かりの通り、何でもかんでも食べることができることだ。それは人間が食べるような料理から始まり、別の生き物に金属などの無機物はもちろんのことはたまた魔法で作られたものも食べてしまう。もちろんただ食べるのではなく食べた相手の能力を取り込んだり、身体能力を上げることでもできるともいい奴ではあるのだが……空腹になると口につけているマスクを外し、辺り構わず食いまくる。もちろんそこに人間がいれば喰われるが自分が懐いている人間は食べない。また、このようなことを言うとかかなり凶暴な変体刀と思われるがそんなことはない。一日中ボーとしていることが多いが、性格は子供のように純粹で、子猫のような仕草もする可愛い奴だ。基本自分から喋ったりはしない。ただ問題があるとすれば食費が嵩むことだろう……大丈夫か桐野邸の家計？

「できるだけ大量に作ってくれ。こいつは特に食いまくるからな。空腹にさせないようにないと……」

「ふふ、わかりました。それでは銀次さん。それまでこの子のことを見ていてください」

あーいよ、といって銀次は手を女刀に振る。侍はその場を去り台所へと向かう。妖刀もそれに続く。おそらく手伝いだろ。紅は「稽古してきます」といって地下へと向かい、鳳は縁側で昼寝を決め込んでいる。

銀次は喰刀の頭を撫でながら庭にいる楓と真名を見る。

「ほぐれみんなご飯でござるよ」

「大丈夫なのかい？こんなにあげて・・・？」

「問題ないでござる」

五十キロはあろう巨大な肉をデントツと熊や鱈たちの目の前に置く楓。それを心配する真名。・・・その肉に釣られて楓と真名の下へ行くこととする猿を止めるのは銀次の大事な役目だろう。

どうやら生物変体刀たちも真名を仲間と認めてくれたらしい。銀次は頬を多少緩ませながらその光景を見る。

そして、一言決意したかのように呟く。

「・・・俺は闘うぞ・・・あいつらのために。また『あのときのよ  
うなこと』にならないように・・・」

銀次はさらに決意を堅くする。いま目の前に広がる光景を護ると。あの二人を何があっても護ると・・・銀次はさらに決意を堅くした。



なおこの日を境に、桐野邸はごく近所からは『桐野動物園』と呼ばれるようになったとかどうとか……。

## 第十五話（後書き）

どうでしたでしょうか？今回は銀次達と行動を一緒にする変体刀を  
沢山ださせてもらっお話でした。

次回！！そっいやもうすぐ麻帆良祭・・・三日間ドンチャン騒ぎ  
の大祭り！！というわけで！！次回は麻帆良祭編！！麻帆良に新た  
な伝説が生まれる・・・！！

そして、『あの』フードの人物が明らかに・・・！？

それでは次回をお楽しみに！！

最後に変体刀の案をくださった、パルパレーパさん、ふかやんさん、  
完全怠惰宣言さん、ありがとございます！！

## 第十六話（前書き）

最近、ネギまを改めて読んでネギがウザイと再確認した銀閣です。

さて、今回は学園祭編です。一部キャラ的に壊れてるところがあると思いますが、どうぞ楽しんでください。

それでは、どうぞ

## 第十六話

〳朝・桐野邸 銀次の部屋〵

チユンチユン、と銀次の部屋の外から雀の鳴き声が聞こえる。それなりに日が昇り、誰もが起きている時間だが銀次は……、

「zzzz」

寝ていた。銀次は寝方に二種類ある。一つは刀語の銀閣のように壁に寄り掛かりながら寝る寝方。もう一つは布団で横になって寝る寝方。今回は布団で横になっている。

すると、銀次の部屋の襖が音もなく開いた。入ってきたのは少女変体刀が一本、『大食い』に主眼が置かれた喰刀・獏だ。獏は眠たげな目をしながらトテトテという可愛らしい足音を鳴らし、銀次の枕元へと歩いていく。

「zzzz」

「……」

そして、その獏は銀次の枕元へとしゃがみ込み……

ガブツ！！

銀次の頭に、噛み付いた。

（桐野邸）

「……………」

「（パクパク）」

「……………」

「（ムシャムシャ）」

「……………おい」

「？（グチュグチュ）」

銀次は目の前で食事をしている獺に話しかける。獺は口をモグモグさせながら銀次に小首を傾げながら見る。

「獺、お前俺に何か言うことがあるんじゃないか？」

銀次は口の端をヒクヒクさせながら獺に問い詰める。しかし獺はいつもつけている黒いマスクを外し、口の中に食べ物を詰め込みながら首を傾げるだけだ。

そして、その食べ物を飲み込み、

「……………食べる？」

「すでに食つとるわ!!」

怒鳴るも、獾は気にせずまた料理を食べ始める。そして銀次は説教（？）を始める。

「いいか？獾。寝ている人の頭を噛んじやいけないとあれほど言っただろう？お前は甘噛みしているだけだと思うけど、こっちとしては刃の付いた万力で締め付けられているような気分なんだからな？そこんどこわかってんのか？」

「……おいしい（ブチュグチュ）」

「……こいつまでもに聞いてねえな」

獾は目の前の料理に夢中に喰らい付いている。さすがは『大食い』に主眼を置いた変体刀。

銀次はハア、とため息をつき、

「まあ、いいや。今度からはしないようにな」

「………？（バキヨグチヨ）」

「………ハア」

どうやら獾は理解していないようだ。銀次も獾が悪気があってやっているとは思っていないのだ。獾は意外と甘えたがりで、ポーと空を見ている以外は誰かの膝の上や頭の上にいることがほとんどだ。特に楓と真名といった身長の高い人間なんかにはよく頭の上に登っている。……銀次はそんなことされずことあるごとに噛まれるが……。

銀次はハア、とまたため息を吐き机の上に置いてある茶を啜る。すると、後ろからズカズカと煩いくらい足音を立てながら居間に入ってくるのがいた。

「いや、腹減った！！お、い私にも飯くれ飯！！」

「朝から元気がいいなお前……」

銀次はズカズカ入ってきた机の端にボスンッ！と座った女性……いや、変体刀をジト目で見ながら言った。

「うん？なに言ってるんだい！これでも抑えてるほうだっていつも言ってるだろうが！！」

そういつて豪快に笑うこの女性、さきほども言った通り変体刀、もつと詳しく言うと『七星変体刀』が一本『暴力的な刀』に主眼を置かれた狂刀・鉞だ。見た目は真名と同じ褐色の肌をして漆黒の軽鎧に身につけ、左肩には鬼を模した肩当をつけている。その背中には一人簡単に両断できそうな戦斧が吊るされている。戦いに置いては七星変体刀の中でもかなり高く、狂刀一人で城を軽々潰してしまふなど朝飯前だ。しかし、だからといって普段から暴力的であるわけではない。普段は豪放磊落で考えなしではあるが、仲間思いで、仲間の誰かが傷つけられたら真つ先に突っ込む一人だ。また、鉞も獾と一緒に大喰らいのため桐野邸のお財布を枯れさせている原因の一人だ。

「まったく……あなたはもう少し静かにできないの？鉞」

「何言ってるんだい。さつきも銀次さんに言ったけど私は押さえてるほうだよ？」

ゴトツと置かれた大きな茶碗・・・米が十合は余裕でいきそうなぐらいの茶碗だ。そのクソ重そうな茶碗を軽々と持ち、机に置いたのは狂刀・鉦と同じく七星変体刀が一本「射刀・鎗」だ。「弓を用いる刀」に主眼を置いた変体刀で、軽鎧を身に纏い、漆黒の黒髪を靡かせる姿は美しく、よほど偏った「趣味」の方で無い限り見惚れてしまうだろう。実際、銀次が過去に呼び出したとき思わず見惚れてしまい、その場にいたまだ幼い楓にローキックを脛に喰らったのはいい思い出・・・と、震えながら言っている。

狂刀は、悪びれた風もなくその巨大茶碗を軽々と持ち、右手で持った箸で口の中に注ぎ込む。その前では猥が怪しい音を立てながら食事続けている。銀次はその光景を多少落ち込んだ表情で見て、一言

「・・・今月の食費・・・どうなるんだろう？」

その銀次の呟きも空しく、居間には食べる音しかなかった。

~~~~しばらくして~~~~

「さて・・・どこの暴食魔二人の食事も終わったそうだし、そろそろ行くか」

「そろしましょ」

机に向かい合うように座って茶を啜っていた銀次と鎗は立ち上がり出かける準備をする。銀次は自室に行き余所行きの着物に着替えようと考え部屋に向かうが・・・、

「え〜と・・・まず一眼レフカメラにデジカメに・・・フィルムとメモリーチップも忘れないようにしなければ」

「・・・いったい何をやる気なんだ？お前」

カメラとデジカメ、そしてとても一人では使い切れないようなフィルムとメモリーチップを鎧は鞆に詰め込んでいた。

銀次が呆れた風に聞いたが鎧はこともなさそうに、

「なについて・・・楓様と真名様のその麗しき姿を写真に収めようと・・・」

「持ちすぎだボケ！！てかいつの間にも買ったんだそんなもの！！」

「遂三日前に・・・もちろん銀次様のお財布から少々」

「急に財布の中身が減ったと思ったたらお前が原因か！！」

この鎧、こと楓関係に関するとおかしくなり最近では真名が絡んでもおかしくなりつつある。元々『七星変体刀』は四季崎記紀が自分の妻とその娘を護る為に作り出した変体刀で、法刀などに聞く限り楓は四季崎の娘にソックリらしい。

銀次は後頭部を搔きながら心の中で呟く。

「（たくつ・・・何で世の中にはそんなに『そっくり』な奴がいるんだ？）たくつ・・・せめてもう少し軽くしろ。俺は持たないからな」

「はい。それくらい重々承知しておりますので」

「・・・軽く蔑まれたような気がする」

まあいいか。と銀次はそのまま部屋へと向かう。

〳〵銀次の部屋〳〵

「まあ、別にいつもと変わらないんだがな服装は・・・」

誰に言うわけでもなく、銀次は呟きながらいつもの宇練銀閣の着ていた着物に着替える。財布を初めとする貴重品を懐に入れ、銀次は立ち上がり、机の上に置いてある紙を一瞥して、

「来年の『これ』は果たしてどうなるかな・・・?」

そういつて、銀次は部屋から出て行く。机の上には一枚のチラシが置いてあり、その紙にはこう書かれていた。

『第77回 麻帆良祭は2 - A 和風喫茶へ!!』

〳〵麻帆良祭 入場門〳〵

銀次初めとした桐野家一家は麻帆良祭の入場門を通り、中を見て回っていた。その中で妖刀・夢が目を輝かせあたりを見て回っていた。

「わァー！！すごいですね！！銀次さん！」

「ああ、そうだな〜・・・って、俺の話聞いてねえし。先行ってるし」

「昔はこのようなお祭りによく四季崎様と奥様、それに娘様も一緒にお祭りに行きましたからね・・・夢も久しぶりのお祭りに興奮しているですよ」

銀次の呟きに、少女変体刀の準まとめ役を買って出ている女刀・侍だ。女刀は懐かしむように目を細める。銀次はふーんと適当に反応しながら目的である2-Aへと向かう。なお、今現在銀次と共に行動しているのは、

女刀・侍

妖刀・夢

永刀・鳳

射刀・鎬

法刀・導士

「・・・ん？おい、出るときもつといたよな？なのに何で減ってるんだ？」

銀次はあたりを見回しながら女刀に聞く。しかし、女刀も驚いたようにあたりを見回す。

「あら……いつのまに？さっきまでいたと思っていたのに……すみません」

女刀は申し訳なさそうに銀次に頭を下げる。銀次は多少苦笑いして手を振る。

「別に構わないさ。あいつらも初めて見たものが多そうだから……今日は好きにさせよう」

もしかしたら先に2・Aに行っていたり帰ってるかもしれないからな。と銀次はさっさと歩いていく。女刀もそうですね、といってそのまま歩いて付いていく。

「あ、待ってくださいよ、銀次さん」

「置いていくのは酷くないか？」

「黙れ腐れ導士。コノ前人のこと見捨てやがって」

「早く楓様と真名様のその美しき姿を……」

「……おい、摘ってこんなキャラだったか？」

「いや、もう少しこう……どうしたんじゃろつな」

桐野家一行は目的地である2・Aの教室へ色々と見ながらのんびり

と向かうことにした。

〓〓2 - A 和風喫茶〓〓

さて、色々と見て回りながら歩いた銀次一行、その一行は無事目的地に到着して教室の前にいるのだが、

「いらっしやいませでござる銀次殿」

「いらっしやい銀次さん」

「・・・なんでお前らピンポイントで来たのわかったの？」

先ほど、教室のドアを開けようとした瞬間にドアが開き着物を着た楓と真名が出迎えたのだ。偶然にしてはタイミングがよすぎるし、待っていたとしてもタイミングがよすぎる・・・そんなことを銀次が思っていると二人の後ろからひょっこりと現れた人物が理由を教えてくれた。

「それはミサカがミサカネットワークを介して、銀次様があとどれくらいでくるのか計算してお二人に教えました、とミサカはお二人の役に立ってみたり」

「おまえか犯人は・・・」

銀次はその二人の後ろから現れた中学生ぐらいの茶髪の子にジト目で見ながら聞く。

「はい、とミサカは素直に答えます。でも、犯人とは聞き捨てなりません、とミサカは犯人扱いされたのに憤慨します」

「いや、憤慨してるように見えないんだが・・・」

銀次の目の前にいる少女・・・茶髪の髪をショートカットにして、額になにやら暗視ゴーグルらしきものをつけた中学生らしいけど中学生らしくない少女・・・いや、変体刀が立っていた。

『妹刀・御坂』統率力に主眼を置いた変体刀で、その数は千本で一本。千刀・ツルギと似ているところがあるが、千刀は『使い捨て』を主眼においており、こちらはそんなものはない。戦闘力は低くもないが高くもなく、その代わり数人で動く連係プレイを得意として電撃を使う攻撃に長けている。電撃の槍を作りそれを投げ飛ばす、電気で集めた砂鉄で刀を作る、そしてこの妹刀・御坂の何よりの特徴はその電気を利用した電力を用いた武器の中では最強の部類に入る超電磁砲レールガンを放てるのだ。

また、一体一体性格が多少違うので見分けるには性格をちゃんと把握しなければいけないのだが・・・銀次はちゃんと把握しきれていない。

「まったく・・・あなたはなぜ私達の名前も覚えられないのですか？とミサカは記憶力のないあなたに呆れながら聞きます」

「やべえ・・・いまおもくっそこいつの顔面に全力の前蹴りを蹴り込みたくなっただが・・・」

「それくらいの戯言も受け入れないほど度量の少ない人間ではこれからさきやっていけませんよ？」とミサカはその血管が破裂しそうな

あなたの心配をする振りをします」

「……………!!」

「落ち着くのじゃ銀次殿」

今すぐにも蹴りを放とうとする銀次を法刀は片手で押さえながらなだめる。

「まあまあ、銀次殿。落ち着くでござるよ」

「そつだよ銀次さん。それよりも早く席についたらどうかかな？後ろが聞えてるみたいだし」

「ああ？……………あ、本当だ」

二人の言葉で正気に戻った銀次は後ろを見て頷いた。

「ていうか、俺に喧嘩を売ってんのか？御坂……………何番だ？」

「0038番です、とミサカは記憶力の悪いあなたに懇切丁寧に教えます」

「……………てめえ後で覚えてろ」

「記憶にあつたらそうしとききます、とミサカは本当は覚える気がないの上っ面だけを承しとききます」

「……………」

なんかもういいや、といった感じで銀次は席に着くことにした。妹刀・御坂0038番も「私も頼んだ抹茶ケーキを食べるので、と銀次様以外の人に挨拶をして離れます」と言って違う席について抹茶ケーキを食べ始めた。……どうやら銀次は妹刀・御坂0038番に嫌われてるらしい。

さて、席に着いた一行に楓と真名が注文を受け付けることになった。

「それでは銀次殿。何にするでござるか？」

楓は手に持った受付票とペンを持ちながら聞いてくる。銀次たちは『お品物』と書かれたメニュー表を見ながら何にするか悩んでいる。

「そうじゃのう……ならワシは抹茶と三食団子を頂こうかの」

「私は抹茶ケーキをおねがいします！」

法刀・導士と妖刀・夢は決まったらしい。

「女刀、お前は何にするんだ？」

「私は……そうですね、抹茶をいただけますか？」

「ん、了解。おい、鎧お前は……」

「……可愛いですよ楓様、真名様!!」(カシヤカシヤ!!)

「……ほっとこ」

二人のことを激写して自分の世界に行っている鎧を銀次は放置することにした。そして肝心の銀次が頼もうとしたら……、

「それじゃ俺は・・・抹茶と芋羊羹を頼む」

「あいあい、了解でございます。それと銀次殿、今なら特別に」

「私が食べさせてあげるよ・・・望むなら口移しでも」

真名の爆弾発言に、拙者もするでございますよ。と楓も混ざる。おそらく、一般客が聞いたら鼻血を出して喜びそうなのだが・・・、

「はいはい、そういう冗談は好きな男捕まえてからにしろ」

「・・・」

二人に向かって手をパタパタと振りあしらう銀次。この手の二人の『本気』を何十回も受けているためか、銀次はすでに冗談と受け止めている。二人はかなり不満そうな顔をしながら料理を取りに引込んだ。

それを見ていた法刀達は・・・、

「・・・鈍感ですね」

「鈍感です」

「鈍感じゃの」

「鈍感だわ」

「はじけるリア充、とミサカは銀次様に罵声を浴びせます」

「あ？何だよお前らいつたい・・・それと妹刀、お前後で蹴り飛ばす」

五人のいきなりの発言を聞いて銀次は訝しげに五人を見る。しかし、五人は別にといった風に銀次から視線を外す・・・法刀・道士はため息をつき、「やれやれ・・・なぜ気付かんのじやるるか？」と呟いていたがどこから出したかわからない文庫本を読みふけってる銀次の耳には届いていない。

そのときだ、

「お茶をどうぞネ、銀次さん」

「ん？ああ、済まないな・・・て、お前は確か・・・」

銀次はコトツとお茶を出した少女に礼を言おうとして、顔を上げたところそこにいたのはなにやら和服ポイツけどチャイナ服っぽい着物を着た

「21A19番超鈴音ネ。長瀬サンと真名サンにはお世話になってるヨ」

「ほう・・・あの二人の同級生か。二人がいつも迷惑掛けて悪いな」

超鈴音、もちろん銀次は知っている。ちょうど一年後のこの麻帆良祭で未来に起きる事件を失くす為に世界中に魔法をバラそうとしてネギと勝負するのだが・・・それは言わないでもいいことだろう。

「いやいや、いつも迷惑掛けてるのはコツチネ。色々とお世話になってるからネ。このお茶はサービスネ。銀次さん『好み』に入れたお茶だから口に会うと思うヨ？」

そういつて超はその場から離れていった。しかし、そこで銀次は引つかかるものを感じた。

「（……………ん？俺『好み』のお茶？）」

銀次の茶の好みを知っているのは楓と真名、そして変体刀だけなのだが……………、そこで銀次は試しにお茶を飲んでみることにした。少しだけお茶を飲み、多少笑う。

「ほう……………確かにこれは俺好みの茶だな」

「え？何ですか、銀次さん」

お茶を飲んで多少笑った銀次を不思議に思ったのか、妖刀・夢が話しかけてきた。銀次はその妖刀・夢を見て、

「……………まあ、飲んでみればわかるぞ、ほれ」

からかいを含めた意味で妖刀・夢に自分の飲んでいたお茶を手渡す。妖刀・夢は頭の上に？を浮かべながらそのお茶を口にして……………、

「ブフウ……………ッ！！！！！！」

吹いた。勢いよく妖刀・夢は口に含んだお茶を吹いたのだ。そして、しばらく咳き込んだあと銀次を睨みつけ、

「な、何なんですか！？このお茶とはいえないほどのクソ甘いお茶は……………！！」

「砂糖がかなり入ったお茶だな」

「なぜそれを平然と飲めるんですかあなたわ!？」

妖刀・夢の手に持っていた茶をヒョイツと掴み、銀次はそのお茶を啜る。銀次は極度の甘党でもあるのだ。和菓子はもちろん洋菓子も大好きで、甘さが足りないとそれこそ砂糖を大量にぶっかけて食べるほどだ。以前、おしるこの甘さが足りないとということでは糖をぶち込んで楓に泣かれながら非難されたことがあるが、それは割愛させてもらおう。

さて、ここで気付いて欲しい。妖刀・夢は茶を飲んであまりの甘さに嘔出してしまった。その嘔出した先に誰か。そう、誰かいたとしたら。……？

「……ちよつと、夢」

「え？何ですか姉さ、ヒツ!！」

女刀・侍に呼ばれ、妖刀・夢が振り向くと……。そこには顔面から甘いお茶を滴らせて、とてもいい笑顔をした女刀・侍がいた。そして、ニコリと笑い、

「覚悟はいいかしら……。夢？」

「ひいひいッ!!!」「ごめんなさい姉さん!!!」

「待ちなさい、夢!！」

女刀・侍は、どこからか取り出した刃渡り三十cmはある銃剣を何本も持ちながら半泣きで逃げる妖刀・夢を追い掛け回し……

どこかへ行つてしまった。残された法刀・導士と銀次、射刀・鎬はそれを茶を飲みながら見送っていた。

「お待たせでござーおろ？夢殿と侍殿はどこにいったでござるか？」

「あの二人か？あの二人は・・・鬼ごっこにいったよ」

「鬼ごっこの上に『リアル』がつくがの（ボソッ）」

「ん？何か言つたかい？導士さん」

「なんでもないぞい」

その場で銀次と導士は乾いた笑いをしてやり過ごすことにした。すると、楓と真名の目がキュピーンと光り、

「それでは拙者らが・・・」

「そつだね座らせてもらおうかね」

「は？おいお前ら仕事は・・・」

銀次の言葉を半ば遮るように二人は銀次の左右を陣取り、妖刀・夢と女刀・侍の頼んだ品を食べ始めた。どうやら二人はどく気はないらしい。銀次はさらにため息を吐き、そのまま芋羊羹を食べ始める。この二人にどうこう言つたところで、退くとは思わないのでそのまま放置することにした。

そこで、銀次は先ほど少し気になったことを楓と真名に聞くことにした。

「なあ楓、真名。おまえら超に俺の味の好み喋ったか？」

「超にでござるか？・・・いや、拙者はないでござるよ。真名は？」

「いや、私も喋ってないね・・・なぜだい銀次さん」

「ああ、実はな・・・」

銀次は先ほど超に渡されたお茶のことを話した。二人はその話を聞いて怒るより先にそのことを不思議に思った。

「それは・・・確かに不思議でござるな」

「ああ、銀次さんの甘党は常人の比じゃないからね・・・血糖値が異常なくらい高いと思うくらいだからね」

二人は普段から家で甘いものを食べるときの銀次を思い出しながらウンザリとした顔になる。何せ和菓子を除くほとんどの甘味に砂糖をぶちかけるのだから、見てるこっちも甘ったるくなる。

「うるせえ、人の味覚にとやかく言うんじゃないやねえよ・・・しかし、だつたらなぜ知ってたんだ？」

「監視された・・・？いやそれはないでござるな」

「それはないの。あの家は四六時中生物変体刀やワシらが警戒しておるからそう易々と侵入できるものではない」

「銀次さんが教えたとかはないのかい？」

「俺は自分のことは信頼した大事な奴以外は教えないようにしているんだよ・・・おい楓、真名。なんで顔を赤くしてるんだ？」

「な、なんでもないでござる（信頼して大事・・・嬉しいでござる）」

「なんでも・・・ないよ（信頼して大事・・・ふふふ）」

二人は心の中で銀次の言葉に嬉しく思いながら、頬を染める。それを見た法刀・導士が「あれが最近巷で有名な”旗男”・・・かの？」と呟いていた。しかし、銀次はそういう自覚がないため首を傾げるだけである。そして残りの激甘緑茶を啜ろうとしたとき、

「・・・ん？」

「どうしたでござるか？銀次殿」

「いや・・・何でもない」

「？ならいいでござるが・・・」

楓の問いかけに適当に返し、銀次は茶碗の中を覗く。中には茶がもう残っていないのだが・・・かなり小さい文字らしきものを見つけた銀次は目を凝らし見てみると、

『今晚、零時に楓サンと真名サンを連れて世界樹前に来て欲しいネ
超鈴音』

「……………」

銀次は楓達にバレないように超の方をチラリと見る。銀次に視線の先には客から注文を受けていたが、こちらの視線に気付いたのか、

「……………(ニコ)」

「……………」

一瞬だけ、超は銀次に笑みを向ける。銀次はそれを見た後、すぐに視線を外す。そして何事も無かったかのように茶を啜り、楓と真名に話す。

「おい楓、真名」

「なんでござるか？銀次殿」

「何だい？銀次さん」

二人は急に話しかけて来た銀次に不思議な顔をしながら銀次のことを見る。そして、銀次が二人に告げる。

「今晚、零時に世界樹前に行くぞ。戦闘できる服装と武装をしておけ」

「……………え？」

二人は銀次の言葉に思わず固まる。二人は銀次が言った言葉を頭の中で反復させる。

「（二）、今晚の零時に世界樹前・・・」

「（し、しかも勝負服せんとうふくで・・・ま、まさか！？）」

どうやらこの二人、すごい勘違いしているようだ。まあ、無理もないだろう。学園祭の伝説やら学園祭での告白性効率だの・・・とにかく『お年頃』なのだ。少しばかり変なところで変換されてはいるが、

「というわけでちゃんと来いよ？・・・つつても、家一緒だから関係ないか？・・・とにかくこいよ」

銀次は懐から金を取り出し、支払いを済ませて法刀・導土と射刀・鎧を引きずりながらその場を後にした。

後に、この二人が仕事を放りだして服選びに営むのだが・・・その邪魔したら斬るといった気迫を出している姿に声を掛けるような勇者は誰もいなかった。

第十六話（後書き）

・・・予想以上に長くなってしまいました。本当はこの回だけで終わると思ったのですが・・・まあ、大丈夫ですよ？たぶん次回で学園祭編が終わると思います。

さて次回、まだまだ続きます学園祭編。次回は銀次、楓、真名を呼び出した超鈴音。はたしてその目的は？彼女はいつたい何者なのか？次回をご期待ください！！

最後にオリジナル変体刀の案を考えてくれた、ふかやんさん、パルパレーパさん、ありがとうございます！！

第十七話（前書き）

最近、ネギまのジャック・ラカンと、とある魔術の禁書目録の一方通行とを戦わせてるシーンを考えるのですが、どのような条件でもラカンが勝つシーンしか想像できない銀閣です。

今回は超との会合です。

それではどつぞー！

第十七話

〱零時、世界樹前〱

中夜祭初日。離れたところで麻帆良の生徒たちが騒いでいる音を聞きながら、銀次・楓・真名は世界樹の前にいるのだ・・・が、

「お前ら・・・なんだその格好は・・・」

銀次はいつものような忍び装束である。さらに武装もがっちりと固め、いつもは適当に巻いている太い鎖（最初、これを見た楓が「銀次殿は縛られる趣味があつたでござるか!？」と驚いていた）それをちゃんと心臓を護るような位置に巻き、手にもきつちりと巻いている。また、胃の中には手裏剣砲のストックを十個分収めているほか、変体刀も何本かしまっており、腰には斬刀・鈍を差している。そんな重装備に比べて楓と真名は・・・？

「いや、だつて・・・」

「勝負服せんとうふくで来いって言ってたから・・・」

「どこをどう間違えたら戦闘服と巫女服を間違えるんだ!!」

そう、銀次の目の前にいる二人組はなぜか巫女服である。なぜ巫女服か？それは完全に銀次の趣味をリサーチしたからだ。以前、銀次が出かけていたところを二人が銀次の部屋にガサ入れを行い、銀次の秘密本（何かはご想像にお任せします）を発見。「こんなもの無くてもいつでも相手してあげるのに・・・」と呟きながら二人は銀次の秘密本五冊を焼却処分にしたらしく、無くなつた秘密本に嘆

く銀次がいたとかどうとか……。

「（こいつら……人の趣味をピンポイントで攻めやがって……！！）……武装はしてあるだろうな？」

「それは抜かりないでござる」

「私もだ」

そういつて二人は懷や袴の裾からそれぞれの武器を取り出すのだが……その際肌が少しばかり見えた。普段は子供子供と言って笑い飛ばしているが、こうしてみるとやはり二人は色っばい。銀次はその二人から視線を外す。

「……まあ、別にそのままでも構わん。ただしちゃんと闘えるようにしとけよ」

「うむ、一晚だろうと二晩だろうと拙者は大丈夫でござるよ、銀次殿」

「私のもっと大丈夫だよ銀次さん」

「お前らは何の話をしているんだ？」

二人は色っばいと思うけれど、やはりそこは銀次。そっち関係に關しては必ずと言っていいほど鈍感に戻る。すると、どこからともなく声が掛けられた。

「……フツ、三人とも相変わらずネ」

「「!?」」

「やっときたか……」

いきなりの訪問者。それなりに腕に自身がある楓と真名はいきなり現れた人物に驚きを隠せなかったが、銀次はなにやら待ち合わせで遅れた相手を呆れるように戒めるような感じだった。その銀次の言葉を聴いて、現れた人物は苦笑いのようなものを浮かべる。

「ハハハ……この時間帯まで飲むお客もいるからネ。その相手をするのにも疲れるネ」

バサツと、フードをとりながら遅れた理由を喋っているのは……

「な……!?」

「超!?なぜお主が……!!」

二人は警戒して懐にある武器を取り出す。しかし、銀次は手を上げて二人を押さえる。

「落ち着け二人とも……今日はこいつが話があるとかでここに呼んだんだ」

「超が……でござるか?」

「いったい何のために……まさか!?!」

そこで楓と真名がはっと気付く。そして銀次に詰めより、

「まさか銀次殿！！超殿を嫁にするというでござるか！？拙者というものがいなから！！」

「私を差し置いて超を取るのかい！？銀次さん！！楓ならまだ八百億光年譲つても納得するけど、いきなり割り込んできた超を取るのかい！？」

「ああっ！？お前らいきなり何言つてんだ！？ていうか楓！なんだ嫁つて！？んなもん取る気はない！！それと真名！！何を言ってるかよくはわからんが、八百億光年は譲歩したとはいわんからな！？ていうかお前ら最近キャラ壊れてないか！？」

「銀次サンの嫁・・・フッフ、願つてもないネ！！」

「お前も乗ってんじゃねエエエエツ！！！！！！！！」

暴走する三人。それに振り回される銀次。後日、この三人を静かにさせるのにだいぶ労力をつかったと答えるやつれた銀次の姿があったとかどうとか・・・。

くく数十分後くく

「はあはあ・・・やっと落ち着いたか」

「銀次殿・・・そんなに息を荒くして・・・」

「そんなに私の姿を見て興奮したのかい？」

「私はローブを着ているが顔は自信あるネ」

いまだ暴走状態の三人にさすがの銀次も止める気がなくなってきた。

「・・・もういいや。それで、超鈴音。何で俺達を呼び出したんだ？しかもあんな面倒くさい仕方で・・・」

銀次はちよつとまじめに聞く。あのような呼び出しをしたのだからそれなりの内容なのだろう。すると、超がフッフッと不適な笑みを浮かべ、

「うむ・・・とても重要な話ネ・・・銀次さん。結婚して欲しいネ」

「超、そういうのは冗談でも言うものではないぞ・・・楓、真名！お前らは一々武器を構えるな！！ていうか楓！お前は何かクナイに毒塗ってたんだ！？真名もそれこの前お前にあげた拳銃弾型の炸裂弾を込めるな！！」

楓がクナイに塗っているのはこの前銀次が調査した特殊な毒で、ちよつとでも体内に入ると全身の肉が腐り死ぬトンでも毒だ。真名が込めている弾丸は銀次が面白半分で作った弾丸で、少女変体刀の焼刀・空に頼んで作ったもらった小型炸裂弾・・・なのだが、その威力は155ミリ榴弾砲と大差ない威力だったのでどこかに売るか？と銀次は一時期思ってたらしい。
超はその光景を見てまた笑う。

「ハハハ、本当に変わりないね・・・今も『未来』も・・・私が『作られて』からも・・・」

超の一言『未来』で楓と真名の動きを止める。しかし、銀次はそこで止まったわけではない。銀次が止まった理由はその後に関わった言葉……『作られて』というところだ。

「待て超……お前いま『作られた』といったか？」

「おお？さすがは銀次サン。『未来』よりも『作られた』と言うほうに反応するとは……さすがだよ」

超はニヤリ、と笑う。その表情はどこか楽しげで、どこか悲しげな……でもそれでも嬉しそうな顔をしている。しかもいつものように訛りがない。

「うむ……どうやらちゃんと挨拶をしたほうがよさそうね」

超はそういうと羽織っていたコートを脱ぎ捨てる。捨てられたコートの下に着ていたのは袖がなく、全身を護るかのように巻かれた鎖……それはまさしく銀次が着ている忍び装束となんら変わらない服だった。

「な……なぜお主が銀次殿と同じ忍び装束を……!？」

「いったいどうやって……」

二人は銀次とまったく同じ格好をしている超にある意味での敵意の目を向けるが、それを銀次が止める。まだ、気になることは聞いていないからだ。

超はそれを見て銀次に軽く礼をして、続ける。

「私は・・・信じられないと思うけれど、今から百年後の世界からきた桐野銀次が作りし擬似変体刀・・・『擬似虚刀・鈴』・・・いまは超鈴音と名乗っているのは・・・知ってるよね？」

「・・・は？」

さすがの銀次も驚いた。『未来』からやってきた、というのならば銀次も原作を知っているため問題ないのだが・・・まさか、『自分に作られた』というとは思っていなかったからだ。超はそれを見て説明する。

「ふむふむ、さすがの銀次さんもついて来てないみたいだね。しょうがないから一から説明しますよ」

流暢な日本語で話す超。そしてその内容は三人を驚愕させるのに十分な内容だった。

今から百年後、魔法世界は崩壊して魔法世界の住民達は絶命なる危機に追いやられた。そのときにある一つの国家・メガロメセンブリアがあることを思いついた。

『旧世界を乗っ取り、我らの新たな世界にする』

もちろん、ヘラス帝国とアリアドネーはそれを拒否。しかし、それでもメガロメセンブリアは強行的に旧世界を強襲に掛かった。

旧世界はいきなり現れた『殺戮集団』に対処が遅れ、強襲初日で地球の四割が侵略された。旧世界の国々は急に現れた『殺戮集団』に驚愕しながらも国家団結を行い正面对立を決行。もちろん中には反対する国もいたらしいが・・・すぐに占領され奴隷国家にされてしまった。

旧世界は全戦力を持って『殺戮集団』と対決を続けることにした。

しかし、それもいつまでも続かなかった。時間が進むにつれ、旧世界は次々にメガロメセンブリアに占領されていき、旧世界が占領されるのも時間の問題だというときに・・・『彼ら』は現れた。

『彼ら』は恐ろしく強かった。忍者が使うクナイを使い次々と斬り殺してゆく女忍者。両の手に持つ銃で次々と撃ち抜く女ガンマン。その彼女たちを護るかのように敵を殺す生物に人間。そして何よりはその者達を従える最強の男。この男がひとたび戦場にできれば『殺戮集団』が逆に殺戮され、一度対峙してしまえばどんな方法を使おうと生き延びれない。男はメガロメセンブリアからこう呼ばれた『破壊神』彼がひとたび現れれば、旧世界軍は士気が高まり、必ず勝利を呼び寄せる。旧世界軍は彼らのことを『救世主』と呼ぶようになった。

「その後、メガロメセンブリアは壊滅。旧世界は平和を取り戻した。
・・・というわけです」

「「「「「「「「「「「「」

三人はその話を聞いて、急に難しい顔になる。真名は内容はわかりはしたが、あまり実態を掴めず、楓にいたっては理解してない。銀次は・・・話を聞いた限りよくわからない部分があった。

「ん・・・まあ、お前が未来からやってきたってのはよくわかった・・・。それで？なぜ未来の俺はお前を作ったんだ？」

銀次は目の前の作られたという擬似虚刀・鈴こと超鈴音に聞く。なぜ自分が作ったのか？そして、なぜ超がこちらの世界に来たのか？根本的どころがわかってない。超はそれを聞いて、顔を暗くする。

「・・・銀次さんは四季崎記紀作った変体刀と、自分が作った変体刀で世界中で闘った・・・でも、その後問題が起きたんだ・・・それは、銀次さんが作った変体刀とメガロメセンブリアの残党」

「・・・」

「メガロメセンブリアは完全には滅びず、ある者は元の世界に戻る者。そして旧世界を自分たちの世界にするためにさらに戦う者・・・そこまで言えば大体わかるよね？」

「・・・メガロメセンブリアが俺の作った変体刀を求め、手に入れた、暴れ始めた・・・ってわけか？」

その通りね。と超は続ける。

「未来の銀次さんは、国家防衛用として何本かの作刀を旧世界の間達に渡したんだ・・・そして、メガロメセンブリアはそれを強奪。それを持って暴れ始めた・・・そして、私が作られたね」

銀次は大体のことを頭の中で理解した。つまり未来の自分は・・・、

「自分が動きたくてもほかで手一杯。他のやつらも同じく手一杯・・・そして新たにお前が作った・・・というわけか」

「その通り。だから私は擬似虚刀と呼ばれ、虚刀流を組み込まれたんだ」

まあ、擬似だから本家よりも劣るから普通に刀も使えるけどね。と
いいながら、超は少しだけ笑う。

「・・・でも、やはり私はどこか思うところがあったんだ・・・」
なぜ、私はこのようなことをしなければならぬのか？」・・・つて
ね。もちろん、私は戦うために作られたから相手を殺すのなんかど
うとも思っていない。それどころか銀次さんの役にたてるのだから嬉
しい限りだよ・・・でも、私が作られたのは「銀次さんの作った刀
を破壊する」こと・・・それが嫌だった・・・だから私は考えた
よ」

そこで超は今までに見せたことがないような顔つきになる・・・そ
れはまるで何かを決意したような顔だ。

「私が・・・私が作られた理由を作ったメガロメセンブリアの『殺
戮者』共・・・そいつらを消すことができれば・・・私は刀を壊さ
なくても済む・・・だから私は過去に来たね・・・歴史を変えるた
めに」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

あまりにも無茶苦茶な話だ。三人はそう思った。つまり超は遠まわ

しに『メガロメセンブリアの魔法使いを殺しつくす』といているのだ。そのためには銀次たちの力が必要だとも言っている。しかし、そこで疑問が生まれる。

「まで、超。お前のその作戦・・・メガロメセンブリアの魔法使い共を皆殺しにする作戦は俺的には賛成だ」

「拙者もでござる。魔法使いは嫌いでもござるからな」

「私もだよ。人様の土地を侵略しようなんて奴ら潰しても問題ないからね」

どうやら楓と真名も超の作戦に賛成らしい。まあ、彼女らは銀次がいればどちらでも構わないのだから・・・。

銀次はそんな二人を多少の苦笑いで見たあと、超のほうに向き直る。

「でも・・・だ。お前のその作戦・・・もし成功したらお前はどうかなる？」

それを聞いて、楓と真名はハッと気付く。そう、この作戦は成功したら問題が生じる。その問題とは

「たとえこの作戦が成功したら『お前の存在理由』が無くなるんじゃないか？」

「・・・確かにそうなるね」

超はふっと笑う。その笑みは悲しいような笑みだが、どこか決意している笑みでもある。

「・・・もしかしたら私の存在自体がなくなるかもしれない・・・でも、これから先起こる未来のことを考えたらまだマシね・・・その狼煙をこの麻帆良であげる。そのために銀次さん・・・あなた方の力が必要です。力を・・・お貸してください」

その場で膝をつき頼む超。超の目は本当の目だ・・・たとえどんな障害が現れようとどんなに汚い手を使ってでもぶち破る・・・そんな目だ。どんなことがあるかと、どんな手をおおうと、とにかく大事な者を守り、己の信念を貫き通す。おそらく未来の銀次は己自身の戦闘思考を叩き込んだのだろう。

銀次はふう、とため息を吐きながら後頭部を搔く。そして、

「いいぜ。俺はお前に力を貸そう。メガロメセンブリアの魔法使い共を殺すのを手伝ってやる」

超はハッ、と嬉しそうに顔を上げたが、銀次は手を突き出す。

「ただし、無茶はするな。自分のことを無下にするな・・・お前は未来から来たとはいえ俺の作った変体刀だ。勝手に『死ぬ』ことは許さないぞ」

超がハッと銀次を見る。「『死ぬ』ことを許さない」、この言葉は未来でも同じ人物に言われた言葉。

『いいか、鈴。決して死ぬことは許さない。もし死にそうになったら地面這いずり回ろうが、泥に塗れようが絶対に生き残れ』

それでも怪我をしてしまい、瀕死の重傷を負ったときは、目に涙を

見せながら、

『無理はするなっただろう！！お前が死んだらどれだけの仲間が悲しむのかわかってるのか！！』

怪我をせず、無事に任務から帰ってきたら三人が褒めてくれる。

『よく頑張ったな鈴。今日はゆっくり休め』

『腹は空いておらぬか？お主の好きな肉まんがあるでござるよ』

『ん？眠そうだな。肉まんを食べたら布団は敷いてあるからゆっくりと寝な』

どこまでも、何よりも、変体刀である自分を『人』として扱ってくれた銀次とその仲間達。

「・・・やはり、あなたはまったく変わらないよ。本当に・・・」

「あ？なんのだ？」

超の呟きに頭を傾げる銀次。いや、何でもないと首を振った超は立ち上がり、

「それでは銀次さん、楓さん、真名さん。また後ほどに詳しい作戦内容を伝えるから、それまでは待っていてくれるかな？」

「ああ、ちゃんと伝えるよ？」

もちろんだよ、と言いながら超はその場を離れようとしたが、そうそうと言って立ち止まってまた銀次の方に顔を向ける。

「銀次さん、明後日・・・もう時間的には明日かな？武闘大会が行われるのを知ってる？」

「・・・ああ、そういえば古がそんなことを言っていたような気が・・・」

初日の和風喫茶に行ったとき、古が「明後日に武闘大会があるネ！銀次さんも是非とも参加するヨロシ

！！」となにやら参加用紙を渡されたが・・・懐に入れたまま放置していた。

銀次は急にそんなことを聞いてきた超に不思議に見ていると、

「何でもその大会で優勝すると優勝賞金100万がでるらし」「よし、参加するぞ！！」「・・・即決だね」

あまりにも早く決めてしまった銀次に多少驚きを込めた視線を向ける超。超の言葉を聞いた銀次はハハツ、と遠くを見るような目で、

「・・・最近、我が家には大食らいが大量にいたり、やたらと家を壊す奴らがいるものだから・・・」

「・・・なんとなく誰だかわかったでござる」

「・・・私もだよ」

余談だが、楓と真名も家を壊す原因の一旦である。たまに銀次関係で喧嘩する二人だが、その喧嘩の内容は普通の喧嘩ではなくクナイと鉛弾で語る『語り合い』なのだ・・・そのたびに家の壁や柱に穴が開いたり切傷がついたり・・・それでも軽く注意するだけないし、頭に拳骨一発叩き込むだけなのは、やはり銀次が甘いからだろう。超は銀次たちを見ながら苦笑する。

「ハハ・・・。あ、そうそう銀次さん。知ってると思うけど古は極度の戦闘狂だから下手に手を抜くとヒートアップするから多少なれど本気でいったほうがいいよ?」

「・・・やっぱりでるよなアイツ」

銀次は戦闘狂である古のことを思い出しながら憂鬱そうにため息を吐く。古の頑丈さが以上なのは初めて手合わせをしたときから理解していた。何せ、普通なら立ち上がるところか動くことすら難しくなる真庭拳法の『掌瘞』を喰らっても立ち上がったのだから。ちょっとやそつとの攻撃では意味はないだろう。

「まあ、アイツは強い奴と戦えればそれでいいような奴だからね。それなりに相手をしてくれればいいよ」

「ああ、気がむいたらな」

銀次は適当に手をフラフラさせながら適当に返す。超はそれを見てその場からいなくなる。

「さて・・・帰るとするか」

「そつでござるな」

「そつだね」

忍び装束を着た男と巫女服を着た美女が二人・・・あまりにもシュールな光景をかもし出ししながら三人は帰路へとついた。

「（先ほどの銀次殿の反応を見たところ、巫女服は間違いなく銀次殿のすところいくぞーん・・・今後とも研究が必要でござるな）」

「（おそらく楓も巫女服は間違いなく銀次さんのストライクゾーンに嵌っているのは理解しているだろう・・・今度巫女服で夜這いを掛けるか？）」

「・・・（なんだ？最近やたらと寒気を感じるんだが・・・今度病院にでも・・・駄目だ、金がない・・・医刀に診てもらおう）」

銀次は、変体刀の医療班にいる医刀・助に治療を求めようと思いつながら、二人を連れて自宅へと帰っていった。

第十七話（後書き）

どうでしたか？超の正体がまさかの擬似変体刀。完全怠惰宣言さんの案を読んだときビビツと来るものがあり、「これだ！！」と思っ
て使わせてもらいました。後悔はしていない！！

そういえば最近、自立型変体刀で銀次のことが好きな変体刀が何本
かありますが・・・いつそのことヒロイン候補に入れようかな？み
なさんはどう思いますか？できれば意見をお聞かせください。

さて次回、二日目は飛ばしていきなり最終日！！銀次を初めとした
桐野家ファミリーが武闘大会に出場！！いったい誰が出場するの
か！？はたして桐野家の家計の足しになるのか！？次回、お楽しみに
！！

最後に変体刀の案をくださった、完全怠惰宣言さん、パルパレーパ
さん、ふかやんさん、ありがとうございます！！

第十八話（前書き）

え、読まれる前に一言

皆さん、新年明けましておめでとうございます！

今年も『忍の剣士』をよろしく願います！

それでは本編をどうぞ！

第十八話

二日目は特に目新しいものも無いだろうと思って家で寝ていようと思っていた銀次。しかしまた獺に頭を齧られ出かけるということになり一日中食い物屋巡りに付き合わされることになり、銀次の財布の中に隙間風が通っている。

「……明日の大会では是が非でも優勝しないと……」

「これ……おいしい（ブチャグチエグジヨツ、ズズズズズー
ーッ！！！！）」

涙を流しながらそういつている銀次となにやら怪しげな『イチゴとろろイナゴ汁』なる不思議なものを啜っている獺がいたとかどうとか……。

〜〜麻帆良祭・三日目〜〜

桐野家の朝、いまここにやる気を出している男が一人……この家の家主・桐野銀次だ。

「……今日は、今日は何が何でも優勝するぞ！！」

いつもの着流しを着た銀次が居間で雄たけびを上げている。

「銀次殿が珍しく燃えているでござる」

「まあ、賞金が出るからね」

「最近家計が厳しいと鍋もぼやいていたからのう」

私達のこともそれぐらい燃えてくれたら・・・と呟き、楓と真名は茶を啜る。近くで銀次を見ていた法刀・導士は髭を撫でながらふおふおふおと笑っている。

銀次はそのまま意気揚々と出かけようとする。

「さあ、いざ行かん！待っている賞金」ついでに言うと大会は午後六時ごろらしいぞい？」・・・は？」

法刀・導士の言葉に、銀次の動きが止まる。そしてギギギ、と変な音を鳴らしながら導士の方へと視線を移す。

「・・・マジで？」

「本気と書いてマジじゃ。受付は今の時間からでも受け付けとるらしいが・・・どうするのじゃ？」

「・・・」

正直、すぐにでも大会があると思っていた銀次はまったくそのようなことを考えていなかったため、何をしようとも思っていなかった。一気にやる気がなくなった銀次は後頭部をガリガリ搔きながらどうするか悩む・・・目の前で目を輝かせている二人に気付かずに

「あゝ．．．なら、それまで家で寝てい「そうでござるか？　そうでござるか！　銀次殿は暇でござるか！！」．．．は？　何だ楓いきな「それなら私と一緒に回ろう銀次さん！！」え、ちょ、真名まで．．．ちょ、まった！　関節が極まってる！！　両腕の間接が綺麗に極まってるッ！！」

いでででっ！と悲鳴を上げながら銀次はその場を離れていった。残された導士は茶をズズツと啜り、居間からみえる真つ青な空を見て．．．、

「ふおおお、若いのはええの〜」

髭を撫でながら呟く。そのときたまたま通りかかった医刀・助が導士に向かつて一言言った。

「導士殿。そういうなればもう少し運動をなされてはいかかが？　あなたなら運動すればあと五十歳ぐらいは若返るぞ？」

「ふおおお、ワシはもう年じゃから無理じゃよ」

「百年ちよい生きてるくせによくいうわ．．．」

やれやれといいながら、医刀・助は自室に戻っていった。医刀・助は暇なときは部屋の中に籠り薬を作るのだ。

そして、また一人になった導士はまた一言呟く。

「．．．平和じゃのう」

ふおおおお、と独特な笑いをしながら導士はこれからの三人がどうなるかを頭の中で予想していた。それはまるで、孫の結婚式を想

像するような老人のようなものだった。

〳〳麻帆良祭・大通り〳〳

周りが騒がしく盛りあがってるなか、銀次と楓と真名は出店が並ぶ大通りを練り歩いている……のだが、

「むむ！？銀次殿！拙者あの饅頭が食べたいでござる……！」

「あ、銀次さん。私はあのチエロスを食べたいな？」

「……ああ、別に構わん、構わんのだが……」

銀次はもともと二人に甘い。何をやらかしても軽く怒るか拳骨一発で済ませるほど甘い……のだが、

「なぜに貴様らはまた（人のストライクゾーンである）巫女服を着ているんだ……！！」

「なにって……着たかつたらでござるよ」

「ああ、その通りだ」

二人は白々しく答える。そう、二人は前の夜のように巫女服を着ているのだ。銀次は巫女服が大好きで楓と真名はその銀次の趣味を部

屋をガサ入れして発見した。そしてこの前の晩に実行したが見事なまでに成功したためこのまま落してしまえ！と言う感じで二人は巫女服を着ているのだ。ちなみに仕事は二日目の休みも返上して働き三日目は丸一日休みにしてもらったらしい・・・その際背後に黒い気を出している色白美女と褐色美人がいたとかどうとか・・・。

「はあ・・・まあいいか。買いに行くぞ。んで、適当に回るぞ」

「「はい」」

作務衣を着た男と巫女服を着た美女二人・・・まわりからは様々な視線を受ける三人であった（特に銀次は男性陣に睨まれている）そこでふと、銀次はあることを思い出した。

「（そういえば・・・家計が厳しいって言ったら稼いでくるといつて働いている奴らが何人かいたな・・・）」

以前、何人かの変体刀に家計が厳しいとぼやいたら、「ならば稼いできます！」といって何日か前から働いている変体刀たちがいるのだ。その変体刀たちには銀次はかなり感謝している。

「（・・・せつかくだから見ていくか）」

こうして、銀次は饅頭とチェロスをパクついている似非巫女二人を連れて麻帆良散策にでた。

〳〳出店通り〳〳

「おお・・・やはりすごい人ばかりでござるな」

「ああ、まったくだね・・・あ、銀次さん。このたこ焼き食べさせてあげるよ」

「自分で食うからいいよ・・・それよりどこだったけか？」

銀次は横から伸ばされたたこ焼きを串ごと奪い、口の中に放り込みながらあたりを見回す。この出店通りで誰か一人ぐらい店を出していたはず・・・と思いながら銀次が探していると呼び子の声がしてきた。

「みなさんどうですかー？絶対に溶けない氷でできた氷細工。どれでもお一つ五百円でーす。みなさんどうですかー？」

「お、あいつは・・・」

銀次はこじんまりとした店を出している氷細工の店を見つけ、その店主を見て駆け寄る。楓と真名もなんだろうか？と思いながら近寄ると・・・、

「いらっしゃーあら？銀次さんに楓に真名じゃない。いらっしゃい」

そこで氷細工を売っていたのは平均女性よりやや背が高く、黒髪をポニーテールにした白と青を強調した着物で、ポニーテールの結び目には白い花の簪をつけている女性・・・の変体刀雪刀・吹雪がいた。なお、吹雪は戦闘時には刀に変わり、銀次が振るうことができる。

「おう、吹雪。いや、なに。お前らが桐野家の収入をしてくれているというからな……様子を見に来たんだよ。どうだ、繁盛しているか？」

「まあ、ぼちぼちつと行ったところですよ。そちらは……？楓と真名の美人二人も連れちゃってデートですか？妬けますね」

「そんなんじゃないやねえよ……こいつらが一緒に回りたいて言うから仕方なく一緒に回ってるだけだ」

くすくすと笑いながら三人をいる吹雪。吹雪は二人が銀次とくつづくのを望んでいる変体刀の一人でもある。それを聞いた楓と真名は頬を染めるも、さすがは銀次。鈍感さは双刀・鎚並だ。

その銀次の言葉に吹雪はふうー、とやたらと長いため息を吐き右手の人差し指で眉間を押さえる。

「……もう少し乙女心をわかってあげたら？銀次さん」

「ああ？それはいったいどういう意味だ？……てか、お前らは何しよぼくれてんだ」

吹雪に返ししながら、後ろでなにやらしよぼくれている二人に不思議な視線を送りながら銀次は吹雪に視線を戻す。

「まあ、頑張ってくれや。俺はほかの奴らを探してくるから……じゃあな」

「はいはい……（頑張ってね二人とも）」

「(うん・・・頑張るでござるよ!!)」

「(ああ・・・頑張るさ!!)」

さっさと行ってしまった銀次の後ろを、吹雪に後押しされた二人が駆け寄って寄り添う。そんな三人を見て吹雪は胸がズキリと少し痛むが、

「・・・私の幸せはあの三人が幸せになること・・・だから、私はあの人の幸せを作るのが仕事・・・」

作られて、心を持ち、そして人として生きれるになった吹雪。その心にはもちろん『恋心』も入るが・・・二人の幸せを考え自ら退くことにした。

それなのに、三人が歩いているのを見ると胸がもやもやするのは・・・、

「(未練がましい・・・なあ)ま、考えてみましょうがないかな・・・」

ふふ、と苦笑気味の笑みを浮かべるもすぐにそれをぬぎさり、

「絶対に溶けない氷細工如何ですかー？お一つ五百円でーす」

家計の足しを稼ごうとまたもや呼び込みを始める。

〳〳青空CD市〳〳

吹雪と別れた三人は、真名の要望でCD市に来ている。

「悪いね銀次さん。ちょうど欲しいCDがあったものだから」

「まあ、別にいいけどよ・・・買いすぎじゃね？」

真名の手には少し前に販売された有名バンドの音楽CDだ。しかし、その真名の手には十枚を越えるCDが積み重なっている・・・もちろん支払いは銀次持ちだ。

「てか、お前i pod 持っていなかった？」

「あれはあれ、これはこれだよ」

「はいはいそうですかい・・・ん？」

銀次が首を掻きながらあたりを見回すと、一人見覚えがある人物が写った。服は下はジーパンを着て、黒のTシャツの上にパーカーを羽織るというラフな服を着て、銀髪をストレートにしてその頭に青色のヘッドホンをつけながらCDを見ている少女・・・銀次はその少女を知っている。

「ん？どうしたでござるか銀次殿・・・うっ」

「どうしたんだい銀次さん・・・むっ」

音楽にはそこまで興味のない楓は手持ち無沙汰になっていたが、銀次の視線のさきにいる人物を見て思わず声を上げる。そこにいたのは・・・、

「よう楽。お前はやっぱりここにいたのか」

曲刀・楽 桐野家に呼び出されたら自立型変体刀の一人だ。超音波を使う変体刀で戦闘時にはバイオリンへとかわり、超音波の振動で斬ることができたり、相手の身体を内側から切り裂くこともできる。また弦で相手を絡めたり、隠し小刀で切ることもできる。

銀次が楽に話しかけるも、

「……」

まったくの無反応。楽は普段から無口であるが、まったくの無反応ではないのだが……。不思議に思った銀次だが、頭につけているヘッドホンを見てああ、と呟く。

「（音楽聞いているのか……。）おい楽。反応しろ」

「……あ、銀次さん……」

コツコツ、とヘッドホンのてっぺんを軽く叩く。するとようやく気付いたらしくヘッドホンを取り、首にかける。

銀次は苦笑しながら楽と話す。

「しっかしお前は本当に音楽が好きなんだな、楽」

「……うん」

「ん？そいえばお前そのヘッドホンまだ使ってるのか？随分とボロボロじゃないか……。新しいの買ったらどうだ？」

「……いらない」

銀次が目の前で一言二言しか話さない曲刀・楽と楽しそうに話してるところを楓と真名はヒヤヒヤしながら聞いている。なにせこの楽は……、

「……これ、銀次さんから初めて貰った大事な物……だから、いい」

「（ぐっ！）（）」

顔を赤く染めながら上目遣いに銀次を見る楽。そう、楽は銀次のことが好きなのだ。二人はその理由を知らないが、楽が銀次を見るときの目は明らかに女の目になるのだ。もちろん肝心の銀次はと言うと……？

「まあ、大事にしてくれんならいいけどな……なにせ、今の我が家は暴飲暴食魔人と家破壊魔共がたくさんいるからな……」

ふっ、とどこか空しそうに空を見る銀次……やはりこと恋愛に關しては鈍感である。まあ、楓と真名はときどきこの鈍感さに助けられるのだが……喜んでいいのか悲しんでいいのかわからない状況だ。

「ん、まあ俺はそろそろいくからな」

「……うん。また、後で」

銀次は手をプラプラさせながらその場から離れる。楓と真名が慌ててその後を追おうとするが、楽がポツリと、しかしハッキリと、二

人に言った。

「私は変体刀・・・でも、私は銀次さんのことが好き・・・あなた達と同じくらい、それ以上に、銀次さんのことが好き・・・だから、負けない」

「・・・・・・・・」

楽は首に掛けているヘッドホンを撫でる。所々のメツキがはがれ、セロハンで補修されているところもある・・・だいぶ使い込まれ、大事にしている証拠だ。

楓と真名は楽の宣言にフツと軽く笑い、

「望むところだ(でござる)」

そっくり残して、二人は銀次のあとを追う。楽はその場で三人の・・・というより、銀次の後ろ姿を見えなくなるまでジッと見つめ、呟く。

「・・・絶対に、負けない」

そういつてまたヘッドホンをつける。大事な、大事なヘッドホンを・・・銀次との大切な繋がりを。

～～～会場までの道すがら～～～

出店をそれなりに楽しみながら、三人はぼちぼち会場へと向かおうということでは会場に向かっているところである・・・のだが、

「でもなにやら歌ってるようにも聞こえるでござるが……」
いきなり響いてきた雑音に三人は耳を押さえる。あまりにも酷いものだから真名は機械の不具合とまで思ったらしい。

「音源はあそこか……？ちよつと行つてみるか」

試合までまだ多少の時間はある。見に行つても問題ないだろう。そう思った銀次はスタスタと音源に向かって歩いていった。楓と真名はその後を慌てて付いていく。

~~~~音源~~~~

「「「………」」」

いま三人は、この音源に来たところに激しい後悔を抱いている。なぜか？それはその音源と言うのが……、

『!\$”%\$#%”’&amp;mp;I&&\$#%+L><MGFB D  
ZSFYTKOI>LK?P?++|+L?+\*‘P!!!!!!  
!……!』

目の前で雑音を放っている四人……なのか？極一人だけはまだ人間だとわかるのだが……あと三人がなんなのかわからない。

でもわかることは一つだけ……この四人は銀次たちの知り合いだということだ。

「おい、ははは母母母!!!てんのすけ天乃助!!!ドンバツチ首領蜂!!!でんがくまん田楽満!!!お前らなにを

やっつてんだ!？」

耳を押さえながら、ため息を吐き銀次は自分が出せる最大の声量で話しかける。・・・こうでもしないとこの雑音に負けるからだ。そして一番最初に気付いたのはギターを持った、金髪アフロのグラスンである大男だ。

「おお、銀次かの。どうじゃ？調子は？飴ちゃんでも食べるかの？」

「いや、だからなんでお前は俺に対していつもお爺ちゃん口調なんだよ・・・？まあいいけどさ・・・てかこの飴くさっ!!なんだよこれ『ドリアンイナゴ味』ってなんだよ!」

獺のこともあり、いま麻帆良ではイナゴ味の食品が流行しているのか？と不思議に思いながら銀次は渡された飴を返す。

「まったく・・・まあ、飴とかどうでもいいとしてだ。なんでお前からこんなところで雑音を出してんだ？母母母?」

目の前の巨人に問いかける銀次。名前からなんとなくわかるとおり、この母母母と呼ばれた巨人は・・・変体刀だ。

鼻毛刀・母母母 四季崎記紀が作った変体刀で通称バカ変体刀の一本である。容姿は先ほど言ったとおり金髪アフロ。不思議なのは、なぜか銀次と話するときだけおじいちゃん口調になる。

「ふむふむ、雑音とは失礼じゃのう・・・これはワシらの魂をみんなに聞いてもらうためじゃよ・・・お前ならわかるだろう楓、真名」

「ただの雑音にしか聞こえなかったけど（でござる）」

「てか、なんで楓と真名は普通に話すんだ？」

楓と真名の発言に落ち込む母母母。なぜ二人には普通に話すのか謎に思う銀次。すると、母母母の後ろから二つの人物・・・なのか？片方はなにやら全身が微妙な青色というか・・・何かプルプルとした物体となにやら・・・小さいんだかわからない白い物体の変体刀が現れた。

「楓と真名か・・・銀次と一緒に何をやっているんだ？」

「パシリか？」

二人はその言葉のほうを向き二人の人物の名前を言った。

「あ、天乃助と田楽満ではござらぬか」

「君達も一緒になにやら雑音をだしていたのか？」

刃刀・天乃助 バカ変体刀の一本だ。見た目は青く、全身の95パーセントがところでんで残り5パーセントはなぜかゼリーの変な奴だ。でも実力は高く、高畑数人分に値する・・・のだが、その日その場所での気分によって戦闘力が変わるらしい。

もう片方は犬刀・田楽満 こちらもバカ変体刀の一本だ。本人曰く犬らしいが・・・まったくそんな風には見えない。しかも犬らしくなるためにテニスをしているらしいがどこに犬と関係あるのかわか

らないと銀次がたまにばやくらしい。

さて、そんな二本。実は楓と真名を自分の部下にしようと我策しているのだ。だからか楓と真名の言葉を聞き、二人の額に「怒り」「マークが浮かんだ。そして二人に詰め寄る。

「貴様ア!!俺の魂の叫びを雑音だというのか!!」

「舐めた口利くようになったなおいコラッ!!ちよつと歯食いしばれや!!」

拳を握り、楓と真名に殴りかかろうとした天乃助と田楽満だが、

「ガウツ!!!!」

『プワーンッ!!!!!!!!』

「ぐぎゃあああつ!!!!!!!!」

「あ、熊吉」

「象も・・・なんでここにいるんだ?」

現れたのはなぜか持ち主である銀次には懐かず、楓に懐いている暴刀・熊と、銀次にも懐いてはいるが真名にかなり懐いている巨刀・象である生物変体刀の二頭（二刀?）だ。熊は楓を殴ろうとした天乃助をベアクローで吹き飛ばし、象は真名を殴ろうとした田楽満を鼻で薙ぎ飛ばした。二頭は二人を護るように天乃助と田楽満の前に立つが・・・、

「わあ、熊さんだ!!」

「象さんもいるよ!!」

・・・二頭（二刀？）の足元にたくさんの子供が戯れているため迫力がイマイチ足りない。まあ、熊も象も子供たちには人気の存在だからな、と心の中で呟きその光景を見ながら銀次は苦笑と呆れが混ざった笑みを浮かべていると銀次のとなりに最後の一振りのバカ変体刀が現れた。

「銀次・・・てめのその主役のポジションを寄越しやがれ!!」

「はあ？なに言ってるのお前？」

金平刀・首領蜂 見た目はなにやら太陽のような金平糖のような・・・とにかく丸くてトゲが生えている。謎の変体刀だ。しかし、その実力はかなり高く銀次と対等に戦える数少ない変体刀だ。

さて、その首領蜂。銀次のその言葉を聴くと声を大にして、

「うつせえな!!お前俺より地味な癖しやがって俺より目立ってるじゃん!!そこが気に入らないんだよ!!だから・・・死ねやー!!」

「それだけの理由で殺されてたまるかボケツ!!」

どこから取り出したかわからない食刀・葱と呼ばれる・・・見た



目まんま葱の変体刀を振りかぶり銀次に切りかかろうとしたところを、

「「させるか(ないでござる)!!」」

巫女服にも関わらずすごいとび蹴りを首領蜂に叩き込む楓と真名が現れた。その際に袴の隙間から見えた二人の肌を見て、目を逸らす銀次がいたとかどうか……。

「「ぐべぐべぐべッ!!!!」」

首領蜂はなにやら変な声を上げながら地面を転がって行って、最後に壁に激突した。首領蜂はぐぐぐと顔(体?)を持ち上げ楓と真名を睨む。

「くっ……なによつ。何なのよあんた達!!私に主役の座を明け渡さない上にヒロインの座まで渡さないいうの!?!ヒロインの……ヒロインの座は私のものよ……!!!!」

「「「いや、主役かヒロインどっちかにしろよ(しなよ)(するでござるよ)」」」

銀次、楓、真名の三人の声が見事までに綺麗に重なり、それに頬を染める楓と真名。

「(銀次殿と声が重なったでござる……むふふ、これはいけるでござるよ……!!!!)」

「(銀次さんと声が……ふふふ、やはり私と銀次さんの相性はいいんだな)」

「（・・・なにやら寒気が・・・気のせいか？）まあ、あまり人様に、迷惑の掛からないようにな？」

最近随分と寒気を感じるなア、と思いつながら倒れているバカ変体刀たちに一言言い残し、銀次は会場へと歩いていった。楓と真名もその後が続く。

〳〵武闘大会・会場〳〵

「さて・・・武闘大会にきたわけだが・・・なんでお前らがここにいるんだ!!」

「なんでって・・・戦えるって聞いたから」

「私もだ・・・己がどこまで強くなったか試したかったからな」

銀次の目の前にいる二人・・・いや二本はそうだった。片方は以前にも登場した華刀・紅。『虚刀』に主眼を置かれた赤髪の少女だ。余談だが、楓と真名はこの紅を楽と同等ブラックリストに載せている。別に紅は銀次が好きではないのだが・・・紅の持つてる二人以上の究極兵器アルティメットウェポンでいつ銀次が墜落されるかわからないからだ。少女変体刀は美少女が多いため、楓と真名はヒヤヒヤしてならない。しかも楽のように銀次に惚れている変体刀も何人かいるのだ。

そしてもう一人。こちらは本当に銀次が厄介だと思っっている人物だ。ぱっと見は東洋人・・・白髪である髪の毛を辮髪にして、中国の民

族衣装のようなものを着た若い男性のように見えるが……もちろ  
ん変体刀だ。

拳刀・闘士 『素手で戦う刀』というところに主眼が置かれた変体  
刀だ。その腕前はかなりのもので、銀次でさえも出遅れてしまうほ  
どの腕前だ。

「まあ、安心しろ。私は賞金なんぞ興味はない。あるのはただ強い  
者と戦えるかどうかのみだ」

「私もそうですね……。でも、ちよくとだけお金が欲しいな。なん  
て」

タハハ、と苦笑する紅は右手で後頭部をポリポリ掻く……。そのた  
びにその究極兵器がアルティメットウエポンタウントゥンとゆれるので周りの男性陣は釘付  
けだ。銀次と拳刀は別だが。

「（（ギロリッ！））」

「（っ！……なんだ！？最近、本当に寒気を感じるときが多  
いな……）」

「（……やはり気付いていないか……。ま、私には関係ないこと  
だが）」

『これより、武闘大会を開始します。参加選手は今からランダムに

決められるトーナメント表で決めますので、ご了承ください』

今回の大会参加者は銀次、紅、闘士含めて十二人。だからトーナメント制なのだろう。アナウンスが言うと、モニターに名前と顔写真が現れ……決まった。

『えー、第一試合！真庭拳法・桐野銀次選手 対 喧嘩殺法・豪徳寺薫選手！！』

「お、なんだ一番手か」

「がんばれでござるよ銀次殿！！」

「頑張つて銀次さん！！」

「頑張つてくださいね」

「頑張つてくだされ」

四人に声援を送られ、銀次は闘技場へと向かう。

〳〳闘技場〳〳

『それでは第一試合 真庭拳法・桐野銀次 対 喧嘩殺法・豪徳寺薫！！……試合、はじめ！！』

軽い紹介をされたあと、すぐに試合が開始された。銀次の目の前にはなにやら一昔前のヤンキーのような格好をしたリーゼントの男が立っており、

「真庭拳法つてのは始めて聞いたが・・・おもしれエ!! 受けて立つぜ!! 食らいやがれ」喧嘩殺法未羅苦流究極闘技!! 超必殺漢魂!!」

豪徳寺の拳から放たれた気弾は真つ直ぐと銀次目がけて飛んで行くも、

「よつと」

簡単にかわされてしまった。気弾は遠距離攻撃に便利だが、銃と同じで真つ直ぐにしか飛ばないため、見切ればどうともない。なに! ?と驚く豪徳寺の懐に銀次は素早く入り込み、

「シッ!」

「ぐっ!」

ドゴツ!! と鈍い音をさせながら、豪徳寺の腹部に膝蹴りを叩き込む。踏み込んだ勢いと蹴り足の速度が合わさり、その威力は絶大なものになる・・・もちろん突き込まず途中で膝は引いた。そのまま突き込んでいたら豪徳寺の内臓は破裂するからだ。

そして、あまりにも早く倒された豪徳寺に回りはポカーンとするばかりだ。そこで慌てたようにアナウンサーがカウントをとる。

『・・・7、8、9、10!! 豪徳寺選手ダウン!! なんと!! なんと!!』

とでしよう！！本大会優勝候補の一人である豪徳寺選手がただ一蹴でやられてしまいました！！しかもその相手は学園関係者ではない一般人である謎の拳法使い桐野選手によってです！！』

まわりは騒然とするも楓、真名、紅、闘士は当たり前だといった風に銀次を見ている。そこにさらに二人加わる。

「あいやー、さすがアルネ、銀次さん」

「本当ネ、銀次さんは敵なしヨ」

訛りのある日本語で話しかけてきたのは、

「おお、古にり・・・超じゃないか。どうしたんだこんなところで・・・って、いるのは当たり前か」

そついいながら二人のほうに苦笑を浮かべながら見る銀次。危うく超の本名を言ってしまうところだった。

「当然アルヨ！！こんなに面白そうな試合、しかも銀次さんがいるとなればなおさらネ！！」

「私はただ観戦にきただけヨ（というより銀次さんと紅姉さんと闘士さまがいるのにでるなんて・・・自殺行為だよ）」

ただ純粹に銀次と戦いたいと思う古、自らその戦場から身を引いた超。この場合、超の考えは正解だろう。

あと楓と真名だが、この二人はいつでも組み手ができるということで、今大会は辞退した。

最強の忍者の剣士と、虚刀と世界中の格闘技を極めた少女変体刀、  
そして素手の実力なら銀次を越える拳法使いの変体刀。そして拳法  
使いの少女……はたして誰が優勝するのか？

## 第十八話（後書き）

如何でしたか？まだ学祭通続くんかい！！というツッコミはスルーのほどを。一応次回で終わらせる予定ですが、こと戦闘ごとになると長くなるのが私、銀閣ですのでもしかしたら次回、次々回と学祭続くと思われます。そしてその後には大静肅戦、夏休みの小話、そして一気に飛んで原作突入としたいと思ってます。それまで暖かい目で見守っていてください。

あと、まだ今週のマガジンを読んでいない人もいますけど・  
・あえて聞きます。今週のネギまの楓がカッコいいと思って涙を流しそうになった人いますか？私は流しそうになりました。てか、流しました。まじカッコよかったよ楓・  
・でも、銀次があの場合にいたら間違いない魔法世界が焦土と化してますね、絶対。  
ネギはいつたことを守らないゲスだと改めて認識・  
・絶対あいつ  
苛め抜こう。

さて、次回！数いる強豪を蹴散らす四人！！その四人が戦うことに・  
・  
・！！はたしてどうなる武闘大会！？今まで以上の熱い戦いが繰り広げられるのか！？それでは次回でお会いしましょう！！

今年も忍の剣士をよろしくお願いします！！



最後に変体刀の案をくださったふかやんさん、パルパレーパさん、  
アルマース・フォン・アルマディン・アダマントさん、黄色い  
のなにかさん、ありがとうございました！！

第十九話（前書き）

最近、もう銀次はハーレムでよくな？と思いはじめた銀閣です。

今回は楓と真名が壊れています（笑）

それではどごごぞー！！

## 第十九話

〓〓麻帆良祭・三日目 武闘大会〓〓

毎年行われるこの武闘大会。賞金百万円を求めて多くの格闘家が参加するこの大会・・・今年は四人の参加者で盛り上がっている。

『さあさあさあさあつ！！みなさん大変なことになりました！！今年の大会は多くの参加者がいましたが、その中でもある四人がものすごいですよーっ！！』

わアーーッ！！と盛り上がる観客。その観客の声に負けないぐらいの声を張り上げ、アナウンサーも声を出す。

『それでは勝ち上がってきた四人の猛者達を紹介しましょう！！まずは一人目！！我らが麻帆良学園が誇る最強の拳法娘！！中国拳法研究部古選手！！』

『『『『『『わアーーッ！！！！！！！！』』』』』』

「アハハ！。照れるアルー」

古は気恥ずかしげに笑いながら後頭部を掻く。あまりこつというのは会わないのだろう。

『やはり初々しいですねー。続きまして紹介いたします三人はなんと外部からの参加者！！その三人の中で唯一の紅一点！！揺れる乳が相手を魅了する女選手！紅選手！！』





「うむ・・・どれほどの腕前か・・・楽しみだな」

ぺこりと一礼して古を見る。周りの声援に答えないが、そこがいいのか女性陣は声を上げる。そして、両者は相對して、礼をして構える。

『それでは両者構えて・・・初め!!』

古と闘士の戦いの火蓋が切って落された。

「・・・」

「・・・」

古と闘士は互いににらみ合う。古はすでに構えているが、闘士は

「・・・」

「・・・構えないアルか？」

闘士は構えていないただ両腕をダランと下げ、足は肩幅まで開いている・・・とてもじゃないが構えている風には見えない。だが、これが闘士の構えなのだ。

「さて・・・君が私に構えさせることができるか・・・それを見るだけだ」

ようは腕試し。古は闘士に構えさせることができるほどの腕を持っているのか、という試練だ。普段の古なら頭に血が上るだろうが、古は闘士から発せられる闘気に飲まれつつある。そして、闘士が一步踏み出し、

「隙だらけだぞ」

ドゴンッ！！

「カツ……？」

一体何が起きたのだろうか？周りの者はまさにそう思っただろう。先ほどまで古と闘士の距離は大体3〜4メートルはあったのだ……なのに。なのになぜ……、

「何で……李選手が古部長と密着しているんだ？」

李と古は……いや、李が古に身体を……いや、正確には『右拳』を密着させていた。そして異質なのは先ほど闘士が立っていた前のほうの地面に二つの窪みができていた。それを見た銀次が呟く。

「縮地からの崩拳……か」

縮地とは相手との距離を一気に縮める技で、その仕方はいたって単純。強靱の脚力を使い初速から最高速度を繰り出し相手の間合いを詰める……といえば簡単だがそれにはかなりの修練が必要なのは絶対だ。崩拳は何なのかは言うまでもないので省かせてもらう。闘士は縮地で即座に近づいて、古に崩拳を叩き込んだのだ。

縮地によるスピードと突進力、そして崩拳による破壊力。これが合  
い混じって強力な突きへと変わる。常人ならたとえ防弾チョッキを  
着ていようと内臓破裂を起してしまうほどの破壊力だが、古は鍛え  
てるうえに気で体を強化していたから無事だろうが・・・ただでは  
すまないだろう。

「・・・審判。カウントをとらぬのなら私は追撃をするが・・・？」

『え・・・あ、はい！！カウントを取ります！！1、2、3、4、

・・・』

闘士に促され、アナウンサーがカウントを取る。その間、闘士は両  
腕をプランと下げたまま倒れた古を見ている。その間、古は地面を  
もがき、立ち上がろうとするが・・・先ほどの一撃がよほどうまく  
決まったのか、カヒユツと息を搾り出すような声を上げながら立ち  
上がるようにする。それを見て闘士は驚く。

「ほう・・・手加減したとはいえ、私の爆地崩拳を受けてなお立ち上  
がるうとしようとは・・・その気迫やよし」

「・・・くっ・・・はア・・・」

『6、7、8、・・・』

「だが、君はまだ若い。そして弱い。しかし、恥じることはない・  
・それが人なのだから・・・だから・・・」

「・・・」

『9！！・・・10ツ！！試合終了！！勝者、李選手！！』



「もつと強くなりなさい。君なら必ず強くなれる・・・そのときにまた相手しよう」

周りから上がる歓声のなか、闘士は悠然とその場を後にする。残された古は痛む身体を起しながら、去っていった闘士の背中を見つめ、声にならないほどの小さい声で、答える。

「・・・八・・・イ」

その後、すぐに古は気絶してしまうが・・・その顔は非常に楽しそうだったと担架を運んできた医務員が言っていたとかどうか。

（～選手控え室～）

「闘士が勝った・・・か」

「ええ・・・やはり凄いですね闘士は・・・」

控え室でその光景を見ていた銀次と紅。なお、楓と真名は先ほどまでこの部屋にいたのだが、銀次の試合が近いというのもありなにより残念そうな顔をしながら部屋から出て行った・・・その際楓が『銀次殿・・・間違っても変な気を起したらダメでござるよ?』と言われたらしいが・・・もちろん本人はわかつちやいない。首を捻りなんのこつちゃ?と考えたぐらいた。

しかし、今の銀次はそんなことはどうでもいい。いまは目の前の女性・・・もとい変体刀に集中している。

「わかってると思うが紅・・・試合では「手加減無用・・・でしよう？それぐらいバカな私でもわかりますよ」・・・さすがだな」

銀次は、自らをバカと言つてなにやら自慢げに胸を張る紅に、苦笑いを浮かべる。

「まあ、ちゃんと理解していればいいんだ。どっちにしろ俺がお前か闘士と当る・・・ただそれだけだからな」

「ハハは・・・銀次さんと戦うのもツライけど、闘士と戦うのもつらそうだなア・・・」

そうなのだ。闘士は『素手で戦う』ことに主眼を置いた変体刀。つまりは徒手格闘技のスペシャリストだ。銀次も紅も素手ならそんじやそこらの奴らに負ける気はしないが・・・闘士が相手だとわからない。何せ銀次ですらで遅れるときがあるくらいだからだ。

「でもまあ・・・やるしかないよなア・・・」

「ええ・・・それが私達ですから・・・」

二人して軽く笑い、立ち上がる。その顔にはもう、いつもの表情は無い。あるのはタダ一つ、『相手を倒す』という表情だけ。

『さあ、続きまして決勝戦進出第二試合！！紅選手と桐野選手の戦いが始まります！！紅選手と桐野選手は入場ゲートにお向かいください！！』

「・・・いくか」

「・・・はい」

二人は会場へと向かう。そして観客は武術とはどのようなものなのかというのを再確認するだろう。

～～会場・応援席～～

会場に設置された応援席。この最前列に二人の巫女服を着た美女（年齢的には美少女だが）が座っていた。楓と真名である。

楓と真名はあることを心配していた・そのあることは・・・？

「楓・・・銀次さんは紅さんに手は出していないだろうか？」

「大丈夫でござるよ・・・銀次殿は巫女服ふえちでござるからチャイナ服には興味がない・・・はずでござるが・・・」

そこで言葉を切った楓はギリツと齒軋りをする。そして血を吐くかのように言葉を続ける。

「・・・紅殿のあの究極兵器・・・あれがあるだけでわからぬでござる・・・」

「確かに・・・あれは殺人兵器だからね・・・」

互いに脳裏に浮かぶ紅の究極兵器。あれは楓と真名でも勝てないほどの兵器である。二人は2-Aでも上位に食い込む胸の持ち主だが・

・紅のそれと比べ物にならない。  
なお、銀次は別に巨乳趣味ではないのだが・・・二人が発見した銀次の『秘密の絵本』の巫女服を着た女性が全員巨乳だったため、巨乳趣味だと思ってるらしいのだが・・・ようはタダ勝手に巫女服が好きで胸のでかさは気にしてないのだ。まあ、年若い二人。早とちりというのもあるし銀次が鈍すぎるというのもあるだろう。

「まあ・・・ここは銀次殿の鈍感さに掛けること以外ないでござるが・・・もし手をだしていたら拙者がその『汚れ』を丹念に、じっくりと拭うでござるよ・・・ふふふ」

楓は顔を多少赤らめながら自分で自分の身体を抱く・・・なにやらブツブツ呟いているが、会話のないようがあまりにも過激なため省かせてもらう。しかし、その言葉を聞いた真名は対抗するかのよう、

「ふっ・・・なら私はその重なった『汚れ』をさらに丹念に、入念にじっくりとねっとり拭うでしょうか・・・ふふふ」

真名も楓と同じように顔を赤らめさせながら、自分で自分の身体を抱きしめる。さらにその話の内容が楓と同等・・・あるいはやや上のためこれも省かせてもらう。もちろん真名の発言に楓が黙ってるわけがなく・・・。

「むっ・・・なら拙者はさらに丹念に嘗め回すように拭うでござる」  
「むっ、なら私はそれ以上に入念に皮膚が裂けるくらいまで拭うよ」

「むむっ、なら拙者は・・・」



を上げようとしたが・・・やめた。なぜか？それは入場してきた紅の表情を見たからだ。

「・・・・・・・・」

紅の表情・・・それは先ほどまでの試合で出していたような表情ではない。先ほどまでは朗らかで、優しく接する女拳法家ではなく、目の前の獲物を狩る女豹のように見えたからだ。さすがのアナウンサーもその変わりっぷりに驚いていたが、そこはプロ。会場の中で一番最初に戻ってきた。

『な、なにやらものすごい迫力ですね。これは試合のほうもかなり期待できそうです！！続きましては！！先ほどから巫女二人をばべらしている不健康そうな謎の拳法使い！！桐野銀次選手！！』

さっきとは打って変わって、今度は銀次にブーイングをしようとした観客・・・だが、

「・・・・・・・・」

こちらも、まるで何か獲物を狩る鷹のような目をして正面を見ている。いや、その不健康そうな顔が相まってかまるで亡霊のようにも見える。これにはさすがのアナウンサーも口を閉ざしたままだ。

それを見ていた楓と真名も息を呑む。そして理解する。二人のあの目は・・・本気だということ。

「まさかあの二人・・・ここで本気で戦う気でござるか？」

「まさか・・・でも二人のあの目は・・・」

楓と真名は以前銀次と紅の組み手を見たことがあるのだが・・・それは正直格闘技ではない。かといってストリートファイトでもない・・・所謂実戦のみを追求した武術そのものだ。

「まあ、節度を持ってやるとは思ってござるが・・・」

「あまり期待は出来ないね・・・」

『そ、それでは両者構えて・・・はじめ!』

などおぼやくように言う二人を無視するかのように、試合は始まった。

「(まずは様子見て順突き<sup>ジャブ</sup>) シツ!」

開始の合図とともに銀次は紅との間合いを一気に詰める。そして牽制気味・・・ではなく明らかに一発狙いの順突きを放つ。しかし、銀次にとってはこれが牽制気味のジャブなのだ。そのスピードは速く、よほどの達人でないと避けられないだろう。しかし、

「ホッ!」

紅はそれをバック転の要領で避ける。そしてここで止まらないのが変体刀だ。紅は地面に手をつけるやいなや、膝を抱えるように曲げ、反動を使い、

「はア!」

ドロップキックの要領で蹴り上げる。揃えられた両踵が銀次の顎目掛けて飛んでくるも、銀次は寸でのところで避ける。そして、銀次は紅の足を掴み、逃げられないようにしたあと紅の頭目掛けて廻し蹴りを叩きこもつとするが、

「フツ!!」

紅は腹筋を利用して起き上がり、その攻撃を避ける。ポヒュツ、という音が鳴ったところを見ると今のは極めるつもりだったらしい。

「チツ!!」

銀次はすぐさま蹴り足だった右足を地面に踏ん張らせて紅を投げ飛ばそうと思ったが、紅の掴まれていない右足の膝が銀次の独古（耳の後ろ側にある人体急所）目掛けて繰り出す。うまく当れば銀次は身体を麻痺させることになる。

だが、銀次も忍の剣士の端くれだ。その攻撃を首を傾げる様に避けやり過ごす。そして空いている右手でその足を掴み、

「ドラアツ!!」

振り上げたものを地面に叩きつけるかのように紅を叩きつける。頭から思いつき叩きつけたため、ダメージは計り知れないだろうが、

「~~~~~っ!!!!痛いですよー!!!!」

「痛いようにしたんだから当たり前だろうが!!!!」

滅多やたら攻撃では倒れない。それが変体刀だ。ジンジンと痛む



のか、顔を赤くして涙目になりながら銀次に文句を言う紅。しかし、銀次はそんなことは気にせず次の技に移行する。

銀次は倒れている紅の右足を掴み、己も地面に倒れ紅の足を抱えるように足でも抱え、

「フッ!」

「いぐッ!」

膝十字固め。柔道ではその危険性から禁止されている禁じ手だ。もし、極めたあとさらに力を加えれば紅の膝は枯れ枝の如く簡単に折れるだろう・・・だが、

「ガッッ!」

突然。銀次の足に激痛が走った。その激痛で思わず力を緩めてしまう。紅はその隙を見逃さずすぐさま銀次の関節技を外す。そして片膝立ちになるやいなや、右拳を握り締め掲げる。

「（こいつは・・・マズイ!）」

銀次はほぼ直感的に転がり、その攻撃を避ける。

ドゴンッ!!

避けたとほぼ同時に、拳が振り下ろされ地面を『陥没』させた。それを見て銀次は背筋に冷たいものが走ったが・・・そんなことは気にしてられない。銀次は即座に立ち上がり、片膝立ちになってい

る紅目掛けて前蹴りを叩き込む。腰の乗った利き足での前蹴り。鳩尾か顔面にも決まればそれで終りだろう。しかし、

「ンッ!」

ドゴッ!」

紅は避けられないと思ってか、両腕を顔の前に交差させてその攻撃を受ける。ミシミシッという音こそ聞こえたが、完全には決まっていない。それは紅が自ら飛んで威力を軽減させたというのもあるが、何より先ほどから左足に走る激痛のせいでもあった。後ろに飛んだ紅に注意を払いながらも銀次は自分の左足を見る。

左足のアキレス腱の辺りだろうか？そこに何かで切りつけたような・  
・いや、『抉られた』ような傷後がある。そして改めて紅のほうを見ると、

「(なるほど)爪」・・・か」

紅の右手の人差し指と中指・・・その2指が赤く染まっている。先ほどの膝十字固めるときに手を伸ばし手近にあった銀次の左足に爪を食い込ませ、抉ったのだろう。爪は時に刃物以上に恐ろしい武器になる。何せ刃物は『切る』ことによって『鋭い痛み』を与えるが、爪は『抉る』ことによって『鈍い痛み』を与えるのだ。筋肉束をただ両断されると抉られて削られると・・・どちらが痛いかはいうまでもないだろう。

おそらく紅はアキレス腱ごと抉ろうとしたが爪の長さが足りない上に体勢が振りだったため表面の肉を抉るだけになったのだろう。さ

すがの銀次もアキレス腱を抉られれば一溜りもない。

「・・・やはりやるなお前は・・・」

「銀次さんこそ・・・普通切られていないとはいえ立つのがツライ  
と思いますよ？」

紅はこれまた苦笑いをしながら聞く。銀次は多少不機嫌そうな声で  
答える。

「ツライに決まってんだろつが。今でこそ右足に体重掛けてる状態  
なんだよ」

「あはは〜・・・それでもあんなに強い蹴り放てるなんて凄いです  
ね〜」

「膝痛めてるお前にそんなこと言われても褒められた気がしねえよ」  
そうなのだ。紅は先ほどの膝十字で右ひざを痛めている。にも関わ  
らず、立っているのだ。さすがに心の中で化け物めと言っても許さ  
れるだろうと思いつながら銀次は構える。

「さあ、まだ試合は終わってないからな・・・いくぞ」

「はい！」

互いに痛む足を引きずるように走りながら間合いを詰め、拳打を放  
つ。正拳、裏拳、貫手、手刀、熊手、バラ手、鉄槌、肘。次々と  
拳の形を変えながら二人は捌き、受け、そして攻める。次第に互い  
の手が赤く腫れだす。顔や胴体に赤い筋が走る。そしてその攻撃も

受けもすべて早すぎて周りの者は付いていけない。何とか付いていけるのは楓と真名。そして先ほどから銀次の試合を様々な角度から超小型液晶カメラで盗さ・・・記録している超だけだろう。

しばらく、ほとんど無酸素状態で拳打を放ち続けた銀次と紅は最後に互いの拳をぶつけ合わせ、その場を飛び下がり、体の中に酸素を吹き込む。さきほどから悲鳴を上げていた心臓と脳は酸素が運ばれてか落ち着いてきた。そして互いににらみ合う。

「・・・次で極めるか」

「そうですね・・・」

互いに拳を構え、腰を落とす・・・間合いを詰める。そして、

「ハアツ!!」

互いに拳を繰り出す・・・が銀次はすぐさま拳を引き、膝蹴りを繰り出す。紅はその攻撃の変化が急すぎて対処できなかったのか、驚いたような顔をしてその攻撃を腹部に受けた。

「うぐっ!!」

「まだまだ!!」

また膝を引き今度は顎目掛けて蹴り上げる。紅の顎が跳ね上がる。だが、追撃を止めない。以前ここまでやっても反撃してきたため油断できないからだ。そしてその期待を裏切らないように紅は反撃をする。

「ッハアアアアツ!!!!」

打ち上げられた頭を踏み込みながら振り下ろす。赤い髪が銀次の額目掛けて振り下ろされ、命中する。

「ツてえな！！ヘッドバッドはなしだろ！？」

「銀次さんも顎に向かって膝はなしでしょう！！」

互いに膝をがくがくさせながらも、二人は睨みあう。そして今度は、

「これで……」

「終わりです！！」

互いに駆ける。そして互いの得意の一撃を放つ。

「虚刀流二の奥義！花鳥風月！！」

紅は右手の指を真っ直ぐに伸ばした貫手を繰り出す。紅の貫手は装甲車両のドアをも貫いてしまう。マトモに当れば一溜りもない。紅は”虚刀”に主眼を置いた変体刀。虚刀流が使えるのもどうりだ。しかし、それは完了の虚刀流ではないため、雑な部分がいくつもある。銀次はあえてその攻撃に飛び込む。もちろん当たらないように飛び込むそして身体を地面すれすれまで落した後、

「虚刀流三の奥義……百花繚乱！！」

こちらも型破りの虚刀流の奥義を放つ。ほぼ真下から放つ膝蹴り。どちらかと言うとフルコンタクト空手の飛び膝蹴りだ。まるで槍の

如く放たれた膝は紅の顎に吸い込まれるように入っ  
ていき、

ドゴツッ！！

「うがつー！！」

紅の顎が、跳ね上がる。紅の体がある場で一mぐらい飛び上がり、落ちる。ドサツ、という音を立てる。銀次はその場で着地して残心をとるも・・・どうやらその必要はないらしい。

「あゝ・・・また顎に膝・・・銀次さんそんなだと女の子に嫌われちゃいますよ？」

多少顔をぐぐつとあげ、微笑しながら銀次のことを見る紅。さすがの紅も顎に膝を二発もぶち込まれて無事ではすまないだろう。紅の言葉に銀次はフンツ、と鼻で笑う。

「余計なお世話だ。第一、花鳥風月を放ってきた奴の台詞か？それ・・・」

「タハハ・・・確かに」

今度は苦笑しながら銀次のことを見る紅。気付けばアナウンサーがカウントをとっている。でも、紅は立ち上がることはしない。かなり激しくやられた為、まともに体が動かないのだろう・・・これは医刀か桐野家のマッドサイエンティストに任すしかないだろう。

『……7、8、9、10！！試合終了オー……ッ！！！！あまりの激闘に驚かされ解説を忘れてしまいましたか！！かなり凄い試合でした！！その激闘を勝利したのは桐野銀次選手です！！』

『……ワアア……ッ！！！！！！』

歓声が上がる。やはりあそこまで凄い試合を見せられたらちゃんと激励を送らなければいけないとでも思ったのだろう。先ほど罵声を上げてた連中も歓声を上げている。

銀次はそれに少しばかり気恥ずかしさを持ちながら頬を掻く。

『さあ、おもしろいことになってきましたよー！！！！美女拳法家紅選手を打ち負かし、決勝戦進出したのはみなさまの期待を裏切り桐野選手！！ついでに言いますとトトカルチャは紅選手9の桐野選手1でしたので桐野選手に賭けた方はぼろ儲けですね』

「……誰だが大体わかるな」

「ええ……そうですね」

二人して苦笑いしながら観客席に固まっている三人を見る……誰かは大体わかるだろう。そして、銀次はその三人を見た後、別のところから見ている次の対戦相手を見る。

「さて……次はお前とだな……闘士。首洗って待ってるよ」

聞こえるような距離とは思えない。しかし、銀次がそう呟くと闘士は確かに首を縦に振ったように見えた。

『さあみなさん桐野選手の回復を見ることで、二十分間の休憩を取りたいと思います。それまでに用足し、買い物をお済ませください！』

アナウンサーの声で、観客はぞろぞろと客席から離れたり、その場に残って話をしたりするものがある。

次に行われるは最強の忍の剣士と最強の拳法家。はたしてどちらが勝つか・・・決勝戦、始まる！！

~~~~客席~~~~

楓と真名、そして超が客席から離れずなにやら向かい合っている・・・何をしているのかと言つと、

「た、頼むでござる超！その写真を拙者に・・・！！」

「いや、私にくれ!!」

「絶対にやだヨ!!これは私がひしこいて撮った写真ネ!!たとえば楓サンと真名さんでも渡さないヨ!!・・・フッフ、銀次さん・・・」

二人の手から守り抜いてうっとりとした顔で手にある写真を見る超。そこには先ほどまで戦っていた銀次と紅。そして他の対戦者と戦っている銀次の写真だ。

その恍惚そうに写真を見ている超に二人はブチッ、という音を鳴らし懐から愛用の変体刀を取り出す。

「超・・・その写真を寄越すでござる」

「すぐに私に渡せ・・・そうすれば命は助ける」

「おや、いいのカ二人とも？私は未来から来た完了形変体刀虚刀・鑢を元に作った擬似変体刀。二人の武器が変体刀なら私の敵ではないネ」

超は鈴蘭の構えをとり、二人と相對する。そして三人は不適な笑みを浮かべ、

「「「いくぞ(でござる)(ネ)!!!」」」

乱闘が始まった。

「・・・なにやってんだ？あいつら・・・」

「さあ・・・？」

そこから離れたところで見ていた銀次と紅は首を傾げながらその光景を見ていたとかどうとか・・・。

第十九話（後書き）

どうでしたか？久しぶりの戦闘描写を書いたので、うまく書けたか心配です。

楓と真名が壊れてる？ふふ、後悔はしていない！！

さて次回！！今度の今度こそ学園祭終了！！紅との激戦を繰り広げた銀次！！決勝戦の相手は銀次ですら手こずる拳法使いの変体刀、拳刀・闘士！！はたしてどうなる武闘大会！！そしてどうなる銀次！！

いま、麻帆良学園の歴史に新たな歴史が生まれる。

それでは次回！！

最後に変体刀の案をくださったふかやんさん、パルパレーパさん、完全怠惰宣言さん、ありがとうございます！！

第二十話（前書き）

最近、秋葉原で武器関連の本を大量購入してしまった銀閣です。

さてさて、今回でやっとこさ学園祭編終了です・・・長かったな。
最後の闘士との戦い・・・はたしてどうなるのか!？

誤字訂正しました。

それではどうぞー!!

第二十話

〓〓闘技場〓〓

最初こそそこそこ人が入っていた闘技場の観客席。しかし今では座ることはもちろん、立っているのでさえやつのように人が乱雑と
している。どうやら試合の話が広がりそれを見ようと人が押しかけ
たのだらう。

しかも次の試合が、

『さあ、例年以上に盛り上がっていますこの武闘大会！！今日この
試合を見れたあなたは本当に幸せ者ですよー！！先ほどの激戦
を見た方はもっと幸せでしょう！！人間と人間が限界を超えた戦
いを見れるのですから！！』

「正確には人間対変体刀だけだな」

「確かに」

「そうでござるな」

「その通りネ」

苦笑いしながら言う銀次の左右には巫女服を着た楓と真名。そして
チャイナ服を着た擬似虚刀・鈴こと超鈴音が銀次の後ろに立ってい
た・・・そしてなぜか三人はボロボロである。

「・・・なんでお前らボロボロなんだ？」

「「「気のせいだよ（でござる）（ネ）」「」」

明らかにボロボロなのにそのようなこと言われても・・・という銀次であるが、深くは聞かないでおこうと思った。なにやら三人の懐から数枚の紙が見えたような気もするが、気のせいだろう。

「まあ、それは別にいいとして・・・次の試合は油断もできねえな」

銀次は視線を移す。移した先には先ほどから女性陣に声を掛けられるも、集中しているせいかまったく無反応の拳刀・闘士が黙々と座禅を組んでいた。

「銀次さん・・・勝算はあるの力？」

「あるにはある・・・が、失敗する恐れがあるな」

何せ相手は闘士だ。素手でもそれなりの自信がある銀次でも勝てるかどうかわからない。それを聞いた楓と真名、超の三人は唸る。

「ふむ・・・闘士殿は生半可の攻撃では倒れないでござるからな
」

「確かに・・・銀次さんとの勝負はだいたい五分五分だしね」

「私も拳法は闘士様から習ったからネ」

三人とも闘士の強さを理解しているためどう銀次が勝てるだろうか？としばらく唸るも、

「ま・・・考えても仕方ねえ。俺は俺の全力をぶつけるだけさ」

そういいながら銀次は首を鳴らしながら立ち上がる。その言葉を聞いて三人が軽く笑い、

「それでこそ銀次殿でござる」

「ああ、そうだな」

「そうネ。さすがは銀次さん」

三人のその言葉を背に受け、銀次は闘技場へと向かった。

いまここに、新たな歴史が生まれる。

〳〵闘技場〳〵

『さあみなさん！！お待たせしました！！本日のメインイベント！！数ある強豪をなぎ倒し、そして数ある女性を虜にした美男子拳道家！！李選手！！』

『『『キヤアーーーーーッ！！！！！！！！！！』』』

「.....」

周りの歓声がまるで聞こえていないように闘士は無言で抱拳礼をす

る闘士。

『対するは先ほど紅選手と熱い戦いを見せてくれました、美人巫女二人を引き連れている桐野選手!!』

『『『『ワアア（ブウ）—————ッ!!!!!!!!!!』』』』

「・・・なにやら歓声と同時にブーイングが混ざってるような気が・・・」

先ほどよりはマシな扱いをされてるからまあいいか・・・と、半ば諦め銀次はため息を吐く。

『さあさあさあ!!!みなさんもヒートアップしてきたところで試合を始めたいと思いますよー!!!!両選手準備は大丈夫ですか?』

「ああ、問題ない」

「同じく」

銀次と闘士は互いにアナウンサーに答える。そして、

『それでは武闘大会、決勝戦・・・開始いたします!!』

歓声と共に、二人の試合が始まる。

「ハアッ!!」

「ムンツ!!」

開始の合図が掛かった瞬間、二人は同時に駆ける。互いに縮地。これは気を使わなくてもいいので銀次もよく多用する技だ。互いに間合いを詰め、拳を放つ。

ドゴンツ!!

響く鈍い音。銀次の左拳と闘士の右拳が正面から激突した音だ。普通の人間ならここで闘士の鋼鉄で出来た拳でグチャグチャのミンチになるのだろうが、銀次の拳はそうはならなかった。

「真庭拳法・金剛」

銀次は拳を真庭拳法の技の一つ金剛で固め、闘士の拳とぶつめた。金剛は瞬時に筋肉、骨、腱、を鋼鉄の如く固める技で、その気になれば刀と打ち合っても切れない……無論、普通の刀での話だが。

「ハッ!!」

「又ンツ!!」

拳がぶつかり合ったあと。銀次と闘士の間には『嵐』が起きる。

ドガツ、ドゴ、ガガドキャツ！！ド、ドド、ドガツ！！！！

銀次が拳を放ち、闘士がそれを捌きながら顔面への拳打。しかし、銀次はその拳を空いている拳で捌き、返すように拳で突く。だが、その銀次の拳を闘士は半身になることで避けて頭突きを加える。

ドゴツ、といい音を鳴らしながら銀次の鼻から血が垂れる。

「ッ・オラア！！」

銀次は右拳を握り締め、ほぼゼロ距離にある闘士の顎目掛けてアッパ一を撃つ。だが、闘士はその攻撃をバク転で避け、しかもおまけとばかりにムーンサルトキックを銀次の顎にかます。

「ガッ！！（やっぱ強えな闘士は・・・でも）」

銀次はその場でふんばり、着地しようとしている闘士の後頭部目掛けて、

「（負けられねエ！！）ハアッ！！」

「ムウツ！？」

前蹴りを放つ。蹴りは闘士の後頭部を見事に捕らえ、そのままごろ

「う、がア……!!」

しかし、銀次も銀次。その肘を鳩尾に当る寸でのところで外し、後ろに飛んで威力を半減させる。銀次は闘士から離れるべく何歩か後ろに飛び、間合いを取る。そして銀次は左目を抑える。

「(畜生が……いったいなんだ? 頭振ったと思ったなら急に左目が……ん?)」

そこで気付く。闘士は見た目が若く、髪を伸ばしている。そしてその髪も中国の『弁髪』にしているのだ。

「チツ……なるほど、弁髪を使って攻撃か……」

以前何かの書物なんかで読んだことあるな。と思いながら銀次は忌々しげに闘士の弁髪を睨む。弁髪は髪を編んでおさげ上にしてぶら下げているが、髪と言うのは束ねると案外堅いものでこれで叩かれるとそれなりの痛い。しかもそれが目となれば? 堅い物体で粘膜がむき出しになっているところを叩かれるのだ、一溜りもない。視界は半分、鳩尾の一撃も外したとはいえダメージがないわけではない。……だが、それで諦めてしまうような銀次ではない。銀次はなおも構える。それを見た闘士はやはりな、といった風に軽く笑う。

「やはりおぬしは相変わらずだな……勝つこと……いや生き残るためなら絶対に諦めない。そこが他のものにはないものだ……ゆえにお前は強い……だから」

そういうと、闘士はゆっくりと構える。

「本気で相手しよう」

「・・・上等」

不適な笑みを浮かべながら、銀次も構える。

第二幕・・・いや、終幕開始

「・・・」

「・・・」

互いに動かず、ただジッと構えるだけ。声も発さず、殺気も出さず、ただただジッと構える。その空気に観客もただ黙って見守る。アナウンサーも解説をするのを忘れただけ見ている。
沈黙、その空気が流れる中で

「あつ・・・」

観客の誰かが緊張のせいか？持っていたガラス製のコップを滑らせてしまい、地面に落してしまった。

ガシャンッ！！

「「シツ!!」」

コップが割れる音が合図かのように、二人は互いに駆ける。互いの間合いはあつという間に潰れ、

「ラア!!」

「ハア!!」

拳をぶつけ合う。先ほどのような拳撃の嵐が吹きおこる。辺りには骨と骨のぶつかり合う音が響く。しかし、時々闘士の拳が銀次に当たる。無理もない。ほとんど片目で戦っているようなものなのだ。だが、銀次とて負けない。繰り出す正拳、裏拳、貫手、手刀、鉄槌、肘打ちを繰り出し、足は互いに膝を打ち付けあつたり相手の足を払おうとする。なお、今までの戦いを見てわかるとおり、銀次も闘士も廻し蹴りを進んで放とうとしない。したとしても下段ぐらいだ。これは男子最大の急所を蹴られないようにするため、実際銀次は過去に廻し蹴りを放とうとして蹴られたことがあり、それ以来上段、中段の廻し蹴りをしないようになったとかどうか……。

闘士に徐々にダメージを加えている。その攻撃も効いているのか闘士も徐々に顔色が悪くなっていく。構造的には人型自立変体刀も生身の人間と変わらない。ゆえに銀次が与えるダメージも蓄積されていく。だが引かない。お互いに引かない。それどころか前に前にと互いに進める体が密着状態に陥らないのは互いの拳がつかえ棒のようになっているからだろう。

時には激流の如く攻め、時には清流のように受け流す。剛と柔の拳がぶつかり合う。

「又シツ!!」

バキッ

「ぐウ!？」

またもや激痛。しかし、今度は右の拳だ。銀次は何があうったと攻撃をしながら己の右拳をみやる。そこには四本の指の基節骨にあたる指の骨が曲がるはずが無いのに曲がっている。

「（エルボーブロック・・・いや、直接拳目掛けて肘を放ったか）チッ!！」

すでに弾丸を越える速さで繰り出させる銀次の拳をいとも容易く潰した闘士の技量・・・やはり『素手の戦い』に主眼を置いた変体刀なだけある。

普通のものならこの場でリタイア。リタイアしないも右拳は使わないだろう。だが、銀次はそのどちらにも当てはまらない。

「シッ!！」

折れた指なのにも関わらず、銀次は右拳で突きを放つ。

「くっ・・・やはりお主は何でもありだな・・・!！」

折れてマトモに握れない拳でも容赦なく叩きつける銀次。闘士はその不屈の闘志に感嘆している。その右拳の拳を捌こうとしたが、

「グヌッ!！」

ほんの一瞬、銀次が手を振って血を闘士の目の中に入れる。これで闘士も銀次と対等の立場だ。その隙を見逃さないように銀次は右足の踵で闘士の右足の親指を踏みつける。ボキッ、という嫌な音を鳴らす。踏みつけは全武術、格闘技の中で倒れている相手に止めを刺す技ではもつとも威力がある。たとえ三十キロぐらいの子供でも、全体重を乗せて本気で踏みつければ大人の首を簡単にへし折れる。今回銀次が行ったのは相手の動きを止めるための所謂足止め技だ。銀次はすぐさま左のボディブローを放つ。腰の回転を生かした強力な一撃だ。

「グハッ!!!」

闘士は踏みつけられたときの痛みで一瞬の隙をつかれた一撃を入れなれ、前かがみになる。闘士の体はプロボクサーのボディブローを喰らったところでびくともしないが、銀次は『金剛』で固めた腕と腕のほとんどの筋力、そして腰の全回転力を使った一撃。たとえ闘士といえど喰らえば一溜りもない。そして、闘士の頭が下がり、銀次が極める。

「（貰った!!!）真庭拳法奥義……」

「（マズイ!!!）八極拳……」

右手で闘士の置く襟を掴み、左肘を掲げる銀次。それにマズイと思つた闘士は右手を銀次の腹に当てる。そして互いの技を放つ。

「楔打ち!!!」

「浸透剱!!!」

銀次は左肘と左膝で頭を力チ割るように打つ。これが銀次が考案した奥義『楔打ち』。下顎と脳天を同時に攻撃して頭を力チ割る技。対する闘士は八極拳の技である浸透剋を使う。これは相手の身体に『波』のような攻撃を加える。こちらはマトモに喰らえば内臓が吹き回されて大変なことになる。

ドゴツ！！

ズンツ！！

重なる打撃音。そして、二人は止まる。銀次の左肘と左膝が闘士の頭を挟み、闘士の右手が銀次の腹部に当てられている。その状態で二人は固まったままだ。

『え・・・あ・・・あまりの激戦に解説すらできませんでしたが・・・どうなっているのでしょうか？二人とも固まったままですが・・・先ほどの攻撃は桐野選手の極め技のようにも見えましたが・・・』

そこまでアナウンサーが言うと、銀次の体が急に震えだし

「ガハッ」

「銀次殿！！」

「銀次さん！！」

「銀次サン！！」

急に、銀次が吐血した。それを見た楓、真名、超は声を上げてしま

う。まあ、いきなり大切な者が吐血すればそうだろうが・・・三人は銀次の顔を見て驚く。なぜか？それは、銀次の顔が

勝ち誇っていたからだ。

「ふっ・・・俺の・・・勝ちだな・・・」

キレギレに、なりながら銀次が闘士に問いかける。闘士もフツと軽く苦しそうに笑い、

「・・・ああ、・・・今回は・・・お主の勝ち・・・だ」

そこまで言うと、ユラリ、と身体を揺れ地面に倒れていった。そのまま闘士はピクリとも動かなくなった。最後に立っていたのは・・・

『・・・あっ！か、カウントを取ります！！1、2、3、4、5、
- - - - -
』

そのままゆっくりとカウントされていく。その間にも銀銀次は倒れそうな身体を支える。浸透剄のおかげで内臓がかなりかき混ぜられたせいもあるだろう。帰ったら医刀に頼まないとなー、痛む頭で考えながら、銀次は震える足に活を入れて保つ。

『- - - - -7、8、9、10！！皆さん！！今この場に今年度麻帆良武闘大会の勝者が決まりました！！あまたの強豪を勝ち抜き、最

こうして、武闘大会は今までに見ない戦闘と、観客の賑わいを見せて幕を閉じた。

第二十話（後書き）

如何でしたか？楽しんでいただければ幸いです。今回は前回の紅より多少地味な戦闘になったと思いますが……どうでしょう？

さて、次回、

夏休みに入りノンビリとした生活を送るつもり銀次パーティ……
・しかし、それも出鼻で挫かれてしまう……。

遂に動き出す魔法使い。総勢百人前後の魔法使い達が銀次達を倒すために大粛清戦に乗り出す……しかし彼らは気付かない……これが、この戦いがどれほど一方的なものなのか……。

次回、お楽しみに！！

最後に変体刀の案を下ったふかやんさん、ありがとうございました！！

第二十一話（前書き）

さてさて、みなさんどうも銀閣です。今回は待ちに待った肅清編・
・の前編です。本当は一気に書こうと思ったのですが、区切りがち
ようどよかったのと22日から25日の夜まで作者は修学旅行に行
つてしまったため執筆ができません。しかもこの季節に北海道・・・
大丈夫かな？

とまあ、そんな感じでそれではございませぬ。

第二十一話

〓〓麻帆良学園・夜、世界樹前〓〓

学園祭も終り夏休みに突入した麻帆良学園……。その広大な土地のほぼ中心に位置する世界樹。ここに、ある集団が集まっていた。年齢は大体下は13位から上は40ぐらいまでの集団で、そのほとんどが熱いにもかかわらずフードをかぶっている。それも百人前後……。正直通報されてもおかしくない集団だ。おそらく知らない人間が見たらサバトか何かか？と思うだろう。だが、違う。この集団曰く彼らは『討伐隊』らしい。

「これで全員か……。？」

その中にいる一人……。以前銀次にコテンパンにされて左腕を炎刀・銃で吹き飛ばされたガンドルフィーニがいた。

「ええ、でも学園にいるほとんどの魔法使いが参加してくれたわ。これなら奴らも……」

そのガンドルフィーニの言葉に答えたのは、こちらも以前銀次に全身の神経をボロボロにされたシスターシャークティだ。

その後ろにはこちらも以前銀次にボロボロにされた高音・D・グッドマンと桜咲刹那がいた。

なぜ今回、この四人が集まり魔法使いを集めたのか？それは……。
「うむ……。確かにこれだけいればあの男とその仲間を静粛することも容易いだろうな」

ガンドルフィーニはそこに気付かずさらに続ける。

「それでは諸君!!!あの悪の根源である桐野銀次とその仲間を殲滅しに行くぞ!!!」

『『『『『おおーーーーー!!!!!!!!!!!!!!』』』』』

ガンドルフィーニを先頭に、魔法使い達が向かう。銀次達を討伐するため.....、

しかし、彼らは気付かない。これから行われるのが『討伐』ワンサイドゲームなどでなく.....ただたんの一方的殺戮だということ。

~~~~~そこから離れたところ~~~~~

魔法使いが銀次達に殺されに行こうとしてるとき、その銀次ファミリーはと言つと、

「へっくしょん!!!!.....風邪か?」

警備の仕事をサボツ・・・していた。ズズツと鼻を嚙りながら銀次は寝冷えはしてないはずだが・・・といいながら空を見る。

「銀次殿・・・大丈夫でござるか？」

「無理したらだめだ。ほら私の膝でゆつくりと寝るといいよ」

「いやいや、私の胸で寝るといいネ」

そんなくしゃみをした銀次の周りには三人の美女・・・いわずと知れた楓、真名、超である。銀次は引き攣った笑みで三人を見る。麻帆良祭のあと、銀次は所謂監禁生活を送っていた。

麻帆良祭が終りポロポロになった銀次は右手の親指を除くすべての指が折れており、内臓も三ヶ所破裂していた。もともとの自然治癒能力と医刀などの助けがあり、銀次は何とか助かった・・・肉体的に。その後三日間寝続けた銀次が目を覚ますと、銀次の目の前にはそれぞれは『素適な笑み』を浮かべた美少女が三人・・・楓と真名と超がいた。

嫌な予感がすると思い、逃げようとしたがあっさりと捕まり、寝起き一日目は三人の説教で終えた。そして次の日は三人の（過剰なほどの）介抱があり逃げ出そうとしたら、入り口では曲刀・楽が陣取り、

「・・・休んでなきゃだめ」

と涙目&巫女服で言われあえなく布団に戻る。その後三人がどこから取り出したかわからない巫女服を着て介抱をしたりと・・・嬉しいんだが悲しんだかわからない状況下に陥ってしまった。さらにその後も銀次に気がある少女変体刀等が(どこで買ったかはわからない)巫女服を着て見舞いに来たりと・・・とにかく大変だったらしい。

もちろん毎朝恒例の猯による『頭噛み』をされて悲鳴を上げるのもあつたのは言うまでもない。

~~~~~そして現在~~~~~

三人にこつてりと説教された銀次はまさに尻に敷かれた夫状態である。さすがに泣きながら説教されたときは正直に頭を下げた。

その後も何かと世話をしてくれる三人に感謝しつつ、なぜか鼻息を荒くして服を脱がそうとする三人から逃げたいと思う日々を送っていた。そして身体も全快になり、こうやって仕事に来たのだが・・・

「超殿・・・残念でござるがお主のその可哀想な胸では銀次殿は満足しないでござるよ?」

「そうだな・・・それなら私の胸の方が気持ちいいにきまっている」

「何を言っているネ二人とも・・・二人の胸のぶら下がっているのは脂肪の塊ネ。しなやかに付けられた胸筋とふわりと乗せられた控えめの胸・・・これこそ最高のクオリティーネ」

「それなら拙者のほうは……」

「いや、私のほうが……」

「……いつたいお前らは何の話をしてんだ？」

これ以上話をさせると暴走して大変なことになりそうだと予感した銀次は、間に入って止める。だが、タイミングが悪い。いま彼女は銀次のことで話しているからだ。

「おお、銀次殿ちようどいいところに……」

「銀次さん。銀次さんは控えめと形の整ったのとどっちがいい？」

「選ぶネ銀次さん。今なら特別に選べるヨ？」

三人は自分の胸を張り出すも……、

「ああ？……何言ってるかわからないが、んなもん知るか。どつちでもいい」

銀次は相変わらずの鈍感ぶりを発揮する。さらに余談だが銀次は胸より美脚派だ。

三人は銀次のその言葉を聞きハア、とため息を吐く。銀次のあまりの鈍感ぶりにあきれ果てているようだ。

「ハア……銀次殿は相変わらずでござるな……」

「本当に……まあその鈍感っぷりで助けられるときがあるのは確

かだが……」

「それにしても鈍感すぎヨ……」

「……どうしたんだお前ら？いきなり……」

いきなり鈍感と言われ怪訝な顔をするも、「なんでもない」といわれ肩を竦めるだけだった。

そんな三人に相変わらずわけがわからないという視線を向けて首を傾げる銀次。

そのとき、何か嫌な気がした。

「……？（なんだ？なにやら嫌な気がするな……）」

銀次は気を使うことができないが、気を感じることができない。そして今流れている気も感じ取ることもできるのだが……いま流れている気はなにやら淀んでいる。しかもそれが大量に流れている。そして以前エヴァンジェリンに言われたことを思い出した。

『そうそう、お前の大嫌いな『正義の魔法使い』の一部のものだが……また貴様らに奇襲を掛けようとしてるらしいぞ？』

「（……ちっ、なるほど。今日がその日だったことか……）」

銀次は心の中で舌打をしてチラッと三人のほうを向くと、

「……」

「……」

「……」

三人も銀次の方を向いている。どうやら三人も気付いたらしい。さすがだな、と思いながら銀次は辺りの気配を探す。

「（１・・・２・・・９？いやまだ増えているな・・・４０・・・なんだ？いくらなんでも多すぎだろう？そして気配消すの下手すぎだろう）」

多少消せている者もいるが・・・ほとんどの者が消せていない。例えるなら皺だらけのシャツだ。その中にある特に酷い皺が四つ・・・以前にも感じた気配だ。

「ハア・・・またお前らかよ・・・いい加減諦めるよな」

そういいながら、銀次は視線を校舎側に向け、三人も一緒に後ろを向くとそこには・・・

「ハア・・・またでござるか」

「懲りないね・・・」

「あれこそ真正正銘のバカネ」

四人揃って見た先にいる四人は、以前銀次でコテンパンにしたガンドルフィーニ、シスターシャークティ、高音・D・グッドマン、桜

咲刹那だ。

銀次は今回の騒ぎの首謀者はまたコイツらか・・・呆れながら思っている、ガンドルフィーニが話し出した。

「覚悟しろ貴様ら・・・貴様らの悪行も今日で終りだ」

「悪行つて・・・俺達なんかしたか？」

「いやいや、まったくしてないでござるよ」

「身に覚えはないね」

「むしろ貢献してるネ」

四人は何かしたっけ？といった感じで話をする。ガンドルフィーニはそれを見てコメカミに青筋を浮かべる。

「貴様らは麻帆良に侵入した侵入者を容赦なく殺し、生き残ったものは拷問にかけ、情報を吐けば殺す・・・貴様らのやっていることは非人道的どろろではない、悪魔の所業だ！！」

それを聞いて銀次は呆れる。そして後頭部をガリガリ搔きながら答える。

「・・・よそ様の縄張りに勝手に入ってきたんだから殺すのは当たり前だし、それぐらいしないと敵は油断する。『あ、ここはたとえ侵入しても助けてもらえる』ってな。それに拷問をかけるのも情報を聞き出すのに必要なことだからどうと言うことではないだろうが・・・」

侵入者を殺せばその組織は警戒して侵入する回数を減らすだろう。実際に侵入してくる回数が減ってきたのだ。

拷問に関しては魔法使いの奴らのほうが酷いと銀次は思っている。何せ魔法使いは有無を言わず相手の脳の中を見て情報を引き出すのだからだ。つまり個人的に見られたくない情報や弱点を、口で言わず無理やり許可も取らず見るのだ。銀次とて最初から拷問をするわけではない。最初何度か脅してそれでも口を割らなかつたら拷問にかける・・・それが銀次のやり方だ。

それに対して、魔法使いは情報を引き出した後、記憶を消してまた帰す・・・と言う手を取っているらしいが、帰った相手はどうなるだろう？情報を引き出せず、しかも記憶を消されて何も覚えていない。そんな相手に組織が黙っているだろうか？おそらく間違いなく何かしらの罰ないし処分されるのだ。

それに銀次は別に悪魔と呼ばれようと気にしていない。銀次は『大切な人物』を守ればそれでいいと思ってるからだ。むしろ悪魔と呼ばれ『大切な人物』を守るなら喜んでその名で呼ばれるだろう。しかし、ガンドルフィーニはそれには気付かない。

「貴様は・・・！！もういい、貴様はいまこの場で殺せばいいことだ」

「はいはい・・・相手してやるよ。周りにいる雑魚含めてな」

ガンドルフィーニ達が武器を構える。それを見た銀次は絶刀・鉋を取り出し、楓達も各々の武器を構える。

互いに睨みあっていると、後ろから攻撃を受けた。

魔法の射手 連弾 十八矢！！！！！！

火、水、風、様々な攻撃がおそらく十人前後の魔法使いが放った魔法の射手が百本以上、

楓、真名、超に降りかかった。

「なっ・・・!?!」

銀次は後ろからきた攻撃が自分のほうに来るのだと思ってばかりいて、油断してしまった。慌てて三人のほうを向き、

「……………ッ!?!?!」

何かを叫ぶ。

ドゴゴゴゴッ!?!?!

攻撃が、三人に当る。

くくくく麻帆良学園上空くく

麻帆良学園の上空。そこに三つ人影が浮いていた。

「くくく、さて・・・桐野はどうやって戦うか・・・見ものだな」

そついいながら右手に持ったお猪口を口に傾けるのは、以前銀次と戦い紙一重の戦いを繰り広げ呪いを解かれた最強の吸血鬼、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ。すると残りの二つの影は限られる。彼女の従者のチャチャゼロと絡繰茶々丸だ。

「ケケケ、俺ハアイツノ刀ト人間ガ死ヌトコロガ見レレバソレデイイケドナ」

「彼らのことですからまず手加減はしないでしようが・・・少ないとも魔法使い側の勝率は0、0000001%です」

二人の従者はそれぞれの意見を述べる。チャチャゼロはただ己の欲を解消したいだけだろう。茶々丸はなんとも現実的過ぎる計算を打ち出した。

エヴァはくくつと笑いながらさらに杯を傾ける。しばらく銀次とガンドルフィーニのやり取りを肴に酒を飲む。

しばらくそのやりとりをしているとやつと戦いが始まるうとした瞬間、楓たち三人組に魔法の射手が降りかかった。

エヴァはフン、と鼻で笑う。

「バカな奴らだ・・・大人しく桐野に攻撃を加えれば良いものを・・・あれでは楽しんで逝けぬな」

下から響く轟音と立ち上る煙。エヴァ達のところには煙はこなかったが、その轟音から普通の人間なら跡形もなく吹き飛んでいるだろう……。しかし、彼女らを守るのは『悪魔』と呼ばれた男……。これを許すわけもない。

その攻撃があつた少ししたあと、

ゾクッ!!

「ほほう……!!」

「ケケッ」

「っ!!」

エヴァとチャチャゼロは下から這い上がってくるような、久しぶりに感じる気配に思わず感嘆の声を上げ、茶々丸は己が機械だということにこの気配を感じることができると驚く。三人が感じたこの気配。

それは、誰もが持っているもの、

それは、戦いを引き起こすもの、

そして、それは……。怒りを表すもの、

この世の全ての負の感情を詰め込んだようななどという生易しいものではない。まるで、煮たぎった溶岩のような感情・・・それは、

殺気

「く、くははははははッ！！！やはり面白い男だな貴様は！！！」

エヴァは持っていたお猪口を投げ捨て、持っていた徳利をそのまま飲み干す。そして中身が空になり右手で口をぬぐい、まるで満月のような笑みを浮かべて下を見る。

「くくく、さて楽しませて貰おうか・・・桐野銀次」

これから始まるのは討伐でも肅清でもない・・・ただのワンサイドゲーム一方的殺戮が・・・始まる。

くく地上くく

銀次は砂煙が舞い上がるのを見る。たぶん大丈夫なはずだ。その前にしっかり『変体刀』を出したため大丈夫なはずだ。しかし・・・、

「（奴らは・・・何をしようとした？）」

ドクンッ、と胸が騒がしくなる。そして同時に脳裏にある映像が浮かびだす。

「（奴らはなんで・・・楓たちを攻撃した）」

ドクンッ

段々と、鮮明になる脳裏の映像。

「（奴らはなんで・・・俺を攻撃しなかった？）」

ドクンッ！

脳裏に浮かんできたのは、

「（奴らはなんでまた・・・俺から『守れる』ものを奪おうとした？）」

ドクンッ！！

まだ幼い、

「（奴らはなんで・・・俺からーーーー）」

ドクンッ！！！

血に塗れた、

「（ーーーーー『大切』なものを・・・奪う？）」

楓に”似た少女”の姿。

ドクンッ！！！！！

銀次の中で、何か壊れた音がした。

「貰った!!」

楓たちのほうに向いて動かない銀目掛けて、一人の中学生位の男子が突っ込んでいった。おそらく楓たちがやられて放心状態だと思っただろう。手にはアーティファクトらしいレイピアを携え、駆け込んだの突き・・・フェンシングの技で銀次を貫こうとした。しかし、

「・・・」

ガシッ、

「なっ・・・!?!」

明らかに銀次の死角を突いて放った突き。だが、見ていないにも関わらず銀次はそれを左手で止めてしまった。レイピアを持った男子は驚きながらも、レイピアを取り戻そうと押ししたり引いたりするが、
・ビクともしない。

「くっくそ!放せ!!」

男子は微動だにしない銀次を気味悪がりながら、見る。すると、銀次が独り言のようになにやらブツブツ何かを言い始めた。

「ああ・・・そうだったな。そうだよなア・・・簡単なことだったぜ・・・」

「ひっ」

男子はその銀次の姿を見て思わず悲鳴を上げてしまった。そして、

銀次の体から何かがあふれ出てくるような気がした……いや、したのだ。

「守れるもんを守るなら……敵が何であろうとブチ殺せばいいだけの話じゃねえか……」

殺す……と何度も魔法使い達に幾度か言ったことがあるが、実際のところ銀次は殺すつもりは無かった。以前の襲撃だってわざわざ足を切り落としたり、神経をズタズタにしたりせず、そのまま首を刎ねてしまえばよかったものを……銀次はどこかで『止めとけ』というストップパーをかけていたのだろう。殺せばこれからの原作に関わる、そしたら予想もつかない展開がおき楓たちが傷つくかもしれない……そう思っていたのかもしれない。

だが……いまこの瞬間、銀次の中にあつたストップパーが外れた。

「は、放せ！！放せていつてるだ「煩せエ……死ぬ」は？」

ジャキンツ、と音が鳴り突き出された鉄の棒。男子は不思議そうにその鉄の棒の先端を見ていると、

ズガンツ！！！！

響き渡る轟音。男子が目にしたのは眩いほどの炎。そしてほんの刹那に感じた無数の感触。それが、男子が最後に感じた五感だった。

「ひっ……!!」

「うぶっ!!」

銀次をレイピアで突こうとした男子は、銀次が出した変体刀『剛刀・弾』”一撃の強さ”に主眼を置いた炎刀・銃の兄弟刀である散弾銃だ。装填数は一発と少ないが、その威力は絶大なものだ。ゆえに、男子の頭は首から上がゴツソリと吹き飛ばされた。

周りにいた者たちは初めて人の頭が吹き飛ぶところを見たのとさっきまで一緒に親しくしていた者が簡単に殺されてしまったことにショックを受けているようだ。

しかし、銀次はそんなのは気にしない。いや、気にすることすらもつたないほど今の銀次は怒り、猛っている。

銀次は左手に持っていたレイピアと、右手に持っていた剛刀・弾を放り捨て新たな変体刀を呼ぶ。

「『六将』!! 『四刀・鬼目螺』!! 『牙刀・喰』!! 『生刀・非弩羅』!!」

銀次が叫ぶと。銀次の周りが輝きだしそして、六人の変体刀と、三体の最強の生物変体刀が現れた。そして、低く。殺気が籠った声で指令を出す。

「六将を初めとした全自立型変体刀に告ぐ……いまこの場にいる敵対している魔法使い、老若男女関係なく……殺せ」

『『『『『『……ッ!!!!!!!!』』』』』』

当りに響く声。それは今まで隠れていたり、あるいは桐野邸にいながらも銀次の声を聞いたもの。上空から、横から、地中から。様々

なところから声が聞こえる。楓たちに攻撃を加え怒り狂う変体刀。怒り狂いながらも冷静に、どのように苦しめて殺してやるうかと考える変体刀。怒声で答える者もいれば冷静に返すものもいる……。ただ、今この場に居る者たちの心の中にあるものはタダ一つ。

己の主、そして己の主の大切な人たちに攻撃を加えたものたちへの……報復。

ワンサイドゲーム
一方的殺戮……開幕。

第二十一話（後書き）

どうでしたでしょうか？今回は派手な戦闘がありませんでしたが、
今回は魔法使いが次々と・・・フッフッフツ（黒笑）

次回！！

楓たちを攻撃した魔法使い達・・・しかしそれがいけなかった。銀次に掛かっているストッパーは完全に外れてしまう。怒りに身を任せながらも冷静に。そして確実に魔法使いを殺す銀次。そして銀次の命、楓たちを攻撃され変体刀達も魔法使い達を殺してゆく・・・。

次回お楽しみに！！

最後に変体刀の案をくださったふかやんさん、ありがとうございました！！

第二十二話（前書き）

修学旅行が終り、財布が軽くなった銀閣です。

どうもどうも銀閣です。無事北海道から帰還しました！！いや、向こうは寒かったですね（笑）しかもスキーをして何回もこけましたよ。ハハハッ、

さてさて、前置きはそろそろにして・・・今回は肅清編の中編です。表現的スランプに陥っているためどうかわかりませんが・・・今回はそれなりにグロイです。

グロイの上等！！んなもんへでもないぜ！！という方はどうぞ！！

第二十二話

先ほど後ろから不意打ちで楓、真名、鈴の三人に魔法の射手を叩き込んだ魔法使い達は喜々として喜んでいた。

「よし！あの悪魔の仲間を倒したぞ！！」

「これで奴の戦力は大きく削れたぞ！！」

おそらく、この奇襲部隊の隊長と副隊長を勤めている男だろう。その後ろには同じく顔を喜々としている魔法使い達がいた。

しかし、その目は完全にイカれていた。自分たちの目の前にいる『悪』を倒せた。だから自分達は『正義』だ・・・本当にそう思っているような目だ。この手の者達は自分以外の意見を本当に曲げないため、新手の新興宗教より性質が悪い。

そして隊長格の男が後ろにいる者たちに発破をかける。

「これより悪の根源桐野銀次を倒しにいくぞ！！俺について来い！！」

『『『『『おおっ！！！！！！！！！！』』』』』

さながら兵士を導く勇者の気分だろう。隊長格の男は意気揚々と銀次の元へと歩いて行こうとしたが・・・、

突然、目の前に巨大な鉄塊が現れた。

「え．．．？」

いきなり目の前に現れた鉄塊。しかし、男は急に現れた鉄塊が何なのかわからず、そのまま眺めていると

ズドンッ！！！！！！

押しつぶされた。先ほどまで男がいたところからは、まるでトマトを何百メートルの高さから落したように潰れ、あたりに血が飛び散った。

後ろにいた魔法使い達はその光景を血を浴びながら呆然と見ていた。

「は．．．？え．．．？いつたい何が．．．」

魔法使いの一人．．．先ほどから副隊長らしきことをしている男が、不思議そうに呟く。一体何が起きたのか？あの鉄塊はどこから落ちてきたのか？そんなことを思って呆然としてみると、先ほどまで舞い上がっていた砂煙がはれ．．．『鉄塊の持ち主』が現れた。

「ひっ．．．！！」

一撃で絶命したのかビクンツビクンツ、と痙攣している。また、片鎌槍という特殊な構造をした槍で貫かれたせいもあるのか、貫かれた腹から血と共に内臓が零れ落ちる。その片鎌槍の持ち主・・・長烏帽子の形をした兜を被り、顎鬚を生やした武士だ。

「フンツ!!」

男は槍に貫かされた魔法使いの身体をそのまま持ち上げ、近くの茂みに投げ捨てる。そして、投げ捨てた後槍を中段に構える。

「貴様らは我らの主を攻撃した・・・それをこの七星変体刀が一本”戦刀・鉾”が許さぬぞ!!」

七星変体刀・四季崎記紀が自分の一人娘の教育と警護を目的として作られた変体刀だ。そして戦刀・鉾は”槍を使うことに主眼を置いた刀”だ。

魔法使い達はいきなり現れた槍を持った人間（彼らは変体刀のことをよく知らないのでそう思っている）が現れたとさらに慌てる。だが、それがいけなかった。

「.....」

「グギャツ!!」

魔法使いの一人が悲鳴をあげる。何事かと思い他のものを見ると、そこには首を傾げる様に頭を横に傾け、首から鮮血を噴出している魔法使いの姿があった。そして、その後ろに

「・・・・・・・・」

チャリツ、と無言で血に濡れている鎖鎌を持った忍者・・・七星変体刀が一本”暗刀・影”がいた。ただ無言。何も語らず、ただ無表情。でも、その目の奥に込められた色がその感情をハッキリとさせている。

『殺す』

目が、そう語っている。殺気を出さず、その視線だけで相手を萎縮させる。そして、攻撃はまだ終わらない。

「ひ、ひイイーーーーッ!!!!!!」

ほとんどの魔法使いがその場から魔法を使い空を飛んで逃げようとした・・・だが、

「逃がすか・・・よ!!!!」

「逃がすと思いますか・・・?」

二人の男女の声が聞こえたと思ったら、空を飛んでいる魔法使い達目掛けて数百を越える矢が・・・襲い掛かる。七星変体刀の中で弓を扱えるのは射刀・鎚に駆刀・跨だけなのでこの二人だ。

「グギャーーーーッ!!!!!!」

「ウゲッ!!!!」

「ギヤアーーーーッ!!!!!!」

数百を越える矢は瞬く間に魔法使い達の体に突き刺さり、まるで針鼠のような格好になりながら地面に落ちてゆく……そこでまだ意識がある一人の魔法使いが気付いた。

『これは……肅清なんかじゃない……これはただの……』

地面がマジかになり、最後の言葉を出す。

『ワンサイドゲーム
一方的殺戮だ……』

グシャッ、と生々しい音を鳴らしながら魔法使いの頭が砕け散った。

「くそくそくそっ!!!!!!」

「いったいなんだあれは!？」

七星変体刀と双璧変体刀が戦っていることはまた別のところでも、戦いが起こっていた。その相手は、

「うふふ、ほらほらどうしたんですか？さっさと逃げないと死んじゃいますよー？」

そういつて楽しそうに語るのは、胸、肩、腕、脚、全身のいたるところに銀色のプロテクターをつけ黒い

ボディースーツを着て、白衣を纏りウエーブの掛かった薄茶色の髪をセミロングにした少女がいた。少女変体刀の中で永刀・鳳と同じく古参の変体刀・・・『改造』に主眼を置いた”改刀・狂”だ。

狂は両手に持ったレーザーナイフや見たこともないような銃を手にして戦っている。魔法使いたちは別にそれに驚いているわけではない。魔法使いが驚いている理由・・・それは、目の前にいる『兵器』だ。

「さあさああ、みなさんやりましょう！蹂躪しなさい！焼き払いなさい！！そして捕らえなさい！！ハハハハハッ！！！！！！」

『『『『『ギューーーーーッ！！！！！！』』』』』

魔法使いたちは目の前で戦っている兵器・・・それは改刀・狂が作り上げた変体刀・・・拷刀シリーズの変体刀が列を成している。

「拷刀四式・履墓留婆！！捕獲弾発射！！」

狂がそういうと列を成している変体刀の中から一体の・・・十メートル前後の巨大な竜らしきものが現れた。『拷刀四式・履墓留婆』見た目はドラゴンにも見えなくは無いが・・・本来両翼と頭があるはずのところ巨巨大な鉄筒が三本並び、その後ろには巨大なレン

コンのような塊がドツシリと鎮座している・・・あえて言うとなんかそれは回転式拳銃、つまりリボルバーだ。しかしその大きさは尋常じゃないほど大きく、戦車砲となんら変わらない大きさだ。さらに中に納まっている弾丸は焼刀・空特製の捕獲用弾丸。狂の言葉に従うかのように履墓留婆はそのレンコンみたいな弾倉を回転させ、

ドゴンッ！！ドゴンッ！！ドゴンッ！！

連射する。一つの銃身に弾丸が六発。両翼と頭を合わせれば24発の弾丸を放てる。そしてその発砲音。そして捕獲弾と言われ飛んでいった弾丸・・・だが、その弾丸はあまりにも巨大であまりの威力を持っていたため、

「うぎゃっ！！！」

「ぎゃあああああっ！！！！！」

直撃すればそのショックで体が押しつぶされてしまい、血や内臓を撒き散らしながら壁に潰される者や、手足に掠り、手足が吹き飛ばされたりするものが続出した。

「うぎゃああああああああああああ！！！！！！腕が！！私の腕がアアアアッ！！！！！！！」

「脚・・・俺の脚が・・・！！！」

「あらら。あれでは『実験』の役には立ちそうにありませんねエ。

環津羽唾は体中に巻きつけられている鎖を吊るしながら魔法使いを空輸で桐野邸の『地下研究所』・・・つまり『改造』に主眼を置いた変体刀のなかの”変態刀”・・・改刀・狂の棲家に連れて行かれた。

「フフフ・・・しばらくは研究に困りませんね。どうしましょうか・・・」

捕まえた魔法使い達をどのように研究するか・・・狂は苦しみ悶える魔法使い達を想像しながら微笑む。

その笑みは、美しくもあるが・・・まるで、名前の通り狂ってるかのように・・・。

また別の場所でもさらに激しい戦闘が行われていた。

「く、くそ！！いくらなんでもアレは反則だろう！！」

「誰だ！？悪の根源の仲間はその三人だけだといったのは！？」

魔法使いたちは必死になりながら『爆撃』で起きた穴の中に隠れる。

その間にも頭の上を弾丸が過ぎ去り、近くにある壁やら木やらを壊してゆく。その相手とは

「どうした！！貴様らが語る『正義』とはこの程度か！？」

「・・・弱い」

二つの女性の声。この声の持ち主こそが先ほどから自分らを膠着させ、三十人はいた仲間を挽肉のように殺した相手・・・。

「チクシヨウ！！何なんだよあいつらの武器は！？」

魔法使いの武器は主に杖だ。他にも魔法銃や魔法剣、魔法ん力を宿らせた武器を使う。だが、『正義』に意固地になっている彼らは何が何でも杖を使うらしく、この麻帆良には魔法器具を使うものはない。

そんな彼らに対し、二人の女性はと言うと、

「この腰抜け共がアアアアツ！！！！！！」

そう叫びながら手に持った銃を乱射するのは少女変体刀が一本”怪力”に主眼が置かれた変体刀、”力刀・猟”だ。濃い目の茶髪を後ろで二つに縛り、グレーの裾の長いジャケットを羽織って胸元に黒いリボンをつけた少女・・・というより女性だ。引き締まった体つきをしており、生真面目なところもありそれなりに男に人気があるのであろう容姿をしているのだが・・・その乱射している銃のせいでもそれも台無しだ。

ギョアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!!!!!!!!!!!!

その手に持っていて先ほどからけたましいほどの轟音を上げる六本の銃身をもった機関銃・・・いや、機関砲。本来は戦闘機や戦艦などに搭載する兵器を改刀・狂の手により改造され、携帯可能にした20ミリ弾を雨のように降らすことができる機関砲M61バルカンだ。しかも弾丸は焼刀・空襲製の20ミリ徹甲焼夷弾だ。見ると所々で小火がでている。

「・・・・・・・・」

そしてもう片方。こちらは高校生ぐらいの見た目をした少女変体刀で“連射性”“速射性”“精密性”“射程距離”の4つに主眼を置いた変体刀”狙刀・刃”白いシャツにジーンズ、そして赤いジャケットを羽織った黒髪を赤い紐で一つに結わいた髪型をした、切れ長の目をした少女だ。カ刀・猟に対してこちらは銃らしき物を持っていない。それは彼女自身が『銃』だからだ。彼女が先ほどから放っているのは小さな鋼球だ。だが、その速さ、威力は凄まじく次々と鋼球を打ち出す。

「・・・・・・・・」

無表情、ただその一言しか表せない。文字通り、彼女自身が刃であり、銃である。

「くそ！たかが女如きに負けるわけには・・・・・・・・!!」

ろっ。

「お願いよ・・・だれか助けて・・・誰か・・・」

そんなことをポツリポツリ呟くがここは戦場、誰も助けたくない。むしろ確実に殺してくれる相手がいる分マシだろう。

そのとき、女生徒の前にボトリッ、となにやら鈍い音が聞こえた。

「え・・・?」

最初は誰かの手か何かと思い恐れたが、ゆっくと、なぜか顔がゆっくとその落ちてきたものへと視線を向ける。

そこにあったのは、

球状の・・・いや、レモン方の物体が目の前に落ちてきた。

「は・・・?」

少女はそのレモン型の球体をしばらく眺めていると、急に視界が真っ赤になった。

先ほどの女生徒と生き残っていたものたちが焼夷弾で燃やされ、苦しみもがいている所をはるか上空から見る影が一つ。バサバサな長い黒髪に、大きな緑色のリボンを着け、赤い目をしており、胸元に大きな赤い瞳をあしらったアクセサリーを着けた、緑色のフリルの着いた袖の短いシャツに、黒色のフリルの着いた緑色のスカートにニーソックス、背中に裏側が夜空模様の大きな白いマントという変わった服装をしている。また、身長は妖刀・夢よりも低いにも関わらず、その携えている凶器は華刀と匹敵するものを持っている。だが、特筆すべきはそこではない。もつとも特筆すべきはそのマントの下から覗く鴉のような翼が生えていることだ。

「楓たちに攻撃した奴らなんかみんな燃やしてやるー！！！！！！」
背にある羽をパタパタさせながら、焼夷弾をポンポン投げまくる少女……少女変体刀が一本、『火力』に主眼を置いて、他の話でも何度か登場した”焼刀・空”だ。空はその力を使い爆竹の小規模なものはもちろん、核弾頭などの大規模な爆弾をつくることができる。

下からは焼夷弾の攻撃により火に包まれ喚く魔法使い……しかし、空はそんなものを気にしない。彼女はよくも悪くも純粹なのだ。純粹で純粹すぎるため、どうしても楓たちが攻撃されたことが許せないのだ。

「燃やし尽くしてやるー！！！！！！」

ただただ純粹に怒る彼女の心……その炎を受け止められるのは魔法使い側にはいない。

「ケホツ・・・二人とも無事でござるか？」

「ああ、大丈夫だよ」

「砂埃がひどいネ」

そんな派手な戦闘が行われているとも知らず、三人は咳をしながら立ち上がる。魔法の射手から起きた砂埃にむせている。

「むむ？阿に百ではござらぬか。守ってくれてありがとつでござる」

『グオオ・・・』

『『『『グルルルツ・・・』』』』

「・・・もう私は驚かないぞ。目の前にサイクロトプスとヘカトンケイルがいても驚かないぞ」

「まあ、これぐらいで驚いていたらキリがないネ。それぐらいの心持じゃないとやっていけないヨ」

楓は目の前にいる巨大な変体刀に礼を言うなか、真名はもはや神話の生き物が出てきても何も驚かないように現実逃避をして、鈴は真

名の肩に手を置き、それを諭す。あまりにも戦場に不釣り合いなほどの光景。だが、三人はすぐに気付く。空気中の隅から隅まで、まるで水の中にもっと別の液体を流し込んだような気配・・・今まで何度も感じた気配・・・だが、

「銀次さんはかなり怒っているようだね・・・だけど」

「ウム・・・いつもと何か違うネ」

二人は首を傾げる。銀次が怒ってくれるのは嬉しい・・・だが、今の殺気はどうだろうか？あまりにも純粹すぎる。今までもそれなりに純度が高い殺気を出していた銀次だが、今はまるで純度の高い油をさらに搾り出したような超高純度の油のようにも感じられる。二人は、それが逆に恐ろしく感じた。

「・・・銀次殿」

その二人を他所に、楓はポツリと呟き、自身の左手を撫でる。昔に『とある事件』で銀次に付けられた今はない・・・『傷』

「また・・・戻るでござるよな・・・？」

楓は弱弱しく呟く。その純粹すぎるほどの殺気は、楓は過去に受けたことがあり、そのときの銀次は世界最強の名を持つ銀次の両親が二人掛かりでやっと止められた・・・もちろん、あの時使っていた『変体刀』がないからどうなるかはわからないが・・・。楓はギシリッ、と奥歯を噛締める。

「（どうして・・・どうして拙者は・・・）」

「……あの時」と同様何もできないでござるか？

ただ一步を踏み出すだけなのに……その踏み出し方がわからない。

「（こんなにも……こんなにも銀次殿のことを好いているのに……！）」

「……拙者は何もできない、ただの無力な存在だけだ。ござるか!？」

楓の心の叫び……それを気付けるのは冷静なときの銀次のみ。今の銀次には……届かない。

銀次達を襲撃した主犯の四人は、目の前で起きていることが現実と

は思えなかった。なぜか？それはいたって簡単なことだ。何せ、今回の討伐には百人前後の魔法使いがいたのだ。麻帆良学園にいる魔法使い三分の二を戦力として注ぎ込んだ・・・なのに、

「ひっ！！やめ、やめてくれええええええッ！！！！！！！！」

「た、たすけギヤアアアアアッ！！！！！！！！」

「死にたくない死にたくない死にたくない・・・！！」

なのに、目の前に広がるのは仲間が無残に殺されているだけだ。

ある者は斬り殺され、

ある者は刺し殺され、

ある者は撃ち殺され、

ある者は抉り殺され、

ある者は押し殺され、

斬殺、刺殺、銃殺、絞殺、毒殺、撲殺、博殺、焼殺、圧殺、爆殺・
・おそろくいまこの場だけで魔法使い達はこの世の殺人方法を受けているのでないかというほど、殺られている。
そしてその破滅の行動を行っている男は・・・、

「死ね」

ただ無表情に、その一言のみを呟きながら次々と魔法使いたちあらゆる変体刀を駆使して殺してゆく。

「ち、チクシヨウ！！」

その内の一人の魔法使いが銀次に杖を向ける。距離は十メートル前後、普通の相手だったらなら十分すぎるほどの距離だろう・・・だが、

「『金刀・鋏』！！」

『金刀・鋏』”小ささ”に主眼を置いた変体刀で、見た目は虫籠のような物。もちろん中に入っているのが攻撃のメインとなる。

銀次は籠の蓋を外し、中に潜む変体刀で攻撃する。

「食らい尽くせ！！」

籠の中からでてきたのは一寸程度の鋏形虫のような昆虫・・・だが、これこそが金刀・鋏の恐ろしい刃なのだ。

中からでてきた昆虫型の変体刀は・・・大量に現れ、魔法使いへと襲い掛かった。

「ぎゃ、ギヤアアアアアッ！！！！！！！！！！」

大量に現れた金刀・鋏に襲い掛かれた魔法使いは、全身を覆われながら倒れる。しかし、逆にそれが悪かった。

グチュ、ピチュ！グチュチュチュッ！！！！グチャギュチュッ！！！！

魔法使いに群がった金刀・鋏はその鋼の顎で肉を引き裂き、切り刻み、抉り取り、頭をドリルのように回転させ目や鼻、口や耳から体内に侵入して筋肉を引き千切り、骨を砕き、内臓を引き掻き回す。さながら、生きた牛をそのままミンチにするかの要領だ。最後に、腹を突き破り、金刀・鋏は次の獲物へと向かう。銀次はそのまま周りにいる雑魚を金刀・鋏に任せさらに新たな変体刀を取り出す。

「『水刀・銀』」

銀次が次に取り出したのは刀身がなく、鏝もないただ布が巻かれただけの柄。相手はそれを見てチャンスと見てか、

「フン、そんな棒ツ切れで何ができる！！魔法の射手・連弾・水の十矢！！」

魔法生徒の一人が放った魔法の射手が銀次目がけ手飛ぶ・・・だが、

「用途は”防御”種類は”盾”・・・展開」

銀次がポツリと呟くと、銀次が手にして水刀・銀の柄から銀色の液体・・・”水銀”が現れた。

すると、その水銀はまるで意思があるかのように動き形を変えて、瞬く間に『盾』へと変わった。

「なっ！？」

魔法生徒はいきなり柄から出てきた銀色の液体が、その形を盾に変

えたことに驚くがそれでも攻撃をやめない。いや、止められないのだ。『正義』という言葉が下げてはくれないのだ。

ズガンツ！！！！

魔法の射手は全弾銀次に命中・・・

「・・・・・・・・」

していない。魔法生徒が放った魔法の射手は銀次の手に持つ水刀・銀で作った盾ですべて防ぎ、無傷。今度は銀次の番だ。

「用途は”刺殺”種類は”刀”・・・貫殺」

グチュグチュ、と形を変えた水刀・銀は今度は多少反りを持ち、形状が刀そのものになり、魔法生徒目掛けて凄まじい、まるで弾丸のような速さで・・・伸びる。

「ウグツ！！」

勿論、弾丸を避けるような訓練を積んでいない魔法生徒にこの攻撃を避けることはできない。マトモに腹部に突き刺さった。

さて、ここで少しだけ補足説明をしよう。水刀・銀は液体の持つ”流動性”に主眼が置かれた刀。ゆえにその形状を自由自在に変える

ことができる。先ほどのように敵の攻撃を受ける盾にすることもできるし。今のように敵を刺し殺す攻撃にも使える。

形状は自由、用途も自由・・・だが、思い出して欲しい。水刀・銀は激しい中毒性を起せる”水銀”でできた刀だ。そして用途は自由・・・つまり、

「用途は”毒殺”種類は”液体”・・・流し込め」

本来の姿で相手の体に流し込むことを造作もなくやってのけてしまふ。そして体内に一気に大量の水銀を流し込まれると・・・、

「うぐ・・・ウゲツ!!!!!!」

胃や腹部の激しい疼痛、嘔吐、血性の下痢などの症状が現れる。魔法生徒はその症状を引き起こしながら倒れる。

「うぎ・・・!!」

のた打ち回りながら、苦しみ、助けを求める・・・だが、手はさし伸ばされず。

「用途は”圧殺”種類は”大槌”・・・押し殺せ」

破滅の槌を頭に叩き込まれる。グシャツと言う音と共に、魔法生徒は辺り一面に血と脳漿を撒き散らす。

「よくも・・・よくもカズトを・・・!!」

銀次を囲んでいた内の一人の女生徒が手に持っている・・・アーティファクトだろうか？三叉の槍を突き出してきた。どうやら先ほど

の魔法生徒の彼女だったようだ。

「『牙刀・鰐』・・・かみ殺せ」

銀次は新たな変体刀・・・形状は籠手で手の部分が竜の形をした変体刀を作り出す。そしてそれを腰ダメに構え・・・撃つ。

「えっ!？」

まさか、籠手が伸びるとは思ってたなかった女生徒は驚く・・・そして弾こごとしたが、

「遅い」

放たれた牙刀・鰐の手甲はまるで竜が顎を開いたかのように口を開け、

女生徒の腹に食いつく。

「うぐっ・・・!」

女生徒はまるで万力で噛み付かれたかのような声をあげ涙を流すが・・・倒れない。よほど銀次が憎いのだろうまるで睨み殺すかのように銀次を睨む・・・だが、

「フンッ」

銀次はその手を捻る。すると女生徒の腹に喰い付いていた牙刀・鰐

銀次はそれを右手のみで持ち、左肩の位置まで持っていていき、己の『気持ち』を流し込む。

「戦乱刀勢!!」

そのまま独楽のように回転して三人に切りかかる。これは以前銀次が読んだ剣客浪漫譚漫画にでてきた倭刀術の技を実際に再現した技だ。

「ちっ!!」

一人の魔法先生が障壁を強く張る・・・だが、

「無駄、だな」

「なっ!?!」

硬刀・誇は絶刀の頑丈さ、斬刀の切れ味、薄刀の軽さの三つの力も持った優れた完全系変体刀。しかし、硬刀の真に優れているのはそこではない。硬刀は”持ち主の思いに反応する”変体刀だ。これは、『大切な者を守る・復讐のために生きる』といった『一つのことに対する思い』を糧にその切れ味、硬度を上げることのできる変体刀だ。

今の銀次の心の中にあるのは『楓たちを攻撃した魔法使いに対する憎しみ』で占められているためその威力は倍増する。

独楽のような回転力、そして倍増した切れ味・・・これにたかが魔法先生如きの障壁で守れるはずもなく、

斬ッ!!!!!!

いとも簡単に真つ二つにした。魔法先生を上半身と下半身が泣き分かれにしたあと、銀次は次の魔法先生に切りかかる。

「蹴撃刀勢!!」

刀身の峰を横蹴りの要領で蹴り上げる。蹴り足の力も加わりその威力と速さは格別に早い。魔法先生は反応も出来ずに股から頭に掛けて切られる。

「ぎゃっ!!」

縦に斬られた魔法先生は血と内臓、脳漿をブチ撒きそのまま倒れる。そして最後の一人。

「ヒッ!!」

ビビる魔法先生を無視して、銀次は弾丸の如く突っ込む。そして、相手の腹に刃を上なたて突き刺し、

「轟墜刀勢!!」

そのまま頭上まで持ち上げ、地面に叩きつける。

グシャッ!!

魔法先生は地面に頭を叩きつけられ、辺りに紅い絨毯を作り腹から

は血と内臓がこぼれ出て紅い海を作っている。

「……………」

銀次はそんな惨殺死体を作り上げているにも関わらず、まるで関心がないかのように死体を作り上げてゆく。

そして、刀をガンドルフィーニ四人たちに向け……………、

「てめえらは……………楽には殺さねえ……………」

あちらこちらで上がる悲鳴と血飛沫。地面は真っ赤に染まり、内臓が土の代わりともいえるようにそこから中に広がる。

終幕まで……………あと僅か。

第二十二話（後書き）

どうでした？今回は久しぶりの戦闘メインだったため表現的なところがちょっと心配です。感想のほどよろしくお願いします。

次回予告

遂に残りわずかになってしまった『正義の魔法使い』、はたしてどうなる魔法使い達？この状況をどう収める学園長？
そして、楓の気持ちは届くのか？

それではまた次回！！

最後に変体刀の案を下さったパールパレーパさん、ふかやんさん、ありがとうございました。

第二十三話（前書き）

『ゲート 自衛隊彼の地にて斯く戦えり』は面白いので是非とも読んで欲しいと思う銀閣です。

・・・正直に言います、途中で二回死にかけました。なぜかとい
いますと先週の水曜日、小説を書いていたら途中でenterを押
したら急にユーザーTOPへ・・・。
そして学校とバイトもある中、必死になって六日の夜に更新しよう
としたらまた同じ謎の現象が・・・正直、泣きました。

さてさて、今回で終り粛清編・・・やっぱり魔法使いの扱いが酷い
ですが、それでもこいや！！と言う人はどうぞ！！

第二十三話

〓〓学園長室〓〓

麻帆良学園のトップにいる近衛近右衛門は頭痛と胃痛を隠し切れなかった。

「うぐウ・・・ガンドルフィーニめ・・・あれほど止めておけと言
うておったのに・・・あいつクビにしようかの？」

「だ、大丈夫ですか？学園長・・・」

ブツブツと呟きながら頭痛薬と胃痛薬を明らかに定量越えた薬を
一気に口に放り込み、水で流し込む。近くにいたタカミチはその薬
の量と匂いに若干引きつつ学園長の心配をする。学園長はものすこ
く、長いため息を吐き、一呼吸置いて答える。

「大丈夫じゃないわい。ガンドルフィーニやシスターシャークステ
イも余計なことをしてくれるわい」

実際のところ、学園長は銀次に感謝しているのだ。何せ、銀次が来
てからというものの侵入者がかなり減ったからだ。銀次の『侵入者
を殺して相手を警戒させる』という作戦は実に効果的だったのだ。
銀次が麻帆良に来る前、一月の侵入者はそれこそ五十人はくだらな
く多いときは百を越えてしまう。しかし銀次が来てからはその数も
十ぐらいになり、多くても二十と今までに類を見ない少なさになっ
たのだ。

確かに銀次のやり方はやりすぎ感もあるが、学園長はそれで学園の
平和が保たれているのだから安いものだ。と複雑な気持ちになる。

すると、その場にいた一人の魔法先生が頭を押さえる。

「ああまったくだぜ・・・チクシヨウ刹那も刹那だ。アイツに勝てるわけないって言ってるのに・・・」

そういいながら頭を押さえる男性教師・・・白銀の髪を短く切り揃えた髪型で右目部分に一本の刀傷が刻み込まれている男がいた。学園長はその男を見てなだめるようにいう、

「よいよい、確かに刹那君の意思もあるじゃろうが、ガンドルフィーニがけしかけたんじゃろうしな。アドルの気にすることではないぞ」

アドル・・・アドル・ベルディオオン。本来は魔法学校の魔法剣士学科の教師で今は研修ということで麻帆良にきている凄腕の剣士だ。また、このアドル・ベルディオオンは幼い頃天涯孤独の身だった頃がありその次期に学園長に拾われた経歴をもっている。

そしてこの魔法使いとしては珍しく、銀次の「大切な者を守る為なら誰であろうと殺す」と言う信念にもっとも共感をもっている男でもある。

アドルはだといいが・・・、と呟き顔を上げる。

「学園長。済まないが俺は刹那を助けにいつてくる。他の奴らがどうなるうと知ったことじゃないが・・・アイツだけはどうしても助けてやりてえ」

アドルはその場からすぐに去る。ガチャンと扉が閉まり学園長室には重たい沈黙が流れる。

「・・・いつたい・・・どうなるんでしょうかね・・・麻帆良は」

「ダメだ魔法が効かない！！」

「や、やめろ！！喰わないでくわない、ぎゃああああああっ！！！！」

「あ、あはハハハ。紅いなア・・・アハハは」

辺りに響く断末魔の声。怒声、助けを求め苦痛から救って欲しいと呼ぶ声。攻撃が効かず、絶望する声、あまりの惨場に精神を狂わす者まででてくる始末だ。

この場面に題名を付けるといわれたら『地獄』とつけるのが一番相応しいだろう。自分たちが絶対と思っていた『正義』が簡単に崩され、殺され、壊されてゆく。

今回の『人肉製造所』を作り上げたガンドルフィーニは顔を青ざめ、その現場を見ていた。

「（なぜだ・・・今回は百人前後の『正義』の魔法使いを動員したんだぞ・・・？なのに・・・なぜやられているのはこちらなのだ？）」

普通に考えたら、剣士相手に百人前後の魔法使いを呼ぶなど過剰戦力といっても過言ではない・・・のだが、相手が悪い。銀次は『剣士』でもあるが、『忍び』でもあり『普通』でもあり『異常』でもあるのだ。ましてや、銀次の奥底に眠る『鬼』を目覚めさせてしまったのだ、勝てるわけなどない。

それに今回集まったのが『魔法使いタイプ』がほとんどであったのも問題だろう。皆さんも知っている通り、本来『魔法使いタイプ』は従者が前線に立ち、己は後方で強力な魔法を放ついわば『砲台』軍用機の編隊でいえば大型爆撃機、それを戦闘機と化した従者守る・・・というのが基本な『魔法使い』のスタイルなのだが、今回の肅清

に参加した『魔法剣士』あるいは近接戦のアーティファクトを持った従者は少なく、しかも全員が『自分が悪を倒すんだ』という考えが強く、隊列も考えずに前衛に回っていたのも問題だろう。

つまりは『正義』に妄信しすぎて周りが見えなくなり『勇者』《愚か者》に成りたいがために突っ込んで敗北・・・あまりにも無様すぎる。

「・・・」

「ヒッ」

銀次は何も喋らない。しかも、その表情は無表情・・・だが、なぜかわからない。ガンドルフィーニたちはその表情が怒りに染まっているように見えたのだ。さらにその全身から放たれる高純度の油のような殺気・・・ガンドルフィーニは勿論、シスターシャークステイも高音も震え上がった。刹那は三人よりかはマシなほうだが、やはり震えている。

そんな三人を見ても、銀次はただの無表情だった。

「・・・」

ジリジリと、まるで死刑囚を死刑台にわざとゆっくりと連れて行く死刑執行人のような足取りで四人に近づく銀次。そして・・・動き出す。

ドッ！！

魔力も気も使わず、銀次はそれを越える速さで四人に近づく。最初

の獲物は……ガンドルフィーニだ。

「くっ!!」

ガンドルフィーニはその速さに驚きながらも手に持った銃を構え、撃つ。

ダンドンダンッ!!!!!!

銃声が響き渡る。しかし銀次には当たらない。

「なっ!？」

別に銀次が避けてるわけではない。ガンドルフィーニの手が震え、マトモに狙いが定まらないのだ。

その間に銀次は新たな変体刀を呼び出す。

「『打刀・鉄』」

呼び出された刀は見た目こそ絶刀・鉤そのもの……だが、長さが違う。絶刀は五尺とかなりの長刀であったがこの打刀・鉄は三尺前後。鞘が付いているところを除けばすべて絶刀となんら変わらない変体刀だ。

銀次は打刀・鉄を鞘から引き抜き……飛ぶ。そして空中で打刀・鉄を降りかぶり、

「一刀必滅!!」

振り下ろす。重力と共に打刀を振り下ろす姿は報復絶刀に酷似している。

「ひっ」

ガンドルフィーニは持っていたサバイバルナイフと銃を交差させてこの攻撃を防ごうとする。だが、

バギャンツ！！！！

「うがああああッ！！！！！！」

魔力を流し込み、その防御力も障壁もかなり底上げしたと思っていたガンドルフィーニであったが、それをいとも簡単に破られた。ガンドルフィーニの腕は斬られて・・・いない。

「ぐわああああ！！！！私の、私の腕がアアアアアアッ！！！！！！」

ガンドルフィーニの腕はまるで鈍器で殴られたかのようにヒシヤげて骨が肉から飛び出ている。斬られていないところを見ると、どうやら打つ寸前に刃を返し峰打ちにしたらしい。しかしたからと言って攻撃力が下がるわけではない。勿論、これは銀次なりの考えがあつてのことだ。

腕を切り落とさず砕けた骨が腕のあちらこちらから飛び出すことにより、より長くより苦しませることができる。

銀次はさらにガンドルフィーニの両膝を蹴り潰し、立てなくして芋

虫状態にさせる。

「ぐアアあああああああああああああああああああああああ
あッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

叫ぶガンドルフィーニ、だが銀次はそのようなことを気にせず次の
獲物・・・シスターシャークステイに矛先を変える。

「はっ!?!」

シャークステイは最初恐怖で身を硬くしていたが、銀次が迫るのが
わかるとその顔を恐怖にゆがめ退こうとする。シャークステイは以
前、銀次に全身の神経をズタズタにされるという攻撃をされれば一
週間激痛でまともに眠ることができなかった。またあの攻撃を・・・
と思うとどうしても引いてしまうのだろう。

だが、銀次はシャークステイが思っていた攻撃を使わなかった。

「シッ!!!」

滑空するかのごとく近づいた銀次は変体刀を放り捨て、近づく。

「ま、魔法の射ーーーー」

詠唱をしようとしても・・・遅い。銀次は左手を伸ばしシャークス
テイの奥襟を掴みそして、右手の指を伸ばす。
そして・・・技を放つ。

「虚刀流・・・『蒲公英』」

ザシュツッ!!

「がっ・・・!?!」

貫手が・・・シャークステイの体を『貫いた』。腹部のちょうど中心辺りだろう、そこを銀次の貫手が『貫いて』いるのだ。

「そん・・・な!?!? 気も・・・魔力、もなしの腕で体を貫いた・・・!?!」

痛みを感じながらもシャークステイはありえない、と頭の中で思った。本来貫手とは喉や目といった人体の中でも柔らかい部分を突き刺すための殺人技だ。腹を攻撃して倒すことも出来なくはないが、普通に考えたら貫手で人体を貫くなど無理なことだ。

その知識がないシャークステイはまた別に気も魔力も使っていないのに人体を軽々と貫いた銀次に恐怖する。『この男は全身が刀だったのか!?!』と・・・。

なお、銀次は貫手で人体を貫くことなど出来ない。指が折れる覚悟でいけばどうにかなるだろうが、進んで怪我して命を危険に晒す必要もない。このとき、銀次が使ったのは・・・、

「・・・」

ズリユツ、と引き抜いた貫手・・・よく見るとその指先・・・いや、爪先が三寸ほど伸びていた。

『忍法・爪合わせ』

刀語で真庭虫組の真庭螭螂が得意としていた忍法だ。爪合わせと蒲公英・・・わかる人はわかると思うがこの二つのコンビは不承島で鑢七実が真庭蝶々につかつた技だ。

だが、どっちにしるこれでシャークステイは動けないのは必然だ。しかも腹の真ん中・・・所謂小腸が集まっているところを貫いたためそんな簡単には死なないだろう。

銀次はシャークステイをそのまま放置して次の獲物・・・高音・D・グッドマンへと向かう。

「くっ・・・！！！！はあああっ！！！！！！」

高音は真っ直ぐ突っ込んでくる銀次に操影術で作り上げた槍で貫こうとするが・・・、

「フツ！！」

その全てを簡単に避ける。十本・・・二十本、三十本。次々と出される影の槍。だが、そのほとんどは銀次はその身を翻して避けてしまってるため、当たらない。

そして、今度は新たな変体刀を作り出す。

「『擬似薄刀・氷』」

でてきたのは柄だけ・・・？いや、よく目を凝らさなければ見えな
いが青龍刀のような中華刀のようにも見える。

銀次は氷を右肩に担ぐように構え、距離五メートルのところまで振り下ろす。

高音はそれを見て鼻で笑う。どうやらあまりに恐怖しすぎてしまい、アドレナリンが大量に出ているのだろう顔が怖いほどに笑っている。

「フッフッ！！そんな遠くから切り下したって当るわけ『ドサッ』
・・・え？」

高根は、急に軽くなった右腕に不思議に思いそちらを見れば・・・

二の腕の半ばから、腕が切り落とされていた。最強の墮剣士・錆白兵が繰り出した刀の長さを自由自在に変えることができる妙技『速遅剣』銀次も使える技の一つだ。

「う、ぎゃあああああああッ！！！！！！！！！！」

アドレナリンが出ているため痛みは最小限であろうが、それでも腕が切り落とされたショックなのだろう。高音は左手で切り落とされた部分を押さえる。だが、それで血が止まるはずもなく血がとめどなく溢れ出ていく。そして、銀次は左脚を高く振り上げ・・・

ベキンッ！！

振り下ろす。所謂踵落としだ。銀次の踵は綺麗なまでに高音の肩に

食い込んでいる。高音は声をあげることでもできずに沈む。

そして最後の一人……刹那へと矛先を向ける。

刹那は全身に浴びる殺気に思わず息を呑み、

「（これが……本当に人の殺気なのか？）」

その尋常じゃないほどの殺気は、刹那は感じたことがない。だからといって獣と同等……といたいところだが、それ以上。何かと例えよといわれれば……、

「……鬼……」

それ以外、刹那は例えようがなかった。鬼、と言われた銀次はピタリと動きを止め、口を開く。

「……鳥族の小娘に言われるとさすがに現実味があるな」

「っ」

鳥族の小娘……そういわれた刹那は苦々しい顔になる。

「なぜ・・・それを知っている!？」

刹那は怒鳴るように言う。自分が鳥族とのハーフであることはそれこそ裏のことを知っている一部の人間しかいない。あのになぜ、この男が知っている？

刹那のその質問に銀次は鼻で笑い、答える。

「前にも言っただろう。今から死ぬ貴様に教えてやることなどない・・・と」

そういつて、銀次が動き出す。

「シッ!！」

手に持っていた擬似薄刀を先ほどのように振りかぶり、振り下ろす。形状こそ青龍刀そのものだが、重さは日本刀と変わらない。距離は五メートルほど、

刹那は先ほどの技がくると思ったのか横に大きく跳ぶ。

ズガンッ!！」

地面が、割れた。距離は五メートルと遠いにも関わらず、だ。刹那はどのようなにしてその技を行っているのかよくはわからないが当ればただでは済まないのはよくわかった。

刹那は手に持っている夕凧に気を流し込む。

「神鳴流奥義『斬空閃』!！」

刹那が放った斬空閃は銀次目がけて真っ直ぐに飛んでいく。銀次はそれを身を翻すことにより、避ける。

「フツ！！」

ババツ！と音を鳴らして銀次は腕を十字に交差させて刹那へと突き出す。その両腕には先ほどの擬似薄刀ではなく

「『炎刀・銃』」

自動式拳銃に回転式拳銃が握られていた。二つの冷たい銃身がまるで目の如く刹那を捕らえ、

ガンガンガンッ！！！！！！

速射される。放たれた弾丸は自動式拳銃のみで五発。だが、刹那はその弾丸を難なく弾く。

「神鳴流に飛び道具は効かぬ！！」

「・・・みたいだな」

銀次は冷静に返す。だが、心の中ではドロドロとした黒い感情が流れている。どうやって殺してやるのか？どうやって苦しめてやるのか？手足を切り落としてやるのか？内臓を生きたまま引きずり出してやるのか？体に水銀を流し込んでやるのか？火でジワジワと燃やしてやるのか？酸で溶かして殺してやるのか？毒で殺してやるのか？

・・・？そんな感情が銀次の中に流れる。
刹那は銀次から流れ出るその感情を感じ取ったのか、ゴクリと息を
呑み、叫ぶ。

「貴様は・・・本当に相手を殺し尽くせば大切な者を守れると思っ
ているのか!？」

「ああ、思っている」

銀次は即答する。当たり前だ、これが銀次の思想なのだから。

「つ・・・なら、貴様は敵がまだ年端も行かない子供でも殺すのか
!？」

「ああ殺す。相手が子供だろうが女だろうが・・・若いだろうが
老いてようが関係なく殺す」

相手が子供だから・・・あんて理由で殺さなかったら後々面倒に
なる。その子供が後々さらに強くなったら？それで大切な者を殺し
に来たら・・・それを考えたら殺したほうが得策だ。第一、それ
ぐらいの覚悟もなしに戦場に立っているのがおかしい。だから銀次
は嫌いなのだ。『正義の魔法使い』が・・・。

刹那はそれを聞いてさらに眉を寄せ、睨みつける。すると、今度は
逆に銀次が話しかけた。

「・・・じゃあ逆に聞くがよ・・・お前はどんなんだよ？」

「・・・なに？」

銀次のいきなりの問いかけに刹那は怪訝な表情になる。銀次は構わ

ず続ける。

「お前は俺の思考を否定している・・・なら、お前の思考は何なんだよ？今後のために教えてくれないか？」

刹那の考え・・・銀次はもしかしたら、『昔の自分』と同じ考えなのかもしれないと思ったのだ。
刹那はそれを聞き、話し返す。

「私は・・・私が考えるのは『誰も殺さず、無力化できるのなら無力化する』・・・これが私の考えだ」

「・・・」

銀次は心の中で舌打する。刹那に対し、そして・・・自分に対して。するとどうだ？銀次の心の中に先ほどと比べ物にならないぐらいの黒い感情が流れる。

銀次も過去はその思考だった・・・だが、『ある事件』を境にその考えもなくなった。

誰も殺さず？

—————ふざけるな

無力化できるなら無力化する？

その殺気は怨みが込められている。

その殺気は怒りが込められている。

そしてその殺気は・・・自分に対する憎しみが込められている。

憎・恨・怒・忌・呪・滅・殺・怨・・・ありとあらゆる負の感情が・・・殺気に込められている。

銀次はしばらくふざけるな、と連呼して持っていた炎刀を投げ捨て両手で自分の頭を掻き毟る。

銀次の顔は瞬く間に紅く赤い線が何本も走る。そしてまるで呪詛のように何度も連呼する。刹那はその姿が恐ろしく、悲しく見えた。

「(い、いったい何があったというのだ・・・?)」

いきなりの取り乱し・・・刹那は意味がわからずただジツと見ていることしかできなかった。さほど離れていない所から楓や真名や鈴が銀次の名前を叫ぶ。だが、銀次にはその声が届かない。

「ふざけるなーーーーーッ!!!!!!」

銀次は脚に爆薬でも仕込んでいたのかと思えるほどの速さで刹那に近づく。そしてその手にはまた新たな変体刀・・・『惨刀・鋸』”

引き裂く”ことに主眼を置いた変体刀だ。電刀・鮫の前身でもあり、鋸を引くように相手を斬ることができる。

銀次は惨刀・鋸を目にも留まらぬ速さで横薙ぎに振るう。

「くっ!!」

刹那はその斬撃を紙一重で避ける。避けたあとブオンッ!!とまるで斧でも振るったかのような音を鳴らす。

「（振り切った後に音が!?!どれほどの速さで振るったのだコイツは!?!）」

振り切る直後に音がるのならまだわかる。だが、振り切った後に音が聞こえる・・・つまり銀次の攻撃は『音速』を超えていたことになる。

「貴様はっ!!」

憎しみ混じりの声で銀次が吼え、また切りかかる。

「守れるものが守られているから、そのようなことが言えるんだ!」

ガギャギャギャッ!!!!!!

銀次の斬撃を夕凧で受け止める。鋸のような刃のせいだろうか、夕凧からは嫌な音が鳴り響く。
銀次はさらに攻撃を続ける。

「相手を殺さずに守る！？相手をできるだけ無力化にする！？そうやって甘つちよろいことを言ってるから――――」

夕凧を、弾く。そして体をその場でクルリと一回転させ、

「大切な者が、死んじまうんだ――！！」

ドゴンッ――！！

「グフッ!?」

回転後ろ蹴り。後ろ蹴りとは本来、名前の通り後ろから来た敵を踵を用意て使う足技。それをあるフルコンタクト空手団体が回転を取り入れ、正面の相手に攻撃できるようにした技だ。

元々威力の強い後ろ蹴りに回転力を加えた威力・・・それは桁外れの威力になるだろう。槍の如く放たれた銀次の後ろ蹴りは刹那の腹にのめり込み、吹き飛ばされる。

「うツげ――！ゴホッ、エ……」

刹那は地面に転がりながら嘔吐する。出陣する前にそこまで食べなかったので内容はほとんどないが、それでも刹那は吐き続けた。そんな刹那を銀次は憎しみが籠った目で睨んでいる。

「そうだ・・・俺はあの時お前とまったく同じ考えだった・・・でも、それで・・・死なせてしまった・・・いや、『殺して』しまった」

銀次はゆっくりと歩みながら語る。でも刹那は何の話がまったくもってわからない。それもそうだ、これは完全に銀次の八つ当たりなのだ。

だが、刹那はそんなことを考える余裕もない。

「（怖い怖い怖い・・・！！！！）」

ただ、目の前の男が怖かった。自分からこの戦いに参加して何を言うか・・・と言うかも知れないが、怖いものは怖いのだ。しかもさっきまでの純粋な殺気ならともかく、今はドロドロとした感情が混じった殺気・・・恐ろしくないわけがない。

「う・・・あつ・・・」

思わず涙を流す。木乃香を守る、そう決めたときから刹那は泣くことはしなくなつた。ましてや恐怖で涙を流すなど・・・あまりにも久しぶりであつた。

「お前にわかるか？目の前で、大切な人ではないとはいえ・・・大切な人にそっくりの人が、目の前で、自分のせいで死ぬところを何もできずにただ見るだけ・・・貴様にわかるか？」

「あ・・・ア・・・」

刹那の股に水溜りができる。あまりの恐怖に失禁してしまったのだらう。だが、銀次はそれも気にせずに続ける。

「そして、その大切な人が自分のせいで失うのが怖くて……新たな力を得ようとして……結局のところ大切な人を傷つけてしまった気持ちを……お前は、わかるか？」

その銀次の表情は悲痛な表情にも見え、苦痛にも見える。一体どれほどの悲しみを背負ったのか？刹那は想像できなかった。

「わからないよなア。お前に……自らを『正義』とかほざいて人を殺すことを正当化して貴様らに……その気持ちはわからないよなア！！」

「ヒック……、ち、が……」

刹那は泣きじゃくる。銀次はその姿も過去の自分に見えるものだから、あからまさに舌打ちをする。

「もういい……今のお前を見ると昔の自分を思い出して反吐が出る……死ね」

刀を高々と振り上げる。そして……振り下ろ、

「待ってくれ！！」

……せなかつた。銀次が振る下ろそうとした瞬間に誰かが止めたのだ。

「ハアハア……頼む、待ってくれ銀次」

そこにいたのは息を切らし、身体のおちこちに切傷を作っている白

銀の髪を持った男・・・アドル・ベルディオンがそこにいた。

「アドルか・・・何のようだ」

いきなり現れたアドルに、銀次は負の感情が籠った殺気をぶつける。アドルは思わず息を呑む。

「（なんだ・・・この殺気は？コイツ・・・本当に銀次なのか！？）
頼む銀次・・・刹那を助けてはくれないか？」

アドルは銀次の目を真っ直ぐと見ながら問う。目を離すと殺されてしまいそうだからだ。

だが、その緊迫した空気を読まない奴が一人。

「おお、アドル先生！！我々を助けにきてくれたのですな！！」

現れたアドルに喜々とした表情で声を上げるのはガンドルフィーニ。両手足が使えないため這うようにアドルに近づいていく。

アドルはそんなガンドルフィーニの声を聞くや、コメカミに青筋が浮かんだ。

「よし！これで我々正義の魔法使いのしょう」
「ふざけんじゃねえー
ーーーーッ！！！！！！」
「！？」

ガンドルフィーニは、いきなりのアドルの怒声に思わず動きを止めてしまった。アドルはガンドルフィーニ怒鳴るように続ける。

「俺はオメエらを助けに来たんじゃねえ！！手前らなど死んじまえば良いと思っただ！！」

「な、何を言っているんだ！！我らを……」「正義」の我々を見捨てると言うのか！？」

「学園長の爺の忠告を無視して大勢の仲間を無駄死にさせた奴らの事なんかしらねえ！！俺が此処に来たのは妹と思っている刹那を助けるためだ……」

「ヒック……アドルさん……」

「刹那……大丈夫だから……な？」

アドルは刹那に微笑みかけながら諭す。その顔はかなり穏やかな表情をしている……その表情もすぐに引き締まり、銀次に向ける。

「銀次……頼みたい事がある。ガンドルフィー二達はおめえらにくれてやるが刹那は……こいつだけは助けてやってくれねえか？楓達を傷つけた奴らを殺し尽くそうと思っているのもわかる。だが……それでも頼みたい。刹那を助けてやってくれないか……この通りだ」

アドルは頭を下げながら頼む。それに対して銀次は……、

「……何の代償もなしに……はいそうですか、と言うと思うか？」

その要求を却下する。殺せば後々何か原作に大きく関わるやもしれない……だが、今の銀次にそんなことを考える余裕などない。

「ああ……勿論わかっている……だから」

アドルはそう呟き、おもむろに剣を抜き、

ザシュッ！ドシャッ、

「!?!?」

腕を切り落とした。銀次がではなく、アドル自身が自身の腕を切り落とした。

「これで……代償になるか？」

噴水のように流れ出る傷口を押さえようとせず、アドルは銀次に問いかける。

「なぜだ……貴様はなぜそこまでする？」

「大切な奴を守るのに……理由はいらねえだろ？……それは、お前が一番……わかっているはずだぜ？」

顔面が蒼白となっているアドルにそういわれ、銀次はハッと楓たち……いや、正確には楓を見た。

「……」

今にも泣きだしそうな顔で、己の左腕を押さえ……むかし起きた事件のときと同じような顔をしている。

「……ッ」

その楓の姿を見て銀次は心を締め付けられるような痛みが走る。まるで、それがお前の罪だというように締め付けは強くなっていく。

「ぐっ……」

アドルは血が出しすぎたせいだろう、その体をよるめかせ地面に倒れそうに……、

ドサッ、

「グス……アドル、さん……」

倒れなかった。倒れそうになるアドルを刹那が瞬時に止めたのだ。銀次はそんな二人を見て胸の痛みがさらに強くなる。

「……医刀。医刀はいるか？」

「ここに……」

変体刀の中でも医療に特化した変体刀……医刀・助。彼はすぐさま銀次に近づく。その手には針のような形状をした刀が握られている。

銀次は二人を見ながら指示を出す。

「医刀……『二人』の治療を頼む……」

「よろしいので……?」

ああ、と銀次が答える。医刀は驚いた。アドルはまだわかる。それなりの理由があるからだ。だが、刹那はまかりなしにも楓たちを殺そうとしたのだ、いつもの銀次ならありえないと思うのだが……

「ああ構わない……そのかわり何が何でも助ける……いいな?」

「御意」

銀次はそのまま踵を返し、その場から消えた。

こうして魔法使いによる粛清は銀次達のワンサイドゲーム一方的虐殺により静かに……幕を閉じた。

〃〃 楓 side 〃〃

あの後すぐに銀次を初めとして楓たちも帰ってきた。三人は途中の銀次の変わりように心配して銀次に声を掛けるも、

『・・・しばらく、一人にさせてくれ』

そういつて部屋に閉じこもってしまった。三人はどうしようかと悩んだが・・・なにか、今の銀次には近づけない雰囲気があったため、次の機会にしようと言うことで各々部屋に戻ることにした。

他の二人と別れた後、楓は廊下をゆっくりとした歩いていた。

「銀次殿・・・・・・・・」

楓はポツリと呟き、廊下を歩く。そして胸を押さえた。

「（・・・あのとときの銀次殿は悲しんでいた・・・・・・・・おそらくあの事件のことを思い出していたのでござろう・・・・・・・・）」

『あの事件』・・・銀次が今の思想になり、異常なまでに力を欲したあの事件・・・・・・・・。あの事件がきっかけで、銀次は変わった。

「・・・・・・・・？」

歩いていると・・・何かが聞こえてきた。擦り切れるほどの小さい

声であったが、それはどこか聞き覚えがある声だった。
楓はその声が聞こえるほうに近づくと・・・、

「ここは・・・銀次殿の部屋・・・？」

楓は怪訝な表情になりながら何なのか気になり、耳を澄ましてみ
と・・・、

『う、ぐ・・・ク・・・エグツ・・・』

「ッ（銀次殿・・・）」

何かの小さい声・・・それは銀次の泣く声だった。楓は驚く。銀次
が泣くことなど滅多にないからだ。

『ウグ・・・濟まない・・・助けられなくツて・・・ク、・・・濟ま
なかつた・・・』

「・・・」

『グス・・・濟まない・・・傷つけてしまって・・・本当に濟
まない・・・楓・・・』

「ッ!！」

楓は、急いでその場から離れた。ほんの少しでも早く、早く離れよ
うと早足でその場を離れた。

そして、部屋の中に入り襖を後ろ手に閉め、そのまま襖に背を預け
てその場に蹲る。

「・・・銀次、殿・・・・・・・・」

顔を、両手で覆いながら楓は震える。その大きな身体が、やたら小さく見える。

「拙者は・・・・・・・・拙者は・・・・・・・・」

ポツリと、楓の手から一粒の液体が零れる。その後も二粒、三粒・・・
・どンドンその数を増やしてゆく。

「拙者は・・・・・・・・何もできないでござるか・・・・・・・・？」

たった一人の男を愛する少女。その少女を守るために己のすべてを捨てた男・・・・・・・・その二人にはいったいどのような過去があったのだろうか・・・・・・・・？

少女の答えに答えてくれる者は・・・・・・・・いない。

第二十三話（後書き）

どうでしたか？銀次と楓にどんな過去があったのか・・・？それはこれから明らかになっていきますので楽しみにしてください。

返信返していない方。申し訳ありませんが作者のHPが回復するまで待っていてください・・・。

次回予告！！

静粛戦が終り早二週間・・・銀次もいつも通りに戻り、いつもの平和な日常を・・・送れなかった。

『奴ら』はいきなり現れた・・・。そして『奴ら』は容赦なく、だれかれ構わず襲い掛かってくる・・・そして、楓に『奴ら』の攻撃を受けた！！

はたしてどうする銀次！？どうする楓！？そしてどうするのだ周りの者達！！楓の運命は君らに掛かっている！！

楓「うっっ、歯が痛いぞぐねる〜〜」

銀次「だからちゃんと歯を磨けと言ったる・・・。」

・・・乙ご期待（笑）！！

最後に、変体刀の案を考えてくださった完全怠惰宣言さん、ふかや
んさん、ありがとうございました。

第二十四話（前書き）

人間ときには欲求不満になると改めて思った銀閣です。

さて、みなさん読まれる前に一言・・・後半やりすぎた！！書いて
たらついつい楽しくなってしまう・・・修正するの大変だったな
ア・・・（遠い目）

第二十四話

〳〵肅清から二週間〳〵

あれから二週間・・・時間が立つのは早いものである。

あの後、銀次は三日部屋の中に引籠もっていたが楓や真名に鈴と、他の変体刀達のおかげで何とか部屋から出させることができた。銀次もそんな彼女らの行動に、いつまでもこうしてはいられないと思っただろう。すぐに・・・とまでは行かないがいつも通りの振る舞いをするのができた。そして次の日、学園長室に乗り込んだ。まあ、話の内容を言わずと知れた先日の大肅清の事後処理の話だ。書くと長くなるので大まかな部分のみ書く。まず、学園長室に入ってきた銀次達に対して、

『いかなる条件でも飲もう』

そういつて学園長は頭を下げながら銀次達に言ってきた。銀次はそれを聞いて自分達の要求を話した。

まず一つ、今後麻帆良に所属する魔法使いの我々に対する干渉を禁止する。(なお、認めた人間は除く)

一つ、今回の肅清戦の首謀者であるガンドルフィーニ、シャークテイ、高音・D・グッドマンは永久的に魔法を使えない状態にして改

刀・狂が作った最下層牢屋『閻魔』へ懲役十年間投獄させる。桜咲刹那の処分についてはアドル・ベルディオに一任する。また、参加して生き残った魔法先生及び魔法生徒は永久的に魔法を使えない状態にして、魔法使いとしての記憶を消去すること。

一つ、今回の賠償金として十億円を払う。

一つ、今後の麻帆良に関する情報をこちらにすべて寄越すこと。

一つ、今後の麻帆良警備は変体刀が行うのを認めること。

一つ、21Aの生徒全員のDNAを提供すること。（楓、真名、鈴、エヴァンジェリン、茶々丸除く）

学園長は驚いた。もっと無茶な要求をしてくるものだと思っていたためこれで済むとは思わなかったのだ。金を払うのはまあ、当たり前だ。魔法使いの干渉を禁じたのも納得できる。変体刀が警備に当たってくれるのも給金を払うことになっているが、今まで以上の戦力に人員・・・これを考えたら安いものである。魔法を永久的に封印され、警備も奪われた魔法先生や魔法生徒は怨みの言葉などを上げるが・・・これは自業自得のため仕方ない。

学園長が驚いたのは四人の処分である。学園長は銀次がこの四人を燃やして殺せ、と言ってもおかしくないと思っただからだ・・・だが、投獄先が『あの』改刀・狂が作った牢屋である。普通の牢屋なわけがない・・・おそらく、彼女のことをよく知っている者達なら彼女の作った牢屋に入るかカンディルが百匹入っているプールに入るかどちらか選べと言われたら間違いなくカンディルが入っているプールに入るだろう。それぐらい彼女は『いい性格』をしている

るのだ。刹那にいたってはアドルに一任している時点で破格の条件だろう。

だが、今回の数少ない生き残りの魔法生徒が変体刀の警備に不満があるらしく抗議したが、

『ふん、自分達が仕掛けといて負けたとたん被害者面か？』正義の魔法使い』も地に落ちたものだな。それに貴様よりはるかに戦力になるからジジイも喜んでいと思うぞ？』

その場に一緒にいた終始笑顔が耐えなかったエヴァンジェリンがその魔法生徒に辛辣な言葉を放つ。どうやらこの魔法生徒、エヴァンジェリンに何かしていたらしい。その魔法生徒はその後何か騒いでいたがタカミチが居合拳で黙らした。

学園長もそれを止めようとせずフム、と頷き話を続けるが……一つだけわからない要求があった。それは、『2・Aの生徒のDN Aの提供』……何のためだと聞いてみたら、

『……家の変態しんぱいがどうしても欲しいと言ってたんだよ……』

まあ、特別悪用するわけではないので提供することにした。

なお、この数年後にメイド服を着た三十に満たない女性達が旧世界で悪人を殺しまくり、魔法世界ではその規模を大きくして最強の武装組織としてメガロメセンブリアを破壊に追い詰めるとは……誰も思っていない。

目の前でよくわからない物を食している獺にさすがにツツコム銀次。
獺は「？」と首を傾げ、

「……食べる？」

「んなモザイク掛かっている物食えるか!」

「……おいしいのに……」

獺は残念そう（といってもほぼ無表情）にいつてそのモザイクが掛
かったよくわからない物を食べる。

今日も桐野邸は平和である。

〜〜昼〜〜

「みなさん、おやつですよ」

昼を少し過ぎたおやつ時。女刀・や射刀・鎗、妖刀・夢が両手にお
盆を持ち居間に入ってきた。

「おっ、おやつでござるか」

「今日はなんだろうか」

昼食後、そのまま居間で寛いでいた楓と真名は三人が持ってきたおやつは何だろうかと考えながら居間に置かれていた席につく。なお、鈴は今現在大事なプロジェクトがどのとかで大学に行っている。銀次は部屋で食後の読書に洒落込んでいるらしいが・・・すぐに匂いをかぎつけやってくるだろう。

「今日のおやつはプリンです！！しかも狼刀さんが作ってくれたプリンですよ！！」

「おおっ！！真でござるか!?!」

プリン、と聞いた瞬間。楓は飛びつくように体を乗り出す。鎬はそんな楓を見てクスクス笑いながら嗜める。

「楓、そんな慌てなくともプリンは逃げませんよ」

「あう・・・済まぬでござる。でも、狼刀殿が作ったと聞いたからつい・・・」

女刀も鎬も、女性型の変体刀の中にはかなり料理がうまいのが多い・・・一部例外もいるが。その中でもこの二人、特に女刀はことお菓子作りが得意ときている。しかし、その上に行く男性型変体刀がいる。それが狼刀・罪だ。

狼刀・罪 『貫き通す』ことに主眼を置いた変体刀で、普段は黒髪で長髪、服は黒いジーパンを模したズボンと胸元が開いている服

を着ている20歳くらいの男で、戦闘時には見た目が普通の刀へと変わる。

前に書いたとおり、この狼刀・罪は非常に菓子作りがうまく、銀次も絶品と褒めるほどの腕前だ。また銀次並みの甘党でもあるためこの二人が揃うと砂糖五百グラムの砂糖袋が一つか二つなくなる事がよくあるらしい。

女刀もそれを見てフツ、と笑いながらプリンを配る。

「楓様にそういつて下さると狼刀様もとてもありがたいですわ。どうぞ」

「まあ、確かに美味しいからね狼刀さんの作ったお菓子は・・・とこころで」

真名もうんうんと納得する。真名も狼刀の作った菓子が好きなのだ。・・・そして、その菓子を食べる前に真名はスツと指先を地面に向け、

「満さんをどうかしたほうがいいんじゃないかな？」

「ああ・・・楓。そんな嬉しそうな顔をして・・・もう私ダメだわ・・・」

「か、満さん！？大丈夫ですか！？」

真名の指差した先・・・そこには鼻血を出して悶えている射刀・満がいた。満は元々四季崎記の娘を守るために作られた七星変体刀の一本・・・楓はその娘にかなり酷似しているとかどうか。以前

の学園祭のときも指が摺り切れてんじゃないの？と言う勢いで写真を撮りまくっていた。

その横では鎚の放った鼻血が頭から掛かりちよっとホラー的な感じになっている妖刀・夢が涙目になりながら介抱している。

「ん〜、鎚殿なら大丈夫でござるよ」

「ええ、四季崎様のところにいた時のほうが大変でしたわ。何せカメラと言うものがなかったもので、必死になって脳内に焼き付けようとして鼻血がドラム缶一杯になるまで出していたので」

「それは普通は死ぬんじゃないか!？」

明らかに失血死の量を超えているのに真名はツツコム。そのツツコムれた女刀と楓は・・・、

「だって変体刀だから」

「・・・なぜかその言葉で納得できる自分が憎く感じる」

「・・・何を騒いでいるんだお前ら・・・?」

居間の入り口に着流しを着て、頭をガリガリ掻きながら入ってきたのは我らが桐野銀次だ。先ほど思ったとおり、甘い匂いに釣られたのだろう。自分の定位置に座る。女刀はその前にコトリとプリンを置く。

「銀次さま、こちらは狼刀様を作った『特別性』らしいのでどうぞお召し上がりください」

「お、悪いな・・・おお、ちょうどいい甘さだな」

銀次はプリンをスプーンで一掬いして口の中に収める。プルン、とした食感がなんともいえない上にこの甘さが堪らない、といったように味わう銀次。

なお、それを見た女性陣は・・・？

「う・・・いくら拙者でもあれはキツイでござる・・・」

「ああ・・・私もだよ」

「私にも無理ですね」

「・・・（ガタガタガタツ）」

「ああ・・・四季崎様が川の向こうに・・・」

銀次が食べてるプリン・・・それは砂糖が以上に使われているプリンだ。狼刀の紹介の所でも書いたがこの二人、異常なまでの甘党である。以前、面白半分冒険半分で『銀次・狼刀用甘味』を食べた楓と真名はそのあまりの甘さに死にかけてたぐらいだ。女刀も表情では表されていないが、少し顔が青みかかっている。夢にいたっては・・・なぜか震えている。おそらく過去に何かあったのだろう・・・。諦は何かいろんな意味で危ない。

「んあ？どうしたんだお前ら？食わないんなら俺が食うが？」

「ああ、ダメでござるよ銀次殿！！これは拙者のプリンでござる！！」

覗き込むように見ている銀次はポツカリと開いている穴を見ながら
呟く。なお、その体勢でちょっとドキドキしてしまったと後に楓が
語っていたとかどうとか……。

「こりゃあ歯医者にいつて治さなきゃいけないな……でも、いま
金ねえし……」

いくら学園長に10億要求したとはいえ、すぐに届くとは限らない。
少なくとも今週末には入るらしいが、それまでではない。ゆえに今現
在桐野邸は預金を削って生活をしている。どこぞの大食漢とホーム
クラッシュ共のおかげで今現在金は減る一方。雪刀・吹雪を初め
とした働いているものたちのおかげでその日その日の食事は何とか
なっているが……それも時間の問題だろう。

「まあ、医療関係なら医刀に頼めば治せてもらえるからな……痛い
の嫌だからってちゃんといかないとダメだぞ？」

「ぶ〜、拙者もそこまでお子様じゃないでござるよ」

どうだか、という風に肩を竦めながら自分の席に戻り、プリンを食
べ始める。楓もその後プリンを食べていたが……やはり沁みるよ
うで、美味しそうな痛そうな顔をしながら食べていた。

「銀次さん。私も歯が痛」嘘付け。顔が全然痛そうじゃないぞ……
むっ」

真名も羨ましそうにして銀次に頼んでみたが、あっさりと嘘と見抜
かれ不貞腐れた表情になる。

今日も桐野邸は平和である。

「フフフ、・・・これはちょうどいい『実験相手』がいましたね」

・・・訂正、今日の桐野邸は一波乱ありそうである。

くくそれからしばらくした午後くく

「あつうく・・・痛いぞくねる」

プリンを食べてからしばらくして。楓は先ほどより若干痛みが増した歯の方の頬を撫でる。向かう先は先ほど銀次に言われたように桐野邸医療班の隊長を務めている医刀・助だ。

「えくと確か医務室は地下五階だったはず・・・」

楓はブツブツと言いながら地下へと続く階段のあるほうへと進む。

ちょうどいいのでここで桐野邸の地下についてお話しよう。桐野邸の地下は最初は地下五階までしかなく。主に鍛錬場、食料庫、武器庫として使っていた。

だが、人員の増加。改刀・狂による増築。それに便乗した”建造”に主眼を置いた工刀・鉾が改築に改築を加えて現在は地下五十階ある『らしい』。ある『らしい』と言ったのは文字通りの意味だ。あまりにも改築しすぎて銀次もよくわからず、『まあいいか』というノリで放置……。ときたま階下層のほうから悲鳴にも似た人間の声や、生き物らしき生物の声が聞こえるところとか……。医刀・助はその地下の五階に住んでおり、医務室も兼用している。憂鬱でござる〜、と思いながら歩いていると急に声を掛けられた。

「楓さん……。みつけた」

「こ、この声は!?!」

その不気味そうだがどこか楽しそうな声……。楓はその声を聞き背筋に冷たいものが走った。

「フフフ。見つけましたよ楓さん」

「い、いったいどうしたでござるか? 狂殿」

現れたのは我らが”変態刀”改刀・狂だ。狂は身に着けている白衣をはためかせながら楓の前に立つ……。その行為がなぜか獲物を追い詰める狩人のように見えたのは、楓の目の錯覚ではないだろう。狂は不気味な笑みを浮かべたまま楓に近づく。

「いや、実は楓さんが虫歯で困っていると聞きましたね……。それでこの前私が作った変体刀……」

狂がいったんそこで切り、言う。

「拷刀式・奴利螺牙で治療して差し上げましょう!」

狂がそういうと、地面（つうより床）からドゴンツ!と派手な穴を開けながら何かがでてきた。

「な、何でござるかそれは!？」

楓は急に現れた巨大な物体に驚く。それは、何と云っていいのか・・・とにかく全長は軽く六尺はある。全体的に黄土色を基調として、頭部と関節と尻尾の先端が紫色の球体となっている。だが、特筆すべきはそこではない。特筆すべきはその東部や間接、尻尾といったほとんどの部分にドリルが装備されているところだ。そのあまりにも禍々しい姿に楓は思わず二、三步飛びのく。狂は怪しい笑みを浮かべながら続ける。

「だから言ったじゃないですか!ち・りょ・う、って」

狂の言葉に反応するかのように、奴利螺牙はキューーンツ!と音を立てそのドリルを回転させる。治療と言うが、そのドリルの大きさは明らかに治療用ではない。ぶっちゃけて言うと拷問用だ。

「あ、安心してください。ちゃんと細いドリルもありますから」

「そういう問題ではないと思うでござるよ!？」

狂がなにやら指示を出すと、奴利螺牙の身体が開き中から細長いドリルが音をたてながら現れた。しかもたくさん・・・正直不気味さがアップした。楓はとにかく逃げなければと思いその場から瞬動を使って逃げようとしたが、

「逃がしませんよ〜！！拷刀参式・環津羽唾楓さんミディアムタイプを捕まえてください！！」

狂の言葉に反応するように奴利螺冴の後ろの地面（またも床）に穴が開き、今度は全身に鎖付きの手錠を巻きつけた龍が現れた。その龍はグオオーッと叫ぶと体に巻きつけている手錠を楓目掛けて飛ばす。

手錠は見事に楓を捕まえ、雁字搦めに捕らえる。そして近くにあった無人の部屋に連れ込む。

「な、は、離すでござるよ狂殿！！」

「何を言ってるんですか〜これから治療して差し上げると言ってるんですよ？さあ逝きましょう！！」

「ちょ、だ、誰かー！！助けてでござるー！！！！」

完全に体を動かせない楓。それをいいことに狂は楓の口の中に奴利螺冴の細長いドリルを入れようとした瞬間！！

「楓、どうしたんだ！？」

パンツと扉が開き現れたのは我らが主人公桐野銀次だ。銀次は目の前に広がっている光景を見て一旦キョトンとした表情になるが・・・すぐにその顔が怒りに染まる。

「狂う・・・てめえ覚悟は出来てんだろうなア？」

「え、ちょ？銀次さん？お、落ち着いてください。落ち着いて話し合えば分かり合え「黙って正座ー！！！！！！！！！！」はは

「んじゃ楓、早速コイツの治療を受ける」

あまりにも、銀次にしては珍しく空気の読めない発言をした。

「・・・へ？」

楓は思わず間の抜けた声を出す。同時に狂が「いいの？本当にいいの？」といった輝いているような視線を向ける。銀次は申し訳なさそうにコホン、と咳払いをして続ける。

「あ・・・実は今現在我が家の家計は火の車だな・・・そういう治療関係は医刀に頼んであるんだがよく思い出したら医刀は裏山で薬草を取りに三日間山に引籠もって帰ってくるのは明日なんだ・・・」

つまりは医者がないためちょっと正道とは違う医者にも頼もうということだ・・・しかも無料で。

「イヤだ！イヤだ！まだ死にたくないでござる！！」

勿論楓は反対。いくら治療とはいえ、変体刀の中の”変態刀”と呼ばれ、『桐野邸のマッドサイエンティスト』の異名をとる狂に治してもらうのは六連発回転式拳銃に五発の弾丸を込めてロシアンルーレットをするようなものだ。変な体に改造されたら一溜りもない。だが、銀次は

「すまん、これも家のためだ。なに、ちゃんと監視はつけとくから大丈夫だ。さあ、逝ってこい」

その監視に任命されたのはたまたまその現場を野次馬していた内の

楓が連れ込まれた部屋からドリルが回転して何かを削る音と、断末魔のような絶叫。それに怯える悲鳴。そして、何よりも楽しそうな笑い声が聞こえた。

「・・・・・・・・」

そのとき、真名は誰にも見つからないようにそっと自分の右頬を撫でる。その右頬が左頬と比べ若干腫れているようにも見える……。

後日、この虫歯治療事件が元で楓はドリルがトラウマになり、銀次とは口を利かなくなり、その楓の許しを得ようと土下座する銀次の姿があったとかどうとか……。

～～次の日～～

「うふふ～いやー楽しかったですねえ」

楓の虫歯を制限付とはいえ治療でき、まあまあ満足した改刀・狂。その狂は今現在桐野邸の廊下を片手に持った『超激辛！！八バネ口キムチ唐辛子ビタビタ煎餅！！』なる明らかに可笑しい色をした煎餅をバリバリと食べている。これは麻帆良学園のお菓子専門店で売られていた菓子で、主に辛い物好きやパーティー用に売られていた物だ。しかしそのあまりの辛さに挑戦するものは滅多にいない、今では狂を含めた数人しか買わないらしい。

「ん〜でもやつぱり物足りませんねえ・・・おや？」

ふと、視界に誰かが入り煎餅を食べるのを止める。

「・・・・・・・・」

狂の視線の先にはキョロキョロと辺りを見回しながら、忍び足でコツソリと歩く真名がいた。・・・その右手が右頬を押さえているのを狂は見逃さなかった。

「・・・・・・・・フッフ、新しい患者はっけ〜ん」

そのとき、廊下を歩いていた妖刀・夢が偶然にも狂のことは見て、後にこう語った

『あの時の狂姉さまの表情はとても楽しそうだったのに、とても怖く見えました』

妖刀・夢はしばらく悪夢としてそのときの狂の顔が浮かび続けたとか・・・・・・・・。

「……よし、誰もいないな」

真名はほっとしながら廊下を忍び脚で進む……右頬を押さえながら。

「(くそっ、昨日のアレのおかげで歯の痛みが倍増したぞ……！
！)」

昨日のアレ……とは、言わずとした狂による楓の歯の治療である。実は真名も若干ではあるが虫歯だったのだ。しかし気にするほどの痛みでもなく、銀次が言ったように顔に出ないほどだ。だが、人とは恐怖を感じると誰でも思い込みが激しくなるもので、病気でもないのに病気だと思いつき込み本当に病気になったりするときがある。真名はもし狂に歯の治療をされたらどうなるのだろうか？と想像してしまい……現在にいたる。

「(とにかく狂さんに見つからないように気をつけなければ……
)」

真名は足音を立てないように歩き、曲がり角があれば壁に背をピツタリつけ様子を窺う。そして狂がいなかったら歩く……スネークアクションをやりながら進む。

そして、地下へと続く階段を見て狂がいなことに安心して降りようとしたその瞬間、

ジャラララララッ！！！！！！

「なっ……！？」

急に伸びてきた鎖。その先端には手錠がついており明らかに昨日見たのほとんど同じであった。手錠は真名を雁字搦めに捕らえると部屋の中へと真名を引きずり込んだ。

「うわッ!？」

ガシャン、となにやら台みたいのにぶつかりその勢いのまま身体を縛る。真名はそれから何とか逃げようともがくが、ビクともしないむしろ暴れば暴れるだけ鎖の締め付けがキツクなっているようにも見える。すると、不気味な笑い声が聞こえてきた。

「フッフ……真名さ〜ん治療のお時間ですよ〜」

「ヒッ!?!」

真名は自分でも驚くぐらい乙女らしい悲鳴を上げてしまう……いや、誰だっであげてしまっただろう。何せ目の前にいるのが白衣を着て左手から伸びた何本ものマニピュレータが怪しく動き、妖艶すぎる笑みを浮かべ、その後ろには全身ドリルと全身鎖巻きにされている籠……一部の人間なら興奮するシュチュエーションだろうが、生憎と真名にその趣味はない。というよりなれない。

狂は怪しく笑いながら一步、また一步と真名へと近づく。それをみて真名は慌てて止める。

「ま、待ってくれ!!頼むから勘弁してくれ!!」

「ふふふ〜そうはいきませんよ〜」

左手から伸びたマニピュレーターが真名の口を無理やりこじ開ける。

「アグッ」

真名は口を大きく開けられた状態で身動きがとれなくなる。狂は動かないのに満足したのか、そのまま真名の口の中を覗き込む。

真名の右側の奥歯・・・そこに黒いポツカリと開いた穴が見えた。

「ほほうう・・・これはこれは・・・それでは早速・・・」

そういつて治療を始めようとした狂・・・だが、そこでえふと気がつく。

「（いまこの部屋には私と真名さんの二人のみ・・・つまり邪魔をする者はいませんねえ・・・）」

誰もいない部屋に二人のみ・・・おまけに邪魔者（おそらく銀次）がいないため・・・。狂はニヤリと笑う。

狂は右手からもマニピュレーターを出し、それを真名の口の中に入れ、

「ほほう、ここですね〜、コンコン」

「ウグッ!アウッ!」

虫歯のところを狂はツンツンとマニピュレーターで突く。その度に

入る痛みで真名は苦痛の表情をして声を出すが・・・それがいけない。狂をさらに興奮させる要因になってしまった。

「ふふふ〜痛いですかア？なら・・・これはどうですか？」

そういつて狂はマニピュレーターの先端を虫歯に押し込む。

「アアグー！フ、ファッ！！」

真名はあまりの激痛に体を仰け反らしてしまう。だが、それをすれば今度は鎖が体に食い込み痛みが走る。

真名は涙目になりながら止めてくれと目で懇願する。だが、狂はそれを見ても止めずむしろさらに激しくするだけだった。

「フフフ・・・いいですねえ。私は女色の趣味はありませんが・・・これはなかなか・・・」

「アウ・・・グ・・・ウ」

しばらくして、狂はやつと満足したのか右手に持ったマニピュレーターを引き抜き、それについた唾液をふき取る。歯を弄られていた真名は息も荒く、涙目のまま狂を睨む。だが、狂はそれすら意に介さず次に進もうとする。

すると、狂は白衣のポケットからなにやら小さい・・・米粒のような大きさの機械らしき物を取り出した。

真名はそれがなんだかわからなかったが、嫌な物だと認識できた。

狂は真名のその視線に気付いたのか、ニヤリと笑いそれが何なのか説明する。

「あ、やっぱ気になります？これはですね、私が作った超高性能小型ラジオなんです。真名さんどうです？折角歯に穴が開いてるのですから・・・これで埋めてもイイですよね？」

「ウウウツ・・・!!!!」

真名は首を横に振ってそれを拒否。必死に逃げようにも鎖で雁字搦めにされているため脱出は不可能・・・所謂絶対絶命だ。狂はあまりにも素適な笑顔をしながら続ける。

「大丈夫ですよ命には（多分）問題ないので・・・それじゃ狂、逝つきまゝす」

「フガガーーーーッ（字が違ーう!!）」

傍らに控えていた奴利螺牙のドリルが真名の口の中に入ろうとしたその瞬間、

ガラッ

「なんだ？何か変な声が聞こえたような気が・・・」

入ってきたのはこれまた我らが主人公桐野銀次だ。銀次は後頭部をボリボリ掻きながら部屋に入り・・・その部屋の中の惨状（？）を動きを固めてしまった。

部屋は、沈黙とドリルの回転音のみが響き渡るだけだった。

「……」

「ぎ、銀次さん……？あ、あのですね。これは私が善意でやっていることであり決して悪気は「狂」は、はい！！」

冷や汗をダラダラ流しながら狂は弁解するも、銀次の数トーン下がった低い声に狂はビクツと身を震わせる。
そして、一呼吸置いて銀次が続ける。

「とりあえずだ狂……このドアホが……」

「そげふっ！！」

銀次は見事なまでの虚刀流・薔薇を狂に蹴り込み、虚刀流・牡丹を連続で奴利螺冴と環津羽唾に叩き込む。

割と本気で蹴ったのに壁に減り込んだだけなのはさすがは四季崎紀謹製の変体刀と変態刀謹製の拷刀シリーズ……ということだろうか？

銀次は次に忍法爪合せを使用して真名の体を縛っている鎖を断ち切る。

「（これは……チャンス！！）ぎ、銀次さん！！」

「真名！！……大丈夫だったか？」

ここぞとばかりに真名は怯えて（演技）涙を流しながら（これは本当）銀次に抱きつく。さすがの銀次も震えながら泣いている真名を引き剥がすこともなく、ポンポンツと頭を撫でた。しばらくそうした後……

「さアて狂……何かいうことはあるか？」

昨日と同様の殺気を放ちながら、銀次は狂に問いかける。狂は「あの、その」とアタフタと言いつきを考え最終的に……

「……てへっ」

可愛らしくぺちゃんみたいな顔を試みた。そのとき、銀次の額に青筋が浮かび、

「正座——————ッ!!!!!!!!!!!!!!」

「ははははははい——————ッ!!!!!!!!!!!!!!」

その後、狂は二時間正座をして足の感覚がなくなり、折角作った超高性能小型ラジオを銀次に壊されたとか……。

その騒ぎを聞きやってきた楓がみたのは、正座している狂に説教している銀次と銀次にしがみ付きコチラに勝ち誇った笑みを浮かべる真名の姿だった。

近くで野次馬をしていた女刀や華刀に何があったのか聞き、

「銀次殿！！なにやら拙者のときと扱いが違つてござるよ!？」

「それはお前・・・今回は非常事態だつたから・・・」

「そつだよ楓。私は後少しでも銀次さんが気付くのが遅かつたら大変なことになつていたんだよ?（勝ち誇つた笑み）」

「うう・・・っ!!わん、銀次殿にいじめられたでござる〜」

銀次の何を当たり前な・・・という言葉と、真名の勝ち誇つた笑みを見て楓はその場からダッシュでどこかにいつてしまった。

後日、桐野邸の一角では銀次が何やら二mある巨大な軟体動物らしき物に追いかけれ、家中の楓を慕う生物変体刀に追いかけれ十回ほど死に掛けたとか・・・、

今日も桐野邸は平和である。

第二十四話（後書き）

今回は真名のターン！！

どうでしたでしょうか？後半の歯の治療は本来はもっと過激だったのですが・・・『これはマズインじゃね？』と思い軽くしてみました。

魔法使いの処分がみなさんに納得できるかどうかはわかりませんが、作者の脳内ではこれが限界でした、すみません。でもガンドルやシヤークティに高音はもう原作から外れましたので一安心です。

次回！！

夏休み二話目）・・・と思いましたが！！そろそろ話を進めないといけないと思ったので時季的にもピッタリなバレンタイン話を書きます！！少女達の仁義無き戦い！！そしてある少女の陰謀が始まる・・・！！

次回お楽しみに！！

夏休み話は追々閑話で書くつもりですのでそちらもお楽しみに！！

最後に変体刀の案を下さったパールパレーパさん、アルマースさん、ふかやんさん、ありがとうございました！！

第二十五話（前書き）

最近、銀次が羨ましいと思う銀閣です。

どうもみなさん銀閣です。今回は遅れましたがバレンタイン話です。まあ・・・今回もちよこつと暴走してしまいました（笑）でも面白いと思ってくれば幸いです。

それではどござー！

第二十五話

肅清から時が流れ、二月。その間にも様々なことが起きたがそれはまた別の機会に話そう。

さてさて、時が流れて寒くなった二月。世はバレンタインで賑わっている。男子は女子からチョコを貰えるかドキドキして、女子は意中の相手を思いチョコを作る。

勿論、桐野邸でもそれは例外ではなく女子達による熱い戦いが繰り広げられている……。

〓〓二月十三日 地下六階・大食堂〓〓

桐野邸地下六階は麻帆良に呼び出された自立型変体刀が食事を取る階になっている。最初こそ数百人収容できる広さだったが、今では数万人は余裕で入れるぐらいの広さになっている。以前、銀次がこの部屋を見て『よそ様の家に迷惑かかったんじゃないか?』と聞いたところ、

『……………フフフフフッ』

と、改刀・狂が恐ろしいほどの含み笑いをしていたので怖くて聞か
なかつたとか……。

その大食堂を利用して桐野邸の女性陣はチョコ作りに謹んでいた。

「ちょっと、誰かバニラエッセンスしらない？」

「あ、ここにありますよ」

「むづ……ここはどうやって作ればいいんだ？」

「そこはですね姉さん……」

「……チョコ」

「ああ！！ダメですよ食べちゃ！！」

あちらこちらから響く声。女性たちは意中の相手にチョコを作るこ
とに悪戦苦闘になりながらチョコを作る。

「あれ女刀さん。そんなに作って誰にあげるんですか？」

「ああ、紅？普段お世話になっている男性の皆様にと違ってね……
所謂義理チョコよ」

「……だからってハートのど真ん中に大きく『義理です。勘違い

したら銃剣で串刺しにしますよ』と書かなくとも……」

……中には義理チョコを作るものもいたりする。
楓や真名、鈴もその中に加わりチョコを……

「まずは拙者の体にチョコを塗って……」

「私はホワイトチョコを体に塗ろうかな」

「ならば私は両方ネ」

作らず怪しい会話をしている。どうやら「チョコと同時に私も食べ
て」という感じで銀次に迫るつもりらしいが……。

「しかしそれではたして銀次が真意に気付くかの？」

その会話を聞いていて、溶けたポウルに入った溶けたチョコをグル
グルかき回しているのは白髪で長髪、髪を幾つかに分けていて、脚
部には藍色の鉄のブーツに腕には銀色のガントレットをつけた女性・
……『殺気に対する反応を良くする』ことを主眼に置いた変体刀、
姫刀・青玉サファイヤがいた。姫刀は普段は人間型、戦闘時は銃へと変わるこ
とができる所謂、変形型変体刀だ。

姫刀の言葉を聞き三人はウム、と今の考えを改める。

「確かに……銀次殿はそういうことをしても気付かないときがあ
るでござるからな」

付き合いが一番長い楓が頭をポリポリ掻きながら呟く。楓の呟きに
真名も鈴もうんうん、と頷く。真名ももとより鈴も未来での生活を
合わせるとやはり楓のほうが一番長い。その付き合いの長さが銀次

がどのような人間なのか？というのをシツカリと理解している。

「ならば、やはり普通にチョコをあげるのが常套手段じゃろ？」

型にチョコを流し込みながら姫刀は言う。ついでに言うところの姫刀、別に銀次にあげるつもりはない。姫刀には同じ変形型変体刀で『最強の勇者の魂が宿っている』とされている勇刀・有真素アルマースというよくアホ毛を筆られる彼氏がいて、この二人はベタベタのバカップルである。

「むゝ．．しかしそれだとインパクトにイマイチ欠ける様な．．．

」

「変にインパクトのある物を送るより、普通の物をあげたほうが伝わりやすいと思うぞい」

「確かに．．．じゃあそれにしようか」

「そうネ、そうしよう」

三人は早速チョコ作りに専念すること．．．、

「あ、済まんでござる真名、醤油が倒れてしまったでござるー（棒読み）」

「おっと、悪いね楓。私も砂糖と間違えて塩をお前のほうにこぼしてしまったよー（棒読み）」

「おっと失礼二人とモ。塩酸が二人のチョコにかかってしまったアルヨー（棒読み）」

「おっとと間違えて鈴殿のほうに味酩みりんが倒れたでござるー（棒読み）」

「おっと間違えて鈴のほうに重層を倒してしまったー（棒読み）」

「」「」「」「」

なにやら大変なことになっている各々のチョコを放置して、三人は各々の武器を片手に睨み合う。

「…………ふっ、鈍感もここまでくると罪じゃのう、銀次」

姫刀はそれを有真素から貰ったペンダントを弄りながら呟く。

「……………」

その大食堂のやや端っこのほうではあの喰刀・獏がコンロに火をつけ鍋をかき回している、

「……………（ダラダラダラッ）」

……………涎というある意味最高の調味料と共に……………。

今日も桐野邸は平和である。

『くくく……これは大儲け間違いなしですねえ。ウフフフフフツ……』

……訂正、さらに一波乱ありそうだ。

くく地下五十階・『狂の楽しい実験室!!』くく

桐野邸地下がそれなりに深いことは以前説明したと思うが、ここで補足説明。大体自立型変体刀達が使っ階は地下一階から地下四十階までの間で、その四十階までの間で就寝や食事を摂るのだ。なお、一階一階がやたら広いため一つの階で町が六つぐらいできるぐらい無駄に広く、人工太陽などもあるぐらいだ。変体刀の中にはそれを利用して畑仕事をするものもいるぐらいだ。

そして地下五十階から先……ココから先は変体刀、改刀・狂の実験室だ。

「ふふふ……完成です!!」

その実験室の一室で狂は『あるもの』を作っていた。そのあるものとは……、

「「「「「「「」

はたして、狂の野望はどうなるのか！？他の女性陣はそれを防げるのか！？

なお、その頃の銀次は・・・？

くく地下・二階鍛練場くく

「あゝ・・・また負けた・・・か」

「大丈夫ですか？銀次様」

地下二階の鍛練場。銀次はそこで先ほどまで稽古をしていた。そこで銀次は地面に横たわるように倒れていた・・・ライムグリーンの髪を持った袖なしミニスカメイド服を着ている美女に膝枕をされて。

「ウムー、銀次もまだまだだねー。でも前より多少は強くなっていると思うよー」

その横で手に持った金属製のホットケースティックをクルクルと廻しながら銀次のことを見るのは、茶髪をセミロングにし、左膝からばつさりと切られたジーンズに頑丈なブーツを履き、赤紫色の長袖の

シャツの上から袖のない黄色のレインコートを羽織り、首に長いマフラーを巻き、ごついゴーグルをぶら下げている少女・・・”磁力操作”に主眼を置いた少女変体刀『磁刀・浅葱』だ。浅葱は変体刀の中でも上位に入るほどの腕の持ち主で、闘士はもちろん紅ですら勝てないほどの腕前で銀次も一度として勝った事がない・・・ついでに言つと胸は断崖ぜつ・・・

「・・・(チャキ)」

・・・通常よりかなり・・・それなりに・・・やや、控えめである。これ以上の描写は作者の命に関わるため控えさせてもらう。

「ふふ・・・そうですね。後一步のところでは銀次様は毎回負けてしまいますから」

先ほどから銀次に膝枕をしている女性・・・こちらでも勿論変体刀、『武器の扱い』に主眼を置いた独立型変体刀・姫百合だ。

独立変体刀とは名前の通り自立型と違い完全なる独立型の変体刀だ。銀次が呼び出さずとも勝手に出てくることもでき、気付いたら勝手にでているときがある。

そして、姫百合はその独立変体刀の中でもそれなりに最初に作られた存在でもある・・・余談だが、姫百合はかなりの胸の持ち主で、紅と並ぶほどの持ち主だ。普段は邪魔だからといってサラシでギュッとキツク締められているらしい。胸が小さ・・・控えめな変体刀達からは親の敵のような目で睨まれることがたたあるとか・・・。姫百合の言葉を聞いて銀次はああ、と呟く。

「毎回あと一歩、つてところで負けるからな……はあ」

「まあ、君が僕に勝つには後数百年はかかるかなー？」

「頑張ってください銀次様」

二人の声援を受け、もちつと休んでから稽古をまたしようという話になった……のだが、

「あららくお邪魔だったかな？」

「……何をやっているのですか銀次」

二人の女性の声を聞いて、銀次はそちらへ視線を向ける。そこにいたのは……、

「おお、鈴蘭、それに睡蓮。いま帰ってきたのか」

そこにいたのは二人の女性で、服装と体型が同じならまったく見分けがつかないような二人組だった。

「うん、さつき帰ってきたところだよ。あ、これお土産ね」

そういいながら何やら紙袋を渡すのは赤紫色の髪は肩に届くくらいの長さで、いつも身に着けているミラーグラス。丈の短いメイド服を着た女性……“聖人としての特性”と“魔王としての特性”とカリスマ性と“神殺し”に主眼を置いた変体刀、聖魔刀・鈴蘭だ。かなりのバグキャラで銀次どころか変体刀全員でかかったとしても負けてしまうほど強いのだ。しかも本気を出さずにだ。

鈴蘭は自らを悪と名乗り、悪徳企業に殴りこみにいたり悪徳高利貸し業者を力業で追い返した上数人の変体刀達を引き連れて借金を踏み倒したりした事もしばしば。鈴蘭は世界中のみんなが平和に笑えればいいのにと思いつながらそういう自らを悪と名乗り働く活動をしているのだ・・・睡蓮は強制参加させられているらしい。

「・・・・・・・・」

そして、その後ろに控えこちらを睨んでいる女性・・・こちらは簡単にいえば巫女だ。髪型は長髪を後ろで輪になるように2つに結わえ、腋の部分が露出した巫女装束を身に纏っていて、先ほど紹介した聖魔刀・鈴蘭の妹である巫女刀・睡蓮だ。さらに言えば、銀次の好みドストライクでもある・・・のだが、

「・・・・・・・・(ふう)」

「おい、睡蓮。何でため息をついているんだ？」

睡蓮はため息を付きながら銀次を見る。銀次は不思議そうに睡蓮を見る。

そして睡蓮は続ける。

「銀次・・・お前は自分が女をはべらしているのを自覚するのです」

「・・・・・・・・ハア？」

姫百合の膝から頭をノツソリと上げた銀次は怪訝な表情で見る。

「俺がいつ女をはべらしたんだよ？」

睡蓮はたまに、このようにまったく覚えのないことをよく言ったため銀次は疑問に思うことがたまたあるのだ。

「(っ)たく、こいつたまに変なこと言うんだよな・・・黙っていたら俺のストライクゾーンど真ん中なの「フンッ!」「ぐほっ!!!」

銀次は睡蓮を見ながらそんなことを思っていると、急に腹部、というより鳩尾に激痛が走る。その原因は、

「このケダモノ。ならば、そのいやらしい目つきでわたくしを見るのをやめなさい」

「ぐう・・・!!!」

「銀次様、大丈夫ですか?」

どうやら睡蓮の踏みつけが思いつきり鳩尾に決まったらしい。睡蓮は汚れを見るような目で見ると、姫百合は銀次を心配するが・・・淡々とした言葉で言ってるため何やら信憑性にかける。

そんな怒っている睡蓮に近くで聞いていた鈴蘭はニヤニヤしながら睡蓮の肩に手を廻し、

「お?なになに、睡蓮?銀次君が姫百合ちゃんに取られて嫉妬しているの?」

「な!?何を言っているのですか姉上!!私は別にこのようなケダモノが何をしようと私には関係は・・・!!!」

睡蓮は顔を真っ赤にさせながら反論する。睡蓮は超が数え切れないほどついているほどの真面目なのだ。ついでに言つと短気で喜怒哀

樂がきつぱりとわかれている。

鈴蘭はそれを面白がるように笑いながらさらに続ける。

「まあまあ、いいじゃないの。銀次君が相手なら姉としても安心だからさ」

「何が安心なのですか!？」

二人は悶える銀次を放置したまま口論（睡蓮が鈴蘭に一方的に言うだけだが）を続ける。その傍らでは浅葱がホッケースティックをクルクル廻しながら「・・・妬ましい」と睡蓮の胸を睨みつけていたり・・・

「ふう・・・今日も平和ですね」

「・・・ど、こ・・・がだ・・・?」

姫百合の平和そうな声に、銀次は悶えながらツッコミを入れる。

くく2月14日くく

翌日、麻帆良はあちらこちらで男女の組み合わせが見受けられる・・・
・・・そんな中、

「いたでござるか!？」

「いや、そつちはどうだ？」

「駄目ネ、見つからないヨ」

そんなあちらこちらで何やら桃色の空気が漂っているにも関わらず、ある少女達……楓に真名に鈴だ。彼女らは息咳切つてある人物を探していた。ここで想像されるのは銀次だろうが……今回は違つた。

「くっ……嫌な予感がすると思つて狂さんを探してみたら……案の定だつたか……!!」

余談だが、桐野邸に関係する嫌な予感の七割八割が狂関係である。

「とにかく手分けしてまた探そう……何やら変に売られているよ
うな気がしてならない」

「そつでござるな……しかしどこにいるのか……？」

「うゝむ……ん？」

三人は唸る。他の女性型の変体刀も必死になつて探してるも、一向に見つからない。そこで悩んでいると、鈴が何かを見つけたような声を上げる。楓と真名はそんな鈴に問いかける。

「どつかしたのか鈴？」

「何かあつたでござるか？」

楓と真名は鈴の視線を追い、そちらを見ると

「……あつ……」

そこには普通のより大きめの自販機があるだけだった。しかも最近やたらと麻帆良に増えた自販機で普通は勿論麻帆良限定品や、狂や変体刀達を作った缶ジュースなどが売られている……しかし、三人はこれが本来何なのか知っている。何せ今探している変態刀が作った『変体刀』だからだ。

「……」

三人はその自販機に近づき、硬貨……特殊な紋様が刻まれている物を入れた。

〳〳麻帆良某所〳〳

世間がバレンタインというイベントが行われているなか……ここ某所でも（ある意味）祭りが開かれていた。

そこには女性の姿はなく、明らかに冴えない男達が群がって何かを必死になって何かを求めていた。そしてその中心にいる唯一の女性・

突然、彼女の目の前・・・というより彼女を中心に囲むように修羅のような殺気を放つ少女達が現れた。

そして、その少女達を代表するかのようには楓と真名に鈴が前に出た。

「さて・・・これはどういうことなのか・・・キチンと納得のいく説明をしてくれないかな？」

「狂殿・・・拙者も是非聞きたいでございます」

「説明をお願いできないかな・・・狂さん」

真名のその眼光はいつも以上に研ぎ澄まされ、楓も普段は開かない目を開いている・・・鈴にいたってはいつも猫かぶりを使っている訛りが無い。周りを囲んでいる女性型変体刀達も同じように殺気をばら撒いている。

狂は冷や汗を滝のように（比喻にあらず）流しながら楓たちに聞いた。

「な、なぜここがわかったんですか？情報が漏れないように細心に細心を払ったつもりなのに・・・」

「いやなに、ただの勘さ。私以外も人たちもどうやら同じように嫌な予感をしたらしくてね・・・で、」

「そこでみんなで狂殿を探していたら・・・」

「狂さんが作った販刀・単車を見つけたから販刀にサポートしてついている缶刀達に手伝ってもらった・・・というわけだよ。ね、みんな」

「嫌です!!死にたくないです!!ではさようなら!!」

狂は近くに設置されていた販刀・単車に跨りその場を颯爽と逃げさる・・・ちやつかりと売上金は一円も残さずに。

~~~~しばらく走った後~~~~

「うう・・・まさか終われる身になるとは・・・これだったら欲を出さずに一体だけ作って彼に渡せばよかったですね・・・もう大じょ・・・」

「~~~~~~~~待あああああああてええええええええええええええええツ!!!!!!!!!!逃がすかああああああああああああああああツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「全然大丈夫じゃないイイイイイ!?」

狂はさらにアクセルを踏んでスピードを上げるが・・・怒りに燃える女達は怖いものである。

「夏休み時はよくも拙者の虫歯を痛めつけてくれたでござるな!!・・・むしろ真名のように強引にやってくれれば銀次殿が拙者を心配してくれたのに・・・!!」

「今度は、私が奥歯に穴を開けてラジオを埋め込んであげるよ。少し役得あったからそれぐらいで済むんだから感謝して欲しいね」

真名は片手で器用に販刀を運転させながら右手に持った回転式拳銃・  
・弾丸は焼刀・空襲製の155mm榴弾砲と同等の破壊力を持つ  
弾丸を込めた銃を持ち、楓はその後ろに乗りクナイを取り出す。

「フッフ・・・いくら狂さんでも今回のことは許せないなア・・・  
殺す」

もはや、訛りの片鱗すらも感じさせない日本語を喋りながら、ありえないほどの速さで狂のことを追いかける鈴。

「我は神の代理人、神罰の地上代行者、我の使命は、我を辱めようとする愚者を、その最後の肉の、一片までも絶滅すること・・・A  
MEN!!!!」

女刀・侍はその無限に呼び出せる銃剣を両手に大量に持ち端走って追いかける・・・なお、女刀は変体刀の中でメイド長と呼ばれているほか、いきなり胸が大きくなったように見えるから一部の者（主に口が悪い変体刀）からはP D長と呼ばれているとかどうか・・・  
・そのたびに悲鳴と怒号と銃剣が飛ぶとかどうか・・・。

「待ちなさい！！逃げなければ半殺し程度で済みますからすぐに止まりなさい！！」

「いくら姉さんでも今回と言う今回は許しません！！」

華刀・紅と妖刀・夢も走りながら追いかける。紅はともかく、夢はものすごい怒りの形相をして手に刀を持ち追いかける。

「おらあア！！待ちやがれ！！一つ残らず燃やし尽くしてやる！！」

少女変体刀の最古参でもある永刀・鳳は、背中に炎の羽を生やし空を飛ぶ。両手には炎の塊が煌々と輝く。狂も少女変体刀に古参の一人であるためこの二人はそれなりに仲がいいのだが・・・今回ばつかしは怒り心頭している。

「僕の手ヨコのサイズ・・・明らかに僕よりサイズ大きいけどさー、あれって要するにキミはボクに喧嘩売っているつもりかい？」

磁刀・浅葱も、その討伐隊に参加している。しかしその目は口調とは裏腹に据わっていて多分、捕まったらただでは済まないだろう。・・・ちなみにどこのサイズかは・・・言わなくてもいいだろう。

「貴様ーッ！！よくも私と私の大事な妹達に恥をかかせてくれたな！！貴様のその腐った脳天、叩き割って直してやる！！！」

以前の粛清の時もバルカン砲をぶつ放すという類を見ない怪力を見せ付けた力刀・獺は自分と自分の大切な妹達の仇（？）を討ち、狂を更生させようとロードローラーを片手で担ぎ走って追いかける。

「oooooooooooo地獄に落ちなさい、とミサカは目の前の馬鹿に明確な殺気を送ります」「oooooooooooo」

そっいいながら、大量の販刀に跨り狂を追いかけるのは千体で一体という千刀・ツルギの少女変体刀版ともいえる妹刀・御坂だ。

御坂達は手に手にサブマシンガンやロケットランチャー、はたまた  
火炎放射器と……ちよつと周りの風景を変えれば某世紀末救世  
主伝説にでてきても可笑しくない集団が追いかける。

「待ちな狂！！私の千刀の錆にしてやる！！」

「待ちなさい狂殿！！いくら古参のあなたでも……こればかりは  
許せません！！」

そしてさらに追いかける二人の女性型変体刀……黒い巫女服とい  
う一変変わった服を着て、赤い鞆をした刀を両腰に六本、背中に五  
本吊るして手には刀を二本持った女性と剣術用の道着を持ち、手に  
は木刀のような変体刀を持った女性……正直に言えば刀語の敦賀  
迷彩と汽口斬愧だ。

勇刀・十二士 銀次が魔法使い達との戦闘用に考案して作った変体  
刀で、四季崎記紀が作った完成形変体刀十二本を使いこなせるよう  
に作られた変体刀達だ。

「待ちなさい狂さん！！」

「……殺す」

さらにその後ろを手に刀を持った雪刀・吹雪と、バイオリンを手に  
持った曲刀・楽が無表情をしながら怒るといふ器用なことをしなが  
ら狂を追いかける。

だが、その中でも一際恐ろしい殺気を放ち、狂のことを追いかける二人の姉妹がいた・・・聖魔刀・鈴蘭と巫女刀・睡蓮である。

「狂ちゃやややややややややややんツ!!! ちょツツツツと待とうかあああああああああツ!!!!!!!!!!!!」

「このような屈辱を合わせて・・・無事に逃げられると思っ  
ていますか!?!」

「ヒイイイイイイイイイイイイイイイイツ!?!?!?!」

鈴蘭は手に7・62ミリNATO弾をバラ撒くM60を持ち、まるでラボーを彷彿させるような片手撃ちを行う。

睡蓮は顔を真っ赤にさせ涙目になりながら手に和弓を持ち狂のことを追いかける。  
後に狂が語るには

「あの時の姉妹はまさに修羅でした・・・」

だ、そうだ。

味方はいなく、後ろには各々の武器を持ち追いかける修羅達・・・捕まっても投降しても扱いはなんら変わらないだろう。だからこそ狂は叫ぶ、



「助けてド えもーんツ!!!!!!!!!!」

以前見た某猫型ロボットが助けられないかと、涙目になりながら叫ぶ……だが、残念なことにはここは現実。そんな都合よく猫型ロボットは……いない。

主人公そつちのけで怒り狂った少女達と、彼女達からひたすら逃げ回る哀れな少女……はたして勝利の女神はどちらに!? 地獄のデッドエンドレース……開始!!!

〳〵その頃の主人公〳〵

「……ん?なんか外が騒がしいな……何かあったのか?」

「…… (バリポリバリポリ)」

居間にあるコタツに入り、読書をしていた。その右側には獏がポリポリと何かやたらとでかい物を食べていた。不思議に思った銀次は獏に聞いてみる。

「てかよ獏。さっきからそのやたらとデカイのだが……何を食べてんだ?」

「……チヨコ（バリバリバリ）」

「……食うのは別にいいけどよ。程ほどにしとけよ？……って、なんだ？」

巨大なチヨコが次々と獺の口の中に消えていく中、呆れるように言う銀次の前に獺がピンクの紙で包装された物を差し出した。

「……食べる？」

「ん……お、おう（こいつがマトモな物あげるなんて珍しいな）」

何回か見た人もいると思うが……獺が大抵銀次に進めるのはモザイクがかかっているようなゲテモノだからだ。だからこの箱の中も……？と思いい中を見てみると、

「（あ、普通に生チヨコだ……どれどれ）お、中タイケるなコレ」

「……うん（バリバリバリバリ）」

「あ……平和だな……」

獺がくれたチヨコの味を堪能しながら銀次はチヨコの食べられていく音をBGMに呟いた。

今回のバレンタイン……獺が一番乗りをはたした。

そしてその頃の狂はというと・・・？

結局のところ。狂は鈴蘭と睡蓮の双壁に捕まり、他の少女変体刀や楓たちにフルボッコにされて気絶され今に至る・・・のだが、

「ちょ、なんですかこれは！？なんで服がなくて、身体中にチヨコがぬられてるんですか！？」

なぜか狂は下着すらつけていない丸裸で大の字になるように縄で縛られ、全身にチヨコを塗りたくられている・・・しかもなぜか数頭の馬が狂を囲んでいた。

「う、馬！？何でこんなところに馬が！？あ、ちょ、ヒヤアン！！  
そ、そこはダメ、ダメ・・・ああ、だからダメって・・・！！ひゃあ  
あッ！！んああああ・・・！！！！」

馬に体中を隅々まで舐められている狂を見て、今回被害を受けた少女達は声を揃え、

「ooooooooooooよし、大成功！！！！！！」

と叫ぶ。

こうして、少女達は自分達の当初の目的を忘れながらも、一致団結し、彼女の野望を打ち砕いたのであった……。

「……あ、銀次殿にチョコあげてないでござる」

「……………あつ……………」

後日、大量のチョコを片手にそれはそれは嬉しそうな顔をしながら、なぜか増えた貯金を眺めチョコを食べていたとか……。

「ふふふ・・・今回は失敗しましたが、次は、次こそは、私が勝利してみせます・・・！！ツハ、ハツクション！！」

・・・はたして、彼女が懲りる日はあるのだろうか・・・？

## 第二十五話（後書き）

どうでしたか？今回は銀次の出番があまりありませんでしたね（笑）  
今回書いていて思ったことを一言・・・恋する女ほど怖いものは  
ない・・・ですね（笑）

さて次回！！

遂に・・・遂に来た！！あの薬味小僧が・・・！！周りの女子をド  
ンドン誑かすあの薬味がやってきた！！はたして銀次はその薬味の  
魔の手から楓たちを守ることができるのか！？

「守れるのか？違うな・・・」守ってみせる『んだよ』

次回、ご期待ください！！

最後に変体刀の案を考えてくれたパルパレーパさん、ルフアイトさ  
ん、アルマースさん、ふかやんさん、ありがとうございました！！

アルマースさんが考えてくださった変体刀の数々ですが、変形型

変体刀と命名してしまいました。．．．よろしかったでしょうか？

## 第二十六話（前書き）

最近、眠たくて堪らない銀閣です。

どもども、銀閣です。今回から遂に原作入りです。遂に”アレ”も登場してしまいます。でも出番ほとんどありません（笑）

それでは、どうぞー！！



## 第二十六話

時は流れ三月・・・遂に、このときがやってきた。

〳〵桐野邸・銀次の部屋〳〵

「・・・遂に来たか・・・」

三月の微妙に肌寒い朝。楓たち三人を見送った銀次は自分の部屋の中央に座りながら呟いた。

夏休みの肅清が終り、今現在麻帆良は銀次の完全な支配下にある。空にも陸にも水の中にも、銀次の変体刀が24時間営業で監視をしている。そして肅清の際の賠償として学園長に要求した麻帆良に関する情報すべてを教える・・・という条件があった。そしてこの前、新しい情報が入ったのだ。その情報とは・・・。

『三月に『立派な魔法使い』としての修行としてネギ・スプリングフィールドが麻帆良に教師としてやってくる』

正直なところ、銀次が麻帆良に関する情報を要求したのはここにあ

る。ネギが三月辺りに麻帆良にやってくるのは転生前から知っていたので問題はなかったのだが、いつ頃なのかという詳しい情報を銀次は持つていなかったのだ。それゆえの情報要求だ。それが過ぎてしまえば最早この情報要求はあまり意味はない。どうせ、今後学園長がまともな情報を出すわけないだろうし、下手したらネギの修行のためとかで偽情報を流すだろうからだ。

「（原作だとあの薬味のせいで楓はなし崩し的に白き翼に入るような感じなんだよなあ・・・確か）」

銀次は最近、脳内の原作知識も最早あてにならなくなってきたと思っっている。何せ数えて二十年原作を見ていない。毎日のように思い出して原作を忘れないようにしているが・・・超鈴音が擬似虚刀・鈴という未来の銀次が作ったという完全に違う『未来』があるのだ。今後どんな話になるのか・・・さすがの銀次も読めなくなってきた不安になった。

「まあ・・・楓と真名と鈴の三人が無事なら後はどうでもいいが・・・」

おそらく、この三人を守る為にあのクラスの人間を殺せと言われれば、銀次は躊躇も情けもなく殺すだろう。酷いと思うが、それが銀次だ。それで助かった者がいても銀次にとってはオマケに過ぎない。今後のことを考えながら、銀次はネギをどうしようか考えるが・・・先ず鈴をどうにかしなければいけない。

情報が入ってきてネギ・スプリングフィールドの名前を聞いたとき、鈴は憎々しい表情をして殺気を出しながらネギの写真を睨んでいた。

どうしたのか？と銀次が聞くと、

『ネギ・スプリングフィールド・・・百年後の地球で地球軍に『赤髪が悪魔』と呼ばれた又ギ・スプリングフィールドの祖先だよ・・・』

又ギ・スプリングフィールド。地球出身にも関わらず、『英雄の孫』や『天才魔法使い』ともてはやされメガロメセンブリアに加担した通称『裏切りの英雄』

『戦争勃発当時、地球軍側にも地球出身の魔法使いがいてね。又ギ・スプリングフィールドも最初は地球軍側だったんだ・・・でも、彼の親・・・スプリングフィールドが『なぜ、地球は困っているメガロメセンブリアを受けられないのか？』という言葉を聞き、どこをどう思ったのか地球側が悪いと考えた又ギ・スプリングフィールドは戦闘中に裏切りメガロメセンブリアに加担。そのせいで地球軍の戦力が大幅に減ったよ・・・その後銀次さん達が戦闘に参加してメガロメセンブリア軍は全滅。又ギ・スプリングフィールドも捕まり公開処刑にされて世界各地でその死体を晒されたよ・・・まあ、一部はシツコク生き残ったけど・・・』

それで私が生まれたし。と鈴はネギの写真を刻みながら言う・・・よほど憎いらしい。

余談だが未来では魔法使いを狩る『マギステルハンター』なるものが流行ってるらしく、それでは自分達でキャラを作ったりして魔法使いを狩っていき強い変体刀を手に入れていくというゲームらしい・・・いま流行っているゲームのパクリに似ているが、どうやら同じ会社のゲームらしい。

「（あの薬味から楓たちを守れるか……？いや……）……  
・守るんだ。何があっても……」

原作ならこれから来るであろう楓たちの身に降りかかるネギ関係の  
事件から……楓たちを守る。

銀次は新たな誓いを胸にさらに今後のことを考える。

「（まずは……そうだな、やはり見ておく必要があるだろう）……  
・学校に行ってみるか」

幸い（？）今日は楓と真名と鈴が弁当を（故意的に）忘れてる。そ  
れを届けると名目があるため問題はないだろう。

「まあ、昼時にいけばいいか……それまでゆっくりとしてよう」

ゴロンと銀次は畳に寝転がり目を閉じる。今から寝たら昼前には起  
きれるだろう。そう思い寝転がる。それに、

「あの薬味と眠い状態で接触したら思わず殺しちゃうかもしれない  
からな……」

一応、ネギ対策のためにも寝る。

。後に、もっと睡眠しとけばよかったと苛々するとは思わず……。

「同時刻、麻帆良学園女子中学校2-A」

麻帆良学園女子中学校2-A・・・他のどのクラスよりも成績がずば抜けて悪いが、中学生なのに以上に美人が多いことで有名なクラス・・・そのクラスはいつも通りであったが・・・一部だけ違うところがあった。

「手榴弾をここにしかけて・・・よしよしこれでいいネ」

「いや、よくないでござるよ？外すでござる」

鈴は入り口である引き戸にピアノ線を取り付けた手榴弾を括り付け、引き戸を引いたら爆発する仕掛けをつけるも、楓がそれをすぐに外す。なお、手榴弾は狂謹製の特製手榴弾で爆発したら半径三十メートルに鉄片と爆風を浴びせ殺傷させ、さらに半径十メートルに焼夷剤をばら撒き燃やし殺すことができる。

「・・・ならばこのクレイモアを正面に仕掛けて・・・ふむ、完璧ネ」

「いや、完璧とか関係ないからな？外すぞ」

手榴弾を取り上げられた鈴は不満顔になりながら次に鞆からクレイモア地雷を取り出す。これは既製品だが爆発したら350個の鋼球が一気に襲い掛かり誰でも簡単にミンチ肉ができるという便利な武器だ・・・だが、生憎とここではそれを使用してもいい状況ではないため真名がそれを外す。

「・・・さつきからアレもだめこれダメ・・・なら一体楓さんと真名さんは何なら許してくれるネ!？」

「「いやだから爆発系はやめれば(いいんだけど/いいでござる)」

「種類か!?爆弾の種類が気に入らないのか!?ならばこの戦術核兵器に次ぐといわれる威力を持つていると言われるMOABを」「だからやめろ(でござる)!!」「おうふっ!!」

鞆からニヨキツとオレンジ色の弾頭が覗いた瞬間、楓と真名は拳を握り鈴の頭を殴った・・・それ以前になぜそんな物が鞆の中にはいつてたのだろうか?そしてそんな物騒なモンがなぜ次から次へと出てくるのだろうか・・・なぞである。

それはとにかく。楓と真名はため息をつきながら鈴を諭す。

「鈴殿・・・気持ちはわからなくはないでござるが・・・ちよつと落ち着くでござるよ」

「そうだぞ鈴。もし鈴の話通りなら私も殺りたいが・・・だから落ち着いて180ポンドのボウガンを設置するな!!」

「ええい離すネ真名さん!!私の気持ちはわかるならこのままボウガンを設置させて欲しいね・・・爆弾付きの!!」

「だからなぜ爆弾にこだわるんだーーーー！！」

「勿論吹き飛ばすためネ！！」

「（拙者／私）も吹き飛ばすからやめろ（でござる）！！」

その後数分間、楓と真名は鞆から次々と凶器を取り出し設置しようとしている鈴を何とか止めようと必死になるのは言うまでもない。

「最近あの三人仲いいわよねー」

「ほんまやな」

物騒なことをしているにも関わらず、これを普通と思う・・・恐ろしい物である。

「な、なんであいつらあんな物騒なモンもってんだ？そして周りの奴ら！！ツツコメよ！！目の前であんな恐ろしい物出されてるのになんで笑っていられんだよ！？）」

一人の少女だけがこの異常に気付いているらしいが・・・それは彼女だけなのでその心の叫びも心の中でしか叫べなかった。この少女も後に薬味小僧の餌食になるのだが・・・それは今後の銀次の活躍でどうなるかもしれない・・・たぶん。

「やはりあそこは・・・でも絶対止まられるアル・・・うむ」





〃〃麻帆良女子中学校〃〃

「・・・さて、いきますか」

麻帆良女子中の入り口に立つ一人の男・・・濃紺の着物を身に纏った桐野銀次が立っていた。銀次はその両手に四人分の弁当・・・この前から女刀が銀次用にと作るようになった弁当を含めたものを片手に二つ、計四つをぶら下げてる。

「（ああ・・・やっぱり薬味に会いたくないなあ・・・楓達に聞けばいいか？いや、でもそれだと・・・）はあ・・・いくか」

バツチリ睡眠したとはいえ、なぜか会った瞬間ネギの首を飛ばす連想をしてしまう銀次。正直、原作を読んでいたときでも『こいつウザイ死ね』とか思ったり・・・それぐらい嫌いなのだ。

それはさておき、早くしないと昼休みが終わってしまう。銀次は渋い顔をしながらゆっくりと校舎に入ってしまった。

〃〃校舎内〃〃

校舎に入って数分。今のところ銀次は薬味とは遭遇していない。銀次も銀次で遭遇してどんなのか確認したいと思うと同時に、会いたくないというある意味の葛藤に陥っていたり・・・とにかくどうするべきやら・・・そんなことを思っていると、

「うわっ!!--!」

「おっと・・・大丈夫・・・げっ」

銀次は以前楓たちにコッソリとバレないように買ったエロゲー（勿論巫女物。後に見つかりメリケンサックでこっ酷く殴られた）でこのように曲がり角でぶつかりヒロインと出会う・・・みたいな状況を見た・・・見たのだが、

「（なんで・・・薬味と遭遇するわけ・・・？）・・・おい大丈夫か？」

「あうう〜」

どうせなら巫女と・・・と思いながら目の前で尻餅を突きながら泣きそうな顔になっている・・・明らかに小学生だろう？と思う身長男子・・・ネギ・スプリングフィールドがそこにいた。

まさかこのタイミングで会うとか・・・と思いながら目の前で尻餅を突いているネギに聞く。本来なら手を差し伸べるべきだろうが生憎と銀次の両手は塞がっている・・・手が空いても差し伸べないと思うが。

「あ、は、はい！！大丈夫です・・・ってあれ？えーと・・・誰ですか？」

「（謝りもなしかよ！！）・・・この生徒に用事があったな」

よほど故意的にぶつからない限り、謝るのが人としての常識ではあるのだが・・・このネギ少年に常識は通用しないらしい。銀次はコメカミをピクピク動かしながらネギに返す。

ネギはへーっと言いながら銀次の話を聞き、急に

「ああ！？す、すみません僕ちよつと急がないといけない仕事があるのでここで失礼します！！」

スターツ！！！！と明らかに魔力使ってるだろうと言いたくなるような速さでネギはその場を去っていった・・・謝りもせず。いくら十歳だからといってこれはどうだろうか？しかも自分から聞いていてさつさとどこかへと行ってしまふ始末・・・銀次は頭を押さえたくなつた。

「・・・先が思いやられる・・・」

とにかく弁当を届けようと、銀次はささつと教室へと向かった。

はたして楓たちの意見はどうなるのだろうか・・・？

~~~~2 - A教室~~~~

「・・・おい楓、真名、鈴。飯もって」「銀次（（殿/さん））
（！！！！！！）」「ウゴツ！！」

ネギと出会いありやダメだと思いつながら歩くこと数分。銀次は目的地である教室に入った瞬間、楓と真名と鈴がミサイルのように上から頭、右脇腹、左脇腹に突っ込んできた・・・なお、羨ましいと思つたそのあなた。顎に石頭、右脇腹に戦場で鍛えられた頭、左脇腹を戦闘用に作られた頭に突っ込まれてみたら・・・同じことが言えるだろうか？しかもしっかりとグリグリと抉りにきているオマ

ケ付きだ。・・・何気に楓が一番の役得だったりする。
アップパーカットを喰らったかのように頭がクラクラする銀次だが・・・
そこは何とか耐える。

「お、お前ら・・・とにかく離れる。顎が痛いし両脇腹痛いし動き
づらい」

「ああ・・・銀次殿お・・・」

「はあ・・・落ち着く」

「ムフフ・・・気持ちいいネ・・・」

銀次の言葉を聞き入れず、三人はさらにキツク抱きしめる。周りでは『相変わらずやるねえあの三人』『四角関係・・・これだ!』『すごいモテモテね』などといった声上がる。毎回のことながら、ウンザリする銀次。

「おいこれ・・・いい加減離れる。動きづらいだろうが・・・?」

「ん〜」

「む〜」

「う〜」

さすがに変だと思う銀次。いつもならここで多少の文句をいいながら離れる三人なのだが・・・今日は驚くほどに離れない。不思議に思った銀次は先ほどから顎に頭を摺り付かせている楓に聞く。

「いや、だから拙者はほん「はいはい、嬉しゅうございます。でもそういうのは冗談でもいうんじゃないやねえよ」……………」

鈍すぎる銀次に何か言おうとする楓だったが、残念。楓の告白は銀次にとって毎日のようにされているものなので、最早冗談として『受け取るように』している。

他の二人や変体刀達があつても同じだろう。

三人は明らかに不満顔で渋々と離れる。銀次はふーと息を吐きながら三人を見る。

「ふう……まあ、ともかく飯にしようぜ……その間にお前らの愚痴も聞いてやるから」

「……わかつた（でござる／よ／ネ）」「」

銀次の言葉を受けコロッと機嫌を直してしまう三人……あまりにも単純である。

しばらくして、銀次は楓たちの愚痴を聞いて本当に頭が痛くなってきた。

曰く、魔法障壁を常に展開状態で歩いている。これだとボールが飛

んできて空中で止めてしまったため、認識障害の魔法が掛かっていなくても「あれ？」と思ってしまふところがある。

曰く、魔法の制御がうまく出来ないらしく神楽坂は二回（登校中に一回、授業中に一回）服を脱がされたらしい……後にモウ一回起こるだろうが……。

曰く、教師としてはあるまじき発言や行動。生徒間の喧嘩すら止まられない。別に喧嘩に飛び込んで鉄拳制裁しろ、と言ってるわけではない。だが、一教師になったなら喧嘩ぐらい止められる能力は普通必要だ。十歳だから……と理由は言い訳に過ぎない。

まさかここまで原作どおりとは……と、瞼の上から目を撫でる。逃避行したい……とまで思ってしまった。まあ、勿論そんなの許してくれるわけでもないもので……。

「……それで、今日の放課後何やらあの薬味の歓迎会をするらしいのでござるが……銀次殿？どこに行こうというのでござるか？」

楓のあまりにも不吉な発言に銀次はその場から逃げようとしたが、あっさりと楓に掴まれ止められた。

「……頼む、楓。あの薬味と一緒にいるだけで俺は殺意が沸いて来るんだ。だから俺も一緒に道連れにしないでくれるか……？」

「それは無理でござる」

いつもののほほん顔で言うも、腕には驚くほど力が籠っており銀次

ですら振りほどけない。そこに真名と鈴も参戦する。

「そつだよ銀次さん・・・私だって引き金を引くのを我慢していたんだ・・・授業ならいざ知らず、放課後まであんなのと一緒にいたら・・・思わず引き金を引いてしまいそつだよ」

「気持ちはわからんでもないが・・・だからなぜ俺を巻き込む？」

「銀次さん・・・私はアイツをこの世から消したいネ・・・跡形もなく」

「うん、俺もそうしたいよ本当に。でもだから何で俺を巻き込むわけ？」

マトモに話を聞かない三人にツッコミを入れながら反論するが、そんなの意味がないのはすでに学習済み。そこで楓たちは切り札を切り出すことにした。

「・・・お願いでござる、銀次殿」

「うぐつ!!!!」

伝家の宝刀上目遣い（涙目ver）。過去にも何度か出てきた楓の対銀次用必殺技だ。銀次も過去に幾度とこの目に戦ったが戦歴は一勝もしていない。そこにさらに援護射撃で真名と鈴も参加する。

「銀次さん・・・私もお願いだよ」

「うがつ!!!!」

「この通りネ・・・銀次さん」

「がはっ!!!」

楓一人でもかなりのダメージを受けるというのに、真名と鈴の援護射撃が加わりその威力も倍増だ。

「うぐう・・・!!!」

さすがにお断りしたい・・・したいのだが、目の前の少女達の目を向けられては中々断り憎いものがあるが・・・でも嫌いなネギがいる・・・だが、

「・・・銀次殿」

「・・・銀次さん」

「・・・銀次さん」

「・・・わかったよ。参加すりゃいいんだろ参加すりゃ!!!」

結局のところ、銀次が根負けした。毎回のことながら銀次は甘い。まあ、楓達は銀次のその甘いのが優しさでもあるとよく理解しているのだが。

三人はそれぞれ銀次に念を押すように話す。

「ふむ、ならば銀次殿。放課後また教室に来て欲しいでござるよ」

「必ず来てくれ」

「そのときはサービスするアルヨ」

「何の店だ!!・・・はあ、まあお前らだと本当にヤツを殺しちゃうかもしれないからな・・・」

特に鈴が危ないと思いつながら銀次は芋の煮つ転がしを口の中に放り込みながら呟く・・・それにネギが楓達に変に手を出さないように見張る必要もある・・・何だかんだ言って、やっぱり三人のことが心配な銀次であった。

その後四人は他愛もない話をしながら食事をして、昼休みが終わるまで過ごした。

～～放課後～～

そして放課後。銀次はまた2-Aの教室へとやってきていた。

「ネギくん!!これ美味しいよ!!」

「これお礼の図書券ー」

「(チクシヨウ・・・薄情な奴らだ)」

周りが騒がしいなか、銀次は手に持ったジュースをチビチビ飲みながら心の中で見送りをしていた変体刀達に悪態をついた。

ここにくる数分前。銀次は家にいる全変体刀に呼びかけた。

『これから2・Aでパーティーがあるらしいからくる奴はこい』

そう呼びかけて三十分ほどして、それなりの数の変体刀がやってきたのだが、『何のパーティーをやるのだ?』と聞かれたため、

『ネギ・スプリングフィールドの歓迎会もとい楓たちの暴走阻止』

そう言った瞬間。いや最初のネギの名前が出た瞬間、その場にいた変体刀のほとんどがいなくなりその場にいたのはたまたま何かを口の中に詰めモグモグと食べていた獺と『2・Aに行く』と言った時点で目をギラつかせている”模倣”に主眼を置いた偽刀・紅玉に何やら同情の視線を向けている女刀・侍と狼刀・罪がそこにいた・・・正直、このときほど女刀・侍が天使に見え、狼刀が聖人に見えたことがなかったと後に銀次が語る。

そして現在にいたる。

「獺ちゃん!!これ美味しいよ!!」

「.....ん」

「ほらコツチも美味しいよ!!」

「……ありがとう」

「獺ちゃん、『お姉ちゃん』と呼んでくれない？」

「……お姉ちゃん」

2-Aの一部を除き、ほとんどの生徒が獺によってたかつて群がっている。獺はもみくちやになりながらも、差し出される料理をバクバク食べている。これでは『ネギ歓迎パーティー』ではなく、『獺歓迎パーティー』になってしまふ……まあ、歓迎されてる獺は飯さえ食べればいいのだろうが。

「あら……中々旨いわねあなた」

いえいえ、あなたほどではありません。

教室の端のほうでは、女刀が持ち込んだガスコンロや包丁でものごい速さで次々と料理を作り続けているのは女刀・侍と超包子の料理人にして、さっちゃんというあだ名で有名な四葉五月だ。この二人に掛かればこのクラス全員分の料理を作るのなんて本を読みながらでもできるのだが、今回は獺がわんこそばのように料理を平らげていくため二人は止まることなく料理を続けているのだが、その速さが尋常じゃない速さで包丁の動きとかがまったくといていいほど見えない。

「おお!!あの二人……なんて包丁捌きだ!!」

「これが料理を極めたもの同士の戦い・・・!!」

他の者はその二人の料理対決を見ながら料理漫画に出てきそうな台詞を呟く。なお、その実況は朝倉和美がしているのは言うまでもない。

「あら・・・あなた、なかなか可愛いわね」

「え、・・・あ、ありがとうございます」

「ふふふ・・・そんなに顔を真っ赤にさせちゃって・・・どうしたのかしら？」

「え、あ、あの・・・か、顔が・・・」

「え？なあに？よく聞こえないわよ？」

先ほどからクスクスと笑いながら大河内アキラに迫っているのはタレント女優とタメが張れるぐらいの容姿を持った偽刀・紅玉がいた。

「・・・」

銀次は頭を押さえる。さすがの銀次も、紅玉の行動には頭が痛くなる。おそらく、わかる人にはわかると思うが紅玉は女にしか興味がない。そのため2-Aに行くと言った時に目をギラつかせたのだ。過去に楓が喰われそうになり必死になって止めたのは今でもいい思い出・・・その後楓が寝室に来たらしいが。

「狼牙さんはいまおいくつなんですか？」

「三びゃ・・・二十三だ」

「おお、予想通り若い!!」

「ご趣味は何ですか!？」

「けんく・・・格闘技だな」

狼牙とは狼刀・罪が使う偽名だ。狼刀は先ほどから目の前にあるケ
ーキを食べながら柿崎美砂や釘宮円と話している。

「それじゃ一番気になることが・・・彼女はいますか!？」

「いる」

「・・・」

「ドンマイ柿崎」

柿崎の言葉に即答する狼刀。そうこの男、同じ変体刀と恋人関係を
気付いている・・・しかも二人。『全ての魔術を使用することが可
能にする』に主眼を置いた帯刀・諒と『森羅万象を自在に使いこな
す』ことに主眼を置いた魔刀・賢者という女性型変体刀と付き合っ
ている。生憎と二人とも私用でないため今回はいない。

後日、この2・Aに来たことを知った帯刀には冷やかな絶対零度の
視線を、魔刀からは涙目になりながら無言で睨むような視線を受け、

土下座をしているところが見られたとかどうとか……。

さて、そして肝心の銀次はと言つと……？

「銀次殿、このプリンはとても美味しいでござるよ」

「銀次さん、ほらこのから揚げ食べさせてあげるよ」

「銀次さん、このゴーヤチャンプル食べさせてあげるネ」

「……どうしてこうなつた？」

銀次は右からから揚げ、左からゴーヤチャンプル、正面からくるプリンを目の前に非常に窮屈な状態にある。なおこの陣形、ココ最近楓たちがよくやる『トライアングル』だ。どういうものか？まあ、見たらわかる。

「（自分で食いたいんだが……聞いてくれないだろうしな……。ゴーヤチャンプルからいただくか）」（超のほうに顔を近づける）

「「！！」」（楓、真名若干涙目で銀次を見る）

「……」（スツ）」（涙目にやられ真名のほうに顔を動かす）

「（パアア）」（すごい嬉しそうな顔）

「「……」（グスツ）」（楓と超が鼻を吸る音）

「……………(スツ)」(楓のほうに顔を動かす)

「(パアアアアアアッ)」(とてつもなくすんごくいい顔)

「……………(ズーン)」(ものすごく落ち込む二人)

「……………(スツ)」(最初の状態に戻る)

「……………銀次(殿/さん)」(また三人が差し出す)

先ほどから同じような無限ループ。銀次は何もできず立ち往生をしている状態だ。

「くくく、なかなか面白い状態にいるな桐野銀次」

「……………も桐野様」

「……………エヴァンジェリンに茶々丸か」

ものすごい嫌な笑みを浮かべながら銀次に近づいてきたのは以前、銀次と戦いその体を縛っていた呪いと結界を取っ払ったエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルとその従者の絡繰茶々丸だ。エヴァの言葉と笑みを聞き銀次は眉間に皺を寄せる。

「全然楽しくねえよ。てか助ける」

「無理だな。いくら私でも痴話喧嘩に巻き込まれたくないからな」

「いや、痴話喧嘩関係ないからな？俺はそんな痴話喧嘩に引き起すようなことしてないから」

「……無自覚ほど罪なものはないな」

エヴァの言葉に銀次は頭の上に『?』を浮かばせながらエヴァの方を見て話をしようと考えた。うまくいけばこの無限ループから逃れるいい手かもしれないと考えたのだ。

「ところでエヴァンジェリン……どうだ？あの薬味小僧は？」

「薬味？……ああ、あのクソガキのことか」

薬味＝ネギというある意味常識(?)を理解したエヴァは随分と面白いあだ名を付けたな、と感心する。楓たちも(ム力つく)ネギのことで銀次に対する餌付けができなくなりネギに理不尽な殺気を向ける。だが、ネギはまったく気付かないためあまり効果がなかったりする。銀次はその三人をそのまま放置してエヴァと話す。

「ああ、あの薬味はお前さんにとっては仇敵みたいなもんだろ？お前さんから見てどうだあいつは……？」

「そうだな……」

エヴァはフム、と顎を撫でながら考える。そして

「魔法の扱いがなってない、魔法の秘匿をまったくもって考えてない」

「結論で言つと？」

「ウザイ」

ごもつともで、と肩を竦めながら銀次は答える。銀次は目の前にある茶を手に取りズズツと飲む。冷めてしまっているがかなりの量の砂糖をぶち込んである為意外とうまいらしい。エヴァはさらに続ける。

「第一サウザントマスターの子供と聞いたからどのようなものかと多少興味があった物の・・・そこら辺にいるお子ちゃまの方がよっぽどマシだぞ？」

「それは認める。あいつ全然礼儀とかなってないしな・・・ほ「恋人として心配か？お前も言うようになったな」打ち殺されてエのかお前は」

ゴキリと指の間接を鳴らしながら銀次はエヴァを見る。保護者と言おうとしたのになぜか恋人という言葉を被らされてしまったため、この場で八つ裂きにしてやろうか？と思ったのだが、

「ほほう？その状態でできるのか？ん？できるのか？」

「くっ・・・」

銀次は拳を握り締めながらエヴァを見る。残念ながら、銀次は左右を真名と鈴に、正面を楓に、後方は椅子で囲まれてる上にエヴァは少し離れたところにいる。つまり手詰まり。それをいいことにエヴァはさらに銀次を挑発する。

「ほれほれ攻撃できるものならしてみるがいい桐野銀次。まあ、できたら話だな」

「……」

ものすごい嫌な笑みを浮かべるエヴァにイラッと来た銀次は机の上に置いてあった団子の串を口の中に放り込み

「プツ!!」

「グバツ!!」

手裏剣砲を放つかのように串を吐き出す。串はエヴァの頭に見事なまでに突き刺さる。

「ぐおおお……!!き、貴様!!団子の串を飛ばすな!!見事に頭に突き刺さったぞ!!」

「マスター暴れないで下さい串がとれません」

「額に串を生やす金髪幼女……シユールだな」

「貴様がそうしたのだろうか!!そして幼女言っな!!」

額の串を素早く引き抜き、エヴァは銀次を睨む。対する銀次はどこ吹く風か、と言う風に目の前の残っている団子をパクつく。楓たちはいつまでもネギに殺気を送るがまったく持って気付かないため諦めて銀次に視線を戻したが……

「ん?薬味は一体何をしているでござる?」

「額に手を当てて何かプツプツ言ってるが……あれって」

「読心術ネ」

「……………」

楓たちの会話を聞き、銀次とエヴァは互いに黙ってしまふ。

「なあ……エヴァンジェリン」

「……なんだ」

「魔法って確か……秘匿するべきものだよね……？」

「……さあな」

「……………」

銀次は、何が何でもネギから楓たちを守ろうと改めて心に誓った。

第二十六話（後書き）

どうでしたか？楽しんでもらえたでしょうか？本当にネギの出演がないです（笑）次回・・・も少ないですね多分。

さて次回予告

楓たちを守ると改めて心に誓った銀次・・・だが、何かを忘れてるような気がしてならなかった。それはいつたい・・・？図書館島事件？には早すぎるし・・・なにやらとても重要なことを忘れてるような気がしてならない・・・！！

「やべえ！！」あの事件”のことをすっかり忘れてた！！」

はたしてその事件とは・・・？

次回をお楽しみに！！

最後に変体刀案をくださったパールパレーパさん、ふかやんさん、アルマーさん、完全怠惰宣言さん、ありがとうございました！！

第二十七話（前書き）

肥後守を手に入れて上機嫌な銀閣です。

どうもどうも銀閣です。今回は薬味が引き起こした惚れ薬事件です
！！でも、内容は原作とまったく違うのでどうぞ楽しんでください
！！

それでは、どうぞ！！

第二十七話

〃〃桐野邸・地下鍛錬場〃〃

ネギが襲来した次の日。銀次は家の地下にある鍛錬場で稽古をしていた。

「フツ！！フツ！！」

銀次は手に持った刀を振るう。銀次は時に変体刀以外でも武器が使えるようにと、このように通常の武器を使うことがある。まあ、奪刀術の稽古だと思ってくなくても構わないだろう。袈裟斬りや逆袈裟と、次々と斬撃を放ち仮想敵を切り倒しながら考え事をしている。

「（あゝ・・・次におきる事件は何だったわけか？）」

銀次の考え事・・・それは次に起きる薬味事件だ。前の話でも書いたように銀次はかなり原作の記憶があやふやになっている。それでも楓たちが薬味に巻き込まれないようにするために必死になって思いつき出そうとしている・・・そんな時、

「・・・ちよつと銀次。聞いてる？」

「（図書館島事件か？・・・いや、違うな。あれはまだ先だし今の楓なら大丈夫だろうし・・・）」

稽古をしながら考え事をしている銀次に不機嫌そうに声を掛ける少女の音が鍛錬場に響く。だが、銀次は必死になって原作を思い出しているためその少女の言葉が聞こえない。

少女は額に青筋を浮かべもつ一度問いかける。

「銀次・・・聞ってる？てか聞け」

「（長谷川千雨のちう発覚？・・・いや、あれは試験後だったから・・・）」

「・・・（ブチッ!!）」

まったく持って反応しない銀次に少女は、

「聞けって・・・言ってるでしょうがアアアアアアッ!!!!!!!!
!!!!!!」

「のわっ!?!」

キレた。

ドゴンツ!!という音を立てながら先ほどまで銀次が居た所に青白い光・・・つまり雷撃が降り注いだのだ。銀次は考え事をしている途中に着たとてつもない殺気を受け刀をその場に捨て飛び下がった。その場に残された刀は雷撃を受けた瞬間に溶けてしまい、あのままその場にいたら・・・あるいは刀を持ったままだったら・・・と考えるゾツとする。そしてすぐに雷撃の犯人はわかった。銀次はキツと睨むように雷撃の犯人に視線を向ける。

「おいこらビリビリ・・・あれほど人に雷撃撃つなって言ったのに撃つたあどついう了見だこら!!」

「うつさいわね！！あんたが人の話を聞かないのが悪いんでしょうが！！」

銀次の目の前には、先ほどから銀次に呼びかけるもまったく反応せずキレて電撃を放ったのは茶髪を短髪にして学生服を身に纏った少女・・・妹刀・御坂・・・？いや、顔立ちこそ似ているがまったく違う、

「それにビリビリ言うな！！私には『妹刀・美琴』っていうちゃんとした名前があんのよ！！」

『妹刀・美琴』 ”自信” に主眼を置いた少女変体刀の一本だ。先ほどの妹刀・御坂と似ているといったのは、実はこの妹刀・美琴がモデルになっているからだ。まるつきりソックリで見分けがつかないだろうが、慣れると案外わかるらしい。それに美琴はヘアピン、御坂は軍用の暗視ゴーグルのような物をトレードマークとして身に着けている。

また、能力も御坂よりも高く電撃に関しては御坂全員合わさっても足りないぐらいだ。

銀次は美琴に対して指を差しながら続ける。

「うるせエ！！すぐにゴロゴロゴロゴロ雷落としゃがって・・・当たたら死ぬだろうが！！」

「それぐらい避けなさいよこの不健康顔！！」

「んだとこのビリビリ!!」

「なによ!!」

「んだゴラ!!」

ギヤースカと口喧嘩をしながら二人はそのまま喧嘩に発展しそうになっただが・・・、

「えつと・・・銀次さん落ち着いて。美琴も・・・ね?」

その二人に困り顔になりながら止めに入る少女が一人いた。美琴は銀次に喰いかかっている勢いのまま少女のほうに向く、

「でも魔理!!明らかにコイツが悪いのよ!!」

「だからって電撃食らわすか普通!?!」

眠刀・摩理 “強化” と “強制催眠” に主眼を置いた少女変体刀だ。性格は大人しく、座ってるだけでもどこかのお嬢様と間違えてしまいうような程だ。服装は胸の下辺りまで伸びた薄紫色の髪を2つに分けて、各々先端に向かって身体の前で巻くような形にし、先端を三つ編みにして黒いリボンで結わえている。

服装は頑丈なベルトをつけたハーフパンツに黒のハイソックスにブーツ、半袖のシャツの上から白いロングコートを羽織り、首に赤色の長いマフラーを巻いている。

散歩が趣味で暇さえあればいろんなところを歩いている。また、美琴を初め浅葱や紅玉とも仲がよく、時には一緒に歩いたりもする・

・なお、紅玉は狙っていない。彼女曰く『摩理は親友よ、し・ん・ゆ・う』だそうだ。

「確かに・・・無視した銀次さんも悪いけど・・・だからといって電撃で攻撃した美琴も悪いよ？」

「「うつ・・・」」

摩理の指摘を受けグウの音も出ない二人。納得がいかないような二人を見て

「二人とも悪いよ・・・ね？（黒笑）」

「「は、はい！！」」

その、あまりにも『素適すぎる』笑みを受け、銀次と美琴は直立不動の姿勢をとる。実のところ、摩理は浅葱を越えるほどの腕の持ち主で、鈴蘭が睡蓮以外に能力を使った数少ない少女でもある・・・それでも本気を出していないと言っただから鈴蘭のチート振りが窺える。戦闘中に浮かべる笑みは戦意を失ってしまうほどの重圧と冷たさを持っているほどだ。

二人が静かになると、摩理はニツコリと笑い本来の用事を告げる。

「銀次さん。上空を見張っている変体刀達からの報告なのですが・・・薬味が何かをしていたそうです」

「・・・何って・・・何をしてたんだ？」

あの薬味は歩いてるだけでもトラブル起すのに何をやってたんだ？と疑問になりながら銀次は聞き返した。

「さあ・・・でも情報によると何か・・・ビーカーらしきものに変な丸薬を入れて呪文を唱えていたとか・・・」

「丸薬・・・呪文・・・？」

そこで銀次の頭に引つかかるものが浮かんだ。薄れている原作の記憶の中・・・そこにそれらしき光景が浮かんでるからだ。

「（丸薬・・・呪文・・・そしてこの辺の話・・・！？）摩理！！すまないが留守を頼んだ！！」

「え？あ、はい」

「ちょっと！！私には何か言うことないわけ！？」

美琴がぎゃんぎゃん騒ぐが、銀次はすでにその場にいない。

「何か・・・あったのでしょうか？」

「ふん！！あんな奴の考えてることなんかわからないわよ！！」

摩理は不思議そうに顎に手を当てながら考えるも、美琴は怒り心頭とと言う表情でソツポを向いてしまった。

摩理はそんな美琴を微笑を浮かべ見て、呟いた。

「ああ・・・散歩をしたいわ」

趣味である散歩をしたいが、留守を頼まれてる以上それもできない。摩理はふう、とため息を吐きながら何をしようかと考える。

「ねえ・・・美琴。暇だし散歩もできないからお茶をしない？」

「うん・・・そうね。私も特にすることないから混ぜてもらおうわ」

「ふふ、じゃあ・・・紅玉や浅葱も誘いましょう」

二人はそのまま鍛練場を後にした。

さて、先ほど飛び出した銀次はというと・・・？

「ああチクシヨウ！何であんな事件を忘れていたんだ！！くそっ！！」

普段は滅多に出さないようなスピードを出しながら道路を走り、屋根を駆け、急いで麻帆良学園へと急いでいた。銀次が忘れていた事件・・・それは？

「『惚れ薬事件』を忘れちまうなんて・・・！！」

原作では楓たちは乗っていなかったが・・・少し歴史が違うこの世界・・・原作通りかなどわからない。

「無事でいてくれよ・・・！！」

三人の安否を気にしながら、銀次はさらにスピードを速める。

後に、己の身に危険が迫るとは思わずに……。

〃〃その頃の2 - A〃〃

銀次が必死になって教室に来ようとしているのも知らず、楓、真名、鈴は昼食を摂っていた。

「むう……銀次殿がいないとやはり寂しいでござるな」

「まったくだ」

「本当ネ」

三人は弁当をパクパクと食べながら、そんなことを呟く。今日は家をでる前に弁当を渡されてしまい昼食を一緒にとる作戦は失敗に終わってしまったのだ。

しかし、と楓はご飯を口に放り込みながら話す。

「あの薬味は……失礼でござるな」

「「ああ、確かに」」

三人は一時間目の英語の時間を思い出す。

くく一時間目くく

「The fall of Jason the flower .
Spring came . Jason the flower
was born on a branch of a tal
l tree . Hundreds of flowers we
re born on the tree . They were
all friends それではここを誰かに訳して
もらおうかなあ」

今日の楓たちの一時間目の授業は英語である。つまり、あのネギが担当をしているのだ。正直朝続けてネギの顔を見るのが嫌な三人だったが、だからといって授業をほっぽりだすわけにもいかず、大人しく授業を受けていた。

ネギが視線を向けると教室にいる生徒全員が目を逸らす。それでも誰がいいかと視線を泳がす。すると、ネギの視線が一点でとまった。

「それでは明日菜さん」

「なっ . . . 何で私に当てるのよ!!」

なぜか、目を逸らしていたにも関わらず当てられた明日菜。決めた理由が「感謝を込めて」とか言っているが、その感謝の返し方は学生にとっては明らかに迷惑な返し方である。楓たちが同情の視線を向ける。すると、雪広あやかが立ち上がり変わりに答えるといったのだが、

「わ、わかったわよ！訳せばいいんでしょ」

負けず嫌い、しかも相手が雪広とあってか明日菜は自分が訳すとい
つてしまう。そして訳そうとするも・・・、

「えーと・・・ジエイソンが・・・花の上？春が来た・・・？・・・
・・・」

バカレツドの異名をとる彼女にとって英文翻訳はかなり高度な技術
に値する。しかし、

「明日菜さん、英語ダメなんですね」

だからといって、バカにして、ましてヤクスリと笑いながら言っ
ていいものではない。楓たちはそれを見てムツとなる。人間は最初か
ら外来語を話せるわけではない。成長と共に覚えるものだ。しかも
自分の国の言葉だからといって得意げになりながら言うものではな
い。

楓たちが嫌な顔になりながらネギに突っかかる明日菜を見ると、

「ハ、ハックションッ！！」

「「「あっ」「」」

一旦上がるネギの魔力。そして盛大なクシャミ。そのクシャミの先
にいたのは言わずと知れた、

「ちょ、明日菜さん！！何を急に服を脱いでいるのですか！！」

神楽坂明日菜はネギのくしゃみにより、服を武装解除の魔法で服を
脱がされてしまった。

くくそして現在くく

「というより武装解除って確か相手の武器を吹き飛ばすための魔法でござろう？なのにごうやったら服を吹き飛ばすでござるか？」

「魔法解除は防具も吹き飛ばすことができるから・・・服を防具だと思っただんじやないか？」

「だとしたらアイツはただのスケベネ」

肉まんを口に放り込みながら鈴は怒ったように話す。ただでさえ未
来のこともあり、『服を公衆のまえで脱がされる』という女性とし
ては屈辱にも等しいことをされたら・・・ネギは間違いなく死ぬ
だろう。

そんな鈴を見ながら、苦笑する楓と真名は鈴を諭す。

「まあ、あとあの薬味を見るのもHRだ「明日菜さん、明日菜さん

！！」・・・」

「「・・・」

このときの三人の心情をあえて表現するならこうだろう、

『なんでいんの？』

まさしくこの一言一つだけだ。しかも手にはなにやら・・・怪しい色をした液体が入っている瓶を持っている。

「・・・なにやら、嫌な予感がするぞじやろ」

「私もだよ・・・」

「同じく・・・」

三人は食べていた弁当をしまい、教室から出ようとした。だが、そのとき

「楓！真名！鈴！いるか!？」

教室をでようとした三人に声を掛けたのは、彼女らの思い人である銀次だった。三人は銀次の言葉に即座に反応した。それこそ0・1秒クラスの早さだろう。

だが、叫んで呼んだのがいけなかった。

「うわっ!?!？」

「あっ!?!？」

入り口で、何やらモメていたネギと明日菜が銀次の声に驚いたのか、その手に持っていた液体入りのビンを投稿ってしまった。

ビンは、蓋が開いているにも関わらず、中身を零すことなく放物線

を描き・・・、

「がぼっ!?!」

銀次の口の中に入った。液体は銀次の口の中に流れ込み、すぐにその液体は消えた。

「げぼっ、げぼっ!!! まっず!!! 何だこりゃ!?!?・・・あ」

銀次は口に入った液体に咽ながらビンを取り、そして固まる。そのビンは原作でも見たことがある形をしたビン・・・そして飛んできたほうはネギと明日菜がいたところ・・・ということとは?

「…………桐野さくん!!!!!!」「…………」

「やっぱりかー……ッ!!!!!!」

なんとなく予想は出来ていたが・・・やはり惚れ薬だったのか!! 銀次は目の焦点が会っていない少女達から逃げる。

「あ〜ん、待ってえな桐野は〜ん」

「待ってよ桐野さんこのケーキ食べてー!!」

少女達は追うも、忍びとして鍛えたその健脚には勝てず気付いたときにはすでに銀次の姿はなかった。

「……………」

「……………」

「……………」

そんな中、教室に残っていた楓たち三人は先ほど銀次がいた方向をジッと見たまま動かなかった。

「銀次殿……………」

「銀次さん……………」

「銀次さん……………」

三人は銀次の名前を呼び教室からフラフラと出て行った。その目はどことなく恍惚そうな色を浮かべ……………。

くくしばらくし……………」

「ハアハア……………ここまでくれば……………」

あの集団から逃げることに三十分。銀次は何とか逃げ切ることができ、一息ついているところだ。

「しかしあの薬味……………人にとんでもないもん飲ませやがって……………」

「

銀次は近くにあった・・・おそらく資源ゴミを置くための部屋だからだろう、置いてあった雑誌の束に腰掛ける。

銀次はこの後のことを考える。

「さて・・・おそらくこのまま大人しくしていればいいと思うが・・・」

銀次は先ほど思い出した原作を改めて思い出す。

「（確か原作ではこの後・・・夕方までこの状態だったんだっけか？てか、午後の授業どうなったんだ）」

原作ではおそらく昼ごろにネギが惚れ薬を作り、それで放課後まで延々と続く・・・みたいな話だったはずと銀次は思いだす。でも、よくよく考えたらあれ午後の授業はどうなったのだろうか？サボリ？と思いつつ考えていると・・・

ギィ・・・。

「ふふ・・・見つけたよ銀次さん」

「発見ネ・・・銀次さん」

「・・・マジですか？」

扉が開き誰かが入ってきたと思ったら・・・そこにいたのは銀次がよく知る二人・・・真名と鈴だった。

二人は目を爛々と輝かせ、まるで獲物を狙う女豹のような印象を受

ける。銀次は頬を引き攣らせ二人を見る。

まさかこの二人までも・・・と思っていなかったため、完全に油断していた銀次。二人はそんな銀次にお構いなしだ。

「ふふふ・・・」

「ムフフ・・・」

「おお・・・ヤバイ。非常にやばいような気がしてきたな・・・」

二人の目が完全にイッテるのを見て流石に危ないと思い、冷や汗を流しながらジリジリと下がりながら逃走経路を考える。

「（入り口は・・・あいつらの所しかないか・・・窓もない・・・なら）」

正面突破しかない、と思い銀次は入り口目掛けて駆ける。

「銀次さん・・・私に抱かれてくれ!!」

「私も抱かせて欲しいネ!!」

「いや、そこ違うだろ。普通逆だ」

抱いてなら、ともかく抱かせて・・・明らかに逆なことを要求した二人に冷静にツツコム銀次。

なお、二人が抱いてと言ったのは銀次は『抱きつく』という所謂フレンドリーに接することである。

接近する二人の手から体を捻りながら避け背後に回り、

「ヨッ」

トンツ、

「ん・・・」

まずは真名を潰す。後ろ首をトンツと手刀で叩き眠らせる。真名はカクンツと糸が切れた人形のように倒れるが、その前に銀次が掴んで脇に抱える。

そして次は鈴・・・だが、鈴は変体刀でもあるためなまじっかな攻撃では気絶しない。

「（あまり手荒にしたくないが・・・）悪く思つなよ鈴」

「へ？」

銀次は真名を抱えたままその場から消える。鈴はいきなり消えた銀次に視線をさ迷わせ探す、

「ぐべっ！...」

いきなり首を締められたと思ったら、膝裏を軽く蹴られ地面に膝を着いてしまう。そしてさらに締められ・・・、

「アウ……」

カクンツ、とそのまま力が抜ける。銀次はすぐに締めるのを止めて、鈴を脇に抱える。

「さて……どうしようかな？この二人……」

このまま放置するのもアレだし、かといって教室に持っていったらまた騒がしくなる。銀次はふう、とため息を吐き、二人を寝かすことにした。幸い、布団は無理だが枕代わりになる雑誌束がいくらかも転がっている。

銀次は二人を寝かし近場にあつた雑誌束を引き寄せそれに座る。

「（気絶した美少女二人と男が一人密室に……見られたら間違いなく通報物だな）」

そんなことを思いながら銀次はふと、あることに気付く。

「そっいや……楓がないな」

キョロキョロと辺りを見回しながら、銀次は楓がないことに気がついた。

「（別のところを探しているのか？……それとも惚れ薬が効かなかったのか……まあ、後者であってほしいな）」

まあ、いないならいなくてゆっくりできる。と銀次はふう、とガラにもなく気を許してしまう。そのとき、

ガシッ、

「んなっ!？」

急に手を捕まれた、と思った瞬間。銀次は投げられた。

「ぐっ!？」

投げられ、地面に投げられる。油断していたとはいえ、即座に受身を取り気絶するのだけは避けた。いったい誰が?と思い反撃しようとしたが、即座にマウントポジションを取られてしまう。さすがの銀次もここまで早い相手だと気になるのか、自分の上に乗っかっている相手に視線を向けると……、

「か、楓!？」

銀次の上に乗っていたのは、先ほどいなしと思っていた楓が乗っていた。楓は薄い笑みを浮かべながら普段は開いていない目を開けて蕩けるような目で銀次を見つめている。

「……銀次殿……」

「……」

さすがの鈍感と呼ばれている銀次も、今の妙に色っぽい楓を見て思わず唾を飲み込んでしまう。なぜか知らないが、楓だけ他の二人と違う感じがするのだが……なぜだろうか?

「ん……銀次殿……」

楓はそのまま両手で銀次の頭を固定し顔を近づける。

「（コイツは・・・マズイ！！）か、楓。少し落ち着け。早まるな」
「拙者は早まってもないし・・・落ち着いているでござるよ？」

銀次は落ち着くようにいい聞かすも、楓は落ち着いていると聞いて聞かずに顔を近づける。銀次は非常にマズイと思いながら対処を考える。

「（このままだと楓の唇が・・・！！説得しようにも惚れ薬で人の話は聞かないし、体は完全に動かないし・・・どうすれば・・・！！）」

いくら銀次でも、マウントをガツチリと取られてしまえば動けない。どうすればいいか？と考えてるうちに楓の顔はもうマジかにまで迫り、くつつきそうになった瞬間、

「ん？・・・？」

急に、動きが止まった。そして先ほどの蕩けるような目ではなく、いつもの細目に戻る。

「ん？ここは一体どこでござる・・・って、あれ？」

まどろんでいるのだろう、楓は銀次の体を固定したまま辺りを見回した。そして、自分の体のしたにいる銀次に気付く。

正気に戻ったのを改めて確認した銀次はクスリが切れたとわかり、ほっとしながら楓に話しかける。

「あゝ・・・大丈夫か？・・・楓」

「え？あ、大丈夫でござるよ？……」

「……」

「……」

「とにかく……退いてくれるか？」

「……あ、わ、わかったでござる」

もし、普段の楓が同じような行動にできれば間違いなくキスまで持ち込むだろう。だが、今回はネギの作った惚れ薬のせいで途中までの記憶がまったく持っていない。しかも少しばかり記憶が混乱しているため銀次の言うことをそのまま聞いた。

「……」

「……」

非常に気まずい空気が流れる。この二人にしては珍しいことである。二人はしばらく黙ったままだったが、

「あ……とにかく何があったかを説明するとだな……」

銀次は楓に何があったかを説明した。

「……それではあれでござるか？あの薬味は惚れ薬を作って、それを誤って銀次殿が飲んでしまったと……？」

「ああ……まさか見事なまでに俺の口の中に入るとは思っていなかったがな……」

大変だった……とちよつと遠い目をしながら呟く。楓は銀次にちよつとした同情の視線を向けながら、惚れ薬を作ったネギに呪詛のようなことを呟きながら文句を言う。

「あの薬味め……乙女の純粋な心を弄ぶとは……ちよつと残念ではあったでござるが……」

「いや、何が残念だったんだ？」

所々に銀次がツツコムも、楓はブツブツとさらに続ける。

「というより、あの時あのまま持ち込めばよかったでござる……そしたら最後までいけたのに……」

「いや、だから何が？何が最後までいけたの？」

呪詛だったものが途中から楓の妄想になり、それにツツコミを入れる銀次。いつも通りだ。そしてしばらく話しをしながら、楓は心の中で呟いた。

「（拙者は……危うく銀次殿に接吻するところだ……」

でも、そんな形での接吻など望んでないでござる)」

楓は銀次のが好き・・・いや愛している。キスもしたいだろうし、両親のような関係にもなりたいたいと思っっている。だが、今回の楓にとっては望まないしなりたくもない。

「（自分の思いくらい自分で届けるでござる・・・相手はだいぶ鈍感ではござるが）」

楓はさらに銀次への思いを固く誓う。どうしたら銀次に振り向いてくれるか考えながら、思い人と話を続ける。

その後、寝ていた真名と鈴が起きて楓と同じような説明をして、同じような呪詛にツッコミながら銀次と三人は家へと帰宅した。

〓〓帰宅後〓〓

銀次達が帰宅して今回起きたことを全員に説明したあと。桐野邸はちよつとした騒動が起きていた。

「ええいッ！！落ち着け亜希！！」

「暴れないでーーーー！！」

狂が助手として作った変体刀達だ。能力はかなりのハイスペックで、オリジナルの本来の能力に変体刀としての頑丈さと身体能力に加え、狂が様々な改造を施し一個師団ぐらい簡単に潰せるくらい強い。元は狂が自分自身の助手用に作ったのだが、なぜか全員一人残らず鈴蘭を慕っており生みの親である狂は「どうせ私なんか人望がないんですよ」と言っつて落ち込んでいる所を目撃されたとかされなかつたとか……。

そして今暴れている亜希と呼ばれた少女だが・・・彼女は妄信的な鈴蘭絶対主義狂信者だ。一日に一回は必ず鈴蘭を見なければ衰弱してしまうほどの狂信者でもある。また彼女の部屋の中には鈴蘭のフイギュア、同人誌（鈴蘭×亜希）、イラスト（自作。無駄にうまい）、私生活（風呂場含む）を盗さ・・・録画した動画をブルーレイディスクに収め大量保管している。

「離してやみんな！！私はあの薬味を殺さなあかんねん！！」

「今のアンタが出たらそれらしき子供みんな殺すからダメだつて！！」

「・・・落ち着いて亜希」

暴れてでようとするとするたびに壊される家。居間には所々に穴が開き、机が壊され廃墟になりつつある。

その家の惨状を見て、家主である銀次は、

「頼むから・・・これ以上壊さないでくれーーーー！！！！！！」

悲痛の叫びを上げる。だが、そんなの知ったこっちゃないとはかり
に暴走は続き、彼女の主である鈴蘭が止めるまで延々と続いたとか
・
・
・。

第二十七話（後書き）

どうでしたか？今回の惚れ薬事件の被害者はなんと銀次でした（笑）

正直、途中の楓が銀次を押し倒すシーンをどうするか、かなり迷いましたね。あのままキスさせるかどうか・・・と。まあ、結局キスはさせませんでした（笑）焦らしますよ。徹底的に焦らしますよ（笑）ゆえに楓と銀次のキスを楽しみにしている方、もう少しお待ちを！！

次回！！

惚れ薬騒動もひと段落して平和を取り戻した桐野邸。だが、またもや薬味が事件を引き起こす！！はたして次回の事件とは・・・！？

「まあ、今の楓なら問題ないだろうから心配はないだろう。・・・それにしても、懐かしいなあ・・・テスト」

次回、お楽しみに！！

来週は作者もテストのため申し訳ありませんが、投稿はありません。

最後に変体刀の案を考えてくださったパールパレーパさん、ありがとうございましたー！

生存報告

まず最初に今回の地震で亡くなった方々のご冥福をお祈りします。

皆さんどうも銀閣です。応答もしないで申し訳ありません。本来は活動報告で書くべきだと思いますが、こちらのほうが寄り多くの人に見てもらえると思いますこちらに書かせてもらいました。

今回の大地震、皆さんは大丈夫だったでしょうか？私は千葉県の北西部に住んでいたので被害はそれほど受けていませんが、皆さんは大丈夫でしたか？ニュースではかなり多くの方が亡くなっていると聞き、またまだ取り残されている人もいると聞き不安でしょうがないです。

皆さんが無事であること、また被災者の方々が無事であることを心からお祈り申し上げます。

第二十八話（前書き）

座頭市はやはり面白いと思い銀閣です。

え、皆さんどうもお久しぶりです。地震から八日立ちましたが、大丈夫でしょうか？私は何とか大丈夫です。これからも余震などが起きると思いますが、皆様もお気をつけください。

さて、今回のお話は期末試験、つまりは図書館島事件です。はたしてどうなるのでしょうか……？

それでは、どうぞ。

第二十八話

以前の惚れ葉騒動が過ぎ去りしばらくして。その間もドツジボールやら何やらとあったが銀次はこれといって関わることもなく時は流れ過ぎていき・・・遂に期末試験が始まった。

～～桐野邸・居間～～

「・・・」

「・・・」

「・・・」

桐野邸の居間。そこには巨大な机が設置され三人の少女達が黙々と勉強をしている。勿論その少女達は楓、真名、鈴の三人である。さらに三人を楽しそうに見守る導士を初めとした頭のいい変体刀が集まっている。

「・・・む？鈴、この数式はどうやるでござるか？」

「ん～～あ、ここはここを・・・こうやるネ」

「おお、なるほど。ありがとうございねる」

「・・・導士さん。これは何て読むんだい？」

「それは・・・じゃな」

「ありがとう」

わからなければ質問する。そして黙々と勉強を続ける。鈴と真名ならわかるが、『あの』バカレンジャーブルーの異名をとる楓までもが必死になって勉強をしている。おそらくクラスの者が見たらビツクリするような光景だろう。これにはとある理由がある。

その理由とは・・・？

～～～去年のとある日～～～

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ナハハ・・・・・・・・」

桐野邸の居間。そこでは銀次が額を押さえながら目の前にいる楓を見る。対する楓は後頭部をポリポリ書きながら銀次を窺うかのように見ている。

すると、銀次が話し出す。

「なあ楓・・・・・・・・。俺もバカだから人のことをどうこう言えるとは思っちゃいない・・・・・・・・」

「あ、あい。承知しているござる」

「……ちょっとバカにされたような気がしたが……まあ、いい。だから本来はこんなこと言うつもりはないぞ？でもな、楓……これは酷すぎるだろ」

そういつて銀次は目の前の紙の束を楓に見せた。それは……テストだ。

「国語はまだいい……三十点越えだからお前にしては随分とやったほうだろう……だがな、それ以外のこれは何だ？どうやったら一ヶタ台が取れるんだ？」

テストで一桁台を取るとというのは案外難しいことなのだが、楓はそれをやってのけた。

銀次は転生してからはとにかく強くなるためにと修行をして学校には通ってなかったが、前世では学生をしていたことは勿論ある。順位も下から数えたほうが早く、自他共に認めるバカだ。だが……それでも小テストでもない限り中間や期末などは必ず二ヶタ台をとっていた。

楓は銀次の追求を空笑いながら答える。

「い、いや……拙者は勉強はどうも苦手で……」

楓にとって勉強とは忍者としての修行が一番の勉強だ。すでに忍びという仕事に就くことになっている楓からしたら、英語や数式を覚えるぐらいなら忍術を一つでも覚えたほうがマシ……と思っっている。まあ銀次の横に早く並びたいという意味もあるだろう。

銀次はフウ、とため息を吐きながら話す。

「まあな・・・俺も勉強は苦手だ。だがな楓。最近の忍者は何かとそういうのも出来るようになっていないといけないんだよこれが・・・」
以前の忍者としてなら、楓の思考も正しいだろう。だが、時代がそれを許さない。

「今や甲賀忍軍も世界中に依頼を求めている。英語が読めないまではともかく話せるようになってはいけない」

「あつう・・・」

そう世界だ。忍者という存在が世界的に有名になり飛行機や船で海外に行けるようになったとき、やはり外国での任務も増えた。実際、銀次も過去に何度か海外での任務をしたことがあるし、それで英語を初めとした言語も覚えた。

楓はそれを言われちゃどうしようもない、と言う顔になる。

「ハハ・・・まあ、楓はバカレンジャーのバカブルーとまで言われるほどだからね・・・銀次さんが呆れるのもしょうがないかもね」

そう言うのは、楓に説教をしている銀次の横を陣取り銃の手入れをしている真名がいた。その表情はどこか勝ち誇っているのは銀次の横にいるからだろう。楓はその真名を又又ツと悔しそうな顔になりながら見る。

「まあ、真名は比較的中間の地点で落ち着いているからな・・・まあ、とくに言うことはないだろう」

銀次は別に上を目指せとは言っていない。人間ほどほどの知識さえあればやっていけるからだ。つまり、銀次は楓に程ほどの知識を持

つことを要求しているのだが・・・それは難しいことだろう。
そこで銀次は考える。

「（どうしたら楓が勉強をやる気になるだろうか・・・？）」

銀次は過去のことを思い出す。昔も今もそうだが楓は活発な元気な少女だ。だからか、机の嚙り付くというのがどうも苦手なのだ。銀次は本を読むことが好きだった為そうでもなかったが（それでたまに稽古をサボることも多々あった）楓にとったらかなりつまらないことだろう。

どうしたらいいか・・・？と考え、ふと何かの本で読んだことを思い出した。

「（そういえば・・・人は何か好条件をつけて練習すると成長するみたいな話を聞いたことがあるな・・・よし）なら楓。こうしよう」

「ど、どうするでござるか？・・・ま、まさかお仕置き・・・？」

銀次が何をするかわからない楓だったが・・・どことなく楽しそうな顔になっている。お仕置きなら精神的でも肉体的（どういう内容かは読者に任ず）でも銀次のお仕置きなら何でも大歓迎な楓にとって、よほどのことでもない限りは楓は受け付ける準備はできている・・・真名が若干羨ましそうな顔になっていたのは謎だが・・・。
銀次は何言っただ？みたいな表情になるが、聞いたら何かダメなような気がして、思いついた内容を話す。

「そうだな・・・楓。今度のテストで順位を二つ上げたら・・・お前の言うこと何でも一つ聞いてやるっ」

「「……ほえ？」」

銀次のその言葉に、楓だけではなく真名も変な声をあげてしまう。
そして聞き返す。

「ぎ、銀次殿……いま、何でもいったでござるか？」

「ああできる範囲ならな」

それを聞いた瞬間。楓は立ち上がり、急ぐように部屋からでて行くとした。

「ん？どうした楓。そんなに慌て「勉強するでござるー！」……」

楓の変わりっぷりに驚いた銀次であったが、なるほど、これは凄い効果だ。と納得して次回からもこの手を使おうと思い、立ち上がりトイレにでも行こうとしたら、

ガシッ、

真名に捕まれた。そして何ごとぞ？と思い真名の方を見る。

「銀次さん……さっき言った楓の約束……私も乗っていいかい？」

そついう真名になんで？的な視線を向けるが、

「ああ、別に構わないぞ」

やる気になってくれるなら別にいいか。と軽い気持ちで承諾。それを聞いた真名は先ほどの楓の如く速さで居間を出て行った。

「……あいつら、何か欲しいものでもあったのか？」

銀次は茶を啜りながらある意味的を得て、外れていることを考えながらお茶を啜る。

「……でも、何かとんでもないことを約束したような気もするが……気のせいかな？」

それは当ってるだろう。

くくそして現在くく

実際、あの『ご褒美作戦』はかなり成果をあげた。真名は元々覚えようとすればかなり覚えられるほうなため必死に勉強したかいあって順位が五つも上がった。そして何より驚くのは楓だろう。楓はなんと順位を七つも上げたのだ。これには2-Aが騒然となり中には「何か悪いものでも食べたか!？」とか「何かに取り付かれた!？」とか酷いものは「楓の皮を被った宇宙人!？」とかあまりにも失礼なことを言う輩が現れたくらいだ……その輩にはリアットを食らわしてとかどうとか……まあ、楓は見事バカレンジャーから脱

出したのには変わりはない。

そして、楓と真名がそのときに要求した願いとは……？

「付き合っただけだ」

といったのだ。最初銀次はきょとんとした顔になったが、ああと言っただけ

「そんなんでいいのか？……それなら早く準備しろ」

「はっ？」

さすがの楓と真名も、銀次がいきなり何を言ったのかわからないという表情になった。銀次はその二人の顔を見て怪訝な顔になりながら返す。

「は？じゃないだろ。どっか買い物に付き合うみたいな話だろ？」

「……」

これには、さすがの二人もorzポーズをとる……さすがにここまで鈍感だと呆れを通り越して尊敬してしまう。だが、まあ銀次と買い物ができると言うこともあり二人はそれで承諾することにした……多少の嫌がらせを含めて下着を買いに連れて行かせた。

そして今現在……学期末試験を控え、鈴も加わり三人は黙々と勉強を続けている。

「今回は・・・何を願うするでござるか？」

「私は・・・まだ決めていないね・・・有り過ぎるから・・・楓は？」

「拙者も・・・ありすぎて決まらないでござる」

カリカリと書きながら二人は話す。もはや遠まわしで言っても銀次はわからないだろうし、かと言って直接言っても『彼氏を作ってやらやれ』といって相手にしないので二人はもつと現実的なお願いをすることになっている・・・それでもその内にしつかりと思いを届けるともりでいる。

その二人の話に鈴も参加する。

「二人はまだいいネ。私なんか一位をそのまま持続させるというのだから・・・大変ネ」

「どの口が言う、どの口が・・・」

ため息を吐きながら目の前にある導士謹製のテストプリントを次々とこなしていく。そしてその横では黒一色の鎧を纏った女性・・・六将変体刀が一本『冷静な刀』に主眼を置いた変体刀”黒刀・玄武”が鈴のを含めた三人分のテストを採点してゆく。

「鈴はまず心配ないですよ・・・他の人が全教科オール100をとれるとは思いませんので・・・」

さらさらと、楓と真名の書いたプリントに書き間違っているところは訂正するのに対して、鈴のはただが書かれるだけだった。それを見た楓と真名は悔しそうな顔で見る。

「くっ……その頭脳スルイでござる」

「まったくだね……」

「ふふん。羨ましいある力？」

悔しそうに見る二人に余裕があるような笑みで見る鈴。まあ、元が変体刀というスペックがあるのは内緒だが……。
導士はそんな三人を見ながらフオフオ、と笑う。

「フオフオ……まあ三人ともそこまでにして早く勉強の続きをしたらどうじゃ？銀次殿に何かお願いがあるんじゃろう？」

そうでござるな、と楓たちは導士の言葉通りまた無言になり黙々と勉強を始めた。

「（フオフオ……やれやれ銀次殿も大変じゃのう。こんなに美女に慕われて）」

これからどうなるのか楽しみじゃわい、と心の中で呟きながら導士は三人に勉強をまた教えることにした。

なお、その頃の銀次はと言つと……？

〳〳麻帆良商店街〳〳

楓たちが勉強している中、銀次は獺に連れられ買い物に来ていた。

「……あれ食べたい」

「おいコラまたか？この大食い娘」

……訂正、獺の財布とされていた。銀次は凄いい勢いでなくなっていく己の財布の中身を見ながらため息を吐く。

「ええと獺さん？そろそろ帰らないか？じゃないと俺の財布から札だけではなく小銭すらなくなって文字通り一文無しになってしまっただけ……」

「……気のせい。それよりもあれ食べたい」

「気のせいじゃねえよ。諭吉さん四人いたのに今俺の財布の中には野口さんが五人しかいないんだぞ？どこが気のせいなんだ？……それと人の頭の上で菓子食うな。さつきからカスがポロポロ落ちてしょうがないんだが……」

獺は先ほどから銀次に肩車をしてもらっている。すると必然的に獺は銀次の頭の上で食事をすることになる。その際に獺の口からポロポロ落ちたカスが銀次の頭に掛かり銀次の頭が大変なことになっている。

しかし、獺は……、

「気のせい。それよりも早くあれ食べたい」

「コイツ……完全に食い物のことしか頭にないよ……はあ、わかったよ」

銀次はやれやれという風に財布を取り出し、獮が欲しいといったモノを買おうとする……やはり身内には甘い銀次である。
だが、

「……ん？銀次はんに獮？こないなところで何をしてはるん？」

突然、声を掛けられた。銀次はその独特の関西弁を聞き、まさかと思ひ振り向くと、

「げっ……売刀」

銀次が振り向いた先。そこにいたのは黒い丸淵眼鏡をかけ、一昔前の旅商人のような格好をした人間……いや、変体刀がいた。

売刀・商人 『商いを行う刀』に主眼を置いた変体刀だ。格好は先ほど言ったとおり一昔前のたび商人のような服装で、腰には算盤などがぶら下がっている。口調は関西弁で明らかに頭がよさそうである。実際かなり頭がよく億単位の計算も瞬きするほんの一瞬で終わらせてしまう。

さて、そんな売刀。性格は非常に儉約家でいつも桐野家計を心配している。しかしその儉約家。裏を返せばただのドケチと言うことになる。

そして今現在、売刀の目の前には銀次に何やらせがむ獮と、それに根負けしたように財布に手を掛ける銀次……売刀はそれを見て額にビキッ、と言う音をさせて眼鏡を掛け直す。そして……

〳〳次の日・2 - A教室〳〳

「今日のHRは期末テストも近いので大勉強会を開きたいと思います!！」

翌朝、朝っぱらからネギが大勉強会を開くと宣言した。周りのがやがやと騒ぎ、雪広は「素晴らしいですわ!！」と言いながらネギの案に賛成する。

それに対して楓たちは・・・、

「……（カリカリカリ）……」

ネギの話を無視して勉強を続けていた。まあ、この三人にとってネギの話より蟻の話を聞いたほうがマシと思ってるぐらいだから当たり前前の反応といえは当たり前かもしれない。

その中、椎名が急に拳手をして

「はいはい!！ならお題は『英単語野球拳』がいいとおもいます!！」

野球拳、と聞いて三人のペンが止まる。そして額に青筋が走る。実はこの三人、以前酒でハイテンションになっていた鈴蘭を初めとした女性型変体刀と野球拳をしたことがあったのだ。その野球拳はあまりにも悲惨だった・・・特にルールがよくわかっていなかった睡蓮は瞬く間にスッパにされてしまい、涙目になりながら服の返却を

要求したのだが・・・、

『お前らなに騒いでんだ？』

と、まさかの銀次が部屋に登場。あまりにも唐突なことに部屋の空気が固まってしまった。・・・そして、

『け、け、・・・！！ケダモノーーーー！！！！！！』

という睡蓮の鉄拳が銀次の顎に炸裂した。銀次はまさか何気に好みだった睡蓮のスツパを見てしまい顔を紅くしてしまい、思考がショートしかけその鉄拳を避けることができずそのまま気絶してしまっ

た。
それからしばらく銀次と睡蓮はまともに視線が合わせられなかったとかどうか・・・それを見て鈴蘭がニヤついたり、楓たちが怖いほどの殺気を浴びせていたとか・・・。

まあ、そんなこともあり楓たちは野球拳が（銀次とやる分にはいいだろうが）嫌いになってしまった。

まあ、さすがのネギもこれは採用しないだろうと思いき三人は勉強を続けるが・・・、

「じゃあそれでいきましょうー！！」

「エロガキが・・・」

三人は思わず口に出す。だが、周りは騒いでいるのでその三人の声に気付かない。三人は周りには聞こえないぐらいの声で会話を始める。

「（あのエロガキ・・・自分が何を言っているのかわかっているでござるか？）」

「（まさかと思うが・・・知ってて採用したのか？）」

「（だとしたらとんでもないスケベネ）」

そこで様々な憶測が飛ぶが・・・三人にとってネギの評価は『ウザイガキ』から『スケベなエロガキ』へと昇格した。

「（ああ・・・でも、銀次殿と野球拳・・・したいでござるな）」

「（そうだね・・・銀次さんは着物と下着だけだから二回勝てば・・・）」

なぜか知らんが、いつの間にか話の内容が銀次との野球拳になっていた。楓と真名は頭の中で野球拳で負ける銀次の姿を想像（という名の妄想）をしているが・・・鈴は違った。鈴はくっくっくっ、と笑い二人を見る。

「（二人とも甘い、甘すぎるネ・・・具体的には砂糖を大量にぶち込んだ銀次さんのお茶ぐらい甘いね）」

「（（具体的過ぎるよ（でござる））」

あまりにもわかりやすい例で言われてしまい、見事なツッコミを見

せる楓と真名。銀次のお茶・・・つまりかなり爪が甘いということだ。二人はなぜか？と鈴に聞く。

「二人とも、まず銀次さん脱がすということを大前提で野球拳を考えてるネ。でも、あの銀次さんが野球拳をやって服を脱がされる程度で鈍感が直るとは思うまい・・・そこでその逆・・・つまり、自分から脱ぐ！！」

「「（！？）」「」

二人に、衝撃が走った。自分から脱ぐ・・・この手があったか！！と。鈴は衝撃を受ける二人にさらに追い討ちをかける。

「（いくら銀次さんが鈍感でも男ネ。目の前で服を一枚一枚恥ずかしそうに脱ぐ女。しかもそれが巫女服だったら・・・まず間違いなく銀次さんは落ちるネ！！）」

「（た、確かに・・・）」

「（あ、ありえる・・・）」

確かに銀次なら目の前で巫女服を恥ずかしげに脱ぐ美少女がいたら飛びつくかもしれないが・・・それ以前にそのような状況に持つていくのが難しいと思うのだが・・・恋する乙女達にはそれが見えない。

「（な、なら帰ったら早速銀次殿と・・・！！）」

「（させないよ楓。銀次さんの前で脱ぐのは私だ）」

「（何を言ってるネ二人とも。この案は私が最初に考えた。なら私が最初にやる権利があるネ!!!）」

三人はやんやんやと周りに聞こえない程度の声で言い争いをする。本来なら拳で語ったほうが早いのだが、それは銀次に止められているため使えない。すると必然的に口で喧嘩するのが関の山である。

「三人ともー、そんなところで話してないでこっちで「」（ギロツ!!!）」「ひい!!!」

たまたま三人の近くにいた朝倉が三人に声を掛けたが、タイミングが悪い。この三人、こと銀次が絡むと周りが見えなくなるからだ。朝倉は生きていた中であまりにも凄い睨みに驚き、後にこう語る

『あの時の三人はマジで怖かった・・・』

「（拙者が・・・!!!）」

「（私が・・・!!!）」

「（私ネ・・・!!!）」

楓たち三人は、そのまま横で行われている野球拳を無視して銀次との野球拳を誰がやるか？と言うことで揉め始めた。

「（ふおふおふお）」

目の前でカリカリと問題を解いていく三人を見て導士は髭を撫でながら心の中で笑う。はたしてこれから三人がどうなるのか……？と考えながら新たな問題を作る。すると、

ブー、ブー、ブー、

「む……？誰でござろうか……？」

急に携帯のバイブ音が鳴る。どうやら楓の携帯らしい。残りの二人は「電源切つとけ」みたいな顔をしながら楓を見るし、楓も楓で「誰だ人が勉強しているときに」と嫌そうな顔になるが、掛けてきた相手の名前を見て微妙ながら眉を動かす。

「（夕映殿？）あいいい、このような時間に何用でござるかリーダー」

バカレンジャーを脱出した楓だが、前のようにバカレンジャーにいた頃の呼び方で夕映を読んでいる。まあ、癖と言つのもあるだろう。すると携帯の向こうから声が聞こえてきた。

『遅くにすみませんです。ですが、ちょっと楓さんをお願いしたいことがあります。……今からいいですか？』

「今から……でござるか？」

楓は居間に掛かっている時計を見る。時計の針は現在7時を差して

いる。遅いといえば遅いし、早いといえばまだ早い微妙な時間だ。楓としてはテストまであと三日などで追い込みを掛けた所だが・

「うむ……まあわかったでござる。どこにいけばいいでござるか？」

そこは優しい楓。友人の頼みを断りきれないのだろう。まあ、会うだけなら……と了承する。……勿論そう思っているのは楓だけだが。

夕映はありがとうございます、と言って場所を告げる。

『図書館島に来て欲しいです。それではまた後で』

「え、図書館島？この時間になぜその『プープー』……切れたでござる」

なぜ図書館島なのか？理由を聞こうとした楓だったが、まあ会えばわかるだろうと思ひ携帯を閉じて近くにあったパーカーを羽織る。

「ん？どこか行くのかい？」

「うむ、何やら夕映殿が図書館島にすぐに来て欲しいと言っていたでござるからな……一応、会って来るでござる」

「この時間に？」

真名も鈴も訝しげに時計を見る。時計は今現在七時を差している。あまりにも微妙な時間であり、この時間に呼び出すとは何事だろうか？と思ひながら時計を見るが……

「まあ、あまり遅くなるでないぞい・・・ハリキリ過ぎてこんな問題プリント作ったからのワシ」

そういう導士の横にはかなり大量のプリントが積まれている。それは全て導士が手書きで書いたプリントで、かなりわかりやすくそれでも簡単過ぎない問題プリントだ。楓はそのプリントの山を見てタハハ・・・と笑いながら了解でござる、と言って居間を後にした。

くくしばらくして・桐野邸くく

「はあ・・・ただいま・・・」

楓が家から出て行った数十分後、今の今まで売刀に説教されていた銀次が家に帰ってきた。流石に昨日今日と言うだけあって説教の間がかなり長かった。あのドケチンボめ・・・とブツブツ言いながら銀次は玄関の所に座る。すると、後ろから

「・・・お帰り」

獺が両手に饅頭を持ちながら歩いてきた。実は獺、銀次が売刀に説教を受けていたときにたまたま近くを通った生物変体刀（その際銀次は姿を見えなかったが、視線が『へ、ザマアWW』という視線だったためおそらく楓に懐いている生物変体刀だろう）結局、その後

喰った。よく小さい子供が癇癩を起しておもちゃを壁に投げつけたりするが、獺にとつてそれは『食べる』という行為になる。その後も椅子やら本やら畳やら壁やら辺り構わず喰らいつき、家中にいる変体刀が総出で止めたぐらいだ。やっと止めたときは居間はボロボロになっていてまるで台風が通ったような惨状だ。

後日、一緒に部屋の片付けをした二人は仲良くなったとか。

「とにかく、しばらくは買い食いなしな。売刀が煩いし俺の財布も悲鳴上げてるから。どうしても腹すいたらどっかでフードファイトしてこい」

実際、麻帆良ならそこら中にそういう店がある。例えば『ジャンボラーメン食べきったらタダ!!』とか『ギガビックバーガー五十個食べれたら五万円!!』などなど、麻帆良の中にある大抵の飲食店はこのようなことが年がら年中あるいは期間限定でやっている。獺はそれを聞いて「・・・フードファイト・・・」と呟き、

「・・・わかった」

そう言って両手にある饅頭を頬張りながら獺はテクテクと歩いていく・・・銀次はそれが可愛いと若干思ったりする。

銀次はまさかこのときの言葉が後に『無限の胃袋を持つ少女』という伝説を作るとは思いもしなかった……。

〳〵桐野邸・居間へと続く廊下〳〵

獏と別れたあと銀次は考えごとをしながら居間へと向かう。その考え事とは……、

「(さて……獏のことはともかく楓の図書館島侵入事件はこれではなくなったな)」

そう、原作にもあった図書館島事件だ。原作通りならおそらく今日図書館島に潜入するのだろう、と思いながら銀次は歩く。

「(まあ、楓はすでにバカレンジャーを脱出したし風呂場での会話もなかったからまず間違いなく関わることはないだろう)さて……ちゃんと勉強をしてるかな……あれ？」

銀次はたどり着いた居間の中を覗く。想像通りなら楓たち三人が勉強しているはずなのだが……楓がいない。

「おや、銀次殿いま帰ってきたのかの？」

「銀次さんお帰り」

一番最初に気付いた導士が挨拶すると、今まで勉強していて気付か

なかったのだろう真名と鈴が一休みと言う風に筆を置く。肩を廻した際にゴキゴキ音がなったのは長い時間勉強していた証だ。銀次は苦笑いを浮かべながら二人を見て、あたりを見回す。

「そついや楓はどこだ？いつもならここにいるはずだが・・・トイレか？」

いくら楓でもサボることはまずないと思う銀次はもしかしたらトイレにでも行ったのか？と思い三人に聞いてみた。すると、真名が答える。

「ああ、何でも綾瀬に呼び出されてね。確か・・・図書館島に來いとか言われたらしいよ」

「・・・あア？」

銀次は思わず素っ頓狂な声を上げる。そして改めて真名に聞いてみた。

「あゝ・・・真名、俺の耳がおかしくなければ楓は図書館島に向かったと聞こえたんだが・・・気のせいか？気のせいなら狂に頼んで新しい耳調達しなければいけないんだが・・・」

「いや、確かに図書館島って楓本人がいつていたよ・・・だから耳を切り落とさなくてもいいと思うけど」

どうやら聞き間違いではないらしい。銀次はビキツ、と額に青筋が浮かぶ。それに気付かず真名は続ける。

「そついえばただ会ってくるだけといった割には・・・遅いね」

「何かあったの力ナ？」

「……………」

「（あ、何か不味そうじゃの）ふむ、それじゃったら銀次殿。帰ってきて早々悪いんじやが、迎えにいったらどうじゃ」

一瞬、ほんの一瞬だが銀次の雰囲気が変わったように感じた導士。付き合いが長いだけに何かヤバイ気配を感じたのか気を利かせて（？）迎えに行かせようと考えた。

「…………ああ、そうだな。そうさせてもらっ」

銀次は額に青筋を浮かべながら頷き、踵を返し玄関へと向かった。

「…………なんか、銀次さん怒ってたような気がするんだけど……………」

「

「私もそう思うネ」

中々察しのいい二人。確かに今の銀次は怒っているのは確かだろう。まあ怒っている対象は自分自身ではあるが。

「ほれほれ二人とも楓殿は銀次殿に頼み勉強をしなさい」

「「はい」」

導士がそう言うと二人は素直に勉強を始めた。

〃〃図書館島前〃〃

一方その頃、銀次が不機嫌にこちらにやって来るとは知らない楓は非常にイラついていた。なぜか？それは・・・、

「頼むよ楓！！この通り！！」

「いや、頼むといわれても・・・」

「そこをなんとか頼むです」

「だから何とかと言われても・・・」

楓の目の前では制服を着て手を合わせ、必死に頼む佐々木まき絵に無感情ながらも頼んでいる綾瀬夕映がいた。

別にこの二人にイラついているわけではない。この二人の話の内容がイラつくのだ。話の内容はまあ皆様もわかると思うが、一応書いておく。

『もし今回のテストで最下位を取ったらクラスが解散され、しかも一番成績が悪い生徒は小学生からやり直すことになるから、図書館島で頭の良くなる魔法の本を探すため一緒に来て欲しい』

最初、これを聞いてはあ？と思いつきにバカでござる・・・、と思つてしまった。おそらく以前の楓なら飛びついたろう。さすがの楓も

小学生からやり直すのは・・・と。だが今の楓は違う。理由がどうあれ楓は勉強を自分からするようになり、成績が上がった。これはまごうことなき事実だ。それに競う相手もいるし勉強を教えてくれる人もいる・・・今の楓にとって、魔法の本などというあるかどうかわからない物を探すのは時間の無駄と言っほかないだろう。

「（それに自分の力でもない力を使い何かを欲するなど愚の骨頂・・・それがわからぬでござるか？それにクラス解散もありえないでござるな）」

クラス解散を行うということは、たかが一つのクラスを解散させるために全クラスを解散しなければいけない。しかも小学生からやり直しと言うのもほぼありえない。何せ現在の日本国民は男女問わず義務教育で小中学校は必ず通わなければいけないし、よほどのことがなければ卒業できるのだ・・・まあ転生してから銀次は通っていないが。

そんなわけでこれ以上いても時間の無駄と思った楓は早急に帰りたいたいと思っただが・・・中々返してくれない。楓はそれにイラついているのだ。

「（はあ・・・早く帰って少しでも勉強をしたいのに・・・これでは真名を追い抜けぬでござる）・・・とにかく拙者は帰ってもいいでござるか？家でテストの追い込みをしたいのでござるが・・・」

「そんなこと言わないでよ長瀬さん！！それに魔法の本が手に入れば頭が良くなるんだよ！？欲しくないの！？」

「いらぬでござる。自分の力でどうにかするでござるよ」

「簡単に頭が良くなるんだよ！！手に入れない手はないじゃん！！」

「別に天才は目指してないから必要ないでござるよ」

楓は至って普通の知識があればいいと、銀次に言われてる為そこま
で頭を良くしようとは思っていない・・・まあ、できれば真名に勝
てるぐらいの脳みそは欲しいと思うらしいが、それだって勉強すれ
ばいい話だ。

とにかく今の楓はとっとと帰りたい。なのに・・・

「あ、あの長瀬さん!」

「(ゲツ)・・・何でござるかネギ先生」

楓は目の前に現れた担任・・・ネギに嫌な顔をしながら見る。しか
し、ネギはそんな嫌な顔をする楓に気付いていない。楓としては服
を脱がされたら堪ったものじゃないため、あまりお近づきになりた
くないモノだ。

だが、ネギはそんなのお構いなしで楓に近寄り話す。

「皆さんが困ってるんですよ? 助けてあげないんですか?」

「.....」

最早呆れしかないという表情になる楓。確かに夕映達は大切な友人
ではある。これは間違いない。でも、だからといってあるかどうか
もわからない、博打みたいなことに時間を掛けるなら自宅で大人し
く勉強していたほうが遥かに時間を有効活用できる。
それをネギに伝える。

「確かに皆は拙者にとっては大事な友人でござる。これは間違いな

いでもござる・・・でも拙者として用事とかがあるでござる・・・つまりは人の都合も考えて欲しいということでもござるよ」

勿論楓の用事とは銀次との約束である。楓にとってはそっちの方が遥かに重要である。

「あつう・・・でもでも・・・」

「・・・チツ」

目の前で口籠るネギに舌打をして楓は体を反転させ家に帰る。最早こうして言い争いしている時間すら惜しいと思ったのだろう。すると振り返った先に楓の想い人が現れた。

「ふう・・・見つけたぞ楓」

「ぎ、銀次殿!?!なぜここに・・・」

まさか、迎えに・・・?と楓は思う。まさにその通りなのだが、楓は気付く。

「(あれ・・・?どこか不機嫌そうでもござる・・・でも安心したような表情でもござるが・・・)」

真名は勿論、未来から来た鈴や他の変体刀達よりも遥かに長い付き合いをしている楓。だからか他人にはわからないほどの微妙な銀次の表情でもよくわかる・・・そして今の表情は非常に『不機嫌』な時の表情なのだが・・・どこか安心したような表情でもある。

「（ふう・・・よかった、間に合ったようだな）」

銀次はまだ図書館島の前で何やら悶着をしている楓たちを見つけて一安心した。それだけでも銀次にとっては多少の機嫌直しになる。まあ、たとえもしあのまま図書館島に楓が入ったのなら周りにある書物を限りなく刻み地下への入り口を探したろう・・・その後に残るのは『図書館島』ではなく『廃墟島』になるだけで済むのだからある意味安い代償でもある。

銀次は次にその後ろにいるネギ達を見る。

「お前ら・・・夜遅くに俺の幼馴染にいったい何のようだ・・・？」

「うっ」

銀次のちよつと殺気の籠った視線に一同はたじろぐ。楓に殺気を当てていない部分はさすがと言うべきだろう。すると、夕映が前へとでてきた。

「じ、実はこの図書館島の地下に頭の良くなる魔法の本がある、という噂があるです。私達はこれからそれを取りに行こうと思いましたが・・・でも、図書館島の地下は貴重書盗掘を防止するための罠がたくさん仕掛けられています。それで長瀬さんにも参加してもらえればと思います「つまり楓を罠避けとして使うつもりだったと？」・・・否定はできません」

それを聞いた楓は目を険しくさせる。まさか、自分が呼び出されてやたら引き止めていた裏にそのような理由があるとは・・・と。そ

れを聞いた周りの者もバツの悪そうな顔になる。唯一何が起こっているのかわからないという表情をしているネギが辺りを見る。

「確かに楓の身体能力ならそんなじゃそこらの罾でも引つかからないとは思いつし、引つかかってもすぐに対処できるだろうさ。ましてや図書館島の罾なんてモンなら尚更だろうよ」

第一、素人の学生でも避けられるような罾が一流の傭兵や泥棒を捕まえられるとは思えない。そんなので盗難防止などお笑い種だ。もし銀次が罾を仕掛けるならそれこそ大事な書籍は嚴重な倉庫に入れて、その周りを手榴弾やクレイモアやら仕掛けるし、一番安上がりで手っ取り早いのは微刀・釵や自立型変体刀を倉庫の周りに徘徊させたりする。

さらに銀次は追い討ちをかける。

「でもな、だからと言って楓をお前らみたいな犯罪者にするつもりは俺は毛頭ないぞ？」

『!?!?』

一同は驚いたような顔になる・・・まあ、暗殺やら何やらやってる銀次がどうこう言えるものでもないが・・・。

「犯罪者ってどういうことよ!!」

「そのままの意味だよ神楽坂。お前らがしようとしているのは紛れもない不法侵入及び窃盗だ・・・いや、まだしていないから窃盗未遂か？」

銀次の言葉に夕映が反論する。

「し、しかし、我々は図書館探検部ですよ？だから「問題ないってか？アホかお前は。お前らはただの部活動の生徒に過ぎねえだろうが」で、でもこのようにネギ先生もいますし「そいつは図書館探検部の顧問なのか？」・・・違うです」

「そのクソガキがお前らの担任なのは知っているがな、そいつは図書館探検部の顧問じゃない。それともちゃんと顧問に許可をとったのか？」

「・・・取っては・・・ないです」

「ならお前らがしようとしているのはただの不法侵入だ。オマケにお前と近衛と宮崎に早乙女以外は図書館探検部じゃないから、たとえ許可を取ったとしても不法侵入罪でしょつ引かれるし、お前らはその手引きでしょつ引かれる・・・どっちにしる犯罪行為には違くない」

夕映はそこで押し黙ってしまう。確かに銀次の語る理論は道理が通った正論だ。さすがにちよつと大人気ないと思っただが、夕映に関してはこう正論で言わなければ絶対に引かない所か逆に巻き込まれてしまったため一方的かつ正論を吐くのが一番だ。それに、と銀次は続ける。

「それに・・・楽しんで手に入れた結果なんかはな・・・入門しただけで満足している武道家モドキのド素人と一緒なんだよ」

「ッ」

それを聞いて、古は拳を握る。今の言葉は間違いなく古に向けてい

った言葉だろう。それを知ってか知らずか銀次は続ける。

「自分が苦勞して苦勞して苦勞して・・・それで手に入らなかったならまだわかる。それはしょうがないことだな。そして本当にその苦勞を知ってる人なら認めるさ。だがな苦勞もしないで手に入れた力を一体誰が認める？そんなもの誰も認めやしない。楓だって必死に勉強して苦勞して成績を上げたんだ・・・俺はそれを認めるし評価もする・・・」

銀次は思い出す。『銀次が何でも言うことを聞く』という条件付ではあった物の、楓が頑張ったのは確かだ。夜中も自分の部屋にある机に噛り付き、導士が作った問題集を解く。わからなければ貰った解説プリントで確認する。

真名だってそうだ。普段は銃の整備道具しか乗っていない机なのに、夜中にそれを全部どけて勉強に打ち込む。

鈴だってそうだ。毎回全教科百点満点を取ってるからといって勉強を怠ったことはない。大事なプロジェクトなどで毎日大学に引っ張りダコにも関わらず、自宅でも必死に勉強をしている。

「それでもお前らがそのあるかどうかもわからない魔法の本を探しに行くのなら俺は止めはしない・・・でもな、それに楓を巻き込むな・・・迷惑だ」

そういつて銀次は踵を返し歩き出す。楓はその後をあとネギ達にわき目も振らずに銀次の方へと駆け寄った。

「・・・・・・・・」

あとに残った者達はただ・・・黙ってそれを後ろから見ることにしかできなかった。

「・・・それにしても楓。悪かったな」

「え？何がでござるか？」

帰路についてる途中、急な銀次の謝罪に驚き楓は聞き返した。銀次は非常にバツの悪そうな顔になりながら後頭部を掻く。

「いや・・・あいつらがお前の親友だとは知っていたんだが・・・思わずカツとなってな・・・もしかしたら俺のせいであいつらともう仲良く出来ないかもしれないと思ってな・・・」

むしろ自分の甘さに不機嫌になっていたため多少の八つ当たりも含まれるが、夕映達の都合で楓の貴重な時間を潰されるのが銀次にとっては許せなかった。それで結構キツイことを言ってしまったのだが・・・楓はそれを聞きキョトン、とした顔になるやすぐにクスリと笑う。

「銀次殿・・・拙者も確かに彼女らとは友人でござる・・・でも」

スタツ、と銀次の前に立ち、片目を開け微笑を浮かべながら告げる。

「拙者にとっては銀次殿のほうが何十倍も何百倍も大事でござるよ」

「・・・」

銀次はそういわれてガラにもなく照れたように頬を掻く。鈍感な銀次ではあるが、やはり幼馴染にそう言われるのはこっぴどく恥ずかしいのか嬉しいのか……、

「……まあ、それはいいさ。ほらさっさと帰るぞ。じゃねえと合格ライン上げちまうぞ」

「うざ!？そ、それは非常に困るでござるよ銀次殿!!!」

二人は里のいた頃のように話をしながら帰路へとつく。

〳〵次の日・教室〳〵

図書館島の事件の次の日。楓たちは教室で勉強をしながら目の前にいる人物と会話をする。

「……それで?結局あやつらはそのまま行ってしまったと……?」

「そうアル。私もさすがにあそこまで言われたら……止めたアル」

目の前にいるのは昨晚図書館島に侵入しようとしたネギー一味にいた一人……古だ。しかし古は図書館島に入らず寮へと戻つたらしい。古も目の前にある問題集を頭の上に?マークを浮かばせながら必死に解く。

「まあ、引き止られた時には後ろ髪を引つ張られる感じだったアルけど・・・李さんも『己の力は己でつけなければ意味がない』と言っていたアルから・・・って、三人とも？なぜニヤけてるアルカ？」

「いや～・・・だって・・・ねえ」

「うむうむ」

「ふふふ」

三人は闘士の名前（偽名・李）が古の名前からでた瞬間。ニヤニヤとした顔つきになる。古はよくわかってないような顔つきになり、三人を見る。すると鈴がニヤつきながら古に話しかける。

「それで古。前々から気になってたから聞こうと思っていたんだが・・・とう、李さんとはどこまでいったネ？」

「え？何がアル？」

鈴の説明がよくわからなかったらしい古は聞き返す。すると楓がツなぐ。

「決まってるでいぢやるよ・・・恋愛のほづでいぢやる」

「ふええ!？」

唐突な質問に、古は顔を真っ赤にしてしまった。まさかそのようなことを言われるとは思っていなかったのだろう。すると今度は真名が続ける。

「ネタは上がってるよ。この前も一緒に修行の後買い物に行ってるところを目撃した、という情報も入っているしね」

なおその目撃したのはたまたま買い物に行っていた女刀・侍だったりする。余談だが、闘士の方も仲間内である変体刀に同じような質問攻めを以前からされているが、「何のことだがまったくわからんの一点張りだったりする。」

真名のネタが上がっているという言葉聞いてさらにアタフタする古。三人は心の中でこう思った、

「「「（絶対惚れてるな）（）」」」

「な、なら三人のほうはどうアル！銀次さんとはどうアルか！？」

すると、古はしてやったりと言う表情になり楓たちに切り返す……だが、

「いや、拙者らは普通に買い物とか行っただでござるよ……勝負サラシとか買いに」

「私もだよ。あと一緒に餡蜜とか食べたり」

「私もネ。一緒にお散歩デートをしたネ」

この三人にとって銀次と一緒にいればどこでもデートな上に、完全にオープンだ。ただ鈍刀と呼ばれる銀次が気付いていないだけで周りは完全に三人が銀次のことを好んでいるのを理解している。

三人はしばらく古を弄りながら勉強に励むことにした。

その後、なにやら一位を取らないとネギが教職を辞めさせられると言う話の流れ、あやかを筆頭に教室中が必死に勉強するなか

「」「」（）・・・辞めればいいのに））」「」

トラブルメーカーを追い出せるなら点数悪くしても・・・という魅惑に駆られる三人だが、銀次との約束もありそちらを優先することにした。

そして試験後

〳〵桐野邸・居間〳〵

試験終了後。答案も返却された順位がわかった楓たちはすぐさま順位表を手に帰宅した。そして居間にいた銀次に順位表を渡す。

「おお・・・よく頑張ったなお前ら」

銀次は渡された三人の順位表を見ながら三人を褒める。どのような結果かと言つと・・・、

「鈴は一位をそのままキープか。偉いぞ」

「へへへ・・・嬉しいネ」

銀次は鈴の頭を撫でる。鈴は嬉しそうに気持ちよさそうに目を細める。

「そして真名は・・・300位の中間ぐらいに入ったか・・・この調子でがんばれよ」

「ん・・・ふふ、ありがとう銀次さん」

銀次は鈴の頭から手を放し、今度は真名の頭を撫でる。真名も気持ちよさそうに目を細める。そして次が本題。

「さてお次は・・・楓」

「あ、あい」

楓は思わず息を呑む。銀次はその楓をジッと見て・・・フツと笑う。

「600位に入るとは正直俺も思っていなかったがな・・・よく頑張ったな楓」

「えへへへ、頑張ったでござるよ〜」

銀次は微笑みながら楓の頭を撫でる。銀次は楓がまさかここまで順位を上げることができるとは思っていなかったため、本当に凄いと思い褒める。楓はむかしのように優しく撫でてくれる銀次の手に顔をにへへ、と崩しながら撫でられている。

「さて・・・まあ、俺からは今後もがんばれというほかないな。何
度も言ってると思うが、別に程ほどの知識があればそれでいいと俺
は思ってるからな。・・・それと導士とかにちゃんと礼を言ってお
くんだぞ？」

「あいあい」

「わかったよ」

「了解ネ」

それは絶対にするつもりだと三人は思っている。正直、導士とかが
いなければここまで成績を上げることは不可能だったろう。ゆえに
三人は導士に感謝しているので後で感謝の礼をするつもりであるが・
・・・その前に、

「ぎ、銀次殿・・・あの、その・・・約束をお願いしたのでござ
るが・・・」

楓はちょっと恥ずかしげに指をモジモジさせながら銀次に聞く。銀
次はああ、と答えそういえばそうだったなと答える。

「ああ、そういうばそうだったな。それで？何か欲しいものでもあ
るのか？」

約束・・・というのは勿論『銀次が何でもいうことを聞く』と言う
奴だ。まあ、銀次本人が鈍感なためここでアプローチしてもしよ
うがないため、それはまた別の機会にすることにしようとしている。
そして三人のお願いとは・・・

「私（拙者）と一日一緒にいて欲しい（でござる／ネ）」

こうして、銀次は美少女三人と一日一人という三日間を美少女と日替わりで共に過ごすことになったのは・・・また別の話である。

第二十八話（後書き）

・・・うん、何か楓たちの性格が変わっているような気がするけど気のせいです（笑）楓のバカレンジャー脱出したのは『折角頭のいい変体刀が集まってんだから、勉強教えたら良くね?』と思いついてみました。

さて次回

春休みに突入!!ということでもちよつとした日常編を書くつもりです。普段は学生として生徒達。楓たちもその例外ではなく放課後に活動することがある。それは・・・部活動!!

「ああ? 『部活動参観日』?・・・授業参観じゃなくてか?」

はてさて次回はどうなるのでしょうか?

それでは次回!!

最後に変体刀の案を下さったパールレーパさん、ふかやんさん、ありがとうございました。

第二十九話（前書き）

そついやアニメ版のネギま！をまだ見ていないと最近気付いた銀閣です。

どうも皆さん銀閣です。上にも書いていますが皆さんはネギまのアニメを見たことがありますか？自分はまだ見ていませんので今度機会があったら見たいと思います。

さて、それでは今回は前回でも予告していた通り『部活動参観』・・・の前編です。いや・・・本当は今回の話で終わらせようと思いましたがよ？でもために溜めていたネタを使いたいと思いついたら・・・まあ、今回は多少短いと思います。

それではどうぞ！

第二十九話

図書館島事件からしばらくして、麻帆良学園は春休みへと入った。

〳〳桐野邸・居間〳〳

「『部活動参観』・・・？なんだそりゃ」

銀次は机を挟んで目の前に座る楓、真名、鈴の三人を見る。机の上にはいま銀次が聞いた『部活動参観』についての説明が書かれたプリントが置かれていた。すると鈴が説明をする。

「まあ、簡単に言えば授業参観の部活動版みたいなものネ。普段自分達の子供が何をしているのか？と気になる親のために子供と一緒に楽しむために作られたモノらしいネ・・・まあ、親はもっぱら見るのが主体で実際に部活動に参加する親は少数ネ」

「なるほどな・・・ようは過保護や子供がやっているのに興味を持った親用・・・と言ったところか」

そつともいうネ、といって鈴は首を縦に振る。銀次はそれで？と聞く。

「俺に何をしろと？・・・まさかお前らの親代わりになれと？」

「「その通り（でござる／ネ）」」

銀次の疑問に三人はまさにその通りという顔になりながら銀次を見る。だが、

「メンドイから断る」

ズデッ！と言う音をさせ、三人は器用にこける。最近、この三人にズッコケのセンスがあるのでは？と思っけてしまい銀次。

「な、なぜでござるか！？銀次殿！！」

「そうだよ銀次さん！！いいじゃないか夫代わりになっても！！」

「ちょっと待て真名。お前いま明らかに違う言葉を言ったぞオイ」

「そうネ真名！！何をふざけたことを言ってるネ！！銀次さんの夫は私ヨ！！」

「お前も何言ってるの！？」

とにかく変なことを言う三人にツッコミを入れる銀次。とにかく！と言いながら銀次は咳払いする。

「とにかくだ。楓は隼人さん呼べばいいだろう。真名は神社にご両親いるだろうが。鈴は・・・どうするか？」

「私の場合はどっちにしろ銀次さんが生みの親なのは確かネ」

「ああ・・・そういえばそうだったな」

未来から来たとはいえ、鈴はまかりなしにも銀次が生み出したのに
は変わりはない。なら、銀次が行くのも通りだろう・・・。銀次は
チラツ、と二人を見る。

「・・・・・・・・」

む、という表情をしている楓と真名を見て、うつと銀次はたじろ
いでしまう。銀次はこのような顔にも弱いのだ・・・銀次はふう、
とため息を吐く。

「まあ・・・一応、この家に住んでる以上は俺が保護者なのは間違
いないからな・・・わかったよ」

「ほ、本当でござるか!？」

「ああ、でも三人のを回るとなると時間が掛かるな・・・どうする
か？」

銀次はそこで悩む。さすがにちよつと見ただけでハイ、さようなら
ではこの三人が納得いかないだろうし・・・と考えていると

「なら一日一人でどうか？部活動参観は五日間ぐらいあっただろ
うし・・・その内どれかにしたらどうか？」

麻帆良の部活動はその広大な学園都市に比例するほど多い。同じよ
うな名前の部活もいくつも存在するためもあるだろうが、とにかく
多い。そして沢山あると色々やりたくなるのも人の性、あるいは他

方からスカウトされたりと、複数の部活に入る生徒も多く居る。鈴なんかはいい例だろう。

銀次はなるほど確かに、と頷く。

「なら順番をどうするか・・・って、おいお前ら何得物持ってんの？ここ鍛練場じゃないよ？」

「大丈夫でござるよ銀次殿・・・これはちょっとしたOHANAS HIIでござる」

「そうだよ銀次さん・・・問題はないさ」

「即急に、完結に、確実に仕留めるネ」

「いや、仕留めんなし。第一お前ら、話し合いで得物はひつよ『ドゴンツッ！』おいイイイイイツッ！？部屋の中で暴れるなアアアアアアッ！！！！てかお話ってソツチの意味かよ！？」

居間の壁に大きな穴を開け、三人は居間から飛び出した。度重なる怒声と銃声に剣戟の音・・・その音が去っていった。

襖を開け、酷い惨状になった居間と廊下を見ながら銀次はポツリと呟く。

「・・・あいつら・・・この前直したばかりのところを・・・」

何度も言っているが、桐野邸は様々な変体刀が暴れたりして何度も修築している。しかしあまりにも修築しすぎて、修築していないところを探すのが困難なぐらい壊れているのだ。そして楓や真名、最近は鈴も加わった三人が暴走してさらに被害は増大の一途をたどっている。

「ところでん風情が豆腐に逆らうとは何事でごじゃるか!!」

「うるせエ!!豆腐のくせに生意気なんだよ!!ところでんに勝てると思ってるのか、あア!?!」

豆腐やらとこてんやらと何やら騒いでいる二人組み・・・片方は以前にも登場したことがあるバカ変体刀が一本、処刀・天乃助だ。一体どういう作りになっているのかわからないが全身の内95%がとこてんで5パーセントがゼリーでできてるらしい。ついでに言うと獾が吐くほどクソマズイらしい。そしてもう片方は・・・、

「これだからとこてんは困るでごじゃる!!豆腐はとこてん以上にとんぱく質を持ってるでござじゃるよ!!」

なぜか・・・なぜかわからないが・・・忍装束を身に纏い、豆腐の頭を持った変体刀がそこにいた。

大豆刀・豆腐　バカ変体刀の一人で豆腐をこよなく愛する男だ。性格は非常に紳士的だが、怒らすと阿修羅の如く怒り狂う・・・のだが、肝心の顔がないためわからない。一応吐血や涙は流すので口や目はあるらしい。また、名刺代わりに豆腐と醤油を差し出す人物でもある。

さて、そんな豆腐。豆腐嫌いの相手が大嫌いで豆腐嫌いの奴を見かけたら頭の豆腐を千切り、それを相手に投げつけ『死ぬ』という二言を言う。実際、麻帆良商店街で被害者が多数いたらしい。

そして、ところてんをこよなく愛し、豆腐を何よりも嫌う天乃助。この二人は非常に仲が悪く、会えばまず口喧嘩。そして殴り合いと発展していく。余談だが、なまじ戦闘力が高いためか桐野邸の損害総額の一割はこの二人の喧嘩によるものである。

「ええい、こうなればこの大豆刀・豆腐。全国・・・いや、全世界の豆腐を代表してところてんである貴様に天誅を加えてやるでござる!！」

「上等だア!! ならこつちは全世界のところてんを代表して豆腐である貴様に天誅を加えてやらア!!」

「うおおおおおおおッ!!! 全世界の豆腐よ拙者に力をオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!!!!!!!!」

「うらあああああああッ!!! 全世界のところてんよ俺に力をオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!!!!!!!!」

「はあああああああッ!!!!!!!!!!」

そして二人はそれぞれ両手に豆腐やところてんを持ち桐野邸を駆け抜ける・・・所々豆腐やところてんを壁にぶつけながら。

「・・・・・・・・(グス)」

最早、何も言うことができない銀次・・・どこことなく涙ぐんでいるのが哀愁を漂わせている。

「んでだ・・・だからよ・・・って、なんだありゃ?」

「どうしたの・・・って、何あれ？」

「えっと・・・何でしょう？」

床に突っ伏している銀次を見つけ、訝しげに見る三人・・・変形型変体刀の『自分の意思を貫くこと』に主眼を置いた狼刀・罪と、『全ての魔術を使用することが可能にする』ことに主眼を置いた帯刀・諒、そして『森羅万象を自在に使いこなす』に主眼を置いた自立型変体刀、魔刀・賢者がいた。

以前にも書いたと思うが（二十六話）この三人付き合っている。それを見た銀次が『このリア充め』といったら『お前のほうがそうだろうが』と返されたことがあり、銀次ははまだそれがどういう意味なのかわからないと悩んでいたりする。

三人は床に転がっている物体（豆腐まみれの銀次）に近づき何なのか確認する。

「・・・って銀次！？お前、どうしたんだ！？」

「はあ！？これが！？この豆腐まみれのが！？」

「あ、でもこの着流しはそうですね」

「うう・・・罪。それに諒に賢者・・・」

罪に頭についている豆腐を払われながら銀次は三人にあることを聞こうと思った。

「なあ三人とも・・・俺、最近他の奴らから舐められてると思うんだけど・・・どう思う?」

「「「「「「「「」」」」」」」」

否定できない、と言つべきかどうか悩んだ三人・・・でも、

「まあ、みんな心のどこかではお前のことをちゃんと主だと認識しているさ・・・気にすんなよ」

「そつだよ。気にしたら負けってことわざがあるじゃん」

「そうですよ。そのうちいいことがありますって」

ポンポンツと三人は銀次の肩を叩く・・・その姿には変体刀の主としての威厳をまったく持って感じられない。

「まあとにかく風呂に入ったらどうだ?そのまんまじゃどうしようもないだろ?」

「・・・ああ、そつする」

銀次はトボトボと歩いて風呂場へと向かう。

「・・・何でだろう・・・四季崎の旦那と重なるんだが・・・」

「・・・私も、特に豆腐被ってたところが・・・」

「私もです・・・」

三人は昔を思い出す。自分達がまだ桐野銀次ではなく四季崎記紀の元で暮らしていた頃、同じように頭に豆腐を被りトボトボと風呂場に歩いていく四季崎の背中となぜか被った……。

こうして、銀次の苦勞はまだまだ続く……。

『あ、銀次君危ないーい!!』

『グパッ!!』

『KIIIIIIILL YOUUUUUUUッ!!』

『喰らえ!!豆腐手裏剣!!』

『喰らうか!!お返しだところてんマシンガン!!』

『ぐぐぐはぐほッ!!』

『初日は拙者がいただくでござる!!』

『させないよ楓!!初日は私がいただく!!』

『させないネ!!私が初日をいただくネ!!』

『ちよ、ま、これ以上はし……!!ゴハッ!!!!』

『……』

・・・銀次の苦勞はまだまだ続く。

~~~~~数日後~~~~~

まあ、あの後も色々とおつたが、走刀と夢のほうは銀次が拳骨で両成敗。天乃助と豆腐は斬刀で細切れにしたためしばらくは復活しないだろう（なぜかこの二人は爆弾で木っ端微塵になっても数日後には元通りになっているのだ）。一番大変だったのは楓たちで中々戦いをやめないものだから、

『・・・それ以上暴れるならばらく口をきかねえぞ』

『『『それだけは勘弁して欲しい（でござる／ネ）！！』』』』

その一言を言っただけで、三人は涙目になりながら戦いをやめた。どういう原理かは知らないが、この三人この言葉を言うとおとなしくなるのだ。銀次はそれを理解して本当に手が付けられないときにこれを使うのだ・・・たまに罪悪感を感じるのは気のせいではないだろう。

とまあ、そんなこともあり三人は大人しく（かつ視線と口は熱く）議論しながら銀次が回る日時を決めた。

そして議論の結果こうなった。

「天は私に味方したネ!!」

まず最初は鈴。理由としては一番部活入っているためとじゃんけんで一人勝ちしたからだ。

「ふう・・・二回目か。ま、いいほうだろうね」

そして二回目は真名。これは完全にじゃんけんで決まったようなものだ。・・・そして、結果的に最後になったのは・・・、

「・・・・・・・・」

ものすごいムスツ、とした表情になりながらソツポを向く楓。わかるとおり楓はじゃんけんで負けてしまい最後のほうに回ってしまったのだ。

「(くっ・・・でもまあいいでござる。鈴は色々な部活に入ってるらしいうえに真名はバイアスロン部・・・拙者のさんぽ部の実力と比べたら月とすっぽんでござる!!)」

そうだ。鈴は様々な部活に入っているし、真名はスキーをした後に射撃を行うバイアスロン・・・どちらも凄いいえば凄いが、

「(さんぽ部である拙者に比べてデートスポットや隠れスポットをしらないでござる・・・)」



そつだ、いくら二人が凄かろうが二人の仕入れる有名スポットとは常に誰かが居る状況・・・対する楓はどのように誰かが居るデートスポットは勿論、人気がまったくくない穴場のところも知っている・・・実は楓がさんぽ部に入ったのもこれが理由だったりする。銀次がない一年間。楓は寂しい思いをしながらも麻帆良にきた銀次と色々な処を回りたいと思い、さんぽ部に入部したのだ。そして今回は楓が一番『銀次と一緒に行きたいところ』を選び抜いた非常にいいところを手に入れたのだ。

「（それならこの二人にも勝てるでござる・・・ふっふっふっ）」

「（な、なんだ！？最近やたらと寒気を感じることがあるな・・・悪霊にでも取り付かれたか？）・・・まあ、決まったならいいな。今後は『絶対』に話し合いで解決するように」

寒気がするのは悪霊のせいだろうか？と思いつながら銀次は三人に告げる。

そして始まる部活動参観・・・はたしてどうなることやら・・・。

～～初日～～

「というわけで銀次さん今日はよろしく頼むネ」

そういつて銀次の腕を取るのは皆様おなじみ擬似虚刀・鈴だ。今回の勝負で一番乗りを果たした人物でもある。

「おう、まあまかりなしにも親だからな・・・未来の俺だけど」

一応、鈴は銀次の作った変体刀でいわば娘に値する。だから銀次も親代わりを引き受けた・・・まあ、対する鈴は『そういう感情』ではないが。

それで？と腕にくつついている鈴を引っぺがし、銀次は鈴に聞く。

「それでどうするんだ？お前は特に部活多く入ってるから回るのに苦労するぞ」

「そうネ・・・どうする力・・・？」

鈴は全部で六つの部活動及び研究会に所属している。すると自然に時間が掛かるのだが・・・鈴はうんと悩み、

「・・・まあ、生物工学研究会や量子力学研究会は別に行かなくてもいいカナ？銀次さんも多分理解できないし」

「・・・ムカつくけど事実だから言い返せねえ」

残念だが銀次にそのような小難しいことを理解できる脳みそは携えていない。悔しそうな顔をする銀次に苦笑いを浮かべる鈴。

「でもまあ、お料理研究会や中国拳法研究会とかなら銀次さんでもわかると思うネ。それにロボット研究会も自立型変体刀を考えれば理解しやすいしネ？東洋医学研究会もそれなりに面白いと思うヨ？」

「ふうん・・・まあ、いいか。それじゃあ順番に回るぞぜ」

「了解ネ」

部活動参観初日・・・開幕！！

〳〳鈴の場合・お料理研究会〳〳

銀次はまず鈴の部活の一つでもあるお料理研究会に来ているところだ。銀次と鈴が部室に入るや否や、

『腕によりをかけて作るネ！！』

と言つて銀次を椅子に座らせ、驚くほどの速さで次々と食材を切り裂いてゆき、炒め、焼き、蒸し、温め冷やしと普通はかなり時間が掛かる料理を次々と作り上げ銀次が座る机の前においてゆく・・・その際、銀次が以前狂がいる地下で見たことがあるような生物の食材をいくつも見かけたような気がするが・・・気にしないで置こう。

「ふう・・・粗方出来たね。デザートは冷蔵庫の中で保存しているから後で楽しむといいネ」

「おう・・・それにしても凄い作つたな・・・」

銀次は目の前に置かれた食事の山を見ながら苦笑する。銀次が座っている机は五人分の食事は優に乗せることができるぐらい広い。鈴

が作った料理はその机を完全に占拠している。正直、喰いきれるか心配な銀次。

「(ま、折角作ってくれたんだから頂くとするか)それじゃいただきます」

「どうぞ召し上げ」

早速銀次が食事を始める。

「ん？こいつは中々旨いな・・・」

「それは蟹ブタのステーキネ」

「(・・・気にしない気にしない)おお、コッチの肉も旨いな」

「それはガララワニの肉ネ」

「(・・・気にしたら負けだ)ならこれは何だ？」

「フグ鯨の刺身ネ」

「・・・ならこっちの何やら刺々しい物体の佃煮(?)は・・・」

「パラサイトエンペラーのつくだ「オラアツ!!」あふんっ!!」

さすがの銀次も・・・これ以上は無視できなかつた。持っていた食事もフォークを鈴の頭に投げつけ突き刺す・・・鈴はそれを気持ちよさそうな声と顔をしながら受け止めていた。

「いきなり何をやるネ銀次さん！！確かに銀次さんが『そういう遊び』が好きなら私はいつでも相手するけれど・・・はっ！？まさかいきなり襲うのが趣味なの力！？」

「違うわドアホ！！俺が言いたいのはそのうちのことじゃないわボケエ！！！」

プスリと何事もなかったかのように額に刺さったフォークを引き抜く鈴・・・そこはさすがは変体刀と言うべきだろう。銀次は自分が変な性癖があると思われると思い、即座に否定する。そしてすぐにため息を吐き、

「俺が言いたいののは鈴。なぜ、ここに、狂が、作った、怪しい生物の食材があるんだ！！」

さっきも言ったと思うが、先ほどからでてきている料理に使われている材料は狂が以前読んだ漫画に出てきた食材を『何か作れそうですね』と言つて実際に作ってしまったのだ・・・しかし、その特殊な食材だけに簡単に外に出すわけにもいかず、一部を除いた食材は桐野邸からでていない・・・はずなのだがなぜここにあるのだろうか？鈴がその答えを教えてください。

「それは勿論パク・・・貰ってきたネ」

「今パクってきたといつたらどう？間違ひなく言おうとしたら・・・まあ食うからいいけど」

いくら持ち出し禁止とはいえ折角作ってくれた料理を無駄にするわけにもいかない。銀次は今度は箸を手に取りまた食事を始めた。

「ついでに言うとデザートは虹の菓のプリンネ」

「・・・楓に言ったら飛びつきそうだな」

幼馴染が好物にかぶりついているところを脳裏に浮かべながら、銀次は料理を食べ始めた。

「次、ロボット工学研究会」

料理を喰い終わった後、銀次と鈴はそのままロボット工学研究会（以下ロボ研）へと足を運んだ。

「お、茶々丸じゃないか」

「これは銀次さんに超。お久しぶりです」

ロボ研の建物の入り口に入ろうとすると、その入り口からちょうどできた人物が現れた・・・エヴァの従者の一人である絡繰茶々丸だ。茶々丸は二人を確認するとペコリと頭を下げた。

銀次と鈴は茶々丸に近づき話をする。

「そついやお前ここ出身だったんだよな」

「はい、正式にはロボット工学研究会第三研究室がそうです」

「おお、随分と細かく分類されてるな・・・しかし」

銀次は改めて茶々丸をジッと見る。ふむふむ・・・ほう、などと呟

きながら茶々丸の体を見る。そして、

「ふむ・・・さすが・・・としかいえないな。鈴もそうだが葉加瀬もよくここまでの『変体刀』を作り上げることができたな・・・強いて言うなら球体間接というのが惜しいところだが・・・」

『変体刀』とは、いま銀次の目の前にいる絡繰茶々丸のことだ。

擬似微刀・茶々丸 『人間らしさ』に主眼を置いた擬似変体刀で鈴と葉加瀬、そしてエヴァに作られた四季崎と銀次以外が作った変体刀だ。変体刀、そして科学と魔法の融合体と考えてもいいだろう。生活に基本だらしのないエヴァの一般家事と戦闘のサポートを目的に作られた擬似変体刀でもある。元々は『タイプT-T-O』という草案だったのだが、最年長者の独断によって茶々丸という名前を付けられた歴史がある。

「無茶言わないで欲しいネ銀次さん。私や他の自立型変体刀は皆四季崎様や銀次さんの手で作られてほぼ人間そのものではあるが・・・二人の能力を持っていない私や葉加背ではこれで限界ネ・・・一応人口皮膚の使用も今現在考えてるネ」

その銀次の評価に嬉しい反面、苦笑する鈴。そう、完璧な自立型変体刀を作り上げることができるのは四季崎と銀次、そして一部変体刀だけでそれ以外の人間が作ると大抵は失敗、あるいは完成一步手前で終わってしまう。鈴は元々変体刀破壊が目的で作られたためその能力を持っていないし、葉加瀬とエヴァがその能力を持っていないのは当たり前だろう。

会話をしていると、茶々丸は何やらキュイン、という音を鳴らした。

「あ、すみません。買い物のためいいでしょうか？」

「ん？ああ、そうかエヴァさんの・・・引き止めてすまないネ」

「い、いえ、それでは失礼します」

何やら急に挙動不審になりながら茶々丸はそそくさとその場を離れようとする。銀次はそれを見てなんとなく茶々丸が急いでいる理由がわかり、

「そうか・・・それじゃあ破天荒によろしくな」

ドガンツ！！と言う派手な音を立て、茶々丸が倒れる。鈴も銀次が言った意味がわかったのか、ニヤニヤしながら茶々丸を見る。

「そうかそうか、茶々丸も遂に破天荒さんと・・・いやはや嬉しいネ」

「ちよ、超、一体なな何のことだが私にはわかりかねません」

「まあまあ、あいつはいい奴だからな・・・大事にしてくれさ」

「ぎぎ銀次さんまで何を言っているのでしょうかかかか？」

茶々丸がなぜこうなるのか？そしてそうする相手とは・・・？それはやはりと言うべきか変体刀である。



鍵刀・破天荒 バカ変体刀の一本で金髪赤眼の青年風で無口の無愛想、イマイチ協調性がないが同じバカ変体刀である金平刀・首領蜂を「おやびん」と呼びその際は性格が若干ハイになる。戦闘方法は名前の通り鍵を使って相手の動きを封じることとその気になれば相手の魔力、気、霊力自体を封印することができる。

さて、そんな破天荒。実は茶々丸のことが大のお気に入りできだけ首領蜂にすら見せないような子供の目になる。茶々丸も最初こそ兄か弟のように接していたが、最近はどうもそのように思えなくなってきたか……

「（魂ができてきた……ってとこかな？）」

「（そうかもしれないネ……母親としては喜んでいいのか悲しんでいいのかわからないところダガ……）」

「（喜んでおけ。折角の娘が魂もてたんだ、喜んでバチは当らないだろう）」

コソコソと話しながら茶々丸を見る二人。茶々丸は何やらテンパツてるためそれに気付かない。さすがにそろそろ遊ぶと悪いと思っただのか、銀次は茶々丸の肩に手を置いて話す。

「引き止めて悪かったな……じゃあな」

「あ、はい、それでは……」

それでどこかホツとした表情になった茶々丸はトコトコと歩いて商

店街のほうへと向かって歩いていった。

二人はその後姿を見ながら見送りながら話す。

「いやはや・・・まさかとは思っていたけれど・・・本当にあな  
るとは思ってもみなかったネ・・・葉加瀬に言ったら研究しそうネ」

「・・・それは否定できないな」

二人の脳裏に背中に巨大なアームを着け茶々丸を解体しようとする  
葉加瀬の姿が浮かんだ・・・なぜか後ろに狂もセツトで。

「ま、いいネ。それでは銀次さんロボット工学研究会の部活動参観  
に行くとするヨ」

「ん？ああ、そうだな」

二人はそのまま建物の中へと入っていった。

〓〓中国武術研究会〓〓

ロボット工学研究会を出た二人は、そのまま今度は中国武術研究会  
に来た二人・・・なのだが、

「いいか古。腕はこう・・・でこうだ」

「こ、こうアルカ？」

「ああ、うまいうまい。流石は古だな」

「え、えへへ・・・嬉しいアル」

「「・・・なにこの空間？」」

本来ならもっと熱く、激しい空間なのだろうが、二人の視線の先にある空間・・・正確には先ほどから稽古をしているはずの古と闘士の空間が何やら甘ったるい空間を醸し出している。

その空間を見た二人は思わずハモってしまい、鈴も訛りがでなく思わず素で声を出してしまった。

「古、そこでもっと強く打ち込め」

「はいアル！」

「そつだその調子だ。やはりお前は凄いな」

「え、えへへ」

「「・・・」」

二人はそつと道場からでていった。おそらく、あの二人以外誰もいなかったのはあの二人の空間に耐えられずみんな出て行ったからだろう。その際、銀次と鈴の胸の内にある言葉が浮かんだ。

「「（もう付き合っちゃえよ）」」

まったくもってそつである。

くく帰り道くく

「しっかし……なぜだがある意味濃い一日だったな……」

「そうだね……特に最後の中武研が特に……」

一通り回った二人はその足で帰路についていた。銀次はどことなく疲れた顔をしているが、どことなく楽しそうな顔をしながら鈴と話している。鈴も銀次が楽しそうなのを見て嬉しいのか、顔を綻ばせながらその隣を歩く。

「ふふふ……銀次さんと一緒だったから本当に楽しかったヨ」

「そうか？俺は何もしてなかったがな……」

実際銀次は何もしていない。ロボ研でもただ見ているだけだったしお料理研究会ではただ食べていただけだ……。でも鈴にとっては銀次と一緒にいればどんなところだろうと楽しいし嬉しいのだ。

勿論銀次はそんなことに気付いていない……。さすがは鈍刀・銀次。

「ま、それはそれでいいとして……明日は真名か……」

銀次は次の真名の部活動参観のことを考えながら歩く。

「まあ、真名はバイアスロンだから特にこれといったこともないだろう……多分」

何人が銃を使う変体刀で絡みそうな奴が数本居るが・・・いないことを祈る銀次。それを見て鈴も確かに・・・と思いながら考える。

「・・・大学のバイアスロン部には結構美男美女が多いとかで有名なだから・・・『あの人』がいそうネ」

「ああ・・・あいつか・・・あの女好きの変体刀」

二人の脳裏に銃を手に戦い、街中の可愛い女の子を見つけてはナンパしている一振りの変体刀を思い出す。  
そしたらやつかいだな・・・と思う銀次。

「まあ、いいや。いたらいたでだし、居なかつたら居なかつただ」

「そうだね・・・まあ頑張るヨ銀次さん」

そうして二人は帰路についた。

## 第二十九話（後書き）

どうでした？個人的にはちょっとギャグ風味にしてみました、皆さんはどうでしたか？

さて次回

今回は部活動参観の後編！！真名と楓ははたしてどうするのか？そして楓の秘密の場所とは……？

こっご期待！！

最後に変体刀の案を下さったパルパレーパさん、ふかやんさん、完全怠惰宣言さん、アルマースさん、黄色いのなにかさん、ありがとうございまして！！

### 第三十話（前書き）

そついや楓と真名のアーティファクトどうしようか？と悩んでいる上に瀬流彦を仲間に引き入れたいと思ってる銀閣です。

どども銀閣です。今回は部活動参観、真名&楓編です！！まさか鈴も含め二回に分けるとは思わなかったぜ・・・でもまあ、皆さん楽しんでくれれば何よりです。

それではどござー！！

サブタイトルが数字だったため直しました。

## 第三十話

〓〓次の日・麻帆良大学〓〓

昨日同様よく晴れた空・・・その空の下、

「今日は私の番だね・・・よろしく頼むよ銀次さん」

「ああ、頼まれた」

銀次はふあ、と欠伸をして伸びをする。いま現在銀次は麻帆良大学の敷地内を横で腕に巻きついていている真名と一緒に歩いている。

おそらく真名が学生服ではなく私服で銀次がもうちよい普通の洋服（宇練銀閣が着ている着流しを着用）を着ていたら大学生か社会人のカップルに見えるだろう・・・真名的には少し不本意のところがあると思うが。

「しっかし・・・中学もでかつたがここも随分とでかいな・・・てか、いい加減離れる真名。歩きにくい」

「いいじゃないか別に減るもんじゃないんだから（ここで少しでも銀次さんの注意を引かなければ・・・）」

真名は先ほどから銀次の腕にナニを押し付けているのだが、残念なこととその攻撃は楓で慣れてしまっているため無意味な攻撃でもある・・・若干妬ましいと思うのは作者だけではないと思う。

「まあ別にいいか・・・それよりお前の入ってるバイアスロン部はどこでやってんだ？というか、雪も積もっていないのに出来るのか



「？」

銀次は疑問に思いながら真名に聞く。バイアスロンとは本来18世紀後半にノルウェー・スウェーデン両軍が行ったのが始まりで、その後民間用にと改良されたのが最初だと銀次は記憶していた。だから雪がない今、練習は出来ないのでは？と思う銀次だが、

「ああ、よくバイアスロンは雪がなければできないと思う人が多いけど・・・実際は夏場でもできるスポーツなんだ。それに別に滑らなくても射撃練習だけでもいいからね」

真名は得意げにそう説明した。そう、実はバイアスロンとは何も雪山だけではない。ローラースキーと呼ばれる物を使った『ローラースキーバイアスロン』や、ランニングを行い射撃をする『ランニングバイアスロン』。自転車を使う『マウンテンバイクバイアスロン』、オリエンテーリングと組み合わせた『オリエンテーリングバイアスロン』などがあり、伝統的なスノーシューや先込め銃を使った『プリミティブバイアスロン』などがある。

最近では銃規制が厳しい国を中心にアーチェリーを使う『アーチェリーバイアスロン』などがあり、こちらは日本でも少数だが競技者がある。

長々と説明したが、詰まるところバイアスロンはいろんな形で世界にあるということだ。

説明を受けた銀次はへへ、と言いながら後頭部を掻く。

「でも正直な話お前にとつたらかなり楽じゃないか？」

真名は物心ついたころにはライフルを握り実際の戦場で銃を撃って

いたのだ。弾丸や砲弾が飛び交わない競技場ならそれこそ真名の独壇場だろう。真名はまあね、と言いながら照れたように頬を掻く。

「でもだからといって手は抜かないよ。戦場で手を抜くのは愚の骨頂だからね」

さすがはプロだな、と思いながら真名を見る銀次。『接待好き』の異名を持っている銀次も見習うべきところはあると思う。

「お、ついたよ銀次さん。ここがバイアスロン部だ」

そういつて真名と共に着いたのは一つの建物だ。どうやらこの建物がバイアスロン部の部棟になっているらしい。

「さて・・・それじゃ入ってみますか」

「ふふ、そうだね」

二人はそのまま腕を組んだ状態で部棟の中へと入っていった。

〳〵射撃場〳〵

「うん・・・まあ大体は予想できてたけど・・・本当にいるとは」

麻帆良大学にあるバイアスロン部の部棟の地下にある射撃場。そこに来ていた銀次は額を押さえながら自分の目の前にいる男・・・いや、変体刀を見た。

「へいへいその可愛い子ちゃん!!どうよ?これから俺と一緒に

遊びにいかね？」

「え、す、すみません。私練習があるので……」

「え、マジか……ならそっちの……」

「私は彼氏持っているので」

「……」

様々な女性に声を掛け見事に振られまくっている変体刀……砲刀・銃士がそこにいた。

砲刀・銃士 『銃を使う刀』に主眼を置いた変体刀で、外見は西部劇に出てくるガンマンの姿で、蒼い瞳と金色の髪をしている。性格は見ての通りかなり軽く、家でも少女、自立、独立、と様々な女性型変体刀に声を掛けている。  
だが実力は高く、特に女性に害をなすとわかれば相手が何であろうとライフルや二丁拳銃といった様々な銃を駆使して戦う。

「……それで？お前は一体何をしているんだ？」

「ん？おお銀次じゃないか」

銀次は呆れたように銃士に話しかけると、銃士はケロリとした表情で銀次のほうへと向き直る。そして何をしているのか？と聞かれるやいなや胸を張り、

「何をしているって決まってるじゃないか……ナンパだ!!」

「んな堂々と言うべきことじゃねえだろうが」

得意げに言う銃士にツッコム銀次。いつもなら別の変体刀がこのポジションにいるのだが・・・どうやらどこかに行ってしまったらしい。

「てかよ、そういう銀次はなんでここにいんだ・・・って・・・真名も一緒か」

「やあ、銃士さん」

銃士はまだ銀次の腕に纏わり着いている真名に気付くと、今度はニヤニヤとした顔になり、銀次の肩に手を回し、

「なんだよ銀次。お前もすみにおけねえなく、楓ちゃんがいるつてのに真名と一緒にデートか？だとしたらもっと違うところにいけよな。この色男」

「ああ？何言ってるんだお前・・・ついに頭に蛆でも湧いたか？」

か。鈍感！と言いながら銃士は銀次の肩から手を離し、プラプラとその場から離れていく。

「おい、どうしたんだ銃士？」

「お前がいると俺のナンパ成功率が格段に下がる。もう底辺のクセになにいつてんの？」・・・それは言わない約束だろ・・・」

銀次のツッコミに落ち込む銃士。でも事実である。重視は過去に一

度もナンパに成功した例がない。以前、一度だけ成功したらしいが・  
・後に男だと発覚してしばらく銃士は引籠もりになったとか・  
。  
銃士はトボトボと入り口まで歩いていき、いきなり振り返ると銀次に指をさして

「見てやがれコノ野郎!! ぜってエお前よりいい女見つけてやるかなア!!」

「はいはい勝手に言ってる・・・てか俺に女はいねえっての」

「（私がいるのに・・・）」

そのまま射撃場から出て行く銃士。銀次は銃士が走り去り際に言った言葉の意味がわからず首を捻るも、真名はその言葉の意味がわかったのか心の中で銀次にツッコム。

「（まあ・・・鈍感だからしょうがないか）銀次さん。どうだい試しに撃つてかないかい？」

心のなかでしようがいたいと思しながら真名はため息を吐き、競技用ライフルを銀次に差し出した。本来なら免許がなければ撃つてはいけないのだが・・・ここは麻帆良、外とは常識が違う。

銀次はそうだな・・・と返す。

「（そっぴや最近射撃の訓練をするのをしていなかったな）」

銀次の戦闘は基本近接戦主体で、狙撃などはあまりしない。暗殺などなら骨肉細工などで相手の親族などに化けて近づき、忍法爪合わせで喉を掻き切るし、相手が複数の討伐なら変体刀を駆使して戦う

し、相手が遠くに居れば手裏剣砲を放つて一気に潰す・・・それが銀次の基本戦法だ。銃は炎刀とその兄弟刀ぐらいだ。

「そうだな・・・折角だ。撃たせて貰おうか」

「ああ、なんなら私が指導してあげようか？・・・手取り足取り隅々まで・・・ね？」

真名はこれでもか、と言うぐらいの色香を出しながら銀次の腕に枝垂れかかる。周りでそれを見ていた男は勿論、女も思わず唾を飲み込んでしまった。もし自分に言われたら頭を下げてでもお願いしてしまいそうな雰囲気・・・なのだが、

「いや、弾丸の装填方法教えてくれれば後は引き金引くだけだから装填だけ教えてくれ・・・そして引っ付く動きづらい」

生憎と、銀次にはまったく持って通じない。真名もそうか・・・、といい装填の仕方を教え始める。真名は最初こそ自分の容姿を最大限に利用した攻撃がいと簡単に流されたことにショックを受けたが、数回同じようなことをしているうちに慣れてしまい最早ショックすら受けることもなくなってしまった。

「まあ、装填方法と言ってもボルトアクションだからレミントンの単発式ライフルだと思ってくれて構わないよ」

余談だが、競技用ライフルには安全装置がついていない。なぜかと言うと競技用ライフルは軍用に作られたわけではないのと、戦闘するわけでもないから安全装置はいらないだろうということではないのだ。

銀次は使いづらいな・・・、と考えながら銃に弾を込める。口径は

22口径の競技用ライフル弾で、バイアスロンで言うところのストールポアに適している弾丸だ。そして銀次はそのライフルを構える距離は200mほどだ。リアサイトとフロントサイトを一直線に結び、

「……」

引き金を……引く。

パンツ、

乾いた音が当りに響く。そして、銀次が構えていた銃を降ろし、

「ふむ……まあ、やや真ん中だからぼちぼち……かな？」

「ああ、十分なほどだよ」

銀次も真名も視線の先にある的を裸眼で見る。周りの生徒も裸眼で見たり双眼鏡で見たりと見るが、

「す、すげエ……」

「ほぼ真ん中かよ……本当に初心者か？」

視線の先にある的を見て部員達が騒ぐ。無理もないだろう。何せ初めて銃を持ったと思う人間が銃を撃ってほぼ真ん中に当てる……普通ならまずありえないと思うのだろうが……

「（さすがは銀次さんだ……苦手とはいえほぼ真ん中に当てることが出来るなんて）」

真名も心の中で感心する。真名も銀次が刀を使った近接戦のほうが得意なのは知っているが、遠距離を狙う射撃であるように真ん中に当てられるのは努力の結果と言っべきだろう。

「・・・ッ」

周りが騒ぐ中、それを面白くないように見る男が一人いた・・・バイアスロン部部長の芹沢だ。知っている人も居ると思うがあえて言おう。この芹沢部長、実は真名のこと好きなのである。真名も以前は死んだパートナーと似ていたということ好いていたのだが、今現在は銀次にゾッコンでミジンコ程も興味を持っていない。

勿論芹沢にとっては面白くない。何せ今まで自分が好きな女性がいきなり現れた容姿は整っているが不健康そうな顔をした男に取られたのだ・・・まあ、大学生が中学生に惚れるというのも若干アレな感じはするが・・・そこはツッコまないようにしましょう。

「（くっ・・・龍宮君とあんなに仲良く・・・許せない・・・！！）」

普段クールを通してしている真名が先ほどから銀次にだけ誰も見たことがないような笑みを見せ微笑んでいるところが我慢できないのだろう。

すると真名はまた銀次の腕に枝垂れかかる。芹沢はそれが我慢できなくなり、

「ちよつといいかい？ええと・・・銀次さん・・・だつたかな？」

「ん？・・・ああ、そういうお前は確か・・・バイアスロン部の部長の・・・」



「芹沢です。どうぞよろしく」

手を出してきたので銀次もなんとなく手を握り返す。若干手に力が入っていると思ったが、銀次にとっては全然なので気にするほどのものでもない。だが、何か怒っているような気がしたのが気がかりだと銀次は思った。

すると芹沢は続ける。

「随分と射撃が旨いようですが・・・どうですか？試しに一緒にスモールボアのルールでやってみませんか？」

「それは勝負を挑むということか？」

芹沢の言葉に周りがざわめく。それもそうだろう。芹沢はその実力で今の地位に立った男だ、実力もかなり高い。射撃も真名には負けるが二位の位置に立っている。

銀次の疑問に芹沢はええ、と答える。銀次もうむ、と頷き、

「まあ・・・たまにはこんなのもいいだろうな・・・よしその話乗った」

「頑張つてね銀次さん」

どうせ見ることしかないなら参加しようという銀次らしい考えをしながら簡単に了承。真名は銀次の勇姿を焼き付けようとさらに脳内のフォルダを広げる・・・なおその際消されてるフォルダは芹沢だったりするのは真名の内緒だ。

「・・・それじゃあ早速始めようか・・・本来なら立射・伏射、膝

射の三種類を四十発ずつ計120発撃つんだけど……今回は立射だけの四十発にしようか」

「ああ、別に構わねえよ」

こうして、銀次と芹沢の射撃対決が始まった。

〳〵二時間後・麻帆良食堂〳〵

「ま……余裕だったな」

「というよりも相手にすらなっていなかったね」

射撃対決から二時間後。二人は麻帆良食堂で餡蜜をパクついていた。

勝負はどうなったか？……そんなの言うまでもない、銀次の圧勝である。

あの後時間無制限の立射40発射撃を行った銀次と芹沢の勝負は最早勝負と言うにはほど遠いものだった。

「さて……それじゃあ始めようか」

「ああ、いつでもいいぞ」

二人は銃を持ち構える。芹沢は自分が愛用しているライフルを構え、銀次は真名が持っているライフルを構える。

「それじゃあ・・・始め!!」

部員の合図で両者が射撃を始める。

パンツ!

「(よしッ!真ん中!!)」

芹沢は第一射を見事真ん中に当てた。そして対する銀次は、

パンツ!

「おっと外してしまったか」

銀次が撃った弾丸は的の中心を外れ黒丸の淵に当たった。周りの者は『まあ、さっきのはマグレだったんだろう』と改めて思う。それもそうだろう、今まで銃を持ったことがない(と部員達は思っている)人間がほぼ真ん中に当てることはただの偶然と思ったからだ。だが、真名だけは違った。

「(銀次さん・・・遊んでいるね)」

真名は若干呆れたように銀次を見る。銀次の戦う理由には主に四種類ある。一つはただただ渡された任務を果たすための所謂仕事用。二つ目は己の大切な者を傷つけられた、あるいは攻撃したという怒りによる戦闘。三つ目は鍛錬のための戦闘訓練。これではよく銀次が吹き飛ばされているところが目撃されている。そして最後は銀次

の異名の一つでもある『接待好き』……つまり『遊ぶため』の戦いだ。これにはエヴァとの戦いなども含まれているが……本人に言ったら間違いなく怒るので黙っておこう。

さて、そんな遊んでいる銀次。真名が呆れてるうちにすでに五発目の弾丸を外している。

「銀次さん……さすがに遊びすぎだよ。芹沢部長が可哀想になつてくる」

「ああ？何のことだ。俺は至って真面目にやっているぞ？」

そういいながら六発目の弾丸を込める。その顔がどことなく笑っているのに気付いた真名はまた外すつもりか……と思いつつ銀次にとあることを提示した。

「そつだね銀次さん……もし勝ったら麻帆良食堂の『超絶激甘餡蜜』を奢ってあげよう」

「……なに？」

真名の言葉に銀次の目がキラリと輝く。麻帆良食堂は麻帆良学園に住んでいる者なら誰でも一回は行ったことがある大食堂だ。そこでは毎月オリジナルのデザートが出るのだが……今月とんでもないデザートが販売された。それが先ほどでた『超絶激甘餡蜜』だ。それは『人間の甘味の限界を超えている』とまで言われており、食べた者は例外なくしばらく甘い物を口にしないとという。実は銀次は以前から興味があつたのだが食堂まで行くのがめんどくさくて行っていない。それに最近何だかんだで懐が寂しいのだ。

つまり真名のこの申し出は銀次にとっては渡りに船なため……、

「よし！なら少しばかり本気で行くか・・・」

そう言つて、銀次は先ほどとは違い真面目な顔になる・・・その顔に真名はうっとりとした表情で見る。そして弾丸を込めたライフルを構え・・・、

パンツ！！

撃つ。

「あ、すごい真ん中に当たてる」

双眼鏡を覗いてみていた部員はたまにはこんなこともあるのだろう、  
と思い普通に話した。そんなことをしているうちに、

パンツ！また、銀次が撃つ。

「え・・・？また・・・真ん中？」

そんな・・・、と思うも

パンツ！ガシャツ、パンツ！ガシャツ、パンツ！ガシャツパンツ！  
ガシャ、

次々と放たれる弾丸。そして弾丸は先ほどは違い次々とのど真ん中に吸い込まれ、段々とその範囲も広げていく。三十発撃ち終わった後には的の中心に3センチほどの穴が開いていた。ライフル射撃用の的は外側から1、2、3、4、5、6、7、8、9、と分かれ

ており真ん中の 部分が10点として扱われる。だが銀次の的はその10点の部分が完全に無くなり、九の部分もほとんど残っていない状況だ・・・芹沢がどのような好成績を残そうと絶対に勝てないぐらいの成績だ。

「んじゃ、残りの10発は中心でも撃つか」

そう言いなり、銀次は残りの弾丸を宙に放り投げ、

「フッ！」

パンッ！ガシャッ、パンッ！ガシャッ、パンッ！ガシャ、

弾丸を連続で十発。撃つたらずぐに宙に浮いている次の弾丸を掴み装填 撃つと連続で行う。この技術は本来弾倉で行うための技術なのだが、今回は弾丸がバラなのでそれを空中で一発ずつ掴み撃つ。弾丸は的の真ん中に空いている穴に吸い込まれてゆき、

「全弾命中・・・今のだけでも100点だな」

「さすがは銀次さんだ。私ですら難しいことをなんなくしてしまうとは」

「よく言うぜ。射撃に関しては俺より上なクセ」それは銀次さんが遊び過ぎだからだと思っよ？『接待好き』さん？」・・・言い返せねえ」

確かに、こういう勝負事になると遊んでしまう癖が自分にあるのは銀次も自覚している。だが、最終的には勝てるので今まで気にしたことはないが・・・。



だまだ序の口・・・パクパクと餡蜜を食べる姿を見て店員が『なにこの人怖いんですけど』という視線を向ける。

「・・・本当によくそんなの食べれるね・・・」

真名は渋い顔をしながらお茶を飲む。実は先ほどあまりに平然と食べる銀次にちよつとした好奇心が湧き・・・クリーム部分だけをほんの少し・・・小指の爪程度を貰ったのだが・・・あまりの甘さに悶絶してしまつたところだ。今飲んでるお茶もすでに3杯目なのがまつたく持つて口内の甘さが取れないという事体に陥っている。先ほど頼んだ餡蜜が目の前に置いてあるが今はまだ食べる気がしない。

「俺にとっては全然甘くねんだが・・・あ、すまないけどコレと一緒なのモウーっ」

「え？・・・わ、わかりました（いったいどういう味覚してるんだろ？・・・？）」

店員は顔を引きつらせながら厨房へと入っていった・・・その際厨房から悲鳴が聞こえてきたのは気のせいだろう。

「ふう・・・それで？真名・・・お前さんアイツのことはいいのかい？」

「アイツって・・・誰のことだい？」

「芹沢だよ芹沢・・・あいつ、お前に完全に惚れてたぞ？」

原作では登場回数が少なかつたため正直あまり覚えていない銀次だ



が、芹沢が真名に惚れているのはよく覚えている。また真名も軽くではあるが、昔のパートナーの面影で重ねたりしていたりしているのを銀次は思い出していた。

それを聞いた真名はこれまたきよとんとした顔になり、クスリと笑う。

「銀次さん・・・確かに彼が私に惚れているのは最近気付いたさ・・・もう少し前の私ならもしかしたら・・・付き合ってたかもしれないね」

やはり惚れていたのか・・・。と思いながら真名のお話を聞く銀次。そんなことを思っているだけでも、と真名がさらに続ける。

「でも・・・今は私は『素適な男性』に出会ったからね。彼には石ころほどの興味もないよ」

「ほ、そいつは・・・」

やはり原作とかなりかけ離れているな・・・。と思いながら銀次は考える。

「（まあ・・・多少原作と違おうと構わんよ・・・何せ超が擬似虚刀だったり・・・『アイツ』に会ったんだ、いまさら多少のことは驚きはしない・・・それよりも）それで？その相手は誰なんだ？」

『アイツ』・・・まあ、その内登場させる予定だからそれまでのお楽しみにしていて欲しい。それはさておき銀次はその相手が誰かと気になり改めて真名に聞いてみるが・・・、

「そうだね・・・（銀次さんなんだけど・・・まあちよつと焦らす

のも楽しいだろうね）自分で考えてみなよ銀次さん」

「ああ？いいじゃねえか少しぐらい・・・まあ、別にいいけどよ」

「・・・もう少し粘ってみてもいいんじゃないかな？」

餡蜜が来たからコッチが重要、と言わんばかりに銀次は餡蜜へとパクつく。真名は呆れたような顔をしながらも餡蜜にパクつく銀次を見てクスリと笑う。

「んあ？なんだよ真名。俺の顔に何か付いてたか？」

「ん？・・・いやなに・・・何でもないよ」

「？変な真名・・・」

訝しげに真名の顔を見る銀次だが、まあいいやとまた餡蜜にパクつく。

「（フフ・・・、もう私はこの人に完全に魅了されているね・・・悪いけど芹沢部長、あなたのことは綺麗サツパリ忘れてただの赤の他人だよ。私が心から思う人は・・・この人、桐野銀次だけさ）」

目の前にいる銀次に真名は心の中でさらにその思いを堅く、決意した。

〃〃次の日〃〃

「ふふふ・・・やっと・・・やっと拙者の番でござる!!」

「ふわア・・・まあ、適当にやるか」

鈴、真名と二人の部活動参観が終り、最後に残されたのは言わずと知れた楓である。楓にとっては待ちにまつた銀次とのデート・・・もとい部活動参観である。気合の入用がハンパない。懐の中にはどこに行くかなどの予定がぎっしりと書かれている。

「ま、お手柔らかに頼むよ楓」

「大丈夫でござるよ!!」

楓の気合の入用に銀次は多少の苦笑いを含めながら見る。昔からそうだが、楓が気合を入れると必ずと言っていいほど銀次が巻き込まれる。最初こそ疲弊してしまうことが多かったが、人間慣れるものである。それ以降は大体のことを苦笑いで済ますことができるほどまで銀次は成長していた・・・喜んでいいんだか悲しんでいいんだかわからないが、銀次は楓が喜んでいるならそれでいいので多分喜んでいいだろう。

「それでは行くでござるよ銀次殿!!」

「はいはい落ち着けよ・・・」

楓に腕を引かれながら、銀次は部活動参観最終日を迎える。

はたしてどうなることやら・・・？

〳〵麻帆良第一公園〳〵

麻帆良はその広大な土地なためか公園があちこちに点在している。さんぽ部に所属した楓は、どこの公園がいいか？などの情報をくまなくリサーチしたためそこらへんは問題はない・・・のだが、

「ん・・・？おう、睡蓮じゃないか。こんなところで何をやってんだ」

「む・・・あなたこそ何をしているのですか銀次」

公園に入ってすぐ近くにあるベンチ・・・そこに座りお茶を飲んでいる少女がいた。桐野邸最強の一角を担う変体刀巫女刀・睡蓮だ。銀次とはときたま事件を起したり、邪な気配を感じるということでよく蹴ったりしている変体刀でもある。

勿論、楓にとってはつまらない。何せ普段から巫女服を着て楓以上のプロモーションを持っている睡蓮・・・警戒しなければいけない相手である。だが、肝心の銀次はそれに気付かないし睡蓮のことは『ちよつと好きなタイプな仲間』という認識なため、特に特別な関係に進展するとは思えないが・・・それは話の進み具合で決まるだろう。

さて、その睡蓮。銀次が楓を連れて歩いているのに気付くと眉を顰める。

「・・・銀次、楓を連れて公園などに行きたい何のようですか？」

「ああ？・・・ああ、アレだよ部活動参観とかいうモノがあつてな・・・俺はコイツの親代わりで参加しているんだ・・・そういう睡蓮は何をしてるんだ？」

「私はいつもの通り見回りです」

睡蓮は巫女という特性もあつてか、神事にまつわる全ての業に通じており、普段は神社で仕事をしたり街中を回って悪霊、怨霊、多くの人、モノが集まって出来る穢れといった何かしらの悪い影響を与えるモノのお祓い、または魑魅魍魎の退治など所謂ゴーストスイーパー（ようはオバケ退治）のような仕事をしている・・・今回は後半の内容に当るのだろう。銀次もそのことを知っていたためふくと気の無い返事をする。そんな会話をしていると、

「睡蓮さ〜ん、お団子買ってきましたよ〜・・・って、銀次さんどうしたんですか？」

「おう、紗夜元氣そうだな」

紗夜・・・と呼ばれる少女。青みがかつた白い長髪に赤い瞳を持つた色白の小柄な少女のような外見をしている少女で、白い模様が入った黒装束・・・簡単に言えば黒巫女服を着ている。睡蓮の紅白の標準的（というには腋が開いているが・・・）な巫女服とは色が違うため並ぶとなんだが目立つ。

おそらくわかった人もいると思うだろうが、一応言っておこう・・・この少女、かの3-Aの出席番号一番・相坂さよその人だ。なぜ彼

女がこのような処にいてこのような服装をしているかと言うと、これには睡蓮が深く関わっている。

先ほども言ったとおり睡蓮は街中を歩いてゴーストスイーパーのよくなことをしており、よく悪霊や怨霊を浄化させている。そして睡蓮がこちらに呼び出されたある日、偶然にも散策していた睡蓮がさよを見つけたのだ。悪霊が怨霊ならそのまま滅することも出来たのだが、60年近く自縛霊でありながら恨みや憎しみがまったくなく、さらに肝心の本人がなぜ60年も自縛霊をやっているのかさえわからず滅することも放置することも出来ずに悩んでいた睡蓮なのだが、ふと、あることを思いついた。

『式神になってみないか？』

60年。孤独を味わい、誰一人として見向きもしてくれなかったさよにとつてこの言葉はまさに最初で最後のチャンスと言えただろう。もう一度生きたい、と願った彼女は睡蓮の式神・紗夜として現世にまた足を踏みしめることになった。

その後は狂に頼んで外も中身もすべて人間同様の寄り代を作ってもらい、睡蓮の術によって魂をつなぎ合わせて、最後に式神になるための式を組み込み、これにより本当の式神としてこの世に甦った。

「（最初見たときは本当驚いたもんだな・・・）」

いくらいろんなことが変わっていようと驚かないようにしよう、と決心した矢先に現れた式神・紗夜。いつかは出会うだろうと思っていたがまさかこんなところで出会うとは・・・真庭蝙蝠の言葉を借りるわけではないが、ビックリ仰天というのを味わった。余談だが

この際飲んでいたお茶を驚愕で噴出してしまい、女刀・侍に引っ掛けてしまいとてつもなく『いい笑顔』で銃剣を刺されたことがあるとかどうか……。

まあ、とにかく相坂さよは式神・紗夜として新たな道を進み、睡蓮からの厳しい訓練や礼儀作法を受けるも新たな人生（式神生？）を謳歌している。

「……」

そんな銀次と睡蓮、紗夜の三人が楽しそうに話している（ように見える）楓は頬を膨らませていた。まあ、無理もない。二日間も鈴と真名に大事な銀次との時間を取られた上に、楓にとっては危険人物である睡蓮となにやら話し込んでいる。これが面白いわけがない。

「……銀次殿！！次に行くでござるよ次！！」

「は？次ってまだほとんどここ回って、いててッ！！ちよ、ばっ、肘の関節が極まってるって！！」

肘関節を折れるか折れないかギリギリのところまで極められながら、銀次は楓に引っ張られながら公園を出た。

「楓は何をあなたに怒っていたのでしょうか……？」

「（あ、やっぱりこの人鈍感なんだ）さあなんででしょうね」

紗夜は自分の主が鈍感だと改めて思いながら、手に持った団子をパクついた。

~~~~しばらくして~~~~

睡蓮たちと別れたあと、銀次は楓に連れられ適当な広場へと向かった。この広場もそれなりに有名で、楓が銀次と一緒に来たいと思っていた場所だ。

「……」

「そんなに怒るなよ楓」

先ほどからなぜ怒ってるかわからない銀次。でも楓が不機嫌なのはわかってるので何とかなだめようとする。

「……てか、いったい何でそんなに怒ってんだ？」

「……自分の胸に手を当てて考えるでござるよ」

それを言われても頭上に？マークを浮かべる銀次。それを見て若干さらに不機嫌になる楓。これ以上不機嫌になっても困ると思った銀次は、

「そう怒るなよ……ほら、クレープ屋があるからクレープでも買って喰おうぜ」

たまたま目の端に入ったクレープ屋を見て、銀次はとにかく機嫌を取ろうとする。楓はフンツといった風にクレープ屋のほうに視線を動かせ、

「フンツそんなクレープ如きで拙者の……ッ」

クレープ屋のメニューが書かれた看板。そこにあるメニューの一つに楓の視線が止まる。

『新商品！！たっぷりクリーム入りプリンクレープ！！』

「・・・」

ゴクリツと、楓の喉が鳴るのを見逃さなかった銀次。

「数分後」

「えへへ〜美味しいでござる」

「そいつはよかったな（やっぱり・・・こいうところは単純だな）」

手に持ったプリンクレープを幸せそうに頬張りながら食べる楓を単純と思いつつながらチョコバナナクレープを頬張る銀次。着物を着て不健康そうな顔をした男がクレープを食べる・・・ちよつとばかりシニールな光景である。

「（まあ、楓の機嫌が直ったからいいか）」

以前、任務で三週間ほど楓を放置したことがある。いつもは任務が終わったらすぐに会いに行き楓の無事を確認するところなのだが、任務がきつ過ぎてそのまま布団も敷かず寝てしまい、楓を放ったらかしにした・・・その次の日の朝、楓に会おうと長瀬家に行ったのだが・・・、

『グスツ・・・銀次殿が拙者を見捨てたでござる・・・』

と、これでもか！と言うほどの負のオーラ（もとい瘴気）を長瀬家全体に撒き散らしながら楓が落ち込んでおり、長瀬家両親もどうにもすることができなかった・・・最終的に銀次が一ヶ月稽古の時も飯のときも一緒にいることで何とかいつもどおりになった・・・その際の周りの視線が痛くて堪らなかったと後に銀次がボヤいていたとか。

余談だが、これが原因で楓の父親である長瀬隼人が楓を麻帆良に行かせようと硬く決意したとかどうか・・・まあ、結局のところ銀次が着いて行くことになったが。

「（むふふ）、先ほどは邪魔が入ったでござるが・・・やっと二人つきりでござる）」

楓は本当に心の底から嬉しそうにプリンクレープを頬張る。プリンの独特なプルンツとした食感とクリームの甘さが見事にマッチしてなんとも言えない美味な物になっている。さらに横には銀次・・・最早楓にとってはこれ以上ない幸せだろう。さらに、

「んあ？楓、お前口の端にクリームついてるぞ」

幸せそうにクレープを食べていたせいか、楓の口の端にはクリームが付いてしまったようだ。銀次はそれを指で掬う・・・それを楓は見逃さなかった。

パクツ、

「・・・」

「ンツ（えへへ）」

銀次のクリームが付いた指に楓が啜える。銀次は銀次で「何やってんのコイツ?」と思いながらそれを見るだけだ。ふと、銀次はまさかと思い、

「あゝ・・・楓。いくら猯が毎日俺の体に噛み付いてるからって決して旨いわけではないぞ・・・?」

猯に毎日噛まれてるためか、銀次は楓も同じようなことをしていると勘違いする。

「・・・（ガリッ!）」

「いてててっ!!歯が刺さってる歯が刺さってる!!剣士・・・じやなかつた犬歯が刺さってる!!」

ここまでしたのに・・・、と思いながら楓は犬歯を銀次の指に食い込ませる。猯のに比べれば全然痛くはないが、やはり痛いものは痛い。噛み付いている楓の頭を空いている方の手で押す。しばらくはそのままの状態が続いたが、数分して楓がようやく離し銀次は噛まれた指を撫でる。

「いてて・・・なぜに歯を立てるかなお前は・・・」

「乙女心がわからないからでござる」

「いや、乙女はこういうことはしな」それでは拙者が乙女ではない

ということでござるか?」「いや、そういう意味では決して……だから落ち込まなくて!」

落ち込む楓に宥める銀次……その際の周りの目が銀次の胃袋を急速に攻撃したのは言うまでもない。

あれからしばらくして。何とか楓を宥めた銀次は機嫌が直った楓に連れられ世界樹の下まで連れてこられた。

「……それで?ここが最後のお前のお勧めスポット……と?」

日がちょうど地平線に沈む夕刻。辺りには人はまったくいない。普段ならもう少しいるのだが……今はいない。それに不思議に思う銀次だが、まあいいだろうというものめんどくさがりのせいで考えるのを止める……これに銀次の親友が深く関わっているのだが……今は関係ないので省く。

「正確にはこの上……でござる」

そんな銀次を見ながらニコニコと微笑む楓は自身の頭上……正確には世界樹の上のほうを指す。銀次ははあ?と思いつながら楓が指差した方向を見る。

「この上って……あれか?上っていけてことか?」

「その通りでござるよ。だから・・・」

楓はいきなり銀次の首に腕を巻き付ける。それをされた銀次はきよとんと・・・というよりウンザリした顔になる。

「まさか・・・あれで”で昇れってか？」

「その”まさか”である」

どうしようかと・・・と悩んだ銀次だが、まあ回りに誰もいないしいいか。と言ってそのまま片手を楓の膝裏に伸ばし

ヒョイツ

抱える。所謂横抱き、もつとわかりやすく言えばお姫様抱っこ。銀次はよくわからないが女性がこれをやれると嬉しいとかいう情報を過去に聞いたことがあり以前里にいたころ、面白半分で楓にしたらかなり喜ばれた・・・その際『ああ・・・遂に拙者も・・・』と楓がトリップしたらしいが・・・銀次は寒気がただけでそれ以外は感じる事ができなかった。それ以降、何かと楓はこの横抱きを要求することがありそのたびに銀次がしたのだ・・・最近ではなにやら人が増えたためできる回数も減ったらしいが。

「それじゃあ行くか・・・案内頼むぞ」

「あいあい、了解でござる」

そういつて銀次は・・・『飛んだ』

『忍法足軽』真庭忍軍十二頭領虫組が一人『無重の蝶々』こと真庭蝶々が使った忍法だ。重力を無視することができる忍法でどんな重いものでも持てるし、どんな細い枝でも十分足場にすることができ
る忍法・・・まあ、正確には歩法だが・・・これは銀次もよく使う忍法の一つだ。特に奪還任務などのときはこれを多用して盗まれた物がどんな大きなものでも持ち帰れたからだ。さらに攻撃を当てようにもその前に起こる風圧で銀次自身が飛んでしまい当たらないという
ことになってしまふ。捕まれない限り攻撃を当てられない・・・まあ奪還対象に当たってしまふとアウトだが。

「しかしズルイでござるよな・・・この忍法足軽」

「まあな・・・でもようはただの歩法だからな習得すればそうでもない」

木に付いた傷や細枝に足を乗せひよひよいと登る銀次を羨ましそうに見る楓。楓も木を駆け上ることぐらい造作もないのだが・・・それとて気を使って初めてできることだ。生身のままでよくて世界樹の真ん中あたりだろう。銀次は楓の羨ましがる視線を苦笑いしながら見る。

「む・・・そういつて習得させてくれないくせに・・・あ、ここでいじめるよ」

楓が頬を膨らませてる。そう銀次は楓に真庭忍法を教えていない。いや、見せてはいるが習得はさせないようにしているのだ・・・特に記録巡りなどを覚えさせて毒刀・鍔を持たせた日には・・・考えただけで恐ろしい。

そんなやり取りをしているとどうやら目的地に着いたらしく、銀次は楓が指定した枝の上に乗る。銀次は改めて場所を確認する。別段変わったことのないただの木の枝だ。強いて言うなら人が一人座れるぐらいの広さはある。

「・・・別段変わったようなモンはないが・・・ここにいたい・・・ッ」

そこまで言っつて、銀次は言葉を飲み込んだ。

銀次の目の前に広がっていたのは夕日で紅く染まった空、

そしてその夕日に照らされ光と影の芸術となる異国情緒溢れた麻帆良の街、

「綺麗・・・だな」

思わず、口から漏れる。銀次は心の底からその言葉が出た。

「ふふ・・・やはり銀次殿はそういうと思ったでござるよ」

いまだ横抱きをしている楓が夕日に照らされる麻帆良を見て感動している銀次に微笑みながら話しかける。銀次がこのように綺麗、と自然に思うことを楓は理解していた。里でも川や山の中で美しい場所を探すのが好きで、中には里の者も知らないような美しい鍾乳洞なども見つけたぐらいだ。そういう場所を見つける度に、銀次は楓

を連れて行った。ちょうど今みたいに横抱きをしながら――

「ッ」

フ、と楓の顔を見た。そして一瞬・・・見惚れてしまった。夕日が照らす楓のその顔に・・・普段は開いてるかどうかもわからない細目を開け、こちらを見る楓・・・銀次は素直に綺麗だと思った。

「ん？どうしたでござるか銀次殿？」

「あ、いや・・・なんでもない。それより座るか」

銀次は慌てて楓から目を逸らし木の枝に座り幹に背中を預けるように座る。楓は開いたスペースに腰を下ろし銀次にもたれ掛かるように座る。その際忍法足軽も解いてしまったので枝に座った時の反発などで肝を冷やすが、枝自体がかなり太いため折れはしないだろう。肝を冷やした後、銀次はまた夕日を見ることにした。

「・・・綺麗だ」

改めて思う。綺麗、としか言っていないが本当に綺麗なモノには綺麗以外の言葉は出ないものだ。そんな風に見惚れていると、「コテンツと銀次の胸に軽い振動が起こる。なんだろうか？と思いと見ると、

「ん？・・・っておい楓」

「・・・」

振動の正体・・・楓が銀次の胸に頭を当ててきたのだ。何をやっているんだ？と思いを掛けるも、どうやら寝てしまったらしい。

「（疲れたのか？まああんだけ元気にはしゃげばな・・・）それにしても・・・」

こいつも綺麗になったもんだ・・・、と銀次は改めて思った。

「（ほんの数年前までは俺の後ろをヨチヨチ歩きで必死に歩いていたら小さいガキだったのに・・・今では中学生とは思えないぐらいの立派になりやがって・・・）」

おそらく、楓はあと十年・・・いや五年もすればさらに綺麗になるだろう。今でもこれなのだすぐに男が食いついてくる。楓のことだから変な男にくっつくことはないだろう・・・むしろくっついてきたら銀次が斬り殺すだろう。

「（まあ・・・相手が誰であれ）・・・楓が幸せなら・・・俺はそれでいい」

サラサラと、自分の胸に頭を押し付け寝る楓の髪を撫でる。昔も、このように自分の腕の中で寝た楓の髪を撫でていた。そうすると楓が喜んだからだ。そうすると銀次も嬉しくなる。しかし・・・いまの銀次の表情はどこか悲しげで・・・されども決意したような顔で呟く。

「楓を幸せにすることが・・・俺にとっての『償い』だ」

〃〃 楓 side 〃〃

「楓を幸せにすることが・・・俺にとっての『償い』だ」

「（・・・ッ）」

銀次の呟きに楓は息を呑む。実のところ、楓は寝てなどいなかった。普段真名や鈴といった銀次に好意を持っている人間が近くに居るため、このように甘えるようなことが出来ないうたためこうして改めてしているのだが・・・そして銀次の呟きを聞いてしまった。

「（『償い』・・・銀次殿はやはりまだ『あの事件』のことを・・・）」

『あの事件』・・・実のところ楓も全貌は知らない。いや、知らされていないと言うべきだろう。誰に聞いても『知らない』だの『知らなくていい』と言って教えないのだ。ゆえに楓が知っている事件とは銀次が作り上げた変体刀で暴走して、銀次が楓を傷つけてしまった事件・・・そして、今の銀次の思想ができたと言っても過言ではない事件。そして、銀次がすべてを捨て大切な者を守ると決めた事件。

「（拙者はもう気にしていないのに・・・銀次殿はまだ気にしてるでいじめる・・・）」

すべてのことを捨て、

ただただ大切な人を守る為に技を磨き、

大切な者を守るということで数多くの人間を殺し、

どのような状況に陥っても大切な者だけは助けられるようにとその身を傷つけ、

そして・・・大切な者を守る為にその人生を費やそうとする。

「(ははっ・・・もしかしたら拙者・・・銀次殿の重しになってるだけではござらぬか?)」

楓は心の中で自嘲気味に笑った。こちらはこんなにも思っているのに・・・もしかしたら重しになってるだけかもしれない。それでも・・・それでも楓は、

「(それでも・・・拙者は銀次殿のことがどうしようもなく好きでいじめる・・・)」

物心付いた頃から一緒にいる銀次、

初めて料理を作って失敗しても苦笑いしながらも「うまい」といって食べてくれた銀次、

修行のときも一緒に居てくれた銀次、

怪我したり病気に罹^{かか}ったりしたときに必ず付きっ切りで看護してくれた銀次、

危機が迫るとその身を張って守ってくれた銀次・・・、

我侭なことだとはわかつている。銀次にとって自分自身が重しになっ
ているのもわかつている・・・でも、それでも、楓は銀次が好き
で好きでたまらないのだ。

男を愛してやまない少女。されども男はそれに気付かない。それが
少女を焦がれさせてることを。

少女を守り抜こうとする男。されども男は気付かない。それが少女
にとって重しになっていることを。

二人の思いが交わるのは・・・いつ？

第三十話（後書き）

・・・うん、まあ、最後らへん？ちよつとやつちまった感はある・
・だが後悔はしない！！だってこうしたほうが銀次と楓の過去にさ
らに謎がでるから！！

まあ、つうわけであともうちよいしたら銀次と楓の過去が明らかに
なりますのでお楽しみに！！

次回予告

春休みも終り、平和な生活をした桐野邸・・・だが、それもそれま
でだった。

「吸血鬼事件・・・ああ、金髪幼女が引き起こす事件だろう」

原作通りだと思っていた銀次・・・だが、初めて己がイレギヤラー
だと気付かされた。

「桐野銀次さん・・・正義として・・・僕はあなたを倒します！！」

「・・・はあ？」

乙ご期待!!

最後に変体刀の案を下さったふかやんさん、パルパレーパさん、ありがとうございます。

第三十一話（前書き）

だんだん原作が壊れるのを感じつつさらに壊そうと思っている銀閣です。

え、どうも皆さん銀閣です。ぶっちゃけ聞きます・・・ネギ殺つてもいいですか？アイツ楓と一緒に風呂に入ってるのか・・・ありえねえ・・・教師なのにありえねえ・・・イギリス紳士に謝りやがれ・・・。

とまあ、私の負の心をさらけ出すのはここまでにして・・・今回から吸血鬼編です。でもぶっちゃけオリジナル編が発生するかもしれません。

それでもいいと言う方はどうぞ！！

第三十一話

春休みが明け、楓たちも三年生になった。

それと同時に麻帆良の学生寮である噂が流れる・・・その噂とは・・・？

「『怪奇！！桜並木の吸血鬼！！』・・・へく、最近の金髪幼女も大変なんだな」

「だ・れ・が！！金髪幼女だ！！」

桐野邸の縁側。こここの家主である桐野銀次は麻帆良新聞と言う学生が書いているいま流行の話題や噂をネタにする新聞を読みながら茶を啜る。その横には金髪幼女もといエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルがいた。

なぜか知らないが、最近エヴァは桐野邸に入り浸ることが多い。なぜ？と以前聞いてみたら、

『この茶が中々旨いからだ！！』

何でも以前女刀・侍が茶々丸とが食事について色々教えあっていたとき、たまたま女刀が持ってきていた茶葉を使い玉露を入れた。

『ぐはっ！！こ、この玉露は・・・！！』

普段からそれなりの名のある玉露を飲んでいるエヴァにとって、この玉露は今まで飲んできた中で一番だとエヴァは確信した。喉に残

るほのかな甘み、だがそれで茶独特の渋さもかもし出しまさにお茶と言つのを体現した物といつてもいい。

その茶葉をどこで手に入れた？とエヴァは女刀に聞くと、

『桐野邸の地下にある変体刀、隔刀・界で取りました』

隔刀・界 結界系変体刀の一種で全長15cmほどの水晶球の中に別の世界を構築する事が出来る変体刀だ。設定は使用者が望むと変わるようになってるが、銀次はこれを出した当初春夏秋冬にあつた四つのエリアを作り、それぞれに最適な環境を作つた。しかし、その後そのまま放置してしまつたためまったく手をつけなかつたのと、狂が作つた某グルメ漫画や某狩猟ゲームのモンスターを面白半分で放り込んでしまい繁殖。よほどのフル装備が実力がないと入れないような魔境と化してしまつた地域もある。普段は生物変体刀なんかが好き勝手に走り回つたり新たな食材を作ろうとする変体刀が畑を耕したりしている・・・のだが、なぜかこの隔刀の中で作つた食材はすべてが規格外なほどの大きさになり、例を挙げるとスイカのようなトマト、大根の大きさのニンジンなどと大きくなる。しかし、その味は外で育てられた野菜や果物とは比較にならないほど旨い。

あと以前銀次が畑を作ろうといつて一部の土地を少しだけ耕し種を撒いたものの・・・多忙になりそのまま放置。他の変体刀も耕すわけもなく放つて置いたら・・・現実ではありえないような野菜や果物がなつていらしい・・・。

エヴァはその説明を聞いたとき、あまりの規格外なことに『それは最早刀ではない』と呆れたようにツツコンだ。まあ、戦つたからこ

そわかることもあり、変体刀が現実ではありえないような物だとはすでに知っていたためそこまで驚くことはなかったのだが・・・魔法球と似たような物なのに出入り自由、さらには一日隔刀の世界にいても外では一秒しかたっていない、さらに隔刀で一日過ごしても外にできれば一日とカウントされない。つまり年を取らないのだ。さらに、エヴァがここに来る理由にはもう一つある。それは・・・、

「それと桐野・・・『羅針』はどこにいるか知ってるか？」

「羅針？・・・図書館島にいるんじゃないか？」

エヴァの探し人を聞いて銀次は呆れたように返す。エヴァの探し人・・・もとい探し刀は変体刀である時刻刀・羅針だ。

時刻刀・羅針 『時刻を表す刀』に主眼を置いた刀で外見は二十歳前後の長身の男だ。以前のネギたちの図書館島不法侵入の嫌がらせを、と思った銀次は羅針を図書館島の門番として置いた。以来、図書館島に入るにはこの門番にちゃんと学生手帳や身分証明証を見せないと絶対に入れない、さらに言ってしまうえば入るのに三十分掛かると早く図書館島を解明したい図書館島探検部の学生にとっては難関な存在となった・・・この門番を無視すると少なくとも三ヶ月はトラウマで本すら見るのがダメになってしまう。

そんな羅針の限定奥義・・・『時越え』エヴァが羅針を求む理由だ。この時越えは時間操作系の限定奥義で世界の時間を止めることもできれば誰か個人の時間を止めることもできる。別段それだけならどうと言うこともないのだが・・・羅針はそれだけではない。『個

人の時間を遅延させることも』できるのだ。

つまり、タカミチをさらにおっさんにしたり、子供にしたり、学園長をさらにぬらりひよんにしたり若かりし頃にしたりと時間を戻すのに関しては一日一回と限定されているが進めるのは何回でもできる。しかも、だ。この限定奥義『時越え』、なんと不老不死にも作用する。

つまり十歳の体で時間が止まっているエヴァの肉体も変えることができるのだ。以前、それを聞いたエヴァが羅針に頼み込み早速時間を進めてもらい、

『おお・・・おお・・・！！魔法薬も幻術も使っていないのに二十歳の肉体が・・・！！』

鏡の前で自分の体をぺちぺち叩きながら今にも叫びそうな勢いで確認していた。茶々丸はそれをハアハア言わせながら録画して、たま居合わせていた銀次は『ほう・・・なかなか』といった瞬間、真名、鈴にとつてもない殺気と拳撃を加えられた。だが、いつもまでもそうしておくわけにも行かないということとで元に戻した・・・その際のエヴァの落ち込み方がハンパなかったのは言うまでもない。以来、エヴァは羅針を探すのに時間を裂き、特に最近は何ギの授業の時間がそれに当る。

「そうか・・・己あいつめ・・・どこにいったのだ。今度の休日にあの姿で買い物でもしようかと思ったのに・・・」

「（本当は呼び出すこともできるけど・・・面白いからこのままでもいいや）それで？金髪吸血鬼幼女「貴様ア！！いい加減にしろ！！私は幼女ではない！！」はいはい、それで？お前は何でこんなことしてらわけ？」

エヴァのツツコミを物ともせず、銀次は手に持った麻帆良新聞をバサツと叩いた。そこには先ほど銀次が読み上げた文字『怪奇！！桜並木の吸血鬼！！』というタイトルがデカデカと書かれているのだ。エヴァはふん、と鼻を鳴らしながらそっぽを向く。

「ふん、吸血鬼が血を吸って何か問題でもあるか？」

「あ、否定はしないのな……。いや、ぶっちゃけ楓や真名や鈴といった仲間内以外なら別にいいんだけどな」

あまりにもあつさり肯定するエヴァに驚きながら、ちゃっかり他の人間を見捨てる銀次。一応教師陣にもそれなりに懇意にしている人物もいるのだが……。そいつらなら大丈夫だろうと思いつ定には入っていない。それに銀次はエヴァの吸血活動を否定しようとは思わない。それが生命維持に必要なことならなおのことだ。

三人の名前が出た瞬間、エヴァはやはりなといった顔でこちらを見る。

「貴様酷いものだな。そこは普通全員と言つべきじゃないか？」

「警官や自衛官にでもなつていたらそう言つただろうな。でも生憎と俺は忍者であり剣士だ……。俺は俺の刀の届く範囲の仲間しか守らねえよ」

「くくつ……。貴様らしい答えだな……。まあ、いい。特別だ茶葉を引き換えに情報をくれてやろう」

「随分と安いなおい」

クソジジイから頼まれたようなものだからな。とエヴァは話す。銀

次はああ、なるほどと言って納得する。学園結界と登校地獄という縛りが無くなったエヴァにとって正直さっさと出て行ってもいいのだが、学園長が何とか頼み込んで今の3-Aが卒業するまでという条件付きで渋々了承した。そしてこういった頼み事も3-Aが絡んで初めて成立するという。つまり今回の事件も3-Aが絡んでいるということだ。

本来なら情報漏洩は出来ないのだが、エヴァにとっては知ったこっちゃないので銀次に今回のことを話す。

「なに、別段特別なものではないさ。何でもあの坊やを鍛えろといわれてな」

「坊や・・・？ああ、薬味のことが」

エヴァにとつて学園長も十分坊やの部類に入るので一瞬誰かと思っただが、そういえばこの前ネギのことを

坊やと呼んでいたな思い出した銀次は納得する。そして同時に疑問が浮かぶ。

「しかし・・・お前さんもよく引き受けたな。少し前ならサウザントマスターの息子の血で魔力を取り戻すためだ〜！とか言って自主的にやるとは思ってたんだが・・・」

「うっ・・・ま、まあ昔ならな・・・だが！今は！違う！！私は全盛期の魔力が戻ったからな！！そんな必要はない！！」

「なら何でまたそんなことしてるわけ？」

バーンツと縁側に立つエヴァ。縁側汚すんじゃないやねえぞと心の中で思いながら銀次はエヴァを見る。魔力が戻った今、エヴァにとってネ

ギなんかはただの仇敵の息子……、

「ああ、なるほど……仇敵の息子があまりにも似ているからこれを気に鬱憤を晴らそうと……そういうわけか」

「ああ、その通りだ」

ストンツ、とまた縁側に座るエヴァ。なるほど、と言って銀次も納得する。確かに好意を寄せていた相手の息子とはいえ、十五年も放置していた相手にソックリの息子……誰だつて憂さを晴らしたくなると言つものだ。

銀次は呑んでいた茶をおき、エヴァに忠告する。

「まあ、俺達に迷惑掛けなきゃ何したつて構わないさ」

「決まつてる。お前達に变に迷惑掛けるとこちらの命が危ないからな……それよりも茶葉を寄越せ茶葉を」

「はいはい……おい、女刀！金髪吸血鬼幼女に茶葉くれてやれ！！！」

「だ・れ・が！！金髪吸血鬼幼女だ！！貴様いい加減にしろ！！もう一度それを言ってみる……私の断罪の剣が貴様を叩ツ斬つて「金髪吸血鬼幼女」うがー！！！！」

断罪の剣ではなく大口を開け、両手を広げ銀次に掴み掛かるエヴァ。銀次はそれをもとめせずひよいひよいと避ける。

「銀次様茶葉をお持ち……何をしてらっしゃるんですか？」

茶葉の入った箱を持ってきた女刀は目の前で暴れてる二人を呆れるように見ながらその場に立つ。

「ケケケ、相変わらず仲のいいこった」

そこに地下室から出てきたのだろう、一人の少女・・・茶々丸を幼くしたような少女が両腰にククリ刀をぶら下げ立っていた。ならば茶々丸では？と思うのだが、

「あら、玉露じゃない。どうしたの？」

「いや、なに・・・コイツラの練習に付き合っただけだよ」

「あつう・・・強いでござる」

「さすがはエヴァンジェリンの従者・・・全然齒が立たなかったよ」

玉露と呼ばれた少女は後ろに指を差す。そこには無表情で立ち人間・・・楓と真名を抱える茶々丸が立っていた。二人は呻き声をあげている。

玉露と呼ばれた少女はそれと一言いながら片手を振るう。

「それと俺のことは玉露じゃなくて前みたいに『チャチャゼロ』って呼んでくれよ・・・玉露はどくもしっくりこないんだ」

なんとこの少女、自らをあのエヴァンジェリンの従者チャチャゼロと言っただ。勿論これは嘘偽りはない。

擬似微刀・玉露 『人間らしさ』に主眼を置いた微刀・釵を基にし

たチャチャゼロを改造した変体刀なのだ。

チャチャゼロの最大の武器はその小柄な体躯での移動速度と異常に小回りが利く連続攻撃回数、小柄な体躯からは想像できない研ぎ澄まされた斬撃だ。それをさらに強化できるのでは？と思った銀次は考案に考案を重ね作り上げたのがこの擬似微刀・玉露だ。

『斬ることに特化した変体刀』を扱うことを前提に作られており、その両腰にぶら下げている二本のククリ刀も銀次が作った擬似変体刀『擬似斬刀・霞』をしようしている。体型が今年の麻帆良祭の時に登場したロリボディ茶々丸になったことで斬撃に重さも加わりチャチャゼロ時以上の攻撃が期待できる。また体術も使え、ある程度のスピードさえであればその四肢を鋭利な刀へと変えることができる。科学・魔法・変体刀の三種の技術が組み合わさった茶々丸以上のオーバーテクノロジーである。また、改造を施したこともあってか、以前のカタカナ喋りではなく普通の人間のように喋れるようになってる。

「そう、それはごめんなさいね・・・でも変体刀同士だとどうしても癖なもので・・・まあ、なんとかするわ」

「ああ、そうしてくれ。あとお茶くれよ」

「はいはい、楓と真名はしばらく立てそうにないから起きるまで待つとして・・・茶々丸さんもどう？一緒にお茶をしませんか？」

「あ、なら手伝います」

「あら、助かるわ。それじゃあ台所に行きましょう」

ぎゃんぎゃん騒ぐ主たちを放置して女刀と茶々丸はお茶を汲みに、

玉露もといチャチャゼロは居間にある机に肘をつき銀次とエヴァの幼稚な争いを眺め、体が動かない楓と真名は楽しそうに（見える）二人に殺気の籠った視線を送る。その光景を見てチャチャゼロは、

「ケケケ・・・平和だぜ」

「ウガアー！！！」

「ほれほれどうした金髪幼女」

「黙れロリコン！！！」

「んだとゴラ幼女！！だれがロリコンだ誰が！！！」

「貴様に決まっているだろうこのロリペドめ！！！」

「黙れ合法ロリ！！！」

「・・・ケケケケツ！！！！！」

チャチャゼロの口癖と言ってもいい奇妙な笑いが桐野邸に響き渡る。

今日の桐野邸も平和である。

〓〓翌日・麻帆良女子中教員室〓〓

「ふう〜・・・まあ、だいたいコレぐらいかな？」

エヴァが桐野邸に来た翌日の朝。麻帆良女子中の教員室に本作では初めてマトモな扱いをされるネギ・スプリングフィールドがいた。明日菜や木乃香といった生徒達となぜか一緒に登校して職員室にやってきたネギは自分の机に座り今日の授業に必要な物を用意した。ネギは準備をしながらそれよりも、と呟く。

「（長瀬さんや桐野さんは酷いよ。困ってる人がいるのに助けがないなんて・・・それどころか迷惑って言ったし）」

ネギはこの前の図書館島での言い争いを思い出す。ネギにはわからないが、自分達がしたことは一方的に呼び出しよくわからない処に連れ込もうとしたいいわば誘拐未遂のようなものだ。それに必死になつて勉強しているのにそれを邪魔したのなら誰だつて迷惑と思うのは極々当たり前だろう。しかし残念なことにネギにはそれが理解できないらしい。

「（あんな人たちが悪い人になるんだらうなあ・・・よし！！僕がなんとかして長瀬さんだけでもいい人にしてあげよう！！）おつとそろそろ教室にいかないと・・・」

残念ながらそのネギの決心は『はた迷惑』というモノだ。ネギは朝のHRのために教室へと走る。

「えと、あの今すぐ脱いで準備してください!!」

「くくくたばれクソガキ地に堕ちろ」「」

HRが終わった後、身体測定があるということまでネギが『自分の前で脱げ』発言をした瞬間に楓、真名、鈴は見事なまでに口を揃えて同じ罵倒をネギに浴びせた。

「まったく・・・あの薬味め、拙者の体を見ていいのは銀次殿だけでござると言うのに・・・いつそ殺してやろうか」

「まったくだね、あの薬味自分の年齢を利用して私達の裸を見ようなんて・・・PTAに訴えたら勝てるんじゃないか？」

「・・・未来でもスプリングフィールド家は女垂らしの家系だたヨ・・・やはり蛙の子は蛙・・・いやつ、たらしの祖先はたらしか」

楓のさらりと言った危ない発言はともかく、真名の発案は案外通るだろう。10歳とはいえ教師なのだ、間違いなく勝訴できる。鈴は未来のネギの子孫を思い出し、ネギをいまこの場で殺しておくかと正直に思ってしまったほどだ。

三人はブツクサと文句を言いながら着替えを始める。すると、楓たちからそう離れていないところで固まって着替えている処にいる柿崎が最近流れてる噂を話し出した。

「ねえねえみんな知ってる？桜並木の吸血鬼事件」

廊下にでていいのだろうか？
そんな疑問を頭に浮かべながら、楓たちはコッソリとエヴァに近づく。

「（エヴァ殿、今回の騒動エヴァ殿が起したのでござるか？）」

「（ん？ああ、そうだ。なにあの坊やを懲らしめてやるつもりってな）」

「（なるほど）」

「（いつそ殺していいネ）」

四人は小声で話す。しかし、これがいけなかった。

「（アレ・・・？エヴァンジェリンさんに・・・楓さん達だ・・・
なんであんなに固まって話してんだらろう？）」

保健室に向かう際、たまたま教室のほうをチラリと見たネギ。そこには楓たちが固まり話している。先ほどエヴァから変な視線を受けたのも気になるが・・・、

「（今はまき絵さんのほうが優先です！！）」

すぐさまその場から離れ、保健室へと向かった。

『ん？あれーアキラ、首に何か赤い斑点あるけど・・・どしたの？』

『ふえ！？え、えつと・・・な、何でもないよ？それよりもまき絵が心配だね！』

『うん？・・・何だろ釈然としないような・・・』

『（うう・・・紅玉さんのバカ・・・首筋に付けたらわかつちゃうよ・・・）』

・・・大河内アキラ。紅玉の魔の手に落ちたらしい。

～～夜・麻帆良学園～～

「ふわ・・・眠いな」

佐々木まき絵が倒れた夜。この日は銀次も学校の警備に当たっていた。いつもの忍び装束を身に纏い、手に持ったクナイを弄びながら欠伸をする。

「確かに暇でござるな」

「ここまで暇だと帰りたくなるね」

「確かにネ」

その後ろでは楓たちも暇そうに手に持った各々の武器を弄る・・・鈴は己自身が刀なため補助武器用の棒手裏剣をジャグリングしているが。

なぜここまで暇なのか？以前ならもつと敵が出てきても可笑しくな

いのだが・・・、

「・・・よくよく考えたら変体刀が何百人も警戒してる中、通り抜ける奴なんかいないよな普通・・・」

「確かに」「」

三人は銀次の意見に納得する。以前にも言ったと思うが今現在麻帆良の警備はほとんどが変体刀は請け負っている。森は勿論のこと山川、地下、空、建造物の中にいたるまで、様々な変体刀がそこかしこで警備をしている。しかも元々戦闘用に作られた連中で疲れも知らず、よほどのオーバーワークでもない限り壊れない、24時間365日昼夜問わずあちらこちらで獲物を待ち伏せしている変体刀達の防御網はまず破られない。もし通れたとしても全身傷だらけで満身創痍、すぐに仕留められる。無傷で通れるとしたら・・・同じ変体刀で最強の部類に入る連中か、銀次の父親ぐらいだろう。ただし周りが焦土と化している、というオマケ付だが。

「ま、何もしなくて金が手に入るならそれに越したことはねえわな」
欠伸をしながら言う銀次の意見に苦笑いしながら頷く楓と鈴。真名は傭兵生活が長かったので銀次の意見に激しく同意していた。

「よしっ、もうとっとと帰ってとっとと寝」あっ、どけ桐野!」
「っ、は?」

いきなりの怒声。何事かと思いきやそちらを向けば、

白く小さな足が綺麗に揃えられ銀次の顔面に迫ってきた。

「はっ！？ちよ、ま「ゲシッ！！」「ぐはっ！！」

「ぎ、銀次殿ー！！」

「銀次さん！！」

「大丈夫力！？」

「ふう、だから退けと言ったのに」

ドロップキックの要領で銀次の顔面を蹴り見事地面に着地したのは、我らが金髪吸血鬼幼女エヴァンジェリン・A・Kマクダウエルだ・
・しかもなぜか下着姿で。それを見た楓たちは銀次を蹴ったのと別のことで怒りを覚える。

「え、エヴァ殿！！銀次殿を蹴り飛ばしたと思ったらそのような格好・
・銀次殿を誑かすなど・
・絶対に許さないでござる！！」

「いや、誑かそうとも思わんわ！！」

「嘘を言うな！！ならばなぜ銀次さんの前にそんな姿で現れた！！
銀次さんを誘惑していいのは私だけだ！！」

「何を言ってるネ真名さん！！銀次さんを誘惑していいのは私だけ
ヨー！！」

「鈴も何を言ってるでござるか！！銀次殿を誘惑していいのは拙者だけでござる！！」

「ええい貴様ら落ち着け！！というよりお前らキャラが壊れてきてるぞ！！特に龍宮、貴様はもつとクールなキャラだったろうが！！」

暴走する三人娘に桐野は毎日こんな連中と一緒にいるのか・・・、と一種の尊敬の念を向ける。確かにこの三人が暴走しているのをたつた一人で止めている銀次はある意味凄いと思う。

そんな一種の感動を覚えていたエヴァの頭を、

グワシッ

「ぐ・・・てめえ、エヴァンジェリン・・・人の顔面にドロップキック加えるたあいい度胸だ！！お返しにその頭握りつぶしてやらあ！！」

「ぐのおおおおおおッ！！き、貴様、桐野！！指が、指が頭に食い込んでいるぞ・・・！！つていた！！貴様ア、爪を伸ばしたろう！！ええい引っ込めろ！！今すぐ引っ込めろ！！」

「うるせえ！！このまま頭粉碎してやる！！」

ぎちぎちと、相手の肉を筆り取ることができるとの握力で銀次はエヴァの頭にアイアンクロー（忍法爪合わせ併用）を食らわす。そんなことをしていると、

「待ちなさいエヴァンジェリンさん・・・つて、え！？き、桐野さん！？」

「ああ!?!?!あつ」

いきなり呼ばれ、イライラしながらそちらを振り向くと、

「え?え?何で桐野さんや楓さんたちがここに……?それにエヴァンジェリンさんをつまえて……えええ?」

「(あ、絶対に巻き込まれたなコレ……)」

さらにギリツとエヴァの頭を握る。エヴァはしばらく悶えていたが、グツと力を入れた。その一握りが止めになったのかコトリと動かなくなった。銀次はそのエヴァをポーンと放り捨てる。

「え、エヴァ殿……ふう、害悪は消え去ったでござる」

「だ・れ・が!!害悪だ!!」

「貴様以外誰がいる(ネ)!!」

清々しいほどの笑顔で楓が頷くなか、復活したエヴァが即座にツッコム。真名と鈴はそれを追求する。何やってんだ?という視線を向ける銀次……すると、放置されているネギが銀次に対して、

「やっぱり……桐野さんは悪い人だったんですね!!」

「……………はあ?」「」「」

いきなりのネギの発言に……その場にいた銀次達は声を揃えて疑問の声を上げ、

どうやらネギの頭の中ではエヴァは暴力で支配され、楓たちはその仲間という認識をされたらしい。銀次が聞いたら『俺はこの世紀末の悪役だ……?』とか言いそうなものである。

「許せません……僕の生徒を……許しません!!」

「……うおーい、エヴァンジェリン。何やらすつごく勘違いされてるような気がしてならないんだが……」

「ああ……まさかと思うが、まさか対象が私からお前になるとはな……」

勝手に勘違いして睨んでくるネギをウザったそうに見ながら隣にいるエヴァを睨む。エヴァもまさかここまで銀次に敵意が向き、自分が完全にフリーになるとは思っていなかったため驚いている。

「桐野さん……正義として……僕はあなたを倒します!!」

「……」

もう完全に敵と認識されてしまった銀次。銀次はものすごいジト目でエヴァを見るも、エヴァはそっぽを向いて口笛を吹いている。すると、ネギはすでに呪文を唱えようとし始める。

「ラス・テル・マ・スキル・マジステル……」

「チツ……楓、真名、鈴下がってる。エヴァンジェリンは頭吹き飛ばす」

「一寸待て！！私だけ扱い酷くないか！？」

何をいまさら、と言いながら、銀次は目にも留まらない速さで駆ける。

「光の精霊11柱、集い来た「遅いな」えっ、がふ！？」

魔法使いとの戦闘の際、相手に呪文詠唱をさせなければ簡単に相手に攻撃を加えることができる。何せ詠唱中は完全無防備状態に陥るからだ。たとえ障壁を出していようとよほど強固な障壁で無い限り銀次にとっては素手でも貫通することができる。

銀次は右足で踏み込みと同時に左足でネギの腹部目掛けて前蹴りを放つ。身長さがあるため蹴りは完全に極まらなかったものの、そのままの勢いでネギの体をそのまま空中に放り投げ、

「シッ！！」

ネギが銀次の肩口近くまで上がったところで銀次自身も跳躍。そして左肘を高く振り上げネギの後頭部目掛けて肘を振り下ろした。

「ガッ！？」

肘はネギの後頭部を見事に捕らえ、そのまま地面に叩きつける。そしてそのまま倒れたネギの首目掛けて足刀にした足で踏みつけをはな・・・、

「家の居候に・・・何してんのよー！！」

てなかった。叫びながらとび蹴りを放ってきた少女の足目掛けて銀次は空中で止まっていた足で蹴り上げる。

「チツ・・・神楽坂か（これも原作通りといえばそうだが・・・対象が俺なのが謎だ）」

段々と原作から遠のいていないか？と思いつながら、先ほどの蹴りを受け痛めたらしい足を押さえながらピョンピョン跳ねているのを見ながら銀次は思う。本来ならこのままこの二人を瞬殺してこの場から離れたいところだが・・・。そんなことを思っていると、明日菜が銀次に指をビシッ！と向ける。

「あんた！！・・・って、桐野さん？それに楓も・・・なんでここにいんの？」

「いやそれはぶっちゃけこっちのセリフなんだが・・・」

あんまり騒がれるとこちらも大変な目にあつのは目に見えている。殺すか？とも思ったが、後々面倒なことになると思い、

「ま・・・今回はここで引かせて貰うとするか」

そういつて銀次は懐から球体の物体を取り出す、それを地面に投げつける。するとたちまち煙が立ち上り辺りを煙が包む。

「ゲホゲホツちよ、何をコレ！？」

「安心しろ、ただの煙幕弾だ。致死性はねえよ・・・じゃあな」

そういつて銀次はその場から飛び、姿をくらます。楓たちもそれを見て姿をくらしました。

「・・・あの、私の出番は・・・？」

「ケケケ・・・どうやらないらしいな」

少し離れたところにいた緑色をした髪を持つ二つの大小の影・・・エヴァンジェリンの従者である擬似微刀・玉露もといチャチャゼロと擬似微刀・茶々丸がそこにいた。

本来ならこの二人、エヴァがネギに追い詰められたらでてくるというシナリオを行おうと思っていたのだが、なぜかエヴァは銀次にドロップキックをかましてしまい、さらにそれを見たネギが標的をエヴァから銀次へと変えてしまったのだ・・・つまり完全に出遅れたともいえる。

茶々丸は予想外のことですわい、チャチャゼロは手に持っている擬似斬刀・霞を以前から愛用している大型ナイフと一緒にジャグリングしている。

「ふう、やれやれまさか桐野に坊やの敵意が向くとは・・・予想外だったな」

バサリ、と黒いマントをはためかせエヴァが降り立った。

「あ、マスターご無事で？」

「ああ、強いて言うなら桐野に鷲掴みにされた頭が痛いかな、問題はない・・・それより問題があるとしたら」

「ケケツ、あの薬味が銀次をどうするか・・・見ものだけ」

「・・・というより、坊やが桐野を攻撃したら殺されるな」

「さらに言えば楓さん達を攻撃したら・・・麻帆良が消えますね」

「・・・」

茶々丸の言葉に否定できないな、と二人は思った。しばらくして三人はその場から去った。

「ふん・・・まあせいぜい足掻くといいさ坊や。桐野を敵に廻したことを後悔しながら・・・」

エヴァはこれから起こるであろう桐野とネギの戦いを想像しながらほくそ笑む。

はたしてこれから起こるのは喜劇か？それとも悲劇か・・・？

それは・・・誰にもわからない。

第三十一話（後書き）

どうでした？明らかにオリジナル話フラグですねわかります。でも、実際にネギがこの場を見たら絶対にこうなると作者は思いますので今回の話にしてみました。

どうか見捨てずに暖かい目で見守ってください。

次回予告！！

なぜか完全にネギに敵視されてしまった銀次。でも襲ってきたところで返り討ちにできると思っている銀次はそのままネギを放置してしまっただが、

「ならよお兄貴簡単だぜ・・・まずはソイツの従者を倒して周りを無防備にすればいいのさ！！」

ネギに付く助言者・・・しかし、それは死地への導きでしかなかった。

「魔法の射手・光の7矢！！」

ネギが放った魔法の射手は・・・向かってはいけなところへと向

かった……。

「楓ええええツ!!!!!!」

「え……？銀……次……殿……？」

はたしてこれは悲劇か？それとも喜劇か……？

「……ん？……よう、また来たのか……銀次」

「チツ……またお前かよ」

「」

乙ご期待!!

最後にオリジナル変体刀を考えてくださった完全怠惰宣言さん、
ミスターサーさん、ありがとうございました！！

第三十二話（前書き）

最近銀次をもっと別の時代に活躍したらどうなるだろう？と思う銀閣です。

どうも皆さん銀閣です。いやはや・・・今回の執筆は辛いものがあった・・・。何せあの薬味が出てくる上に淫獣も出てきたものですから執筆の速度が一気に遅くなっちゃったぜ・・・。

まあ、弱音はさておき・・・本編をどうぞ！！

第三十二話

〃〃麻帆良の外れにある森〃〃

「（へへへ・・・見事に侵入できたぜ）」

昼ごろ、麻帆良の外れにある森・・・そこに一匹のオコジヨ・・・もといた下着泥棒アルベール・カモミールがいた。彼は牢獄生活に嫌気が差したのか、以前助けてくれたネギの使い魔になって牢獄生活から逃げようと思いついたのだ。

そして今現在、カモベール・カモミールはやつとの思い出来た日本の地麻帆良に来た・・・のだが、

ユ、
・・・パキヨ、ペキ・・・グチュパキユ、ジュールグチュ・・・クチ

「（ん？・・・なんだ・・・何やら生々しい音が・・・）」

カモはまるで何か肉を食むかのような音が聞こえ、辺りを見回す。すると、とある茂みからムン、と血の匂いが漂ってきた。

「（な、なんだ！？この異様なほどの血の臭いは・・・！？とてつもなくやべえ予感がしてきた・・・！！）」

カモは引いたほうがいと頭が理解していた。しかし、どのような生き物も好奇心には勝てなくオコジヨも例外ではない。カモはそー、

と茂みを掻き分けその血の匂いをするほうを見ると、

「んぐ・・・あぐ・・・ふう・・・おいしい」

小さい、しゃがんでいるからよくわからないが、小学生ほどの女の子ぐらいの身長をして何やら囚人服のような服を着て体中にベルトを巻きつけている変わった服装をした銀髪の少女が何やら手と口をせつせと動かしていた。
そしてカモは見てしまった。

「んな!？」

それを見て思わず悲鳴を上げてしまう。なぜか?それは簡単なことだ・・・何せ、

銀髪の少女が・・・人間を喰っていたのだ。

喰われている人間はもう息がないのか手足をダランと放り出し、少女はその人間の腹を喰らいそこから内臓や肉を食い干切ったのだろう。少女の手にはいまだ内臓らしき物体が握られている。

「・・・?」

「(ヤベッ!!)」

少女・・・というよりここまで言えばもう誰だかわかるだろう。桐野邸の暴食魔である喰刀・獾である。獾はいきなり聞こえた声に首

を捻りながら辺りを見回す。その間も手に持った内臓をモグモグと食べながら首を傾げる・・・動作は可愛いのだが食べているものが食べているためその可愛さが打ち消されている。

すると、ガサリとまた闖入者が一人。

「む・・・？おや、血の匂いがすると来てみれば・・・獾、お主か」

「・・・ん」

現れた闖入者・・・なのか？何やらとてつもなく派手な服装をした男が現れた。男は袖のない忍び装束を身に纏い、体に太い鎖を巻きつけている。腰には禍々しいオーラを放つ黒刀・・・毒刀・鍍をぶら下げている。そして何より特徴的なのはその姿はまるで鳥・・・しかも鳳凰という架空の生き物にソックリ・・・簡単に言ってしまうえば刀語にでてくる真庭忍軍十二頭領が一人真庭鳳凰・・・の『変体刀』だ。

勇刀・十二土 十一刀・鳳凰 以前にもでてきた三刀・迷彩と九刀・慚愧と同じで銀次が作った完成形変体刀十二本を扱うために作られた変体刀達だ。そしてこの十二刀・鳳凰は毒刀・鍍を扱う為に作られた変体刀だ。ほかに忍法に長けていて楓が師匠と呼ぶ数少ない変体刀である。

また気苦労が趣味と変わった趣味を持っており、何だかんだで変体刀達の面倒をみる事がおおく、特に幼い変体刀達の面倒見がいい。

「む・・・獾よ、口の周りに血が付いておるぞ。淑女ならもう少し

綺麗に食べねばならん」

「ん……でも美味しい」

「そういうことを言っているのではないのだが……」

美味しいといいながら無表情で内臓を口に運ぶ獾。その光景を眉一つ動かさず鳳凰は見る。

「して獾よ。この死体はどうしたのだ？」

そういつて鳳凰は倒れている人間を見る。手に持っている札があることから関西の呪術師であることにはかわりはないだろう。獾は手に持ってた内臓が食べ終ってまだ足りないのか、今度は手を引き干切り、それを食べながら答える。

「……散歩してたら見つけた」

「それで攻撃してきたから食べた……と？」

「（コクッ）」

獾はブチブチ、という音をさせながら腕を食い干切る。その際引き干切るときに噴出した血が獾の顔に掛かる。鳳凰はそれを見てため息を吐き懐から手拭を取り出す。獾の口周りを拭う。

「まったく……ほら、口周りが汚れておるぞ……」

「ん……ありがとう」

そついいながらまた腕を喰らう。鳳凰はそれをまたため息を吐き見る。カモはそれを見て戦慄する。

「(な、なんなんだ!? あいつら・・・人を平然と殺した上に喰つてやがる・・・とにかくここは逃げ「ヒュンツ!!!」のわああ!!!)」

カモが逃げようと思ひ動こうと思った瞬間、ザクツ!!!という音をさせ近くにクナイが突き刺さる。

「・・・どうしたの?」

「いや・・・何やら気配を感じたのだが・・・気のせいだろうか?」

何やら気配を感じたと思ひ、クナイを投げた鳳凰だが・・・悲鳴と血飛沫があがらないので気のせいか?と思ひながら首を傾げる。

「ふむ・・・念のため見ておくか」

「(や、やべえ!!! どうするどうする・・・!)」

ガサガサと近づくと鳳凰にカモは焦りながらどうするか考えるが・・・

「む・・・? 何だ黽・・・か?」

逃げる算段を考えるも、それよりも前に鳳凰がカモを見つけてるのが早かった。鳳凰はオコジョという生き物を知らなかったため自分の記憶の中にある生き物、黽を想像する。

カモは冷や汗をダラダラ流しながらどうするか考える・・・すると、

「・・・いたち、食べたい」

ガサガサと、音をさせながら獾が現れた。その口は血こそ拭かれて
いるが先ほどまで人を喰っていたところを見ていたカモにとつては
恐ろしい対象以外の何でもない。獾を見て震えるカモだったが、

「よさぬか獾。後で好きなだけ肉を食べさせてもらえばよからう・
・銀次に」

「・・・うんわかった」

あまり（食品的に）怪しい生き物を食べさせるのは面倒見がいい鳳
凰は嫌だと思い、銀次の懐を犠牲にすることにした。まあ、それで
実質的にカモは助かったのだが・・・カモは二人が完全に遠のいた
ところでその場でへたり込む。

「へ・・・へへ、アイツらめ俺っちの男気に怖気付いた行っちまっ
たな・・・」

まったく違うのだが、それぐらい言わないと最早立つことすらでき
ない。カモは震える体を動かす。

「あ、あんな奴ら野放しにできやしねえ・・・！！早く兄貴のとこ
ろにいつてあいつらもパパッと倒してもらおう！！」

カモはその場を駆け出す。ネギの元へと行く為に・・・。

ここで、鳳凰がやってしまった失敗が一つある。鳳凰を初めとした警備に当たっている変体刀達が受けている任務・・・それは『麻帆良に入った』武装した侵入者及びその仲間（化生など）を殺す』という任務だ。つまり人間、化け物は殺すことができるが『武装もしていない仲間もない、ただの生き物』・・・つまり鼬やネズミといった小動物は対象外になってしまうのだ。最初こそ小動物も対象内になろうかと思っていたのだが、それをするとな麻帆良から生き物が居なくなってしまうためやめてしまったのだ。

・・・後にこれが大惨事を巻き起す・・・。

～～学園長室～～

最近胃に十箇所は穴が開いてるのではないかと胃薬を大量に愛飲している学園長・・・そのぬらりひよんは今日も今日とて、

「うぐう・・・！！胃が・・・！！」

胃を痛めていた。学園長は腹を押さえながら最近薬局で発売されている強力な胃薬を五袋まとめて口の中に流し込む。

「だ、大丈夫ですか学園長・・・？」

その大量の胃薬の独特な匂いに若干引きつつタカミチが声を掛ける。

学園長はプルプルと震えながらタカミチのほうへと視線を向ける。

「大丈夫そうに見えるかの・・・？」

「いえ・・・正直見えません」

まあ、目の前でプルプル震えるぬらりひよんを見たら誰でもそう思うだろう・・・プレデターにやられたエイリアンの最後のようにも見えなくもない。

しかし、とタカミチはため息を吐く。

「ネギ君にも・・・困ったものですね」

「まったくじやのう・・・」

昨晚起こったネギと銀次の戦闘事件・・・というよりネギが一方的に銀次に戦闘を吹っかけて負けてしまった銀次にとってはどうしようもない茶番、ネギにとってはトラウマとなった戦い。

エヴァからその情報を聞いたとき学園長は心のどこかで『あ、ネギ君死んだんじゃないかね？ついでに麻帆良滅んだんじゃないかね？』と直感した。

「もうやだ・・・ネギ君があんな問題児なんて思ってたのに・・・しかも本人は善意でやってるから余計夕チが悪いし・・・」

この世で一番やかいな人間は誰か？おそらく今の学園長なら本人は善意でやっているけど周りに迷惑をかける人間ネギと堂々と言えるだろう。学園長はさらに胃薬を口の中に流し込む。

「飲み過ぎですよ・・・でもまあ確かにネギ君は・・・酷いですね」

タカミチも改めて思う。銀次と変体刀に直接戦ったタカミチだからわかるが、銀次が本気をだせばこの麻帆良に住む人間をほんの数十分もあれば殺すことができるのだ。ゆえにタカミチとしてもあまり銀次を起こらせたくないのだが……、

「うぐ……まあ、過ぎてしまったことは仕方ないわい……済まぬがタカミチ君。ネギ君にそれとなくこれ以上銀次君に突っかからないように進言してはくれぬか？」

「はい、わかりました」

学園長の頼みにタカミチは頷きながら部屋を出た。

だが、後にネギがやらかす事件のせいで学園長は本当に胃に穴が開いてしまい入院になるのだが……それはまだ先の話だ。

〵〵明日菜・木乃香と薬味ラッキースケベの部屋〵〵

さて、昨晚銀次につっかかり返り討ちにされたネギ。そしてそれを助けた神楽坂明日菜は風呂場で起きた騒動の後話し合いをしていた……、

「俺っちがきたからにはもう心配ないぜ兄貴!!」

「か、カモ君!!」

アルベール・カモミールと共に。ネギはいきなり訪れた友人に驚きながらも再開を喜ぶ・・・でも、オコジヨが友達・・・寂しい奴である。

しばらく雑談をしているとカモがふとあることに気が付いた。

「そっぴいや兄貴よう、全然進んでないじゃないっすかパートナー選
びー！」

「え？パートナー・・・？」

ネギは以前届いたネカネの手紙を思いだす。パートナーとは勿論『ミニステル・マギ』のことで、最近では恋人探しの口実にされているものだ。原作なら昨晚の戦いでネギがパートナーを探そうと思っ
たらしいが、残念なことにエヴァから銀次に敵意が向いてしまいそ
うは思っていないかった。

カモがなんだよ、と言いながらネギに話す。

「なんだよ兄貴あんな『使えそうな素材』がたくさんいるクラス持
つてんのにま〜だ誰ともパートナー作ってないのかよ？」

「あう・・・でも一応僕の生徒ですし・・・」

「いやいや兄貴！！あんな『いい素材』が固まっているクラスの担
任をしているのにそんなんじゃないけねえぜ！！」

『使えそうな素材』『いい素材』・・・カモは確かにそういった。
つまりカモは3-Aの生徒をネギの『マギステル・マギ』にしよう
と言っているのだ。まあ、確かに3-A自体そのために作られたよ
うなものだから納得も出来なくはないが・・・それでもどうだろう
か？まさか集められた本人達は『ネギの道具』として集められたと

は米粒ほどにも思わないだろう。そして気付けば屍転がり血の池地獄の世界にドツプリと入っている・・・なんとも滑稽なものである。もちろんカモはそうなることを知ってなお、自分の身の安全と金のためにネギに3-Aからパートナーを選ばそうとしている。

「それにこの麻帆良・・・人食い人間がいるんだぜ！？パートナー作つといたほうが身のためだって！！」

「ええ！？ひ、人食い人間！？」

カモの言葉にネギは驚きの声を上げる。まあ、さすがに自分の近くに吸血鬼がいたのだ。人食いがいたら驚くだろう。だが、そこに明日菜が入る。

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ。吸血鬼事件はともかく、さすがに人食い人間なんて居ないと思うわよ？」

「いや！！居る！！何せ俺たちは直接この目で見かけたんですぜ！？銀髪のちよつと兄貴ぐらいの身長の方が人間の内臓やら腕やらをムシャムシャと・・・いま思い出しただけでも恐ろしいぜ・・・！！」

「ちょ、リアルに言わなくてもいいわよ！！（銀髪の女の子・・・まさか・・・ね）」

明日菜はカモが言ったことを冗談だと思ったが、思った以上に必死で内容がリアル過ぎてまさか本当に・・・？と思い始める。さらに銀髪の女、と聞いて以前のネギの歓迎会のときに来たり、最近あまり話さなくなつた友人に懐いている少女を思い出す。だが、すぐにその考えを振り払う。銀髪の少女が変体刀だと知らない彼女にとつ

て、それはありえないと思ったからだ。

「それにどうやら仲間がいてよ……俺っち思わず殺されそうになつたんだよ」

「そ、そんな悪いことを……許せない！！僕の大切な友達を……！！」

ネギはどうやら犯人がわからなかったが、心の中で『そんな悪いことをする人は桐野さんの仲間じゃない！！』と、決め付けた。・あながち間違つては無いが、証拠もないしに決め付けるのは如何なものか？

「でも……そうなると桐野さんの仲間は少なくとも五人？……あうう……勝てそうにないよ」

ネギは昨晚見た楓、真名、鈴、そしてカモの話で出てきた二人……狼と鳳凰を入れて銀次の仲間は五人と思つた。なお、エヴァは銀次に無理やり従わされてると思つており勘定には入れていない。実際は百を越える仲間がいるのだが……今のネギはそのことは知らない。そんな風に悩んでいるネギに、カモは後押しをする。

「だ・か・ら！！言ってるじゃないすか兄貴！！3 - Aの生徒と仮契約してパッツと戦力を増やしてあいつ等をボコしましょうぜ！！その桐野って奴がどんな奴だか知らねえけど、戦力はあればあるほどいいと思うしよ！！」

ネギもなんとなくそこは納得できる……でも、残念だが相手が悪い。確かに3 - Aは恐ろしいほどの有能な人物の集まりではなるが……それだけだ。有能であろうと実戦で使えなければただの置物に

過ぎない。よくて弾除けに使えるかどうかだろう。

だが、勿論のことネギはそんなことに気が付かない。マジステル・マギとは何なのか？とまったく理解していないネギはカモの説得に頷く。

「うん・・・そうだね。確かに仲間はたくさん居るほうがいいよね・・・」

「（うし！引つかかった！！）そうだぜ兄貴！！そんじゃ早速誰にするか決めようぜ！！・・・あ、なんなら姐さんも仮契約するか？」

「はあ！？なんで私が・・・」

自分の保身ももう少しと思ったカモはクラス名簿を持ち覗きこもつとするが、すぐ近くにいた明日菜のほうを見る。明日菜はそれを驚いたように聞き返す。カモは明日菜に話す。

「ネギの兄貴についているんだぜ？姐さんだつて狙われるかもしれねえぜ？だつたら仮契約しといたほうがいいと思っぜ？」

「それより仮契約って何よ？」

「ああ、仮契約ってのはな・・・」

明日菜はなぜ自分の身を守るために仮契約が必要なのかわからなかつたためカモに聞いた。

「まあ、仮契約ってのは所謂『本契約までのお試し期間』ってことだな。本契約と比べたら色々と制約はあるがな。それに何よりアイテイクトっていうアイテムも手に入ったりするんだ。これは人

によつて様々だけど人によつては激レアアイテムが手に入るときがあるんだぜ。他にも主から魔力を貰つたりとかお得なことがたくさんあるんだ」

「う、うん・・・なんだかよくわからないけれど・・・私はまだいいわ」

カモの説明を受けるも、そこはバカレンジャーの異名を取る明日菜。話の内容はあまり理解できていない。

「まあ早いに越したことはないと思うぜ？その桐野つて奴がヤベエ奴だつたらネギの兄貴は勿論姐さんも、他の人間も危ないと思うからな」

カモは暗に『自分の保身のために早く犠牲になれ』といいながら明日菜に言う。明日菜は適当にあしらいながらさっさと風呂に入ろうと風呂桶を持つて部屋から出る。

「さて兄貴！他にもパートナーになりえる奴を探そうぜ！！」

「う、うん！！」

一人と一匹は気付かない。自分達が企ててることが多くの人を巻き込むことになるうとは・・・。

毎度毎度騒がしい3-Aの教室。銀次はいつもならすでに通例となつている弁当運びをして楓たち三人と食事をしているところ・・・なのだが、

「ん〜」

「ふう〜」

「うへ〜」

「・・・いい加減離れるボケ共」

銀次は眉を引き攣らせながら自分の体に引っ付いている楓、真名、鈴に言う。ここ最近似たようなこともいくつかあったが、今日のは特にキツイ。何せこの三人、銀次が教室に来る前にすでに下駄箱のところまで待機しており、銀次の姿を見つけるなり強襲・・・もとい飛びついた。しかも弾丸の如き速さで。楓に顎、真名に右脇、鈴に左脇に特攻を掛けられつつも弁当を取り落とさなかったのはさすがと言つべきだろう。そしてその三人が引っ付き虫になっている状態で教室まで銀次は引っ張っていき、現在にいたる。

「ん〜いいではござらぬか銀次殿・・・あの薬味のせいで溜まったイライラをこうして解消しているだけでござるから」

「そうだよ銀次さん・・・ああ、癒される」

「本当に・・・オアシスネ」

ぶっちゃけた話、不健康そうな顔をした甘党男がオアシスというの

も末期だと思いが・・・まあ、本人達がそれでいいのだから、それでいいのだろう。

楓の言い分を聞いてあゝ、と思う銀次。

「・・・なんだ？今度はあのガキに一体なにやらされたんだ？」

楓たちがここまでイライラしているのだからよほどの理由だろうと思ひ、銀次は改めて聞いてみた。
すると楓がブツブツと文句を言うように話し出す。

「だってあの薬味・・・人のことをやたらとチラ見してきたでござるよ？気持ち悪いといったらしょうがなかったでござる」

「他にも休み時間中や授業中もやたらとこちらを見てきて・・・ああ、今思い出しただけでも鳥肌が立つよ」

「しかもその肩にいた黼・・・いやオコジヨだた力？も変な目で見えてきて・・・アレは間違いなくエロいネ」

鈴の言葉に頷く楓と真名。だが、銀次はそれを聞いてピクリと眉を動かした。

「おい三人とも・・・そのオコジヨ・・・尻尾が黒くて後は全部白い毛をしたオコジヨだったか？」

「え？・・・うん、そうでござったが・・・銀次殿、心当たりがあるでござるか？」

ちよっとな・・・、と答えて銀次は心の中で舌打する。

ここで、楓に便乗した真名と鈴も参戦する。さすがの銀次も美少女三人に胸を押し当てられたら閉口してしまう……はずもなく、

「はあ……お前らなあ……そういうのは好きな男が出来てからにしろって毎回言ってるだろう?」

「「「「「「「「「「「「」

「「「「「「「「「「「「」
「「「「「「「「「「「「」
「「「「「「「「「「「「」
「「「「「「「「「「「「」

あいも変わらぬ鈍感である。楓たちもいい加減慣れてきたとはいえ、何か納得できないところがある。周りに居るものも「あの四人がくつつくのはいつになるのやら……」といった感じで見る……なお、以前この四人がいつくっ付くかというトトカルチャが行われたのだが、楓たちに見つかり中止となった……そのトトカルチャを主催したのは勿論朝倉で、楓たちに見つかりシバかれたあと「ごめんなさい。生まれてきてごめんなさい……」と連呼しながらベツドの中から三日出てこなかったとかどうとか……。

「……ん?何やらよく感じる視線を感じるんだが……気のせいかな?」

「……さあ、どうでしょうね」

「……気のせいじゃないかな?」

「……多分気のせいね」

「おい三人ともどうした？怒ってるように見えるんだが・・・」

よくわからねえな、と言いながら銀次は唸る。最近のこの三人の奇行（？）に頭を悩ます銀次・・・はたして三人の思いはいつになるだろうか・・・？

三人はしばらくくっ付いていたが、空腹なこととこれ以上くっ付いていても効果はないだろうと思ひ離れる。

「やっと離れたか・・・そんじゃ頂きますか」

「そつでいじわるな」

「そつだね」

「そつネ」

四人はそれぞれの弁当を前に手を合わせ食事を始める。

~~~~廊下~~~~

さて、楓たち三人が銀次と一緒に食事をするという幸福に包まれるなか、それを無粋にも見る人間と動物がいた。

「あれが兄貴の言っていた桐野って奴とその仲間か兄貴？」

「う、うん・・・」



カモの言葉にビクビクとしながら見るネギ。昨晩はあんな強気で言ったが、やはり怖いものは怖いのだ。何せ腹部を蹴られ後頭部に肘を叩き込まれたのだ。よほどのDMなものの好きか戦闘狂で無い限り近づかない・・・ネギは前者だろう。

「・・・周りにいる女三人はなかなかやり手だな・・・従者か？」

残念ながらカモの読みは間違っている。銀次にとって楓、真名、鈴は弾除けの盾の従者ではなく、背中を預けられる大切な仲間だ。『戦いの道具』ではなく『信頼できる仲間』だ。まあ、ネギとかもはそういうところが理解できていないだろうが・・・。

「どうだろう・・・でもあの四人がよくいるところを見るからそうだと思うけど・・・そういえばあの三人すごく強いつて話を聞いたけど・・・」

「なるほど・・・そうだ兄貴。クラス名簿もう一回見せてくれないか？もしかしたら奴らの得意分野がわかるかもしれねえ」

「あ、そうだね・・・はい」

カモに言われネギは自分のクラス名簿を開く。おそらく部活動等を見ればそれなりの情報が入ると思ったのだろう。二人は覗き込むようにして楓たちのところを見る。

「お、ちょうど三人並んでるのか・・・何々？あの褐色ののつぽの姉ちゃん・・・バイアスロン？ああ、あのスキーしながら射撃する奴か。中国系のは超って言うのか・・・色々な部活入ってるな・・・中国武術研究会に所属か・・・この二人は相手取るのは難しそう

だな」

カモは真名と鈴の所属している部活を見る。そして真名は射撃を鈴は格闘戦を得意としているとわかった。

・・・そして、楓の所属部活を見る。

「んでこっちの色白ののっぽの姉ちゃんは・・・さんぽ部？なんだこりゃ」

カモは楓のところを見て疑問の声をあげる。まあ、普通に考えたらさんぽ部というのはまずないだろうから無理もないが。そこにネギが入る。

「あ、さんぽ部っていうのは麻帆良をさんぽする部活らしいよ」

「まんまじゃねえか・・・(でも、コイツは・・・)」

カモはチャンスだと思った。楓は体つきがいいのもさんぽしているからだと思い、おそらく三人の中で一番戦いに向いていないのでは？と思ったのだ。カモはニタリと口を歪ませる。

「兄貴、まずは姐さんと仮契約をして一番最初にこの長瀬っていう女をやりましょうぜ!!」

「え、ええ!?!長瀬さんを!?!」

「ちょ、兄貴!声でかいつすよ!!」

「あ、ご、ごめん・・・でも何で長瀬さんを・・・?」

ネギはカモの発言に驚きの声を上げるも、カモに諭されすぐに小声で話す。

「いいか兄貴。ああいった類の連中はな、仲間がやられると混乱するんだ。しかも見たところ、あの桐野って男は長瀬って女をあの中では一番大事にしているぜ・・・そして倒されたあの女を見て動転しているところを倒すんだよ!!」

「な、なるほど・・・でも卑怯じゃないかな？二人で一人の人を攻撃するって・・・」

「兄貴だって何人もまとめてボコられたんだろ？だったら問題ないさー!!」

むしろ銀次一人にフルボッコされていたのだが・・・ネギは何やらプライドが許せないのかそれをカモに言っていない。

さらにそこでカモがネギにとっては絶対の言葉を言った。

「それに兄貴は『立派な魔法使い』を目指してるんだろ？だったらあんな極悪人を野放しにしとくのはイケねえだろ？」

「!？」

『立派な魔法使い』・・・それは、すべての魔法使いが目指すべき存在・・・だがその実態はメガロメセンブリアの都合のいい『人形』を作り上げるために解いている所謂『空像の存在』だ。

だが、ネギはそれを目指している。自分の父親のようになりたいと思っ・・・そして、ネギは決意した。

「うん・・・そうだね。『立派な魔法使い』になるんだったら・・・

あんな悪い人たち放っておいたらダメだよね」

「その通りでさあ兄貴！そんなじゃ放課後にでも姐さんとサクツと仮契約して倒しちまおうぜ！！」

「うん！」

ネギは力強く頷く……それが破滅へのカウントダウンだとわか  
らずに……。

～～放課後・街路～～

放課後。授業が終わりやっとネギを見なくなって元気になったのか、  
楓は鼻歌を歌いながら道を歩いている。

「ふんふん～ やつと帰れるでござる～」

楓は一人で道を歩いていた。いつもならここに真名と鈴が加わった  
り変体刀が一緒になるのだが、真名は最近サボり気味のバイアスロ  
ン部に久しぶりに顔を出しに行つて、鈴は大学のプロジェクトが忙  
しいのか放課後は一緒になれないことが多い。  
なので本日は楓一人の帰宅になる。

「それにしても・・・銀次殿はどうしたら振り向いてくれるでしょうか・・・？」

〽放課後・街路〽

放課後。授業が終りやっとネギを見なくなって元気になったのか、楓は鼻歌を歌いながら道を歩いている。

「ふんふん」 やつと帰れるでござる」

楓は一人で道を歩いていた。いつもならここに真名と鈴が加わったり変体刀と一緒にいるのだが、真名は最近サボり気味のバイアスロ部に久しぶりに顔を出しに行つて、鈴は大学のプロジェクトが忙しいのか放課後は一緒になれないことが多い。なので本日は楓一人の帰宅になる。

「それにしても・・・銀次殿はどうしたら振り向いてくれるでしょうか・・・？」

楓はため息を吐きながら呟く。12年間楓は銀次のことを思い続けている。しかし肝心の銀次は気付いておらず、楓が長い間悩み続けている原因の一つである。

「・・・ま、悩んでもしょうがないでござるか・・・それも銀次殿のいいところでしょうし」

以前ならもつと悩んでいたところだが、最早慣れてしまった楓はすぐに前向きの志向を持つようになり今でもガンガン銀次にアタックをしている・・・まあ鈍感はもう少しまともになって欲しいと思うが。

すると、楓はその場に立ち止まる。

「さて……いい加減にでてきたらどうでござる？……ネギ先生？」

「えっ！？ば、バレてる！？」

普通はそこでももつと息を殺して気配を消すものだが……ネギは見つかったのに動転して声を上げてしまう。

「ちょ、バカネギ！！でかい声出すんじゃないわよ！！」

「いや姐さんも結構声がでかいぜ？」

「（……何をしているでござるうか？）」

その後ろから楓と同じクラスの神楽坂明日菜がと淫獣カモが現れる。だが、いきなり目の前に現れたと思ったら目の前で何やら漫才を始めた三人（二人と一匹？）を冷めた目で見ながら楓は正直に思った。しばらくその不毛な言い争いを見ていたが、終わりそうにないのでそのまま帰ろうと踵を返すが、

「あ、待って下さい長瀬さん！！」

ネギがそれに気がつき呼び止める。楓は軽くチツ、と舌打をする。もう少して逃げられたのに……

「（いつそ瞬動で逃げるでござるか？……でも後々また来られてもこっちが迷惑でござるし……）なんの用でござるかネギ先生……拙者、早く帰りたいのでござるが……」

楓は自分の素直な気持ちを述べる。正直これ以上一緒にいると何をされるかわかったもんじゃなから楓としてはさっさと帰りたいただ。そんな楓の言葉を聞いてか、ネギはしどももどろになりながら答える。

「うう・・・な、長瀬さん。お願いですから大人しく捕まってくたさい！！悪いことをしたらいい人にはなれないですよ！！」

「別にどうでもいいでござる」

ネギの発言をざっぱりと斬り捨てる。ネギはあまりにも清々しく綺麗に斬り捨てられたためポケット、とした顔になる。

「・・・え？」

「いい人や悪い人とか・・・そんなの拙者には関係ないでござるよ。拙者は銀次殿が居ればそれでいいでござる」

楓にとって正義も悪もどうでもいいのだ。楓にとって正義も悪も似たようなもので、とにかく銀次がいるならそちらに付く・・・それが長瀬楓という人間だ。

ネギはその楓の発言を聞いて、

「うう・・・なら仕方ありません・・・僕はあなたを倒します。そしてその後に桐野さんも倒します！！」

「・・・」

楓は目の前にいる無謀な発言をしたネギに呆れた視線を向ける。何せあの銀次に命の取り合いをしようと言っているのだ。今のネギでは力スリ傷どころか触れることすら叶わない。楓がそんなことを思っていると、ネギたちはもう戦闘準備をしていた。

「行きます!! 契約執行10秒間!! ネギの従者『神楽坂明日菜』  
!!」

「うっ……ごめん長瀬さん!!」

ネギの魔力配給が行われた明日菜は楓に突撃を掛ける。しかしどことなく戸惑いというか躊躇いが窺える。まあ、クラスメイトと殴り合いをするのだ。男でなら全然問題ないが女同士なため少し気が引ける。

「(さすがにグーは……なら) エイツ!!」

「(デコピン……!?) (フツ!!)」

ただのデコピン……楓は最初そう思ったがいきなり早く、明日菜が目の前に現れた上に放たれそうになったデコピンの『脅威』を感じ取り楓は軽く後ろに飛び避ける。

ここで楓が避けたのは当たり前と言っことだろう。明日菜は元々力が強いほっだし何より今は魔力でさらに体を強化している。そんなデコピンを喰らったら茶々丸や他の変体刀ならともかく、生身の体である楓にとってはまともな当れば良くて額が陥没、悪ければ頭が



熟れたトマトのようになるだろう。

「（よいいまだー！！）光の精霊11柱！集い来たりて……」

「（呪文詠唱……だが）遅いー！！」

家にはもっと早く……ぶっちゃければ無詠唱で広域破滅魔法をガン撃つ変体刀が何人かいるため、楓にとってネギの詠唱は欠伸がでるほど遅い詠唱だ。楓は懐に隠していたクナイを取り出しネギに投げようとしたが……

「させるかよー！喰らえ、オコジヨフラーシューツー！！」

「！？」

いきなり目の前にカモが現れ、強いフラッシュを浴びせられた。オコジヨフラッシュなどという名前が付いているが、実際はマグネシウムをライターで燃やして強い光を出す簡易閃光弾だ。楓はそれを受けてしまった。あと五秒もすればすぐに直るだろうが……間に合わない。

「（うっ！油断した……やられるー！！）」

「魔法の射手・連弾・光の11矢ー！！」

真っ白に染まる視界のなか。楓は油断したことに悔いり、死ぬかもしれないと覚悟を決めたとき……

「楓えええええええツ!!!!!!!!!!!!!!」

「え……?」

ドンツ、と強く押されそのまま倒れる。普段ならそんなことはありえないのだが、視界が奪われてるいま楓は倒れる以外方法はなかった。そして次の瞬間にはズガガンツ!!と激しい炸裂音が響き渡る。そして、

ビシャツ!!

「ッ」

楓の顔に……生暖かい液体が掛かった。急に掛かったため驚いたが、その匂いを嗅ぎ口の中に入った液体の味がした……それは

「……血?」

楓は先ほど聞こえてきた声を思い出す。自分の名を叫んだ声……あの声は、

「(そんな……ありえない……だって……負けるはずがないでいしょね)」

ドグンツ、と心臓が跳ねる。楓の視界が戻ってくる。

「やったぜ兄貴！！外堀から崩そうと思ってたが、まさかいきなり頭が出てきてそれを倒せるなんてな！！」

————ドグンツ

視界が段々と鮮明となってくる。

「う、うん！！やったよカモ君、明日菜さん！！僕ら勝ったんですよ……」

————ドグンツ！！

その輪郭がはっきりとしてくる。

「え……ちょ、待ってよ……どういう……こと……？何で……なんで……」

————ドグンツ！！！！

そして……視界がはっきり

と晴れ、その光景が目に入る。



さあ皆様お立会い、

これから始まりますわ一人の少年が引き起こした愚かな茶番劇、

どろどろ監ちゃん、しり鑑賞ください。。。。。

くく??くく

それは本当に偶然だった。銀次は嫌な予感がして家をでて歩いていった。妙に騒ぐ胸騒ぎを押さえ込みつつ、銀次は早足で麻帆良の町を歩き、そしてさっきの現場に遭遇したのだ。

「(・・・楓は・・・無事だろうか・・・?)」

ボヤツとした、まるで頭に靄もやが掛かっている感じがする銀次だが、それでも楓が大丈夫かどうか気になる。

先ほどのネギの襲撃・・・アレは銀次も完全に油断していた。ネギが襲うとしたら間違はなく自分だろう、とたかを括っていたからだ。しかし現実は違った。ネギは楓を襲ったのだ。本来ならすぐにでも殺してやりたいところだろうが・・・

「（それも・・・もう無理だろうな）」

銀次は先ほどのことを思い出す。銀次があ場に遭遇したとき、カモが簡易閃光弾を使ったときだった。ネギが呪文を完成させ放つ瞬間、銀次自身が気付いたときには身体が勝手に動いていた。賊刀・鎧を着ていたら間に合わなくなる。ならば忍法足軽を使って飛び込めば間に合ったのだろうが・・・楓が死にそうになっていると動転した銀次はそこまで思考が回らなかった。

結果的に、銀次は楓の身代わりとして魔法の射手11矢の内8矢をその身に受けることになった。おそらく・・・即死に近いだろう。

「（ま・・・）楓が助かったなら・・・俺は別にどうでもいい」

おそらく、この場に楓や他の変体刀がいたら、殴るなり怒鳴るなりするだろう。「もっと自分を大切にしろ！」や「もっと考えて行動しろ」と、特に睡蓮あたりに言われるだろう。

「元々俺はイレギュラーだ・・・ならここで死ぬのは普通あたりまえなのかもな・・・」

銀次は、そのまま目を閉じる。イレギュラーであると改めて認識して・・・もう二度と会えないであろう大切な人・・・大切な人たちを思いながら・・・目を閉じ、

「ん？・・・おう、なんだお前・・・なんでこんな所にいるんだ？」  
「？」

れなかつた。銀次は目を開ける。するとどうだろうか？そこには先ほどのような真つ暗な空間ではなく、どこか青空の広がる外だつた。左を向けば昔の日本家屋のような家があつた。そして先ほど掛けられた声・・・少しばかり渋い声で男だろう。

銀次は最初こそ戸惑つたが、段々と知つている家だとわかり、さらに声を掛けたのが誰だがわかり、ため息を吐く。

「（また『アイツ』の家の近くか）・・・別に、ただまた死んだはずなんだがな」

「まただア？・・・お前この前も似たようなこと言つて来てただろうが。第一普通はそんなポンポン死ぬか？普通・・・」

「この前つて・・・一年前の話だろう。一年前はこの前とは言わねえよ」

銀次は起き上がる。先ほど失つたはずの手足があり、腹部も吹き飛んだはずなのに・・・まるで何事も無かつたかのように傷一つついていなかった。

そして銀次は男のほうへと視線を向ける。銀次の視線の先にいたのはやはり男で、作務衣のような服を着て灰色をした髪をした男で前髪が垂れ右目を隠している。後ろ髪は一本に纏められ馬の尻尾のように垂れさせている。隠れていない左の目の下には菱形の刺青が縦に並んでいる。その男は呆れたような笑みを浮かべながら銀次に言う。



「どつちにしろ早々コツチにくるなって……。まあ取り合えずだ・  
・久しぶりだなア……。銀次」

銀次の目の前にいる男……。その男は別の世界で有名な刀鍛冶

その世界でもっとも重要な存在、

そして普通ではありえない刀の製作者……。そうその男は

「本当……。久しぶりだな『四季崎』」

その男は歴史を改竄するため、そして愛する家族を守るために普通  
ではありえない刀……。変体刀を作り上げた伝説の刀鍛冶……

四季崎記紀……。その人だ。



## 第三十二話（後書き）

・・・うん？やり過ぎ？知らないナニソレオイシイノ？

はい、すみません調子乗りました。でもあの淫獣が出てきた時点で絶対にああいう風になるだろうと私は思いまして書いてしまいました。四季崎は以前から出す予定でしたので異論は認めません（キリッ）・・・うん、似合ってないね。

まあ、そんなこんなな展開になりましたがどうぞ暖かい目で見守ってください。

## 次回予告

楓を攻撃しようとしたが、誤って銀次を攻撃したネギ・・・だが、それは麻帆良にとって死刑宣告以外のなんでもなかった。

「殺す・・・！！殺してやる！！」

「そこを退いてよ・・・じゃないとあのクソガキが殺しにいけないじゃん・・・」

「あハハツはハハはツ!!!私の大事な大事な銀次君を殺そうとするなんて・・・いい度胸ねえ」

「クツ・・・!!血が止まらないぞ!!」

「直してみせますよ・・・私を誰だと思ってるんですか?」

はたして・・・どうなる・・・?

「構える銀次・・・お前に俺のすべてを叩き込んでやる」

「ああ・・・行くぞ」

乙ご期待!!

最後にオリジナル変体刀の案をくださったふかやんさん、ありがとうございました!!



### 第三十三話（前書き）

最近バイトが忙しい銀閣です。

皆さんどうも銀閣です。話も段々急展開になりつつありますが、楽しんでくれると幸いです。

さて、読まれる前に一言。今回の話でそれなりに四季崎が出てきますが・・・ぶっちゃけ凄いことになってます。

いや、ね・・・なんか書いてたらキャラが凄いことになってしまってます・・・まあ、いつかと言うことで書き続けたら・・・大変なことになりました（笑）

それでも言い方は・・・どつぞー！

### 第三十三話

四季崎記紀・・・といえば言わずと知れた伝説の刀鍛冶である。刀語の世界ではもっとも重要なポジションに就き、物語の軸となる変体刀を作り上げた刀鍛冶・・・勿論銀次も知っている。生前読んだ刀語では出演こそ毒刀・鍍しかなかったが、それでも変人で奇人であるとはなんとなく理解した。実際に転生してからも人型変体刀達からどのような人物なのか聞いており、大体は原作通りだった。

だがしかし・・・一つだけ、これだけは銀次も予想だにしないことがあった・・・それは、

「いや、それにしてもだ銀次・・・桜花はほんっつとつに可愛いぜ？ほら見るよコレ三歳のときの写真」

「ああそうだな・・・てか、何でカメラとか持つてるわけ？確かあんたの生きてた時代じゃないよな？」

「んなもん決まってるだろう・・・未来から逆輸入したんだよ」

「それは能力の無駄使い以外の何でもないと思うが・・・」

銀次が目を覚ましたすぐ近くにあった家・・・それは四季崎が暮ら

す家だ。その縁側に座りながら銀次は四季崎が両手に持った写真・  
・年は様々だが一人の少女の写真を見せていた。ちなみに桜花と  
は四季崎の娘である。

「んだとコノ野郎・・・俺はなア、桜花のためならたとえ火の中水  
の中、矢玉飛び交う戦場だろうと刀林槍林だろうと変体刀担いで飛  
び込むぜ!！」

「無駄にリアルだなおい!ここまで行くと親バカの上に大アホつ  
けたくなるな・・・しかし」

銀次は凄い勢いで熱弁する四季崎に呆れながら銀次は改めて写真に  
写ってる四季崎の娘を見る。

「こうして見ると・・・本当に楓とソツクリだな・・・」

写真に写っている少女・・・四季崎桜花は暴刀・熊に抱きつきなが  
ら笑っている。里に居た頃ソツクリでおそらく銀次でも『どちらが  
本当の楓?』と聞かれ写真を出されてもわからないぐらいの瓜二つ  
だ。

銀次のその言葉を聞き、四季崎もそうだな、と言いながら頷く。

「俺もよ、初めてあの楓つて娘を見たときは桜花だと思ったしよ・  
・世界にや似たような奴が三人はいると思っただけどよ・・おっと、  
お前は『三人目』もみているんだっただな」

「・・・嫌味かクソが・・・」

四季崎の言葉を聞き銀次は表情を歪ませ舌打ちをする。『三人目』  
・銀次の今のあり方を作った事件に深く関わっているのだが・



・それはまた近いうちに話そう。

「悪い悪い……『あの事件』は確かにお前にとってはトラウマ物だろうからな……悪かったな」

四季崎も、流石に軽率だと思ったのか謝る。四季崎も以前銀次の過去を見たことがあるのだ。それはあまりにも凄惨で、四季崎ですら目を逸らしたくなるものだった。

「別にいいよ……アレは俺の怠慢や油断が招いた……いわば自業自得だ」

「……」

自嘲気味の笑みをする銀次の言葉に四季崎は黙って聞いている。しばらく……静寂が辺りを包む。そして銀次がため息を吐く。

「やめだやめ……こんな辛気臭い話ばかりじゃ本当に腐っちまう」

「それもそうだな……よし、そろそろ桜花と咲も帰ってくるだろうから茶でも淹れ直すか」

そう、四季崎はどうやらここで家族三人と暮らしているらしい。実際銀次は二人にもあったことがあるのだが……やはりと言うべきか、母親のほうも楓母にソックリである。ちなみに咲とは四季崎の嫁さんである。

「おいおい……伝説の刀鍛冶が茶淹れか？どうせなら茶汲み人形作れよ」

「いやな前に実際に作ったんだが・・・口から刀でるカラクリにしたら咲に大根で頭思いつきり叩かれた」

「・・・伝説の刀鍛冶の夫婦喧嘩がここまで庶民的だったとは・・・」

なんとなくその光景が目には浮かんだ銀次。死んだにも関わらず、こう楽しいのならこれはこれで悪くないとも思っている・・・

勿論、それは銀次や四季崎だけで・・・現世ではそんなことはない。

〓〓麻帆良・楓が襲撃された場所〓〓

銀次が四季崎と会って茶を飲みながらノンビリしている頃・・・こちらではそのようなことはなかった。

「ああああアアアアアア、アアああああアアアアああああアア  
あッ!!!!!!!!!!!!!!」

目の前で血を出し死に掛けて・・・いや、すでに死んでいるかもしれない銀次を見ながら楓は悲鳴を上げる。

普段は滅多に開けない瞳を絶望に染め涙を流しながら限界まで開け、普段はおっとりとした話し方をするその口を開け叫び、銀次に綺麗だと言われずと手入れをしてきた髪を両手でかき乱す。楓を知っ

ている人が見ればおそらくありえない、と言つような表情をしながら楓は叫び声を上げる。

「うっ……おえっ!!」

明日菜は楓のその姿もそうだが、何よりスプラッタな肉塊になつた銀次の姿を見て嘔吐する。元々、明日菜は今回の襲撃は乗り気ではなかつた。銀次自身はどうしても悪い人には見えなかつたし何よりクラスメイトの楓を襲つと言つのは気が引けた……でも、ネギは何度も頼み込み『一回だけ』と言つて明日菜は渋々了承した……。それに明日菜は素手で殴り倒したりする所謂『喧嘩』を想像していたのだ……。まさか『殺人』に加担させられるとは思つていなかったのだらう。

そんな明日菜が目に入らないのか、ネギは興奮したように騒ぐ。

「こ、これでこの人達はもう悪いこと出来ないよね!?カモ君!!」

「ああ、勿論だぜ兄貴!!何せ悪の親玉をいきなり倒せたんだ、これで相手の戦力も士気もがた落ちさア!!」

ネギとカモは喜々とした声を上げる。ネギは自分の父と同じで悪を倒せたということ。カモはこれで晴れて釈放されるということ。喜ぶ……。二人のその目には『似非正義』に酔いしれた魔法使い達とまったく持つて同じ目をしていた。そしてカモはさらに気付く。

「おつと兄貴。あそこの女もどうせならやっときましようぜ。後々面倒なことにもなつたら大変だしよ」

「う、うん!そうだね!!僕らは『正義』なんだから倒さない」と

ザッ」・・・え？」

勝ったことに気が高揚していたのか・・・ネギは気付かなかった。すぐ目の前に怒りで顔を染めた楓が拳を握り締めていることを。

「（拙者のせい・・・拙者のせいで・・・銀次殿は・・・！！）」

叫びながら楓は自分を激しく責めた。何であのとき油断したんだと、何であの時閃光を食らってしまったのかと・・・楓は激しく後悔する。

「（もつともつと拙者がしっかりしていれば銀次殿は死ななくて済んだのに・・・）」

後悔しながら段々と楓の『負』の感情が心の中に広がる。

「（結局・・・結局拙者は銀次殿の・・・足枷以外のなんにでもならなかったでござる）」

早く追いつきたかった。早く横に並びたかった。そのためにたくさんの修行をした。でも結果はどうだ？相手が弱いといって慢心して、そして油断して・・・本来ならあの力モの攻撃だって読めたはずだ。でも・・・避けられなかった。

「（拙者のせい・・・拙者のせい・・・！！）」

頭を撫でてくれることも、

一緒に修行することも、

失敗した料理を苦笑いしながら食べてくれたことも、

綺麗なところを見つけては教えてくれたことも、

寝込んで看病してくれたことも、

銀次のせいで拗ねて部屋に閉じこもってそれを銀次が頭を下げ必死に謝ったことも、

微笑んでくれたことも、

それももう・・・できない、見れない、感じれない・・・。

一生懸命稽古する姿も、

静かに読書する姿も、

獏に菓子を買い過ぎて売刀に怒られる姿も、

銀次が好きな変体刀達と一緒に暴れて困らされてるあの姿も、

癖になっちゃったあの苦笑いも、

もう・・・見れない。

次々と溢れ出る銀次との大切な記憶が、まるでガラス細工を割るように粉々になっていく。そしてそれら

が碎けると同時に楓自身の心も壊れていく。楓だって見た目がどんなに大人であろうと・・・中身は『中学三年生の少女』なのだ。

「（・・・なんでで「じぞる？」）」

そこで楓は思った・・・『なぜこんな思いをしなければいけないのか』・・・と、すると思い出す。元々の元凶を

「おっと兄貴。あそこの女もどうせならやっときましようぜ。後々面倒なことにでもなったら大変だしよ」

その元凶とは・・・ネギとカモ、それに明日菜だ。

「（コイツらさせ居なければ・・・コイツらのせいだ・・・）」

先生、クラスメート・・・最早今の楓にどうでもいいことだ。今の楓の心のなかにあるのはタダ一つ、

「（殺してやる）」

楓自身が気付いたときには・・・すでにネギに接近して拳を握り締めていた。

「アアアアああああアアアッ！！！！！！！！」

楓は怒気で歪めた顔をしながら右拳を握り締め、ネギ目掛けて放つ。

「ひっ、がふっ！」

一瞬顔を恐怖で歪めたネギだが、それが隙を生み楓の拳がネギの腹に下から突き上げるように入る・・・所謂下突きだ。

「ガフツえふ・・・（ど、どうして！？魔法障壁を張っていたのに・・・！！）」

ネギは驚愕した。それもそうだが、ご自慢の魔法障壁が容易く破られたのだから驚愕もするだろう・・・だが、

「フーツ、フーツ」

怒り狂っている今の楓にそんなの無意味でしかない。『怒りは人を変える』という話をときたま聞くが、なるほど確かに。実際楓の右拳からは血がポタポタと流れ出ている。障壁は確かに働いた。だが、楓の怒気がそれを勝ったのだ。楓は血が流れる拳を拭うこともなくまた握り締め、

「アアアアッ！！！！！！」

「ぎっ！？」

さらに殴りつける。今度は顔面に右拳を叩き込む。もともと拳の殴り合いなんかしたことがないネギだ。『殴られる』という行為に慣れていない。それゆえ鍛えられていないネギは鞠のように簡単に飛ばし、口からは血が飛び出る。さらに一緒に折れたのだろう、白い物体・・・歯が出てきた。だからといって楓の攻撃が止まるわけではない。

「アアアアアッ！！！！！」

瞬動を使い、今度は右足刀の横蹴りを食らわす。足刀蹴りの威力は高くそれを跳び蹴りで行えば体の捻りも入るため威力は桁違いになる。

「グエツ！！！」

楓の足刀がメリメリとネギの腹部に突き刺さる。ネギの体がくの字に曲がり、吹き飛ぶ。ネギは壁にぶつかり、そのまま呻き倒れる。

「て、てめ！！これ以上は俺っちがやらせ「ドガッ！」がつ！！！」

地面を駆けネギに近寄ろうとする楓を見て近寄るカモだったが、楓は一瞥もくれることもせず足元にあった石を蹴り飛ばしカモに攻撃する。蹴り出された石はカモへと飛んで行きそのままカモをぶつかりカモごと吹き飛ばす。カモはそのまましばらく何バウンドかしてそのままピクリとも動かなくなった。

楓は怒りに燃えた目をしながら壁にもたれ掛かっているネギを睨みつける。

「（殺してやる・・・殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる





「・・・ウ」

「!?!」

ピタリと、楓の動きが止まる。別にネギを殺すのを思い留めたわけではない。むしろきつかけがなければ腰溜めにしたクナイでネギの胸を背中まで貫いていただろう。そのきつかけとは・・・？

「・・・ウウ」

「ぎ・・・銀次・・・殿？」

まさか、と思った。何せその攻撃を止めるきつかけとなつたのは・・・『銀次の呼吸音』なのだ。

「・・・ヒユウ・・・」

「銀次殿!!」

楓は持っていたクナイを放り捨て銀次に素早く近づく。

「ッ」

しかし、近づいて改めて銀次の傷の酷さがわかる。まず右手と左足が完全に銀次の体から引き千切られている。さらに腹部はゴツソリと持っていかれたためかほとんど残っておらず、小腸や大腸といった内臓が辛うじて残っている感じだ。

楓はもしかしたら、という僅かな希望を持ちながら銀次の胸に耳を当てる。

・・・トクン・・・トクン・・・

「（い、生きてるでござる・・・！！）」

僅かに聞こえる銀次の心臓音。小さいが、必死に生きようとしている確かな音・・・楓の真つ黒に染まっていた心に僅かな希望が見えた。

「（今なら・・・今ならまだ間に合うでござる！！）」

本来なら絶対無理なほどの重症・・・だが、家に帰ればどんな傷も瞬く間に直してしまうような変体刀が何人かいる。楓はその僅かな希望に縋りつこうと思い、着ていたブレザーを脱ぎそれで銀次を包むように巻く。長さ的には全然足りないが、とにかく重症である腹部を覆うことができれば上々だろう。そして身体が崩れないように抱え家に向かう・・・その前に、

「クソガキ・・・『今』は銀次殿が助かるかもしれないから見逃してやるでござる・・・だが、『後』で必ず殺してやる・・・覚悟しておけ」

「ひっ」

楓は置き土産としてネギに殺気と死刑宣告を残しその場を去る・・・大切な者を助ける為に走る。

後に残されたのは死刑宣告を言い渡された大量殺人犯えいゆうの息子とその淫獣ヘンシュ・・・それにその戦いに巻き込まれた少女が残るだけだった。

〃桐野邸〃

元々麻帆良学園と桐野邸は近いため、走っても充分なのだが楓は瞬間を連続して一分もしない内に桐野邸に駆け込んだ。

最初は全員が全員、いきなり駆け込んできた楓にどうしたも疑問に思っても、

「ッ銀次さん！？なぜこのような・・・！！」

「一体何があつたんだ！？」

楓が両腕に抱えてる瀕死状態の銀次を見て混乱する。楓は説明している時間も惜しいと思いつつながらこうなつた経緯を話した。

『ネギが襲撃をしてきて、不意打ちの攻撃から拙者を守ろうとして身代わりになり、こうなつてしまった』

変体刀達はそれを聞き、怒りを覚えた。別にネギが銀次単身へと攻撃するのはいい、どっちにしる傷一つ付けられないからだ。だが、楓を攻撃したら？銀次の決意を知っている者達はたとえ楓が安全圏にいようと銀次はその身を挺して守ると知っている・・・ゆえに変体刀達は銀次に仕えているのだ。以前の主のような人間・・・四季崎記紀のような桐野銀次に。

「とにかく医刀の処へ!!」

眉間に皺を寄せながらそう言ったのは桐野邸でメイド長を勤めている女刀・侍だ。楓も女刀の言葉に頷き、すぐに地下へと向かった。

〳〵桐野邸地下・医刀・助の部屋兼診療所〳〵

地下にある医刀の部屋。そこは普段は医刀が住居と鍛錬などで傷ついたあるいは何かで負傷（主に銀次）を治療するための診療所として使っている。医刀は暇なときは山に薬草を取りにいったり、薬を調合するが日課でもある。

今日は特に誰も来なく、薬草もかなりあるため医刀は薬を調合しようと思ひ薬のストックを確認していたが・・・、

「医刀殿!! 銀次殿を・・・銀次殿を助けて欲しいでござる!!」

いきなり現れた訪問者。医刀はいきなり大声でかけられ驚くも、その声の正体が楓だと気づきふうとため息を吐く。そして同時に楓がいつものと違い、切羽詰ってるようにも感じた。

「（嫌な予感がするな・・・）どうしたのだ楓殿？ 銀次殿に何かあった・・・!？」

顎髭をなでながら医刀が診療所に向かい、何があつたのかと思ひ見てもみれば・・・絶句してしまった。銀次が変体刀達の戦いに巻き込まれ搬送は珍しいことではない。鍛錬などで怪我をして運ばれるのもさほど珍しくはない・・・だが、

「むう……!!これは……!!」

楓の両腕に抱えられてる銀次の傷は……酷過ぎた。右手と左足が千切れ飛んだのか、その傷口から血がボタボタと流れ出て腹部を巻いているブレイザーは真っ赤にそまり血が地面に滴り落ちている。一目で重症……いや、死んでいてもおかしくない傷だ。

「ツとにかく手術台のところに運んでくれ!!」

「わ、わかったでござる!!」

一瞬死んでしまっているのではないか?と思った医刀だが、まだ息があるのに気付き手術室に銀次を運ばせた。

〳〵手術室〳〵

手術室に入り銀次の傷を見て、医刀は顔を歪ませた。

「（これは……非常にまずいな……）」

「い、医刀殿?どうしたのでござるか?早く銀次殿の治療を……!!」

ブレイザーを取った銀次の腹部を見て特にそう思った。何せ内臓が『ほとんど』ないのだ。医刀が対処できない傷でもないが……



「楓殿があの儒子に攻撃されそうになったところを、銀次殿がそれを庇って重症・・・いや、瀕死あるいは死亡していても可笑しくない傷を受けた」

『なっ！？あの銀次さんが・・・！！』

「ああ、傷は右手と左足が吹き飛んでおり、内臓器官がほとんど持たせて行かれています。肺と心臓が残ってるだけでも奇跡なようなもんだ・・・だから早くもってこい！！」

『だったら最初にそれを言うてください！！すぐに行きますのでそれまで延命処置をお願いします！！』

「ああ、頼む！！」

ほぼ同時に内線電話を掛け直す。そして早速作業に入る。

「楓殿済まないが保冷室からA型の輸血パックを持ってきてくれ！ワシは銀次殿の血の流れを防ぐ！！狂が来るまで何とか延命させる！！」

「わ、わかったでござる！！」

楓はすぐさま手術室の横にある保冷室から輸血パックを取りに行く。桐野邸には人間は少ないが、緊急時用として桐野邸に住む生身の人間用にいくつかの血液を用意している。銀次はA型のためA型の血液パックが必要である。

「こ、これでいいでござるか！？」



「ああ、そこに置いてくれ!!」

医刀は楓を見ずに銀次に医療用針を指示を出す。楓は言われたとおり、両腕いっぱいを持った血液パックを机の上に置く。治療針を一通り刺し終えた後、医刀は次に残っている左手に輸血針を刺す。

「きましたよ!!医刀さん!!」

その一通りを終えたとはほぼ同時だろうか？手術室の入り口からワゴンのようなものにクーラーボックスを大量に乗つけた狂がやってきた。

「おお、狂か!!悪いが早速術式に入るぞ!!」

「はい!!」

医刀は狂を見るやいなや、すぐに術式を始めようとする。狂もその左手からマニピュレーターを何本も指先から出し手術を始めようとする。

そのとき、

「医刀殿・・・狂殿・・・」

楓は二人に声を掛けた。二人は何事か?と思いつつ訝しげにそつちを見ると、

「なっ!?!」

驚愕した。二人が楓のほうを見ると・・・楓が土下座していたのだ。

楓は額を地面に擦りつけながら震える声で二人に訴えかける。

「・・・今度実験をするならその実験動物にもなるでござる・・・  
どんな実験でも参加するでござる・・・だから・・・だから・・・  
銀次殿を・・・助けて欲しいでござる・・・!!」

「「「「「」」」」」」

二人は思わず域を飲む。楓が二人・・・いや正確には狂に出した条件・・・これは聞くものがいたら楓を鎖で縛ったうえで刃物で脅すぐらいの勢いで説得するだろう。

医刀事体は別にどうでもない。元々彼は医療用に作られたためそういう報酬や代価と言うものは気にしないからだ。・・・だが、狂は違う。狂は『改造』に主眼を置いた変体刀だ。医療関係もできるがその本質は『何かを改造するための人体実験』も平然と、しかも笑いながらする。ときには人が苦しむさまを恍惚そうな目をしながら見ることも珍しくない。それなのに楓は自分を実験動物にしてもいい、といったのだ。

つまり狂に出した条件は、いわば自動式拳銃でロシアンルーレットをするようなものだ。

だが、

「・・・何を言っているんですか？楓さん」

「え？」

狂の呆れた様な声に楓が顔を上げる。実際に狂は呆れたような顔をしているが・・・狂は楓に続けた。

「そりゃ私は改造に主眼を置いた変体刀です。人体実験も普通にします。銀次さんを困らせたり他の皆さんを困らせたりしますよ？それで仕返しされたら逆襲しようとも思います・・・でもですね」

狂の顔が真剣になる。

「大事な『仲間』が死に掛けてるのに・・・それをエサにして『仲間』を実験動物にしようなんか思いませんかよ」

「・・・狂・・・殿」

楓は狂の言葉に泣きながら、聞く。

「さあ、楓さん。ここからは私達が頑張りますので・・・」

「ヒグツ・・・わかった・・・でござる・・・」

狂の言葉に楓は頷き立ち上がる。楓がいても何の助けにもならないというのは本人も自覚しているため、その場から去ることにした。

「医刀殿も・・・銀次殿を助けて欲しいでござる」

楓は今度は医刀のほうへと頭を下げる。医刀も真剣な表情をしながら告げる。

「誰に向かって言っているのだから。ここは私の戦場だぞ？そして私は必ず患者を連れて帰還してみせる・・・それが『仲間』であればなおさら・・・な」

医刀の言葉を聞いて楓は深く頭を下げ、部屋からでていった。

「さて・・・医刀さん」

「ああ・・・狂」

「行こうか・・・私達の戦場へ」

二人の戦いが・・・始まる。

医刀と狂が手術を始めた頃。桐野邸のそこかしこでちょっとした争い等がおきていた。それは

「殺す・・・！！あのクソガキを殺す！！」

「落ち着きなさい楽！！」

銀髪を振り回し、涙を流しながら暴れるのは変形型変体刀の一本曲刀・楽。彼女は銀次がネギに攻撃されたと聞くやいなや、滅多に崩

さないポーカーフェイスの顔を怒りに歪めて、己の化身でもあるバイオリンを取り出し外へと向かおうとする。それを必死になつて止めるのは同じく変形型変体刀の雪刀・吹雪だ。この二人・・・特に楽は銀次に強い好意を寄せており、男女としての付き合いをしたいと思います。吹雪もその気持ちを持つているが、楓と真名にその立場を譲り身を引いた。

「吹雪は・・・憎くないの・・・!?あの・・・クソガキが・・・!!」

「私も憎いは・・・でもだからってそれで暴走するのはダメよ!!」

「それでも・・・それでも・・・!!!!」

楽と吹雪の言い争いのまた別のところでも言い争いが行われていた。こちらにも二人が対峙しあい、互いに睨み合っている。

「・・・そこを退いてください姉さま」

そういつて目の前の女性に言い放つのは、ライムグリーンの髪をストリートに伸ばして袖無しのミニスカメイド服を着た独立変体刀の一本『武器の扱い』に主眼を置いた姫百合だ。姫百合は睨むような目で目の前にいる女性・・・同じ独立変体刀の姉妹刀を睨む。

「そうは行かないわよ姫百合……。大体、あんたそんな物騒なモン持ってどうしようってのよ?」

独立変体刀・芍薬 『外的身障トシウキヤクを抉る』ことに主眼を置いた変体刀で、姫百合とは体型の一部分（どことは言わない）と紫銀の髪に群青色の瞳以外はほとんど変わらない外見をしている。あと、芍薬は好んで露出の控えた服を着る傾向があり、妹である姫百合とは違う服の趣味の持ち主だ。

「……。別に……。ただ、自分の主が殺されかけたから、その元凶であるクソガキを殺しに行こうと思っただけです?」

芍薬の言うとおり。姫百合の手には刀……。『斬れにくさ』に主眼を置いた苦刀・痛が握られていた。一mぐらいの長さをした鍔無しの刀で刀身は赤黒く染まっているが、それは刃の部分はのこぎりの様になっていて、側面にも小さな穴の空いた山のような棘が沢山ついているため、その血肉を削り取った時に付いた者である。さらに棘からは神経系の毒が流れ出るため、たとえ攻撃が掠るだけでも相手に激痛を与えることができる。

姫百合の言葉に芍薬はふー、と言いながら額に人差し指で押さえる。

「まったく……。確かにあなたの銀次君への忠誠は認めるわ……。でもね、だからといって早まったことはしないことだわ。銀次君が目覚めてからでも遅くはないと思うけど?」

「でも、どうせ後々始末するなら今殺しても問題ないでしょう?」

「まあそうなんだけど・・・第一、今のあんたじゃそれらしい子供も八つ裂きにしようで怖いのよ」

危なっかしい会話を平然と話す芍薬と姫百合。でも、確かに今の姫百合ならそれらしい子供を見つけたら殺すだろう。

姫百合は肯定とも否定ともとれない微妙な表情になる。どうやらそうだったらしい。

「・・・そうだとしても。手足の三、四本切落としたところで問題はないでしょう?」

「そういう問題ではないんだけど・・・はあ、しょうがない。物理的戦闘は苦手なんだけどな」

そついいながら芍薬はどこからともなく刀を取り出す。本人も言ったとおり、芍薬は物理的戦闘が苦手な主に精神的に相手を攻撃するほうが得意なのだ。

姫百合はそれを見て目を細め、鞘から苦刀を抜こうとする。

「・・・邪魔をする・・・ということとして見てもよろしいのですか?」

「まあ・・・ね。一応暴走する妹を止めるのも姉の仕事だからね」

二人はそのまま対峙する・・・変体刀同士の姉妹喧嘩が始まる。

上の二組はまだマシンなほうだろう・・・それよりも過激な連中は変体刀中に・・・いる。

「あハハツはハハはツ！！私の大事な大事な銀次君を殺そうとするなんて・・・いい度胸ねえ」

そんな壊れたような笑いをしながら殺気を振りまく少女が一人いた。その服装は黒いラインの入った白を基調としたセーラー服に赤いスカーフ、ブーツを着用しており、外見は高校生くらいで、ウェーブのかかった亜麻色の髪をロングヘアにし、両側は大きな赤いリボンでツインテールに結わえている可愛らしい顔立ちの美少女だ。因みにある部分はかなり大きい。

『神秘変体刀 秘刀十五番・楔』

神秘変体刀とはタロットカードの大アルカナを元にした変体刀で、それぞれが様々な力を有する強力な変体刀達だ。個々の能力にもよるがそれぞれがかなり強力な力を有している。また、神秘変体刀は他の変体刀と違い限定奥義のほかに逆限定奥義と言うものも使える。

そして出て来た楔という美少女・・・彼女は大アルカナ15番「悪魔」をモチーフにした変体刀だ。しかし、モチーフとなったカード



に反して優しく誰に対しても明るく振る舞う温厚な性格をしておりさらに言えば銀次に惚れている変体刀のうちの一本である。ここまで言えばとくにコレといったことはないの……だが、

楔は過去のしがらみを銀次に断ち切ってもらった事がある。それ以来、楔は銀次のが好きで好きでしようがなくなり時には楓たち以上の行動力を見せたりする。そして楔は”暴走”に主眼が置かれた変体刀……つまりは

「う、うふふふふ……あのクソガキ……私の大事で大好きな銀次君を殺そうとするなんて……許せないなア……まずは徹底的に傷つけて、自分が何をしたのかわからせて、そしてジツクリとゆっくりとジワジワと苦しめて全身の血管破裂させたり細胞を壊死させなきゃ……そしてクソガキの首をお土産に銀次君の看病を付きっ切りでしてあげなきゃ……アハハハ、待っててね銀次君」

今回のことは楔にとって火にガソリンを流し込むようなものだ。さらに言えば楔の戦闘力は……神秘変体刀の中で最強を誇り、鈴蘭とも互角に戦えるほどの実力者だ。

「ちょ……ちょっとちょっと!?!?ありやさすがにやばくない!?!?」

「た、確かに今の彼女を倒すのはムリゲーですね」

そんな楔を見て、周りの変体刀……楔と同じ神秘変体刀達が冷や汗を流しながら見る。

「ぶつちやけ普段ですら勝てる気がしないのに……今の状態じゃ可能性ゼロじゃん!!戦っても絶対に勝てないぞ!?!?」

そういうのは神秘変体刀の一本で大アルカナ七番「戦車」をモチーフにした変体刀 秘刀七番・火輪かりんだ。外見は背の高いスタイル抜群のミディアムヘアにしたオレンジ色の髪に翡翠色の瞳の少女で袖のない紺色のシャツにジーンズ、同じく袖のない焦げ茶色のジャケットを羽織っている。

”絶対勝利”に主眼を置いており自分の攻撃が相手の攻撃や防御などと衝突した際に必ず打ち勝つ事が出来る。

かなりの負けず嫌いで、勝つ為なら如何なる卑怯な手段も厭わないというほど。しかし、負けるとかなり落ち込む泣き虫でもある。

「いやいやいやいや・・・コレ本当にきついですよ？私達絶対に死にますよ？例えるならRPGゲームで初期装備でレベル1でラスボスと正面から戦うようなものですからね？コレ・・・」

火輪に続いたのは同じく神秘変体刀の一本、大アルカナ0番「愚者」をモチーフにした変体刀 秘刀零番・此方こなた。常にセーラー服を着用し、小学生くらいの小柄な体型の、緑色の瞳に腰まで伸びた青い髪に頭頂部に生えた長いアホ毛が特徴で、マイペースな上に能天気。しかもゲーム、漫画、アニメが大好きと・・・所謂オタクである。 ”初期化”に主眼を置かれており、元々存在するもの以外なら文字通りリセットできる。

両者共に戦闘力は高いが、それはあくまで「他の変体刀」と比べてだ。神秘変体刀・・・特に楔相手となると話は別になる。そんなところに

「確かにね・・・今の彼女を倒すことはできないと思うけど・・・いま下手に楔を外にだすと私達も殺されかけないわね・・・」

そういつてふう、とため息を吐くのは藍色の瞳に、鮮やかな茶髪をロングヘアにした美少女。深紅のロングコートを纏り、その下は黒い袖のないシャツとズボンという服装をして引き締まった体つきをしており、紅クラスのスタイルの持ち主だ。

『神秘変体刀 秘刀19番・天照』

大アルカナ19番「太陽」をモチーフにした変体刀だ。己が一番偉く、世界の中心に立っていると本気で信じて疑わない自信家で、常に不遜な態度を崩さず、他人を見下すような言動も多いがなんだかんだで仲間の窮地にはすぐにかけつける性格こそクールだが根はかなり熱い。ちなみにかなりの子供好きで子供がいる時だけは不遜な態度はなりを潜め、他には見せない優しい笑顔を見せる。

常に鍛錬を怠らず、同じ『神秘変体刀 秘刀21番・世界』の能力を使い、様々な世界に渡り銀次に会う1200年間（別世界の滞在期間含め）ずっと戦い続け、銀次にあつた後もちよくちよく別世界に渡り1700年間戦い続けた猛者だ。その世界曰く、『楔を除けば純粋な戦闘力は最強』らしい。

「みんなア・・・なんで私の邪魔をするの・・・？」

「いや、ぶつちやけ今のあんたを外に出したら町そのものが壊れるわ・・・あの薬味はどうなってもいいけど、町が壊れたら子供達が悲しむじゃない」

「別に知ったことじゃないわ・・・私はあのクソガキを殺す・・・その邪魔をするなら誰であろうと・・・殺すわよ？」

ズン、とまるで空気が重く・・・空気が重くなった理由・・・それは楔の殺気である。

「う・・・お・・・やっぱハンパねえ殺気だなおい・・・!!」

「ちょ、私逃げてもいいですか？ぶつちやけ私の戦闘力じゃアレはキツイですよ？初心者が装備なしでいきなりジン　ウガと戦うようなもんですよ？」

火輪がそんなことを呻くように呟き、此方もゲームで例えながらその場から一步退く。

「別に退いてもいいわよ？確かにあなた達じゃ荷が重いと思うし・・・足手まといはいらないわ」

天照はそれと対照的に拳を鳴らしながら一步前へと出る。

「何だと！？私が足手まとい！？はっ冗談じゃないね！！私は”絶対勝利”に主眼を置いた秘刀七番・火輪だよ！！」

天照の言葉にカチン、ときたのか。負けず嫌いの火輪がまず一步でる。

「は・・・普通はもっと装備整えてからこういうことするものですよ？でもまあ、たまにはこういうムリゲーもいいかもしれませんね」

此方も一步でる。その周りではまた別の神秘変体刀が各々の武器を構える。

勘違いする者もいると思うが、正直な話神秘変体刀達はネギがどうなるかと知ったこつちゃないと思ってる者がほとんどだ。だが、せっかく住み心地のいいところを手に入れたのに手放すのは惜しいと思ってるのだ。つまりこの戦いは、自分達のための戦いであり決してあの薬味のためではないのであしからず。

「そこを……退けええええええッ!!!!!!」

「さあ……行くわよ」

ズドンッという音と共に、戦いが始まる。

自分達の主が死に掛け、悲しむ刀もいる。あるいは怒りに狂う刀もいる……はたしてどうなるのだろうか？

〳〳四季崎邸〳〳

「……ん？」

「どつしたんだ？銀次」

変体刀達が騒いでいる中、銀次は四季崎邸の縁側の柱に寄り掛かり茶を飲んでいる。四季崎も銀次の向かいにある柱に寄り掛かり同じ

ように茶を飲みながら、先ほど帰ってきた四季崎妻子が買ってきた団子を食べている。

「ああいや別になんでもない・・・（なんだ？無性に胸騒ぎがするな）」

銀次はズキリ、と痛んだ胸を押さえる。なんだかわからないが、無性に空しくもあり悲しくもある・・・微妙な感覚に襲われる。銀次はそんな感覚に首を傾げる。

「しつかしまあ・・・さつきも言ったけどよ。お前はもちっと自分を大切にしたらどうなんだ？」

そんな妙な感覚に襲われる銀次を他所に。四季崎は団子を食べながら言う。

「ああ？どういう意味だ？」

「言葉の意味まんまだよ」

四季崎の言葉がわからず、聞き返す銀次に茶を啜り、四季崎は続ける。

「お前さんがこっちに来るといふことはだ。向こうでは楓っていう娘が悲しんでいるって言うことだぜ？それなのにお前さんはひょいひょいコツチにきやがる・・・桜花じゃないとはいえ、ソックリの娘に泣かれるのは俺としては非常に辛いモンでな」

「・・・」

銀次はチツ、と舌打をする。銀次は過去にも死んだことがある。するとどういう仕組みかは知らないが、そのたびに絶対と言っていいほど四季崎の家に来るのだが・・・何かの拍子で元に戻ったりして、楓に怒鳴りつかられたりもするのだ・・・おそらく今も・・・と思いながら銀次はさらに舌打をする。

「・・・ああ、確かなな。楓が悲しむのは俺も不本意ではあるが・・・アイツが死ぬよりかは一億万倍マシだ」

銀次は自分の本心を語る。楓自身が無事ならそれでいい・・・と。四季崎はその理論を聞いてため息を吐く。

「ふう・・・やっぱりと言うかなんというか・・・まあいい悪いもどうせ来てくれなきゃ『渡せなかった』からな」

「ああ？・・・渡す？何をだ・・・？」

渡す、と聞きなんだろうかと思いい四季崎に聞くも、四季崎は何でもねえよ。と言って話を流した。すると、四季崎は立ち上がる。

「あゝ・・・さて・・・と。銀次・・・久しぶりにやるか」

「・・・ああ」

その言葉を聞き、銀次も立ち上がる。そして、二人とも裸足のまま縁側から庭へと降りる。四季崎は首をゴキゴキ鳴らしながら銀次に聞いた。

「さて・・・準備はいいか？覚悟はできてるか？」

「・・・ああ、いいぜ。さっさと掛かって来い」

互いにどこからともなく刀を取り出す。銀次はよほど本気を出さない  
と取り出さない斬刀・鈍を、四季崎は見た目なんの変哲もない刀  
を取り出し・・・構える。

「いくぞ銀次・・・俺のすべてをお前に叩き込んでやる」

「ああ・・・掛かって来い」

二人が構え・・・戦う。

現世とあの世で繰り広げられる戦い・・・はたしてどうなる？





### 第三十三話（後書き）

どうでしたか？四季崎が壊れ過ぎてる？細かいこたア気にすんな！！

はいすみません調子乗りました。あと、作中の医刀が楓に言った言葉はわかる人はわかると思いますが、「とある魔術の禁書目録」の五巻より冥土帰しの言葉を拝借させてもらいました。一度言わせただけです。ありがとうございました。よかったよね・・・。

さて、次回予告！！

いきなり戦いを始めた四季崎と銀次・・・だが、その戦いは凄まじい一言だ。

「刀鍛冶が刀振り回せないとも思ったか？」

「チイ・・・！！」

ドンドン追い詰められる銀次・・・はたしてどうなる！？

そして、

「・・・」

「が、学園長！？気をしつかり！！」

麻帆良学園もどうなるだろうか・・・？

乙ご期待！！

最後に変体刀の案をくださったパールパレーパさん、ふかやんさん、ルファイトさん、神山夏彦さん。ありがとうございました！！

### 第三十四話（前書き）

fate/stay nightで銀次がサーヴァントで召還されたらパーサーカーも目じゃないと最近思う銀閣です。

さて、どうも皆さん銀閣です。いやはやオリジナル展開がガンガン続いているため非常に大変ですが、非常に楽しいですね（笑）皆さんも楽しんでくれれば幸いです。

さて、今回は四季崎との戦いと学園長の苦悩・・・七対二でお送りいたします。それでは、どうぞぞー！！

## 第三十四話

例えばこうしよう。あるサッカーの団体を任された監督が二人いるとする。片方はサッカーのことをよくわからず、テレビや雑誌という情報だけで知っているA監督。もう片方は実際にサッカーの選手をしてサッカーの知識も豊富なB監督。

・・・はたして上の二人が教えたら、どちらがより優れた選手を生み出すことができるか・・・？

勿論、答えはB監督のほうがだろう。例外的にA監督の可能性もなくもないだろうが・・・まず絶対的でありえない。

ならばしっかりとした知識と経験を持つB監督は？絶対的にいい選手を育てることができらるだろう。なぜならしっかりとした知識、経験を持っているからだ。

・・・ならば、刀作りはどうだろうか？

刀は一つの美術品といわれるが・・・実際刀に求められるのは人を斬れるかどうかということだ。野蛮、という意見もあるだろうが実質問題、人を斬れない刀は刀じゃない・・・

ならば・・・人を斬れる刀を作るにはどうするか？

簡単だ、刀鍛冶自身が刀を扱えばいい。『作る側』の人間は『使う側』の気持ちまで考えないと一級品のものは作れない。過去に四季崎はそう思い、刀を持った。未来から逆輸入は勿論。当時の流派や過去の流派から剣術の知識を取り入れた・・・その取り入れた結果。

「四季崎流・・・剛剣」

「チイツー!!」

ありとあらゆる剣術を混成、創造することにより・・・四季崎は独自の流派を手に入れることができた。いま放った剛剣もまさしくそれで、凄まじい速さで振り下ろす所謂唐竹割りだ。だが、威力はありえないほど強い。刀が突き刺さった地面は簡単に捲りあがり、地層が覗く・・・こんな人間の体に当れば溜まったものではない。

「零閃編隊――五機!!」

「無駄だ」

銀次は避けたと同時に零閃を放つ。五つの斬撃が四季崎を襲うも、四季崎は刀を軽く振るうだけでそれを払い落とす。銀次はそれを見て舌打する。

「おい銀次・・・前にも言ったと思うがな・・・そいつは俺が作った刀だ。どんなものをも抵抗なく斬るために作られた斬刀・鈍。そしてその切れ味を最大限に引き出すための零閃・・・俺の考えた技だ」

「だから当るわけがない……だろ！！もう、聞き飽きたよクソツタレー！！」

そう、変体刀自身を作り上げたのも四季崎だが……その能力を最大限に引き出すための限定奥義を考えたのも、また四季崎なのだ。戦国時代、四季崎が歴史の改竄から家族を守るために変体刀作りを考え、様々な刀を作り上げた。そして、その刀の噂を聞きつけた各地の剣士がこぞって四季崎の下へとやってきたのだ。そして、当時の斬刀・鈍の所有者である宇練金閣もまたそのうちの一人、

『大切な者を守るための刀が欲しい』

そういった金閣に心打たれた四季崎は、快く変体刀と限定奥義を金閣に渡した。その後は全国へと刀をばら撒き、乱世を終わらせ家族と共に暮らそうとしたが……結局のところはそれも叶わなかったらしい。

まあ、結論から言うとだ……四季崎記紀は伝説の刀鍛冶であると同時に、最強の剣士でもあるということだ。

「まだまだいくぞ銀次……避けてみる。四季崎流……啄木鳥」

「まず……っ！！」

戦いは……始まったばかりである。

〃〃麻帆良学園・学園長室〃〃

さて、銀次が四季崎と戦い苦戦しているなか。桐野邸で激しい戦闘が繰り広げられているなか・・・麻帆良学園にある学園長室では・・・？

「・・・・・・・・」

「ちょ、学園長！？気をしっかり！！」

頭の長いぬらりひょんこと学園長が死に掛けていた。たまたま出張ではなかったタカミチがその横で学園長を心配する。

「う・・・うむ・・・何とか大丈夫じゃ・・・済まんがタカミチ君、水を用意してくれぬか？」

「あ、はいどうぞ」

学園長の頼みにタカミチは近くにあつた水差しから水を取り出し学園長へと渡す。学園長は明らかに一定量を超えた強力な胃薬を口の中に流し込み、それを水で一気に流しこむ。辺りに胃薬の匂いが充満して部屋にいた魔法使い達が眉を顰める。

「学園長・・・もう大丈夫ですか？」

胃薬の匂いがきついたためか、学園を心配しながらも近づかないのは麻帆良学園の女性教師葛葉刀子だ。



他にも神多羅木、伊集院、明石教授、瀬流彦、そして以前肅清の際自らの腕と引き換えに刹那を助けたアドルだ。他には美空やココネ、そして刹那などがいる。

学園長は少し長いため息を吐いて椅子の背もたれにもたれ掛かり、呟く。

「・・・わしもうやだ・・・ネギ君があんな問題児だったなんて思いもしなかったわい・・・」

「ええ・・・正直僕もまさかアソコまでするとは思いませんでしたよ・・・」

学園長もタカミチも、まさかネギがあそこまでするとは思わなかった・・・というより、たとえ襲ったとしてもまさか魔法の射手を放つとは思わなかった。

魔法の射手は最も基本的な攻撃魔法だ・・・だが、基本だからといって甘くみてはいけない。魔力の込め方、矢の数によっては広域破壊呪文となんら変わらない威力を持つことができる。銃で例えるなら、9mm拳銃から20mmバルカン砲。一発にそれなりの魔力を込めれば大砲となんらかわらないだろう。しかもネギは魔力操作が下手で放った矢もかなりの威力だ・・・むしろ何で銀次が生きてるかの事体が不思議である。

そんなことを思っていると、

「あ・・・すみません学園長。僕もう戻ってもいいですか？正直銀次の様子が気になってしょうがないんですけど」

そっぴいなながら焦ったような表情と怒りに染まった表情という微妙な表情をしながら、手を上げたのは・・・

「む、う……し、しかしのウ瀬流彦君。これは非常に危険な状態なのじゃが……ぶつちゃけ麻帆良の存続に関わるほどの重大な事件なんだけど」

瀬流彦昭介。麻帆良学園に勤める教師の一人で魔法先生の中では、アドルと同じく銀次との親友でもある。

さて、なぜ？瀬流彦と銀次が仲がいいのか？と疑問に思う人もいるだろうから説明しよう。

実は粛清戦が起こる前のこと。銀次は瀬流彦と一回だけ仕事を組んだことがあった。最初は楓と真名が文句を言っていたが、瀬流彦は他の魔法使いと違い『立派な魔法使い』を目指していたわけではなかった上に、銀次擁護派だったためので普通に銀次達と会話をしていた。

段々と気藹々と話をしていき、銀次は瀬流彦がなぜ魔法使いになったのか気になり聞いてみたのだ。すると瀬流彦は急にふう、とため息を吐き、

『……正直、僕は魔法使いなんか本当はなりたくなかったんだ』

そして瀬流彦の独白が始まる。何でも瀬流彦がまだ魔法生徒の頃、自分の意思ではなくどちらかと言うと親の意向で魔法使いになっただけらしく、それでかそこまで仕事にやる気がなかった。

そしてその後、メガロメセンブリアに短期留学したのだが……そこで見た”正義の末路”を見て不審感を持つもわからず、流されるままにこの麻帆良に就いたのだ。

銀次達は一通り聞き終えると、

『ウジウジウジウジ・・・ウザイはポケット!!』

バキッ！と銀次が瀬流彦を殴り飛ばした。殴り飛ばされ、地面を何回かバウンドして転がった瀬流彦。しばらく呆然としていたが銀次に殴られたとわかり頭に血が上り・・・銀次へと殴りかかった。

変体刀無し、魔力強化無しでの殴り合い。観客とかした楓たちは最初こそ銀次が勝つと思っただが・・・瀬流彦が異常なほど強く、勝負がつくかわからなかった。

その後しばらく殴り合いを続けたが・・・中々勝負がつかなかったため引き分け。その後は銀次も瀬流彦も心からの友人となり和解した。

今では麻帆良学園で桐野邸に出入りできる数少ない人間の一人だ。また、瀬流彦のおかげで擁護派や一般教員ともパイプが出来たため、以前学園長は瀬流彦の給料を少しだけ上げたのは誰も知らない。

・・・とまあ、ようは銀次と瀬流彦は拳で語り合い仲良くなった親友なのだ。今回の事件は瀬流彦にとっては非常にムカつく事件である・・・ゆえに、

「それで麻帆良が減んだならあのガキのせいですよ・・・あ、何なら僕があのがキ連れてきましようか？全身の間接バラバラにして」

「いや、おぬしが言うとお洒落にならんからやめとくれ」

物騒なことを言う瀨流彦に学園長が止める。実は瀨流彦、こう見えて柔道三段・空手二段、他にも古流武術やボクシングや中国武術などを身に着けている。だが、戦いの場だと滅多にみせないため誰も知らない。

だが、以前たまたま使ったことがありそれを見た銀次曰く『アイツが本気になれば魔力強化無しの素手で五十人は殺せる』と言わせたほどの実力を持っている。

学園長に却下され、舌打をした瀨流彦はそのまま壁にもたれ掛かる。

「ならどうするんですか？少なくとも、あのガキを見つけて捕らえてない限りはこの麻帆良が滅ぶのは間違いありませんよ？いくら銀次がいなくても、他の楓さんや真名さん……それに変体刀の皆さんが黙ってないと思いますよ？」

瀨流彦は見えてはいないが、おそらく地下でもの凄い言い争いがされているだろうなあ、と思いつつながら変体刀達の顔を思い出す。イタズラしたり、怒らせるようなことをしたり、困らせたり……それでも変体刀達は銀次のことを主と思う者もいれば、好いていた者もいた。彼らは目に見えない『絆』で結ばれていた……。腐った正義の中にいた瀨流彦もそれを渴望していた……。そして、銀次と出会った手に入れた……。だが、

「正直に言います学園長……。もし、彼ら変体刀達が麻帆良を壊しに掛かったら……。僕は彼らのほうにつきます……。それでたとえ本国と戦うことになったとしても……」

別に変体刀達が怖いわけではない……。瀨流彦は大事な友人を失くすのが怖いのだ。損得抜きで殴り合え、馬鹿し合える友人を失くす

のが・・・すると、

「すまないが学園長。今回は俺も瀬流彦側だ。俺も、大事な友人をなくしたくないからな」

アドルも瀬流彦と同じ考えのようだ。アドルは元々銀次の心意気に共感したこともあり、それで仲良くなった。それに元々アドル自身ネギにいい印象がないのもある。

あといつの間にか、アドルの後ろに刹那もいる。余談だが、刹那は後にアドルと共に銀次に謝罪。今でも微妙なチグハグとした関係ではあるが、そこまで気にするほどのものではない。

「・・・なら、私もコツチスね」

「・・・私も」

そういつて瀬流彦、アドル側に付いたのはシスター服を着た美空とココネだ。この二人も実は桐野邸の変体刀・・・神秘変体刀が一本、大アルカナ四番「皇帝」をモチーフにした“結合操作”に主眼を置いた秘刀四番・鋼と仲がいいのだ。鋼は四季崎を越える刀鍛冶を指している日夜鉄を打つ。だが、性格は無愛想で「人は無機物や植物以下の存在」という考えを持った変体刀でもある。しかしある日、変体刀作りで行き詰った鋼が町へと散歩しにいったら、シャークステイが居なくなっただけで美空と喧嘩したことで落ち込んでいたココネと出会い、人の「暖かさ」を感じ新たな変体刀を作り上げることに成功した。ココネも胸の内に溜めていた物を吐き出し、スッキリしたのか後にキチンと美空と仲良くなった。

以来、鋼、美空、ココネは三人でお茶をしたり買い物をしたりする仲になったとか。

「私も友人と戦うのなんてマツピラ御免ですし・・・何より『殺人教師』を擁護するのは嫌っスから」

「・・・ミソラと同じ」

美空の殺人教師という発言にさすがの学園長も呻く。まあ、確かに美空たち生徒から見たらそうだろう。

ほかの魔法教師達も今回ばかりはネギを擁護する気はないようだ。まあ、ネギの行った行為自体は別に攻める気はない。奇襲も立派な戦術だからだ。だが、ネギは生徒を襲うという暴挙を行った。教師としては絶対にしてはいけない行為だ。『魔法使い』以前に『教師』である彼らにはネギの行為が気に入らないのだろう。学園長は目の前にいる魔法使い達を見て、ため息を吐く。

「ふう・・・まあ、おきたことは仕方ないわい・・・皆の者、すぐにネギ君をここに連れてくるのじゃ。手段、方法は問わん。抵抗するなら最悪手足の一、二本は折っても構わん。とにかく早く見つけるのじゃ」

「……………はっ……………」

学園長の言葉に返事をした魔法使い達はすぐにその場から姿を消した。・・・後に残されたのは自分の隣にある胃薬の袋で溢れたゴミ箱と、タカミチだけだ。

「・・・のう、タカミチ君」

「・・・なんででしょうか学園長」

しばらく沈黙が続いたが、それを学園長が破る。タカミチに呼びか

けた学園長はしばらく思索するような顔になり俯き・・・顔をあげた。

「・・・ワシはいつたい、どうしたらいいのかわかるか？」

「・・・」

学園長の言葉に難しい顔をするタカミチ・・・残念ながら彼もわからないでいた。

二人は悩んでいた。二人としてはネギをこのまま英雄の息子として育て、第二の英雄を作りたいと思っていた。だが、ネギは魔法使い・・・いや、教師としてあるまじき行為をした。これがまだまともなやり方なら・・・銀次達も譲歩しただろうにと思いつつ、学園長はさらにため息を吐く。

「・・・さて、ネギ君の処分をどうするか・・・考えておくかの」

良くて修行停止の上魔法使いの権利を剥奪。悪くて死刑だろうが・・・学園長としてはなんだかどちらでも良くなってきた。

はたしてネギの処分はどうなるか・・・？

～～桐野邸・手術室前～～

現在、銀次の手術を行っている医刀の部屋の前。楓はその向かいにある壁に背中を預け、そのまま地面に膝を抱え座っている。するとそこに

「はあはあはあ・・・楓!!」

ビクッ、と楓の身体が震える・・・そこにやってきたのは楓が襲われ銀次がそれを庇い瀕死の重傷を負った・・・と聞いた真名と鈴だ。よっぽど急いで来たのだろ、肩で息をして普段はクールな顔が焦りの色を見せ、汗ばんでいる。鈴も似たような表情で、何かの研究中だったのか制服の上に白衣を羽織ったままやってきた。

「銀次さんは・・・どうなんだい？」

「・・・内臓のほとんどを持っていかれてたらしいでござる・・・でも、その後に医刀殿と狂殿が治療をしているでござる」

「そうか・・・なら一安心ネ」

「ああ、そうだな」

二人はとりあえずふう、と息をつき椅子に座る。普通の病院ならもつと心配するが、ここは変体刀・・・しかも治療を得意とする医刀と共に狂も手伝っているのだ。まず命の心配は必要ない。それでも二人は微妙に落ち着かないのか、足を組み直したりと落ち着かない様子だ。

しばらく沈黙が続いた。三人は何を語るでもなくただ静かにその場にいる。壁に掛けられた時計の針の音だけが辺りを占める。



「・・・拙者の・・・せいでござる・・・」

しかし、その沈黙を楓が破る。ソコまで大きな声ではなかったが、場が静かなことと真名や鈴の聴覚がいいのもあり、二人の耳に届いた。

楓はポツリポツリと話し始める。

「もっと・・・もっと拙者がしっかりしていれば・・・銀次殿はこんなことにならなかつたのに・・・」

楓はギリギリと拳を握り締める。その拳から血が滴るも、楓は気にせず独白を続ける。

「・・・何が中忍でござるか・・・何が伴侶になるでござるか・・・結局のところ拙者は銀次殿の足手まといの何でもなかったでござる・・・こんななら・・・いつそ・・・」

・・・拙者が死んでしまったほうがよかった・・・」

「・・・楓」

楓の最後の言葉を聞き、真名は立ち上がる。そして楓へと近づき、

「ふざけたことを言うな!!」

「ッ」

「ま、真名さん落ち着くヨ!!」

ガシツ、と真名は楓の襟を掴み持ち上げ壁にぶつける。楓は背中を打たれたためか、多少咽る。鈴はいきなりの真名の行動に慌てて止める。だが、真名はその鈴の静止も無視して楓に怒鳴りつける。

「お前は・・・銀次さんが何でお前を助けたのかわかってそんなことを言っているのか!？」

「・・・」

真名に胸倉を掴まれながら楓は真名の言葉を聞く。

「銀次さんがその身を挺してまで楓を守ったのは・・・あの人がお前のことが大事だからだろう!!なのに守られたお前がそんなんでどうする!!」

「うウ・・・でも・・・でも・・・拙者が足手まといだから・・・銀次殿が・・・」

真名が怒鳴るなか、楓はまるで幼い子供のように泣く。真名はそれを見て殴りつけてやるうか?と思ひ拳を握ったが・・・やめた。掴んでいた襟も放す。

「・・・もういいさ・・・これ以上言ってもどうせ無駄だろう・・・でもね楓。お前がそんなんじゃない・・・銀次さんが目を覚ましたとき、銀次さんが悲しむぞ?それでもいいのか?」

「・・・ヒグ・・・銀次・・・どのが・・・?」

ああ、と真名は答える。

「せっかく命を張ってまで護った相手が・・・大事な相手がそんな落ち込んでいるのを見たら・・・銀次さんはどう思う？・・・まあ、そういう落ち込む原因を作った銀次さんにはいい薬にはなると思うけどね・・・」

確かに楓が落ち込んでいるところを見せれば、間違いなく銀次にはいい薬にはなるであろう。楓も真名の言いたい事が理解しはじめた。

「だから銀次さんが起きたら・・・そうだね、思いつきり泣きついてみな。多少はこちらの気持ちもわかってもらえるだろう・・・だから自分が死ねばよかったなんて馬鹿なことを言うんじゃないよ楓」

「う・・・ん・・・」

真名の言葉を聞いて、楓はコクリと頷く。そうだ、銀次が死に掛けてこんな苦しいのに楓が死に掛けたら銀次はどうなるか・・・おそらく楓以上に怒るだろう。変体刀の全戦力を持って麻帆良・・・いや、もしかしたらネギの故郷であるウエールズですら跡形もなくなるだろう。

楓はゴシゴシと自分の目を擦り、顔を上げる。そして真名のほうへと目を向け、礼を言う。

「ありがとうでござる真名・・・目が覚めたでござるよ」

「ふうやっとかい・・・まあ、本来ならあのまま放って置いて私が銀次さんを貰ってもよかつたけど・・・そんなんで勝っても私は嬉しくないからね」

真名はため息を吐き、その場からクルリと後ろを向く……どうやら恥ずかしいらしい。でもそれを黙ってみていた鈴は見逃さなかった……真名の目に涙が溜まっていたのを

「（ああ……真名さんも本当は泣きたいのだろうネ……）」

どんなに気丈に振舞っているとはいえ、真名にとっての想い人でもある銀次が死に掛けたのだ……本来なら楓のように泣きたいのだろう。だが、見せない。真名が涙を見せるとき……それは銀次が起き上がったときに見せる嬉し涙だろう。

鈴はふう、と過去でも未来でも変わらない二人にため息を吐いた。

「（本当……幸せ者ネ……銀次さんは……）」

自分もその中に絶対に入りたいと思いつながら、鈴もまた銀次の心配をする。

三人に……多くの変体刀や友人から心配される銀次……はたしてその思いは届くか……？

〳〳四季崎の家・庭〳〳

みなが心配するなか。銀次は四季崎との対決をしていた。

「……三回か。以前と比べたらマシなほうだな」

四季崎は先ほど放った啄木鳥の結果を見ながら呟く。啄木鳥とは四季崎が考え、連続で豪雨の如く勢いで突きを放つ技だ。これは刀語の原作で実際に四季崎が使った三段突きを強化したもので、一撃でも掠れば後は蜂の巣になるまで突きまくられ、最終的にはミンチになる……はずなのだが、

「はあはあ……チツ……本当に化け物染みた技を使うな……」

しかし銀次はそれを三撃ですませることができた。以前なら十撃や五撃に対して、三撃まで減らしたのは素晴らしきことだ……しかし、刺された場所は右足、腹部、左肩と移動に支障がきたすところなのがキツイ。

銀次は呼吸を整えながら対策を考える。

「（考えるとといっても……生半可な考えで攻め込めばコッチが斬られるからな……）」

四季崎のその剣技は膨大な量だ。どのような状況、環境、体制、刀の種類、はたまた様々な武器を使いこなせるように作られた四季崎流……その技の量は千なんてものではない。万を超える。ナギ・スプリングフィールドが『千の魔法を持つ英雄』なら四季崎は『万の剣技を持つ刀鍛冶』だろう……剣士じゃないのはあしからず。そんな銀次の心を見透かしてか、四季崎は刀で肩を叩きながら銀次に告げる。

「一つ言うがな銀次……今のお前じゃ絶対に俺に勝てないものがある」

「絶対に……勝てないもの？」

聞いた瞬間、んなもんあり過ぎてわかるかボケッ！と心の中でツッコミを入れる。剣技にしろ何にしろ、銀次が四季崎に勝っているものがあるとは思えないのだ。すべてにおいて規格外の男・・・それが四季崎記紀という男であり刀鍛冶だ。

「・・・まあ、それがわからないうちはお前は絶対に俺には勝てねえよ」

「そうか・・・よ!!」

銀次は袖に隠していた棒手裏剣を取り出し四季崎に投げつける。だが、

「無駄だつて言ってるんだろ」

それらをキンキンツと刀で弾く。銀次は舌打をしながらも今度は袖から鎖分銅を取り出し、四季崎に投げつける。

ジャラツ!!

鎖は見事に四季崎の刀に絡みつく。銀次は剣士であると同時に忍者でもある。ゆえに刀以外の武器も扱えるため鎖分銅も勿論扱える。銀次は絡みついた瞬間、四季崎へと駆け出す。

「ヨツと」

カキンツと刀を少し傾けただけで鎖が切り裂かれる。普通は滅多に

斬ることができないのに、さすがは変体刀だ。だが、銀次もすでにそれがわかっていたため残った鎖をそのまま捨て四季崎へと斬りかかる。

「ハアアツ!!」

「甘い甘い!!」

銀次が唐竹で斬りかかるも四季崎はそれを刀で捌く。そして捌いた勢いを利用して銀次へと左袈裟の一太刀を食らわす。

「うおっ・・・!!」

だがそこは剣士である銀次。迫り来る刀に身体が当たらないように避けようと・・・したが、

「ツ!!」

ズキンと足に痛みが走る。先ほど四季崎が放った啄木鳥を喰らった際にできた傷だ。痛みが走ったせいでか銀次の動きが一瞬止まる。それが命取りへと繋がる。

「貰ったア!!」

「しまっ・・・!!」

迫り来る四季崎の斬撃を銀次は怪我をしていない左足で後ろへと身体を押し出す。しかし人間の体自体と人間が振るう刀・・・どちらが速いかなど目に見えている。

「グツ!!」

額に走る痛み。銀次は四季崎の攻撃をギリギリ避けたものの、完全にはよけ切れない。軽くではあるが額を切られた。

銀次はとにかく体制を立て直そうと四季崎から距離をとる。

「ハアハア・・・チツ」

銀次は額から流れる血を左手で押さえながら舌打をする。額に傷を付けられると、どんなに浅かろうと血が激しくでる。すると視界が奪われるため戦いが難しくなる。まあ、四季崎はそんなのを狙っていたわけではないが・・・。

「(クソツ・・・片目持ってた状態だな・・・どうする?)」

銀次は無駄だと思うが改めてどうするか考える。何回かここに来たことがある銀次だが、いまだ四季崎に勝てずじまいだ。

「正直な話な銀次・・・」

どうするか考えていた銀次に、刀を軽く振るって四季崎が話しかける。

「お前はかなり強くなってる。おそらくだが、完了した虚刀・鑢以上の強さを持っている・・・だがな、お前さんは『あるもの』が欠けてるがために弱い」

「・・・なら、その『あるもの』ってのは一体なんだ?」

「自分で考えな」



「・・・ケチが」

軽いやり取りをしているように見えるが、実際は殺されるかどうかのところまで刀を振るっている二人は常に気を緩めることができない。そんなやり取りをしながら、四季崎はさらに続ける。

「まあ・・・強いてヒントをやるっていうなら・・・『思いやれ』・・・かな」

「『思いやれ』・・・だア?・・・一体何を・・・」

銀次は四季崎が何がいいたいのかまったくわからなかった。しかし、なにやらその言葉を聞いて胸に引っかかるものを感じた・・・。

「（ああ?なんだ・・・この胸に引っかかるような感じは・・・?)」

「わからねえならそれがお前の限界ってことだ・・・さて、そろそろ終りにするか」

そういふなり、四季崎は刀を構えた。刀を抜き身のまま、まるで居合をするかのような構えにする。

「気づけよ銀次・・・じゃなけりや・・・お前が死ぬだけだ」

「ッ（コイツは・・・ヤバイ!!）」

今まで見たことがない構えに銀次は背筋に冷たいものが走る感覚が走り跳び下がる・・・だが、

「遅い……。四季崎流……。飛燕」

居合の如く速さで放たれた斬撃。それはまさしく燕。銀次はその攻撃を避けることはできないだろう……。

「(チツ……。死んだと思ったらまた死ぬのかよ……。随分とあの世の奴らに好かれたもんだ)」

四季崎の刀が段々と迫りつつあるなか。銀次は様々なことを“思い”出した。

楓と一緒に過ごした日々、

楓と一緒に修行した日々、

楓と一緒に苦労した日々、

色々な日々を過ごした銀次だが……。そこでふと気付いたことがあった。

「(そっぴや……。楓はいまどう”思っている”んだろうな……)」

以前にも似たようなことがおきて楓にこっ酷く怒られたっけ……。と懐かしみながら思い出す。そしてそんな時言う言葉は決まって

『拙者や……。他のみんなの気持ちも考えて欲しいでござる!! 毎回毎回……。血まみれで担ぎ込まれる銀次殿を見るこっちの”思い

”を気付いて欲しいでござる!!”

その言葉を思い出し・・・銀次はふと気が付いた。

「（・・・ん？”思う”・・・さつき四季崎には”思いやれ”って言われて・・・何をだ？いったい何を思いやれって・・・）」

銀次は喉元まで何かが来てるような感じがしたが、それが何のかわからないでいた。わかりそうでもわからない。もともと悪い頭なので考えてもどうしようもないだろうが・・・すると、ふと昔の記憶の一部が浮上してきた。

「（・・・そういや、楓と以前任務中にヘマして相手の攻撃から楓が庇ってくれて・・・その後怒りのまま暴れまわったときがあったな・・・）」

基本銀次は楓を前線に出さない。『とある事件』以来、たまに銀次の仕事に付くような楓は後方支援として活躍させることにした銀次だが、ある日銀次がヘマをやらかした際、楓がそれを庇ったことがあったのだ。

その際に楓は相手の弾丸を喰らった。まあ、9mm弾が腕を掠った程度だったが・・・それだけで十分だった。気付いたときには銀次は相手を愉快な死体オプジエにして楓を抱えて里まで全力疾走していた。その後の楓が治療を受けてる際、銀次は自分の弱さに激しく後悔をして・・・、

「（・・・ああ・・・なるほど、四季崎が言いたかったのはそういうことか・・・）」

銀次は気が付いた。四季崎が言った『思いやれ』という言葉の意味・

「・・・それは『相手の気持ちに気付いてやれ』ということだ。確かに『護る側』にしたら命投げ打ってまで助けられたなら満足だろう・・・だが、『護られた側』からしたらどうだろうか？ましてやそれで死に掛けたら・・・仮に死んだとしたら、残された人間はどう思うだろうか？護ってくれたとはいえ・・・それで目の前で死んだら・・・残された者はどう思うだろうか？自分のせいだと激しく後悔して、そのまま立ち直れないかもしれない。下手したらそのまま後を追うようなこともするかもしれない。銀次はやっと四季崎の言いたいこと・・・そして楓・・・今は真名や鈴の気持ちを始めて気付いた。」

「ならば後は簡単だ・・・死ななければいい。」

「う、おおおおおッ！！！！！！！！」

銀次は声を上げながら身体を無理に動かし後ろへと跳び下がる。四季崎が放った斬撃は銀次を捕らえることなく空を斬った。

「ほう！いまのを避けるか・・・！！！！」

四季崎自身もまさか今のが避けられるとは思っていなかったため、感嘆の声を上げる。そして跳び下がり距離を置いた銀次の目を見て・・・ニヤリと笑う。

「ほう・・・やっとこさ気付いたようだな・・・銀次」

「・・・ああ、おかげさまでな」

四季崎が見た目・・・それは大切な者を死んでも守るための覚悟を決め、なおかつ『何が何でも生き残る』覚悟ができた目だ。

「そつだ銀次・・・お前に足りなかったのはまさにその目だ。何が何でも生き残って・・・どんなに泥水啜ろうが生き残ろうとして足掻く・・・その覚悟だ」

四季崎はくくつと笑う。しかしその笑みもどこか自嘲気味に見える。だが、その自嘲気味な笑みもすぐになくなり、真剣みを佩びた顔になる。

「さあ銀次・・・構えろ。今度は手加減無しだ・・・気イ抜くなよ」

「ああ・・・当たり前だ」

四季崎は先ほど同じように鞘無しの居合構えで構え、銀次を見据える。対する銀次は斬刀を鞘に収め血をため、斬刀狩りを発動・・・だが、

「（・・・見た目は斬刀狩りそのもんだが・・・中身はまったく別モンだなありゃ・・・）くくつ・・・さアて、いったいどんな面白い技をみしてくれるんだ？」

「そいつは受け手からのお楽しみだよ四季崎・・・いくぞ」

「きやがれ銀次。お前の全力をここでぶつけてみる」

互いに緊張が高まり・・・そして、

カサッ

「ハアアアアッ！！！！！！」

「オオオオオオッ！！！！！！」

葉が動く音と共に、二人は互いに駆け出す。銀次は悲鳴を上げる肉体に鞭打ちながら四季崎へと駆け寄る。

「（零閃は四季崎が考えた必殺技・・・なら、俺は俺が考えた『一撃必殺』の技を使う！！）」

銀次は武術においては一撃必殺が一番だと認識している。だが、銀次は職業上真正面からの攻撃はあまりしない。特に相手が多数いるなら手裏剣砲やらを使い一斉に殺す。あるいはオーバーキルを行うのが銀次の大体の戦法だ。

だが、この技は『忍び』としての銀次ではなく『剣士』としての銀次が考えた必殺技だ。それはどのようなものかと言うと、

「（零閃は抜いたら即座に収める光速をも越える抜刀術・・・ならその『収めるときの力』をそのまま『抜くときの力』に変えれば・・・）」

四季崎との距離が短くなり、肉薄するほどの距離になる。銀次は鞘に手を掛け、

「（倍以上の力になる！！）」

一気に引き抜く。だが、この技自体もそうだが一撃必殺という技は大体死に体になる。そうならないように工夫された一撃必殺の剣技も存在するが、大体は死に体になる。今回放つ銀次の技もそれに類似するものだ。

だが、だからといって銀次は死ぬつもりはない。つまり勝つために放つのだ。そしてその放つ技は

「斬刀・鈍限定奥義斬刀狩り——零閃編隊——神風！」

「四季崎流——飛燕——！」

その技は、その昔元寇が攻めてきた時に二度も日本を守った神が吹かせる風……。第二次大戦時は勝利を呼ぶためにと作られた特殊部隊に付けられた名前……。銀次はそれらを参考に作り上げたのがこの『零閃編隊——神風』だ。

当初、これを作ったときは自分の命を捨ててでも大切な者を護る。そのために作った。だが、今は違う。今は……。生き残る為にこの技を……。使う——！」

「ハアアアアアッ！！！！！！！！！」

「ラアアアアアアッ！！！！！！！！！」

銀次と四季崎の斬撃がぶつかり合う。ギヤリギヤリッ——と激しい音をさせながら二人の刀が鎧を削る。しかし、互いに負けない。押し比べをするが如く刀を、身体を押し出す。

銀次は体中に響き渡る痛みすら気にしていないのか、傷口から溢れ出る血すらも無視して押す。対する四季崎も負けないかの如く刀を押し……。すると、

ジャリンッ!!

互いの刀が攻撃線上から外れお互いの身体を刀で斬り付ける。そしてその際の突進力もあいまり

ズゴンッ!!

互いに抜ける。そのまま二人は二〜三mを滑り・・・止まる。

「・・・」

「・・・」

沈黙。ただそれだけが続いた・・・だが、急に銀次の身体が震え、

「・・・く・・・そが・・・」

倒れた。倒れる際腹部から血が噴出す音をさせ、銀次はそのまま地面へと倒れた。

倒れた音を聞いた四季崎はスッと普通に立つ。そして己の刀を光に



照らし、

「……くそはデメエだよ銀次」

ボソリと四季崎が呟いた瞬間。四季崎が手に持った刀がピキンッ！音をさせ折れた。さらに、

ブシューウウウッ！！

「今回は……てめえの勝ちだ……銀次」

胸部から血を噴出しながら、四季崎も倒れる。

こうして、忍びであり剣士でもある桐野銀次と、刀鍛冶であり剣士でもある四季崎記紀の二人の戦いは幕を閉じた。



## 第三十四話（後書き）

どうでしたか？瀬流彦は以前から作者の中で仲間にしたと思っていましたので仲間にしちゃいました（笑）設定を考えてくれた完全怠惰宣言さんには感謝です。

さて、ここでちょっと聞きたいことがあります・・・それはずばりパクティオーです。楓や真名はすでに強力な変体刀を持っています。が、どうせなら仮契約もやらせたいと思います。そこで皆様にごのようなアーティファクトがいいのかなどを是非とも伺いしたいと思います。

あと、四季崎が作中で使った四季崎流の技も募集中です。

次回予告！！

長い戦いを終えた銀次と四季崎。二人はしばらく傷を癒した後、銀次は四季崎に呼び出された。

「銀次・・・こいつをお前にくれてやる」

「おい・・・コイツは・・・!!」

はたして銀次は一体四季崎から何を渡されたのだろうか・・・？

そして、銀次は無事に現世に戻れるのか・・・？

「う・・・か、えで？」

「あ、ああ・・・銀次・・・どの・・・」

乙ご期待！！

最後に変体刀の案を考えてくださったパールパレーパさん。瀬流彦の仲間にする設定を考えてくださった完全怠惰宣言さん、ありがとうございます！！

### 第三十五話（前書き）

楓のパクティオーカードを手に入れて上機嫌な銀閣です。

いやっほオオオオオオオオオツ！！！！遂に、遂に遂に手に入れたぜ楓のパクティオーカード！！アマゾンで購入したゼイ！！

すみません取り乱しました。いや、バイトが忙しく中々返信も出  
来ず執筆をする時間もほんの少ししか取れないなか・・・何とか書  
けました。

さて、今回はほぼ四季崎邸の話ですが・・・四季崎のキャラの壊  
れっぷりがハンパないです（笑）

構わねえ、掛かってこいやあ！！という方だけどうぞ。

それではどござー！！

### 第三十五話

「はあはあはあ……!!」

麻帆良学園の裏にある山の中。そこに一人の少年……大量殺戮者<sup>えいゆう</sup>の息子であり、自分の生徒を殺そうとした殺人教師であるネギ・スプリングフィールドが走っていた。

「はあはあ……こ、ここまでくれば……」

肩で息をしながら安心した顔で辺りを窺う。ネギは先ほどの襲撃からしばらくあの場で呆然としていたが、すぐに楓の『殺してやる』発言が効いたのか明日菜を残してその場から逃げた。

「あ、兄貴よ……こうなったらこの責任者のところにいこうぜ!!その責任者も魔法使いなんだろ?なら匿ってくれるはずだ!!」

そしてそのネギの肩にはネギが逃げる際に一緒に逃げた殺人示唆をしたカモベール・アモミールがいた。

カモは先ほどの襲撃が失敗したので必ず逆襲がくると思い、おそろくこの最高責任者なら匿ってくれらると思つた……だが、残念ながら今の学園長はむしろ逆のことを考えているとは思わないう。なにせ、学園長は逆にネギを捕まえ……最悪は怪我を負わしてもいいと言つただから。

だが、残念なことにそんなことを知らないネギたちは、

「う、うんそうだね。学園長先生なら絶対に助けてくれるよね……」

「ネギは学園長も『立派な魔法使い』であると認識しているため、自分のことを絶対に助けてくれると思っっている。少し前ならそれもしただろうが、残念ながらそれはない。むしろネギを『犯罪者』として捕まえるだろう。・・・そのときだ。」

「やあネギ君・・・見つけたよ」

「だ、誰ですか!？」

ネギは先ほどのこともあり多少なり神経が鋭くなっている。辺りを窺うように目をさ迷わせながら警戒する。すると、木の陰から・・・、

「ああ、落ち着いてよネギ君・・・僕だよ瀬流彦だよ」

ザツザツ、と瀬流彦が木の陰から現れた。その顔にはそれはそれは非常に『いい笑顔』を浮かべている。

「え、え?・・・な、なんで瀬流彦先生がこんな所に・・・?」

ネギは困惑した。瀬流彦は確かに職場と一緒にたまに話したりもする。だが、そこまで親しいわけではない。だからなぜここにいるのか・・・それがわからなかった。しかもこのタイミングで。その疑問に気付いたのか、瀬流彦が答える。

「ああ、実は僕も魔法使いでね。学園長から君の『捕獲』<sup>ほし</sup>を頼まれているんだ」

「え、ええ！？せ、瀬流彦先生も魔法使いだったんですか！？」

なにやらムカつく反応だなあ、と思いながら瀬流彦はコメカミをヒクつかせる。まあ、親友を傷つかせたという理由も相まっっているからだろう。瀬流彦はいつでも『捕獲』できるように心を落ち着かせる。

「（心は熱く、頭はクールに・・・むかしっからよく言われるからなあ。気をつけないと）ああ、そうだよ。他にも少しだけいてね・・・まあ所謂少数精鋭の者達ばかりだよ」

瀬流彦は見た目によらず頭に血が上りやすい性質で、昔からよく頭を冷やせといわれ最近直ってきたと思ったのだが・・・銀次と出会ってか戻りつつある。

少数精鋭も間違っではない。実際この前の粛清戦に参加したのはネギのような二流三流ばかりだったからだ。それを聞いてかネギは暗闇の中に一筋の明かりが見えたように嬉しそうな顔になる。

「少数精鋭・・・それなら桐野さんにも勝てるかもしれませぬね！」

「・・・はあ？」

ネギの言葉に瀬流彦は『何言っつんのコイツ・・・？』という顔になる。銀次に勝つならそれこそ超弩級戦闘艦を百集めても勝てないだろう。

しかしそんなことを知らないネギはうんうん、と一人で納得をしている。



「少数精鋭の『立派な魔法使い』の皆さんがいれば、絶対にあの悪者の銀次さんも倒せます!!!」

「・・・」

プチッ、と瀬流彦の頭の中で何かが切れる音がした。大事な親友である銀次を悪人扱い・・・しかも人を殺しかけたのにも関わらずさらに殺そうとする態度・・・瀬流彦の我慢の限界が・・・越えた。

「あ、でもほかに誰がいるんで「ネギ君」はい？何ですか瀬流彦先生」

急に声を掛けられ、ネギは何事だろうと思いつつ瀬流彦のほうへと身体を向けた瞬間、

ドゴンッ!

「ウギッ!!!」

突然、ネギは腹部に衝撃が走った。それは先ほど楓に蹴られたときと似たような痛み・・・だが、それ以上に減り込んでいる。ネギはそのまま吹き飛び、近くにあった木に体をぶつける。

「あ・・・ぐ・・・!!!」

ネギは先ほどとまた一段と上の痛みにのたうちまわる。なぜネギがここまで痛がるのか？それは蹴り方にあった。

先ほど楓が放ったのは足刀蹴り・・・いわば足の側面での蹴りだ。

これは破壊力が高く顎に思いっきり決めれば顎が砕けるほど。先ほど楓はネギの腹部に放ったが、錯乱状態ということもあって外してしまっただ。

だが、瀬流彦が放ったのは足刀ではない・・・足先蹴りという蹴りだ。名前の通りつま先で蹴る技で、その分面積も小さいから相手に与えるダメージも大きい。瀬流彦はフルコンタクト空手の試合では決め技としてよく使う。

しかも今回瀬流彦が決めたネギの急所は・・・肝臓である。肝臓は狙いやすい上に刃物で刺せば十分殺すことができる人体急所の一つだ。さらに、打撃を受けると激痛が走りしばらくまともに動けなくなる上に、激痛のあまり気絶もできないほどだ。

「・・・本当はさあ」

「あう・・・ヒッ・・・!!」

怯えるネギに対して瀬流彦はゆっくりと歩きながらネギへと近づきながら話し出す。

「本当はさあ、君のことを出来るだけ無傷でつれて来いって言われたんだけどね・・・でも、それももうできないみたいだ・・・なにせ」

そしてネギの近くまで近寄り拳を握り締め、振り上げ

「君は・・・僕の大切な『友人』を侮辱したんだからな・・・!!」

ネギ目掛けて振り下ろした。

しばらく森の中には肉を打つような音が木霊した。

〃〃四季崎邸〃〃

四季崎との激しい戦闘が終りしばらくして。四季崎妻子に発見された二人は家へと担ぎ込まれ、傷の治療をしていた。

「う……ん……」

そして四季崎邸の居間。いまここは銀次の診療の部屋として使われている。そしてそこで寝かされている銀次はどうやら気がついてらしく、呻きながら目をゆっくりと開ける。

「……知らない天井だ」

お約束な発言をしながらも、銀次はボーとした頭をフル回転させながら現状を確認する。

「（……ん。ああ、ここは四季崎の家の……居間だったな……でも肝心の家主たちがいないがいったいどこに……）って勝負は……！！」

起き上がるうとした銀次だが、腹部に痛みが走り、また布団へと倒れこむ。そっぴや腹斬られてたんだっけ……、と思いながら銀次

は堅くなっている首を動かし辺りを窺う。すると・・・、

「ねえあなた・・・私言いましたよね？『あまり無茶をするな』・・・と」

「はい・・・確かに仰せられました」

銀次から見て右のほう・・・部屋のほうに視線を向けるとそこには四季崎夫妻がいた・・・四季崎は正座でその女房は仁王立ちで。どうやら説教中らしい。

「ですよね・・・なら何でこんなに怪我しているんですか・・・？」

「いや・・・なに。俺のもってる全てのモノを銀次にやろうと思つてな・・・その試験を「それで死に掛けるほどの怪我をしては意味がないと思うのですが・・・あなた・・・？」・・・はいまったくその通りでございます」

プルプルと、土下座の形をしながら四季崎が震える。おそらく、この姿を誰かに見せてもかの有名な刀鍛冶だとは誰も信じないだろう。むしろちよつと羽振りのいい恐妻家と言つたほうが皆、信じてしまふいそつだ・・・冗談抜きでそう見えるのだからしょうがない。

「（アレが伝説の刀鍛冶にして最強の剣士・・・全然想像できねえな）」

先ほどまでの激しい戦闘。そして数多くの四季崎が作った変体刀の数々を思い出しながら、銀次はそう思った。

「ん・・・？あ！銀次君起きたんだ！！」

そんな微笑ましい（？）夫婦喧嘩を見ていると、銀次の左側にある廊下から声が聞こえた。聞き覚えのある声のためそちらを見てみると、

「・・・」

「ん？どうしたの銀次君？」

そこに居たのは二十歳ぐらいの女性で、異様なまでに楓に似ている女性だった。しかし喋り方も普通で、目は常に開眼状態で髪も全体を纏めてポニーテールのようにしたものだ。体つきもほとんど楓と変わらないため、まさに瓜二つだ。

まあ、ここまで言えば大体の人はわかるだろうが・・・この女性こそが四季崎記紀の愛娘である四季崎桜花だ。

銀次は最初会ったとき思わず「か、楓！？何でこんなところにいるんだ！？」とガチで驚いたほどである。

「んも、さつきはビックリしちゃったよ銀次君。父さんと一緒に倒れてると思ったらお腹のところから血が溢れてるし・・・心配したんだよ？」

「あ、ああ、そいつはすまなかったなかえ・・・桜花さん」

銀次は思わず楓といいそうになってしまふところだったが、寸前で直す。だが、桜花は聞き逃さなかったのでクスリと笑い。

「ふふ、楓ちゃんと間違えてしまふのはしょうがないわ。何せ私と楓ちゃんって瓜二つなんだもの。無理ないわ」

「・・・すみません」

銀次は赤面しながら反対の方を・・・見ようと思ったが四季崎夫妻が絶賛喧嘩中のためしょうがないのでそのまま天井を見る。

「おのれえ・・・銀次イ・・・！！俺の大事な愛娘を誑かすとは・・・！！！」

「咲さんどうやらまだ足りないらしいのもっとコツテリ絞ってやってください」

「ちよ、おまつ。それはマジでキツ「ええ、わかったは銀次君」ま、待つんだ咲。落ち着いて話し合えば分かり合え・・・ってうごおッ！？あ、足が痺れ・・・！！！」

なにやら勘違いした四季崎に対して、銀次は情け容赦もない一言を告げる。咲はそれに笑みで答えながら足が痺れてまともに動けない四季崎の後ろ襟を掴みズルズルと引きずりながら部屋からでていく。

「水飲む？」

「ああ、お願いします」

四季崎夫妻が出て行ってしばらく無言な銀次と桜花だったが、桜花はもう慣れてるらしく銀次に水を進める。対する銀次は多少すつきりしながらも、どこか四季崎に申し訳ないと思いつつながら心の中で笑う。

今日の四季崎邸は平和である。

「……なんだろうこのデジャブ感は……？」

「気のせいじゃない？」

くくしばらくしてくく

「……それで？ いったい話ってなんだ四季崎。……そして大丈夫か？」

数時間だろうか？ 時間が経ち銀次も動けるようになったときようやく四季崎夫妻が戻ってきた。だが、肝心の四季崎はなぜか魂が抜けたように白くなっており、対する咲は肌がやたらとツヤツヤしていた……いったい何をしていたのか聞こうと思ったが止めた銀次は、以前と比べたらはるかに空気を読めるようになっただろう。するとそんな真っ白な状態の四季崎が呻くように告げる。

『うつ……後で話があるからちよつと待ってる』

そういつてそのまま地面へと倒れふした。

それから一時間。四季崎もまともに動けるようになり二人は四季崎

の私室へと移動した。

「……お前、今度覚悟しとけよ」

「その言葉そのままお前に返してやるよ」

四季崎は部屋に入って座るなりジト目をしながらそんなことを告げるも、銀次はどこ吹く風か。斬られた腹部を撫でながら口笛を吹く。それを見てもつかい斬ってやるうかと思つた四季崎だが、

「ふう……まあ、いい。ここでまた暴れたら……今度こそ咲に色々と抜かれちまう……」

「……いつたいどんなことされたんだ……？」

プルプル震える四季崎。さすがに何をされたのか銀次も興味を持つたため聞いてみたものの……ただ震えるだけで返事がない。

「まあ別にいいや……それで？俺に話つていつたいなんだよ四季崎」

「ん、ああ……そうだなそつちが今回の本題だったな」

ゴホンと咳をする……体がまだ若干震えているがそこはツッコまないであげよう。

「まあなんだ銀次。今日お前と戦つたわけだ」

「……ああ、そうだな」



四季崎の言葉を聞き、銀次は苦い顔になる。まあ、本人は負けたと思っ  
ているため無理はないだろう。その顔を見て四季崎もああ、こ  
いつ自分が負けたんだと思ってるんだ、と納得する。

「（本来ならここでカラかうのが一番楽しいんだが・・・時間が微  
妙だから止めるとしよう）・・・一応勘違いしてると思うから言う  
けどよ・・・あの戦い、お前の勝ちだぞ」

「・・・は？」

銀次はけるつとした顔で告げる四季崎の顔をキョトンとした顔で見  
る。そのキョトン顔が面白かったのか、四季崎はブツ！と手で口  
を押さえながら噴出す。

「ブツ！！ちょ、おま、まじ顔が面白い・・・！！」

「え？あ？いや・・・だってよお前の言ってることがよくわからな  
くてよ・・・第一笑うな！！」

笑う四季崎にキレるも、四季崎はそんなの知ったこつちやないとば  
かしくに笑いまくるだけだった。そこで銀次は伝家の宝刀を呟く。

「・・・あんまり笑ってるそと咲さんにまた頼むぞ（ボソツ）」

「マジすんませんでした」

蚊が鳴くぐらいの声だったのにも関わらず、四季崎はそれを一字句  
一句聞き漏らさずに聞き、0.1秒の速さで土下座をした。・・・  
よほど奥さんが怖いらしい。

「（こいつが本当に四季崎・・・なんだよなあ。本当イメージと全然大違いだ）それで？さっきの俺の勝ちつてのはどういうことだ？俺からしたら完全に負けたと思ったんだが・・・」

さすがにこのままでは話が進まないと思ったのか、銀次は四季崎に放すように促す。四季崎もおう、と答えて元に戻る。

「まあ、確かに先に倒れたのはお前だがな・・・。だが、今回の戦いはお前に『気付かせる』ための戦い・・・そして『あるもの』を渡すためのいわば試験だ」

「試験？・・・だとしても俺は負けたりうが」

「ああ？なんだお前、俺に勝てると思つてたのか？お前が俺に勝とうなんざ一兆光年早いんだよこのスカタン」

「・・・」

四季崎の言葉にビキツと額に青筋を浮かべる銀次。だが、言ってることは間違っていないので言い返せない。銀次は脳裏に四季崎を八つ裂きにした映像を想像して気を静める。そしてふとあることに気付く。

「（ん？・・・あるもの『？』・・・おい、四季崎。『あるもの』つていつたいなんだ」

銀次は四季崎がいった『あるもの』という言葉が気になり聞く。すると、四季崎は一旦黙る。

「・・・むかしのことだ・・・」

しばらく黙っていると、四季崎が急に話し出した。

「俺もよ……お前とまったく同じ考え……自分が死んでも大事な者が無事ならそれでいい』って考えだった」

四季崎の独白が続く。

「咲に出会って……しばらくしたときだ。俺と咲が不要湖で釣りをしていたんだ……だが、そこにどこぞの刺客がやってきてな。すぐに瞬殺したかな」

「？なら別にお前の考えを変えろということ……」

「まあ、待て。ちゃんと続きがある……そしたらその殺した男がよ……死ぬ間に咲目掛けて手裏剣を投げやがったんだ……」

そこで四季崎の顔が怒りに染まる。だが銀次に対してではなく、そのときの刺客のことを思い出したのだろう。そして四季崎がそのとき何をしたのか……、

「咲さんを庇って自分が手裏剣の餌食……か」

「ああ……その通りだ」

先ほどの怒りの表情から一転。まるで苦虫を噛み潰したような顔になる四季崎。

「……それで俺が考えを変えたのはその三日後……俺は三日間生死の境をさまよっていたらしくてな……そして目が覚めると……」

・何があつたと思う?」

「・・・さあな」

銀次も似たような経験をしたことがあるため、目の前に何があつたか・・・わかる。だが、あえて言わない。  
四季崎は重々しそくに口を開いた。

「・・・そのとき俺の目の前にいたのはよ・・・目の下に隈作って必死に俺の看病をしていた咲がいたんだ」

「・・・」

なんとなく・・・銀次にはその光景が想像できた。実際銀次も瀕死の重傷をおつて意識を失い、目が覚めると目の前に楓が必死に自分の看病をしているのだ。

「そしてよ、目が覚めたら咲が泣きながら抱きついてきてな・・・  
「もう、こんなムリはしないで下さい。あなたが死んだら・・・私は・・・」って言うてな・・・そのときに俺は自分の考えが変わった・・・『泥に塗れようが咲のために絶対に生き残る』・・・ってな」

「・・・」

今なら・・・今なら銀次が瀕死状態のときの楓の心情がわかる銀次。そのときの咲の苦しみが・・・楓の苦しみが・・・銀次にはわかる。

「その後に桜花も生まれてな・・・俺はますます死ねなくなつた・・・  
・気付いたら歴史の改竄なんてどうでも良くなつちまってきて、最

最終的に咲と桜花を守る刀を、そして剣技を身に付ける為に時間を割いた」

剣技を身に突けるために時間を割く・・・銀次も『とある事件』から剣技に時間を割いた。四季崎の変体刀を参考に擬似変体刀も作り上げた。すべては自分の命を引き換えにしても大切な者を守りたいがために・・・。

「銀次よ・・・俺が何を言いたいかつてのはな・・・本当に何か大切な者を守るなら・・・『命張ると同時に何が何でも生き残る』・・・その気持ちが必要だ」

「・・・ああ、お前のおかげで俺もやっと気付いたよ・・・四季崎」

銀次は今まで『楓が無事なら自分はとうとうと知ったことではない』という考えだった。だが、今回の戦いで銀次は改めて気付いた・・・『楓のためを考えるなら、泥に塗れようが絶対に生き残る』・・・と。

「俺は・・・もうそんな簡単には死なない。楓のためにも・・・真名や鈴や他の変体刀やじりのためにも・・・簡単には死なない」

聞き様よっては自意識過剰と思われるも仕方がない発言かもしれない。だが、人間は少なからず自意識過剰にならなければ本領を發揮することはできない。

四季崎はその銀次の言葉と目を見て・・・笑う。

「ハハ、そうだ銀次。その目だ。これで最終試験クリア・・・だな」

「ああ？最終試験？」

おお、と四季崎は答える。

「さっきのセリフは口ならいくらでも言える。でもな、本当に覚悟を決めた奴なら目がそういうんだよ・・・お前の目は、まさに覚悟を決めた目だ・・・やっぱり俺の目に狂いはなかったな。お前になら渡すのに申し分ないだろう」

「だからさっきから渡すって言ってるのはいったい何なんだよ？」

そうだ。先ほどから四季崎は渡す渡すと言ってもつたいぶっている物・・・銀次はそれが何なのか気になってしょうがなかった。四季崎も「ああ、時間もねえだろうしな」といって、もう一度真剣な顔になり・・・話す。

「お前に渡すつてのは二つある・・・一つは俺の考え出した四季崎流をお前に伝授すること」

「なっ・・・」

四季崎の言葉に銀次は驚く。無理もない。四季崎絵流は四季崎が血反吐を吐くまで編み出した剣術。そう易々と人に教えるとは思わなかったからだ。そして、さらに四季崎は驚くことを言い放つ。

「そしてもう一つ・・・それは、俺の新たに作った『新変体刀』の伝授・・・そして『完結系変体刀』の使用を許可すること」

「・・・」

最早銀次はあいた口が塞がらない。四季崎流の伝授というだけで驚

きなのに、四季崎が新たに作り出した変体刀を伝授するというのだ。四季崎は死んでもなお、この世界で新たな変体刀を作り続けた。その数は2134本に及び、今でも増え続けている。そして『完結系変体刀』……これは本当に以外だった。

『完結系変体刀』四季崎が生前、死後も作り上げてるうちの分類。全ての変体刀の完結系……そしてその中でも一際目立っているのは五十本の最強と百本の準最強の変体刀、通称『五十補百補』じゅうひゃくほひゃくほ。本来、五十歩百歩とはあまり大差ないという意味だが、四季崎なりの皮肉が込められており、一つ一つの差が大きいという意味になっている。そしてこの百五十本の変体刀は一振りあれば世界中の軍隊とも戦えると言われるほどの強力な変体刀だ。

最初銀次が四季崎に変体刀を伝授されたとき『お前にはまだコイツラは早い。来るべきときが来たらお前に使用を許可しよう』と使って使えないように封印したのだ。

「最初お前を見たときは昔の俺と似ていたからな……完結系を伝授するわけにもいかなかった。そのまま力に溺れるかもしれないからな……だが、今のお前なら大丈夫だ。『何が何でも生き残る』……その覚悟があるならコイツラも扱えるだろうよ」

「……四季崎」

銀次はガラにもなく感動する。つまりは、だ。四季崎は銀次を少なからず認めたということである。伝説にして最強の男……いつも会うたびに憎まれ口を叩きつけるも心の何処かでは四季崎を尊敬している銀次。その男に認められた……それが何よりも嬉しかったのだろう。

「まあ、後はお前次第だ。さつきも言ったがコイツらはよほどの覚悟がなければ使えねえ・・・強いて言うなら毒が強過ぎるんだ」

「それがどうした。んなもん全部吹き飛ばしてやるさ・・・それに、『同じくらの毒』ならすでに自分で『作った』ことがある・・・」

それで事件を起しちまったんだがな、と自嘲気味に笑う銀次。四季崎はそのことを知っているため、あえて言わない。

「・・・ま、しけた話はここまでだ・・・覚悟はいいな？」

「ああ、大丈夫だ、問題ない」

どっかで聞いたようなネタだな、と言いながら四季崎は苦笑する。そして、もう一度真剣な顔になり右手を銀次の頭を掴む。

「・・・いくぞ」

「おっ」

答えた瞬間、銀次の脳内に『何か』が流れ込む。

「ぐっ・・・！」

銀次は脳内に一気に流れ込んだ『何か』に不快感を覚えながらも、

「（ぐっ・・・これが四季崎が編み出した四季崎流と新たに作り上げた四季崎の新変体刀・・・！！）」

そう『何か』とは四季崎が考えた四季崎流と新たに考えた変体刀だ



と気付くと、その不快感も耐えることができた。だが、軽く万を越える情報を一気に脳内に叩き込まれるので、さすがに不快感を覚えてしまう。

その不快感に耐えること数分、

「・・・ふう、よし終わったぞ」

「くっそ・・・頭痛え・・・」

四季崎が銀次の頭から手を離す。銀次は脳内に一気に情報を叩き込まれたため頭がガンガンしてならないようだ。

四季崎はその姿に苦笑するも、まあムリのねえことだと答える。

「まあさすがに一気に脳内に情報ぶち込めばそうなるはな・・・さてお次は解除か」

四季崎は指を伸ばし貫手の形を取る。完結系変体刀はすでに銀次の脳内に保存されているので、その封印を解けばいい話なので、先ほどのような痛みはないだろう。

四季崎は銀次の胸に軽く指を差し、手首を捻る。

「ほらよっ・・・と。これでヨシッと」

「・・・なんだか実感ねえな」

先ほどの痛みがないのもあってか、銀次にその実感が湧かないでいた。

「まあな。ようはお前の脳内にある完結系変体刀の封印を解いただけだからな、実感が湧かないのも無理ないだろう」

銀次の疑問に四季崎が答える。銀次はふうん、といいながらその場から立ち上がる。

「まあ、礼を言っぜ四季崎。お前のおかげで俺は新たな覚悟を決めることができた。新しい守れる力と武器を手に入れた・・・本当にありがとうな」

「はっ、野郎に礼を言われても嬉しくねえよ」

違いない、と笑う。四季崎も釣られて笑う。

「ハハハ・・・さてもうお帰りか？」

「ああ・・・さすがにこれ以上楓を・・・真名や鈴や他のやつらを心配させるわけにもいかないからな・・・」

いつもならそんなのそこまで気にしなかった。だが、今の銀次は楓たちをこれ以上心配させたくないと思っっている。四季崎はククク、と笑う。

「お前らしい答えだな」

「そうか？」

「ああ、そうだとも」

「そうなのかもな」

今度は二人してククク、と笑う。しばらく二人で笑っていたが、

「ま、このまま引き止めるのも悪いからな。さっさと帰れ銀次」

「ああ、そうする・・・じゃあな四季崎」

銀次は庭に向かって歩き出す。そしてしばらく歩いたところで、

「」

「え？なんか言ったかしきぢ」

四季崎が何かをいったかと思ひ振り返ろうとするも、銀次はその前にその場からいなくなつた。

「・・・」

「お二人ともお茶を・・・ってあら？銀次君は・・・帰つたのかしら？」

銀次が帰つた後と同時に咲がお茶を運んできた。だが、銀次の姿が見当たらないことを知り、『あら残念』的な雰囲気を出す。

「毎回毎回あなただけが見送るのはズルいわ。たまには私や桜花にも見送りさせてよ」

「はは、んなことしたらアイツがコツチに居座るかもしれないからな・・・それに俺の嫁と娘に見送りなんて贅沢あいつに一千年早い！！」

「でも、桜花が『私、銀次君の見送りしたいな』って言ってました

よ?」

「……………」

咲の指摘にビシッと答えたつもりだったが、その後の咲の言葉を聞き四季崎はピシッと動きを止めてしまう。そしてプルプルと震えながらいま消えた銀次にへと呪詛の言葉を浮かべる。

「チクシヨウ……銀次めえ、俺の愛娘を誑かしやがって……」

「まあまあ、銀次君はそういうところに鈍いですから大丈夫ですよ。……このお茶捨てるのもなんですし私が飲むとしましょうか」

クスクスと笑いながら咲は四季崎の隣へと座り、お茶を飲み始める。四季崎も震えを止めチビチビと茶を飲み始める。

「……銀次君は……もう大丈夫なんですか?」

「……ああ、アイツの目はもう大丈夫だ。昔の俺の目じゃなくなつたよ」

咲の質問に四季崎が答える。むかしの目とは咲と付き合い結婚して、刺客と襲われる前までの目のことだろう。

「なら安心ですね」

「ああ……だがコレからがアイツの正念場だろうな」

四季崎はこれから起こるであろう……いや起こることを予知した、銀次の苦難のことを思う。

「（昔の銀次なら多分途中で潰れたかもしねえが・・・今の銀次なら大丈夫だ）・・・あ」

「?どうしたんですかあなた」

銀次のことを思いだしていると、四季崎はふと銀次に言い忘れたことがあると思いつき頭をガリガリと掻く。

そして一言

「あゝ・・・そついやアイツにその内『ソツチ』の世界に行く、って言っの忘れたな」

・・・どうやら、波乱万丈なことが起きるかもしれない・・・

四季崎記紀。この男に常識は通用しない。

桐野邸・病室

銀次が襲撃され、丸三日が経った。

「・・・」

いまだ目が覚めぬ銀次が寝ているベット。その横で一人の少女・・・長瀬楓が座っていた。だが、楓はいつものほほんとした顔とはかけ離れ、目の下に隈を作り目は閉じてしまえばそのまま寝てしまうだろうということとか、ギリギリのところを開いている状態な上にこの三日間風呂も入らず看護をしているため髪もクシャクシャである。

楓はふう、とため息を吐く。

三日前、術式は完全に成功して『あとは銀次さんがおきるだけ。私達ができるのはここまでです』と狂が言ってその場を離れ、病室に移動させると狂と医刀はそのまま自室へと戻っていった。勿論その間の看病もしなくてはならないということだ、

『なら拙者がするでござる』

楓が名乗り出た。真名に言われたが、やはり自分のせいだと思ってる楓は自分で看護するといって聞かなかった。真名たちもムリをしなれば、という条件付きで楓に看護を任せ自分達もたまに顔を出すという約束をしたのだ。

そして三日間。楓は凄く献身的に銀次の看病を行っている。体の位

置を変えたり水を飲ましたり、濡れ手拭いで顔を拭いてやったりと・  
・・まるで、手裏剣で倒れた四季崎を看病していた咲のようである。

「早く起きて欲しいでござるよ・・・銀次殿」

銀次との思い出を一つ一つ思い出しながら楓は呟く。何かと自分を  
気にかけてくれた銀次・・・気付いたら好きになってしまった想い  
人。楓はそんなことを思いながら濡れ手拭いを絞り、銀次の顔を拭  
う・・・と思ったら、

「・・・ウ・・・」

「え・・・？」

呻き声が、聞こえた。楓は辺りを見回すもそれらしい呻き声をだす  
ような生き物はいない。まさか、と想い寝ている銀次にへと視線を  
向けると、

「・・・ウ、げほッ」

ピクリとも動いていなかった銀次が咳き込み、閉じていた目をゆっ  
くりと・・・あけた。そして虚ろな目で辺りを見回したあと、

「か・・・えで・・・無事か？」

「あ・・・ああ・・・」

ピタリと、楓へと視線を向けそう聞いた。対する楓はついに目を覚  
ました想い人の質問に答えることができないでいた。

いろいろと考えていた。起きてきたらどうしようかと。まずは今回のことを謝ろうか？それともすぐに自分を犠牲にすることを怒ってやるうか？笑顔で戻ってきたことを祝ってやるうか？様々なことを考えた・・・だが、いざ目覚めると楓には

「ッ銀次・・・どの・・・」

ガバツと抱きつき、震えながら

「戻ってきて・・・よかったで、ござる・・・」

嗚咽混じりの言葉を言うしかできなかった。銀次はどうしようかと思っただが・・・、

「ただいま・・・楓。・・・そして、すまなかったな」

いままで、似たようなことがあっても言わなかった言葉を言いながら楓の頭を撫でる。

こうして、新たな覚悟を決めた忍びであり剣士である桐野銀次は新たな一步を踏み出すことになる。





### 第三十五話（後書き）

いかがでした？自分のなかでの四季崎は伝説の刀鍛冶であり、最強の剣士であり、とてつもない愛妻家であり娘大好き人間という設定です（笑）

なお、劇中で紹介した新変体刀や完結系変体刀も募集します。

次回予告！！

目が覚めた銀次。周りの者はそれを喜び、祝おうということになった……だが、

「銀次殿……教えて欲しいでござる。あの時の……銀次殿が変わった『あの事件』のことを……」

「……ああ」

言いくそくに顔を歪めながら、それでも銀次は話す。

次回、遂に、銀次の過去が……暴かれる。

乙ご期待!!

なお、今回の完結系変体刀及び五十補百補の設定は さんの案を使  
わせてもらいました。ありがとうございます!!

## 第三十六話（前書き）

最近ライトノベルの「気買いをしてしまう銀閣です。

さて、どうも皆さん銀閣です。今回で遂に銀次復活です！！まあ、ちよっと後半スランプに陥りそうになりましたが、皆さんの感想を励みに頑張りました！！

それでは、どうぞ！！

## 第三十六話

〃〃桐野邸・病室〃〃

銀次が目を覚まし、楓は無事戻ってきたことを喜び泣きながら銀次へと抱き、震え嗚咽出しながら泣いていたが、

「……ん？おい、楓……？」

「……」

震えと嗚咽が止まったと思い、そのまま動かなくなった楓に不思議に思いながら顔を見てみると、

「……寝てる……か」

ムリもないだろうな、と思いながら銀次は楓の頭を撫でる。楓の目の下の隈を見ればどれぐらい心配させたか……申し訳ない思いながら撫でる。

「（髪も……こんなにクシャクシャじゃないか）……本当に心配かけちまったみたいだなあ」

「ああ、まっただよ」

楓の頭を撫でていると、扉のほうから声が掛かってきた。銀次はそちらへ向くと、

「真名か」

そこに居たのは、扉に寄り掛かるように立ちこちらを見ている桐野邸の数少ない生身の人間であり、銀次のことを思う楓のライバル龍宮真名が立っていた。

真名は腕にぶら下げている籠を掲げながら言葉を続けた。

「楓に食事を……って言われてね。持ってきたんだけど……」

チラツと楓のことを見る。そしてコツコツと銀次の寝ているベッドへと近づぐ。

「銀次さんが起きているのを気付いてね。それで入ろうと思ったら楓が泣きついたから」

「しばらく放置していたと？」

「楓はかれこれ三日は寝ていなかったらなね。寝てすぐより眠りが深くなったところを来た……というわけさ」

と真名が答えた。真名は楓とは反対側の位置にある椅子に座り、手に持っていた籠を机に置く。

「……」

「……」

しばらく、二人は無言になる。部屋にはスー、スー、という楓の寝息が響くだけだ。銀次も真名も一言も話さない。すると、

「……くれ」

「ああ？何かいったかまー」

な、と言おうとしたが……言えなかった。言う前に真名が銀次に抱きついていたので。顔を銀次の肩に押し付けるようにして両腕で肩を掴んでいる……そして真名がその状態で言葉を続ける。

「……心配、させないでくれ……私は、もう、大切な人を……失いたく……ないんだ……」

「……真名……」

震えている。泣いている。銀次はすぐにわかった先ほどの楓のような震えと、着物越しに伝わるほのかに暖かい液体……涙だとわかった。真名は過去に『魔法使いの従者』として各地の戦場を渡り歩いていたという……そして二年前、そのパートナーが死んだ。そのとき自分の不甲斐なさを何度呪った事か……銀次も似た様な経験をしたことがあり真名の気持ちもそれとなくわかった。

そしていま、真名は自分のために泣いている。過去のパートナーではなく桐野銀次という一人の人間のために……泣いている。銀次は楓の頭を撫でている左手ではなく空いている右手で真名の後頭部を包むように覆い、

「……すまなかつたな真名。……そして、ただいま……」

「ッ……ああ、……お帰り……銀次さん……」

震えながら、顔を押し付けながら真名は答えた。

しばらく、真名はその状態のまま泣いた。

〳〳二十分後〳〳

「・・・すまないね銀次さん」

「いや、別に構わねえよ。もともと俺が心配させたのが問題だったしな」

二十分ぐらいが経ち、真名は泣き止んだ。だがその顔が若干紅い。まあ普段はクールを演じているだけにこのように泣くのが恥ずかしかったのだろう。

「ああ、すまないが他の奴らに連絡してくれないか？さすがに今回ばっかしはみんなに謝りたいし・・・な」

「ああ、わかったよ銀次さん」

銀次に頼まれ、真名は顔を紅く染めながら部屋から出て行った。

「・・・」

「・・・」

部屋にはまた静寂が広まる。銀次は寝ている楓の頭を優しく、丁寧に撫でる。だが、髪がパサ付いている上に、三日間あのまま風呂に



入らなかつたらしいので油や汚れも付着しているのだろう。服装こそ変えているが若干血の匂いがする。

「（本当に俺のことを心配してくれてたんだな・・・）」

「う・・・ん・・・」

銀次が無言で髪を撫でていたがその感触に気付いたのか、楓が起き出した。

楓はポーとする頭の中目の前にいる銀次を見て、

「・・・やはり、夢ではなかったでござるな・・・」

嬉しそうに微笑み、目にうつすらと涙を溜めまた銀次の胸へと抱きつく。銀次はその楓を見て胸が痛んだ。

「（四季崎の気持ちがよくわかったな・・・）心配かけて本当にすまなかつたな・・・楓」

「う・・・うん。元はといえば・・・拙者の油断でこうなったわけだござるから・・・本当に、ごめんなさい・・・」

真名たちが大丈夫と言っているも・・・やはり楓にとっては非常に心に深い傷を覆うことでもあった。

銀次はその楓の言葉を聞き、思う。

「（俺がもつと四季崎みたいな考えだったら・・・楓もこんなに悲しまなかつただろうな・・・でも）・・・楓」

ビクリ、と楓の身体が震える。まさか、ここで銀次から拒絶の言葉

がでるのでは・・・？とってしまったからだ。だが、銀次は楓の思っていることとはまったく違うことを言った。

「楓・・・一度しか言わないからな、よく聞けよ・・・俺はな楓、お前さえ無事なら俺は死んだってどうでもいいと思っていた・・・」

「そ、そんな・・・！！拙者そんなので生き残っても全然うれしでもよ・・・楓「・・・？」」

銀次の言葉を聞き、楓は否定の言葉を出そうとする。当たり前だろう。小さい頃から自分の想い人であり、将来は一緒になりたいと思っっている相手が・・・自分のためなら死んでもどうでもいいと言っているのだ。

楓が否定の言葉を言う前に、銀次がさらに言葉を続ける。

「でもよ楓・・・。俺は死に掛けて・・・三日か？ずっと俺は四季崎の家にいたんだ・・・そしてそこで数時間だけが四季崎と戦った・・・そして改めて気付かされたんだ」

銀次は思い出す。時間にしたらほんの数十分前、そしてさらに言えば数時間。銀次は四季崎に教わり、心に決意したことを・・・楓に言う。

「本当に大切な者を守るなら・・・どんな恥晒そうと、泥に塗れ様と・・・俺は生きる。楓や・・・真名や鈴や他の奴らを悲しましたくない・・・だから俺は何が何でも・・・生き残る」

「ぎん・・・じどの・・・」

楓は銀次の顔を見る。今まで通りの不健康そうな顔つき・・・だが、

その実目だけは今までと違う目をしていた。そう、まるで何か・・・  
新たな覚悟を決めた目を・・・楓は思わずその目に見惚れてしまう。  
銀次も、楓の目を見る。

「だから楓・・・もう、俺はお前にそんな心配はさせない。どんな  
ことがあっても必ず生きて帰ってくる・・・だから・・・心配する  
な」

「う・・・ん・・・わかったで・・・」

楓は、両目に涙を溜めた状態でニコリと・・・笑い、答える。銀次  
も思わず苦笑気味に笑う。

そんないい雰囲気をかもし出していると、

「ぎイイイイイインジイイイイぐ~~~~ン!!!」

「「!?!?」」

いきなり扉がドバン!!と壊れたか?というほど派手な音を鳴らし  
開け放たれた同時に、涙声満載の音が部屋へと響きわたる。

最初室内にいた銀次と楓は何事か?と思い、警戒した・・・が、

「って楔か。お前どうしたんだそんなきゅ「ぎんじぐん~~~~!!  
!?!?」うご!?!?」

入って来たのは服装は黒いラインの入った白を基調としたセーラー  
服に赤いスカート、ブーツを着用しており、外見は高校生くらいで、

ウェーブのかかった亜麻色の髪をロングヘアにし、両側は大きな赤いリボンでツインテールに結わえている可愛らしい顔立ちの美少女だ。因みにある部分はかなり大きい少女・・・神秘変体刀 秘刀十五番・楔だ。

楔は入ってきた勢いのまま銀次へとダイブを決めた。楔の頭は見事なまでに銀次の腹に突き刺さり、完全に塞がっているとはいえ腹部の傷に思いつきり衝撃が走る。

「ぐウ・・・！！楔てめえ俺をころ「じんばいじだよ」ぎんじぐん！！」・・・ッ」

さすがに腹部に突貫したことを叱ろうと思いき楔を見るも・・・叱ることができなかった。

「うぐ、あぐ・・・わだじ、ぎんじぐんが死に掛けだって・・・ひぐっ、聞いて・・・」

楔は顔面をくしゃくしゃに歪め泣いている。楔もまた銀次を愛する刀の一人なのだ。銀次も楔が自分のために泣いてくれることに気付くと叱ることもできなかった。

「だから・・・あのクソガキの首をひっぐ、お土産に看病してあげようと思っただけドウグ、みんなに止められちゃって・・・」

「（さすがにそれはお断りしたい）」

何が面白くて嫌いなガキの血まみれの首眺めながら寝なきゃならんのだ、と心の中でツッコミつつ楔を見る。言っていることは無茶苦茶だが、自分のことを心配しているには変わりないのだ・・・銀次は楔の髪を撫で、

「(さすがに生首はいらぬが・・・まあ)心配してくれてありがとうな・・・楔」

「ひぐ、うん・・・もう、無茶はしない・・・でね？」

ああ、しないさ。と銀次は改めて先ほど決意した気持ちも簡潔に答える。勿論その新たに覚悟を決めた目を見た楔はと言うと、

「・・・あウ」

また惚れ直してしまったのである。楔は顔を真っ赤にしてトロンとした目で銀次を見る。楓はムムツ！と警戒度を上がったり・・・

「銀次さん。戻ってきてなによ・・・って、何をしてるネ？みんな」

そついいながら扉の入り口でキョトンとした顔で中を見るのは、未  
来から来た桐野銀次が作りし擬似変体刀が一本、擬似虚刀・鈴だ。  
鈴の目の前にはベッドに乗っかり銀次に抱きつきながらトロンとし  
た表情で銀次のことを見る楔と、その銀次の右腕に抱きついて楔に  
警戒心バリバリだしている楓がいた・・・正直、鈴にとっては非常  
にムカつく絵である。

鈴はスツと目を細め三人を見据える。

「おやおや三人とも・・・銀次さんが目を覚ましたと聞いてすつ飛  
んで来て見れば・・・なに銀次さん？巨乳美女二人も侍らして・・・  
なに？寝ていて溜まっていたモノを抜こうと？そういう魂胆？」

「え？ちょ・・・え？り、鈴？どうしたんだお前・・・？いつもの  
片言はどうしたんだ？・・・あと目が以上に怖いんですけど「銀次君

「！！そうならそうと言ってくれればいいのに」は？ちょ、楔。何言ってるかわからないけどとにかく黙ろう。なにやら場がこじれ「銀次殿！拙者はいつでも準備は万端でござる！！」いやだから何の準備！？楓も場がこじれると思うか「私が！！私が銀次さんのを奉仕してあげるよ！！」鈴！！だからなに言ってるの！？」

ベッドに寝ている銀次に鈴が加わり、いつもと一人違うが三人の暴走美少女に囲まれる・・・非常に羨ましい状態であるコンチクショウ。

三人にもみくちやにされる中、鈴が銀次の耳元に唇を寄せ呟く。

「もう、こんな無茶はしないで欲しいネ・・・銀次さん」

「・・・」

銀次はまた改めて気付く。鈴もまた、自分を心配してくれる一人なんだ・・・と。銀次は何とか空いている左手で鈴の頭を撫で、本日何度目かになるセリフを吐く。

「すまなかつたな鈴・・・だが、もう心配はさせない。これからは何が何でも生き残る・・・お前らを心配させないために・・・な」

「銀次さん・・・」

今度は鈴がトロンとした目で銀次のことを見る。楓は警戒度数が上がったと心の中で呟き、楔は嬉しそうにただただ銀次に抱き付いているだけだった。

「鈴。どうしたん・・・何をしているんだ銀次さん、みんな」

すると、今度は部屋に真名が入ってきた。どうやら鈴たちを呼びに来たらしいが・・・目の前の状況に先ほどの鈴の如く目を細める。しかも、銀次を想う心は誰にも負けないと自負しているだけに・・・

「ふふふ・・・三人とも酷いねえ・・・この私を出し抜こうとは・・・そこをどけえ!!!」

「「誰が退くかアアアツ!!!!!!」」

「いや、ちよつと退いて欲しい」

銀次がツツコムも、四人は自らの拳を固め、なにやら乱闘を始めてしまう。この四人なら最初は素手で戦うため比較的被害が少ないとわかっていたため放置する・・・というより、とめても止まるとは思えないためそのまま放置したというのが正しいが。銀次は自分の両手を改めて見る。

「・・・」

そこにはただ自分の両手があるだけで、ほかには何も無い。だが、銀次は感じた。この両腕には目には見えないが、確かに重みがあると・・・銀次はそんな気がした。

「（守るもんは多い・・・もしかしたら俺が守られる側かもしれねえ・・・だが、それなら）もっと強くなって・・・誰にも心配はかけさせねえ・・・そして・・・みんなを守るようになって、俺も・・・生き残る」

ただ・・・それだけ。銀次はググツと拳を握りこみまた、決意を固

める。

「ええい、こうなればコレでもくらつていけるー!!」

「ちよ、楓!!クナイは卑怯だろう!?そっちがその気ならコッチだつて・・・!!」

「卑怯ネ!!銃を取り出すなんて・・・なら私も虚刀流を使うヨ!!」

「ふふふ、みんなが戦っているうちに銀次君と「」させるかあああッ!!」「」あつぶな・・・!!危ないわね三人とも・・・いいわよソッチがその気ならコッチだつて本気でいくわよ!!」

「だあああつ!!!!お前ら!!!!けが人の前で騒ぐんじゃね!!!!」

さすがに武器を取り出したので危機感を覚えた銀次が止めに入る。だが、声こそ怒っているが、その表情は心なしか楽しそうに見える。

無茶苦茶な連中も多い・・・だが、それでも銀次は守ると決めた。楓、真名、鈴、楔・・・そしてほかの変体刀達全員を守る・・・と。心に誓う。



くく数時間後・食堂くく

あの四人の騒動から数時間。まあ、何とか四人を説得。四人は渋々といった感じで引いた。その後、真名が何かを思い出したように手を打ち、

『ああ、そういえば鈴蘭さんが食堂に来るように、って言ってたね』  
いまさらかよ！？という感じで真名にツッコミを入れながら銀次は部屋からでて食堂へと向かうことにした。そして食堂に入ると・・・

『お？来たね銀次君。はいはいそれじゃあ主役が来たから改めて・・・  
・銀次君の復活を祝ってかんぱーい！！』

なぜか食堂には桐野邸にいる変体刀と初めて見る顔・・・完結系変体刀の面々が集まっていた。近くにいた妹刀・御坂の一体に何かと聞いてみると、

『あなたが目を覚ましたと聞いて、鈴蘭様主催で復活おめでとうパーティーを開いているのです、とミサカは目の前にいる皆さんに心配をかけた四季崎様並の大馬鹿現主に睨みを利かせながら告げます』

なにやら四季崎に対する罵倒も入っていたような気もしたが・・・銀次はあえてツッコまないでいた。尊敬こそしているが、やはりムカつくときはムカつくのである。とりあえずそのミサカの頭に一発拳骨叩き込んで近くにあつた菓子を口の中に放り込む。生身では三日と数時間ぶりの甘味。口の中から体のいたる処にめぐるように回る甘さに感動を覚えながらパクパクと甘味にパクつくことにした。

さて、そんな銀次。やはりと言うべきか心配をさせてしまったと言  
うことで皆の前で謝罪。皆からは「心配させんな」や「無茶すんな」  
といった言葉から、どこからともなく超電磁砲や鉛弾が飛んできた  
り頭を齧られたり（これはもちろん猿。涙目で「心配した・・・だ  
から罰」といつて噛まれた）と、本当に自分のことを心配（？）し  
てくれる刀達に改めて感謝しつつ、このパーティーを楽しんでい  
た。

「ほんと・・・いい奴らだよお前は」

改めて自分のことを心配してくれる刀達に感謝する銀次であった。

くくしばらくして 桐野邸・縁側くく

あの後数時間、皆はぶっ続けで飲めや歌えやのドンチャン騒ぎ。中  
には酒によって暴れだすものまで現れた始末で、食堂の一角を破壊  
したり、それに便乗して勝負を始めたりと・・・まあ、折角の宴の  
席なので多めに見よう（ようは無視）と決め込み酒をチビチビと飲  
むことにした。

それからしばらくは鈴蘭初めとしたお祭り大好き人間（刀？）の催  
しを楽しく笑ったりと・・・いつもより派手な宴会となっている。

「やれやれ・・・あいつらもよく飲むもんだ」

疲れたから寝る、といってあの場から逃げ銀次は地上である家の縁側へと避難してきた。銀次は呆れるように縁側の柱に寄り掛かり清酒をチビチビ飲む。基本変体刀は身体の構造的なものは人間に酷似しているのだが体の材料。所謂構成物質が違うので例え生身の人間が一発で急性アルコール中毒になる量でもペロリと飲み干してしまう。まあ中には酔っ払う変体刀もいるが・・・もちろん銀次は生身の人間のため、そんなに飲んだら一発でアル中になる恐れがあるためせいぜいコップ何杯分程度だ。

銀次は食堂の修理費やらを頭の隅に追いやり、今後のことについて考える。

「（まあ・・・食堂の修理費は奴らの給料から差引くとして・・・問題はあのクソ薬味だな）」

何気に酷いことを考えながら、銀次はもはや食用のネギに失礼だと思いはじめたあの問題児・・・楓を殺そうとして自分を死へと導こうとしたネギ・スプリングフィールドについて考える。もちろんお咎めなしなんて甘っちょろいことはしないし、学園長が要求してきても容認しない。もしするとしたら国家予算並みの賠償金と今後の武器弾薬の調達から桐野邸の修理費、食費などをすべて『この麻帆良だけ』に補ってもらおうことになるだろう・・・まあ、三ヶ月持てばいいほうだろう。

「（まあ、その場で殺す・・・つてのも悪くはないが・・・あいつ自身、どれだけ自分が無能なのかをトコトン知らしめるつてのも面白そうだな・・・）」

銀次としては楓や真名達を精神的に苦しめたあの薬味を同じように精神的に追い込み、絶望のどん底に突き落とし、殺すというのも悪くないと思っている。ようは、簡単には殺さないということだ。

「こんなところにいたでござるか・・・銀次殿」

そんな物騒なことを考えていると、声を掛けられた。声と独特の話し方なため誰かはすぐわかった。

「楓か・・・どうしたんだ？てつきりみんなと騒いでると思っっていたんだが・・・」

「危うく鈴蘭殿にばーぼんを飲まされそうになったから寝ると言っ  
て出てきたでござる・・・それに銀次殿が部屋から出るのを見たで  
ござるから」

そうか、と銀次は頷く。鈴蘭はあれでもものすごい酒豪である。何せアルコール度数の高いバーボンやテキーラ、本場芋焼酎をストレートでガンガン飲むのだ。以前それに睡蓮が巻き込まれ酔っ払い睡蓮と珍しいものを見ることができたが・・・それはまた別の機会で紹介しよう。

楓はススツと銀次の縁側の横に座る。

「手酌では寂しいでござるっ？拙者がお酌するでござる」

「いや、大丈夫って・・・お前、普通断り入れてからだろうが」

すでに酒瓶を手に持っていた楓にやれやれと呆れたように首を振るう。だが、別に断ることもないので、銀次は杯に入っていた酒を一気に飲み干し楓のほうへと突き出す。楓はそれに酒瓶から酒を注

ぐ。

「……………」

「……………」

そして飲む。次ぐ、飲む、と続ける。その間はまったくの無言。しばらくそのようなやり取りが行われていたが……、

「銀次殿……一つ聞きたいことがあるでござる」

「なんだ楓、改まって……」

なにやら真剣な顔で銀次を見る楓。銀次はまた改めてそんなことを聞いてくる楓に訝しげに聞き返す。

楓はしばらく言いにくそうに口を開けたり閉めたりしていたが……意を決したように唇をきゅっと締め、開く。

「銀次殿……教えて欲しいでござる……『あの事件』……銀次殿が変わってしまった『あの事件』のことを……」

「……………」

銀次の動きがピタリと止まる。

「もちろん……銀次殿には言いにくい過去なのかもしれないでござる……それでも、拙者は知りたいでござる……」

「……………」

銀次は楓のほうへと視線を向ける。そこには、こちらをジッと見る楓の目があった。・・・確固たる意志のある目だ。この目になったら楓は何が何でも諦めない。そして楓が止めともいえる最後の一言を言う。

「もう・・・一人で抱え込まなくてもいいんでござるよ?」

「・・・」

「今まで銀次殿が溜めてきた痛みや苦しみも・・・これからは拙者に・・・他のみんなに分けて欲しいでござる・・・そのため」  
『仲間』でござるよ?」

「ッ」

楓の言葉に、銀次は頭を強く叩かれたような思いだった。そうだ、銀次は確かに楓たちを思っていた。・・・だが、銀次にとっての仲間とは『守る対象』としての仲間だった。・・・だが、それだけでは仲間ではない。苦しいことも、悲しいことも、辛いことも、楽しいことも、すべてをわかってくれる。時には反発してくれる。・・・それが仲間なのだ。・・・銀次は楓ならば。・・・と思いながらも口がうまく開かない。すると、

「ああ、まったくだね。・・・少しは私達にも頼って欲しいよ? 銀次さん」

「本当、まったく持ってその通りだよ」

「なっ、真名それに鈴も」

近くの廊下から二つの影・・・真名と鈴が姿を現した。二人も宴会を途中退場したのだろう。二人はそのまま歩いてきて縁側へと座る。そして改めて銀次へと言う。

「銀次さん・・・確かにあなたは強いよ。心も身体も強い・・・でもね、銀次さん。人間が苦しみに絶えられるのはほんの少しなんだ・・・私は『あの事件』というのは知らない。でも、それを一人で抱え込まないで欲しい。だから、その苦しみがいっぱいになる前に・・・私達に分けてもらいたい」

「そしたら銀次さんも多少なれど心が軽くなるはずネ」

「・・・お前ら」

楓、真名、鈴の三人の目・・・この目を見て銀次はふっと目を伏せる。そして思う。

「（ほんと・・・最高だよお前ら）・・・わかった・・・話そう、あの事件のことを・・・」

銀次は語りだす。その口調にはもはや迷いはないかのように・・・。

はたして銀次にどんな過去があったのか？はたして楓と何があったのか？そして、『あの事件』とは・・・？

すべての始まりが・・・いま、明かされる。



## 第三十六話（後書き）

どうでしたか？本当は今回で過去編の話の冒頭に入ろうと思ったのですが・・・思ったより区切りがよかったため過去編入る直前でとめちゃいました。次回をお楽しみにしてください！！

さて、次回予告。

銀次が語る過去・・・それは7年前に起きた事件・・・銀次13歳、  
楓8歳のときの話だ。

「護衛任務・・・ですか？」

「ああ、お前の初任務だ。気合を入れて取り掛かりなさい」

はたしてどのような相手を護衛するのか？そしてその護衛がかの事件と関係しているのか？

・・・それは、当時の銀次にはまだ知りえないことである。

乙ご期待！！

作者は来週から中間試験が始まるため次話投稿ができるかわかりません。

最後にオリジナル変体刀の案を考えてくださったパルパレーパさん、ありがとうございました！！

### 第三十七話（前書き）

銀次をほかの原作に放り込んでみたいと思う銀閣です。

まずは皆さん一言・・・諸君！！私は帰ってきた！！

はい、調子乗りましたすみません。テスト終わってすぐに小説を書いていて皆さんの感想を返信できないでいます・・・地道に返信していきたいと思います。

さて、今回は待ちにまつた銀次の過去編・・・はたしてどんあ過去があつたのか・・・？

それではどうぞー！！

## 第三十七話

今から二十年前のこと。某県にある忍の里・・・甲賀忍軍の里に一人の子供が生まれた。

その子供は過去に類を見ないほどの最強の忍の父親と、ふらりと現れた女性との間に生を授かった。

そして、その二人から生を授かった子供はもちろんのこと里中から期待の念を抱かれた。それもそうだ。何せ最強と謳われる父親の子供なのだ、期待もしたくなるもんだらう。

だが、残念ながら子供は特にこれといったこともない、普通の子供となんら変わらなかった。

『まあ、子供だからしょうがない』

という極一般的な考えをする者もいれば、

『あ奴の息子ならばと思っただが・・・期待はずれか』

と鼻で嗤う者もいた。前者はとにかく後者は明らかにその子供の父親に嫉妬している忍びたちの言葉だらう。だが、その子供はまだ子供のため意味はわからなかったし、その両親もまったく気にしていなかった。むしろ両親はそんな息子を溺愛していたのだ。

周りの者はまあ、普通あるいはそれよりちょっと上の忍者になるだらうと思いい、そのまま忍びとして育つことを祈った。

だが、ある日。その子供の父親の親友と女房の間に子供が生まれてから、その子供が変わった。

今まで出来なかったような忍びの技を難なくこなすようになり、さらに喋り方も落ち着いた大人と変わらないものへとなった。周りの大人たちはその子供を『さすがは奴の息子だ』といって褒め称えた。しかし、その子供の能力はそこで終わらなかった。

ある日その子供が新しい忍法を見せるといつて里長のところへと向かった。勿論、その噂を聞きつけた大人たちはどんな忍法なのか？と気になり、野次馬となり里長の家へと集まる。集まる野次馬に呆れる里長だったが、ムリもないと納得してしようがないため広場でさせることにした。周りの大人・・・特にその親に嫉妬している大人たちはその子供が恥を掻くのを今か今かと待ち望み、期待している大人たちはどのような忍法なのか？とワクワクしながら見るさなか、子供はいきなり自分の顔を両手で覆い、

ゴキユツ！！

顔を、『崩した』。周りの大人たちはその光景にどよめきを立てる。当たり前だろういきなり目の前で顔の形を変えてしまったのだ。そしてしばらくすると、

バキゴキメキ……、

今度は体の形が段々と変わっていき……、そして最終的には

『ふう……まあ、こんなもんかな？』

とって首を廻すのは……里長にソツクリ……いや本人そのものと言っても過言ではないほどの人間がいた。

周りの大人が呆然とするなか、その里長に化けた少年は話す。

『忍法骨肉細工……自分の肉体を自由に変えることができる忍法です』

と説明するも大人たちは全然付いてこれないでいた……しかもそれでとまるわけではない。元に姿に戻りまた様々な忍法を見せた。

己の両の手の爪を伸ばしまるで刃物のように扱う忍法爪合わせ。

自分の体の体重の重さをほぼ0にすることができる忍法足軽。

物の記憶を辿ることができる忍法記録巡り。

そしてまだ見せていないが、体の一部分が失おうと別の人間の腕を代用にできる忍法命結び。別の人間に残留思念を渡らせることにより相手の体に乗っ取る忍法狂犬発動。

いったいどのようなようにして身に着けたのか？それとも何か特殊な秘薬でも使ったのだろうか？だが、薬を使うのに長けている甲賀忍者はそんな薬があるとは知らない・・・さらに驚かせたこと・・・おそらく今回一番の驚きになるであろう発言を、少年はした。

『そしてこれは忍法じゃないのですが・・・私は少し特殊な刀を取り出すことができます』

そして少年は何もない空間から刀を・・・『この世ではありえないような刀』を取り出した。

絶対に折れない絶刀・鉈

どんなものをも切り裂いてしまう斬刀・鈍

少年は最初にこの二本を取り出し、その威力を見せた。里で一番の威力があると言われる爆薬を使っても折れるどころか傷一つ付かない絶刀・鉈。どんな攻撃をも防げると豪語した甲賀忍軍技術班が作った鎖帷子を簡単に切り裂く斬刀・鈍・・・周りはそのあまりの常識破りの威力に感嘆の声を上げる。しかも他のものではよほど精神力が強い者でないと扱えないという刀を扱うことができるということもあり・・・少年はこのときはすでに里長候補としてその名を連ねることになった・・・

その少年を生んだ両親・・・父親は里最強と呼ばれる忍者としては異質の剣士、桐野鉄心。その鉄心がどこからともなく連れて来た美

しい女性であり女房、沙<sup>さゆき</sup>？。

そして、その二人の間に授かった少年……名は銀次。桐野銀次である。

〳〳八年後〳〳

銀次が生まれてから十三年が経ったある日。

「護衛任務……ですか？」

ある日、成長した銀次は里長に呼び出され里長の家へと向かい、家へと上がった。

銀次の目の前に座る顎に白髭を蓄えた老人……甲賀忍軍の長に就いている椿団十郎がそこにいた。その長は顎の髭をシゴキながら銀次へと告げる。

「うむ、お主の初任務だ。気合をいれて取り掛かれ」

「はあ、しかし……」

だが、対する銀次は頬をポリポリと掻く。別に任務には文句はない……のだが、



「確か・・・任務はどんな内容であれ15歳になってからでないとならないはずでは・・・？」

そつだ。甲賀の里では護衛任務はもちろんのこと、奪還、強奪、討伐、殲滅はたまた暗殺まで、たとえどのような任務でも15歳を過ぎなければ任務には参加できないのだ。昔は十五歳で元服、つまり成人として扱われていたためその名残らしい。里長はうむ、と髭をシゴキ、銀次へと告げる。

「本来ならそうなのじゃがな・・・。周りのものがお主を任務に付けると煩くてのう」

「・・・」

ああ、なるほど。と銀次はなんとなく納得してしまう。父親が最強の忍びであるということと、銀次自身がその才能を持っているということもあり、周りの大人たちは銀次に早く任務に就かせたいのだろう。

だが、もちろん銀次自身にとつたら余計なお世話・・・銀次としてはあと二年は変体刀の扱いと変体刀作りに専念したかったのだが・・・、

「まあ、里長の命令は絶対ですからね・・・わかりました引き受けましょう」

組織において上からの命令は絶対・・・これははるか昔だろうと現代だろうと関係ないことである。小説とかだとそんなの関係なく自分の思い通りに走る主人公もいるのだろうか・・・生憎と銀次にはそんな度胸はない。

里長はうむうむ、と頷きながら顔を綻ばす。

「引き受けてくれてよかったわい。．．．でも、まあ正直な話しじやが今回の任務はどっちにしろお主に任そつかと思っておいたんじや」

「はあ．．．それはどういう意味で．．．？」

里長の言葉に引っかかり聞き返すも、『それは任務のときの楽しみじゃ』といって答えなかった。記録巡りで周りの調度品から情報を引き出すのもよかったのだが．．．そんなことをして抜け忍扱いされたら一溜りもない。銀次は怪訝な表情をしたままその里長の家を後にした。

この任務が、自分の今後に大きく関わりと知らずに．．．。

～～～  
帰路～～～

里長の家からの帰り道。銀次は里の中をテクテクと歩きながら自宅へと向かっていく。

「（元から俺に任す・・・ねえ。いったいどういう意味だったんだ？）」

銀次は里長の言葉を不思議に思っても、すぐにめんどごとと思いきえるのを止めた。

「（まあ、考えてもどうせ無駄だろうからな・・・やり遂げるだけだ）ふわぁ・・・眠みィ」

欠伸をかみ殺すこともなく、銀次は大口を開けそれを右手で軽く覆うようにするだけだった。その姿はまさに宇練銀閣そのもの・・・まあ、立ってはいいるが。

「ほう、初任務を渡されたと言うのに随分と余裕じゃないか。桐野の小せがれ」

「（げっ、この声は）・・・なんでしょうか大戸様」

声の主に一瞬いやな顔になるも、すぐさま元通りの顔に戻し後ろへと振り返る。すると、そこには一人の三十絡みのオヤジ・・・しかも忍びなのにやたらと花のような匂いを撒き散らし、後ろに数人の二十代ぐらいの若者を連れて歩いている・・・しかも全員があからまさに銀次を嘲笑しているように見える。

銀次はそれらの人間を知っている。

大戸半兵衛。通称『爆殺の半兵衛』まあ名前の通り爆弾を使う殺しを得意にしている男だ。・・・忍びとしては派手だがその圧倒的火力や人一人のみを吹き飛ばすほどの爆薬の調合に長けている。長い

間働いていたためそれなりの實力はあるのだが・・・その傲慢な上に陰湿な性格のため里のものからは嫌われている。

銀次もその傲慢な性格が嫌いによく避けてはいるのだが・・・いま銀次が通っているのは大通り。いやでも顔を合わせる可能性が高いところだ。いつもならもつと違う道を行くのだが・・・考え事をしながら歩いていたのでそれに気付かず大通りを歩いていたらようだ。大戸はそんな気のない返事をする銀次に舌打をする。

「ふん、なんだ貴様その態度は・・・？目上の者に対する礼儀がなつてはおらんのではないか・・・？」

「（あんにに礼儀払いたかねえつての）・・・それは、すみません。以後気をつけます」

銀次とて人の子。聖人君子でもなければ牧師でもない。それに銀次は前世も合わせればすでに三十近い年齢だ。同い年くらいの子供のように、ここで反発などはしない。

銀次は適当にその場で謝り、頭を下げて「用事があるので」といつてその場から離れた。

「ふん・・・。十三年しか生きていないクソガキ風情が」

その去る銀次の背中に若めの男が悪態を吐く。周りにいた取り巻きもブツブツと文句を言う。陰険な大戸の部下らしい意見ばかりが飛ぶ。

大戸はその部下達の言葉を手を軽く振りながら諫める。

「まあ落ち着けお前ら。あのぐらいの年なら誰にでもあのような反応はあるものだ。それがあの桐野のこせがれなのだからな。ムリもない」

それもそうだ、と周りの若者達は頷く。そしてこれからどうするか？と話しながら大戸と若者たちは大通りを歩いていった。

「ふん……まあせいぜい今だけ粋がつておればいいさ、桐野のこせがれ……そして」

ニヤリとそこで銀次が去っていった方向へと嫌らしい笑みを浮かべながら見て、一言呟いた。

「今回の任務が……お前の『最初で最後の任務』になるのだからな……」

その笑みがいったいどのような意味があり、その言葉には一体、どのようなことがあるのか……？

今の銀次には知りえないことである。

「まったく……まったく持ってついてねえ」

しばらくして。銀次は大戸が見えなくなったところで悪態をつきながら、後頭部をバリバリが搔く。

「大体よ大の大人がガキにあんな態度とるか？普通……あ、でも

精神的には俺もアイツと同年代・・・？」

やべ、へこんできた・・・。と銀次は前世分の年齢も足した現在の年齢が、三十代だと今気付きドヨンとしたオーラをかもし出す。

「ま、まあ、今は十三だからな・・・うん、問題はない!!」

身体的年齢は十三だから大丈夫、と銀次は自分自身に言い聞かせそのまま帰路へと向かう。・・・すると、

「銀次殿〜!」

急に自分を呼ぶ声と駆ける音が聞こえてきたため、銀次がそちらに振り向くと、

「ん？おう、どうし「銀次殿!」ぐほっ!!」

振り向いた瞬間。銀次の胴体に回転する弾丸の如く勢いで何かが突っ込んできた。銀次はそれを避けることなく綺麗に胴体で受け止め、そのまま後ろへと倒れこむ。

そのまましばらく銀次が地面で悶えていると、ぶつかってきた物体がムクリと起き上がり、

「おろ？銀次殿どうしたでござるか？そんなに悶えて・・・」

愛くるしい少女がきよとんとした目で銀次の顔を覗き込む。目は細めのタレ目で髪はボブカットのようにも見えるが、後頭部の一部分だけ伸ばしている状態だ。

銀次はぐうっという呻きを上げその少女を見る。

「おいこら楓……。あれほど人のドテツ腹に突貫決めるなど言っただらうが……」

突っ込んできた少女……。それは銀次と五歳違いの長瀬楓であった。桐野家と長瀬家は父親同士が仲がよく、その縁もあってか銀次と楓も自然と仲がよくなった。特に楓の甘えっぷりはハンパなく、実父である長瀬隼人が羨ましがるほどである。

もちろん銀次は転生者。まさか、あの長瀬楓と幼馴染になるとは思ってもいなかった。

「（これが転生者の特権……。いや、キャラと幼馴染という設定の小説はそんなになかったはずだからレアなんだろうなあ）」

銀次は生前読んだ二次創作の作品を思い出しながら、改めていい待遇なんだと自覚する。そんな感慨にふけっている銀次に話しかけてもポケッ、としているのに

「む、銀次殿。拙者のことは無視でござるか？」

「ん？ああ、悪いな楓。ちょっと考え事があったな」

む、と頬を膨らましこちらを睨む楓。だが、そのむくれ顔が何気に可愛く銀次は苦笑気味の笑みを浮かべポンポンと頭を撫でてやる。

「悪かったって、そうむくれるなよ」

「ん……」

もうこの頃から楓は銀次に頭を撫でられるのが至福のときであった。楓は猫のように目を細め、そのまま頭を撫でられる。

「つと、そういえば楓。お前俺のことを呼んでいたが・・・なんかあったのか？」

「あつ・・・（もつと頭撫でられたいでござる）」

先ほどの楓の腹部突貫のことを思い出し、銀次は改めて楓に聞く。だが、楓は折角撫でていた手が離れていくのを残念そうにしながら見る。でも、要件はちゃんとあるらしく銀次にへと告げる。

「先ほど銀次殿の家に行ったら、鉄心殿が銀次殿の帰りが遅いから迎えに行つて欲しいと言われたから迎えに来たでござるよ」

「あゝ・・・そういえば・・・」

先ほど大戸たちに絡まれたのと、その後ブツブツ文句を言いながら歩いてきた時間も混ぜれば・・・なるほど、当初銀次が予測していた時間を三十分ほど越える。

銀次はガリガリと後頭部を搔き軽いため息を吐く。

「しょうがねえ・・・それならさっさと帰るか。楓はどうするんだ？」

「拙者は父上が多分お邪魔していると思うでござるから、そのままお邪魔するでござるよ」

家が隣同士ということもあり、両家の父親は任務がないときなどは稽古や桐野家の縁側で将棋やら囲碁をするのが日課である。

銀次も多分そうだろうな、と答えながら家へと向かい歩き出す。楓も慌てた様に銀次に駆け寄り、飛びつく。



「ああ、待つでござるよ銀次殿」

「ぐおっ！ーおいこら楓！ー背中にぶら下がるな！ーお前に突貫された腹が痛むんだよ！ー」

「そこはアレでござる。ガンバレ男の子でござるよ」

「いったい誰がんなこと教えた！？」

「父上でござる」

いつか蹴り飛ばすといいなながら、銀次はブツブツ文句を言いながらも楓を引き剥がそうともせず、それどころか肩に跨った楓の両足を落ちないように優しく押さえてあげる。

楓は普段では味わえない見晴らしに感動しながら歩く銀次に揺らさられている。周りを通り抜ける大人たちはその光景を微笑ましそうに見たり、同年代ぐらいの少女からはニヤニヤとした顔で「よっご兩人！！」とかいう言葉がかけられたりする・・・そのたびに銀次は足元の小石を蹴り出したり、楓が頬を紅く染めたり・・・もはや、この二人はデキているという噂が流れているほど仲がいい。そんな野次を受けながら、銀次は楓と共に家へと帰って行った。

〳〳甲賀忍の里・桐野邸〳〳

「ただいま」

「お邪魔するでござる〜」

楓を肩に抱えたまま銀次は自宅の玄関をくぐる。

「あらお帰り銀くん！！遅かったじゃないの〜お母さん心配したわよっ。」

そういって、台所のほうから顔を覗かせたのは金髪碧眼の女性・・・ぶつちやけ刀語の否定姫の容姿に似ている。銀次の母である桐野沙？が現れた。謎多き人物で、実の息子でもある銀次ですらよくわからないということもある・・・が、唯一わかることはある。それは・・・

「ああ、本当に遅いから心配して心配してしようがなかったんだからあ！！怪我とかしてない？転ばなかった？いやなことなかった？一緒に寝る？」

「ええい落ち着け母さん！！てか、最後の絶対に可笑しいだろう！？」

そう、それは極度の親バカだということ。何せ「ギン君の笑顔だけでご飯三杯はいけるわ」と豪語してしまうほどである。

「いやいや、そんなことないわよ・・・ああ、銀君成分を補充・・・」

「おいこら母さん。人をしいたけのうまみ成分みたいに言うな。そしてくっつくな歩みにくい！！」

くっつく母親を引き剥がすことなく怒鳴るだけなのは、やはり銀次

なりの優しさなのだろう。銀次はそんなくつつく母親をそのままにズルズルと廊下を歩く。

「そっぴやよ母さん。親父はどこにいるんだ？今回の任務のことで色々聞きたいことがあるんだが・・・」

銀次が任務のことを言うと、沙？は今まで嬉しそうだった表情を曇らせる。そして銀次に抱きついたまま呟く。

「・・・やっぱり、任務受けたのね？」

「ああ、それに15になればどっちにしろ任務は受けるんだからな・・・俺はちよつと早まったただけだ」

親バカ、というのもあるのだろうがやはり沙？も一人の母親だ。もちろんこの里に来て銀次を授かったからにはそれなりの覚悟はできていた・・・だが、やはり心配なんだろう。

そんな心配顔の沙？に銀次の頭にくつついていた楓が言う。

「大丈夫でござるよ沙？殿！！銀次殿は強いでござるからどんなことがあっても大丈夫でござる！！！」

その言葉に、沙？は少し驚いたような顔になるも、すぐに微笑みを浮かべ、

「ふふ、そっね・・・私と鉄心の子だもね！！余計な心配だったわね」

「まあ、護衛任務だからな。そこまで心配はないと思うからな・・・てか、いい加減離れる母さん！！そして楓も頭から下りる！！！」

「え……いやだ」

「二人揃って同じこといってんじゃね!!」

ブツクサと、文句を言いながらも銀次は母と幼馴染をぶら下げズルと父がいるであろう縁側へと向かった。

〳〳桐野邸・縁側〳〳

さて、銀次達が向かっているさなか。銀次の父である桐野鉄心と楓の父である長瀬隼人が縁側に座り、将棋を打っていた。

「……」

「……」

二人とも無言。パチリパチリと駒の音と、時々唸る隼人の声だけが当りに響くだけだ。そして、

「……王手だ、隼人」

「ぐおっ!?!マジか!?!」

パチリと、飛車が王将の前を陣取る。隼人はそれをうつつむ、と唸り、

「まっ」待ったは一回。そしてお前は先ほど一回使っただろう」ぐ

ぬう・・・」

隼人はそこから頭をガシガシと掻きながら盤上を見つめ、次の手を考える。対する鉄心はズズツとお茶を飲み隼人を待つ。このやり取りはさほど珍しくない。

「（しっかし・・・誰が信じるだろうなあ。こいつがああ最強の忍者であり剣士であると・・・）」

隼人は目の前で茶を啜っている鉄心をチラツツと見ながら思った。身長はそれなりに高く、体つきは細身。だが、ただ細いだけでなく筋肉を極限までに絞り上げた体つき・・・マア、今は着流しで見えないが。そして少しばかり珍しい赤髪を後頭部で一くくりしている。

そして肝心の顔・・・なのだが、鉄心の顔には上半分の狐面を付けているのでまったくもって素顔がわからない・・・まあ、ぶっちゃければ左右田 右衛門左衛門そっくりである。

桐野鉄心 その手になればどのようなものでも武器にしてしまう甲賀忍軍が誇る最強の剣士だ。ただの素振りや地を割り、天を裂き全てを吹き飛ばす暴風を生み出す。歩いて数日かかる程、遠距離にいる相手に爆散する威力の突きを当てることができるほどの腕前を持っている。

さらにその余りある戦闘力に一度安保理に『核』指定されてしまったほどである・・・噂だが、アメリカの全ての特殊部隊と戦い無傷で勝ち残ったとも言われている。

そんな最強の忍びだが、実際は茶道・華道・囲碁・将棋等を楽しんでいたって普通の趣味を持っている。とくに将棋はすごい腕前で、以前はこっそりと参加した町の将棋大会で優勝してしまっただけである。

隼人も将棋が好きなので、たまにこのように互いに打っているのだが隼人はいまだ一度も勝てたことがない。

「ええい！！なら、ここだ！！」

と、持っていた駒を動かすも、

「うむ、悪くない手だ・・・が、」

鉄心はまたペチリと駒を置き、そして一言。

「詰が甘い・・・王手だ」

「ぐああ！！またか！またなのか！！」

最早逃げ場もない手に短く刈り揃えた髪を掻きながら隼人はどてつと縁側に倒れる。鉄心はそれをため息交じりで口元には苦笑を浮かべる。

「まったく・・・お前はむかしから負けるとそのように後ろに倒れる癖・・・どうにかしたらどうだ？」

「そうはいつでもなあ・・・こればっかしはお約束と言っべきかなんというか・・・」

「なんだそれは・・・？」

お約束と言うのがよくわからない鉄心だが、なんとなく理解したためそこで引くことにした。将棋盤を片し、用意されていた茶を啜る。

「・・・そういや銀次君、今日初任務を言い渡される日だったよな」

「・・・ああ」

隼人の呟きに鉄心は静かに頷く。そして少しばかり身を震わし始める。

「（あ、なんだか嫌な予感）お、おい。どうしたんだ鉄心？」

隼人は嫌な予感を感じながらも、鉄心に話しかける。すると、鉄心は急に隼人の両肩を掴みかかり、

「決まっている！！銀次が心配なのだ！！」

「ぐおっ！！ちょ、ま、・・・！！」

いきなり揺さぶられる隼人。何も抵抗できずそのまま揺さぶられながら、鉄心の零す言葉を聞く。

「確かに！！確かにだ！！俺と沙？の息子ならば普通より早く任務を請け負うとは思っていたさ！！ああ、思っていた！！だが・・・だがな！！まさかこんなに早くだとは思わなかったぞ！！」

「お、俺も、思わなかったよ・・・！！てか、まずはおちつ・・・！！」

「これでは俺と沙？による『銀次の稽古中の写真を撮ろう作戦』が  
ペアになるではないかアアアアアツ!!!!!!!!!!!!」

「知るかなもん!!」

・・・さて、わかる人もいると思うが・・・あえて言うと、鉄心も  
かなりの親バカである。銀次自身にはその姿を見せていないが、ひ  
とたび鉄心の自室にある隠し部屋に入ると、壁一面に億数枚を超え  
る銀次の写真が収められたアルバムがひしめいているほどである。

まあ、肝心の銀次はそこに気付いてはいないらしいが・・・。  
そして、その息子溺愛の鉄心の被害を里内で最も被るのはもちろん  
隼人であり、里の会合のときもデレ顔（上半分は見えないが）で銀  
次の写真を見せるのも、すでに里の名物そのものだ。  
そんな言い争いをしていると、廊下の角のほうから、

「父さんいるかー？」

「・・・ふむ、なんのようだ銀次」

「（変わり身早え・・・）」

廊下の角から銀次が現れた瞬間、鉄心は隼人の肩から手を話し縁側  
から庭を眺める体制にある。隼人はグワングワンする頭を抑えなが  
らその鉄心に睨みを利かせる・・・が、そこはさすがは項が忍軍最  
強を誇る忍。もちろん通用するわけもない。

「いやなちよつと任務のことで話が・・・ってどうしたんですか隼  
人さん？」



「頭痛でござるか？」

「ま、まあそんなところだ」

親友の息子と愛娘の質問に、ちょっと酔いながら答える。二人はそんな隼人の言葉に訝しげな顔になってみるも、まあいいやという風にすぐに視線を鉄心に戻す。

「まあ、いいや・・・それで父さん。任務について話したいんだけど・・・」

「ふむ、なら私の部屋で待っているすぐに向かう・・・ところで何をくつついているのだ？沙？よ」

「だってギン君成分が足りないんだもん・・・」

ぎゅ、とさらに銀次の胴体に巻きつく沙？。鉄心は何気に羨ましいという表情を（顔に表さず）しているが、キャラじゃないと自覚しているため表に出さない。

「・・・まあ、いい銀次。そのまま沙？を連れて部屋へと向かいなさい」

「ああ、わかった・・・てか、母さん。やっぱちょっと離れて欲しいかも・・・」

「あら？そこはほら、ガンバレ男の子！よ」

「あんたもそれ言うか・・・あと楓、悪いが大事な話だから隼人さんのところに行ってくれないか？」

「むっ……わかったでござる」

はあ、とため息を吐きながら銀次はそのままくっ付く母を引きずるように歩いていく。楓は銀次の言い分も最もだと思い、一度頭をぎゅっと抱きしめた後ピョンと飛び降り隼人の元へと駆けていった。銀次は途中で止まり、その楓を苦笑いを送り、銀次は歩く。

「自分の母親であれか……おい鉄心、もしかしたら銀次君は将来嫁さんに尻に敷かれるかもしれないぞ？」

「……さあな」

先ほどの光景を脳裏に思い出し、ありえるなと思う鉄心。だが、同時にその光景も是非写真に収めたいとすると、その話しを聞いた隼人の膝の上に座っていた楓が、

「銀次殿の伴侶は拙者でござる」

「……え？」

楓の言葉に両家の親が思わず固まる。だが、すぐに子供の戯れだと思ひ、

「ははは、そうか。それは楽しみだ」

「ああ、楓と銀次君か……うん、確かにお似合いだな」

まあ、こいつの子供なら、という気持ちもあつたが、まだ幼い楓である。あと数年したらもしかしたら他の人間を好きになるかもしれ

ないのでということ、二人はその話を『とりあえず』保留することにした。

「ふふふ〜両家公認でござる!」

楓は嬉しそうに隼人の膝の上から降り、庭を走る。その場にいた親二人は微笑ましそうに眺める。

「（そうと決まれば花嫁修業をもっと頑張るでござる!）」

この話を楓が案外本気で受け止めてるとは知らずに……。

〜それから一週間後〜

あの後、銀次は父より任務の心得等を聞き気合を入れて一週間後、遂に初任務の日がやってきた。

「さて……行くか」

まだ朝靄も取れぬ頃、銀次は里の中で支給されている忍び装束（当時はまだオリジナルの忍び装束は作っていなかった）を着込み、里の入り口で草鞋の紐を結んだ。

その後ろには銀次の両親である鉄心と沙?、そして楓と隼人が立つ

ていた。

「忘れ物はない？手拭は持った？」

「ああ、持ったよ。手裏剣も刀も持ったから・・・あとは大丈夫かな」

沙？の質問に答えながら、銀次は立ち上がる。そして両親のほうへと体を向け直す。

「そんじゃ母さん父さん隼人さん・・・それに楓行ってくる」

「ええ・・・行ってらっしゃい」

「・・・気をつけてな」

心配そうに、だけど嬉しそうな表情をしながら見送る沙？。無表情な上に仮面をつけているため表情がまったく読めないが、心配していてくれるだろうと（銀次は思っている）鉄心。だが、その二人に対して

「・・・」

「・・・そんな顔すんな楓。これも任務なんだ」

どことなく寂しそうな顔をしている楓。まあムリはないだろう。自分が好きな相手が短期間ではあれど遠くに行ってしまうのだから、不安になるのも頷ける。そんな不安な顔をしている楓に、銀次は膝を軽く曲げ楓の目の高さまで自分の視線を下げる。そしていつものようにポンッ、と手を頭の上に置き撫で安心させるように話し掛け

る。

「・・・早く戻ってきてくれるでござるか？」

「すぐに・・・とはいえないがな。護衛期間は大体三週間ぐらいだから・・・でも」

銀次は微笑を浮かべ、楓に告げる。

「必ず戻ってくるさ・・・必ずな」

「・・・うん」

「（あらあら、ギン君ったら）」

「（銀次の微笑み・・・くっ！カメラを持って来ればよかった・・・！）」

「（本当に昔の鉄心ソックリだなあ・・・）」

銀次の微笑みに、楓は頬を紅く染め、頷く。周りにはいる大人たちはその光景を微笑ましそうに見る・・・一人可笑しいのもいるが・・・。

しばらく楓の頭を撫でていた銀次だが、ゆっくりも出来ないの以最後にクシャッと頭をなで手を離す。

「あっ・・・」

楓が凄く名残惜しそうに銀次の手を見るが・・・すぐに顔をニカッと笑わせ、

「任務、頑張るでござるよ銀次殿」

「ああ・・・それじゃあな」

その笑う楓に銀次も微笑を携えたまま微笑み返し、里を後にした。

「ふむ、それでは向かうとするかの」

そのやり取りを、里の入り口より少し離れた場所で見っていた里長は微笑ましそうに銀次を見る。

「ふおふお、初任務で、しかもこんなに朝早くから見送りしてもらえるとほのう・・・銀次、祝言は近いのかの？」

「あんたはいったい何を言っているのですか？里長」

若者をからかう様な笑みをする里長だが、すでにこの頃から鈍感が冴え渡っている銀次には何を言っているのかさっぱりわからなかった。

そんな銀次を見て里長はふう、やれやれという風に首を振りながら  
呟く。

「ふう・・・やれやれ、これでは楓君がかわいそうじゃのう・・・  
ま、今後どうなるのかを見る以外ないの」

「なんでそこが楓がでてくるんですか？あと何を見ると言うのですか？」

意味がわからん、と言いたげな表情をする銀次に里長はよいよい気

にするな、と言って先に付けて歩いていった。銀次もその後をテケテクと歩いてついていく。

さてはて、銀次の初任務・・・はたしてどうなることか・・・？

～～東京・某所～～

里から数時間後。里長と共に銀次は山を駆け下り、電車に（屋根に）乗り、バスに（屋根に）乗り、目的地である東京都へと向かった銀次。感覚的に言えば十三年ぶりに来た東京である。多少の町並みを気配を殺して車の屋根の上から眺めたりと、若干懐かしさを覚えながらキョロキョロと見回す。里長は始めてみる里以外のものに好奇心が沸いてしょうがないのだろうと最初こそ放置していた。

そして、

「うむ・・・ついたぞ銀次よ」

「はい、里長」

任務先である屋敷・・・かなり豪華そうな屋敷に着き、二人は先ほどまであった笑みもなく門の前に立っていた。その顔はまさしく忍者・・・どのようなことをも機械のようにこなす機械人間のようだ。

里長はこの年齢でここまで徹底できる銀次に感心しながら、屋敷の中へと入っていく。

すると、屋敷の門の内側から黒服を着た男が数人表れる。

「失礼ですが、身分を述べてください」

「甲賀忍軍頭領・椿団十郎。こちらは同じく甲賀忍軍の・・・」

「桐野銀次です」

必要最低限だけの言葉を話す。これも銀次が教えられた忍びの教えの一つだ。あまりおしゃべりが過ぎる忍びは後々何が起ころかわからない・・・ということ、私事以外るときではあまり喋るなど鉄心に教わった銀次はそれを早速実践している。

黒服の男達のリーダーらしき男が耳につけてあるインカムでしばらく会話をする。おそらく確認しているのだろう。

「（それにしても・・・）」

銀次はそんなやり取りがされている中、チラリと数人いる男達の背格好を見る。できるだけ気付かれないように、尚且つ迅速に見て、

「（全員が全員懐に拳銃を隠し持っているな・・・あと警棒か・・・？SPRか何かか？）」

銀次は前世にいたときに流行ったドラマのことを思い出しながらそんなことをふと思う。いま現在はそこまで注目されてたような職業でもなかったのもあるだろう。

そんなことを思っていると、リーダーらしき男がインカムから意識をこちらに向け、



「すみません、確認が少々手こずりまして・・・どうぞこちらに」

「申し訳ない。では失礼する」

里長は悠然と入っていく。その背中には数百人の忍びを纏める頭領・  
・・というよりは、どちらかと言うと侍大将のように感じられる。  
銀次は普段とは違う里長に呆気に取られながらも、その後ろについていく。

そして、広い庭を通り案内された接客室のようなところだろうか？  
そこで二人は待たされることになった。

「そういえば里長・・・俺はまだ護衛対象の詳しい情報を聞いていないのですが・・・」

「なに、会えばわかるよ会えば」

「（その前に情報が欲しいんだけど・・・）」

里からでる前とまったく同じことを言われ、銀次はふう、とため息を吐く。ついでに言う二人は立った状態である。部屋にはかなり高級そうなソファが置いてあるが、里長は座ろうとはしなかった。銀次も里長を立たせて自分だけ座っているなどということはない。そのまま適当な世間話を里長としてしていると、

「いやすまないね。ちよつと商談で時間が掛かってしまったもので・・・」

そついいながら入ってきたのは黒いスーツを着た明らかにやり手のビジネススマン風の男性・・・顔の彫りや皺、白髪の数からして四十後半ぐらいの男性だ。里長はその人物が入ってくるなり片膝を地面に付け、頭を下げる。銀次もそれに習い少し遅れてだが片膝を付く。

「いえ、我らのような矮小な者にお会いして、仕事をさせてもらえただけでもありがたき幸せ・・・それがし、甲賀忍軍頭領・椿団十郎。そしてこちらが同じ甲賀忍軍の・・・」

「桐野銀次です」

「ほう・・・」

挨拶を終わるなり、目の前の男はジーと銀次を見る。顔は地面に向けているがなんとなく気配だけでわかるため、その視線にむず痒くなる。

「なるほど・・・彼があなたの推薦する護衛・・・と言うことでよろしいのですね？椿さん」

「はい、まだ若輩のものです腕は確かです」

「・・・」

里長ではなく、里の大人たちの推薦なのだが・・・まあ、細かいことはいいだろう。しばらくは里長と目の前の男のやり取りを、銀次は黙って聞いていることにした。

しばらくして、

「さて・・・それではそろそろ本題のほうに入りましょう」

男が真剣な顔になり、二人を見る。銀次と里長もすぐに顔を引き締め、今回の任務内容を聞くことにする。

「まず今回の護衛ですが・・・私の娘を守って欲しいのです」

「娘さんを・・・ですか？」

ええ、と男は頷き話を続ける。

「実はここ数日、娘が何者かに狙われているかもしれない動きがあったのです」

「・・・それはどのような？」

今まで黙っていた銀次が聞く。里長は任務の内容は知ってるだろうし、ここは自分で聞いたほうがいいだろうと思ったからだ。男はふむ、と頷き話し続けた。

「ああ、例えば屋敷の娘の部屋の中に石や投げ込まれたりしてね・・・この前は『娘を殺すぞ』という脅迫文が届いてね・・・」

「その脅迫文は今もありますか？」

「いや・・・届いた日にそのまま捨ててしまったよ」

チツ、と銀次は心の中で舌打をする。手紙さえ残っていれば忍法記

録巡りで犯人をすぐに突き止めたのに・・・と、思うが過ぎたことはしょうがない。銀次は男の話を聞くことにした。

「この前など娘の部屋に爆竹のようなものまで投げ込まれて・・・最早あの手紙の如きことになるかも知れないのです・・・お願いします。娘を・・・娘を守って下さい」

男はそのまま頭を下げる。その姿は確かに娘を思う親の姿そのもの・・・。銀次は里長をチラリと見る。いくら銀次が強くても、任務に關しては里長の許可を得るのが絶対だからだ。里長は銀次の視線に気付き、

「・・・」

コクリ、と頷く。つまりは了承。銀次も頷き、

「わかりました。この任務、私目がきつちりと引き受けます」

「おお、本当ですか？それはありがたい！！」

銀次の言葉に、男は満面の笑みを浮かべる。心配の一つが取れた・・・まさにそのような顔だ。すると男はおお、と言って、

「おお、そういえばまだ娘に会わせていませんね。いま扉の外で待たしていますので・・・陽香、入りなさい」

男がそういうと、扉が開き一人の女性が入ってきた。女性は部屋に入るなり頭をペコリと下げ、銀次と里長に挨拶する。

「どうも初めまして。私し、この屋敷の娘で名瀬陽香と申します・・・

・以後お見知りおきを」

スツ、と頭を上げる。銀次は改めてその女性を見る。身長は大体160センチぐらいで、体つきは女性特有の丸みを持ちその体を白いワンピースで包み明らかに令嬢然としている。肌は白く白雪のようだ。髪は長く後ろで一本に結っている。そして顔つきは……

「え……楓？」

銀次は思わず、幼馴染の名前を呟く。なぜか？それは、目の前の女性が身長や体つきが違くとも……

「楓？いえ、わたしは名瀬陽香ですが……」

そう、銀次の幼馴染……長瀬楓にソックリなのである。

「え、ええええええッ!？」

銀次の叫び声が、あたりに木霊した。

これが、銀次の初任務にして……この物語の序章になるうとは……  
・銀次も、他の誰も知らない。



### 第三十七話（後書き）

どうでしたか？銀次の過去編序章編。はたしてどうなるか・・・どうぞご期待ください！！

さて次回予告！！

初任務を請け負った銀次・・・だが、その初任務はとくに問題なく行われた・・・しかし、

「・・・ああ、最悪あちらの娘だけでも殺れればそれでいい・・・」

966

「わかった・・・報酬は・・・」

迫り来る魔の手・・・はたしてどうなるのか？その魔の手を正体は・・・？

「ぎん・・・じ・・・さん・・・」

「あ、・・・あああああッ！！！！！！！！」

乙ご期待！！

最後に桐野夫婦を考えてくださった完全怠惰宣言さん、ありがとうございました！！



### 第三十八話（前書き）

そついや最近TVゲームしていないなと改めて気付いた銀閣です。

ええ〜どうも皆さん銀閣です。まあ、まずは先に一言・・・更新遅れて申し訳ありません！！

実は作者、金曜の夜から日曜の夜に掛けて遠出をしております・・・  
。普段使っているパソコンは持っていくのはツライと思いきさいノ  
ートパソコンを持って行ったのですが、

ネットに繋がらないという事体に・・・。

まあ、そんなわけで更新は遅くなりましたが、楽しんでくれるとありがたいです。

## 第三十八話

〱〱東京・某所〱〱

深夜。東京の都内にあるある廃墟ビル。普通なら誰も入らない、入るとしたら犯罪者ぐらいの建物の廃墟ビルの一室に、明かりが入っていた。

〱〱廃墟ビルの一室〱〱

壁は煤け、薄暗い室内。唯一の明かりである裸電球も今にも切れそうな感じだ。その室内に複数の人間の姿が見られる・・・そのうちの一人に甲賀忍軍中忍『爆殺の半兵衛』という異名を持つ男、大戸半兵衛だ。その後ろには大戸の配下が壁に並んでいる。

「依頼内容はいたって簡単だ・・・この写真に写っているガキと小娘・・・この二人を始末して欲しい」

そう言いながら大戸は目の前にある机の上に二枚の写真・・・銀次と、銀次の初任務である護衛対象の名瀬陽香が写っていた。

「・・・この二人を・・・か？」

すると、その机の上にある写真を対面している男が手に取る。男は三十絡み・・・アメリカ人だろうか？その男のいでたちは妙で、全身をウツドタイプの迷彩服で多い額には迷彩柄のバンダナ・・・そしてその傍らにはM-14・・・とてもじゃないが、現代日本ではサバイバルゲームか、どこかの基地にでも行かない限りはお目に掛

かれないような服装だ。男の後ろにも同じ格好をした男達が手にM16ライフルやショットガンを手に立っていた。

大戸は男の質問にああ、と答える。

「ああ、最悪こちらの小娘だけでもいい」

「・・・わかった。ならば報酬は・・・」

それからしばらくは報酬の話をして、どのような計画にするのか？などという会話をして、大戸はその場から離れた。

「・・・しっかし、随分と気前のいい依頼人だったですね大佐」

大戸たちが去った後、壁に控えていた男達はめんどくさそうに肩を回したりタバコを吹かしている。実際、いま話しだした男も口にタバコを啜えながら話しかける・・・なお、会話はすべて英語である。そして大戸と対峙していた男・・・大佐と呼ばれた男もつむ、と頷く。

「まあ、むかしっから日本人は気前がいいので有名だからな」

「そっぴや、随分前に依頼を受けた日本人も気前がよかったですねえ・・・金持ちが多いこつた」

ポハアツとタバコの煙を輪にして吐く。周りの男達も違いない、と笑いながら同意する。大佐もそれを聞きくくつと笑う。

「まあ、相手が金持ちだろうと何だろうと俺達がするのはただ一つ・  
・金を受け取り、仕事を遂行することだ」

「了解」「」

大佐の言葉にその場にいた男達が揃って声を出す。大佐はその光景を満足そうに見つめ、自分自身もタバコを加え、

「くくく・・・さて、はたして俺達を楽しませてくれるだろうか  
?・・・この『ブラッディ・エンジェルズ』を・・・」

大佐だけでなく、その部下達の右腕の肩口近くに張られているワッペン・・・それは、天使が描かれていた。しかしただの天使ではない。普通の天使なら純白の両翼を真っ赤に染め上げ、その手には血が滴る剣を握り、微笑む天使・・・彼らのトレードマークとも言えるマークだ。

物語は、さらに進む。

~~~~名瀬家~~~~

任務を受けてから早三日。銀次は最初こそ護衛する相手が幼馴染に似ていたのに驚り、初任務と言うこともあり緊張したが・・・、

「（特にすることないな・・・）」

三日、特に問題もなく過ぎていった。今までは一日に一回は何かしらあったらしいが、銀次が来てからは特に何もおきていない。むしろ暇過ぎて何か起きてくれと思ってしまっただ。

「（ま、何も無いのが一番・・・なんだが）あ・・・何か御用でしょうか？陽香様・・・」

「いいえ、何もありませんよ？」

「（こつちに問題があるな・・・）」

ころころと笑い、銀次を見つめているのは今回の護衛対象で、楓にソックリな名瀬陽香だ。陽香は先ほどから部屋に備えられている椅子に座り机に肘を突いて組んだ手の上に顎を乗せて銀次のほうをズツと見ているのだ。

最初こそ無視してたがそれが何時間、そして二日も続けば誰だっけ気になる。そうして、声を掛けてみたのだが・・・まあ見ての通りである。

銀次はなんなんだ？と思いつつも、任務中のため当りに気を張る。

「・・・」

「・・・（ニクニク）」

「・・・」

「……………(ニクニク)」

「……………」

「……………(ニクニク)」

「……………」

「……………(ニクニク)」

「だあああッ！！！！なんだよいつたい！？聞きたいことがあれば聞けばいいだろうが！！」

さすがの銀次も……そんな永遠とニコニコ微笑を浮かべながら見られては気になってしょうがない。相手が依頼主だということも忘れてしまい、いつものノリでツツコンでしまった……すると、陽香はクスクスと笑い

「ふふ、あら？それが素なのね？」

「……………あ、」

陽香の言葉に、銀次は思わず声を出す。そして同時に『嵌められた！』と理解した。すると陽香は言葉を続ける。

「あなた、ここに来てからずっと難しい顔していたんだもの。それに笑っていなかったしねだから……」

「私の素を出させよう……と」

「そういうこと」

クスリと、陽香はまた笑う。銀次はその陽香の微笑に思わずドキッとす。

「（楓も大人になったらこうなんだろうなあ・・・）・・・はあ、それで？どうしたいんですかいい・・・」

未来の楓の容姿を創造しながら、銀次は陽香に聞く。陽香はクスクス笑いながら答えた。

「一緒にお話ししましょう？」

「・・・はあ？」

陽香の言葉に、銀次は思わず聞き返してしまった。その表情が面白かったのか、陽香はまたクスクスと笑う。

「・・・念のため聞きますが・・・なぜですか？」

「だってこの三日間あなた何も話してないじゃない。だから、話しましょう」

ね？と小首を傾げながらのお願い。しかも無駄に楓に似ているため銀次は思わずうっ、と立ちずさる。

「それに、あなたが最初に間違えた・・・そう、楓ちゃんだったかしら？その子の話しも聞きたいし」

「うぐ・・・あの時は本当にご無礼を・・・」

銀次は初日にやらかしたことを思い出す。というよりも誰だって知り合いにソックリな者と出会えばあなるはずだ・・・いくら心が三十路でも。

陽香はさらにクスクスと笑い、話を続ける。

「あら、あの時のなら気にしなくてもいいわよ？誰にだって間違いはあるのだからね」

「ありがとうございます・・・」

銀次は頭をペコリと下げる。こういうときはさっさと頭を下げたほうが話しも切りやすい・・・と思って行動したのだが、

「ふふ、それじゃあ反省もしたことだし・・・お話ししましょ？」

「・・・」

結局はそこに戻るのか・・・、と思いながら銀次は嘆息する。そして両手を挙げ、

「わかりました・・・俺の負けです」

告げる。陽香もクスクス笑う。そして手招きをして

「どうせなら座らない？立って話すのもアレでしょ？」

「いや、しかし俺は護衛」なら私が立って話してもいいのよ？・・・失礼します」

さすがに、護衛対象に立たせるのも気が引けるのか、銀次はスツと椅子に近づき座る。陽香はそれを満足そうに見て一つ頷く。

「それで？ いったい何の話をするんですか・一応いつときますけど甲賀忍軍についての話しならしませんからね」

まあ、さすがに聞かれても喋るつもりはないが……。

「あら、ダメなの？」

「当たり前でしょうが……まさか本当にそれ聞こうと」「冗談よ。それぐらい私にもわかるもの」……

ジトツ、とした目つきで銀次は陽香を睨む。しかし陽香は先ほどから壊すことのない笑みを浮かべ流すだけである。

「そうねえそれじゃあ……楓って子のお話をしてくれないかしら？」

「え？ 楓の……？ またなんで……」

陽香の質問が意外だったのもあつてか、銀次はきよんとした顔で陽香を見る。

「だって、私とソツクリな子なんでしょ？ だったら気になるじゃない」

確かに、と銀次は思う。自分にソツクリな相手がいる、と言われたら誰だって気になるものである。銀次はまあ、重要なことを言わな

ければ・・・と思い。

「ああ、わかりました。それでいいなら・・・」

銀次は楓のことを語る。

自分の幼馴染で妹分であること。

よく引っ付き、肩車やおんぶが好きなこと

頭を撫でられるのが好きなこと

活発で外で走り回るのが好きなこと

「んで、五歳ぐらいのときに楓が料理を作ってくれて・・・といつてもほとんど炭でしたがね。魚は骨まで炭でしたし、ご飯なんかはまるで隕石かなんかだと思いましたよ」

「ふふふ、でもあなたのことだからちゃんと食べてあげんでしょ？」

「ええまあ・・・でも次の日に腹壊しましたけど」

あれは冗談抜きで危なかった・・・と、銀次はどこか遠い目で語る。陽香は陽香で銀次の話が面白いのかずっとクスクス笑っている。銀次はそんな話を聞いて面白いのか？と思い陽香に聞いてみる。

「陽香さん」

「なあに？」

「面白いですか？この話し」

「ええ、それはとっても面白いわよ」

どこに面白みがあるんだろう？と思いついてみたが、どうやら面白いらしい。なぜ？と聞こうとしたら、陽香が先に話しました。

「私ね・・・あまり外に出たことがないの。知ってるのもこの屋敷と庭ぐらいだし・・・だからこういうお話をする子もいないの」

「・・・」

銀次はなるほど、と頷く。こういう家の令嬢は外にあまりでないと以前聞いたことがある。だが、当初はそんなわけないだろうと笑って流したが・・・どうやら本当らしい。

「年が近い子もほとんどいないし・・・男の子なんてパーティ会場で見るとらいだし・・・だからかしらねあなたとお話してみたいと思ったのは」

「そうか・・・それはまた難儀なことだ」

銀次は後頭部を掻きながら呟く。豪邸に生まれながらこそその悩み、と言うものだろう。生憎と忍びとして生まれ不満はない銀次にとつてはよくわからないため、なんともいえない。銀次は今までの会話を黙って聞いていた。それが、気になったのか陽香は

「ごめんね・・・もしかして、本当は嫌だった？」

それを聞かれ銀次はポリポリと頬を掻く。まあ最初は強引だったのが微妙だったが・・・こう話してたらそんなことはどうでも良くなつてしまった。

「別に・・・話してたら案外楽しかったし、俺は気にしてませんよ」

「本当に？」

「ええ、本当です」

「本当の本当？」

「本当の本当です」

「本当の本当の本当？」

「本当の本当の本当です」

「本当のほんと」「だあああ！！だから気にしてませんっていつてるでしょうが！！」「・・・」

さすがにしつこいと思い、銀次は椅子から立ち上がり叫ぶ。陽香は最初、それに驚いたような表情をするが、

「ふ、ふふ、うふふふッ」

陽香は右手で口元を押さえ笑う。銀次は最初それをジト目で見ていたが、数秒後には苦笑いを浮かべる。

「はあ……かないませんよ……本当」

「ふふ、褒めてくれてありがとう」

「褒めてねえ!!」

また、陽香は笑う。初めて、このように損得抜きで話し合いができる男とであつたと思つたからだ。

「（今までは……名瀬の名で近寄ってくるのがほとんどだった……でも）」

陽香は目の前の自分より幼い少年を見る。ジト目で見る銀次。そこには名瀬もなにも関係なく、名瀬陽香という一人の人間としてみてくれる少年……陽香はそれが堪らなく嬉しかった。そしてニコリと笑い

「ありがとう……銀次君」

礼を述べた……その顔に銀次が顔を真っ赤にさせて逸らしたのは……まあ、余談である。

それからというものの、銀次と陽香は暇さえあれば話したり、お茶を飲んだり、馬鹿な会話をしたり何もせずただ静かに過ごしたりと……本当に護衛任務なのか？と疑つてしまうような状況だ。も

ちろん警戒は解いていない。だが、本当に何も襲撃がない。そんな平和な日々を送ることになった。

・・・しかし、悲劇が起きた。

～～三週間後～～

そして三週間が経ち、銀次の護衛任務の任が解けた。

「そう・・・もう終りなのね」

「・・・はい」

名瀬家の門内。そこには今日里に帰る銀次とどうしても見送りたいと言って、普段は滅多にこない門の処まで来た陽香。二人は今現在そこで話をしていた。周りには誰もいなくて、本当に二人つきりであつた。

「そういえば車が見えないけど・・・どうやって帰るの？」

「まあ、電車や車を乗り継いでそれで歩きですかね・・・賃金は払いませんが」

「それじゃ犯罪になってしまうよ？」

ふふ、と陽香が微笑む。注意はしていても楽しそうな声。銀次も釣られて微笑を浮かべる。

「ま、バレなきゃいいんですよバレなきゃ。バレなきゃ問題はなしです」

「あら、銀次君って案外いけない子なのね」

何をいまさらと銀次が呟けば、陽香は楽しそうに話す。だが、人は楽しければ楽しいほど時間が過ぎるのを忘れてしまう生き物で・

「っと……もうこんな時間か……」

「あら……本当だわ……」

改めて時計を見て予定よりだいぶ遅れてしまっている。本当ならもう少し話をしていたい……そうもいつてられない。銀次も陽香も、どちらも名残惜しそうにしている。すると陽香が口を開いた。

「また……」

「ん？何ですか？」

「また……会えるかしら？」

陽香の言葉に、銀次は多少考える。おそらく普通に会う、ということとはまず難しいだろう……しかし、

「『護衛任務』……ということなら」

と銀次は答えた。そう、普通に会うのが難しいのなら、任務として

出会えば問題はない。陽香もそれに気付き、一瞬驚いたような顔になり、そしていつもの微笑を浮かべる。

「ふふ、そうね。任務でなら・・・そうだ。なら今度は楓ちゃんも一緒に護衛してもらおうかしら」

陽香の言葉に、面白そうだなと銀次は思い、その考えを頭に残しておくことにした。

「そうですね・・・わかりました。それではまた近いうちに」

「ええ、近いうちに・・・」

そうして、二人が別れようとしたとき、

ギヤギヤアアッ!!

急に門の外にワゴン車が止まる。すると、ワゴン車の扉が開き、

「コンニチワ、そしてサヨナラ」

ワゴン車の中から顔はよく見えないが、迷彩服を着た男の体が見える。そしてワゴン車の中から伸びる銃身・・・その銃身が7・62ミリNATO弾という強力な弾丸を放つM14ライフルだと銀次はすぐに理解して、

「ッ陽香さん!!」

陽香を庇う。任務時間自体はすでに超えている。だが、銀次はまだ屋敷の中にいるし、何よりここで見捨てるほど銀次も腐つてはいない。

「（ここで賊刀を使えばまず大丈夫・・・！！）」

ほんの数コマ。しかし今の銀次ならそれで十分だ。賊刀を呼び出し、守ればこちらの勝ち・・・だが、

「賊と「銀次君！！」！？」

ドンツと強く押される感触。そしてほぼ同時に響く銃撃音。銀次は倒れながら自分に身にいつたい何が起きたのかわからなかった。

「（え？・・・いま、何があったんだ・・・？確か、俺は賊刀を出そうとして・・・でも、その後に陽香さんの声が出て・・・まさか）」

銀次は恐る恐る、自分の後ろを見る・・・いや、本当は見たくはなかった。頭の中では『見るな！！』という声が鳴り響いている・・・しかし、銀次の体が勝手にそちらに向いてしまう。

そして、銀次の目に映ったのは・・・

「あ・・・ああ・・・！！」

銀次の目に映ったのは・・・地面に倒れ、胸から血を流す・・・

「ケフ・・・ぎん・・・じ・・・くん」

胸から血を流す・・・『楓にそっくりそのもの』と言ってもいいほど似ている・・・名瀬陽香が、倒れていた。

『チツ、野郎のほうは殺り逃したか・・・まあ、あの娘だけ殺れただけでも良しとするか』

『んじゃどうします？一応あのガキもやっときますか？』

『そうだな・・・まあ、やっついて損はないだろうが・・・』

ワゴン車の中から英語での会話が聞こえる。だが、今の銀次にはそんなの聞こえない。いま頭にあるのは・・・、

『ま、頭に何発か鉛玉ぶち込んだ「ヒュンツ」おおツ！？』

発砲した男がもう一度銀次に照準を合わせようとした瞬間、男の視界には数十本のクナイが迫っていた。あの一瞬の間に銀次が投げた物だ。だが、

ドンドンドンドンッ！！！

『ちょうどいい的撃ちだな！！』

男は反動が強く、まともに当てることができないといわれるM14のフルオートマチックで飛来してきたクナイを一本一本確実に落とすにいった。そして、すべて打ち落とした後、次は立っている銀次に照準を合わせ

『くたばれクソガキ!!』

銃声が三発。フルオートで放たれた弾丸は多少のズレはあるが、弾丸は三発とも銀次の頭に吸い込まれるように飛んでいく……だが、

『なっ!?!三発とも外れだ!?!』

男は驚愕する。どうやら、男は腕にそれなりの自信があつたらしいが……残念だが銀次には真庭忍軍十二頭領が一人、真庭人鳥の『忍法運命崩し』が発動している。だが、この忍法は銀次が極度の肉体的、精神的に危険状態にならないと発動できないという欠点を持っている。

銀次はさらに袖口に隠していたクナイを取り出し、

「ああああああッ!!!!!!!!!!」

さらに投げつける。先ほど以上の速度で飛来するクナイ。

『チッ!おい車出せ!!』

マガジン交換を行っていた男は舌打をくれながら運転手に怒鳴る。ライフルは火力と命中率が高いが、狭い車内だと取り回しができないのが問題点である。運転手はその答えに素早く反応してアクセルを踏み込み、車を前進させる。

銀次の放ったクナイはギリギリのところまで閉められたスライドドアに遮られ、相手のワゴン車……しかも防弾使用なのか、かすり傷を少しつけただけであった。

「……」

しばらく、荒い息をしながらクナイを投げた姿勢で固まっていた銀次。しかし、すぐにはっとなり、

「よ、陽香……さん」

恐る恐る、倒れている陽香に近づく銀次。陽香の傍らにまで歩いていき銀次はその場に膝を付く。

「陽香さん……なんで……」

銀次は搾り出すような声で、陽香に話しかける。だが、陽香は反応しない。ただ横たわっているだけだ。胸の真つ赤に染まった部分と口の部分に流れている血さえなければ、ただ眠ってるように見える。銀次は陽香がただ眠っているのではないかと思ひ頬に触れる。しかし、触れてわかったのはドンドンと陽香の体から体温が無くなっていく事だけだった。

「……」

銀次は歯を食いしばる。すると、急に空が曇りだし

ザアアアツ……

雨が、振ってきた。雨は銀次と倒れている陽香に降り注ぎ、陽香から残りの体温を。銀次からは陽香との楽しい記憶を……奪っていく。

第三十八話（後書き）

どうでしたか？後半は少しばかり急ぎ足で書いたので作者としては心配です。それに今回は短かった……。。

まあ、それはそれとして次回予告！！

初任務で楓そっくりの名瀬陽香を守れなかった銀次……。里に帰ってからは部屋に引籠もる毎日を送っていた。

周りからは心配する声、慰める声、そして罵声を浴びせる声……。そんな中、銀次はあることに気付いた。

「守るために必要なのは……。『力』だ……。どんなものも払いのけられる……。『力』……。！！」

悲劇の歯車は……。まだ、止まらない。

次回、お楽しみに！！

第三十九話（前書き）

ちょっとスランプになり気味なのと、そっぴや銀次のイメージソングってなんだろう？と思う銀閣です。

どうも銀閣です。うゝむ・・・想像はしていたがオリジナル展開がここまで難しいとは・・・予想だにできなかったぜ・・・。
とまあ、カツコつけて言った物の。結局のところ今回も短いです。
色々諸事情なども重なり中々ツライぜ・・・だがしかし！！それでも皆さんが面白いと思ってくれる作品を作れるように頑張ってみせます！！

それでは、どうぞー！！

第三十九話

〳〳任務から一週間後〳〳

あの任務から一週間が経ったある日のこと・・・

〳〳甲賀忍の里・桐野邸〳〳

「鉄心殿〳沙?殿〳。いるでござるか?」

甲賀の里にある桐野邸。その門の前に一人の少女・・・長瀬楓が立っていた。楓の両腕にはいっぱい摘まれた野草が摘み込まれた籠があつた。

「あら楓ちゃん。いらっしやい」

「あ、沙?殿」

誰か来たのに気付いてか、部屋の居間にいたのか沙?が現れた。しかし顔色はあまり良くない。普段は全てを包み込むような聖母のような笑みも、今では悲しく微笑むような笑みだ。その表情を読んでは、楓は若干俯き加減になり、沙?に聞いた。

「やっぱり・・・まだ」

「ええ・・・でてこないわ」

沙?の言葉に楓は心配になり、チラッと玄関から奥のほうを覗く。

曲がり角などがあるから見えないが・・・楓の視線の先には銀次の部屋がある・・・だが、その部屋の持ち主である銀次は現れない。

「・・・本当に何があったのでござるか？沙？殿・・・」

「・・・」

楓の質問に、沙？は言いすらそんな顔になる。それでも楓は続ける。

「一週間前・・・銀次殿が帰ってきたとき・・・あの時の銀次殿は凄く憔悴しきつてたでござる・・・。まるで、何かとてつもなく大事な物をなくしたような・・・まさにそんな感じでござった・・・」

楓は思い出す。一週間前の銀次のことを。

～～一週間前～～

「ふふふ、早く帰ってこないでござるかな」

銀次の任務から戻ってくる日。楓は思い人である銀次の帰りを門のところまで待つていた。楓は鼻歌を歌いながら門の柱に寄り掛かっていた。

楓は頭の中で銀次が帰ってきたらどうしようか？と思いに耽っていた。

「ん～まずは・・・やっぱる抱きつくでござる！！そしてその後肩車してもらって」

もしそんなことをしたら銀次は文句を言うだろうが、何だかんだで大抵のことは苦笑いと小言だけで済ます銀次。楓は早くあの銀次の肩車でいつもの倍の高さを楽しみたいと思いながら待っていた。そしてしばらく待っていると、

「ん・・・？」

楓の目に一つの人影が映る。最初は誰だろうと思いい、目を凝らし警戒しながら見る。だが、段々と輪郭などが見えてきて・・・。

「あ、銀次殿！！」

特徴的な蒼色の髪。そしててっぺんだけ白く。不健康そうな肌・・・俯いて顔がよく見えないが、間違いなく楓の思い人である桐野銀次だ。楓は早く抱きつきたい思いで銀次に向かって駆け出す・・・だが、

「・・・？銀次殿・・・？」

楓はあと2mの位置にいる銀次の正面でとまり怪訝な顔をする。

「銀次殿・・・？」

いつもなら、この距離で話しかければ『よう、楓』やそれなりの挨拶をするのだが・・・いまはそれがない。それに何かおかしい。歩き方も覚束ないし、何よりズツと下を向いているのだ。銀次はよほどのことがない限りは下を向きながら歩いたりしない。しかもこんな覚束ない足取りで・・・そんなことを楓が思っていると、

「あっ！！銀次殿やっと気付いて・・・！！」

銀次が立ち止まりようやく目の前にいる楓に気付いた。楓はそれを嬉しそうに、だけど気付かなかったことにちよつと怒ってやるうか？と思ひ可愛らしく睨みつけようと銀次の顔を見た・・・見たが、同時に驚愕した。なぜか？それは銀次の顔が今まで見たことがない以上に憔悴しきった顔をしているのだ。

「ど、どうしたでござるか？銀次殿・・・」

楓は思わず聞いてしまった。今まで、一緒に暮らしてきた楓はあまりの銀次の変わりように驚いてしまったからだろう。

銀次は目の前に楓がいるのに気付いたのか、よろよるとした動きで楓を見る。

「か・・・え・・・で？」

楓の名前を掠れた声で呼ぶ。そして、楓へと歩み寄り、ギョッと抱きしめる。

「え、ええ！？ど、どどうしたでござるか銀次殿！？」

急な想い人の抱擁。楓は思わずドキドキしてしまう。もしかしたらこのまま・・・とも想像してしまう・・・だが、

「かえ・・・で・・・かえで・・・」

「ぎ、銀次殿・・・？」

何度も、何度も自分の名前を呼ぶ銀次。しかし、その体を震わせながら、楓のその小さな肩に頭を埋め、声をかみ殺すように何度も呼

んだ。まるで、何かに怯える子供のように震え続けた。

「かえで・・・かえで・・・かえで・・・!!」

「銀次殿・・・」

ただ泣きそうな声で自分の名前を呼ぶ銀次に楓は、何もできなかった・・・ただ、その泣く銀次を受け止めること意外・・・何もできなかった。

「あれから一週間が経ったでござる・・・でも、誰も何があったのか教えてくれないでござる・・・それどころか、銀次殿に罵声を浴びせるような輩も・・・。沙?殿・・・、いつたい、何があったでござるか?」

「・・・」

沙?はただだんまりを決め込むだけであった。確かに、楓の言っていることは事実である。楓は何があったのかと、周りの大人たちや里長に聞いてみたものの、

『アイツにとつて・・・ツライことがあったんだよ』

と言っただけで、誰も銀次の任務について教えてくれなかった。拳句の果てには

『ふん、あのような未熟な子供なら致し方ない結果があつてな。桐

野もこれで終りだな』

そういう輩もいた。楓はよくわからなかったが、なんとなく銀次が馬鹿にされたと重いその男の向こう脛を思いつき蹴飛ばしておいた・・・そんな生活を一週間。結局のところ誰も教えてはくれなかった。

実際、楓は沙？にも似た質問を何回もしている・・・だが、やはり

「ごめんね楓ちゃん・・・やっぱり、言えないわ」

帰ってくる答えはいつもどおりであった。楓はしばらく沙？を見ていたが・・・

「・・・わかったでござる」

楓はそういつて頷く。だが、勿論諦めたわけではない。今日はここぐらいにしとく、と言う意味のわかったということだ。

楓は手に持っていた籠を沙？に渡す。

「これ、山で取ってきた山菜でござる。銀次殿に食べさせてあげて欲しいでござる」

「あら、ありがとう。毎日ごめんね楓ちゃん」

沙？は楓から貰った籠を腕に持ち、楓に微笑む。楓はその笑みを見た後一度、銀次の部屋のほうへと視線を向け、その場を後にした。

「・・・」

沙？は、その楓の後姿を見ながら苦しそうな表情になる。

「ごめんね楓ちゃん……。でもね、言えるわけじゃない。ギン君が苦しんでいる理由がー」

そして、沙？は呟く。

「『楓ちゃんとソツクリな護衛対象を守れなかった』なんて……言えるわけじゃない」

これが、まだ他人なら銀次もそこまで落ち込むことはなかっただろう。だが、その他人が自分の『大事な幼馴染』となったら話しは別である。そして、楓もそう。今回の任務で死んだ名瀬陽香が楓ソツクリで、銀次は守れなかったのを悔やんでいる……。聞いたら楓が聞いたら？おそらく今度は楓が引籠もることになる……。そんなことは誰も望んでることではないため、誰も口にしないのだ。沙？は一度深いため息を吐き、

「本当……。守るって大変ね……」

ポツリと、言葉を漏らした。

〳〵甲賀の里 桐野邸・銀次の部屋〳〵

甲賀の里にある桐野邸。その一室に銀次の部屋がある。いつもの時間帯ならこの部屋の持ち主は稽古にでてるか、それとも部屋で読書にふけているか……。なのだが、

「・・・」

部屋の主・・・桐野銀次は稽古にも行かず、でも本を読むわけでもなく、ただただ虚空を眺めていた。襖を締め切り、部屋の中は薄暗い。銀次は壁にもたれ掛かり、何もせずずっと虚空を見つめる。

「・・・」

部屋の中は暴れたためか、物が散乱していて抜き身の刀まで転がっていた。壁や畳にも刀傷が付けれこれに血糊があれば完全な乱闘現場になりえるような光景だ。その光景の中、銀次は虚空を見つめながらあることをずっと思っていた。

「（・・・あの時、俺に何が足りなかったんだ・・・？）」

陽香を死なせてしまった・・・その現実が重く、銀次に押し掛かる。しかも、守るべき対象に守られて・・・それがさらに銀次の重荷へと変わる。そこに楓そっくりときたものだから・・・今の銀次の精神はすでにボロボロだろう。おそらく、これが本当の楓なら今頃自殺しているやもしれない。

「ッ・・・!!」

楓を守れなかった、そのシーンが頭によぎり銀次は頭を掻き毟る。最近、寝ても覚めてもずっとこんな調子だ。目をつぶればあの時のシーンが瞼の裏に映し出される。陽香が血を流して倒れる映像が、楓に代わり映し出される。そのせいもあってか、今の銀次はただでさえ不健康そうな顔つきなのにまるで幽霊のようになっていく。

「くっ……陽香さん……楓え……」

銀次は二人の名を呼ぶ。だが、陽香は亡き人だし楓はいまこの場には居ない。ただ銀次の空虚な声が響くだけだ。

「俺は……俺にはいったい何が足りなかったんだ……!!」

一体、何が必要だったのか？気持ち？それとももつと別の何か？そう……いったい何が……

「あっ……」

そこで銀次はある言葉を思い出した。それは別に親である鉄心でも沙？でもない、任務が失敗して戻ってきたときに中忍の一人に言われた言葉だ。

『ふん、不可思議な力を持っていようと所詮はガキ……この程度ということか』

それはありありとした罵倒。その時の言葉を銀次は聞いていたのかどうかもわからなかったが、それでも耳に焼き付いていた。そして、銀次は思った。

「……そうか……力が……」

脳裏に止めるという言葉が響く。

「そうだ……所詮この世は力が物をいうんだ……」

それは危険だと、さらに脳裏に響く。

「だったら・・・その力を・・・どんなものでも守れる力を・・・！！」

だめだ！！と響く。だが、同時に作ってしまえという言葉が脳裏に響く。

「どんなものをも払いのける・・・大切なモノを守れる・・・『力』・・・！！」

銀次の目に光が宿る・・・だが、その光は決していい光ではなかった。

その目は復讐、憎悪、恐怖そして・・・狂気に染まっていた。

これが桐野銀次が作り上げた変体刀数本の内にして、最強にして最狂。最高にして最悪。戦うことのみを追求した変体刀・・・『獄刀・羅刹』の誕生の瞬間であった。

第三十九話（後書き）

どうでした？今回はそこまで進んでいませんが、銀次がある事件に関わるのにとっても重要な話です。次回からは本格的に始まりますよ
う・・・！！

次回予告！！

銀次が作り上げた変体刀・・・それは、非常に危険なものだった。

「正気か貴様！！」

「た、頼む助け・・・！！」

「おのれえええッ！！！！！！」

阿鼻叫喚の地獄絵図・・・その現場に

「ぎ、銀次殿・・・？」

本当に守りたい者が現れ・・・そして、

「ガ、ガアアアッ！！！！！！」

刃を・・・振り下ろす。

次回、お楽しみに！！

最後にまだ名前だけですが、オリジナル変体刀を考えてくださった完全怠惰宣言さんありがとうございました！！

第四十話（前書き）

最近、ストパンの小説も書いてみたいなとも思ってる銀閣です。

どうも皆さん銀閣です。遂に四十話・・・まさかここまでいけるとは思いもありませんでした。数多の難関を乗り越え、遂に四十話・・・これも日ごろから応援してくださる皆様のおかげです！！

さて、本編は短めな上に前回の次回予告とはちょっと変わってしまいました。楽しんでくれるとありがたいです。あと、後書きに重要なお知らせがあるのでそちらも読んで下さい。

それでは、どつぞー！！

第四十話

銀次が部屋に籠り、変体刀を作り出そうと心に決めて早三日……。楓や両親が部屋に訪れてもまったくもって無視していた銀次……。そして三日間のまず喰わずで寝ずの結果……。、

「……できた」

くく、と笑いながら銀次は目の前の置いてあるオリジナルの変体刀・
・・獄刀・羅刹を見る。

獄刀・羅刹 見た目は切先諸刃造り、俗にいう小烏丸造りの禍々しい黒色の長い刀身を持った薙刀・。いや、柄はそれよりも短いので長巻といったところだろうか？そして、何より特徴的なのは、その柄についている二本の2mmほどの針・。これは使用者の身体能力を大幅に上げることができるものだ。

とてもじゃないが、何かを守るための刀でない。その姿はまるで全てを『破壊』するために作られたような変体刀だ。文字通り『力』を求めた変体刀。

その変体刀を銀次は満足そうに眺めた後、自分の口がやたらと渴いていて腹もすいていることに気付いた。

「そっいや、最近まともに飯を食ってなかったな……」

食事が出されても全然口にしなかったため、銀次はかなりの空腹状態だった。人間何かに集中すると時間を忘れるというが、まさにそ

うである。

「・・・なにかあるか？」

おそらく沙？が何か作って置いてくれると思うので、銀次は自分の腹を満たす為に台所へと向かった。

「（あれさえあれば・・・楓を守ることができる・・・もう、大切なものを失くす事もなくなる・・・）」

廊下を歩きながら銀次は自分に言い聞かせるようにそう呟いた。ふらつく体を動かしながら台所に向かう銀次・・・そのとき、

「-----」

「-----！」

「-----！」

「-----」

「・・・？なんだ」

廊下を歩いていると、その途中の部屋・・・銀次の父である鉄心の部屋の前を通りかかったときだ。中から何を言い争うような声が聞こえてきた。

「（この声は・・・父さんに母さん・・・それに隼人さんに里長？）

「
銀次は怪訝な顔になる。なぜこの四人が・・・？と気になった銀次は気配を殺し襖に耳を当てた。そして・・・

『なら・・・あの名瀬陽香殿が殺されたのは最初から大戸の計画だったというのか！！』

「・・・は？」

鉄心の言葉に、銀次が固まる。

くく鉄心の部屋の中くく

広くも小さくもない桐野鉄心の部屋。本棚と刀掛けと掛け軸の後ろにある秘密部屋以外は特にこれといって何も無い質素な部屋だ。その部屋の中に大の大人が四人固まって何かを話している。その話の内容は・・・

「なら・・・あの名瀬陽香殿が殺されたのは最初から大戸の計画だったというのか！！」

鉄心の怒り心頭とした声で叫ぶ。そう、この四人が話しているのはこの前の銀次の初任務失敗の際に起きた事故・・・名瀬陽香が死んでしまったことについて話していた。

「落ち着け鉄心。気持ちはワシも同じじゃ・・・まああやつならやりかねんがの」

白い顎鬚をシゴキながら、里長は鉄心をなだめる。

「ぐっ……しかし里長……!!」

「落ちて鉄心。お前の気持ちは痛いほどわかる……それにこっちもいい気はしねえんだ」

激怒している鉄心に対して、こちらも苛立ちを含めた声で鉄心を宥める親友の長瀬隼人。隼人が苛立っている理由はただ一つ……自分の娘に似ているからという理由だけで一人の少女が殺されたことだ。鉄心もそれに気付き、すまんと答え目の前に置いてあるお茶を啜る。

「でも、なんで大戸さんがそんなことを……」

そう呟いたのは四人の仲で唯一の紅一点、銀次の母親である桐野沙?である。沙?は目を伏せながらなぜ大戸がこのようなことをしたのか?と思う。

里長はその沙?の言葉を聞いて、ふむと頷き自分の予想を話す。

「おそろくじゃが……大戸の奴は桐野親子を陥れようとしたのじやろっ」

「陥れる……?なんのためにですか?」

里長の言葉に、沙?は疑問を浮かべた声を出す。里長は続ける。

「沙?殿の知っている通り、鉄心も銀次も里中から慕われておる。おまけに二人とも強い……恐ろしいほどにな。それに銀次はあの

年ですでに里長候補としてその名を連ねておる……いや、もはや銀次以外の候補はすでに居ない状態じゃ」

甲賀の里では新しい里長を決める際、主に二つの条件が必要である。一つは忍びとしての力。これがなければまずお話にならないし、意味がない。そして二つ目……こちらが重要である。二つ目に重要なこと、それはいかに慕われているかである。

これも非常に重要で、里の者に慕われてなく、その上嫌われているものは絶対と言っていいほど里長の候補にすら選ばれない。つまりは包容力・カリスマ性などといったリーダーとして必要なものを持っている人物……銀次自身は「そんなもの持っていない」と言うだろうが、周りの者は持つていると確信しているため里長候補として銀次を担ぎ上げている。もちろん、それを面白く思っていない連中はもちろんいる。

「大戸は銀次が里長候補に上がっているのが許せなかった……実際、あ奴は銀次が里長候補に名を連ねた時から反対しておったからのう」

「そつえば……そつでしたね」

沙？も大戸がやたらと反対していたのを思い出す。沙？自身は銀次が元気でさえいれば、ただの下忍でもいいと考えている。鉄心も似たような考えなのだが、周りはそうは思わないらしい。やはり、最強と呼ばれる男の息子を次期里長に押したいのだろう。

「おそらくじゃが……大戸の奴は普段から仲のよい隼人の一人娘である楓をエサに銀次を追い込もうとした……じゃが」

「楓を殺せば足がつく……だから楓ソツクリの人間を探し出し、

そいつを犠牲にした・・・ということか」

里長の言葉に隼人が繋げる。銀次は楓を大事にしている。それこそ実際の妹のように大切にしている。大戸は今回そこに付け入ろうとしたのだろう。

「しかし、今回の事件はあ奴自身が関わってはおらんはずだ・・・あやつは爆弾を使うのを信条としておるからの」

「ええ、大戸の部下の中にも銃を使う奴はいませんでした・・・ということは」

「傭兵か・・・それとも殺し屋か・・・」

どちらにしても、大戸自身は殺害には関わっていないだろう。自分の手を汚さずに仕事をこなす・・・大戸の得意とする戦法の一つだ。

「理由がどうであれだ！！やはり大戸の奴は許せん！！今すぐ斬り殺してやる！！」

顔の上半分を狐の面で覆っている鉄心だが、歯を砕けんばかりに噛締める。それほど、今回の大戸の行ったことが許せないのだ。

今にも立ち上がり愛刀を手に大戸の下に駆けようとする鉄心に三人が制する。

「落ち着かんか鉄心！！確かに大戸は限りなく黒に近い！！じゃが、ここで下手に騒動を起せばあやつらの思う壺じゃ！！」

「そつだぞ鉄心！！お前の気持ちもわかる！！だが・・・今はまだ証拠が足りない。いまは耐えろ！！」

「あなた・・・冷静になって！！気持ちみんな同じなの！！」

「ぐっ・・・わかった・・・」

里長と親友、そして何より愛する妻の言葉に鉄心は苦悶の表情を浮かべながら浮かした腰を下ろす。

「まあ、とにかく問題はこれからじゃ。大戸についてはワシの配下のものがすでに張つておる。この前の事件のことも調べさせておるから、しばらくしたら結果がわかるはずじゃ」

里長を中心に四人は今後について話し合うことにした・・・だが、

「・・・」

このとき、その話を聞いていた銀次はフラリッとその場から離れた。

いつもの四人なら銀次の気配を読み取ることも出来ただろう。だが、今はそれぞれ怒りを覚えていたため誰も銀次の気配に気付くことはなかった。

〃〃銀次の部屋〃〃

あの部屋の話しを聞いた後、銀次は台所に行かずフラフラとした足つきで自室へと戻り襖を閉めた後その場にへたり込んでしまった。

「（・・・今回の事件は最初から決められていたこと・・・そして、大戸が仕組んだことでもあって・・・）」

銀次は、今回の事件が自分を陥れるために行われたこととそれのせいで陽香が巻き込まれたこと、そして何より下手したら楓が巻き込まれていたかもしれないということにかなりのショック・・・大ダメージを与えられていた。

「（俺のせいで陽香さんは死んだ・・・しかも下手したら楓が殺されたかもしれない）・・・はっははは」

銀次は、乾いた笑いを出した。その笑いはどこまでも虚しく、悲しいものだった。そして、同時に銀次は気付く。

「そんじゃあれか？俺は・・・部外者イレギュラーならではの問題を起した？そういうことになるのか？俺がいなけりゃ陽香さんも死ななくてすんだのに・・・俺がいなければ・・・楓も危険な目にあわなかったのか・・・？」

そこまで気付き・・・今までいっばいっばいだった銀次の心は・・・
“壊れた”。

「・・・らない」

銀次はユラリ、と立ち上がる。そして、先ほど完成した獄刀・羅刹

を手にする。そして力を込め、

「……『力』以外いらぬ……!!感情もいらぬ……必要なのは……!!」

獄刀・羅刹におのれの感情を流し込み、呟く。

「どんなものも払いのけることができる……絶対的な闘争心と力……それだけだ……!!」

銀次の手にある羅刹が、黒く輝きだした。

そして……そこで銀次の意識が途切れた。

〳〵長瀬家・楓の部屋〳〵

「……はっ!!」

夜中。寝室で睡眠を取っていた楓が飛び出すように跳ね起きた。なにやら、胸騒ぎがしたからだ。

「ぶつぶつ………いったいどうしたのぢやないか……?」

楓は乱れた息と寝巻きを調べ、首を傾げる。普段はこんなことはないのに……。

「まあ、考えてもしようがないでござるし……寝るでござ」ガタツ「……?」

急に、もう一度寝ようと思ひ布団の中に潜ろうとしたとき、何か落ちる音がした。楓はなんだろう?と思ひその物音がしたほうへと視線を向けるとそこには……、

「あれ……倒れてるでござる」

楓は首を傾げる。音の正体……それは、以前鉄心が町から買ってきたカメラで取った写真……銀次と楓のツーショット写真だ。楓はこの写真を銀次との大切な思い出として残しているのだが……それが倒れてしまった。

「縁起でもないでござる……よつと」

楓は布団から立ち上がり倒れた写真立てを立て直しに行った。そして、写真立てを手に持ち……気付く。

「……あれ?なんで……」

楓は写真を嵌めているガラスに罫が入っているのに気付いた。おそらくさっきの落とした拍子に割ってしまったのだろう……と、普段の楓なら思う……しかし、

「なんで……銀次殿の所だけ罫が……?」

そう、ちょうど苦笑いしながら写っている銀次の顔の部分にだけ・
・罫が入っていた。他のところはまったくもってそんな罫など入っ
ていないのに……。

楓は急に胸騒ぎが激しくなった。

「（もしかして……銀次殿に何か……）銀次殿……！！」

楓は胸騒ぎが収まらず、いてもたってもいられなくなった。楓は寝巻
きの上に羽織を羽織って部屋から飛び出していった……自分の想
い人の元へとむかって……

恐ろしいモノを見てしまうことになるとも知らずに……楓は銀次
の元へと走っていった。

第四十話（後書き）

どうでしたか？短い内容だったので楽しんでいただけかちょっと不安です。次回は遂に暴走が・・・はたしてどうなるのか・・・？作者もまったく読めない（笑）

さてさて、前書きにも書きましたとおり、とても重要なお知らせがあります。

さて、実は作者、現在バリバリの高校三年生です。まあ、高校三年生と聞いて大体の方はわかると思いますが、作者は就職をしようと思っております。あ、もちろん『忍の剣士』は続けていきますのでご安心ください。

それでこれからさき勉強やら何やらで色々と忙しくなると思うため、投稿が不定期更新になると思います。また、最近感想の返信も仕切れてない様に、返信もままならなくなると思います。

皆さんには非常にご迷惑をお掛けしますが、ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

今回は次回予告はお休みです。

最後にオリジナル変体刀案を考えてくださった完全怠惰宣言さん、
ありがとうございました！！

第四十一話（前書き）

息抜き用に短編でも書こうかと思っている銀閣です。

どうも皆さん、お久しぶりです銀閣です。いやはや、長い間待たせてしまい申し訳ありません。やっとこさ更新できました。皆さんが楽しんでくれれば幸いです。

さて、今回の過去編ははたしてどうなるか・・・どうぞぞー！！

第四十一話

〃〃甲賀の里・大戸屋敷〃〃

銀次が刀を作り上げ、楓が家から飛び出してしばらくたつた頃。大戸の家では毎日のように小宴会染みたことが行われていた。

「ふア・・・チクショウ俺も酒飲みたいぜ」

その入り口。門のところには門番なのか二人の男が立っていた。二人ともまだ若く、二十歳ぐらいだろうか？その片方の細身の男は中で行われている宴会の音を聞きながら、欠伸をかまして呟く。隣にいた眼鏡を掛けた男が欠伸をした男に注意する。

「おい、いくら暇だからって油断はするなよな。もしかしたら誰かが侵入してくるかもしれないんだぞ？」

「誰かって誰だよ？むしろこんな警備ガチガチのところに入りたがる変わり者いるか？」

欠伸をかましながら細身の男が問いかける。大戸の家は、恐ろしいほどに警備が堅い。塀で囲まれているのはもちろん、必ず屋敷の中にも見回りを出すほどだ。しかも、配下の中から腕利きの中忍を選び出したものが中心で・・・いま門番をしているこの二人はまだ入ってきてまもない下忍だが、実力は高い。

眼鏡の男は細身の男にそういわれ、多少困ったような顔になる。

「まあ・・・な。たしかにこの警備のなか侵入しようなんて、馬鹿はそうはいないだろうな」

「だろ？なら酒を飲みたいと思ってもなんら問題はな「ザシュツ」は？」

「ん？おいどうした・・・！！」

急に、細身の男から変な音が聞こえたため、眼鏡を掛けていた男が怪訝な顔になり、そちらを向くと・・・そこには、

「お・・・が・・・なん！？」

「き、きさまは・・・！！」

細身の男の胸を貫く黒い刀身・・・そして、背丈170cmほどの蒼髪の青年・・・銀次が立っていた。銀次は手に持っていた黒色色の刀身をした長巻を手に持ち、それで細身の男の腹を背中から貫いていた。表情は俯いているせいでよくわからない・・・だが、かすかに見えるその表情は・・・、

「・・・」

ザシュツと、小刻みいが生々しい音をさせながら、銀次は手に持った長巻・・・獄刀・羅刹を上へと斬り上げる。

「ギャツ！！」

細身の男は切り上げられる短い間に走った痛み悲鳴を上げるも、すぐに頭まで引き裂かれ真っ二つにされてしまった。斬り口からは大量の血と臓物が溢れ出て、すぐさま小さな池を作り出した。

「・・・はっ！」

眼鏡を掛けた男は先ほどまで話していた友人があっさりと斬り殺されたことに、呆然と眺めていたが、すぐに意識を銀次へと戻し、懐に入っていた呼子笛を取り出し吹こうとしたが・・・、

ザンツ！！

笛を口につけようとした瞬間、眼鏡の男は銀次が横に払った羅刹により右手と首が綺麗に切り落とされた。

「（ば・・・かな・・・！？）」

眼鏡を掛けた男は首だけとなっても残っている意識のなか、信じられないという顔をなり地面を転がった・・・そして、薄れ行く意識の中男は見た。足を振り上げる銀次の顔が・・・狂ったような笑みで彩られているのを・・・

「・・・」

グシャツ、という音をさせながら、銀次は足元に転がっていた頭を踏み潰した。勢いよく踏んだせいか、辺りに脳漿と白い頭蓋骨の破片、そして二つの眼球が神経をつないだまま飛び出した。

銀次はその自分の起した惨状を狂笑みをしながら眺め、

「・・・」

目の前にある大戸の家へと入っていった。

くく大戸屋敷・大広間くく

銀次が屋敷に侵入したのにも気付かず、大戸とその配下たちは大広間で酒を飲んでいた。

「くくつ・・・しかし、まさかあそこまでうまく行くとは思わなんだ」

「まったくですなア大戸殿」

大戸とその部下達は以前に起した事件のことで今でも酒宴を開いていた。

「あの桐野の小僧と長瀬のところの小娘は仲がかなり良かったゆえ、あのようにソックリの人間を殺せば精神的に追い込めると踏みましたが・・・いやはや、さしがは大戸様だ」

「ははは、当たり前だろう。所詮何事も力以上に必要なのはココよココ」

部下の言葉に大戸は大笑いを決めながら、右手の人差し指で自分の額をコンコンと叩いた。確かに、どのような作戦も力だけで押し通せるものではない。力を持った兵士が活躍するには、優秀な頭脳を持った指揮官でないとできない・・・まあ、大戸はどちらかと言うとずる賢い狐みたいなものだが。

配下の者たちは大戸のその言葉を聞き、大いに大戸を褒め称えた。すると、ふと一人の若い下忍がおずおずと手をあげた。

「あの……大戸様。少しばかり気になっていたことがあるのです
が……」

「ん？なんだ。言ってみる」

大戸に促され、若い下忍がははつと恐縮したように頭を下げた。

「今回の仕事ですが……なぜ長瀬のほうの小娘を殺さなかったのですか？それにわざわざあのような傭兵達を雇わずとも我らで行えばもつと簡単に済んだでしょうに……」

若い下忍は疑問に思っていたことを口にした。確かに、実質問題で考えればわざわざ楓ソックリの人間を探すよりかは楓本人を銀次の目の前で殺せば陽香が死んだとき以上の精神的ダメージを加えることができるだろう。傭兵にしても『ブラッディ・エンジェルズ』は世界的に有名な傭兵集団。わざわざ高額な金を払って雇うのもどうか……と下忍は思ったのだろう。

大戸はうむ、と髪を撫で付けながら頷いた。

「ふむ……そうかそうかわからぬか。まあよい、わからないのなら教えてやろう……。まあ、確かにお前の言うとおり長瀬の小娘を殺せば手っ取り早かつたろうし、わざわざ高い金を払って傭兵を雇わなくとも我らの手に掛ければ即座にあの小娘をバラせただろう」

「それならなぜ……」

「わからぬか？……それをしたらすぐに足がついてしまうだろう」

そこまで言われ、若い下忍ははつとした顔をした。

そう、大戸が今回この作戦を考えたのには足がつかないようにするという意味もあったのだ。基本的に甲賀の里では15歳以上で任務以外での外出は厳禁とされており、その年齢に達していない楓は外には出れない。つまり、里内で殺さねばならない。だが、里内で殺せばそれこそすぐに足がついてしまう。それに武器の問題もある。

「我らは刀剣や手裏剣といった武器を使う・・・だが、それだとこの里内の犯罪だとすぐわかるだろう・・・ゆえに我らが使わない武器、つまり銃器を使うかの傭兵共を使ったのだ」

「なるほど、さすがは大戸様・・・しかし、なら傭兵のほうは・・・」

若い下忍は納得しながら次にでた疑問を口にした。そう、雇ったのは傭兵。命を引き換えに戦い金を得る戦争屋だ。だが、同時に金さえ払えばそちら側についてしまうということもある。もし、傭兵団のことが知れて捕まり、金を詰まれ吐けといわれたら・・・自分達のことを洗いざらいしゃべるかもしれない。

「それも抜かりない。すでに討伐隊を編成して向かわせた」

そついいながら大戸はいやらしい笑みを浮かべる。討伐隊・・・つまり傭兵団を討伐させるための編成部隊。大戸の部下の中にいる中忍五名、下忍十名を向かわせていたのだ。普通の傭兵団なら十分過ぎるほどの戦力だ・・・そう『普通の傭兵団』なら・・・だ。

「まあ、傭兵は口封じができたし桐野のクソガキも陥れた。これで里長候補も私に・・・」

大戸はこれからのことを考えながらククク、と笑っていた。その笑みは非常に汚らしく、とてもじゃないが里長にしたいかと聞いても百人中百人が反対意見をだすだろう。

「ははは、そのときは是非とも我らにも役職を・・・」

「ああ、もちろんだ。何せ、私が考えるこれからの甲賀の里には私の配下が絶対的に必要だからな」

配下の言葉に大戸は頷きながら答えた。はたしてどのような里にするのか・・・？まあろくでもないのには間違いないだろう。

「ははは、それを聞いて安心しましたぞ・・・おっと少しばかり厠に・・・」

おそらく大戸の配下の中でも偉い方であろう男が安心したといった後立ち上がり、トイレへと向かおうと立ち上がり廊下へと続く襖を開けた。

「えっ？」

すると、男の目の前に黒く輝く刀身がムンツとした鉄錆の臭いとともに迫っていった。男は見ることにさえてきたが、アルコールのせいもあってか動きが鈍っており

ザシュツ！！

「ぎゃッ!」

短い断末魔と肉と骨が斬られる独特な音・・・男は頭から股まで両断されてしまった。そして、辺りには血と臓腑がばら撒かれ、鉄錆の臭いが濃密に広がり始める。

「ん・・・な・・・？」

「な、なんだ!？」

「敵襲か!？」

中にいたものは、最初何が起きたかわからなかった。わかったのはただ一つ。自分の上司の一人が厠に行こうとして襖を開けたら・・・真つ二つにされたことだ。だが、そこは腐っても忍者。すぐにただ事ではないと理解して臨戦態勢に入った。

その中で大戸ただ一人は動じずに酒を飲みつつ明けられた襖を見ていた。そして、ニヤリと嫌らしい笑みを浮かべ、

「ほう・・・鉄心のほうがくると思っていたのだが・・・貴様がきたか・・・桐野銀次」

「・・・」

大戸の言葉に反応してか、それともただ単に殺しが嬉しかったのか・・・銀次はただ恐ろしい笑みを浮かべていた。

ワンサイドゲーム・・・スタート。

くく東京湾・港くく

銀次が大戸邸に乗り込んでいたその頃。東京にある港で少しばかりの争い・・・いや、虐殺が行われていた。

『やれやれ・・・依頼主に殺されそうになったのはこれが二度目じゃないけどよ・・・もつと骨のある奴はいなかったのか？』

「ぐつ・・・」

東京湾にある港にある一角の倉庫・・・そこには以前、名瀬陽香を撃った傭兵団『ブラッディエンジェル』が新たな仕事を求めに海外に飛ばうとしていた・・・のだが、

「『それとも何か？この国のスパイはみんなこんなに弱いのか？この前のガキのほうがまだ骨があったぜまったく・・・』」

そついいながら、手もに持っている愛銃・・・M14を弄んでいる男・・・以前、陽香を撃ち殺した大佐と呼ばれていた男が英語で目の前にいる忍者・・・甲賀忍軍の中忍の一人で大戸の支配下にいる男だ。

この男が大戸から受けた任務は簡単至極。この傭兵団を『口封じ』せよとの命を受け、同じ中忍四人、下人十人を連れてきたのだが・・・結果は散々なものだ。

「（な、なぜだ！？我らは甲賀忍軍・・・しかも中忍が五人もいたのだぞ！？下忍だって、中忍候補に名を連ねているのを選びすぎてきたというのに・・・！！）」

多少過剰戦力とも言える戦力だった・・・が、結果として男の目の前にはかつての仲間が様々な鉛玉を喰らい全身を引き裂かれたり、ナイフやマシエットで首を切落とされたり、腹を抉られたりしたかつての仲間の死体が転がっていた。襲撃からものの数秒・・・あっという間であった。

大佐は懐から紙巻タバコを取り出し、それを口に咥えマッチを擦り火をつける。そして煙を肺一杯に吸い込み、吐き出す。

『ふう〜・・・で？どうすんだい？ニンジャ』

「く、くそがアアアアアッ！！！！！！」

その余裕たっぷりの顔が気に入らなかったのか、男は手に持っていた忍刀を振り上げ大佐へと斬りかかった・・・が、

『遅いな』

ドスッ

「アア・・・！？」

一瞬の間に、男の腹に大佐の着剣しているM14が突き刺さった。動作も見えない、完璧な刺突・・・この大佐がかなりの修羅場を生き抜いている証拠だ。

『遅い・・・遅過ぎる。あの時のガキの反応はもつとよかつたぜ？
・・・お前、あのガキより腕は上なんだろ？なのになんだこのザマは・・・』

大佐はそついいながらM14上へと持ち上げる。本来は一人、ましてや成人男性一人持ち上げるなど不可能に近い・・・だが、

「ぐ・・・グア・・・!!」

見た目四十代はすでに過ぎてるような大佐は軽々と男の体を持ち上げた。銃も軋る音もしないでそのまま持ち上げられている。そして、真上までもって行き、詠う。

『我らの天使は血に飢えている』

『その姿はとても美しく・・・そして儂い』

大佐は、引き金に指をかけた。

『心苦しい・・・その姿は見たくはない。ならば我らが信徒がすることほただ一つ・・・』

ニヤリと笑い・・・

『我らが天使に、反徒共の血を捧げたらん。それが我ら・・・ブラッディ・エンジェルズ』

引き金を・・・引いた。男の腹部から大量の血が噴出し、男はただ

悲鳴を上げ絶命してしまった。

それから数十分。大佐を初めとしたブラッディエンジェルの隊員たちは船がでるまでの間、タバコをふかしたりして戦いの余韻に浸っていた。大佐も例外ではなく、血に染まった銃剣を拭いながら紙巻タバコをプカプカふかしていた。そこに、一人の男・・・マシエツトを両腰にぶら下げた男が近寄ってきた。

『大佐。出航準備完了しました。あとは乗り込むだけです』

『おうわかった中佐ご苦労だったな。・・・よしお前ら！！次の仕事場に向かうぞ！！次も俺らの天使に血を捧げるぞ！！』

『『『『おおっ！！！！』』』』

男達が野太い声で反応してぞろぞろと、しかし規律のとれた足取りで船へと向かっていった。大佐がその集団を眺めていると、

『大佐！！どうだった今日の俺のガンプレイは？』

そういつて話しかけてきたのはまだ若い、二十歳ぐらいの金髪の男だ。紅いベレー帽、上下黒の軍服に赤スカーフ、そしてコンバットブーツ・・・これだけならまだどこかの軍人にも見えなくもないが、肩をタスキ掛けのようにしたガンベルト、そして左腰の後ろ、右腰のやや前にリボルバー・・・かつてアメリカの西部を制した名銃の中の名銃。これを知らないと言銃マニアとは語れない至高の一品、コルト・シングル・アクション・アーミー、通称『コルト・ピース

メーカー』だ。確かに名銃ではあるが、現代の戦場では時代遅れの銃である。しかし、それをあえて装備するこの男・・・相当の使い手なのだろう。

大佐はその若い男の声に多少の苦笑いと呆れを含んだ笑みを浮かべ、振り向く。

『おいオセロット・・・お前戦場にガチでガンプレイしてどうするんだ？ありゃあくまで俺が考えたお遊びに過ぎないんだぜ？』

『何を言ってるんだ大佐！！あなたが考えたファイティングガンプレイは素晴らしいじゃないか！！だからこそ俺も祖国のマカロフを使っていたが、あなたの言葉とガンプレイに感銘を受けてこうしてSAAを装備しているんだ！！』

オセロット、と呼ばれた若者はそう言いながら右手で右腰前に下げているSAAを取りクルリと回す。そのままクルクル回し、空中に放り、背中側でキャッチ。そしてそのまま水平スピンを決め最後にもう一度空中に放りキャッチ。そしてガチャツという音と共にホルスターへと戻した。

大佐はそれをほう、といった感嘆の声を上げ顎に手を当てながら眺める。

『なかなか上手くなったじゃないか。昔はそれやって何度も自分の頭にぶつけてたのにな』

『・・・隊長。それは言わないでくれ』

オセロットは過去の不器用な自分に当るかのように顔を顰める。すると、中佐と呼ばれたマシエット二本装備の男が鼻で笑い、

『ふん、そんなもの実戦では非効率すぎだ』

『そういうあんたもマシエットと投げナイフだけってのもどうかと思うぜ？そっちのほうの方が明らかに非効率すぎるだろう』

『・・・』

中佐とオセロット。どうやらこの二人は仲が悪いらしい。互いにくらみ合いながら各々の得物を構え・・・

『落ち着け馬鹿二人』

ガッゴンッ

それを見かねた大佐が、愛銃のM14の銃身を掴み、銃底で二人の頭を思いつき叩いた・・・ちなみにM14は木製ストックだがその威力は計り知れないので戦場以外では真似はしないように。

『~~~~~!~!~!』

二人は頭を抑え悶絶する。周りにいた隊員たちはそれを見て腹を抱え笑っている。大佐はハア、とため息を吐きM14で肩をトントンと叩いた。

『喧嘩するのは別に構わないがな、せめて船の中でしやがれ。この国の警察は優秀だから早くしないと見つかるぞ』

大佐の言葉に、二人は渋々とした風に。だが、睨み合いながら船の

中へと入っていった。大佐はそんな二人をやれやれといった風に眺め、自分も船へと乗り込もうとし・・・一度立ち止まる。大佐はクルリと後ろを振り向き、

『さアて・・・あのガキどうなるかな？』

大佐はにやりと口を歪めた。大佐は戦場に身を投げ入れかなり長い。その長い戦場経験のなか少年兵は何度も見たことがある。そして、その少年兵たちがどうなっていたのか・・・もだ。

『あのまま潰れるか・・・それとも立ち直るか・・・非常に楽しみだぜ』

なぜか、なぜか知らないが、大佐はまたあの蒼髪の少年・・・桐野銀次とまた再開するような予感がした。そして、再開したらまた敵同士であろうとも予想できた。そのときの戦いがどうなるのか・・・？それを考え大佐は口元を歪めた・・・

『待つてるぜ・・・桐野銀次』

その笑い方は、まるで狂戦士が浮かべる笑み・・・男はその笑みをしながら船へと乗り込んだ。

後に、銀次一派とこのブラッディエンジェルスは激しい戦いを繰り広げるのだが・・・それはまだ先のことである。

「はあはあ・・・銀次殿・・・!!」

息を切らしながら人を探している一人の少女・・・長瀬楓がそこにいた。楓の探し人・・・それは勿論銀次である。

妙な胸騒ぎを感じ、家を飛び出した楓はそのまま桐野邸へと飛び込んだ。もちろん桐野邸に居た桐野夫妻、里長、楓の父親である隼人は驚いた。なぜこの四人が集まっているのか？楓は不思議に思ったが今はそれよりも銀次のこと心配でしようがなかったので、大人四人をスルーし銀次の部屋へと急いだ。

『銀次殿!!』

そして、目的の部屋の持ち主の名前を呼びながら楓は部屋に飛び込んだが・・・その部屋の荒れ具合に最初驚いてしまった。散乱する本。傷つけられた壁や畳・・・そして地面に転がる刀。普段の銀次ならそのようなこと絶対にしないのに・・・と、銀次の心がだいたいぶっ参っていると感じ取った楓は、即座に部屋の主を探した・・・しかし、いなかった。

どこに行ったのか？楓はわからなかった。まさか・・・と思い、楓は頭を振るう。

『（銀次殿はそんな弱い人間じゃないでござる!!!・・・でも、いたいどこに・・・？）』

楓は考える。はたして銀次がどこに行ったのか・・・？そこでふと

ある話しを思い出す。それは以前、銀次のために野草を摘みに行つたときのことだ。

『なあ、聞いたか？今回の銀次のあの任務の……』

『ああ、あれだろ？あの事件は実は大戸の奴が仕組んだって……確かにアイツならやりかねないよな』

そんな会話を聞き、気になった楓はすぐにその二人組みの会話の意味を聞こうとした。だが、二人は慌てたように何でもないと、言つてその場から離れてしまった。その後も、里中で似たようなことがいくつもあつた。最初は軽い違和感。だがそれが長く続けば誰だつて怪しく感じる。

何か、自分に隠している。

そう思った。だが確証はない。楓は非常に気になつたが……今は銀次のことが優先だと思ひ野草を摘みにいつていた。だが、ここでふとあることが浮上してきた。

『大戸の奴が……』

大抵、誰かの話を盗み聞きしていると大戸の名前がでてきた。里中のものが大戸を嫌っている。それは楓も知っていた。だから大戸の名前が上がるのは滅多にない……ゆえに、

『まさか……』

楓は嫌な予感がさらに増えていくのを感じていた。胸騒ぎも以上に高くなってきたことも・・・気付けば、楓は走っていた。

目的地はただ一つ・・・誰もが行きたくないといっている屋敷・・・大戸屋敷だ。

そして、しばらく走り楓は大戸屋敷の近くまでへと来た楓。一旦息を整え、少しばかり遠くにある大戸屋敷を見る・・・が、特に変わったことはない。多少の喧騒は聞こえる程度だ。だが、楓にとってその喧騒が銀次に関わっているのでは？と思い気持ちが焦る。

「銀次殿・・・いまいくでござ・・・!？」

る、と言おうとしたとき。楓の鼻が臭いを捕らえた。凄くムン、とする臭い・・・。楓はそれをどこかで嗅いだことがあるが・・・思いつけない。

「(なんの・・・臭いでござるか・・・?)」

楓は思わず息を呑む。あまりにも濃い臭いなので、鼻がそれなりにいい楓は一瞬動きを止めてしまうほどだ。そして、鼻をヒクつかせ臭いの元を探ると・・・

「・・・大戸の家からでござるな」

臭いの元は、大戸屋敷のほうから臭ってきた。

「……」

楓は、心臓の鼓動が早まってきたのを感じた。行っではいけない。見てはいけない……心のどこかでそのような声が聞こえてきた。だが、楓はここで引くわけにはいかない。

「（もしかしたら、銀次殿があそこにいるかもしれないござる）
……」

大事な想い人が、そこに居るかもしれない。楓を突き動かすのはただそれだけ。それ以外は必要ない。
楓はさらに大戸屋敷へと足を運ぶ。

「……ん？何でござろうかアレは……？」

しばらく歩き、大戸屋敷の入り口が見えてきた……が、その入り口である門のところには何か横たわっているのが見えた……胸騒ぎが激しくなる。

「……」

楓は一瞬踏み出すのを躊躇したが、すぐに意を決したように踏み込んだ。ザツザツザツ、と歩いていき、横たわっているものの輪郭がはっきりと見えてきた。

「？……何をしているでござる……ヒッ……！」

見える輪郭からして、人間だと思った楓はなぜ、このようなところで横になっているのか気になり、声を掛けた……だが、そこに横たわっていたのは人間は人間でも……

首を両断された体と、縦に両断された人間の『死体』だった。

楓は臭いの正体が掴んだのと同時に、思い出した。この臭いは血の臭いだ。山で兎を狩った時や稽古のとき擦りむいた時などにする臭い……鉄錆のような臭い。楓は最初こそ抵抗感があったが、段々と慣れていった……だが、それは兎や自分の血の臭いであり人間の、ましてや死体から溢れ出る濃い血の匂いだとわかれば話しは違う。しかも、今回はややピンク色をした内蔵も撒き散らされている上に、おそらく首だったのだろう肉の塊からプルプルしたゼリーのような物体と眼球が飛び出していた。

「うえ……げえ!!!」

楓は初めて見た人間の惨殺死体を目の前に、地面に蹲り胃の中の物を吐き出した。ゲゲエいいながら胃の中の物を吐いていく。ムンツと胃液独特の臭いと鉄錆臭い血の臭いのせいで、楓はさらに吐いた。

「ウエ……はあはあ……」

しばらく楓は吐き続け胃の中のをほとんど吐き出し何とか落ち着いていた。荒い息をつきながら、楓はふと思った。

「もしかして……これは銀次殿が……?」

そこまで考え、楓は体を震わす。もしかしたら、この目の前に転がっている死体がいくつも転がっているかもしれない・・・下手したら銀次自信が転がっているかもしれない。楓は頭を左右に振り、変な考えを吹き飛ばす。

「銀次殿・・・」

普通なら、ここで隼人や、鉄心たちを呼んだほうがいいかもしれないとも思った・・・だが、楓は不安が募り過ぎてそこまで機転が回らなくなっていた。

ヨロヨロとした足取りで、楓は死体を避けながら大戸の屋敷へと入っていった。

そこから先には地獄が待っているとも知らず・・・。

第四十一話（後書き）

どうでしたか？楽しんでいただけでしょうか？途中でみんな大好きなキャラが出てきましたが大スルーの方向で（笑）
おそらくですが、次回には過去編が終わると思いますので楽しみに！！

次回予告！！

大戸家でその兇刃を振るう銀次・・・それを見た楓は銀次を止めようと必死に抱きつく。

「落ち着くでござる銀次殿！！」

「ガアアアアッ！！！！！！」

振り払い、斬り付ける・・・大事な者を・・・。

「そんな・・・銀次殿・・・」

絶望に染まる楓。その楓に刃を振り下ろそうとしたとき・・・

「銀次君！！」

聞きなれた声が・・・二人の間に滑り込んできた。

はたして・・・どうなる・・・？

次回楽しみに！！

第四十二話（前書き）

改めて数学の奥深さを痛感している銀閣です。

どうも皆さんお久しぶりです！！以前の投稿でオセロットが思いのほか人気があつてビビりました（笑）今後も色々と出してみたいなあ・・・。

さてさて、それでは今回で過去編は終了いたします。はたしてどうなるか・・・？楽しんでいただければ幸いです。

それでは、どうぞー！！

第四十二話

斬る。

「ぎゃあー!!」

斬る

「ガッ!!」

斬る

「ぐえっ!!」

ただ、ひたすらに斬る。

「ぎっ・・・!!」

大戸屋敷に侵入した銀次は現在、大戸たちが宴会しているとわれる部屋に入り込み、奇襲。大戸たちはそれを迎え撃つ形になったのだが、

ザシユツ!!

「ぎゃっ!!」

先ほどからこのように斬られまくっているのだ。さすが忍者というだけあってか、背中や懐から刀や鎖鎌を取り出し銀次に襲い掛かる

が、襲い掛かるたびに切り裂かれる。

正面から正面唐竹割りにしようと振りかぶればその前に羅刹を横一閃にして相手の腹を両断し内蔵と血をばら撒かせ、

突撃を喰らわせようと突っ込んでくれば袈裟に切り裂き鎖骨と肋骨と肺を切り裂き、

ならば横から、と切りかかれば死角から石柄が飛んできて内蔵を破裂させられる。

後ろから切りかかっても逆袈裟に斬り上げられ股から脳天にかけて両断される。

羅刹の形状は長巻そのもので、太刀の刀身の長さをそのままに、薙刀のように長い柄を持たせた武器だ。戦闘力は高く。戦国時代まで実際に使われていて、かの有名な上杉家（特に景勝の時代）も『長巻隊』というのを作つたぐらいだ。もっぱら馬の足を斬るための武器として使われていたが、その戦闘力は人間にも絶大に発揮できる。

「おのれえっ！！！」

一人の忍者が銀次目掛けて、離れたところから棒手裏剣を投げつける。手裏剣は凄まじい速さで銀次へと襲い掛かる……だが、

「……」

パシッ、

「な、なに！？そんな馬鹿な「ザシュツ」かつ・・・！！！」

銀次は驚いている男に手裏剣をお返しとばかりに投げ返した。手裏剣は男の喉に突き破り、反対の壁に突き刺さる。男はヒューヒューという音を喉に空いた穴から吐き出し、苦しそつに喉を押さえるがすぐに倒れ息を引き取った。

「ひ、ひいいいッ！！！！！」

「ば、化け物だア！！！！！」

異常なほどの戦闘力を見せる銀次に恐れを抱いたのか、部屋の中にいた若い下忍二人が部屋から飛び出した。だが、残念なことに銀次が立っているの襖である入り口。この以外の出口はもちろんないわけで・・・

ザシュツグシャツ

「ぐえっ・・・！！！」

「ギヤツ！！！」

逃げようとした瞬間。銀次の羅刹が即座に二人を切り裂いた。一人は体を袈裟に斬られ両断され、もう一人は頭を横一線、ちょうどパイナップルを横に切断したような感じで切られた。

血と内臓、そして脳漿を当りにばら撒きながら二人はその場で絶命して地面へと倒れた。

「・・・」

銀次・・・いや、正確には獄刀・羅刹により乗っ取られた銀次は無造作に手に持った変体刀を眺める。羅刹の刀身は深い、まるで憎悪のような色をした刀身だ。だがその刀身も今は血により赤黒く染まっている。その刀身を眺めた銀次は徐に、

ペロツ

舐めた。口の中に一気に血の味が広がる。鉄が錆付いたような味が喉を通り、鼻を突く。しかもなにやらプニプにしたものも口の中に入っていたが、銀次はそれも飲み込んだ。

「・・・」

不味い、けど今はものすごく旨く感じる。血はまるで極上のワインのように、口の中に入ったプニプにした物体・・・脳はまるでゼリーのように。正常のときの銀次ならそんなこと微塵にも思わなかったろうし、このような物を口に運びもしなかったろう。だが、今の銀次は銀次であって銀次ではない。獄刀・羅刹という変体刀に乗っ取られているといってもいい。

・・・ただ、それを知らぬ人間から見たら狂ってる人間にしか見えないだろう。

「(くっ・・・なんなんだコイツは！？本当に化け物か！?)」

十数人居た部下のほとんどが斬られ地面に血の池を作ってるなか、

大戸は目の前に居る銀次に恐怖を覚えていた。最初、銀次がここに来たときはチャンスだと思っていた。何せ、潰そうとした相手が勝手に、しかも武装して来たのである。これは殺すにはまたとないチャンス……だったのだが、

「（くっ……もう誰もいないのか!?!）」

大戸は大慌てで辺りを見回す……が、かつての部下は今現在床に沈み事切れている。おそらく外で警備していた部下も同様になっているのだろうと大戸は思った。そして震える。

「（いくら何でもコイツは異常すぎる……!?!）」

中忍はもちろん、下忍も中忍候補に名が上がっていたのがほとんどの大戸の部下が、ものの数分……もはや、大戸の中にある銀次は『ウザイ餓鬼』から『危険な狂人』へと変貌していた。

そんな視線に気付いたのか、銀次は刀身を舐めるのを止めて大戸のほうへと視線を向けた。

「……」

「ッ……!!」

銀次と目が合い、そして戦慄する。なぜか……それは、銀次の目が、あまりにも楽しそうだったからだ。まるで、鼠を髑り殺す猫のような目つき……いや、それ以上に酷いかもしれない。大戸も仕事上色々な人間を見てきたが……ここまで冷徹な目は見たことがなかった。

「く……クソがアアアアッ!!!!!!」

大戸は無駄に叫びながら両腕を振るう。大戸の手から数本の黒い棒・
・いや、短剣型手裏剣が飛んでいった。しかも、ただの手裏剣で
はない。柄部のところから煙が上がっているのだ。

炸裂手裏剣 大戸が得意とする武器の一つで、手裏剣の柄部に火薬
を仕込んだものだ。爆発力は少ないものの、人間に刺されば上半身
と下半身を分裂させるぐらいの威力はある。・・・だが、

「・・・」

ヒュンヒュンッ！！

「なっ・・・！！馬鹿な！！切り落しただと！？」

銀次は軽くなん振りか羅刹を振るうと、炸裂手裏剣は銀次ではなく
地面へと突き刺さる。しかも、柄部の導火線と炸薬を綺麗に分裂さ
せて・・・だ。

そして、銀次はジロリと大戸を睨む。

「！？」

大戸は全身が警戒警報をだしたの理解した。コイツには勝てない、
目の前に居るのはただのガキではなくただの化け物だ・・・と、そ
して逃げようと瞬動を使おうとしたが、

ザシュッ！！

「ぐわあああッ！！」

気を流し込んだ瞬間。大戸の両足首は切断された。大戸が倒れる中、その横では銀次が羅刹を救い上げるように切り上げた体制で止まっていた。

「（ば、ばかな!?あの速さで斬りかかっただど!?あいつは・・・あいつは正真正銘の化け物か!?）」

大戸は恐怖で体が震える。歯は噛み合わないのかカチカチといわせ、目は怯えて染まっている。そんな大戸に、銀次は視線を向けた・・・絶対零度といつてもいい視線を・・・。

「ひっひひひひいッ!!!!!」

大戸は最早恥も外聞も関係なく地面を両腕で這うように逃げようとする。だが、もちろんその速さはたかが知れているから・・・、

ドンッ!!

「ぐえっ・・・!!」

すぐに銀次に追いつかれる。大戸の背中に銀次は足で踏みつけた。しかも、今の銀次なら背骨ぐらい感嘆にへし折れるだろうにそれをせず、ただ踏みつけただけだ。そしてギリギリと力を込めていく。

「ぐっが・・・!!た、たすけ・・・!!」

口から助けを請う言葉を出すも、いまの銀次にはそんなの関係なか

った。今の銀次の中にある感情はただ一つ……人間を殺す、ただそれだけだった。

「……」

そんな大戸を見ていてか、銀次は何かを閃いたように獰猛な笑みを浮かべる。そして、

ピタッ、

「!? な、なにを……!? 」

銀次は羅刹の刃を大戸の首に押し当てる。大戸はいきなり首に感じた感触に驚く。だが、ただ押し当てただけで何もしようとしないう。それに不思議に思った大戸だったが……次の瞬間なぜそうしたかが……わかった。

ジヨリッ、

「ぐあっ!? 」

ゆっくりと、刃が引かれた。しかし首が切落とされるほどのものではない。皮一枚が裂かれた程度だろう。まあ、大戸も忍者だ、これぐらいなら多少は耐えられる……が、

ジヨリッ

「があッ!？」

今度は・・・少しだけ『押し切られた』。本来、日本刀や薙刀といった刀身状の武器は『押し切る』よりも『引き斬る』ほうが向いている。なぜかといえ、日本刀などには反りがあるからだ。この反りがあることにより、日本刀は比類なき切れ味を誇ることができる。もちろん押し切ることもできるが・・・わざわざやり難いほうであるよりは断然いいだろう。

そして・・・だ。もし『引き斬る』も『押し斬る』も、全然力を加えずゆっくりと動かしたら・・・？

ジヨリッ、ジヨリッ、ジヨリッ

「ぐ、があ!？や、やめ・・・!!」

そう、勿論切れる。だが、それは実戦では『一瞬の死』を与えるのではなく、『死ぬまでの苦痛』を与えることとなる。しかも首は頭と繋がっている重要な部分でもあり普通の生活をしている人間でも滅多に折れない。それが鍛えている人間ならなおのことだ。

銀次はゆっくりと大戸の首に羅刹の刃を切り込んでゆく・・・それはかつての処刑の一つであった鋸引きのようであった。

「クハハッ」

銀次はその苦しみもがく大戸を見てついつい笑い声を上げてしまっ

た。そしてまたゾリゾリと音を立てながら大戸の首を切り裂いてゆく、

「うは……!!……せ……!!」

大戸はイツそのこと殺せ、と言っているのだが、刃はすでに声帯にまで達しているらしく、大戸の口からは呻き声しか聞こえない……そして、

ドスツ、ゴロ……、

しばらく動かすことで、遂に大戸の首を切落とされた。ごろりと、大戸の首が転がる。

「……」

畳みに羅刹を食い込ませた状態で、銀次は先ほどの楽しげな表情から一変、不機嫌な顔になる。その顔はまるでおもちゃをどっかやっつけてしまい不機嫌になっている子供のようだ。

銀次は首を左右にキョロキョロと振り、生き残っているものがないかを探す。だが、粗方の大戸の配下は事前に一撃で斬り殺してしまったし、生き残っていたものも大戸を髑り殺している間に死んでしまった。

「……」

生き残りがいないとわかった銀次はさらに不機嫌な表情になり、大戸の屋敷をでようか?と考えたとき……、

「銀次……どの……?」

幼い、少女の声が聞こえてきた……。

その声は最近あまり聞かなくなったが、自分のことを心配してくれている少女の声……楓の声だと『桐野銀次』なら気付くだろう……だが、

『獄刀・羅刹』にとっては新たなおもちゃの声にしか聞こえなかった。

楓は目の前に広がる光景が何なのか最初わからなかった。一面に広がる赤色、転がる肉塊。そしてむせ返るような血の臭いが広がる部屋……。そこまできて、楓はここに広がっているのが先ほど玄關で見た連中と同じ死体だとわかった。

「うづぶつ……!!」

楓はまた口を押さえる。多少は慣れたとはいえ、初めて見た死体がここまでグロテスクなものならしょうがないだろう。下手したらトラウマになりかねない。だが、いくら胃の中のを吐こうとしても全然でてこない。さっきので全部吐き出してしまったようだが、体は楓の意志とは反対してまだ吐かせようとしている。

「うづぶつ……!!銀次……どの」

まるで、内臓を吐き出しそうな違和感を感じながら、楓は涙目で銀次を探す。幸か不幸か、銀次はすぐに見つかった……のだが、

「ひっ……!!」

楓は思わず悲鳴を上げてしまった……目の前にいる変わり果てた銀次の姿に。

「……」

全身を血で赤く染め上げ、不健康そうな顔にある目はまるで猛禽類のように爛々と輝いている。一見してこの惨状を作ったのが銀次だとわかる……だが、楓はそれでも最初は信じたくなかった。あの優しい銀次がこんな惨状を作るわけがない……と。そう信じたかった。だが、

ダンッ、

「……え？」

いきなりの踏み込み音。そして視界から消えた銀次。楓は最初何が起きたのかわからなかったが、自分の斜め前に右片手だけで長巻を持ち振り下ろそうとしている……銀次の姿がそこにあった。

ヒュオッ!!

「!？」

ガギィッ!!!!

楓は迫り来る長巻を持ち前の動体視力で念のために持ち歩いていたクナイで受け止める・・・が、

「あつっ!!」

吹き飛ばされる。元々体型が違いのもあつたし、何より今の銀次は獄刀・羅刹によりその肉体が強化された殺人兵器と化している。背中を激しく強打した楓は咳き込む。その楓に銀次はゆっくりと近づき、羅刹を振りかぶり、

「・・・」

羅刹を、振り下ろした。

「!?!」

楓はすぐにそれに気付き、またクナイで受け止めようと・・・いや、捌こうとした。だが、

ザシュッ!!

「アウ・・・!!」

受け止めきれず、刃が楓の左腕に食い込む。幸い後ろの壁で威力が弱まったのだらう。楓はその痛みに顔を顰める。

「(い、痛い・・・!!これが刀で斬られる感触でござるか・・・」

「!!」

楓も訓練時や山登りで擦り傷や切傷を作ったことはある。だが、実際の刃物で斬られたのはこれが初めてなのだ。

楓は初めて味わう刀傷に顔を顰めるも・・・銀次はその時間すら与えようとしない。また羅刹を振りかぶる。楓はそんな銀次を見て涙を流し・・・そして呼びかけた。

「ひぐつ・・・銀次殿・・・元に戻って欲しいでござるよ・・・」

「・・・」

・・・だが、楓の必死の呼びかけ虚しく、銀次は手に持った羅刹を振り下ろした。楓はそれを見てもう駄目だ・・・と思い目を瞑った・・・そのとき、

「ギン君、ダメーーーーッ!!!!!!」

「えっ!?!」

「・・・!!」

その声は、楓にとってよく聞きなれた声だった。

その声は、獄刀・羅刹に飲み込まれている銀次にとっては生まれてからずっと聞いていた声だった・・・。

その声を聞いたとき、銀次は獄刀・羅刹に奪われていた意識を微かに取り戻し・・・呟いた。

「・・・母・・・さん・・・？」

それは自分にとって第二の母でもあり、大切な親・・・桐野沙？であつた。

「ごふ・・・大丈夫・・・？ギン君・・・」

「あ、あああつ・・・」

銀次はガタガタと震える。今日の前の出来事と、先ほどまでの記憶で自分が何をやらかしたのかを思い出してしまったのだ。沙？はそんな銀次を見て、苦痛を受けながらも安心させるような笑みを浮かべる。

「大丈夫よ銀次君・・・いま、助けてあげるわ。その刀から・・・助けてあげるわ」

そう言つと、沙？はきつと顔を引き締める。すると、不思議な現象がおき始めた。沙？を中心に淡い白い光が浮かび始めたのだ。

「我、この者を助けたらん。我の命尽きようと、この者を助けたらん・・・」

「ぐっ・・・があ・・・！！」

沙？の呟く声に反応してか、銀次の体・・・いや、正確には獄刀・羅刹が拒否反応を示した。獄刀・羅刹を柄についたいる二本の小さい針が使用者の体内に入り、神経系を初めとした各種機関を極限状態にまで引き上げる。それは感情にも働き、人間の『闘争本能』を極限にまで引き出し、それ以外の感情を押しつぶしてしまうのだ。

つまりは銀次の体の隅々まで侵食した羅刹は、それを追い出そうとする沙？に反対するわけで、

「ぐあああつー！！！！！」

「っ！！・・・我、この身をもってこの者を助けたらん！！この者助かるならば、この身滅びようとて構わず！！！」

再び、羅刹に飲まれた銀次は手に持っていた羅刹を沙？の肩に食い込ませる。噴出す血、伝わる痛み・・・だが、沙？は詠唱をとめることはなかった。・・・そして、

「わが真名は竜桜樹后りゅうおうじゆき！！神樹・桜花繚乱の聖霊なり！！わが力を持ち・・・この者を助けよ！！！」

そう叫んだ瞬間。当りは白い光に包まれた。

「う、ぐあ・・・！！！」

「・・・」

光が去った後・・・残っていたのは泣き崩れる銀次と、先ほどの光景を呆然と見ていた楓。そして・・・床に四本の変体刀が転がっていた。

「……これが楓が言うところの『あの事件』であり、甲賀の里に伝わる『大戸一派肅清任務』の本当の内容だ……」

そういい終え、銀次は手に持っていた清酒を飲む。楓、真名、鈴もその壮絶な内容に驚いていた。楓はあの事件にはそんな真相があったのだと、真名と鈴は銀次にそんな過去があったのかと、普段からは想像できない銀次。以前肅清があつたときに見せた表情には、そんな理由があつたのか……と。さらに銀次の母親が聖霊でもあつたことに驚いた。

その三人を見て銀次はくつ、と自嘲気味の笑みを浮かべまた清酒を一煽りして、続ける。

「んで……その後は楓がよく知っていると思うが、俺は刀が持てなくなつたんだ」

「・・・どついう意味だ？」

銀次の言葉に真名が疑問の声を上げる。それに答えるように銀次は小さく頷く。

「おそらく・・・だがな。あの時俺は楓を斬った事と・・・母さんを斬ったことにより体が拒否反応を示したんだと思う・・・大変だったぜ？何せ刀を見ただけで吐き気がするし、刀を持つのもんなら本当に吐いちゃうし・・・おまけに俺はおれ自身が刀でもあるから・・・常に吐き気が止まらなかった」

そう、銀次は変体刀を生み出し使役できると同時に、虚刀・鑢と全刀・鑢も扱える本当の意味での人間刀なのだ。そのせいもあって四六時中延々と吐き気になされていた・・・。

「まあ、そんななかなか・・・俺のことを甲斐甲斐しく看病してくれた幼馴染がいてよ・・・」

「・・・」

銀次の言葉に楓は顔を紅く染める。そう、その苦しむなか、銀次のことを看病していたのは楓だったのだ。何度も、何度も何度も楓に助けられた。心が折れそうになったとき楓が自分の近くで微笑んでいてくれた・・・そして、銀次にとって楓が『好きな漫画のキャラ』から『大切な人』へと変わったときでもあったのだ。

「そして、俺は何とか克服した。そして俺は誓ったんだ・・・『もう、何も失わないような力を手に入れよう！！楓を守る、自分の大切な人を守るようにしよう！！』・・・とな。ま、今回はそれが裏目に出ちまったがな」

最後にそういい、くくつと苦笑する。四季崎の言葉を聞き、銀次は本当に自分が馬鹿だったと気付いた。楓の、他のみんなの気持ちを蔑ろにしていた自分が馬鹿だった・・・と。本当にそう思った。そんなとき、楓は先ほどの紅い顔をから一変、多少顔を俯かせ、

「・・・銀次殿」

「ん？・・・なんだ楓？」

下を俯いた楓に銀次は不思議に思い、楓のほうへと顔を向けた・・・が、すぐに楓は顔を上げ、

「色々と言いたいでござるが・・・まずは—————歯を食いしばれでござる銀次殿！！」

「はっ？どういう『ボガツ！！』ぼはっ！！」

急に感じた頬の痛み、そして吹き飛ぶ身体。小さいながらもしつかりと力が入った楓の拳は見事に銀次を吹き飛ばした。庭に転がりだした銀次はもちろん、そばにいた真名と鈴もポカンとした顔で楓を見つめていた。

そんな銀次に楓は握った拳を握り締めながら声を高らかにして告げた。

「銀次殿・・・確かに銀次殿が守ってくれるのはとてもありがたいでござる・・・でも、拙者とてくノ一

・・・女忍者の端くれでござる！！ただ守られるだけの存在ではなく、自分も戦い・・・そして共に銀次殿と戦いたいと思っているでござるよ！！そんな拙者の気持ちも知らないで・・・！！知らない

で……!!」

「楓……」

楓は震える拳を握り締めながら銀次に自分の思いを告げる。対する銀次は赤く腫れ、唇の端から流れる血を拭かず、呆然と楓を見ていた。

すると、真名と鈴は楓の言葉を聞きコクリと頷く。

「確かにね……。銀次さん、私もあなたに守られてとても嬉しいよ……。でもね、私は傭兵だ。金をもらえれば相手が政府軍だろうと民兵だろうと遠慮無しに弾丸をぶち込む……。でもね、あなたの隣でなら……。私はこの銃を、この弾丸を、あなたのために敵にブチ込んであげるよ。ただ守られるだけは嫌だからね」

「真名……」

次に鈴が続ける。

「……。私は元々作られた存在ヨ。銀次殿が世界中に渡した刀を壊し、その扱う人間を殺す……。それが私の仕事ネ。でもね、銀次さん。私はあなたの隣で共に戦えるならそれでいいネ。自分がどんな理由で作られたなんて関係ないネ……。ただ、あなたのために戦うヨ。この手刀足刀を……。あなたに捧げるヨ」

「鈴……。お前まで」

銀次は最後に楓を見た。

「……。この二人もそうじゃないぞ……。拙者も、真名も、鈴も、

他のみんなも・・・銀次殿と共に戦いたい、守りたいと思ってるで
「じやるよ」

「・・・そうか・・・」

その楓の言葉を聞き、銀次は改めて宙を見る。そして心の中で呟い
た。

「（四季崎、改めて俺は思うよ・・・本当に、いい仲間を手に入れ
たよ・・・）」

どこからともなく、当たり前だバアカ、と聞こえた気がしたが・・・
銀次はそれを苦笑したような笑みを浮かべるだけだった。そして、
三人に向き直り、

「じゃあ、三人とも・・・改めて頼みたいことがある・・・俺と、
俺と『共に戦ってくれないか』？」

三人は、銀次の言葉を聞き一瞬驚いたような顔になった。だが、す
ぐに不適な笑みを浮かべ、

「『当然』」

そう答えた。

ここで改めて、銀次は気持ち新たにする・・・『一人で戦い、死

んでも守る』から『仲間達と共に戦い、共に生き残る』へと・・・
銀次の気持ちは確かに変わった。

いま、新たな歴史が始まる。

第四十二話（後書き）

如何でしたか？ちよつとスランプ気味も合い混じり多少変なところもあつたと思いますが、どうかご容赦のほどを。

ふう、それにしても今回でやつと過去編が終わり、原作に戻るわけですね・・・ふふふ、薬味め覚悟しておけ！！お前に明日は存在しない！！

次回予告！！

新たな覚悟を決めた銀次は新たな思いを胸に精算をするためにネギを探しに学園長室へ、するとそこに居たのは、

「やあ、銀次おはよう」

「おう、久しぶりだな。傷は大丈夫か？」

迎えてくれた親友二人・・・そして、

「・・・いかような処分でも聞き入れよう」

神妙な顔で銀次の言葉を待つ学園長がそこに居た。

次回、制裁編。・・・はたしてどうなる。

「ふふふ、もっちろおん・・・銀次君を傷つけた奴は・・・この世に生まれてきたことを公開するほどの苦痛を与えてやるわ

短編1（前書き）

初短編！！

どうも皆さんお久しぶりです銀閣です。今回は前々から考えていた短編を書いてみました！！うまく書けてるかわかりませんが、楽しんでいただけたら幸いです。

最近、勉強やらスランプやらで色々とあり、その息抜きで書いたため所々に可笑しいところがあるかもしれない。

短編 1

〓〓桐野邸での最強姉妹喧嘩〓〓

毎度のことではあるが平和な桐野邸の夜。たとえ弾丸や光線やら飛び交い、剣戟や壁の破砕音が聞こえてきてり、家主の男のすすり泣く声が聞こえてもここでは平和な証拠である。

さて、そんな平和な桐野邸の地下にあるとある一室・・・ここに『平和』じゃないでございことがおきようとしている。

「宴会・・・？」

数いる変体刀の中でも性格が人一倍厳しいといっても過言ではない変体刀の一本、巫女刀・睡蓮が目の前にいる姉、聖魔刀・鈴蘭を眉に皺を寄せながら見る。

「そ、紗夜ちゃんもその体に慣れてきたんでしょ？だからどうかなー？って」

鈴蘭はいつものメイド服、ミラーグラス、M16を携え目の前にいる妹へと提案してみる。

「へう・・・宴会ですか」

紗夜、と呼ばれた睡蓮とは違う黒一色の巫女服を着た少女が顔を綻ばせながら宙に目を向ける。

式紙紗夜 名前からわかるように以前は3-Aの出席番号一番だった相坂さよだ。以前、睡蓮が街中を散歩していた際浮遊しているところを捕獲。紗夜の話しを聞きどうするか悩んだ睡蓮だったが、自分の式紙として育成することにしたのだ。

そんな紗夜。最初こそ久しぶりの肉体の感覚に逆に戸惑ったり、初めて聞くような睡蓮の単語に頭から煙を（比喻にあらず）出したりと色々と苦労はしたが今ではそれなりに楽しく暮らしていた。睡蓮は姉の言葉に眉をひそめ、

「残念ですが、そのような暇はございません。どうぞ宴会は姉上たちだけで楽しんでください」

「（あ・・・やっぱりその答えか）」

大体予想はしていたが、まさかここまで予想通りとは・・・と、鈴蘭は思いながら目の前にいる妹に視線を向ける。

「（銀次君のおかげで多少は丸くなったと思ったんだけど・・・やっぱりまだ硬いんだよね）」でもさあ、睡蓮。やっぱり息抜きは必要じゃない？そこでみんなでこう、パーーとさ」

「だから、そのようなことは姉上たちでお楽しみください・・・ほ

ら、紗夜手が止まっていますよ」

「あ、はい!!」

ぶいっと鈴蘭から視線を離す睡蓮。紗夜も鈴蘭から視線を外し慌てて目の前にある睡蓮特製の教材に向かう。ちなみに内容は神道についてである。

「（キラーン）」

・・・そしてそのとき、鈴蘭は見逃さなかった。紗夜の顔が若干残念そうに俯かれていたのを、

「（なるほどなるほど。実はいきたいけど恩人の睡蓮を無視することできない・・・か）」

確かに、紗夜にとって睡蓮とは第二の人生をくれた、いわば命の恩人。いくらその姉の誘いだとしても、やはり睡蓮を優先するのだ。決して人望がないわけではない。むしろ溢れて誰かに分けてもいいぐらいだ。ないのは色気と胸と・・・色気と胸・・・色気と胸その二つだけである。

「（・・・なんだろう？いま一瞬すごい侮辱されたような・・・。まあいいか、・・・それにしても、くうくう一途だね紗夜ちゃん・・・ふふふ、それなら）それにさ睡蓮。よくよく考えたらまだ紗夜ちゃんの歓迎会もしてないじゃん？」

「・・・歓迎会？」

ピクリと、睡蓮が反応した。確かに言われてみればと思いき睡蓮は記

憶を巡る。思えば、紗夜が肉体を手に入れてすぐに式紙としての教
練を叩き込んでいたため確かにそんなことをしていなかった。しか
し、自分の性格上そのようなことをしようとも思わなかったが・・・
睡蓮は改め紗夜を見る。

「・・・」

「へう？な、なんですか・・・？」

慌てたように、紗夜が睡蓮に返す。その顔はどこことなく鈴蘭の言葉
に引かれつつある顔付だった。睡蓮はそんな紗夜を見てふう、とた
め息をつく。

「（私も甘くなったものです・・・）・・・わかりました。ただし、
『あくまで』紗夜の歓迎会ですので騒がしくするのはほどほどにお
願いしますよ姉上」

「おっ！！さっすが睡蓮！！よ、この太っ腹！！」

鈴蘭はコノコノツと楽しそうに肘で睡蓮を小突いているが・・・睡
蓮は鈴蘭の言葉になぜかムカツときて、

「・・・そういう姉上は心は広くても身体は貧相ですね・・・胸の
辺りなど特に」

「（ビキッ！！）・・・おいこら妹。いまなんていった？」

睡蓮の言葉に額に怒りマークを二つほど浮かべながら、鈴蘭は睡蓮
に聞いた・・・ちゃっかりとその手に持っているM16の安全装置
を外してかつ薬室に弾丸を送りながら。対する睡蓮はフンツと鼻で

笑い、

「聞こえなかったのなら何度でもおっしやいましょう・・・姉上は胸の辺りの肉付があまりよくないと申したのです」

「（ビキビキビキツ！！！！）・・・そうかな～私は横乳見せてる破廉恥巫女よりはまだマシだと思っけどな～それに私は貧相じゃなくて『スマート！！』なんだよね～無駄な脂肪がないだけなのよ」

「（ビキビキビキビキツ！！！！！！！！）・・・ほっ、いいわけですか姉。見苦しいですよ？それに私は必要最低限の脂肪しかつけていません。あとは勝手に残ったものです」

「・・・ならあれか？私はその残るはずのものと一緒に他の脂肪も捨てたってか？そう言いたいのか妹」

「あるいは姉には必要がなかったのでは？」

「「「「「」」」」」」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！！！！！！！！！

「（えっ？えっ？・・・私はどうしたら～・・・？）」

言いようもない、圧力やら覇気やらが二人に挟まれている沙夜は一人受けとめ、体中から冷や汗が流れ出る・・・そんなことを沙夜が思っている、

「……(ジャキッ!!)」

「……(キリキリッ!!)」

「あ、あの二人とも……?なんでそれぞれの武器を持っているんですか……?」

「……」

一応呼びかけるも、二人はそれぞれの武器……鈴蘭はM16を、睡蓮はどこから取り出したのか弓を構え……

「喰らえええええツ!!!!!!」

「ひゅんっ!!誰か……助けて……!!!!」

パラパララララッ!!!!!!ヒュンヒュンヒュンッ!!!!!!ドゴンッバゴンッ、バキドガゴガッ!!!!!!

弾丸、矢、拳撃、蹴撃飛び交う中。沙夜は命からがら部屋から逃げ出した……。

この後、壊れた部屋の修理費を見て一人おからを食べながら涙を流す男と、その横で特上寿司十人前をモソモソと無表情で食べる少女の姿があったとかどうとか……。

まあ何があるつと基本桐野邸は平和である。

「ぐす……またしばらくおから生活か……」

「……食べる？（モグモグ）」

「……お前も家計を圧迫している一人だっってわかってるか？」

「……？（モグモグ）」

「……ハア」

銀次の苦勞はまだまだ続く。

短編1（後書き）

どうでしたか？『お・り・が・み』を読んで以来、書きたかったの
で思わず書いてしまいました（笑）

今回はまだ何にしようか悩んでいます。また、ネタも募集しており
ます。

それではまた！！

最後にパルパレーパさんありがとうございました！！

第四十三話（前書き）

以前のオセロットがそれなりに人気があったことに驚いている銀閣です。

どうも皆さんお久しぶりです。試験勉強する最中、ちょびちょびと書いてました・・・驚いたよ。まさか高一の勉強を改めてしたら意外と難しかったなんて・・・特に数学が。

さて、まあ作者の戦いはまだ続くので後々愚痴も書いてしまいそうなので話を戻しましょう。今回は制裁編の序章です。まだ戦いは次回から起こる・・・はずです。

それではどうぞー！

第四十三話

（桐野邸）

銀次が新たな決意を決めた翌日・・・その覚悟を決めた銀次はと言うと・・・？

「うつぶ・・・やべ飲み過ぎた」

自室で二日酔いになっていた。

実はあの後また飲み直そうと思った矢先に、

『うわ〜ん！！！！ぎんじぐ〜ん！！私も、私も一緒にぎんじぐんと戦うよ！！！！！！』

という鳴き声（というより喚き声）を上げながら銀次にタックルをかます神秘変体刀が一本、秘刀十五番・楔が現れたのだ。その後ろにも、他の変体刀達が現れ口々に、

『まったく・・・銀次は根詰め過ぎなんだよ・・・俺達にも頼りやがれ』

『・・・私も、一緒に戦う』

『私も戦わせてもらいますわ銀次さん』

『私も頑張りますよ〜銀次さん!!』

『だったらあなたは門番しながら寝ないことね・・・私も一緒にお手伝いしますわ銀次様』

『本当、銀次君は水臭いよね〜・・・大丈夫だよ。私達だって腐っても四季崎様が作ってくださった変体刀なんだから!!』

『そうです。お前はもう少し人に頼るといことをしなさい・・・そ、そうすれば多少は私もお前の面倒を見ましよう』

『フオフオフオ、若いのう・・・銀次殿、ワシらも同じく共に戦いますぞ』

『・・・』

『頑張る、とっております。もちろん私も頑張らせてもらいますわ』

様々な変体刀が、銀次と共に戦うとってくれた。銀次にはそれが嬉しくてしょうがなかった。銀次は改めて、仲間をくれた四季崎に感謝を心の中でいいつつ、

『ああ・・・これからも・・・よろしく頼む・・・!!』

一瞬目尻が熱くもなったが、すぐに下を向いてそれをやり過ごす。そんな新たな覚悟を決めた銀次に満足したのか変体刀達は、

『よーし!!それじゃ飲むわよ!!』

『『『『『おおーーーーーッ!!!!!!!!!!!!!!』』』』』

また新たに宴会を行った。

そして、翌日。銀次も柄にもなく酒をガンガン飲みまくったせいで見事に二日酔いになってしまったのだ。しかも狼刀・罪と飲み比べしたのも原因だろう。変体刀にも酒の強い弱いがあるらしいが、狼刀はかなり酒が強く銀次も任務上酒を飲むことがあったため避けには強かったため、結局泥仕合に・・・あの後帯刀と魔刀につれられていく狼刀からドナドナが聞こえてきたのは気のせいだろう・・・多分。

「さてと・・・まあ狼刀のことはどうでもいいとして・・・やべ、マジで気持ち悪い」

うぷっ・・・と、口を押さえる銀次。なにやら喉の奥がすっぱい感じの液体がきたとかどうとか・・・、そんなとき、障子の向こうからパタパタという足音と共にスツと障子が開き、

「銀次殿、朝でござるよ・・・ってやっぱりでござるか」

部屋でうなされている銀次を見て苦笑いする幼馴染である少女・・・長瀬楓がそこに居た。楓は昨晚は多少酒を飲んでたがそこまで酔うほどのものでもなく、むしろ食べるほうに集中していた。その食べる中でも時たま銀次に飲み過ぎないようにと注意をしていたのだ

が・・・まったくの無意味であったのは言うまでもない。

「おう楓か・・・おはよう」

「おはようでござる銀次殿・・・というか、大丈夫でござるか？」

「ああ・・・ぶっちゃけキツイ。頭ガンガンする吐き気する・・・
というか、さつきから喉の奥からすっぱい液体が・・・」

「それは間違いなく胃液でござる・・・まったく、あれほど飲むな
といったのに・・・自業自得でござるよ？」

「ははは・・・確かにな」

楓のちょっと怒ったような、でも楽しそうな声を聞き銀次は苦笑い
を浮かべる。以前にも似たようなことがあったなあと思いつつ、
銀次はボリボリと後頭部を掻く。

「まったく・・・はい銀次殿。これを飲むでござる」

「ん・・・？なんだこりゃ？」

楓は手に持っていたお盆から一つの湯のみを銀次に手渡した。銀次
は湯のみの熱さからお茶だと思い、湯のみを花の近くまで持ってい
き、くんくんと鼻を鳴らした。

「コイツは・・・梅？」

若干感じる梅独特の酸味の匂い。楓は銀次の言葉にコクリと頷いた。

「梅茶でござるよ銀次殿。二日酔いには梅茶がいいと以前母上に聞いたのを思い出して、作ったでござる」

「そいつは・・・悪いな」

銀次はそういい梅茶をコクリと一口飲む。口の中に広がった酸味と熱さに若干顔を歪める。

「ちよつとすっぱいな・・・」

「それぐらいがちょうどいいでござるよ。それよりも早く起きないと獺に朝餉を食べられてしまうでござるよ?」

楓のその言葉を聞いて、銀次は慌てて立ち上がる。獺の場合、冗談抜きで銀次の食事を食べかねないのだ。なにせ、獺の中では『銀次のご飯＋空腹』自分が食べる』という考えが当たり前で、実際に何回か朝食を喰われたことがあるのだ。

「やべえ・・・!!それは冗談抜きでやべえ・・・!!おい、楓朝飯食いにいくぞ!!」

銀次は楓にそう告げる・・・。

「あ、拙者もう朝餉は済ませたでござるから問題ないでござる」

「まさかの裏切り!? チクシヨウ、おまえ後で覚えてろよ!!」

ダダダッ、と。明らかに八つ当たり感覚の言葉を吐きながら銀次は居間へと急いで走っていった。ぽつんと残された楓は、そんな銀次を見て、

「ふふ・・・あれでこそ銀次殿でござるよ・・・」

クスリ、と微笑を浮かべ銀次の去っていった方向を見ていた。

みんなのために強くなるうとして、けれどもみんなに振り回される・・・そしてそれを怒りながらもどこか楽しそうにしている・・・それが桐野銀次だ。

楓は銀次の飲み残しの湯飲みをお盆に載せて立ち上がり、居間へと向かおうと思った・・・銀次がちゃんと食事を取れたかを見に行く為に・・・、

「・・・でもすでに獺が食べ始めていたでござるから残ってるでござるうか？」

・・・意外と、楓に意地悪なところがあると発覚した瞬間であった。

〓〓居間〓〓

さて、急いで朝食へと向かった銀次・・・まあ、一応は食事にはありつけたのだが・・・

「・・・おからはねえだろう」

モソモソと、残っていたおからを食べていた・・・本来ならご飯や焼き魚にありつけるはずだったのだが・・・まあ、しょうがない。

銀次はぼそぼそとするおからを食べながら目の前でお茶を飲んで
いる獲を睨みつけるも、

「……？（ズズズー）」

ただお茶を飲んで『なんかよう？』といった目で銀次を見ていた。
まあ、ようがないといえは嘘になるが、せめて人の食事を食べない
で欲しいと思う銀次……まあ思ったところで食べられるのが落ち
なのであるが……。

「おや？銀次さんおはよう」

「おはようネ銀次さん」

銀次が虚しくおからをもそもそと食べていると、二つの聞きなれた
声が聞こえた。銀次はおからを飲み込んだ後そちらに視線を向ける
と、

「おう、真名に鈴。おはよう」

褐色の肌をした長身の女性、龍宮真名と色白の少女、超鈴音こと擬
似虚刀・鈴がそこにいた。二人は銀次と挨拶を交わすと、机の上に
置いてある湯のみを取りお茶を淹れる。二人はそのままお茶を飲み
ながらおからを食べる銀次を見て、

「銀次さん……なぜおからを食べてるネ？」

鈴が聞いてきた。まあ大体の予想は出来ていたのだが、念のため。
銀次はなんとなく薄い笑みを浮かべている二人を見てイラッとした
口調で答える。

「・・・横にいる幼女に飯食われてな。残っていたのがおからだけだったんだよ」

「・・・？」

銀次のジトツとした視線を感じてか獭はそちらに向くも・・・やはりその視線は『なにかよう？』と明らかに何もしていませんといった視線だ。銀次はハア、とため息を吐き、

「頼むからよ獭・・・俺の飯を食うなよな。ちゃんとお前の分もあるんだからよ」

「・・・・・・ん」

なにやら随分と長い間があったが・・・まあ気にしないで置こう。ああ、また食うなコイツ・・・。と思いながら銀次はおからを口の中に放り込む。

「おはようでござるよ真名、鈴。獭」

そんなこんなで銀次たちが駄弁つていると、先ほど銀次の部屋にきた楓がやってきた。その場にいる者たちに挨拶をするなか、銀次はジト目で楓を見る。

「ん？なんでござるか銀次殿？・・・はっ、まさか拙者に見惚れて・・・」

「落ちて着け馬鹿。なに早まったこと言ってたんだよ」

・・・あいも変わらず。銀次の反応は変わらないものである。鈍感もここまですればある意味褒めるべきだろうか？
楓はあいも変わらない銀次の反応にふう、とため息を吐く。

「やれやれ・・・相変わらずで喜んでいいのだから悲しんでいいのだから・・・」

「ああ？お前はなに言ってるんだ？」

やれやれと言った風に首を左右に振る楓。銀次はそんな楓を見て首を捻る。その間、真名と鈴は楓の言葉にうんうんと頷き、同意していた。

「・・・ん？楓、その手に持っているお盆はなんだ？」

ふと、真名は楓が持っている盆に目を向けた。そこには先ほど銀次が啜っていた湯のみが置かれていた。もちろん、真名はそんなことを知らないため楓に聞いてみたのだが、楓はニタリと笑った。

「ああ、これでござるか？これは先ほど銀次殿が『飲んでいた』お茶でござる」

「「！？」」

バツと、二人はもの凄い速さで湯のみを見た。銀次が飲んでいた・・・これだけで二人にとっては価値あるものへと変わる。しかも言い方からしてまだ中身が残っているかもしれない・・・と思ったら、

「ちなみに中身は捨てるのももったいないし、冷めたら不味くなる
と思ひ拙者が飲ませてもらうたでござるよ」

楓の楽しそうな声に二人は凍り付いた。

「ん？ああ、なんだ。あのお茶か・・・そいや最後まで飲んでなかったな。てか、冷めてるならさめてる出俺は構わなかったんだが・・・」

「いやいや、折角なのだから暖かいのがいいでござろう？それに銀次殿は暖かいなら暖かい、冷たいのなら冷たいのどちらかのほうが好きでござろう」

「まあ、そうだけど・・・」

そう、銀次は基本温かいか冷たいのどちらかで飲みたいと思ってるのだ。勿論温いのも好きなのだが・・・やはりお茶は温かいので飲みたいのだろう・・・すると、なぜかジャキンという銃のスライド音とバキバキという拳を鳴らす音が銀次の耳に入ってきた。

「・・・ん？おい真名に鈴？なぜに武器を構えてんだ？」

なにやらとてつもなく嫌な予感がしたが・・・、ほっとくのもあれなので銀次は改めてそちらを見ると、そこには

「・・・」

「・・・」

無表情な美女が二人・・・いや、明らかに全身から某世紀末救世主伝説の七つの傷の男と同じくらいの闘気と見間違うくらいの怒気をあふれ出させていた。真名は銀次が渡した擬似炎刀を、鈴は未来の

銀次が鍛えた拳を鳴らしながら楓へとその視線を向ける。楓は楓で得意顔でふふんと二人を見下ろしていた。

「かえでえ・・・覚悟はできているよな・・・？」

「念仏は唱えたネ？」

「はてさて何のことやら・・・銀次殿、二人とも遂に頭に蛆がわいたでござる〜」

「いや、楓？何が起きてるかよくわからないけど頼むからここで居間を壊すようなことをするな・・・」

ブツリツと激しい音と共に真名と鈴の額に漫画でできそうな怒りマークが現れた。そして・・・銀次の願い虚しく・・・

「喰らえ楓えええええッ！！！！！！」

「上等でござるー！！」

「やっぱこうなるのかよオオオオオッ！！！！！！」

ドガンバコンガガガッ、という音と共に銀次の叫び声が響き渡る。これこそが桐野邸の日常であり平和(?)である証拠である。

「全然平和じゃねえよ！！あまた壁の修理費が・・・」

・・・平和である(笑)

~~~~しばらくして~~~~

「……」

「「「ごめんなさい……」」」

数十分後。さすがにプツンときたのか銀次は三人の頭に拳骨を叩き込んだ(勿論優しく)。三人は痛くないけど腫れ上がった瘤を見せながら床に正座している。銀次はその正面に座り、呆れたような怒ったような顔をしている。

「ハア……まったく。毎回ながらお前らが喧嘩する原因がなんだからわからないがよ、いい加減に家を壊すのは止めようぜ？この修理費稼ぐ為に俺は毎回死に掛けるんだからな？」

「「「(いい加減自分が原因だろ気付いて欲しいノでござるノよノネ)「「「」

いまだ、その鈍感が冴え渡っている銀次に心の中でツッコミながら三人はジトツとした目で睨みつける。銀次はそんな視線に気付いたのか、

「……なんだよ？何か言いたいことでもあるのか？」

「「「いやいや別に何も……」」」

三人はまったく同じ言葉をほぼ棒読みで答えた。銀次は怪訝な顔を  
して見るも、ふうとため息を吐き、

「まあ、もう家を壊さないようにしてくれよ」

「できるだけ善処するでござるよ」

「いや、完璧に善処しろし」

楓の言葉に手早くツツコム銀次。心のどこかでもう言っても無駄だ  
ろうと思いつつ、言うが・・・やはり無駄だろう。

「ところで銀次殿。今日はこの後どうするでござるか？」

楓が質問をする。銀次の傷はすでに完治しており今から戦いを行っ  
ても十分動ける。これも医刀や狂のおかげだろう。

さて・・・まあそれはともかく楓に質問された銀次はそうだな、と  
答え考える。

「（本当はこのまま寝たいんだが・・・）」

そういつて、銀次はチラツと机の上に置いてある携帯を見る。この  
携帯は銀次が仕事用に使っている携帯で、どんな衝撃にも耐え（た  
だし限度はある）耐水性で（ただし限度がある）万力で締められて  
も壊れないと（ただし限度がある）評判の隠密御用達携帯である・  
・過去に何回変体刀に壊されたことか・・・とちよつと遠い目をし  
ながら銀次は思い出にふける。

「（ま、それはいいとして）・・・一応さつき瀬流彦から電話があ  
つてな・・・薬味を捕まえたらしい」

「ほう……」

「それは……」

「さすがネ……」

銀次の言葉に三人は瀬流彦に感嘆の声を上げた。瀬流彦は格闘の腕がかなり高く、銀次とも渡り合えるほどだ。しかもなぜか狩りもうまく（本人曰く『師匠のおかげ』らしい……）薬味を捕まえるのぐらい簡単だろう。

「ああ、だから今回はちよつと……いやかなりあの薬味にカチンときたからな……最悪手足と両目と両肺と肝臓と腎臓二つと大腸と小腸とかは奪つとかないとな」

「確実に死んでるでござるな」

「肺二つ抜かれたら不通に死ぬからネ。まあ、いいと思うけどネ」

「安心してくれ銀次さん。昔のよしみで高く買い取ってくれる業者を知っているよ」

「……なにやら最後のほうに危ない発言があつたような気がするが……まあ気のせいだろう。ようはあの薬味を殺したいと銀次は冗談抜きで思っていた。」

「（前々から殺そうとは思っていた……だが、それでも原作に深く影響するんじゃないかと不安でしょうがなかった……でも、今回は躊躇わない）」

銀次はチラッと三人を見る。そして、心の中で呟いた。

「（俺の大事なモンを殺そうとした罪・・・この世のものとは思えない苦痛を与えて殺してやる）」

最早原作なんて気にしない。むしろあの薬味がいなくなれば3-Aが助かるのだからむしろいいほうだ。うむ、と頷いた銀次は立ち上がった。

楓たちも立ち上がり、銀次と共に付いて行こうとする。銀次はそれを見て、

「・・・別にお前らは来なくてもいいんだぞ？」

「こっちは当事者でござるよ？銀次殿」

銀次はそれを言われ何もいえなくなった。確かにまかり無しにも楓たちは当事者でもあるのだ、ならば同伴する権利はある。銀次はしようがねえなあ・・・と思いつながら後頭部をボリボリと搔いて居間を出ようとした・・・そのとき、

「あれ？銀次君これからお出かけするの？・・・後ろの三人連れて」

「お、楔じゃねえか」

そついいながら、銀次には笑顔を、楓たちに睨む様な視線を送る少女・・・神秘変体刀 秘刀十五番・楔がそこにいた。その睨むような視線を受けた楓たち三人は逆ににらみ返すような視線を送るりなにやら四人の後ろにおぞましいほどの黒オーラがあふれ出していた。

「（な、なんだ！？急に寒気が・・・風邪引いちまったか？）」

もちろん、銀次はそのようなオーラの正体がよくわからないため全部寒気だと思っっているのだが・・・最近はその寒気を感じるときが多くなったとか。

そんな寒気を感じる銀次を知ってか知らず科か、楔はまた同じ質問をする。

「それで？銀次君これからお出かけするの？」

「お、おう、一応その部類に入る・・・のか？」

「入る・・・？どこに行くの？・・・まさか！！」

「先にいつとくけど決して怪しい店とかじゃないからな？この前お前が俺を引き込もうとした変な店じゃないからな？」

銀次はなにやらとんでもない発言をしようとした楔に先手を打っておいた。実は以前銀次は楔と出かけたとき楔が「ちよつと行きたいお店があるんだけど・・・いい？（上目遣い）」と言われ、銀次は怪訝な顔になりながらも了承・・・基本可愛い女の子のお願いは無下にできない銀次である。そして、連れて行かれた店と言うのが俗に言うホテル・・・しかも普通のホテルではない、恋人同士が密かに泊まるようなホテルだ。さすがに危機感を覚えた銀次はそこで逃亡。楔はその後をものすごい笑顔で追跡して楔に声を掛けようとしたナンパたちを吹き飛ばしながら銀次を追いつづけた。

かくして、楔の愛の追跡劇が行われたとか・・・ちなみに後々その話を聞いた変体刀たち特に口の悪い変体刀達からは「童貞」やら「チキン」やら「意気地なし」といった銀次の傷を抉るような言葉を雨あられといい続けたとか・・・そしてその愚痴を聞く為に瀬流彦

とアドルが犠牲になったのも言うまでもない。

「そっか、ならいいわ。でも銀次君・・・銀次君がいいって言うなら私はいつでもどこでも・・・いいよ?」

銀次の即座のツッコミに楔は安堵の息を吐き、次に艶かしい声と流し目をして銀次に迫り寄った。銀次はその攻撃に思わずたじろぎ、ゴクリと喉を鳴らしてしまった。いくら鈍感とはいえ、やはり銀次も男・・・そういうことに興味がなないといえは嘘になる・・・が、

「銀次殿!!拙者も銀次殿が望むならいついかなるときでも相手するでござるよ!!」

「なら私だつてそうだ!!巫女服はもちろん、銀次さんが望むならどのような服も着よう!!」

「私もネ!!しかも私なら強力な精力剤もついでてるネ!!」

「え?ちょ?なに?急にどうしたのお前ら・・・?」

後ろにいた三人娘が銀次の体に飛びつきながら銀次にへと話しだす。銀次はいきなりこのことに楔の誘惑から見事に脱出した。もちろん邪魔された楔はと言つと、

「ちょっと・・・もう少しで銀次君を私のものにできたのに・・・何すんのよ!!」

「残念ながらそうはいかないでござるよ楔殿」



「ああ、残念ながらそうはいかないのさ」

「ふっふっふっ、邪魔、卑怯大いに結構ネ。第一楔さんも前やったからお相子ネ」

ジリジリと、四人は間合いをつめ己の武器を手に楓はクナイを、真名は銃を、鈴は拳を握り、楔は己の名前と同じクサビを手に持ち、

「（あ、何だろうデジャブ）」

その光景を先ほど・・・というよりは毎日見ている銀次はこれから何が起きるのかも大体予想がつき・・・

「「「喰らえーーーーッ!!!!!!!!!!!!!!」」」

「やっぱりかーーーー!!!!!!!!!!!!!!」

とりあえず、叫んどいた。

「これは正直俺の台詞じゃないが、あえて言う・・・不幸だあー  
ーーーーッ!!!!!!!!!!!!!!」

銀次は青空に向かって某不幸少年の言葉を思いっきり叫んだ。

くくしばらくしてくく

「……………」

「「「「「めんなさい」「」」」」

数十分後。先ほどより約一名頭にたんこぶが出来た状態で正座。銀次はその前に仁王立ちで額に青筋を浮かべながら無言で立っていた。

「まあね？正直お前らが何で喧嘩するのはよくわからない」

お前の鈍感が原因だ！！と心の中で各々ツツコミを入れつつ大人しく銀次の説教を受ける四人。銀次はそんな四人の心のツツコミに気が付かずさらに続ける。

「まあ別に喧嘩しろとは言わないさ。むしろ友好を深める為に喧嘩するのなら別に俺は何も言わない……でもなあ、せめて地下の鍛練場でやってくれないかな！？最近ふと気が付いたんだけどなぜかみんな意図的に地上の屋敷で暴れてるような気がしてならなねえんだけど!?!」

「いや、それは何も拙者たちだけではござらんし……」

「他の皆さんも普通に暴れてるし……」

「というより、銀次さん今頃気付いたネ？」

「鈍感な銀次君……でもやっぱり最高よ……」

四者共に（うち一人がなんかおかしい）今まで銀次が気付いていないことに逆に驚く。銀次はあの野郎ども・・・とブツクサ言いながら小言を吐く。そしてため息を吐き、

「はあ・・・まあ過ぎたことはもういいや・・・チクシヨウ、また金借りなきや・・・今度はどの世界に放り込まれるんだろうな・・・」

銀次は遠い目をしながらこれから起こるであろう労働に涙を流す。

「まあ、しょうがねえ・・・そんなときはそんな時で頑張ろう・・・。それよりもいくとするか」

「そうでござるな」

「そうだね」

「そうネ」

銀次はとにかく目の前の問題を解決しようと思ひ玄関へと向かう。床に正座していた三人娘も立ち上がり、銀次の後へと続いた。すると勿論、

「あれ？そういえば銀次君たちはどこにお出かけするの？」

一人、状況が読めない楔が聞いてきた。銀次はまあ隠す必要もないだろうと思ひ、先ほど瀬流彦から薬味を捕まえたという連絡を受けたのでこれから処分しに行くところだ、と説明した。・・・すると

「へえ・・・そうなんだ・・・」

楔の顔から笑みが消える。いや、笑み自体はあるだが、楔がいつも周りにしている温かい笑みではなく、冷たい、まるで極寒のような寒さを感じる笑みだ。銀次だけでなく、後ろにいた三人も思わず身震いする。

「ねえ、銀次君・・・私も付いていても・・・いい？」

ニコリツと、銀次に微笑む。その笑みには先ほどとは違い多少の温かみがあるが・・・どうもまだ冷たさがある。銀次はちよつと考えたが・・・

「まあ・・・必要以上に暴れなければ付いてきてもいいぞ」

まず、間違いなく楔は暴走する。銀次は四季崎の予知能力を手に入れたかのようにわかった。銀次が寝ていた間、楔はネギを殺そうと暴走して、鍛練場の一角を破壊してしまったらしい・・・殺そうと思っただけでそうなるのだ、本人を目の前にしたらどうなることやら・・・想像しただけで背筋が凍る。

楔は銀次の言葉を聞き、ニパツと笑い

「ありがとう銀次君！！それじゃ早く行こうよ！！」

「ああ、そうだな。いくぞ楓、真名、鈴」

「あ、あい」

「・・・ああ、わかった」

「了解ネ」



「ふふふ 銀次君を傷つけたヤツはたとえ誰であろうと・・・この世に生まれてきたことを後悔するほどの苦痛を与えてやるわ」

そのときの表情は飛び切りの笑顔だった・・・。

～～学園長室前～～

「さて・・・お前らわかってると思うが・・・」

「うむ、大丈夫でござるよ・・・」

「わかってるぞ」

「大丈夫ネ」

「・・・」

学園長室前に来た五人・・・。銀次は入る前に四人の精神状態と自分の体が大乗かを確認する・・・先ほどの折檻で右肘から先の感覚がなく心配したが・・・大丈夫のようだ。今現在は四人とも多少興奮状態ではあるが、問題はないだろう・・・ただ楔が静かなのが銀次が気になってしょうがなかったが・・・多分大丈夫だろう。銀次は若干の不安があるものの扉に向き直り、

「・・・いくぞ」

意を決し、五人は中へと入った。

〃〃学園長室〃〃

銀次達が入り、まず一番最初に反応したのは当然と言つべきか、友人である瀬流彦とアドルだった。

「やあ、銀次大丈夫そうで何よりだよ」

「元気そうだな」

「ああ、おかげさまでな」

ふふつと三人は軽い微笑を浮かべあつ。瀬流彦とアドルは変わらない銀次に安堵した。

さて、と銀次は二人から視線を直し、

「・・・一応何か弁解があるなら聞こうか？・・・近衛近右衛門殿？」

鋭い、まるで猛禽類が得物を狩るときのような目で、目の前に座っているこの学園のトップ・・・近衛近右衛門へと視線を移した。学園長は銀次の視線を受け、

「・・・いかなる処分でも聞き入れよう・・・」

どこか、覚悟が決まったかのような目で頭を下げた。

正義に溺れ、周りから見放され、地に落ちた英雄の子・・・はたして無事に生き永らえるかな・・・？



## 第四十三話（後書き）

如何でしたか？日常パートは久しぶりなのでちょっと変なところがあつたかもしれませんが、楽しんでいただければ幸いです。

この前のオセロットが意外と好評だったためまた誰か出そうかと模索中・・・瀬流彦の師匠はもう決まっていたりします・・・他に誰出そうかな？

さて次回！！

銀次達が学園長室に向かうと、そこには学園長を初めとした魔法使いの面々・・・そして、

「な、なんで皆さんは悪者の桐野さんと仲良くしてるんですか・・・！？」

・・・今回断罪される少年・・・ネギ・スプリングフィールドがいた。

「誰が罪人だ？生徒を殺そうとした先生さんよ？」

しかし、本人は自覚していない・・・そんなとき

「ねえ銀次君・・・それじゃあさ。このガキにチャンスをあげようよ」

笑い、とても冷たい笑みを浮かべながら楔が提案した。

その提案内容とは・・・？

「私とあの薬味が戦う・・・っていつのはごうかな？」

果たして・・・ネギの運命は・・・？

次回ご期待!!

## 第四十四話（前書き）

やっとこさ試験が終わった銀閣です。

皆さんどうもお久しぶりです。まあ色々と言っ前に一言言わせて欲しい・・・試験が終ったーーーー！！！！！！

いやァ〜ようやく試験が終り、肩の荷が下りました。後は結果を待つのみです・・・まあ心配でもありませんが。

まあここでは辛気臭い話は無しで！！皆さんには長らくお待たせしてしまいました。忍の剣士第四十四話どうぞお楽しみ下さい！！

## 第四十四話

最初・・・学園長はネギにそれなりの期待を寄せていた。英雄ナギ・スプリングフィードの子・・・魔法使いなら誰もが期待を寄せる子供・・・学園長とて最初はそうであった。

しかし、実際はどうだ？学園長は目の前にいるネギが正義に凝り固まってることを改めて思い知った。父親であるナギを英雄視するあまりに凝り固まった正義・・・悪いことをすれば全て悪と考えてしまつまるで、狂信者のような思想・・・必要悪を前提に活動している銀次との衝突は免れないとも思っていた。だが、学園長はそこで楽観視をしてしまった。

『銀次の思想に触れば、あの考えも多少は変わるやもしれない・・・』

・・・が、勿論現実はそのなにより上手くはいかない。学園長は気付かなかったのだ。ネギがあそこまで正義にこだわり・・・何より『本来の目的』を忘れるとは思わなかったのだ。よく『頭がいい人間は必ずしも天才ではない』ということを言う人間がいるが・・・ネギなどは確かにいい例だろう。頭はいい、だがほかが全然ダメな人間・・・自分が正しいと信じてやまないもつとも困るタイプだ。確かに自分の考えを信じぬくのも生きていくうえでは大事な要素だ。だが、それはかなりの資料を読み、知識として頭の中に叩き込み、これ間違いなく信じて初めてその権利を得るのであり、少ないうえに乏しい知識。そして何より自分が正しいと思わない言葉には絶対に耳を傾けないもつとも性質が悪い。

そして今回のような事件が起きてしまった・・・もはや、学園長に残された道はただ一つ・・・

「いかなる処分でも・・・聞き入れよう」

目の前にいる実質的にこの麻帆良を支配して動かしている人間に許しを請うことしかできなかった。

ネギ・スプリングフィールドは困惑していた。森で瀬流彦にあったと思っただらいきなり腹を蹴り飛ばされ、散々殴られたと思えば真っ暗になったと思っただら、手足を縛られ、体中に緊縛魔法符を何十枚と張られ動けなくされていたのだ・・・そして何より驚くことは・・・

「（な、なんでみんな桐野さんを攻撃しないの・・・!?!?）」

目の前に光景に愕然とした。全員銀次に攻撃することなく、それどころか傷の心配しているのだ。さらに学園長に関しては銀次に頭を下げているではないか。ネギは最初こそ驚いていたが・・・

「（そ、そうか!!みんな騙されてるんだ!!桐野さんは何か変な魔法みたいのを使ってみんなを騙してるんだ!!）」

・・・なにやら、まったく違いすぎるほどの勘違いをしているネギ。果たしてどのように考えたならそんな考えになるのやら・・・狂に解剖を頼んでみたいものである。すると、視線を感じたのか・・・

「よう・・・クソガキ。この前はどうも世話になったな・・・」

銀次が不適な笑みを浮かべながらネギを睨んだ・・・

さあ、審議の時間だ。被害者は桐野銀次、

加害者はネギ・スプリングフィールド

裁判官？検察官？そんなものはこの場では存在しない。

そしてここでは法律も通用しない・・・通用するのは

桐野銀次・・・今この場では銀次自身が法律である。

「・・・それで？そっちは一体どんな面白い言い訳を出してくれるんだ？」

銀次はネギから視線を外し、学園長へと視線を戻す。

「……まずは謝罪をさせて欲しい。ネギ君が今回のような行動をすることはないと楽観視してしまったワシにも責任がある……申し訳ない」

「……ま、普通はそう思うだろうな」

誰だって……正常の精神をしている人間なら子供がいきなり殺しに掛かってくるとは思わないだろう。そんな子供がいるとしたら、紛争地域ぐらいだ。少なくとも日本では考えられない。ネギもネギで特殊な環境に育ったが、生き物を『殺す』というのをちゃんと理解できていない。ゆえに今回の事件が起きたともいえるだろう。

「まあ、別に謝罪はいいさ……ここに着てからもう耳にタコが出来るぐらい聞いたからな……問題はだ今回の賠償はどうするか……だ」

銀次は冷たい目で話す。がめついと思うが、これは当たり前である。今回銀次は死に掛けたのだ、その賠償はかなり大きい……それに下手すればこの麻帆良という都市が物理的に崩壊することも考えれば形で変えることができるんだ……かなり大きい。

「ちなみにこちらが納得できる内容でなければ……この麻帆良の電気、水道、ガス……ありとあらゆるライフライン全てを止める」

『『『なっ!?!?』』』

「さすが……」

「やることがでか過ぎるな・・・」

その場にいた瀬流彦とアドル以外の人間は驚いたような声を上げる。・ムリもない。ライフラインを止めるとは言うが、麻帆良の広大な場所のライフラインを止めるのは尋常ではない。一応は自家発電も出来るようにはしているが、労力が必要だし、麻帆良という土地への配給はここら辺の電力会社にも大打撃を与えかねない。

「ま、待つんじゃないや桐野殿。たとえそれをするとしてもどうするのじや？ 自慢ではないが、この麻帆良の使用電力費は均衡の電力会社にかなり貢献してあるし「おいおい、勘違いしていないか？ 俺は何も電力だけとは言っていないぞ？」・・・どうということじゃ？」

学園長は銀次の言葉に怪訝な顔になる。銀次はしたり顔になり、

「・・・確かに電力は重要なライフラインだ・・・だがな、他の物・・・例えば食料や衣類といった日用雑貨用品なんかもすべて止めることも含まれる・・・つまり」

「どんなに自家発電を頑張ったって、食料がなければあつという間に暴動が起きる・・・そういいたいんだろ？ 銀次」

アドルはお前らしいな、と呟きながら銀次に返す。銀次はああ、と答え頷く。

「確かこの麻帆良の土地の商品・・・食料を初めとするものから服や日用雑貨、電力や水も全てWWW社が受け持っていたっけか？」

銀次は左手の親指で唇を撫でながら言った。



WW社とはwill・wonderful world company《素晴らしき世界を願う》の略称で今現在もつとも勢力を伸ばしている企業会社で、食品、日用品、医療、軍事、娯楽等あらゆる方面を取り扱う大手企業だ。最近魔法世界にも進出しており、WW社が作る魔法具はメガロメセンブリアの魔法使いが作る魔法具より格安で、さらに品質は良好。むしろ値段と照らし合わせればお釣が来るくらいだ。

・・・ちなみにその社員はなぜか男性社員はスーツの下に全身タイツと幾何学模様の入った覆面を着用。女子は鈴蘭と同じメイド服が制服とされている・・・さらにいえば全員がかなりの美男美女で、そこらのモデルが裸足で逃げ出すほどである。しかも全員が全員戦闘が得意で、銀次曰く『こいつら傭兵じゃないのか?』・・・らしい。

まあ、簡単に要約すれば『つまらない内容なら麻帆良をぶっ壊す』である。瀬流彦とアドルは元々知っていたため呆れ顔になるだけだが、周りのものは驚く。あの大会社を経営している社長が変体刀であったことに。

「あ、あの大会社の社長ともつながりが・・・」

「僕、あそこの会社が出しているフカヒレまん大好物なんだよね」

「私はあそこの魔法具をよく買いますね・・・あそこのは本国のよ  
り安い上に質がいいから」

「ココネもあそこの会社のチョコ大好物ツスよね」



「「「「「（（（あ、アイツ終わった）（）（）「「「「」

いつもはにこやかな笑みを浮かべる顔を・・・凶暴に歪ませる瀬流彦を見ながら。

「皆さん！！桐野さんは人を殺した悪人ですよ！？」

ネギは簀巻きのいつでも料理できる状態で放置されているにも関わらず、火に油を注ぎ込む・・・ここまで来ると流石に呆れを通り越して感心してしまう。どういう環境にいたらここまで凝り固まった考えになるのか？と。

まあ勿論のこと、火に油を注ぎ込めば燃え上がるため・・・

「皆さんは銀次さんに騙されてるだけ「ドゴッ！」「げふっ！？」

ここにいる・・・銀次との親友である瀬流彦にとっては燃え上がらせるには十分な言葉である。

「・・・」

ドゴドゴドゴッ！！！！！

瀬流彦はただ単にネギをけり始める。辺りには肉が打たれる音が響き渡る。周りの人間はそれを止めないで冷め切った目で見ている。

「・・・ッ」

そんな中、刹那は視線を逸らす。いくらネギの行動が間違っているとはいえ、目の前で子供が蹴られ続けるのを見ているのはさすがに

酷なのだろう。そんな中、

「せ、刹那さん!!刹那さんは『正義の魔法使い』ですよね!?!な  
ら一緒に戦いましょうよ!!」

蹴られる中、ネギは目ざとく目を背けている刹那を見つけ声を大に  
して呼びかける。刹那は魔法使いではないがこの場にいる全員が魔  
法使いだと思っっているネギは、刹那も魔法使いなのだろうと思いを  
を掛けた。だが、

「ウツ・・・!!」

『正義』という言葉聞き刹那は吐き気が込みあがってきた。そう  
あの粛清戦以来、刹那にとつて『正義』という言葉は地雷トラウマ以外の何  
でもなかった。喉の奥から酸っぱい液体が登りかけたとき、

「・・・」

「あ、アドルさん・・・」

スツとアドルが刹那の前へと現れた。アドルは怒りに満ちた目でネ  
ギを睨みつけ、言い放った。

「お前なんか・・・正義の魔法使いでもなんでもないただの犯罪者  
だ」

「なっ・・・」

その後、すぐにアドルは後ろに庇った刹那を抱きしめた。

「あ、アドルさん！？な、なにを「大丈夫だ刹那・・・お前には俺が付いている・・・だから大丈夫だ」・・・はいっ」

アドルの言葉に幸せと感謝を感じながら刹那はアドルの胸に顔を押し付ける。

「・・・すまないが銀次。俺と刹那はこれで失礼するぜ」

「ああ、別にいいぜ」

アドルは刹那を胸に抱きながら部屋から出て行く。その際、アドルはサリ際に

「・・・アイツには地獄よりツライ罰与えろよ」

と小声で呟いた。銀次は銀次でクツと笑い了解と答え手を軽く振るい見送った。

「そ、そんなどうして！？皆さんは本当に桐野さんに騙されてる」  
ちよつと黙ろうか「ギッ！！」

ドゴツと、先ほどまで止まっていたネギへの蹴りを瀬流彦は再開した。部屋の中には先ほどと同様肉が響き渡る音が木霊する・・・そんな時、

「ちよ、止めなさいよ！！」

そんな中、瀬流彦が蹴るのを見咎める人間がいた・・・今回のネギの共犯、神楽坂明日菜だ。明日菜はネギをけり続ける瀬流彦に止めるように頼むも・・・

「・・・あア？生言ってるじゃねえぞクソガキッ・・・」

「ひっ・・・」

グリッ、と足元のネギを踏みつけながら瀬流彦は明日菜を睨みつける・・・足元で蛙がつぶれるような音が聞こえてきたが気にしない方向で行こう。

「くくく・・・なら聞こくか神楽坂。お前はなぜそのようなことを聞く」

すると、別の方向。学園長室に鎮座している来客用ソファに座りこちらを嫌らしい笑みを浮かべながら見るようじょ・・・もといロリ吸血鬼エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルがそこにいた。

「（なにやら失礼なことを言われたような・・・気のせいかな？）」

「な、なんでって・・・」

なにやら不愉快な言葉を聞いたような気がするエヴァはそのようなことを思いながらも、明日菜の言葉を聞く。

明日菜は若干惑ったように言いよどむ。まさか聞かれ返されるとは思っていなかったのだ。だが、すぐに言葉を見つけ、

「なんでって・・・そんなの子供を蹴るのを止めるって「ほう、なら貴様は子供が大人を殺すのはいいというのか？」そ、それは・・・」

エヴァの言葉に明日菜が言いよどむ。確かに瀬流彦がしていること

は決してよいことではない・・・だが、人を殺すのと比べれば殺すほうが罪が重い。そんな明日菜にエヴァは続ける。

「なあ神楽坂。お前は人を殴るなというがお前、確か長瀬楓のことを殴ろうとしたらしいじゃないか」

「あ、あれは殴ろうとしたんじゃないかとてデコピンをしようとうー！これは驚いた。まさか魔法力で威力が上がった攻撃力で頭部を攻撃するとはな！これはなかなか殺人者の才能があるのではないか？」・・・え？」

エヴァの言葉に、明日菜が疑問を覚える。

「ちょ・・・まって・・・どういうこと・・・？」

「なんだ？知らなかったのか？魔法使いの従者になったものはな神楽坂。魔法使いの魔力を身体に流すことでその身体能力を格段に上げることができるんだぞ。ましてやお前の元々の身体能力・・・まああえていえば馬鹿力は非常に強いからな、おそらくだがデコピンでも車一台は軽く吹き飛ばすはずだぞ？そんなのを神楽坂人間の頭に打ち込んでみる・・・熟れたトマトを地面に叩きつけるが如く勢いで当りに飛び散るぞ」

「そ、そんな・・・」

エヴァの言葉に、明日菜は身体を震わす。まさか、あの攻撃が人を殺せるほどの威力があったとは・・・ともしあそこで楓が避けずにデコピンを喰らったら・・・と思い、胃の中から込み上げてくるものを感じた・・・もちろん楓が額に気を集中させればそんなものともしないだろうが、あえて言わないでいる。

「それにお前は普段から人をなぐっているではないか。なのに止めるとはとんと可笑しい話した」

「そ、それは・・・」

そうだ、明日菜は普段からよく女子とは思えない殴り合いを繰り広げている。それこそ男子顔負けの殴りあいだ。

「知ってるか？神楽坂。素手の殴り合いと言うのは案外死なないものと思われがちだがな、当たり所によつては相手を殺しかねないわば『殺し合い』の原点だ。貴様はそれを普段からクラスの何も知らない者達と行っているのだよ・・・『殺し合い』をな」

この世で一番最初に生まれた殺し合いは何かといえはまず拳での殴りあいだろう。その後文明が発達し、木の棒を握り、銅剣を造り、鉄を生み出しそれを手に殺し合いを続けてきた。弾道ミサイルがある現代でも拳で蹴りで相手を殺す技術を軍隊は見につけている。

「そ、そんな・・・私は・・・」

「ん？なんだ？ほら言ってみる神楽坂。私にお前の言い訳を聞かせてみる・・・そして、その全てを否定してやる」

エヴァは嫌らしい笑みを浮かべ明日菜を見る。どうやらエヴァは完全に明日菜を精神的に潰そうとしているようだ。



「・・・なぐんか。僕ほっぽりだされた感があるな」

明日葉睨みつけたはいいものそのままエヴァに持ってかれた瀬流彦はその怒りをどうしようかと思いつつ頭をかく。そんな瀬流彦を銀次は苦笑いを浮かべ見る。

「まあ、神楽坂は神楽坂で何かしらの罰を与えようとは思ってたからな・・・あのままエヴァにやらせるとして・・・」

一変、銀次はネギを睨みつける。

「・・・こいつは何が何でも罰を受けてもらわないとなア・・・」

「ヒッ!」

さすがに、恐れたのかネギは軽く悲鳴を上げる。

「どうする？なんだったら僕がこのまま手足の二三本へし折ってもいいけど?」

「んな生ぬるいことするわけねえだろ。少なくとも冥土に行ってもらわなけりゃいけないからな」

「なら首の骨へし折ろうか?」

「いやそんなすぐに・・・っておい瀬流彦。なんでお前がやる前提

になつてんだ？」

悲鳴を上げるネギを無視して、二人はどちらが処断をするかで話す。銀次としては楓に危害は勿論、自分もここまで殺そうとしたのもう原作壊そうが関係ないということネギを殺そうと思つて、瀨流彦は瀨流彦で大事な親友の命をとられそうになつたのでその怒りをぶつきたいと思つてゐる。

「ならば間をとつて拙者が・・・」

「なら私が・・・」

「いやいや私が・・・」

次から次へと、己が己がと名乗りを上げる。銀次としてはここまで自分のことを思つてくれる仲間がいてくれるのに非常に感謝の念が込みあがつてくる。

・・・そんななか

「そつだ!! いいことを考えちゃつた!!」

パンと、小刻みい音をさせながら手を打ち楽しそうに言う少女・・・銀次のことを愛してやまない神秘変体刀が一本・秘刀十五番・楔だ。

「あゝ・・・いつたい何が楽しいことなんだ？楔」

銀次は何かどう楽しいのか気になり、楔に聞いてみた。すると楔はクスクスと笑い、答えた。

「ねえねえ銀次君。せっかくだからそのガキにもチャンスあげようよー!」

「チャンス・・・?」

楔の言葉に銀次は怪訝な顔になる。チャンスとは一体何なのか・・・?と、すると楔はニヤリと笑い。

「私とあのガキが戦ってえ・・・あのガキが勝ったら生き残れるっていうのはどうかな　もちろん負ければ・・・ジ・エンド」

クスクスと、まるで小悪魔が笑うような笑みを浮かべて楔は笑った。

このとき、楔の力を知る者たちは楔が何をしようかと言つのを知り、恐怖を覚える。

変体刀最強の一角を担う神秘変体刀・・・その中でも純粹たる戦闘力で一位に君臨する楔の力が・・・いま明かされる。



## 第四十四話（後書き）

如何でしたか？ちょっと久しぶりに小説を書いたので所々変なところもあると思いますが、これからはリハビリを兼ねゆるりゆるりと書いていきたいと思えます！！

さて次回！！

むかしむかしあるところに一人の少女がいました。その少女はとても可愛く、町を歩けば必ず声を掛けられるほどの美しさです。ですが、少女は過去に心に深い傷を負わされ、極端に人とのかわりを持たないようになっていました。

そんなある日、少女は一人の男に出会いました。その男はぶっきらぼうだけど、温かい心を持ち、仲間のことを大切に思う男でした。少女の仲間はすぐに男と打ち解けました。少女も徐々に徐々にその男と話したいと思えました。ですが過去の傷が蘇りそれを許しません。

ある日、その男はその少女が何かに思いつめてると思い何度も聞きました。少女は最終的に心の関を壊すように本音を語りました。

男は少女の告白を聞き、答えました・・・

「私を救ってくれた銀次君を・・・私を仲間だと言ってくれた銀次君を傷つけるヤツは・・・絶対に許さない。肉片すら残さずに壊してあげる・・・ふふふふ」

さあ、宴の始まりだ・・・!!

乙ご期待!!

## 第四十五話（前書き）

最近銀次のハーレムが羨ましい銀閣です。

皆さんお久しぶりです銀閣です。大変すみませんが今回は短めです。理由としてはまあ簡単に言うたらスランプ気味でして・・・まあ前書きで辛気臭くなるのもあれですから続きは後書きで。

それでは、どうぞー！！

## 第四十五話

くく 麻帆良学園・世界樹前くく

『準備はよいかの二人とも』

「ええ大丈夫よ」

「は、はい、大丈夫です！！」

深夜。草木ですら眠っているのではないかと思うほど静かな夜・・・  
そんな夜中の麻帆良にある世界樹広場に二人の少女と少年がいた。

方や銀次のことを愛してやまない神秘変体刀秘刀十五番・楔。

方や天才魔法使い少年といわれるネギ・スプリングフィールド。

なぜこうなったか？それはほんの一時間ほど前に戻る。

くく 一時間前・学園長室くく

「・・・お前は正気か？」

今から一時間ほど前。楔の『ネギと勝負する』発言聞き、銀次は怪訝な顔をしながら聞き返した。



「あつたりまえじゃない銀次君 私はこと銀次君に関してはどんなことでも真面目だよ?」

さいですか・・・、と呟きながら銀次は考える。確かに楔はこと銀次が絡むと怖いぐらい真面目になる。その中には勿論恋愛的なものもあるのだが・・・、

「(・・・ま、楔がそれほど俺のことを仲間と想ってくれてんだろうな)」

・・・ま、いわずもがな。鈍感スキルは今でも健在に発動中である。そんなことを一人勝手に納得している中後ろでは楓、真名、鈴、楔が視線で火花を散らしている・・・その場にいるほとんどの者はその光景をすでに何度も見ているため「ああ、またか・・・」と呆れてみるだけだった。

「・・・それで?結局どうするの銀次?楔さんがやるんだったら僕としては別に構わないよ?・・・学園長の懐に色々響くだけで」

「え、なにそれ?なにやらすっごく不安な言葉が聞こえたんじゃが・・・」

瀬流彦の言葉に学園長がなにやら凄く不安な顔になる。何せ『変体刀』が戦うと聞いたのだ、過去に変体刀の戦いの被害でかなりの出費がしたので不安でしょうがないのだ。

瀬流彦の言葉に銀次もウーム、唸る。

「(やっぱり・・・おれ自身が手を下したいけど)」

チラリと、改めて楔を見る。楔はものすごいいい笑みを浮かべニコ

ニコと微笑んでいる・・・が、その目は冷たい色を浮かべている。銀次はゾクリと背筋に冷たいものが走る感覚に陥ってしまうと同時に、なぜだか引かれる物も感じていると・・・

「・・・フンッ!!」

ドゴンッ!!

「ぐふっ!!」

鈍い音と共に、銀次の腹に強い衝撃が走る。何事かと思い銀次が衝撃がきたほうへと視線を向けると、

「てめ・・・楓!!いきなり何しやがる・・・!!」

打たれた腹を押さえつつ、銀次は手を掌打の形にして打ち込んだ後の残心を取っている楓を睨みつける。

「・・・別に銀次殿が楔殿に対して鼻の下伸ばしていたから少し喝を入れただけでござるよ?」

「喝入れるのに・・・掌打で、しかも捻りいれながら打ち込むな・・・!!」

プルプルと震えながら訴える銀次。掌打を腹部に打ち込む際、捻りを入れることにより内臓に衝撃が浸透しやすくなる。内臓は鍛えようがないため衝撃が隅々までに響き渡るため内臓の各所にダメージを与えることができるのだ。しかもこの捻りこみは掌打意外にも拳打でも使えるためその際の破壊力は計り知れないものになる。だが、打った楓はどこ吹く風か。シラーとした顔でソップを向き口

笛を吹き始めるだけだった。さらにその後ろから

「自業自得だよ……」

「反省するネ銀次さん」

なぜか、真名と鈴からも責められる銀次。俺が何をしたんだ……とブツブツ文句も言う。すると楔がすぐに駆け寄り、

「大丈夫銀次君？……もう駄目だよ楓。銀次君を苛めちゃダメじゃない」

「ぐむっ!？」

ギョツと、銀次のことを抱きしめる楔。銀次は顔をその張りのある胸に顔を沈めることとなる。直その際その場にいた瀬流彦以外の男性職員は一同に……

「……」(羨ましい……)(「……」

と一同に思ったとかどうか……。ちなみに瀬流彦はすでに他の思い人……。ではなく思い刀があるので特にそうは思わなかった。楓、真名、鈴はギリリと睨みつけるも楔はそれを勝ち誇った笑みを浮かべるだけであった。

「モガガ……!!!(い、息が……!!!)」

まあ、もちろん銀次としてもこのたわわな実に顔を沈めたいとは思ったこともなくもないが……。さすがに強く抱かれずれば息ができないわけで、今にも死にそうになっている。

「え〜と・・・楔さん。なんだか銀次の顔がすっごい真っ青になってるんだけど・・・あとせっかくのシリアスの雰囲気が一気にコメディアンになってるよ?」

「え?・・・ああ!本当だ!大丈夫銀次君!？」

楔は胸元に沈めていた銀次をチラッと覗くと、ものすごく顔を真っ青にした銀次がそこにいた。銀次は一瞬力が緩んだ瞬間を狙ってパツと抜け出す。

「ハアハア・・・すまん瀬流彦。ある意味助かった」

「うんまあね・・・だって親友の死亡理由が『胸の圧迫による窒息死』なんて・・・葬式場が笑いの場になること間違い無しだからね・・・」

瀬流彦の言葉はもつともなことだろう・・・誰だって、親友が乳の圧迫による窒息死なら笑いの一つも浮かべたくなる。しかも先ほどまで重苦しかった部屋の空気がなぜだかよく桐野邸でみる空気に変わりつつあった。

銀次はふう、とため息を吐く。

「はあ、・・・ま、空気が変わっちゃまったが話を戻すが・・・いいだな?楔」

「うん、大丈夫だよ銀次君・・・簡単には殺さないから」

ニコリと未恐ろしいことを平然と言いのける楔。本来、楔ならネギが相手ならもの数秒でカタが付くのだが・・・髑り殺しにするら

しい。

「え、ちょ、ま、待って下さい！！そんな僕女性と戦うなんて……！！」

「拙者殺そうとしいてよく言うでござるな」

あう、とネギが呻く。ネギは奇襲とはいえ楓を殺そうとしたのだ。確かにいえた義理ではない。黙り込むネギに楔は近づき、ボソリと呟く。

「まあ戦わなくてもいいけどお……もし私に勝ったら君は『正義の味方』になれるんだよ？」

「え……？」

反応したネギに、楔はさらに続ける。

「ほらあ、私って銀次君の『大事な人』だからね。私は銀次君のためならなんだってするもん。壊せっていうなら壊すし、殺せっていうなら殺す……銀次君に会う前だつてたつくさんを殺している極悪人なんだ。そんな相手を倒したら君はまさに英雄だね。」

「え、英雄……父さんと一緒……」

楔は文字通り『悪魔のささやき』を繰り広げる。その言葉を聞いたネギは酔いしれるような顔つきになる。おそらく脳内で自分が父親のような英雄になつてる絵でも流れてるのだろう……ただ、いまだに瀬流彦に踏まれてるためパツと見は踏まれて恍惚の笑みを浮かべてる危ない人である。

「・・・わかりました。僕、戦います!!」

「そつ、それじゃ昭介君足どけてあげて・・・そのままじゃ苦しませて殺せないから(ボソツ)」

「ん、わかったよ楔さん・・・あとは任せたよ」

楔の言葉で瀬流彦はネギから足を退け、壁際まで下がり、そのまま壁に背中を預け寄り掛かった・・・その際床のカーペットで靴裏をしっかりと拭っていたのはご愛嬌である。  
ネギはスクツと立ち上がり、楔に向き合う。

「僕は・・・悪のあなたと戦います!!そして僕が正しいと証明して見せます!!」

~~~~~そして冒頭に戻る~~~~~

楔の言葉に見事に乗せられたネギは愛用している杖を携え、楔と対峙している。対する楔はニコニコとした笑顔を相変わらず浮かべながらクサビを弄んでいる。

「さつて、銀次君のためにも頑張らないとね 銀次くーん!!ちや

んと見てる？私の勇姿ちゃんと見ててね？」

無線に向けてそう言い放つ楔。無線の向こうから「はいはいちゃんと見てやるよ」という返事が返ってきた。とてもじゃないが、これから戦闘をする人間のやり取りではない。

「あ、あのそろそろ戦いを……」

「……あ、そうだったね。……それじゃ、始めようか」

ネギの言葉に、楔は銀次との会話を中断されたのに怒りを覚えつつネギと向き合う。

今回の戦いはこのように行われる。

一つ、戦闘区域は麻帆良学園全体。

一つ、ありとあらゆる武器・魔法の使用を許可

一つ、勝敗どちらかが戦闘不能になった場合に決められる。また、その際に『不慮な事故』が起きたとしても一切の文句はなしとする。

以上の三つが今回の戦いのいわばルールだ。人払いの結界も張り、麻帆良学園の中には誰もいない。つまりどんなに派手な技や魔法を放とうと問題はないということだ。

『それじゃ……両者構えて……はじめ!!』

学園長の言葉と共に・・・戦いの火蓋が切られる！！

「（一気に決める！！）ラス・テル・マ・スキルマギステル！！」

ネギは一気に決めようと思ったのかその場で呪文詠唱。ネギの魔力があふれ出しているのか、周りに淡い光が輝きだした・・・そのとき、

「・・・ばかねえ」

数メートル離れていたところにいた楔が、いきなりネギの目の前に現れた。

「・・・え？」

ネギは急に目の前に現れた楔に驚いてしまい、詠唱を止めてしまう・・・が、それがいけなかった。楔はクサビを持っていない左拳を硬く握りこみ、

「吹き飛んじやえ」

スカツとした笑顔で、楔はネギに拳を叩き込んだ。

「げふっ！！」

ドゴンッ！！

「・・・あいつ手抜いてるな」

「抜いてるで」
「ぎるな」

「抜いてるな」

「抜いてるネ」

楔の一方的な攻撃を学園長室でモニターを通して見ていた銀次一行。そんな楔の戦い方に銀次はポツリと呟いた。

「手を抜いてる・・・？あれでかの？」

その言葉を聞いた学園長が信じられないような顔になる。それもそうだろう。少なくともネギの魔道障壁はかなりのものだ。戦車砲をぶち込んでも一発二発では貫通しないだろう。いくら強くても普通に考えれば吹き飛ばすどころか、動かすこともできないはずなのだ。・・・それは『普通の常識』だ。

「言つたろ？楔は変体刀だ。神秘変体刀・・・さらにいえば自立型変体刀の中でも上位に食い込む力の持ち主だ。あいつが本気をだしや厚さ五十cmの複合装甲版どころかオリハルコンの壁だって貫通することができるぜ？たかが英雄の魔力引き継いでいるガキの障壁なんざ屁でもねえだろうよ」

「相変わらずバグじやのウ・・・でもならなげ手を抜いておるのじや？」

銀次の言葉に呆れるように学園長が聞いてくる。銀次はさあな・・・と答えて肩をすくめる。

「大方、俺のことを傷つけたってことで髑り殺そうと考えてるんじゃないか？」

以前の騒動の際、楔は地下にある鍛練場をほぼ半壊させたという。銀次としては懐が寂しいのもあるが、やはり自分のことを考えてくれる楔に感謝している。

銀次はまあ、と呟き、

「ま……まずあのガキが楔を倒すことは一京分の一もないだろうけどな……なにせ」

モニターに映る楔を見て銀次は続ける。

「なにせ、あいつは滅多なことじゃ死なない最強の変体刀の一人だからな」

その言葉には絶対の安心……いや確証があった。それに自分のことをあんなに信じる楔を信じられないでどうするのか、という気持ちも相まってその確証は絶対的なものとまで昇華している。

はたして、どうなる……？

第四十五話（後書き）

どうでした？・・・ええすみません。ちょっと冗談抜きでスランプに陥っております。まさか一ヶ月執筆しないでこうなるとは・・・恐るべきスランプ。

というわけで銀閣のスランプはまだ続きそうなので投稿が遅くなると思われませんが、できるだけ早期復活を目指しますのでそれまでお付き合いのほどをどうぞよろしくお願いいたします。

次回予告

戦いを始めた楔とネギ

「あの人はとても悪い人ですよ！？なんであの人に加担するんですか！？」

楔に対して正義を唱えるネギ・・・だが、それは死期を早まらせる合言葉でもあった。

「・・・あなたに・・・あなたに銀次君の何がわかるの！？」

少女が・・・暴走する。

「銀次君を悪く言っちゃつは・・・みんな死んじゃえばいいんだ・・・」

第四十六話（前書き）

最近、史上最強の弟子ケンイチを読んでいる銀閣です。

どうも皆さんお久しぶりです。いやはや・・・今回は色々大変でした。何せ今回はネギの処分編・・・ただバトルよりもはるかに難しかった・・・。

まあそんなこんなで・・・今回の忍の剣士はむしろ一方的な楔の攻撃です！！それでも『かかってこいやッ！！』と言う方は

どござー！！

後書きにちょっと付け加えをしました。

第四十六話

〓〓世界樹前〓〓

「（い、いたいよ・・・）」

楔に蹴られたネギは咳き込みながらそんなことを思っていた。反撃する暇すら与えない一方的な攻撃・・・魔法使いの痛いところだ。遠距離戦では圧倒的な火力を持つ魔法使いでも、近距離戦となれば圧倒的に弱くなる。

「見イつけた」

「ひっ！！」

ザツといきなり目の前に現れた楔に、ネギは酷く情けない声を出す。だが楔はむしろ楽しそうにクスクスと笑いながら近づいていき、

「どうしたの？そんなんじゃ私は倒せないよ？君の正義ってその程度なのお？」

「そ、そんなわけ・・・！！」

ないと言おうとしても歯が噛み合わないのかうまく喋れていない。楔は両手を広げて、

「だってそうでしょ？あなたは正義の味方なんでしょ？なら悪人の私を殺せないなんて、あなたの正義はその程度ってことでしょ？」

「う、うう……」

楔の言葉にネギが唸る。そう、悪の倒せない正義など所詮は戯言に過ぎない。だが、どんなに煽ろうとネギは動こうとしない。すると、

「……ですか」

「ん？なあに？もつとちゃんとはっきり言わないと聞こえないよ？」

ネギが何かを呟いた。だが聞き取れないほど小さい声だったため、楔は聞き返す……すると、ネギは楔を睨みつけるように見て

「なら、なぜあなたは悪いことを……あの悪人の桐野さんと一緒に悪事を働いているのですか!？」

ネギが叫ぶ。

「あなたは自分自身を悪人といいました!!でも、普通なら正義に憧れるものじゃないですか!!でもあなたは悪になっています!!なぜ、悪に染まってしまったのですか!？」

「……」

ネギの言葉に……楔は呆れたようにふうとため息を吐く。

「ねえ君さあ……『必要悪』って知ってる？」

「必要……悪？」

そ、と楔は答え手に持ったクサビをクルリと振るい続ける。

「この世には正義では解決しきれないこともあるのよ？悪をしないと解決しないこと・・・例えば自然を壊して人間が住みやすくする・・・うん、確かに人間からしたらいい暮らしができるけど自然からしたらとんでもないよね、だっていきなりチェーンソーで斬られるんだよ？たまったもんじゃないもん」

楔は話を続ける。

「他にも牛肉とか・・・命を殺しちゃいけませんって言うてるのに牛とか豚は殺してもいいんだよ？これって酷いよね？でも、人間は『自分達が必要なことだから』って納得しちゃう。これも必要悪」

「うう・・・そ、そうですけど」

「だよな？ほかにだってあるわよ・・・そうね、なら正義大好きな君に聞こうかしら」

楔はニタリと笑いネギへと話す。

「例えばこうしようかしら・・・一人の男が居たとするわ」

「は、はい・・・」

ネギはすっかり戦いのことを忘れて、楔の話を聞いていた。

「その男は人を一人殺したわ。そして人を殺すのが楽しいと思いはじめた。男はその後も人を殺しまくっていった・・・そんなある日、一人の警官がその男を見つけたわ。でも警官の力ではその男を逮捕

はできない。応援を呼ぼうとした時、その男が人をナイフで刺し殺そうとした・・・警官はとっさに拳銃を引き抜いて・・・」

楔は右手で拳銃の形を造り、

「バン、犯人は撃ち殺したわ・・・こうしてその警官は事件を解決したということで表彰され、テレビでもヒーローとして扱われた・・・めでたしめでたし」

「おわあ・・・」

ネギはキラキラとした目で楔の話聞いていた・・・まさか、この後にどん底まで落とされるとはしらずに・・・。

「す、凄いですね！僕もそんな警察官の人に「でもこれっておかしいよね？」・・・え？」

ネギが、感動の声を上げようとしたとき楔は遮るように話しだした。

「だってえ・・・この警官『正義の味方』なのに人を殺したんだよお？人を殺したのに表彰される・・・なら殺された男が表彰されるべきじゃないの？」

「え、だって撃たれた男の人は悪いことを・・・」

「人を殺したこと？それなら警官だって殺したじゃん。なのに犯罪じゃないの？」

人を殺して犯罪になるのに、人を殺して表彰される・・・まったく同じことでもここまで扱いが違う・・・人を殺すのは悪いことだ。

だが、悪事を働いた人間を殺すのはしょうがない。なしてやそれが極悪人なら尚更のことだろう。

「すっごい矛盾してるよねえ？でもね、そうしないと人間は何も出
来ないの・・・それに君が言う『立派な魔法使い』だって悪事を働
いているんだよ」

楔の言葉にネギが驚く。

「そ、そんなことありません！！立派な魔法使いがそんな「じゃあ
なんで人を殺してるの？」え・・・あ」

「正義なんですよ？立派なんですよ？怖いね魔法使って・・・人
殺して正義だなんだって言ってるなんて・・・野蛮にもほどがある
んじゃないの？」

「そ、そんなことは・・・」

ネギの様子を見て、楔はあともう少しかな〜と思い、さらに追い討
ちをかける。

「それともなに？正義の味方っていうのは人を殺すことが仕事なの
？相手がちよつとでも悪いことしたら容赦なく殺すの？捕まえるで
もなくすぐに殺すの？」

「うっ・・・」

ネギはもう何もいえなくなった。楔の意見は極論ではあるが間違っ
てはいない。正義を謳う魔法使いが、悪と言うだけで人を殺す・・・
これは本当に正義といえるだろうか？いや、いえない。もしこれが

許されるなら正義は殺しの口実に、立派な魔法使いという称号はただの殺人ライセンスになってしまう。

「……」

ネギはそれを黙って聞いていた。楔は精神的に落ちたかな？と思っただけだが、ネギはキツと顔を上げた。

「なら……桐野さんはやっているのは必要悪だと言って、悪事を働いているということですか？」

「……はあ？」

楔は、思わずそんな声を上げる。さらにネギが続ける。

「あなたの言葉が正しいのなら、桐野さんは必要悪だといって人を殺している極悪人に過ぎません!!」

「……」

楔のオーラが……変わった。

「あなただつて本当は桐野さんに騙されているだけ」もういいや……
「……え？」

突然言葉を遮られたネギは不思議そうに楔を見ると……楔は下に俯いていた。そして、ブツブツと話さず。

「最初は苦しませて殺そうとしたけど……止めた。あんたは……」

「
スツと、クサビを構え

「壊して直して壊して直して・・・絶望を与えながら殺してあげる」

「え？それって「ドゴツ！！」ぎっ！？」

ネギの腹に、先ほどと比べ物にならない痛みが走る。さきほど楔は足の力だけで蹴る、いわば『痛めつける』ための回し蹴りを放った。だが、いま楔が放ったのはそれとはまったく違う蹴り・・・いわば『殺す』ための蹴りを放ったのだ。

楔自身は身体を強化しているため足だけで蹴っても十分な破壊力がある。だが、腰の回転を加えて正確に蹴ることによりその威力は桁違いなものへと変わっている。さらに楔は背足・・・つまり足の甲ではなくつま先で蹴っているため、

「ギツ・・・ゲボツ！！」

ネギの口から大量の血が噴出す。楔はクフフ、と危ない笑い声を上げながらネギに告げる。

「いまあなたの胃は破裂したわ。あなたの身体の中は徐々に血で埋まっていくわ」

「う・・・い・・・た・・・い・・・！！」

だが楔の声は届いていないのか、ネギは腹を抱え口から血を流しながら悶えている。

「さあて・・・じゃあ次は」

ガシツと楔は右足でネギの右肩を踏みつけ、左手でネギの右手を掴む。

「今は内臓貰ったから・・・次は腕を貰うわね」

ミチミチミチ・・・ッ！！！！

「ぎゃあああああ！！痛い痛い痛い痛い！！！！！！やめ、止めてください！！」

右足に力を入れつつ左手で右手を引き抜こうと・・・いや、引き千切ろうとしている楔。楔はそのネギの叫びを聞き、顔を怒りに満ちさえ叫ぶ。

「腕を引き千切ろうとしてるだけなのに、何でびいびい泣いてるの？銀次君はあんたの所為で手足や内臓まで駄目になったんだからあああ！！！！！！」

ブチブチ・・・ブチイ！！！！！！

「ぎゃああああああああつ！！！！！！！！」

嫌な音と共に、ネギの腕が千切られた。斬られるのとは違い、無理やり引き千切られたためその激痛は予想を越える。ネギはそのあま

りの激痛に叫び声をあげ、地面を転げ回る。

「大変だね〜腕取れちゃったよ？随分と脆いな〜」

プラプラと、楔は手に持ったネギの腕を振り回す。千切れた肩口からまだ血が流れ出ており、地面を紅く染め上げている。

「うぐ・・・ひぐ・・・あが・・・!!」

「・・・煩いなあ。自分が他人にしたことなんだから、君だってこうなるのが覚悟で銀次君の手足と内臓フツ飛ばしたんでしょ・・・まあ、安心していいよ?」

グツと、楔はネギの胸を踏みつける。そして左手に小さいクサビを取り出し、

「すぐその手生やしてあげるから」

小さいクサビをネギの肩に突き刺した。ネギはうっとうしい呻き声をあげる・・・すると

ボコ・・・ボコボコボコツ!!!!!!

ネギの右肩から・・・手が『生えてきた』

〜〜学園長室〜〜

「なんじゃ・・・あれは・・・」

学園長室でその戦いを見ていたものたちはみな・・・驚いたようにモニターを見ていた。それはそうだろう。何せ腕を引き千切った肩口からまた腕が生え始めたのだから。唯一驚いていない銀次一行が説明する。

「楔は『暴走』に主眼を置いた変体刀でな。物理的や概念的の力を使い身体的能力を異常にまで上げることができるんだ。あそこまでの怪力を出せるのも、自分自身の身体・・・もつと細かく言えば細胞を暴走させることによって出せるんだ。だから楔自身も腕が吹き飛んだとしてもすぐに生えてくるそうだ」

「つまり、楔さんはあの小さいクサビを薬味の肩口に刺したおかげで、薬味の腕は・・・」

「ああ、細胞を暴走させてまた腕を作ってたよ」

「なんでまた・・・腕なんか生やしてんだい？それじゃああの薬味に都合が良くなるんじゃないか？」

瀬流彦はうゝむ、と唸りながらそう呟く。すると、銀次はニヤリと笑い、

「いや、そうでもないぜ瀬流彦・・・むしろありゃ拷問に近いぜ」

「？どついう意味だ？」

疑問の声を上げる瀬流彦・・・よく見ると他の人間も似たような顔をしていた。銀次は説明を続ける

「さつきも言ったが楔は暴走に主眼を置いた変体刀だ。ゆえに楔自身も身体の細胞を暴走・・・まあ簡単に言えば超活性化っていったところか？それをする事によって楔は腕が切落とされたとしても一秒もしないうちに生えてくる。頭を潰されたとしても一緒だ・・・つまり」

「たとえ岩を殴るとしても、全身の細胞を暴走させて強化・修復すれば岩どころか鉄鋼ですら砕く・・・か。ようは不死身だということか？桐野銀次」

やけに肌がツヤツヤさせながら話しに入ってきたのは、ロリ吸血鬼ことエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルであった・・・その後ろになにやら倒れてる物体があったが、まあそれはほつところ。エヴァの言葉に銀次はああ、と答える。

「まあ平たく言えばそうだな」

「でも、それと今回はどういう関係が『あああああああッ！！！！』な、なんだ？」

瀬流彦が喋ろうとしたとき、モニターの向こうからネギの叫び声が聞こえた。なぜかと思い、全員がそのモニターを食いつくように見て・・・そしてまた驚愕した。

ネギの腕が・・・『肥大化』しているのだ。

「・・・楔はもう慣れちまったらしいが・・・腕を急速に生やすつてのはかなり痛いらいぜ？まあ当たり前だろうがな」

本来腕に限らず生き物の身体とは緩やかに細胞の活性を進め、成長するものである。しかし、それを無視して生やせば・・・どうなることは大体予想が付く。

「楔の暴走の力はハンパなもんじゃねえ。ひとたび本気で暴走させれば心臓は勿論全身の血管が破裂する。さらに細胞はその急速活性化についてこれず滅ぶ・・・今薬味にしていることは腕の細胞のみを暴走させている。腕の細胞を急速に活性化させて、腕を生やそうとしているが・・・段々と腕はその活性速度について来れずに・・・

「
パアアアアアッ！！！！！！！！！！

「・・・ああなる」

ネギの腕が・・・弾け飛んだ。

「ふうん・・・なんだ。まだ動ける余裕あったんだア・・・じゃあ」

一歩踏み出す。しかし、片足は吹き飛んだため本来なら歩けるはずがないのだが、

ヒタリ、

「じゃあ次は・・・楽しい鬼ごっこだねえ　まだまだ殺さないよ」

冷たい笑みを浮かべ、新しく生えた裸足の足でネギの後を追う。だがネギはすでに車並みの速さを出しながら逃げている・・・だが、

「ふふふ・・・いくわよ？」

ドゴンッ！！

まあ、ここで普通の人間なら車を、魔力や気があれば飛んで・・・という考えが浮くのだから・・・残念ながら楔は変体刀だ。しかも他の足は使わず、自分の足だけで移動する・・・その速さは

「つつかまえた」

「え・・・」

音速を越え、いや光速をも越える。その速さは聖魔刀・鈴蘭が本気になったときに出すスピードである秒速165370224光年に身体強化無しで平然と追いつけるのだ。その際に生じた衝撃波により周りの道路や壁が吹き飛び、木がなぎ倒されている。ネギはいつのまにか現れた楔に呆けたように見えていた・・・それがいけなかった。

「ま、魔法の「遅いよ」「ギツ!!」」

ドゴンツと音と共に、ネギは地面に叩き付けられた。さらに楔はその上から両膝をネギに叩き込む。

「ゲフツ!!」

「ふふふふ!! まだまだくたばったらダメよ!? まだまだ苦しんでもらわなきゃいけないんだから!!」

ただでさえ、高度から両膝を叩き込み、間違いなく内臓が何箇所か破裂しただろう。ネギの口から大量の血が流れ出る。

楔は次はどうしようかと考えてると・・・ふと目に入るものがあった。

「・・・」

「げふげふ!! ぼ、僕の杖・・・」

ぐぐぐ・・・と転がっている杖に手を伸ばそうとしているネギ。楔はそれを見て、スタスタと杖のほうへと近寄り・・・

「ふん・・・こんなのが大切なんだ・・・変わってるわね」

ひよいと杖を持ち上げた。なんの変哲もないただの杖だ。ネギはそれを見て、

「や・・・めてください・・・それは、僕の大切な・・・杖・・・なんです」

「へっ・・・大切・・・ねえ」

這って近づいてくるネギを見ながら、楔はネギの言葉につまらなそうに答えた。ネギは這いながら言葉を続ける。

「ゲフ・・・それは、僕と父さんを繋げる・・・唯一の絆、なんです・・・だから・・・返して・・・下さい」

「・・・絆？」

「はい・・・あなた達の・・・桐野さんやあなたの関係なんかより、とつても大事な・・・ものなんです」

ブチリ、と楔の中で何かが切れた。

「（なに？このガキなんて言ったの？私と銀次君の関係がこのボ口杖以下って言うの？私を化け物と呼ばず大事な仲間だといってくれたあの銀次君と私の絆よりもこのボ口杖のほうが上だって言いたい・・・！?）」

言葉とは人によっては深く捉えられることがある。ましてや、今の楔にネギの今の発言は火にテルミットを流し込むようなものだ。

楔は無言で杖を両手で持ち、

・・・発動!!!」

逆限定奥義とは、タロットカードを元に作られた神秘変体刀にのみ許されたモウ一つの限定奥義。通常の限定奥義とは逆の技を使うことができる。

楔の限定奥義は『悪魔憑依』とよばれクサビを打ち込んだ相手の身体を暴走させること・・・その逆とはつまり『自分自身のリミッターを完全解除すること』なのだ。神秘変体刀最強の戦闘力を誇る変体刀と呼ばれる所以となった楔の逆限定奥義『自縛解放』は結界や檻などの物理的、概念的な束縛から解放することができた、66秒間継続で発動出来、発動中、時間、空間、死といった、己を取り巻く全ての束縛から解放される。時間と空間の束縛から解放されているため、どんな速さも、この逆限定奥義が発動している間は無意味と化す。また、死の概念が消失しているため、発動中は絶対に滅する事が出来ない。

この逆限定奥義が発動している時の彼女を倒せる者は1人もいない。

つまり、一度この奥義を発動すれば・・・楔に勝てるものはほぼ皆無である。

「本当は苦しませて殺すつもりだったけど・・・やめた、即急にこの世から肉片一つ残さず殺しやるわ・・・!!」

「ガッ!!!」

楔はネギを空高く蹴り上げる。その際ネギの背骨がボキボキと嫌な音を鳴らしたが、楔には関係ない。楔は光の速さで即座に跳躍してネギの上へと移動する。そして、拳を握りこみ

「フッ!」

「ゴフッ!」

ヒュゴツ!という音と共にネギが今度は地面へと叩きつけられる。ネギの体はまるでおもちゃのようにバラバラになったが・・・魔法力が高いためかなかなか死ねない。楔は空中に止まり・・・

「・・・これで、止めにしてあげる」

そういつて、楔は両手に長い・・・1mはあるクサビを三本つつ取り出し、

「でも残念だけどあなたはただでは殺さない・・・肉片なんか残らないぐらいたくさん打ち込んであげるわ」

そして、グググと右手を後ろに引き、

「ヒュッ!」

キーンッ!!!!

音速の壁を突破する音をさせながら、クサビはネギへと向かい、突き刺さる。

下目掛けて・・・投げた。その槍はもはや光の速さで地面へと到達し、

ドゴオオオオン・・・・・・・・ツ!!!!!!

地面が捲りあがり、地面は激しく揺れ辺りを吹き飛ばした。

「・・・・・・・・」

パラパラと楔が立っているところにまで瓦礫が舞い上がる。楔はジツと地面を睨みつけ、

「うん、ゴミはもう無し!」

うん疲れたあ、と伸びをしながら楔は地上へと降りていく。

「うふふふ・・・さして、これでゴミは居なくなっただし・・・銀次君にいつぱい褒めて貰おうと」

ルルンという効果音が付きそうなくらいスッキリした顔をした楔は、これから銀次に褒められるだろうと思いを馳せ地上へと降り立つ。

「さして、銀次君に褒めて貰わなきゃ!」

トトト、と振り返り血を浴びた美少女が楽しそうに歩いていく。

こうして、一人の少女の復讐劇が終わった。

第四十六話（後書き）

如何でしたか？楔無双全開でした（笑）まあ、これでネギが居なくなり平和な状態になりました・・・はたしてこれからどうなることやら・・・。

次回予告

ネギが居なくなり、平和になった麻帆良・・・しかし、銀次には一つの不安があった・・・それは

「はてさて・・・これからこの物語はどうなることやら・・・」

そう、本来は居なければいけない主人公・・・ネギが居なくなつた・・・それがはたしてこれからの物語にどれほどの関係をもたらすのか・・・？

「どんなことがあつたとしても・・・拙者たちは銀次殿の味方でござる」

次回をご期待!!

すみません書き忘れがありました。

今回話の中で楔が言っていた

「腕を引き千切ろうとしてるだけなのに、何でびいびい泣いてるの？銀次君はあんたの所為で手足や内臓まで駄目になったんだからあああ!!!」

という言葉がありました。これはシハ猫さんのセリフ案を利用させてもらいました。真にありがとうございます!!

四季崎一家漫遊記（前書き）

おでんは必ずハンペンを頼んでしまふ銀閣です。

どうもみなさん銀閣です。今回は短編・・・というよりネタを投稿します。このネタでは（この忍の剣士内の）四季崎一家に主点を置いたネタです。

それでもカモン！！と言う方は

どうぞー！！

四季崎一家漫遊記

ある晴れた日。四季崎が縁側でお茶を飲みながら……

「あゝ……暇だ」

そんなことを呟きながらお茶を啜っていた。

「あら？珍しいですね。あなたが暇を持て余すとは……」

その横にはニコニコと笑いながら座っている彼の女房である四季崎咲が座っていた。四季崎はああ、と咲に答える。

「どうもスランプ気味でよ……新しい変体刀のネタが思いつかないんだ」

「あらあら……本当に珍しい」

咲は驚いたように口元を袖で覆う。実際、四季崎は常に変体刀のアイデアがポンポンと浮かんでくるのだが、ココ最近はとんと出てこないのだ。

「うゝむ……どうしたもんかなあ……」

そんなことをポケ〜と考えてると……四季崎は閃いた。

「そうだ、いつそ異世界いったらいいんじゃないか？」

そうだ、ネタが思い浮かばないのなら探せばいいのだ、と思いつい

た四季崎はこうしちゃいらねえと自室へと向かった・・・が、

「待ちなさいあなた」

「へぶっ!？」

ガシリと、咲に足を掴まれた四季崎はその反動で地面と熱い口付けをすることとなった。

「~~~~なにすんだよさ」まさかあなた一人で行く気じゃないでしょうね?」・・・はい、そうでした」

ゴゴゴツとどことなく恐ろしい気を放つ咲に、四季崎は即座に土下座・・・いつの世も妻が強いというのが、伝説の刀鍛冶である四季崎も例外ではないらしい。

はたして、なぜ咲が四季崎を捕まえたのか?それは・・・

「ふう・・・あなたはいつもこっちの心配も知らずに一人で旅にでるわ。少しはこちらの身にもなってください」

「ええ・・・はいその通りでございます」

ぺこぺこ頭を下げる四季崎。確かに四季崎自身、咲に心配させてしまっているのは非常に申し訳ないと思っている。だが、これは四季崎なりの気遣いだ。四季崎がいく世界は時に危険なところが含まれる。それにもし咲が巻き込まれたら・・・と考えただけでぞつとしてしまう・・・が、

「まあ、わたしが言いたいのはですねあなた・・・私も一緒に旅に連れてって欲しいということです」

「・・・はい？」

案外、人の思いとは伝わらないものである。四季崎は思わず間拔けな声を上げるも、すぐに慌てたように手を振り

「い、いやだがな咲。俺が行くところは危ないところがあるか「危ないからなんですか。私だって自分の身ぐらい自分で守ります」・・・咲」

咲の言葉・・・そして何より咲の目を見て、四季崎は思わず飲まれそうになった。そして、咲はニコリと笑い。

「あなたお忘れですか？・・・私は―――伝説の刀鍛冶にして最強の剣士・四季崎記紀の女房です。そんなちよつとやそつとの危険なんてどうと言うことはありませんよ？」

あっさりと、そんなことを言いのけた咲に、四季崎はじくんと心を撃たれた・・・どうやら、今回も四季崎の負けのようだ。

「（本当・・・いい女房だよ。お前は）・・・よし！！なら異世界で変体刀のネタ集めしながら旅行でもすつか！！」

「ええ、なら桜花も連れて「私もう準備できてるよ！！」「あら？この子いつの間に」

桜花を呼ぼうとした咲が立ち上がるうとした矢先に、桜花が飛び出してきた。その手には背中に背負えるほどの大きさの風呂敷が背負われていた。

その姿を見て、四季崎は慌てる。

「お、おい待てよ。桜花も連れてくのか？あぶな」あら？ならあなた桜花を一人ここに残すの？この子に寂しい思いさせたい？」・・・うぐ、それは絶対に断る！！」

「なら決まり。桜花も一緒に行きましょう」

やった、と嬉しそうにする桜花。実際、桜花はあまり外出したことがない上に、異世界など言ったことないのだ。楽しみなのかもしれない。四季崎もその姿を見て思わず頬を緩めてしまう。

「くく・・・本当とんでもない女房と娘だ・・・さあ、咲俺達も準備していくとするか！！」

「ええ、そうしましょう」

「早く早く！！」

「はいはい」

愛娘の嬉しそうな姿を見て咲は嬉しそうに笑い・・・

「さすが俺と咲の娘・・・相変わらずいい笑顔をするぜ・・・！！
(カシャカシャシャ)」

・・・どこから取り出したかわからないカメラで激写していた。先ほどまでのカツコいい雰囲気は一ミクロンも感じさせない。

「あなた、ほら早く荷物の準備しなければいけないんですから早く行きますよ」

「いだだだだ！！ちょ、ま、咲！！耳！！耳取れる！！それ以上引
つ張ったら耳ぷつんって引き千切れるううううう！！！！」

だが、咲はやめることなく四季崎を連れて行った・・・さすがは曲
者の四季崎を旦那に据えている女房なだけはある。

ひよんなことから始まった四季崎一家のドタバタギャグ&バトルの
旅・・・開幕！！

時にはISという兵器がある世界に行き、

「ISはこの世で最強の兵器なんだぜ？そんなやわな刀一本で」ど
つせい！！」「・・・なにイイツ！？」

「なんだ、この世界の武器の最強はこんなもんか・・・期待はずれ
だぜ」

「ひいいいッ！……！誰か助けて~~~~ッ！……！」

「……その、刀……」

「やらねえよ？」

様々な世界に行き、その世界の悪を斬る！！

「実際は？」

「俺がいけ好かねえヤツに決まってるだろうが……！」

「……はたしてどうなる！？？」

四季崎一家漫遊記（後書き）

どうでしたか？これはふかやんさんの変体刀投稿内にあった「四季崎が異世界を旅しているとき」に作者が

「あ、四季崎が異世界旅行したら面白いんじゃない？」

という考えが頭をよぎったため書いてみました（笑）

それでは次回、本編でお会いしましょう！！

第四十七話（前書き）

よくよく見たらもう一周年過ぎてたと思う銀閣です。

どうもみなさん銀閣です。え〜、上にも書いたとおりですがなんとこの忍の剣士・・・一周年経ちました！！いやはや・・・早いモンです。

というわけで、ちょっとした特別企画を催したいと思います。詳しくは後書きで！！

それでは本編です。どうぞー！！

第四十七話

ネギと楔の激しい戦闘から一夜明けた次の日。

「……昨晚未明。麻帆良学園内の敷地内に巨大なクレーターが発見されました。一部の間では隕石が振ってきたのではないかといい声も上がっていますが、麻帆良大学の天文学部の計測では、昨晚は隕石は確認されなかったといっております。研究グループは今後も研究を進め……」

「やっぱここまでの騒ぎなるわな……」

ブツン、とテレビの電源を切りながら、銀次は苦笑しながら述べた。

「ん〜でもゴミも片付けられたし久しぶりに力も使ったからすっごいスッキリしちゃった」

「そう、そいつはよかったな……でもな楔。これだけは言わせてくれないか……」

ん〜、と伸びをしながら答える楔。銀次はその伸びをしてくる手が『顔面に当たらないように』よけつつ

「……せめて、俺の膝の上から降りてくれないかな？楔さん。朝から動きずらくてしょうがないんだけど？後背中に感じる視線も八ンパないんだけど？」

銀次の言葉通り……楔は今現在胡坐を掻いている銀次の膝にスッポリと座っているのだ。

なぜか？それは昨晚まで時間を遡らなければいけない。

〃〃昨晚〃〃

「銀次君〃〃！あの薬味ちゃんと殺したよ〃〃！褒めて褒めて〃〃」

「おう、えらいな楔・・・っておいこら楔。そのままくっついたら
返り血付くからちよっと血を拭こうな」

楔は全身に浴びた返り血を拭かずに銀次に抱きつこうとする。さすがに銀次も血まみれになりたくないため、懐に入れていた手拭を楔の顔についている血をふき取る。

「ん〃・・・ありがとう銀次君！！」

顔に付いた血を一通り拭き終わった楔はニコリと笑い銀次に礼を述べた。よしつと述べた銀次は懐に手拭をしまいながら改めてモニタ―を見る。そこには先ほど楔が暴れまくったクレーターができており、ネギの体は文字通り微塵も残ってはいない。

「・・・しっかし本当派手にやったな楔」

「うん、銀次君のために私頑張ったよ！！」

すっごく元気な声で答える楔だが、やっている内容が内容なだけに

正直どう反応していいのかわからないというのが、銀次の心境だろう。まあ、とにかく偉い偉いと頭を撫でてあげた。楔はそれだけでえへへくと嬉しそうに顔を蕩かすような笑みになる。楓たちはそれをいいなと羨ましそうに見ていた。

「それでね銀次君・・・私頑張ったんだから何かご褒美が欲しいな
く・・・って」

「ああ？ご褒美だあ？」

楔の言葉に銀次が返す。そして、うん・・・と考え、

「（まあ・・・頑張ってたしいいかもしれないな）・・・まあ、金がかからなければなんでもいいぞ？」

銀次の言葉に、楔はニヤリと笑い、

「じゃあね、銀次君のはじ」「言わせない」でござるよ／よ／ネ
？」「・・・チツ」

楔が何を言おうとしたのかわかったのか、楓、真名、鈴の三人がものすごい気を出しながら楔に言い放つ・・・銀次がこの三人の怒りのオーラを受けているのはまあいつものどおりのため問題はない。

楔は軽く舌打をしてうんと考え込み・・・

「それじゃあ銀次君。明日一日私とずくと居てくれる？」

くく現在にいたるくく

まあそんなこんなで楔は楓たちに文句を言わせず、かつ銀次が逃げないようにしたのが冒頭のくつつについていることなのだ。

「えく？なんで離れなきゃいけないの？」

「いやな楔・・・さつきから後ろから感じる視線めいけんがハンパないんだよ・・・しかもなぜか知らねえけどよく感じる視線なんだが・・・」

「くく・・・くく」

そう、先ほどから銀次が背中に感じている視線・・・それは楓、真名、鈴の三人の視線であった。この三人本来なら学校に行っているのだが、昨晚のクレーターにより三日ほど休校になったのだ。先ほどからこの三人はそれぞれの武器をカチャカチャと弄ったりしており、楔が何かアクション（なんのアクションかはそれぞれの想像に任せます）を起そうものなら殺気全開にして睨みつけるのだ・・・しかもなぜか銀次を。

楔はそんな銀次の言葉にえーと答える。

「気のせいじゃないの？・・・それに銀次君は私と一緒にいるのはいや・・・？」

上目遣い・・・オマケに至近距離のコンボにうつ、と思わず銀次は呻く。楔は性格がアレな部分があるが、美少女なのは代わりないためこんなに至近距離で見られたらそりゃ誰だって呻いてしまう・・・が、もちろん

「「「「」」」」」

「ぐおお……!?!?お、お前ら抓るな!!爪で抓るな!!」

ぎゅゅ……と、楓たちが銀次の背中の中の肉を抓る。おそらくだが、この三人の攻撃がなければ今頃銀次は落ちていたかもしれない……たぶん。
すると、楓がジト目で銀次へと話しだす。

「そんなに楔殿とくっついているのが嬉しいでござるか銀次殿？」

「まったくだね……大体若い男女がそんなに密着するもんじゃな
いと思うが？」

「そんなにムチムチの体が好みか？」

「い、いや落ち着けお前ら……なんだか目のハイライトがなくな
ってるぞ?まずは落ち着こつぜ?」

銀次が、そういつて宥めようとするも……

「なあに?三人とも嫉妬お?うふふ、みつともな〜い」

ぎゅゅと銀次に抱きつきながら楔が三人を挑発する。その笑みは完全に勝ち誇っており、わかりやすくいえば平民を見下す王様のよう
な絵だ。

だが、同時に銀次の身体にムニユ、という弾力のある二つの塊が当
る。

「・・・おい楔。なんかすっごい柔らかいのが二つ当たっているんだが・・・」

「ふふ、やだあ銀次君つたら・・・前にも言ったでしょ？当たってるんじゃないかって当ててるのよ？」

ブチリと確実に何か切れる音が銀次の耳に響いた。そして、恐る恐る楓たちのほうへと視線を向けると・・・

「・・・」

「・・・やべえ泣きたい」

ものすごい、それはそれはものすごい無表情を浮かべながら三人はスツと立ち上がり・・・銀次のほうへと近づいていった。

「・・・」

「な、なんだ三人とも？どうした」「エイツ！！」「どわ！？」
ドタドタ、と銀次は急に覆いかぶさった衝撃に何とか耐える。はたして何があったのか？・・・それは

「銀次殿！！拙者の身体とて楔殿には決して負けていないでござるよ！・・・」

楔よりも劣るも、かなり巨乳に入る楓の胸を銀次の腕を挟む。

「なら私も負けてる自身はないな・・・！！！」

こちらにも、巨乳の部類に入る真名が胸を楓とは反対の胸を挟む。

「私は大きさでは負けてるけど張りなら負けないヨ!!」

三人と違ってかなり小柄な部類に入る鈴も負けじとくっつく。

「ば、ちょ、お前ら・・・!!」

四人にもみくちやにされながら、銀次はどうにかこの状況をでれなものかと思っていた・・・が、

「ッ」

「?どうしたの銀次君?」

たまたま、顔の向きを変えたときに楔の顔がすぐ近くにあった。前なら、早く退けと行って払ったのだが・・・それができない。それどころか胸がなんだか脈動が早くなったような感じがした。

「(な、なんだ!?急に心臓がバクついて「なに楔にだけ見とれてるんだい銀次さん」」

クルリと、首をつかまれ移動させられる。すると今度は真名の顔がドアップで近くにあった・・・それでもまた、銀次は心臓がバク付く。

「私も見て欲しいネ銀次さん!!」

「うおっ!?!」

「「「喰らえー！！！！」」」

ドゴンツと派手な戦闘音が居間に響いた・・・はたして、今回はどのくらいの損害で済むのだろうか・・・？

「ふうう・・・やれやれあいつらにも困ったもんだ」

トボトボと歩きながら銀次が呟く。あいつらというのは勿論楓たち四人のことである。そこでふと、銀次はあのとときに感じた感覚を思い出す。

「・・・そういや、ありやなんだったんだろうな・・・」

少なくとも銀次には今まで感じたことのない感覚だった・・・いや、随分昔転生する前にあつたかもしれないが・・・そんな昔のことなどすでに忘れている。すでに銀次は転生前の記憶はかなり薄れているのだ、無理もない。

「（まあいい・・・それよりも現実問題は・・・これからだ）」

そう、銀次は心の中で呟いた。そう、現実的に見ても、今考えるべきはこれからである・・・その理由はもちろん

「（ネギは死んだ・・・つまり俺の知っている『ネギま』の知識がこれから通用するかどうか・・・）」

そう・・・原作主人公の死だ。もちろん銀次は気にしていない。むしろ原作本を見ていた頃から嫌いだったため清々した。だが、同時にこれからは気になってしょうがない。

「（原作なら・・・ネギがマクダウエルに勝って修学旅行で京都に行って、関西呪術協会の連中と戦う・・・話しになるんだが・・・ネギがないからそれもなし）」

まるで地雷原を歩きに行くようなもんだな、と思いながら銀次はポリポリと後頭部を掻く。それに心配はそれだけではない。

「（それにそれ以上に心配なのは・・・鈴だ）」

そう、鈴は未来から今のメガロメセンブリアの残党が銀次が地球軍側に渡した防衛用変体刀を奪ったのが始まりだ。しかし、この戦いの中で地球軍側に着いていたネギの子孫がメガロに鞍替えして地球軍側が劣勢になり、そこで銀次が登場。戦況は一気に地球軍側優勢に・・・つまるどころ鈴が生まれてきたにはネギが多少関わっているのだ・・・だが、今回のことでネギが死んだ。

「（だが、見たところ鈴に何かしらの症状があるようには見えない・・・ということ）」

何か別の問題が未来で発生した・・・ということだろう。少なくとも鈴が何か隠してるようには見えなかった。

「（だとしたらなんだ？・・・実はネギには双子の兄か弟がいてそ

れがネギ同様の種馬で子孫を産みまくったとかか？」

それなんてエロゲ？と思いつきながら歩き、まあそれはないだろうと考えた。実際、ネギに兄弟がいたという記録は残ってないし、実は以前銀次が個人的にネギのことを調査したがそのようなネタはなかった。

「（つまりはもっと別な・・・メガ口のほうで何かあったのかもしれないな）」

それとももっと別の何かがあったのか・・・さすがの銀次も、未来までは見えない。銀次ははあ、とため息を吐き、

「（ま・・・考えてもしょうがない・・・か）」

銀次はそう結論を出しプラプラと歩き出す。

〳〳夕刻・世界樹〳〳

世界樹の木の上から銀次は下を見ていた・・・以前楓に紹介してもらった場所だ。ここからちょうど離れた場所に、昨晚楔が暴れた後がある。

「・・・改めてこう見ると壮観な眺めだな」

多少の苦笑いを浮かべながら銀次は光景を呟く。まあ、あんな隕石染みたクレーターがあればそれも言いたくなる。

「（まあやりすぎ・・・とも思うが、楔が俺のためにここまでしてくれたんだ。ありがたいと思っておこう・・・修理費は学園長持ち出し）」

因みにこの修理費を見た学園長は白く燃え尽きてしまったらしい。まあすぐに復活したが・・・さすがはエイリアンである。

銀次は木の幹に身体を預け、夕日を見る・・・すると、

「あ、やっぱりここにいたでござるか銀次殿」

ひよこりと、下のほうから顔を出したのは銀次の幼馴染で、先ほど一番心臓が鼓動した少女・・・長瀬楓だ。銀次はおお、と答え楓のほうへと視線を向ける。

「ん？おう楓か・・・ってお前なんでボロボロなんだ？」

銀次が不思議そうにたずねる。楓はなんだか取っ組み合いをしたかのようなボロボロ具合だ。楓はタハハ、と笑いながら後頭部を搔く。

「いや、実は真名たちと取っ組み合いになって・・・」

「・・・念のため聞くが家は壊してないだろうな？」

タハハ、と笑う楓に銀次はハアとため息を吐く・・・つまり壊したということだ。

「まあ喧嘩すんなどは言わないけどな？せめて鍛練場でやってくれよ。あそこなら暴れてもいいからよ」

「あいあい・・・一応は努力するでござるよ」

「いや、完璧にしるよ」

そんなやり取りをやりながら、楓はぴょんと飛び上がり銀次の横へと座る。楓は銀次の顔をジッと見て

「・・・何か、悩み事でもあるでござるか？」

はあ、とため息そ吐き銀次はボリボリと後頭部を搔く。

「・・・なんでお前はそんなに俺の感情に敏感なんだ？」

「それはあれでござるよ長年の付き合いでござるよ」

そんなもんか？そんなもんでござる。と会話し、また無言。おそろくだが、楓は銀次が何に悩んでいるか聞くまでズツとこっつしているつもりだろう。銀次はハアとため息を吐き、

「・・・お前にゃ本当負けるよ」

「ふふん、それで？なにがあつたでござる」

自慢げに言う楓に苦笑いを浮かべた銀次。そして、少し考える。まさか、堂々と転生者だといってこれからのことがわからないというわけにもいかない・・・。

「・・・まあ、簡単に言うところからの心配・・・だな」

「これから・・・でござるか？」

銀次の言葉に、楓は聞き返す。銀次は言葉を考えながら話します。

「・・・あの薬味を殺して、正義の魔法使い共は黙ってはいないだろう。もちろん隠し通せる自信はある・・・が、やはり心配なもんは心配だからな」

英雄の子ネギ・スプリングフィールド。魔法世界のメガロメセンブリアはこれを将来的に利用するのは目に見えている。それがもし、殺されたとあれば・・・黙ってはいないだろう。おそらく世界中の魔法使いを集め、襲い掛かるに違いない。他にも原作とは違い、どのような敵が出てくるのかさっぱりわからない・・・それも心配のタネだ。

楓はそれを聞き、きよとんとした顔になるもすぐに、

「なんだ、そんなことでござったか」

クスクスと笑いながら答える。そんなことってお前・・・と言おうとしたが、

「銀次殿。銀次殿はあの薬味を死んだことに後悔しているでござるか？」

「何度も言ってるが、んなことねえよ。むしろ清々しているところだ」

「なら、それでいいではござらんか・・・それに、銀次殿なら魔法使いの千人や二千人どうともないでござるよ」

「・・・」

楓の言葉に銀次は面食らう。そして、面食らってる銀次をよそに、楓はそれにとって銀次にへと顔を近づけ、

「それに銀次殿・・・たえ世界中の誰かが、敵に回っても・・・拙者は絶対に銀次殿の味方でござるよ」

「楓・・・」

「それに拙者だけではござらん。真名に鈴に楔に・・・他の変体刀のみんなや瀬流彦殿にアドル殿・・・みんな銀次殿の大事な仲間でござる」

「・・・そうか」

なにやら、自分が心配していることが馬鹿らしくなってきた。銀次は心の中で呟く。

「（そうだよな・・・俺にはこいつらがいるんだ。何を心配してんだか・・・バカらしくなっちまうぜ本当）・・・楓」

「あいあい、なんでござろうか？」

ニコリと楓が微笑む。そして・・・

「本当に・・・立派になつたな」

「えへへ・・・当たり前でござる」

銀次の言葉に、楓が笑う。夕日に染められた楓の笑顔が・・・美し

い。銀次の心臓が跳ね上がる。

「（ああ、またかよ……いったいなんなんだろうこの感覚）」

「それより帰るでござるよ銀次殿……台所が無事ならちゃんと料理ができてるはずでござる」

「……ちよつと帰ったらアレな楓。お前含めて四人とも説教な」

そんなことを言い合いながら、二人は世界樹を降りて帰路へとついった。

はたして、銀次は胸に渦巻くこの思いが理解できるのだろうか？
・そして、

~~~~中東某国の傭兵キャンプ~~~~

『大佐、次の仕事が入りました』

『ん？おう、で今度はどこだ？シリアか？イランか？』

『いえ、今回の仕事先は……日本です』

『……ほう、日本……か』

『どうしますか大佐？』

『受けるに決まってるだろう!!全員に準備をしとけって言っとけ』  
『了解しました・・・それでは』

ボタン、と男が出て行った。大佐と呼ばれた男は口にタバコを啜えながら、

『・・・さあて、会えるといいな・・・アノガキに』

男は笑みを浮かべた。その左腕にはワッペンが貼られていた。血に塗れた剣を持ち微笑む天使・・・それは紛れもない、世界中探してもこの傭兵部隊しか持ち得ないマーク・・・血に塗られた傭兵団――

『なあ・・・』キリノギンジ『・・・』

最強にして最凶の傭兵集団・・・ブラッディ・エンジェルズ

いま・・・新たな物語が動き出す・・・

〃〃そして三日後・3-Aの教室〃〃

「え〃突然ですが、ネギ・スプリングフィールド先生はイギリスに帰りました」

「〃〃〃〃ええ〃〃〃!!!!!!」

クレーター騒ぎから三日後。3-Aの教壇には瀬流彦の姿があった。教室のいた生徒たちは最初こそ不審に思ったが、瀬流彦のその言葉を聞き驚愕する。

そんなとき、がたりと立ち上がる音が響いた。

「ちょ、瀬流彦先生!!それはいったいどういうことですか!?!」

この3-Aの学級委員長である、いいんちょこと雪広あやかだ。あやかは食い掛かるように瀬流彦に聞く。

「いや、だから言った通りだって。ネギ・スプリングフィールド先生はイギリスに帰りました」

「な、なぜですの!?!」

「なんでもノイローゼらしいよ?まあ、よくよく考えたら十歳の子供が教師なんてやればノイローゼにもなるよね・・・しかも労働基準法に違反するし」

「(お、おお!!真面目に突っ込んでくれる人がいた・・・!!)」

あやかの言葉に瀬流彦がサラサラと答え、その瀬流彦の言葉になぜか感動している生徒が一人いたとかどうか・・・だが、

「ああ！そんなネギ先生・・・！！そんなにお悩みになっていたなんて・・・この雪広あやか一生の不覚！！」

「そんなあゝネギ君帰っちゃったの〜？」

「そ、そんな・・・」

「だ、大丈夫本屋ちゃん？」

ところどころ反応が様々だ。あやかはキツと後ろを向き、

「ちょっと近衛さん！！あな名と言う人がいながらなぜこのようなことに・・・！！」

「うゝん・・・でも見た感じそんなになってるようにはみえんかったんやけどな〜」

あやかという言葉に、学園長の孫である近衛木乃香が人差し指を顎に当てながら考える。因みに彼女の同居人である神楽坂は車に引かれて病院に入院しているということになっている・・・まあ、実際は狂が神楽坂の記憶やらを弄っているのだが・・・細かいことは言うまい。

そんな会話をしていると、あやかがまるで思いついたように手を打ち、

「そうですねわ！！こうなったらネギ先生に直に会って応援の言葉を・

「……!!」

「は？ちよ、雪広さんなにを「それ賛成——!!」……」

あやかの特拍子もない言葉に、瀬流彦は問いただそつと声を掛けたが、周りがそれに便乗。学校そつちのけで行こうという空気が流れ始めたとき……

「……」

「（あ、あれ怒ってるでござるな）」

「（怒ってるな）」

「（怒ってるネ）」

ピクピクとコメカミに青筋を浮かべてるのを見て……桐野邸の三人娘たちは間違いなく怒っていると思った。取り合えず耳を押さえるところと思い、耳を押さえた。

「それでは皆さん!!私のある自家用ジェット機で早速イギリスに向かいますよ!!」

それを聞き、元々沸点の低い瀬流彦が……キレた。スウと息を吸い、

「喝ッ!!!!!!!!!!!!!!」

ビリビリビリッ……!!!!!!

瀬流彦の腹のそこからだした盛大な喝が教室に響く。窓ガラスに若干罅が入り、教室にいた楓たちを除いた生徒全員が耳を押さえ悶絶している・・・よく見ると茶々丸がショートしているように見える。

「耳が！！耳があ！！」

「なにいまの！？どこかの新兵器！？」

「失礼だね君達は・・・とにかく馬鹿なこと考えてないで、人の話しは最後まで聞いてくれない？」

バンバンと教卓を叩きながら瀬流彦が言う。周りはキーンと響く耳を押さえながら席につく・・・おそらくこのまま騒げばまたこの声を聴かされるハメになるだろうと思っただからだ。

瀬流彦はうん、と頷き話を続ける。

「ええ、まあネギ・スプリングフィールド先生がいんかうだったのは非常に残念つれしいですが、その代わりとして教師の方がこのクラスの担任になってくれます」

おお、とクラスがにわかに湧きだす。まさか、また新しい教師が来るとは思ってなかったのだろう。

「それじゃあ入ってきてもらいます・・・てる照さんどうぞ」

瀬流彦の言葉と共に、扉がガラリと開いた。そして入ってきたのは・

「「「「「・・・」」」」」



全員、言葉を失う。入ってきたのは女性……しかもかなりの美人だ。いや、むしろ美少女と言ってもいいかもしれない。そこらへんのアイドルが裸足で逃げ出してしまうぐらいだろう。パンツスーツをパシッと着て、鮮やかな茶髪をロングヘアにしたその女性はカツカツと教壇まで歩いていき、

「これから諸君に英語やその他の勉強を教えることとなる天野照あまのてるよ。よろしく頼むわ」

「因みに僕は副担任だからね」

その女性……天野照はそういうも、クラスは漠然と静かなままだ。ただ、その中で何人かは思考が動いており、

「（さすが天照殿でござる。すんごい似合ってるでござるな……）」

「（ああ……まったくだな）」

「（まあ、元がいいからネ……）」

「……（ジュール）」

楓、真名、鈴の三人がひそひそと話す。そう、この天野照……以前楔が暴走状態に陥ったときにとめに入った神秘変体刀の一人、大アルカナ19番「太陽」をモチーフにした秘刀十九番・天照である。……因みに最後の涎の音は某変体刀のおかげで百合に目覚めた大河内アキラである。

「あら、照さん」



「そうそう、あなた達。このテストのランニングとか言っちゃったかしら？この順位、もし下げようなあるなら・・・今までの勉強量は倍になるから覚悟するようにな」

「……………えっ？」「……………」

「なに驚いた顔になっているのかしら？それと下から数えて早い人にはさらに追加課題があるから頑張るようにな」

「……………え！？」「……………」

その言葉に・・・バカホワイトこと刹那が加わった新生バカレンジヤーが驚い多声を上げる。天照は教科書を手にニッコリと笑い・・・

「あなた達は特に勉強を教えてあげるわ・・・みっちりとな」

「……………(悪魔みたいな所業をするなあ)」

そんな天照を見ながら、瀬流彦は苦笑いを浮かべる。でも、同時にそれが照さんのいいところだしなあとも思っている。

「おい昭介。アシスタントをシツカリ頼むぞ。今日からミツチリと叩き込まないといけないんだからな」

「わかってますよ照さん」

呼ばれた瀬流彦も英語の教科書を開く。

こうして・・・ある意味最強の教師コンビが生まれた。後々教室から・・・特に放課後に呻くような悲鳴が溢れるようになったとかどうとか・・・真相は謎である。

## 第四十七話（後書き）

どうでした？・・・え？楔が図々しい？細かいことは気にしないし、銀次は基本優しいので問題ないです。

さて、それでは前書きでも書いたとおり特別企画についてですが・  
・名をつけるならこうしましょう

名付けて！！『第一回！！ 忍の剣士キャラがあなたの質問に答えます！！』

そこ、ネーミングセンスない言うな。まあ名前の通りこの小説にでてくる主人公銀次と、原作であるネギまのキャラ等々をあわせて皆さんの質問に答えさせようという企画です。

そして記念すべき第一回には主人公こと桐野銀次とネギまからは我らがヒロイン楓。そして特別ゲストに四季崎記紀を出したいと思っております。

（重要！！）質問がある方は感想欄ではなく、『メッセージボックスにメールでのご投稿をお願いします』  
×切期限は来週の火曜日11月2日です。質問がある方はふるってご応募ください！！

質問の例：「なんで銀次は金欠なんですか？」 「桐野邸はどうなっ

ているの?」

などです。他にも今回は楓や四季崎もくるのでどちらかに質問するのもあります。

例：「四季崎さんはどれくらい強いんですか?」など

ご応募お待ちしております。

次回予告!!

ネギがいなくなって清々しい気分になった銀次一行・・・そんななか、

「修学旅行?しかも京都だあ?」

原作と同じような展開・・・銀次はなにやら嫌な予感がしてならなかった。そして、銀次はそのやな予感を感じて・・・

「・・・よし、いつちよやるか!!!」

銀次のさらに厳しい修行が始まる!!!

そして!!

「・・・師匠お願いがあります」

ある意味本作の第二の主人公瀬流彦が恩師の下へと向かった・・・  
はたしてその目的とはなにか・・・？

次回ご期待！！

## 第四十八話（前書き）

最近ドリフターズを読みはじめた銀閣です。

いやはや、皆さんお久しぶりです。ココ最近、上にも書いたとおりドリフターズを読んだり、他の人の小説を読んでいて執筆が遅れてしまいました・・・でもあましようがないよね？読書の秋だもん（笑）また、過去の感想欄などを読むのも中々楽しいですね。色々面白いと思う変体刀を再発見できるので楽しいです。

さてさて、それではそろそろ本文に入りたいと思います・・・覚悟はいいですか？

それではどござー！



## 第四十八話

ネギがいなくなり、新教師を向かえた3-A。そして、時は過ぎ去りしばらくして話題に上がることといえば・・・修学旅行である。

〳〵学園長室〳〵

「修学旅行？しかも京都だあ？」

バリントと、自前の堅パン（自家製）を齧りながら答えるのは、本作主人公である金欠主人公桐野銀次である。銀次の前に机を挟んで座っているのは学園長ことエイリアン・・・もとい近衛近右衛門である。学園長はウムと答えながらお茶を啜る。

「あのクラスではもう京都に行く気満々だったらしくての。なんでもネギ君に日本を知ってもらったためとかどうとか」

「でも、あの薬味死んだろ？まああいつらには帰国したって言ったらしいが・・・」

そう、ネギの死を知っているのはごく一部のものだけで、他の者は知らない。それなのになぜに京都に・・・？と思っていたら、学園長が髭をしごきながら答える。

「いやのう・・・あの雪広の娘が何かネギ君に送る・・・とか言っているの。他の生徒も京都がいいと言うものが多くての、それに他の予定しているところは最早満席での無理なのじゃ」

麻帆良学園はマンモス校でもあるため、一学年だけでまとめて出かけるということができない。それゆえいくつか候補を挙げて生徒に決めさせるのだが、他の候補は埋まっており唯一残っていたのがこの京都だったのだ。

銀次はバリボリと堅パンを頬張る・・・因みにこの堅パン、おからに変わり銀次の主食になっている。材料は簡単に手に入り、造りやすいため銀次はこれを少しづつ食べるようにしているのだ・・・多少はリッチになったとなっていたとかどうとか・・・。

銀次はバキリと噛み砕き、

「（まあ、修学旅行自体には問題はないはずだ・・・問題があるとすれば）・・・関西呪術協会か？」

おそらく呼び出したのはそれだろう。もしネギのいないまま原作が進めば、間違いなくぶつかることとなる・・・ならそれで銀次が呼ばれたのかもしない。学園長はウム、と頷く。

「察しがよくて助かるぞい・・・知っているようじゃから細かい説明は省くが、ワシら関東魔法協会と関西呪術協会は昔から対立をしておつての・・・今現在は一応友好関係となつておるが・・・中には快く思っていないものもいての・・・あやつらのことじゃから間違いなくちよっかいを出すやもしれん・・・しかも『周りに関係なく』・・・の」

つまり、相手は一般人をも巻き込みかねない・・・ということだろう。銀次はつまり・・・といい、

「俺にあんたの孫・・・もつと言えば3-Aを守れつてことだな？だがよ、それだってあの桜咲で十分じゃないのか？いくら俺でも旅館まで一緒と言うわけではないだろう？それに天照や瀬流彦もいる・

「・・・桜咲はともかく、後の二人だったら絶対に襲いたくないな。それに楓や真名、鈴だっている」

銀次はもつともな意見を述べる。もともと刹那があのかラスに居るのは木乃香を守るため・・・しかもその波状としてクラス全体を守ることにもなる。それにたとえ桜咲が力不足でも楓、真名、鈴、そして天照と瀬流彦・・・一国の軍隊並、しかも天照だけですべての大陸の軍隊を凌駕する。もし本当に潰しにくるならそれこそ三千世界の軍隊を持ってこなければならない。学園長はウム、と答えお茶を啜り続ける。

「その通りじゃ・・・じゃがの、お主に頼んだにはもつと別のことじゃ・・・これを見て欲しい」

スツと銀次の前に差し出された封筒。銀次は最初なんだったのかわからなかったが、中身の書類を抜き出し目を通して眉を顰める。

「おいおい・・・こいつは一体なんなんだ？戦争でもおっぱじめる気か？」

「やはりお主もそう思うかの？」

銀次の言葉に学園長も答える。銀次が見ている資料・・・それは

「ケルベロス、エレファント・・・おまけに暁・・・世界中の傭兵団大結集してるじゃねえか。しかもそれだけじゃねえ世界中で指名手配されている殺し屋までいやがる・・・」

今現在この日本・・・いやもつと限定された場所に、世界中の傭兵部隊、そして一流の殺し屋が集結しているのだ。そしてその場所と

は・・・

「・・・こりゃ間違いなく、関西呪術協会の連中に雇われてるだろうな」

京都である。なぜ、京都なのか？そんなのは大体予想がつく。

「ウム・・・今回お主に頼むのは護衛・・・陰陽師は勿論、この傭兵集団も含めてどのような手を使っても構わぬから3-Aの生徒を守り抜くことじゃ。報酬はそれなりに出すぞい？」

学園長は銀次を見ながら言う・・・その目には以前のような『甘さ』がない。以前の学園長なら『穏便に済ますように』と言っただろう・・・だが、この前のネギの騒動と銀次たちの行動を見て、麻帆良のトップとして何を守るかを改めて実感した学園長は銀次に依頼したのだ。

銀次はその学園長の目を見て、フツと笑い

「ああ、いいぜ。その話し乗った。報酬についてはしっかりと後で請求するからな」

「うむ、いいぞい・・・それよりさっきから気になっとんじゃが・・・」

「あ？なんだよ」

「・・・お主、そればかり食べてて平気なのか？」

ピシリと、空気に罅が入る。さらに銀次の口に唾えられていた堅パンからバリンと噛み砕く音が聞こえてきた・・・そして、

「……うう腹に溜まる食事になっただけでもまともさ」

「……」

どこか……とてつもなくどこか遠くを見てフツと笑う銀次……その姿にはどこかしら哀愁が漂っていたとか……。

……しばらくして、学園長に「これで何か美味しいものでも食べなさい」と諭吉さんを渡される銀次がいたとかどうか……。

~~~~しばらくして・廊下~~~~

廊下を歩きながら、銀次は今度のことについて考えた。

「(さてさて……どうしたもんか)」

依頼を受けた以上、さらに言えば楓たちを守るために戦うことになる。銀次はどうするかと悩んで歩いていると、

「(……そうだなまずは瀬流彦とかに話を「おう銀次じゃないかどうしたんだ?」っておうアドルか)」

銀次がまず作戦会議として瀬流彦の場所に向かおうかと思っていたそのとき、後ろから声が掛けられた。聞き覚えのある声のため振り

返ってみると、そこには銀次の親友であるアドル・ベルディオンがそこに居た。

「しっかしお前がここに居るとは珍しいな……しかもこの道筋だと学園長室からか？なんかあつたのか？」

「いやなに、少し学園長に依頼しごとを頼まれてな……今度の修学旅行についてだ」

「……なるほど、そういうことか」

アドルは納得したように頷く。アドル初め、ほとんどの魔法教師が3-Aに行くことを知っている。そしてその行き先の京都に何があるかも知っているのだ。

銀次はしかも、と若干呆れた顔になりながら付け加える。

「しかも相手は関西呪術協会だけじゃないらしいぜ？」

「?どついつことだ」

銀次の言葉にアドルが疑問を浮かべる。普通に考えて敵は関西呪術協会だけだと思っただが……そんなアドルに銀次が告げる。

「なんでも今回は……傭兵集団が大量にくるらしい。おまけに殺し屋込みでな」

「……戦争でもおっぱじめるきか？」

アドルは眉を顰めながら呟く。魔法使いや陰陽師の戦いのならそれなりに暗黙のルールがある。だが傭兵、特に魔法を使わない傭兵は

そんなことは気にしない。街中で出会い頭にズドンツである。そんなことがあったら間違いない・・・生徒は勿論無関係の一般人も巻き込みかねない。アドルはそれを気に掛けていたのだ。

「ああ、俺もそう思ったぜ？だからこれから少し瀬流彦と作戦会議でもしようかと思っただけだ」

「なるほどな・・・俺も言っただけか？」

「ああ、別に構わないぜ？」

アドルの要求に銀次は頷く。アドルも今回の旅行で引率をするため、銀次としてはむしろ歓迎したいぐらいだ。

「それじゃあまずは瀬流彦を探るか・・・あいつはこの時間帯にいるとしたら」

「たぶん大学の空手部の道場だろうな」

そうして、二人は瀬流彦の元へと向かった。

〳〳麻帆良大学空手部道場〳〳

さて、そんなことを話しながら歩いていた銀次とアドル。道場の扉を開けるとそこには・・・

「はあっ！！」

「うげっ！！」

「せいっ！！」

「ぐおっ！？」

「らあッ！！」

「ひでぶっ！！」

「・・・相変わらず楽しそうだな」

「ああ、本当にな」

銀次とアドルは目の前の光景にそう呟く。今現在、銀次とアドルの目の前で繰り広げられているのは瀬流彦を中心に異種格闘技戦が繰り広げられているのだ。

以前にも話したが、瀬流彦は見た目の優男とは裏腹に空手や柔道をしている・・・が、中心は空手で有名空手団体に所属している。本人曰くその館長が恩師だとかどうとか。

そして今現在瀬流彦は襲い掛かる麻帆良大学の格闘技系団体の挑戦者と対戦しており、連戦連勝中なのである。

「空手に柔道、ボクシングにキック・・・さらに合気道やサバットにテコンドー・・・お、あれはカポエイラか？」

「ムエタイもいるな・・・あっちは中国拳法系か？おっ、あれはサンプボだな」

麻帆良大だけでかなりの量の格闘団体が所属している。それらを相

手取るのは正直至難の業なのだが・・・

「これで・・・ラストツ!!!」

「プギヤツ!!!」

瀬流彦は最後の一人を正拳突きを鳩尾に叩き込んだ。叩き込まれた相手は変な悲鳴を上げて地面へと倒れこんだ。瀬流彦は残心をと
り、

「ふう・・・やれやれ歯ごたえ無さすぎ。どうせならもっと強くな
ってきからこようよ?」

やれやれとため息をつきながら肩をまわす瀬流彦。しかしほとんど
疲労は感じられず、少し汗を掻いている程度だ。

「相変わらずだな瀬流彦」

「ん?ああ、銀次にアドル・・・どうしたんだいこんなところに?」

銀次が話しかけると、瀬流彦は爽やかな笑顔を浮かべながら振り返
る。銀次はそんな瀬流彦に「こいつも戦闘狂だなあ」と苦笑いを浮
かべながら思う。

「ん、いやなに今度の修学旅行についてな・・・いろいろとやべえ
ことがあるらしいからそれについて話し合おうかと思ってな」

「・・・なるほどね」

銀次の言葉に、瀬流彦が若干目を細める。そして、コキコキと肩を

鳴らし、

「じゃあこれから行くのか。どうせこんな状態じゃまともな稽古で
きないし」

確かに、と銀次とアドルが辺りを見回しながら呟く。そこには先
ほどと変わらない瀬流彦にやられた屍達・・・確かに普通に稽古で
きる状況ではない。

「それじゃあ、悪いけど少し待っててくれる？着替えてくるからさ」

「おお、手早くな」

ああ、と言いながら瀬流彦はプラプラと手を振りながら道場から更衣室へと向かった。もちろん、その間も呻き声が収まることはなかった。

屍累々の麻帆良大学は今日も平和である。

~~~~しばらくして~~~~

「さて・・・それじゃあ早速話し合いをしたいんだが・・・どこ行くか？」

瀬流彦がいつものスーツに着替え終えた後、三人はプラプラと町の中を歩いていた。とてもじゃないが、普通の居酒屋とかいって話ができるとは思えないし、普通に考えてファミレスで話す内容でもな

し……そこでアドルがふつと案を出した。

「なあ、ならよ材さんのところにいきやいいんじゃないか？あの人  
のところならまず話しも聞かれないだろうし……」

材、とは人の名前としては少し変だが、もちろん人ではない。悪式  
変体刀と呼ばれる変体刀だ。

悪式変体刀 四季崎が咲さんを失ったときに作られた変体刀で題材  
は狂気、狂喜、虚無感、悲愁の四つ

。四季崎曰く『自分が作った変体刀の中で唯一の汚点』とのこと。  
それゆえか作られた当初から問題行為を起していたが、銀次が呼び  
出した際の「お前らが何であろうと俺の仲間には変わりはない」と  
いう言葉を受け、銀次の変体刀として働くことになった。

そしてその内の一振りが料理屋を開いているのだ。

「ああ、なるほどそれはいい考えだね。そうしようか銀次」

「ん……まあ二人がいいんじゃないが……そんじゃいくか」

銀次は二人の言葉に頷く。それにここからなら十分近いため、ちょ  
うどいいだろう。

「それじゃ決定。早く行こ、僕稽古後だからお腹減ってんだ」

「はいはい、わかっていますよ」

「そんなに慌てるなつて」

瀬流彦の発言に二人は苦笑いを浮かべながら着いて行く。その姿は大人の男三人というより、風変わりの高校生三人組といったほうがいいかもしれない・・・いや、少し無理があるから大学生といったところだろう。

くく料理屋『材亭』くく

「いらつしゃいませ」

銀次たちはしばらく歩いた後、こじんまりとした昔気質な店構えをしている引き戸をガラリと開けた。すると、中から鈴すずのような声で迎えられた。そしてその正体が銀次だとわかると、

「あら銀次さんいらつしゃい。来てくれて嬉しいですよ」

ニコリと笑い、出迎えた。

料刀・材 『どんな材料でもまともな料理にすること』と『材料のその場で解体すること』に主眼を置いた人型変体刀で、狂気を題材にした変形型変体刀でもあり、刀剣状態のときは料理用の包丁へと変わる。変体刀以外であればどのような物も料理へと変えてしまう。人型時の容姿は髪は薔薇色の腰まであるロングヘアのオールバック（でこは小さめ）身長は168cmで胸は…絶壁より若干ある程

度。服装は返り血の関係などで赤が多い。今は紅い小袖を着ている。なかば天然だが、それは仲間に対してだけで敵に対するとDSになる性格を持ち合わせている。

そんな料刀も、今は店を持ち桐野邸の家計の足しにしてくれている。銀次はそれに多大に感謝しており、料刀もまた、感謝されることが嬉しいのか一生懸命働いてくれている。

「三人なんだが・・・奥の部屋って使えるか？」

「ええ、もちろん。むしろあそこは銀次さん専用につつたようなものですよ」

材はニコニコ笑いながら奥へと案内する。店は入り口を入るとカウンター席にテーブル席といたって普通の造りになっており、そのおくには座敷がある。街中を探したら十分にありえる居酒屋・・・だが、ここではさらに続きがあり、立ち入り禁止の扉がある。材はガチャリとその扉を開け、

「どうぞ銀次さん、瀬流彦さん、アドルさん」

おう、と答えて三人がその扉に入る。中には登り階段があり、その三人は材の案内の下その階段を登っていった。すると、そこには至って普通の奥座敷のようなものがあつた。

実はこれ、銀次が以前材に頼んで作ってもらつたのだ。学校から桐野邸まではそれなりに近いのだが、重要な話をする際家だと騒がし

くて（主に家の破砕音で）話し合いには向かなく、他のところだとそれらしい会話も難しい・・・それで店を出していた材に頼んで建築の得意変体刀達に作ってもらったのがこの奥座敷である。なお、この部屋が完成した後瀬流彦が阻害魔法を使えるということが判明して、ド突き合うことになったのは懐かしい思い出である。

さて、そんな三人は畳みに座る。畳から薫る匂いをかいで気を落ち着かせた。すると材はおちよこと銚子をそれぞれに渡し、伝票を取り出し、

「みなさん何か注文しますか？」

「そうだな・・・何にするか？」

材はその性質上変体刀以外なら基本何でも食材にできる。さすがに昔みたいに人を文字通り『料理』してだすことはなくなつたが、他の食材で遺憾なく発揮されている・・・まあ、以前仕掛けたとき銀次が『もし人間を料理として出したら口きかない』といつたら即座に直したとか。

さらに、この食材はすべて桐野邸の隔刀・界にて取れた物のみを使用しており、食材費は0。しかもどれもこれも抜群の美味さを持っているときたものだ。さらに店で出す際もかなり安く。焼き鳥一本五十円など当たり前で、他のところならウン万円するのも、それよりはるかに美味しい料理を二、三千円で食べられるのだ。それゆえこの居酒屋材亭は繁盛しているのだ。因みにこの店では現存していない生き物の料理は変体刀関連者のみが食べることができ、それ以外だと普通の料理が出される。

銀次たちは品書きを見て、

「そうだな・・・俺はガララワニの大根煮込みと焼き鳥お任せコース全部塩で頼む」

「なら俺はフライシャーケのから揚げを頼む」

「うん・・・僕は・・・ご飯大盛りにデビル大蛇の輪切り焼き。阿修羅鮫の刺身に竜田揚げ、あとホイコーローにチンジャオロース肉じゃが軍鶏鍋油そばに醤油ラーメンにカレーライス、んで渡り蟹に焼餃子。あとデザートでチョコレートパフェと虹の実ゼリーね」

「相変わらずよく食うなあおい!!」

「はい、わかりましたあ。しばらくお待ちを」

「しかも了承するのか!？」

瀬流彦のあまりにも大量の注文に銀次がツツコミを入れる。実は瀬流彦はかなりの大食漢で、普段もご飯大盛り十人前が基本であり、給料の3分の2は食費で消える。

アドルもアドルで、それを簡単に了承した材に驚く。だが、材はアハハと笑い

「いえいえ、これぐらい私に掛ければちよちよいのちよいのぱっぱっぱですよ?」

「ああ、そうだな。お前ならそういうと思ったよ・・・」

ふふふと材がさらに笑い、銀次は呆れたような顔になる。まあ確か

に材ならこれぐらいだった一人でも簡単に作れるだろう。材はそれではお持ちを」と言いながら下の調理場へと歩いていった。

銀次はふうと、ため息を吐きおちよこをとり酒を煽る・・・そして、本題に入ることにした。

「さて・・・早速だが、本題に入るぞ。今回3・Aは修学旅行で京都に向かうということだが・・・」

「ん？ああ、そうだね。個人的にはブラジル辺りに行ってブラジリアン柔術と戦いたかったんだけど・・・」

「んなもんお前のクラスで喜ぶのはお前と天照と古ぐらいだろうが・・・まあさっきアドルには言ったんだが、改めてこの資料を見て欲しい」

ガサリと、銀次はアドルと瀬流彦に先ほど学園長から渡された資料を渡す。二人はそれを受け取り中を取り出し、そして中を見て眉を顰める。

「・・・本当に戦争でも起す気か？」

「本当、ひどいねこりゃ・・・」

アドルは改めて、瀬流彦は呆れれを通り越したような気分だ。二人もそれなりに裏の世界に詳しい。ここに書かれている傭兵団も勿論知っている・・・が、それは『ヤバイ』部類の意味で知っている傭兵団ばかりだった。

銀次が進める。

「さすがに全部くるとは思わないが・・・それでも脅威には間違い



ないな。装備も個人火器が中心だと思うが・・・関西呪術協会のことだ、海外から密輸した重火器類を渡すだろうな」

「ああ・・・だろうな。だが、これは最早国家レベルの話しじゃないか？秘密裏にでも自衛隊とかが動くと思うが・・・」

銀次の言葉にアドルがそう答える。確かに、最早ここまで来たら街中の警察で済む話ではない。銀次もああ、と答える。

「少なくとも自衛隊の普通科・・・できれば第一空挺団か中央即応連隊・・・さらによく言えば特殊作戦群が着て欲しいところだが・・・」

第一空挺団、中央即応連隊、そして特殊作戦群・・・これらは陸自の部隊でそれぞれ精鋭無比の隊員が集められる集団で、特に第一空挺団は狂ってる団と呼ばれるぐらいの部隊で、中央即応連隊は小銃と拳銃のダブル装備（一般部隊では拳銃装備はない）をしており、外敵などが現れた場合は容赦なく叩き潰す最強連隊。特殊作戦群はその空挺団、連隊の中から選出され精鋭自衛官達である。戦力的に言えば十分戦える・・・が

「おそらくだが、関西呪術協会が根回しして動けなくしてあるだろうな」

銀次がそう呟く。いくら関西呪術協会が腐っているとはいえ、その根は深い。今現在の政府にも根をはり権力を握っているのだ。それゆえ自衛隊は動けない。おそらく動けるのは警察の特殊部隊だが・・・警察の特殊部隊はあくまで『対テロ』部隊であり『対軍』部隊ではない。たとえ出動してもすぐに蜂の巣にミンチだろう。

「警察も無理・・・ならやっぱり俺らがやるしかないってわけか・・・」

アドルはそれまでの説明を聞き頭をバリバリ掻きながら話す。銀次もああ、と頷く。

「だが、今回は結構マジでやばそうだからな・・・人型変体刀を何人が送り込むことにするつもりだ。それに京都にも変体刀を何人かいるからそいつらにも協力してもらおう」

「・・・本当どこにでもいるんだな変体刀」

アドルは改めて変体刀の凄さを実感する。まあ外国にも変体刀がいるので別にたいしたことではない。すると、瀬流彦が話したす。

「まあ色々あって大変だとは思っけどさ・・・結局のところ僕らがする仕事は決まってるだろう？学園長が『生徒を守れ』って言われるまでもなく、僕らがするのはただ一つ・・・」

ぐぐつと拳を握り締め、

「物理的に降りかかってくるその傭兵集団をぶちのめす。それが僕らの仕事だ」

「・・・ああ、そうだな」

「まっただ」

銀次とアドルは苦笑しながら同意する。確かに、瀬流彦の意見はシンプルで正しい。どんなに頭を捻ったところで、この傭兵団と当た

るのは間違いないのだ。なら最初から迎え撃つという気持ちを持てば覚悟も決まる。

「決まりだな。まあ当日はそれで行こう）・・・いや、それだけじゃ足りない・・・か）」

銀次は唇を右手の親指で撫でながらそう心の中で呟いた。いくら敵がただの傭兵団といえ、油断はできない。むしろ魔法使いや陰陽師などでないぶん達が悪い。なにせ先ほども言ったとおり攻撃をする際周りを気にしない方がいいのだ。たとえ銃を乱射したところで暴力団の抗争で片付けられることもあるのだ。そして、銀次が考えたことは唯一つ・・・

「（それまでにさらに力をつけなければ・・・楓たちを守るためにも）」

楓たちを守る・・・ただそれだけだ。そのためにはさらに力をつけなければならぬ。

「（修学旅行までにはまだ時間はある・・・なら、それまでに稽古をもっと積まなきゃな）」

ぐぐつと、拳を握り締めながら銀次は思う中・・・守りたいものこそ違うが銀次と似たような考えをした二人も同じようなことを考えていた。

「（俺も・・・こいつらと同じ位強くならなきゃな）」

アドルはぐぐつと手を握りこむ。魔法学校ではアドルも教師を務めAAAを有する強者である。だが、銀次や瀬流彦。そして変体刀た

ちと触れ合つうちに自分がまだまだ弱いとアドルは思った。だが、弱いなら強くなるために鍛えればいい。幸い銀次の持つ隔刀を使えば数秒でも数日間分の稽古ができる。

「（後で銀次に頼んで入れさせてもらうか）」

ついでに刹那も呼ぶか・・・と心の中で呟いた。そんな中、

「・・・」

瀬流彦はぼつと以前己の師匠に言われたことを思い出していた。

『瀬流彦よ・・・お前の本気とその“技”は危険だ。試合なんかで使うのは勿論だが、ケンカでも禁止だ。もし、使いたいのなら俺の許可を取ってからにしないとね』

随分前、まだ社会人になる前のことだ。瀬流彦は空手にドツブリと漬かり始めてしばらくした後、師匠に言われた言葉・・・それは本気を出すなということだ。瀬流彦の師匠も大概本気で戦うのだが、瀬流彦のそれは試合では使えないと判断しての言葉・・・そして、  
禁止手。

「（本当は使う気はなかったけど・・・今回はかりはそうも言ってもらえないか）」

今回の仕事はそれこそ生死・・・さらに言えば生徒の命も掛かっている。それなのに手が抜けるだろうか？・・・いや、決して抜けない。もし、抜いてしまったら自分自身が後悔してしまう。

「（今度の休みのときに・・・許可を貰いにいくか）」

ボリボリと後頭部を搔きながら、瀬流彦はそんなことを思った。おそらく今回ならあの坊主頭の世界最強の空手家なら許してくれるだろう……と。

「お待たせしました〜熱々なので気をつけて食べてくださいね〜」

「おっ？きたきた。まあ、この話しを一旦終わりにして……久しぶりの味のある食事を取ることでしょう」

「……銀次。言ってくれば飯ぐらい驕るよ？」

「……俺も驕るぞ？」

材が大量の食事を持ってきた所を、ふつとどこか哀愁漂う雰囲気を感じながら呟いた銀次に、瀬流彦とアドルは同情を佩びた目で見ていた。

……後日、よく着流しを着た男とスーツを着た男二人が食事を取っているのが目撃されたかどうか……。

くくしれからしばらくしてくく

「……ここら辺くんのも久しぶりだなあ」

銀次達が材の家で食事を取ってから二日後。銀次の親友である瀬流彦は電車で都会にまで出ていた。いつものスーツを着込み、背中にはリュックを背負っている。これだけ見ればただの若い会社員と思われるが……別に今回瀬流彦が今回ここに来たのは仕事ではない……彼の師匠に会うためだ。

「元気に……してるよな。あの人は殺しても死なないだろうしな」

脳裏に浮かぶひょうきんな笑顔を見せながら倒れた自分に手を差し伸べる坊主頭の師匠……瀬流彦の空手の師。

「……ま、とにかく言ってみようかな」

ポリポリと頭を掻きながら瀬流彦は目的地へと向かった。大通りを歩き目的地へと向かう。瀬流彦は、その街中の風景を見てシミジミとする。社会人になってからは滅多に來ることがなくなったことも……久しぶりに通ると感慨深いものがある。

「（そういえばアノ頃は末堂達と一緒によくバカやったっけ……そのたびに先輩にこっ酷く怒られたなあ……）」

瀬流彦は同門の友人と街中でチンピラ三十人相手に大立ち回りをしたことを思い出す。アノ頃は若かったなあ……と思いながら歩いていると……目的地に着いた。中型のビルに近いその道場を見上げ……

「……さて行きますか」

その道場へと入っていった……その壁一面に『虎に手刀打ちを食らわしている男』の絵が描かれたビルへと。

～～道場～～

瀬流彦が入ったビルの中にある道場……現代空手では珍しい板敷きの道場だ。その道場の神前近くに、一人の男が正座で座っていた。

「……」

その男の体つきは身体全体が分厚く、明らかに一般人ではないという雰囲気をかもし出していた。顔はそれなりにいかついが、笑えば愛嬌がありそう……か？だが、今は目つきが鋭く笑えば猛獣に見えるもなくもないだろう。拳もまるで岩のように硬そうだ。そんな男の背後に

「……」

一人の青年……瀬流彦が現れた。空手着を身に纏い、黒帯を腰に巻いている。そして、黒帯にはこう書かれていた。

『神心会空手二段 瀬流彦昭介』

どうやらこの道場は心神会という名らしい。瀬流彦はこの神心会空手の道場に通っているらしい……すると、

「・・・フッ!!」

瀬流彦が、その男目掛けて右廻し蹴りを放つ。ブォンツと鈍でも振ったかのような蹴りが、座っている。男の即頭部に当る・・・かと思ったとき、

「ほっ」

その座っている男が、右腕でその蹴りを上へと押し上げる。そして、同時に座っていた左足で瀬流彦の左足を蹴る。すると、瀬流彦の身体は宙に舞い

ドゴッ!!

「いつてえ・・・!!」

背中からモロに床に叩き付けられた。瀬流彦は呻いていると、

「ははは相変わらず気が荒いなあ 昭介」

高笑いしながら立ち上がったのは先ほどまで座っていた男だ。その男はニコニコとしながら笑い、瀬流彦へと手を差し伸べる。

「げほ、・・・あんただけには言われたくないですよー」

瀬流彦は、久しぶりに再会した師匠の手を握り返す。

その男は様々な異名を持っていた。



『虎殺し』

『人食いオロチ』

『武人』

そして、世界中で勢力を伸ばしている空手団体の総帥・・・その名は

「・・・愚地師匠」

その名は愚地。日本最強の空手家である愚地独歩その人だった。

## 第四十八話（後書き）

「……ん？なに？なんか最後に出てきたって？ははは、何のことやら……。」

すんません、調子乗りました。いや、実は以前から瀬流彦の師匠をどうしようか悩んでいて、そんな時本屋でバキ読んだら『あ、独歩先生が師匠でよくね？』という考えにいたりまして……反省はしている、だが後悔はしていない。

さて、次回予告

数年ぶりにあつた瀬流彦と愚地独歩。師弟関係の二人は積もる話をして……

「それじゃあ師匠……早速お願いがあります」

「……聞こうじゃねえか」

はたして、瀬流彦は本気をだす許可が得られるのだろうか？そして、禁じ手とはいっただい……？

そして、

「すまないなお前らこんなこと頼んじまって」

銀次もまた、修行をすることに。

「行くぞ刹那!!」

「はい、アドル先生!!」

アドルと刹那もまた、修行を始めた。

はたして、この三人の結果はいかに・・・？

次回、ご期待!!

最後にオリジナル変体刀案を考えてくださったアルマースさん、ありがとうございました。

## 第四十九話（前書き）

最近、金欠気味の銀閣です。

はいどうも皆さん銀閣です。今回は修行編をお送りいたします……が、今回は瀬流彦のみです。ちょっといろいろありまして……すみません。まあ、それでもいいと言っかたは……

べしござー！

ちょっと文追加しました。

## 第四十九話

瀬流彦がまだ中学生だった頃・・・実は瀬流彦は荒れていた。荒れていたといってもバイクを盗んだり、学校のガラスを割るといったものではなく、街中でチンピラ相手に喧嘩を売り、学校では普通に行っているという、所謂『隠れ不良』だ。

ことの発端は・・・やはり正義の魔法使いだ。

〳〳数年前、瀬流彦中学二年生〳〳

『 昭介、お前はあのナギ・スプリングフィールドのような英雄になりなさい』

(・・・煩い)

『 昭介、お前は正義の魔法使いになり、その名に恥じない魔法使いになれ』

(煩い煩い)

『 なぜこんな基本的な魔法も使えないんだ!!』

(別にいいだろうこんな出来なくても!!)

『 かのナギ・スプリングフィールドはこのような技をすぐに習得されたそうなのよ?・・・昭介、恥ずかしくないのですか?』

(僕は瀬流彦昭介でナギ・スプリングフィールドじゃない!!僕には関係ないだろ!!)

「・・・チツ」

ガンツと近くにあったゴミ箱を蹴り飛ばし、瀬流彦は歩き出す。

「(第一母さんも父さんも僕をなんだと思っただよ?魔法魔法つてさ・・・)」

瀬流彦は心の中で悪態を着きながら歩く。季節はちょうど春から夏に変わり目だ。寒くもないし熱くもない・・・そんな季節の中、瀬流彦はある町へと来ていた。親へは魔法の修行をするからという名目で出かけているが・・・もちろんそんなつもりはない。

「(確かに人を守ったり戦う力は欲しいと思うけど・・・でも、僕が欲しいのはあんなんじゃない!!もつと心が熱くなるものがないんだ!!・・・なのに母さんも父さんも立派な魔法使い立派な魔法使い・・・子供じゃないんだからそれ以外いえないのかな!?それに僕はナギ・スプリングフィールドとかいう見たこともない奴になんかなりたくない!!)」

瀬流彦が荒れた理由・・・それはやはり『正義の魔法使い』や『ナギ・スプリングフィールド』などのせいだろう。別に瀬流彦自身は正義の魔法使いにはなりたいとは思っている。人を助ける為に、とというのはやはり瀬流彦も惹かれるものがあるのだろう。だが、だからといって似たこともない話だけしか聞いたことのない、ましてや明らかに嘘が混じったような話を聞いても正直微妙だし、というよ

り目指してもない相手の武勇伝聞いても・・・わかりやすく言えば、  
武術一辺倒の人間にサッカーの偉人の武勇伝を聞かせても無意味な  
ことと一緒にである。

おまけに瀬流彦の両親は狂ったような正義論者。いくら瀬流彦自身  
がヤル気があっても、そんなガミガミ言われたら帰ってヤル気がな  
くなるものだ。以来、瀬流彦はそこまで魔法の練習をしなくなった。  
・・・その代わりに

「（・・・まいいや、それよりも）」

ザツザツザツと街中を歩きながら、瀬流彦は周りを見る。先ほども  
言ったとおり、瀬流彦は魔法の修行でも、ましてや街中で一人ショ  
ッピングをするためにきたわけではない・・・その目的とは

「（さくで、どっかに不良とかいないかな？）」

そう、不良との喧嘩が目的である。別段、瀬流彦は最初からこのよ  
うな喧嘩好きではなかった。小学校五年生頃、瀬流彦が同級生と喧  
嘩をしたことがある。少しムカムカ力していたことで相手が喧嘩を売  
つてきて瀬流彦がそれを買ったのだ。当時の瀬流彦も相手も格闘技  
などしらないのでただボカス力殴るだけだったのだが、たまたま瀬  
流彦の握った拳が相手の綺麗に顎に入り、相手がカクンと倒れてし  
まったのだ。瀬流彦は当時、それを何で倒れてしまったかはわから  
なかった。だが、わかったことはあった・・・顎を殴ったときに拳  
に伝わったなんともいえない爽快感だ。

以来瀬流彦は暇さえあれば喧嘩、不良のみを狙って喧嘩をするよう  
になった。瀬流彦は両親にバレないように喧嘩をしていた。一時不  
良相手に喧嘩したのが両親にバレたが、相手が不良と言うことで「  
正義として当然」といって逆に褒めたのだ。そのときほど瀬流彦は  
「正義が馬鹿らしい」と思ったことはなかった。

さて、そんなこんなで不良を探して町をさ迷っていると。

「……………!!」

「……………?」

「……………!!?……………!!」

「(ん?…なんだ?)」

瀬流彦が歩いてきた通りの横道に入る路地裏……そこからなにやら怒鳴り声が聞こえる。瀬流彦はそれを聞いて、

「(得物発見)」

ニヤツと笑い、その路地裏へと入っていった……。すると、瀬流彦は目撃してしまった。

「ぐへっ!?!」

「がっ!?!」

「じはっ!?!」

一人の、五十ちよいの男性だろうか?がっしりとした身体をスーツを身にまとい、頭を坊主に刈上げているその男……。一見すれば身体を鍛えてるサラリーマンにも見えなくはない。



「ふんっ!!」

だが、その男性は手足を自由自在に動かし襲い掛かる五人の・・・手に短刀を持ち明らかに不良でも善民でもない・・・わかりやすく言えばヤクザ。普通ならこの初老の男性が殺されるのだろうが、ヤクザはいとも容易く殴られ、蹴られる。

「(す、すごい!!)」

瀬流彦はその戦いを見て、思わず感嘆してしまった。今までこんな洗練された戦いを見たことがないからだ。無駄もなく、小さい動作で、尚且つ早く。そして何より・・・破壊力。

瀬流彦は今までの自分がしていた喧嘩がちっぽけに見えてきた・・・そして、その初老の動きを一挙一動見逃すまいとジッと見つめる。そして、瀬流彦の心の中に何か、今まで感じたことのない『熱』を感じた。

「ふんっ!!」

「ぐっお・・・っ!!」

男性が、最後の敵を下突きで鳩尾を殴り沈んだ。カランカランと最後のヤクザが持っていた短刀が虚しく音を立てた。男性はふむ、と肩をぐるりと回す。

「やれやれ・・・別に襲ってくんなどは言わないけどよ。せめてもうちよい強く」あ、あの!!」・・・ん?」

ザッとそこから立ち去ろうとしている男性に、瀬流彦は慌てて声を

掛ける。男性は不思議そうに瀬流彦を見る。

「なんだいぼっちゃん？俺になんかようかい？」

男性は瀬流彦を見る。だが、瀬流彦はその男のことを無言で見た後、  
・・バツと身体を沈め、

「お願いです！！僕を・・・僕を弟子にしてください！！！」

地面に額を擦りつけながら男性に弟子入りを懇願した。

これが、後に神心会空手のエース瀬流彦と神心会空手の創立者、愚地独歩の初対面である。

〳〵現在、神心会空手本部道場〳〵

「いや、あの時は正直驚いたな。いきなり土下座して弟子にしてくれ・・・いまどきの若いのにしっちゃ中々の男だと思ったぜ？」

「やめてくださいよ恥ずかしい・・・」

道場の床に座りながら、思い出話をしながらははと豪快に笑う独歩に、瀬流彦は若干顔を紅く染め頬を掻く。そんな瀬流彦の反応を見て、独歩はさらに口をあけて笑う。

「いやいや、それだけじゃねえぜ？道場に着てからもお前は楽しかったなあ・・・もともと喧嘩っばいもんだから兄弟子やらと衝突して・・・」

「ええ、それで仲良くなつてそれからよく組手をするようになりましたね」

うんうんと二人は頷く・・・やたらといい笑顔で言っている二人だが、当時は二人の組手に巻き込まれたり二人が放った突き蹴りで壁やら床に穴が開いてとんでもないことになった。だが、独歩はそれを止めるどころか笑いながらさらにするように進言したのだ。

「あの後に入つた末堂や加藤やらともいろいろとあつたもんなあ・・・懐かしい懐かしい」

うんうん、と独歩は右手で顎を撫でながら頷いた。そして、

「・・・それで？昭介。一体どんな目的でここに来たんだ？」

ジロツと独歩が瀬流彦に目を向ける。その目はどこか鋭い・・・まるで猛獣のような輝きがあつた。瀬流彦はそれを身に受けるも、真っ直ぐと目を見返した。そして佇まいを直し、

「・・・愚地師匠・・・お願いがあります」

「お願い？なんでえ組手ならいつでも受け付ける「いいえ、僕が戦いで本気を出すこと・・・そして、あの『禁じ手』の使用を許可してほしいのです」・・・ほう」

瀬流彦の願いを聞き、独歩は一瞬にして目を細めた。

「……」

「……」

沈黙。二人がいる道場にはただ長い沈黙が流れていた。

「……理由を聞こうじゃなねえか」

そして、その沈黙を最初に破ったのは独歩だった。確かに独歩自身瀬流彦に対して本気を出すこと、そして禁じ手を言いつけたことはある。もし事前に使わざる終えないような状況に陥るとわかった場合は言うように……と言いつけたことはある。本来空手家……いや、武術家としてはありえない判断だろう。武術家はいついかなるときでも本気で戦えるようにしなければならぬ……だが、瀬流彦のそれは……危険過ぎた。

「（なによりその危険さはいいつが知ってるはずだあ……なのにわざわざ言ってきたってこたあ……）ほら瀬流彦言ってみな」

独歩は心の中で呟きながら瀬流彦を促す。瀬流彦は若干言いにくそうに口を開けたり閉めたりしていたが、決心がついたのか話しだす。

「理由……はあまりいえません。少し込み入った事情がありまして……でも、これから先もしかしたら僕は本気を出さないといいない……大切な生徒を守らなければいけない状況になるかもしれないのです。ですから師匠許可を……許可を、お願いします」

「……」

話しの内容があまり纏まっていないう瀨流彦の言葉・・・だが独歩はそれでも感じていた。瀨流彦の言葉には、何かを守りたいと思う者の思いが込められている事に独歩は気付いた。独歩は腕を組み、目を瞑る。

「・・・空手には、決して存在してはいけない技がある」

「・・・はい」

「それらが表に出なくなつたのは簡単だ・・・危険過ぎるからだ。それらの技は完全に相手を殺すために生まれた技・・・ゆえに消された。・・・昭介、正直に言っぜ。お前が本気を出して攻撃したとき・・・それはすべてその『存在してはいけない技』になる。だから俺アお前に本気を出すことを禁じた・・・それはわかっているな？」

「・・・はい、わかっています」

瀨流彦は独歩の目を見ながら返す。独歩もまた視線を逸らさずに見る。

「そして、禁じたあの技・・・あの技事体空手にとつては十分な殺人技だ。大会などでは滅多に使わないだろう・・・だがな、昭介。お前がこの技を使えば・・・間違いなく相手を殺しちまう・・・それもわかっているな」

「・・・はい、わかっています」

「・・・それがわかっけていて、あえて使用の許可に来たのか？」



彦で相変わらずひょうきんだなア・・・と思いながら独歩を見ていた。すると、独歩は笑みを止めてくわっと険しい顔になり、瀬流彦を見る。

「紹介!!」

「お、押忍!!」

独歩の声に、瀬流彦は昔の返事をしながら条件反射的に背筋を伸ばす。

「本日今この場を持って、お前が本気で戦うこと、そして禁じ手の使用を許可する!!」

瀬流彦はその言葉を聞き、独歩を見る。独歩は厳しい顔のまま、瀬流彦へと言葉を続ける。

「・・・ただし瀬流彦。もしお前さんが間違った使い方をすれば、そのときは・・・この俺が全力でお前を殺してやるから覚悟しておけよ?」

「・・・押忍!!」

独歩の言葉に瀬流彦は、グツと頭を下げる。独歩はニカツと笑う。

「よし、なら紹介。どうだいこれから一稽古して後に飯でも食いにいかないか?」

「押忍、そうしましょう・・・もちろん師匠のおごりですよね?」

「こいつめ！！たまにはお前が奢らんかい！！」

「あはははははッ！！！！！！」

二人は大笑いをしながら立ち上がり、お互いに構える。

「それでは師匠！！お願いいたします！！」

「おう、ああただしちゃんと稽古用の力でやれよな。じゃねえと俺もつい本気で戦うことになっちまうからな」

「わかっていますよ。僕だって師匠と本気でやりあったら溜まったもんじゃないですからね」

二人は笑いあい、そして

「それじゃあ・・・」

「時間無制限組手・・・」

「行きます（行くぞ）！！！！」

ドゴツ、ゴツボガツ！！

激しい肉を打つ音を立てながら、二人は組手を続けた・・・後に訪れた門弟の一人がこの戦いを見て、

「ありや人間の組手じゃねえ・・・恐竜同士のド付き合いだ」

と語っていたとかどうか。



こうして、瀬流彦は師である愚地独歩と共に稽古を続けるのであった。

〳〵麻帆良森の中〳〵

「いちち・・・ちよつとやり過ぎたかな？」

夜。瀬流彦は独歩と稽古をした後飯を共に食べてそのまま別れた。そして瀬流彦はその足でそのまま裏山へと向かった。

麻帆良学園には大きな裏山が存在する。銀次が来る前楓がよく修行していたところで、自然豊かで登山クラブなどがよく登っていたりする山だ。また川も流れており渓流釣りをする釣りクラブなどもよく見かける。

1248

だが、実はここに麻帆良のほとんどの人間が知らないところがある・・・それは、瀬流彦の鍛錬場である。

「よし・・・と着いた」

瀬流彦はふうと肩をぐるりと回して、自分が使っている鍛錬場を改めてみた。生い茂る木々の中に空いた空間。そこには巻き藁を巻いた板や砂が詰まった袋。そして木からぶら下っているサンドバック・・・まさに空手の稽古をする瀬流彦らしい空間がそこにあった。

瀬流彦は一度伸びをした後部屋から持ってきた新しい稽古着へと（さきほどのは汗まみれで洗濯中）着替える。

「・・・ふっ」

そして、軽く柔軟を行い、サンドバックへと向かう。瀬流彦は木からぶら下ったサンドバックを数回軽く叩き、

「はアーーーーーッ」

三戦立ち・・・空手のもつとも基本にして実践でも実際に使える構えをした瀬流彦は右拳を引いて、

「・・・ヒュッ!」

いつもの稽古時の力で突く。百キロはありそうな砂鉄が詰まったサンドバック・・・そんなものまともにましてやグローブ無しの素手で突けば普通は手首を傷める、下手すると折れる・・・だが、

ポゴンッ!!

鈍い音と共に、サンドバックが『折れ曲った』・・・つまり、サンドバックがくの字型に曲がったのだ。

瀬流彦は次に左拳を突き出す。

「ヒュッ!」

ドゴンッ!!

フック気味の左拳がサンドバックに突き刺さる。ミチミチッという嫌な音がサンドバックから響く。だが、もちろんそこで終わるはず

もなく、

「ヒュウッ~~~~ッ!~!~!~!」

ドゴン!~!ドゴドゴドゴバゴンッ!~!

左右の正拳突き、裏拳打つ、裏拳回し打ち、肘打ち、狐拳打ち、そして蹴り技である前蹴り、膝蹴り、回し蹴り、後ろ蹴り・・・様々な空手の技を打ち込んでいく。このように激しい攻撃を繰り返すにも関わらず、まだ本気ではないのだ・・・本気をだせばどうなるか?・・・瀬流彦はさらにスピードを上げていく。振るう拳や足からは風切り音が響き、サンドバックを殴る直前にピュンッという鋭い音となり、サンドバックに当たった瞬間にドゴンッと鈍い音が立つ。

「ヒュウッ・・・!~!」

そして、サンドバックが軋りだしたところ、瀬流彦は右拳を思いっきり後ろへと引き

「ヒョウッ!~!~!~!」

『本気』で突く。

ドガアアアアッ!~!~!~!

正拳中段突き・・・空手の基本中の基本。ただそれだけの突きを放った瀬流彦・・・だが、その突きはあまりにも速く、重い突きだ。おそらくハイスピードカメラでも写らないレベルだろう。サンドバ

ツクはそれに耐え切れず革が破け、中身の砂鉄が吹き飛ぶ。そして吊るしていた木の枝も耐えられなかったのかボキリと折れ、サンドバツクはまるでショットガンにでも撃たれたかのように吹き飛んでいった。瀬流彦は残心をとった後、ふうと息を吐き、自分の拳を見つめ呟く。

「・・・やっぱ、本気を出せるのは嬉しいね」

長く禁止にされていた本気での技・・・それが使えるようになる・・・その嬉しさと人を殺すかもしれないという恐怖・・・だが、すでに覚悟はできている。たとえ人を殺そうと・・・

「（正直、人を殺すのはツライ・・・でも）大事な生徒に手を出すような奴らは・・・全力で打ち殺す」

・・・親友のように誰かを守るために強くなるうと・・・改めて覚悟を決めた瀬流彦だった。

## 第四十九話（後書き）

どうでしたか？今回はこの『忍の剣士』における瀬流彦の実態がある意味明らかになされた話しだったと思います。次回はアドルと刹那、そして銀次の修行まで書く予定です。

次回予告！！

桐野邸にある隔刀・界の中に入ったアドルと刹那・・・そして二人は修行を始める。

「刹那・・・まず言っとくが、今回の敵はほとんどが人間だ。しかも無力化して倒せるような奴らじゃない、プロの人殺しが相手になるかもしれない」

かつての肅清戦で銀次に殺されかけ、戦うということを改めて再確認された刹那・・・はたして、刹那は人を殺せる覚悟がもてるのか？そして、同時に殺される覚悟が持てるのか？

「・・・私は・・・」

そして、二人を手伝うという変体刀も現れる！！

「いえーい！！お手伝いでありますよー！！」

はたして・・・どうなる!?

そして、地下の鍛練場では・・・

「すまないが組手を頼む・・・四季、鎬」

人型の最強位置に存在する変体刀たちに実戦形式の試合を申し込む  
銀次・・・どうなる!?

「ごっご期待!」

## 第五十話（前書き）

文才つかないかなアと思う銀閣です。

どうも皆さん銀閣です。今回は修行編開始！！・・・と思ったのですが、中々筆が進まず今回はアドル&刹那と銀次の修行相手の会合のみです。

それでもいいと言う人は

べしぞー！！

## 第五十話

〃〃桐野邸・隔刀・界内〃〃

瀬流彦が町の外に行っているのとは逆に、アドルは刹那を連れて隔刀の中にへと入っていた。アドルは強くなる為に、そして刹那も強くなる為に……だが、刹那にはさらに別の目的があった。それは・

『己自身の正義とは何か?』についてである。

「さて……ここら辺でいいだろう」

銀の短髪を掻きながらアドルは地面を蹴る。そこは草原に近い場所だが巨岩が転がっていたり、木が生えていたりと……どこか別の国のような場所である。そこにアドルと刹那は立っていた。

「あの……アドル先生」

「ああ?なんだ刹那」

刹那は多少困惑しながらアドルに聞く。



「あの・・・実は・・・」

「だからなんだよ？」

「あ、いえ・・・私が・・・私がなぜここにいるのかと・・・」

刹那はアドルにそんな質問をした。まあ無理もないだろう。和解したとはいえ、刹那は過去に銀次を斬り殺そうとした人間・・・正直、刹那自身は屋敷に入ること自体躊躇ってしまうほどだったというのに、アドルは刹那の腕を強引に引いて連れ込んだのだ。アドルはああ、そんなことかと言いながら苦笑いを浮かべる。

「別に銀次はもうお前のことを許してるぜ？あいつ自身、楓たちを殺そうとしたことを除いてはどうでもいいって考えだからな・・・最近はどう変わったらしいが」

「い、いえ、まあそういうことでもあるのですが・・・なぜわざわざここを修行場にしたのかと思ひまして・・・」

確かに、銀次のことについても十分重要なのだが、それ以上になぜここを修行場にしたのかが気になった・・・刹那は最初この隔刀の存在を知らず、この中に入った当初はかなり困惑した。だが、アドルの又聞きの説明を聞き、相変わらず変体刀には勝てそうにない・・・と思いつつ、呆れ混じりのため息吐いたとか・・・まあ、それはさておき。

「ああ・・・そうだな。一つとしてはここで丸々一ヶ月修行しても外では一秒ぐらいしか時間が立っていないこと・・・つまり時間を気にしないで済むのがやはり多いな。しかもいつでも外に出れるし、ここで何日修行して外に出たとしても得た経験値はそのまま肉体

が老いらぬといふのがあつたな……さすがにお前だつて年取りた  
くないだろ？」

「あ、まあそれはそうですね」

アドルの説明に改めて驚く刹那。確かにここなら外で修行するより  
はるかに効率よく、且つ今までの何十倍もの修行が可能である……  
だが、アドルの目的はそれだけではなかつた。

「そして刹那……ここにきたのはおまえ自身の正義について改め  
て考えるのにちょうどいいと思つたからだ」

「ッ!？」

刹那はアドルの言葉に驚く。確かに刹那自身以前の静肅戦からずつ  
と『自分にとつての正義とは何か?』と考へている。だが、結局の  
ところうまく纏まつていないまま現在までその考へを引きずつてい  
るのが現状だ。アドルはそれをなんとなくだが感じ取つていた。正  
直に言えば、刹那が答へを見つけるまでゆつくりしたかつたが、如  
何せん時間がない。それに剣術の稽古もあるため考へる時間はさら  
に減る。アドルの目的のモウ一つにはこれがあつたのだ。

そして、アドルは今回の修学旅行について刹那に説明することにし  
た。

「刹那……まずいつておくが今回の修学旅行……どんなものか  
わかつているか？」

「?ええ、まず間違いなく呪術協会の妨害が「ああ、それもあつた。  
だが、今回は……人を殺すことになるかもしれない」なつ!?!?そ  
れはどういう意味ですか?」

アドルの遮る言葉に刹那は驚愕する。確かに呪術協会の妨害は予想はしていた。だが、人を殺す状況・・・確かにそのような状況になるかもしれないと思うが・・・アドルは続ける。

「・・・今回、関西呪術協会は外国の傭兵団・・・しかもかなりヤバイ部類に入る連中を引き込んだようだ・・・少なくとも十人二十人は斬り殺すつもりでいかなければいけない」

「・・・」

刹那はゴクリと息を飲む。アドルの目は嘘を言っていない真実の目だからだ。それにアドル自身嘘をつくとは思えない・・・つまりは本当なのだろう。

「（相手を・・・斬り殺す）」

ブルリと、刹那は身体を震わした。

人を斬る・・・正直に言えばこれは刀を取り剣術を身に付けている人間にとっては切っても切れない縁のようなものだ。本来、刀とは人を斬るための武器。そして剣術とはそれを扱うための技術・・・これはどこをどうとっても変わらないもので、精神修行というにはその技術を学んだ上で『危険だ』と自覚するものであり、決して人に教えてもらうものではない・・・まあ、最近はその意識が薄れてきてスポーツとしての心身強化という考えが強くなってきているが・・・。

「（私に・・・私に人は切れるんだろうか・・・？）」

刹那とてそれなりの覚悟は持っていた・・・つもりだが、以前の肅清戦でその覚悟が薄っぺらなものだと銀次に気付かされてしまった。容赦のない斬撃、刺突・・・人を殺すことになんの躊躇いもないように刀を振るう・・・刹那は思い出しただけで胃がきゅうと締め付けられるような感覚に陥った。

「・・・刹那」

アドルはそんな刹那を見て、話しかける。

「お前の考える・・・『人を生きたまま無力化』する剣・・・所謂活人剣はいいだろう。それは素晴らしいことだし、行き過ぎた切人刀はいつか必ず自分に戻ってくる・・・だがな、刹那」

スツと刹那と同じ視点まで目を下げ、続ける。

「その剣術では・・・限界がある。平和な路上での斬り合いならそれでいいだろう・・・だが、殺伐としていつ死ぬかわからない戦場では・・・その考えが死に繋がることにもなる」

「・・・」

刹那は黙り込む。実際、戦場で相手を拘束するということはまずしない。よほど情報を必要としているか、それとも降伏しているか要人でない限りは殺す。そうしないと自分が死ぬかもしれないからだ。

「俺も銀次も・・・何かを守る為には殺しも厭わない・・・たとえばそれが自分に跳ね返ってくるとしてもだ・・・刹那。お前は俺達の

ようになれとは言わない・・・だが、どうしても何か守りたいものがあるならそのために覚悟を決める」

「・・・はい」

コクリと頷く。刹那とて、今回の任務は楽なものではないと自覚している。だが、やはりどこことなく相手を斬る際に躊躇いが出て即死の急所ではなく靱帯などの行動不能にさせる攻撃が中心になってしまふ。だが、相手は今回そんなのが通用するとは思えない。下手すると道連れということまで自爆するかもしれないのだ。深く考える刹那を見てアドルは二カツと笑い、

「ま、その覚悟はおいおい決めるとして、だ。折角時間があるんだ、稽古しようぜ」

「あ、はい!!わかりました!!」

そうだ、どっちにしても稽古をして少しでも生き残る可能性を増やさなければならぬ。それにもしかしたら稽古中にいいアイディアが浮かぶかもしれない・・・そんなことを考えながら夕凧を抜こうとしたとき、

『いっーーーーー』

キィーーーーンツツという音と共に、なにやら風きり音を耳にしつつ、アドルと刹那の二人は頭の上に？マークを浮かべ上を向くと・・・

羽を生やした少女が猛スピードで落下してきた。

「……………はっ!?!」

さすがの二人は反応が一瞬遅れたが、そこはプロ。即座にその場から離れる。すると

ドゴーーーーーッ!!!

派手な音を立てながら、その少女は地面に激突した。モクモクと上がる砂煙。そして、よく見ると地面に漫画よろしく陥没痕があった。

「……………」

ぽかんと、さすがの二人は呆けてしまう。それもそうだろう。何せ空から急に少女が降ってきたと思ったら地面へとぶつかり、俗に言うギャグ補正でかは知らないが陥没痕……これが現実なら間違いなくスプラッタな潰れトマトになっている。

二人がそんな風に見ていると、

「……………エーーーーーイッ!」

ズボッ!とその陥没痕から昇竜拳の如く飛び出した物体……先ほどの少女だろう。その少女は空中でクルクルと回り、

「お手伝いするでありますよー！ー！！！！！！」

スタツと、まるで仮面ライダーあたりで出てきそうな決めポーズを取りながらそう叫んだ少女・・・黒い軍服らしきものを身に纏い、背中に4本、腰に3本差した合計七本の刀を装備していた。思いつきり刀を中心に戦うスタイルなのだろう。黒髪をショートカットにした少女は顔を上げた・・・そして、

「は・・・え？刹那・・・？」

その少女の顔を見て、アドルはそう呟いてしまった・・・それもそうだろうなにせ、

「この奉刀・少女が一本！！穹こと私が訓練のお手伝いをするであります！！」

そこに居たのは・・・

「わ、私！？」

刹那そっくり、いや刹那そのものといっても過言ではない少女がハイテンションで挨拶をしていた。

はたして、この奇妙な出会いはいったい何なのだろうか？そして奉刀・少女とは一体何なのか・・・？

〱桐野邸・地下鍛練場〱

桐野邸地下鍛練場。元は学校などにある百メートルトラックほどの鍛練場だったのだが、変体刀の鍛錬での破損。楓たちの生身の人間での破損。そして銀次自身が変体刀の技作りや稽古のためによる破損・・・それらが重なり、しかも稽古中にぶつかり合うということもありさすがに危険だということに拡張。これには建設等が得意変体刀の活躍のおかげである。拡張に拡張をつけ増強を増強を加え・・・正直どこまであるか銀次も把握できていない。ただ、その鍛練場全体を照らす電力には様々な発電方法を使っているらしい。ここは空を飛んで戦う変体刀もいるため拡張したため天井がやたらと高いため、普通の照明では照らすことができないらしく、狂謹製の照明だ・・・余談だが、この照明一つの値段を銀次がたまたま見たときベントツ三台購入してもおつりが来るくらいの値段で発狂しかけたか・・・。

さて、それはさておき。その法外の額がかかっている鍛練場に、この屋敷の主である桐野銀次はいた。もちろん彼がここにいるのは鍛錬のため・・・なのだが、彼はその鍛練場をタタタツと車並みの速さで走っていた。

「たしかあいつらはあそこらへんで稽古しているはずだから・・・」



銀次はそんなことを考えながら走る。銀次が探しているのは勿論変体刀・・・しかも人型のうちで最強に部類する変体刀たちだ。目的は稽古をつけてもらうためなのだが・・・その最強の部類の変体刀たちは結構入り口から離れた場所で稽古をしているため歩いていては日が沈んでしまったためこのように走っている。そして、しばらく走っていると、大きい岩がゴロゴロと転がっているところは何人かの変体刀達が集まっていた。

「（お、いたいた）」

銀次は目的の変体刀が集まっていることに好都合だなと思いながら、走るスピードを上げる。そして、

「おい、ちよつといいかお前ら」

ザツと止まり、その人物たちの前でとまる。その場にいた人物達はチラリと銀次に目を向ける。

「おや？銀次殿いったいどうしたのですかそのように急いで・・・」

そのように声を掛けてきたのは漆黒の双眸に銀の頭髪、長い髪の毛を後ろで一つに束ねている、身体は全身を包帯で巻き、顔以外に露出している場所は無い。その上に膝辺りに紅葉の模様をついた黒の袴、右手しか袖の無い紅色の羽織を着ている（要は七花が最後に着ていた衣装）男性にも女性にも見える人間・・・いや変体刀。

「おお、なに四季・・・少しお前に用事があったな」

そう全ての人型変体刀の頂点に立つ変体刀・・・

完結形人型変体刀 終刀・四紀ついでう しき

『完結させる事』を主軸に置いた刀で、性別、そしてその実力は未知数・・・刀としてだけでなく気や魔法、過負荷など・・・およそ現実・非現実の世界における技はすべて使えるといっても過言にはならないほどの変体刀だ。文字通りの最強・・・また四季崎が生前、死後関係なく作り上げた際に生まれた変体刀で最強に近い変体刀を集めた五十補百補の第一位に君臨するほどの変体刀でもある。なぜそんな化け物変体刀に銀次が会いにきたのかと言うのは勿論理由はあるが・・・銀次はさらに辺りを見回す。

「・・・なあ、鎬の奴はどこだ？」

「・・・ああ、あ奴ですか」

銀次はさらにもう一人の存在をたずねる・・・が、その瞬間四季の顔が不機嫌そうに歪む。本来、四季はほとんどのことに無関心なためこのような顔を取ることはまずしないのだが・・・すると、

「俺ならここにいるぜ？」

四季の後ろにある大きな岩の上・・・そこからひよこりと頭を出した女性がいた。銀次はそちらのほうへと視線を向け話す。

「おお鎬。すまないがちょっと頼みたいことがあるんだ。降りてきてくれないか？」

「ああいいぜ・・・よつと」

クルリと、その岩から飛び降りる鎬と呼ばわれた女性。だが岩から地面までの距離は大体十メートル。本来この高さから飛び降りたら両足の骨が持つてかれても可笑しくないのだが・・・

ズドンッ

「んで？なんのようだ銀次」

ものすごい落下音をさせ、降ってきた女性・・・がそのように聞いてきた。

未刀・鎬みづのこ 『未完成』に主眼を置いた変体刀で、全刀・鑄と永刀・鳳の派生系変体刀にして、未完成系変体刀第一号・暫定序列一位。数ある変体刀の中で唯一“魔獣”の異名を持つ“不滅”の変体刀でもある。

容姿はサイドはロングにし、腰より下まで伸ばしたボサボサの黒髪にバンダナを巻いた狼の如き鋭い眼孔と犬歯を持つ少女。2m近い長身でスタイルは非常に良い。胸など楔といい勝負・・・いや、下手したらそれ以上かもしれない。右袖がない黒いシャツに左膝から切られた黒いズボンという左右非対称な服装。右頬から首筋にかけて大きな傷痕があり、右腕左足にも何かで抉られ切られたような大小様々な傷痕が多数ある。服の下は錬鉄の如くかつしなやかに絞り込まれ、全身が受けた大小様々な傷痕ばかりである。

自称「努力家にして熱血、必ず筋を通す女」で、一度も嘘を吐いた事がないのが自慢らしく、敵であろうとどんな手を使っても約束は守り通すという。また変体刀の中には鎬のことを姉貴と呼んで慕う

ものもいたり、お茶目な発言もできる変体刀でもあり、十八番はピクンの愛うただそつだ。全力で生きる事を信条としており、どんなことにも貪欲で普段使わないだろう魔術なども習得しているのだが、たまに変な方向に走るため『しょうもない無駄な努力』といわれることがあつたりするとか……。

さて、鎬と四季……変体刀の中で最強無敵無双を誇る変体刀が二振りが揃った。

「……して、銀次殿。私と鎬……この女に用とはどんな用でしょうか？」

「まさか脱童貞したいから抱かせろつて言うのか？」

四季は鎬を不機嫌そうに見ながら答え、対する鎬はニタニタと冗談を飛ばす。まあ、傷があろうとなかろうと、女性は女性。それぞれの魅力があると考えている銀次にしたら確かに鎬は魅力的な女性の一人でもあるだろう……が、

「うるせえ馬鹿！！寝言は寝て言やがれ！！」

勿論鈍刀・銀次にはそんなことわかるわけないので、適当に流す。鎬は相変わらずつまらねえ奴、といいながら欠伸を一つかます。

「んで？一体なんのようなんだよ。四季はともかく俺はこれでも忙しいんだぜ？」

「さつきまで寝ていた奴がよく言う・・・」

鎬の言葉に四季が突っ込みを入れる・・・が、即座に鎬はかえす。

「その寝ていた奴に負けたのはどのどいつだったけなく？え、おい四季」

「くっ・・・」

ニタニタと笑いながら答える鎬に、四季は苦い顔をする。そう、四季は過去もあわせて鎬に勝った事がないのだ。完結として作られた変体刀である四季にとってはそれはある意味敗北以上の屈辱・・・しかも『未完成』に主眼を置かれていたら尚更だ。それ以来、四季はあらゆる世界の猛者と戦っているらしいが・・・いまだ鎬には勝てないらしい。しかも性格的にも四季は苦手らしく、このように口でも言い負かされることがあるらしい。

「ああ・・・少しいいか二人とも、俺の頼みを聞いて欲しいんだが・・・」

「ん・ああ、悪いな銀次。ついついコイツ弄っていると楽しくってなハハハッ」

「くっ・・・次は、次は絶対に負けん・・・!!」

「（本当、こいつも表情豊かになったな・・・）」

以前の四季はもっと冷静沈着といった感じだったのだが・・・まあ、ある意味ではいい傾向だろう。銀次はそれはさておきと思い、

「四季、鎬……」

真剣な、真面目な顔をする銀次。その顔を見てか、四季も鎬も銀次の顔を見る。

「……」

「……」

「……」

しばしの沈黙……そして、

「俺を、鍛えてくれ」

地獄の修行が……始まる。

## 第五十話（後書き）

どうでしたか？・・・え？さっさと話し続ける？・・・はいわかっています申し訳ありません。

まあ、今回はココまでと言つことでご容赦ください。次回からやつと修行に・・・次々回から、次々回からは必ず原作に・・・！！

さて次回

アドルと刹那の目の前に現れた謎の少女・・・その少女は自分自身を穹と名乗り、修行相手に名乗り出た！！

「なんや穹。まだ戦ってへんの？」

「あ、お嬢！！」

またもや混乱！？

そして地下の鍛錬場では、

「それでは銀次殿・・・始めますよ」

「ああ、頼む」





**第一回忍の剣士のキャラがあなたのキャラに答えます(前書き)**

最近、真剣の日本刀が欲しいという欲求が強くなってきた銀閣です。

どうも皆さん銀閣です。今回は(かなり遅くなりましたが)この『忍の剣士』が一周年を迎えたのを記念して皆さんの質問に答えるというものです・・・まあ、書いていて思ったことを言つと・・・

どうしてこうなった・・・?

ぶっちゃけ色々つぶつぶ飛んでいます、カオスです。それでもカモン!  
!という方は

ぶつぶと・・・

## 第一回忍の剣士のキャラがあなたのキャラに答えます

〓桐野邸特別スタジオ〓

銀次（以下銀）「第一回！！」

楓「忍の剣士のキャラが！！」

銀楓「あなたの質問に答えます！！」

銀「・・・で？こりゃいったいなんなんだ？」

楓「うむ、拙者もそれが気になっていたのでござる・・・地文もないでござる」

ピラッ（上から紙降ってきた）

銀「あん？なんだこりゃ・・・なにに？『やあ銀次に楓。この忍の剣士を書いている銀閣と言う人間だ』・・・ああ、あのバカか」

楓「銀次殿知り合いでござるか？」

銀「ああ、ちよつとな・・・まあ、それはいいや続き読むぞ」まずなぜ、君達がそこにいるのか？そこが気になると思うからお答えしよう。実は以前から聞いているWebラジオを聴いてね、おの質問コーナーのやり取りが面白いから試しにやってみようと思って始めたんだ。ちよつとラジオに近づける為に今回は地文無しで言ってみたいと思っているからそのつもりで頑張ってくれ・・・あいつ無茶しやがって」

楓「無茶・・・でござるか？」

銀「ああ。まあ見ての通り作者は地文・・・つまり三人称方式で書くほうが得意だな。一人称・・・ましてやこんな風に会話文だけの文はあまり得意じゃないんだよ・・・」

楓「それはまた・・・無茶を」

銀「というわけで、もしかしたら見苦しい所もあると思うが、まあ今回は見逃してくれ」

楓「よろしくお願いするでござる」

銀「さて・・・それじゃあ続けるか。え〜と今回は特別ゲストを呼んでいるらんだが・・・おい、これ絶対に呼ばなきゃダメか？」

楓「ござ？どうしたでござるか？銀次殿・・・そんな変な人がゲストでござるか？」

銀次「変っていうか・・・まあ変人だな・・・ええい、グダグダ言ってもしょうがねえか・・・おい、入って来い！！」

ギギイ、（なんか扉つばいの開く音）

【~~~~】（笑って いとものopp的な音楽）

銀楓「」

四季崎（以下四）「はいどうも〜みんなのヒーロー四季さ〜」うらあ

！！(ドゲシ！！)「ぎゃふんツ！！」

銀次「お・ま・え・は！！何をやってんだおいこら！！明らかに著作権に引っかかりそうな歌流しやがって・・・！！」

四「うるせえ！！俺だつてな夕さんみたいにでてみたかつたんだよ！！あのお昼のワイドショー的に出てみたかつたんだよ！！」

銀「お前のはただのパクリだ！！しかもなくにながモさんだ！！お前明らかに出方がタさんじゃなかつたぞ！？謝れ、モさんに謝れ！！」

四「五月蠅え！！お前が謝れ！！全国の夕モさんに謝れ！！」

銀「なんで全国規模になつてんだよ！？しかも伏字が消えてんだよ！！」

楓「と、とにかく二人とも落ち着くでござるよ！！これじゃあ話が進まないでござるよ！！」

~~~~しばらくして~~~~

銀「え〜・・・まあ色々あったが、早速質問に答えて行きたいと思つ(ボロ)」

楓「おーでござる」

四「おう・・・(ボロ)」

銀「・・・なんだよ四季崎」

四「別に何でもねえよこのバカ弟子」

銀「うつせバーカ、変人変態奇人め」

四「うるせえこのロリペド巫女大好き人間め」

銀四「・・・」

楓「ほ、ほら二人とも早く進めるでござるよ!!!(正直問題なく進めることができるか不安でござる)」

銀「・・・まあ、楓に免じて今回は見逃してやる・・・さて、それじゃ本筋に話を戻すぞ」

銀「まず、自己紹介。まあ言わなくてもわかると思いますが俺は桐野銀次だ。一応主人公って設定になっている」

楓「そしてその銀次殿の伴り「はいはいバカ言っていないでさっさと続ける」・・・幼馴染の長瀬楓でござる」

四「(相変わらず鈍感なのなこいつ)そして、この俺!!伝説の刀鍛冶にして最強の剣士である四季崎記紀だ!!」

楓「そういえば会つのは初めてな気がするでござる」

銀「まあ、基本あの世に引籠もっているからなこいつ・・・」

四「失礼な奴だな・・・たまに遊びに外にでてんだぜ?・・・別の世界にな!」

銀「・・・ぜってえ滅茶苦茶にしている映像しか流れねえのはなんですか?」　あながち間違っていない。

楓「別の世界・・・?」

四「おうそくだなあ・・・なんだかISとか言う女しか使えない兵器がある世界だったり、魔法使える貴族が偉いみたいな世界だったり、三国志の武将が全員女だったり・・・とネウロイとかいう空飛ぶでっかいゴキリみたいのもいる世界に行つたな。あと管理局とかいう組織が居る世界にも行ってなあ・・・そっぴやあの時は変体刀寄せとかほざいた奴がいてよおそいつらぶちのめしたらなんか組織ごと来てな、全員フルボッコにしてやつたなあ・・・懐かしいぜ」

銀「(やべえ、なんだか所々知ってる世界なんだが・・・)よし、四季崎そこまでだ。それ以上は多分作者が頑張ればお前の物語も書いてくれるかもしてないからな・・・というより、これ以上話を伸ばすとバッシング受けるかもしれないから話を続けよう」

四「それもそくだな」

楓「そっぴやそれな(ほ、やっと進んでくれる)」

銀「え・・・それじゃあまずは紅蓮さんからの質問だ。ありがとうございます」

四楓「」ありがとうございます」

銀「え〜・・・これは四季崎に対する質問みたいだな」

四季崎「お？いきなりか。いいぜ何でも掛かってこいや!!」

銀次「『四季崎一家の中で一番強いのは誰ですか?』」

四「」

楓「ござ?そついえは四季崎殿には妻子がいるとは聞いているでござるが・・・」

銀「ああ、咲さんと桜花さんな。ぶつちやけたことを言えば咲さんは楓の母さん似、桜花さんは楓そのものって言ってもいいぐらい似ているんだ」

楓「ほうほう、なるほど・・・それはそれで是非とも見てみたいものでござるなあ」

銀「正直並ばれると非常に困るな・・・わかんなくなるから。で?四季崎どうなんだよ?」

四「う、・・・ま、まあアレだよお前・・・な、いつの時代も何たるのほうが強いつていうじゃねえか・・・」

楓「・・・つまり?」

銀「ようは咲さんの尻に敷かれてるってことだろ?」

四「・・・はい。その通りです。いや、でもなしょうがにだろう!」

？誰だつて妻に弱いのは万国共通だぜ？」

銀「お前の場合は愛妻家なのもあってさらに凄そうだもんなあ」

楓「そういえば父上もそうでござつたな・・・」

四「うんまあ確かに・・・純粋な力比べなら俺のほうが圧倒的なのは自覚あんだけどよ・・・なんつうの？こつ、どんなに強くなつてもまるで咲に勝てる気がしないんだよこれが・・・」

銀「なるほどな・・・惚れた女には弱いってか？」

四「ま、そんなところさ・・・質問の答えだつたっけか？結論から言つちまえば四季崎家の中で一番強いのは咲かもな。純粋な力比べだと俺だが、それ以外なら間違いなく咲が最強だ」

銀「なるほどなるほど・・・相変わらずの妻バカなのな」

四「るせ、あと桜花も俺より最強だ。特にアノ輝く笑顔が特に・・・」

銀「あー・・・それはわからなくもな「ズンッ！！」「ぐほッ！？」」

楓「・・・」

銀「か、楓・・・てめえ何人の脇腹に肘打ち決めてんだゴラあ・・・
・！！」

楓「・・・銀次殿、確か拙者と桜花殿は瓜二つなのでござるよな？」

銀「お？おつ？そういつたが・・・だからなぜそれが肘うち・・・？」

楓「・・・なら、拙者の笑顔はどうでござるか？」

銀「ああ？・・・そりゃ、綺麗だとは思っけどよ・・・だから何で肘打ちに・・・？」

楓「う、うふふ・・・綺麗、でござるか・・・」

銀「いやだからなぜ肘打ち・・・？」

四「（ああ、楓嬢ちゃんも苦労してるんだろうが、これはこれで銀次も苦労してんだな）・・・おら、さっさと話を進めようぜ。銀次、早く次のお題出せ」

銀「げほ・・・あいよ。え〜と次は・・・パルパレーパさんからの質問だな・・・本当いつもありがとうございます」

楓「感謝してもしたりないでござるな」

四「ああ、本当にな・・・それで質問内容はなんだ？」

銀「あ・・・これはどうやら俺宛だな・・・」

楓「なら拙者が読むでござるよ」

銀「そうか？なら頼むぜ」

楓「うむ・・・『数々のクセのある変体刀達の中で、ぶっちゃんけ銀

次が一番苦手な変体刀は？」

銀「一番苦手の変体刀……か……これ聞かれたら絶対後でめられるんじゃないか？」

楓「……確かに」

四「まあ、そのときは見ながら大笑いしてやるよ……ざまあ」

銀「やべえ……なんだか今ならコイツの頭を力手割ることが出来る拳を繰り出せそうだ……」

楓「まあまあ、銀次殿……大丈夫でござる。いざとなったら拙者が骨を拾うでござるから」

銀「死ぬこと前提！？なんだか段々言いたくなくなってきたぞ」

四「いいからさっさとゲロツちまえよ銀次^{ニヤニヤ}」

銀「……てめえ人事だと思いやがって……」

四「だって人事だもーん（ケラケラ）」

銀「……てめえ……後で覚えてるよ……まあ質問に答えよう。苦手な変体刀か。そうだな、あえて言うなら……女刀・侍かな」

楓「女刀殿……でござるか？それはまたなんで」

銀「いやな、楓はあまりないかもしれないけどよ……女刀を怒らせるとな……とてつもなく怖いんだ」

四「ああ・・・それはわかるかもしれないな」

楓「四季崎殿も怒らせたことがあるでござるか？」

四「ああ、あるぜ。前に酒飲んで他の変体刀らと騒いでたんだがよ、そのときに醤油を畳みに零してな」

楓「うわー・・・それって全然落ちないでござるよ？」

四「ああ、そうなんだよな・・・まあ、話を戻そう。それでなそこをちようど女刀が通りかかってよ、『・・・四季崎様？それに皆さん何をしているんですか？』って凄い笑顔で言われたんだよ・・・んで、その後は銃剣で脅されつつ畳を換えて、ついでに掃除もやらされて・・・ああ、思い出しただけでも背筋がぞつとするぜ」

銀「ああ・・・ありや怖いな・・・ニツコリ笑顔で銃剣ちらつかせて・・・俺も前に狼刀と少し暴れてな・・・それで家少し暴れてたらいきなり銃剣が俺と狼刀の床に突き刺さってな・・・んで、すごい覇気を感じたからソツチ見たら・・・」

楓「女刀殿がいた・・・でござるか？」

銀「ああ・・・本当にあの時は怖かったぜ。その後に俺と狼刀は家の修理・・・はともかく少しだけ口喧嘩するだけで銃剣が飛んできたからな・・・」

楓「・・・そういえば、以前も鈴蘭殿と天照殿が暴れたときも女刀殿が怒っていたでござるな・・・」

銀「ああ、だから別にあいつの人柄とかは好きなんだけどな・・・だからもうちよい限定するなら『怒ったときの女刀』が苦手だな。怒んなきゃそれでいいんだがよ」

楓「そうでござるか・・・それでは次の質問に行くとするでござる」

銀四「「おう」

楓「続いての質問は・・・パルパレーパさんからの質問でござる」

銀「お、またか？今度はどんな質問がくるんだ？」

楓「え〜と・・・『現在までの桐野邸の被害を纏めると？』

銀「

四「お？なんだどうした銀次？急に震えだして・・・」

銀「・・・すまないすまない世界。ちゃんと金は返すから・・・！！」

楓「ぎ、銀次殿！？戻ってくるでござるよ！！（ユサユサ）」

銀「さすがにもうモ ハンの鉱石採掘は勘弁「いい加減戻って来い！！このすつとごどつこい！！」「ぶはっ!?!?」

四「ふう、やれやれ世話のかかる奴だぜ」

楓「あ、あの四季崎殿？いま中高一本拳で人中を打っていた様な・・・」

中高一本拳とは拳を握り中指の第二関節だけを突起させ、そこで殴るといふ拳技の一つで、人中とは鼻と唇の間をちょうど縦に通るところで、ここを中高一本拳で叩くと簡単に相手を気絶させ、またあの世に叩き落すことも可能な危険なものである！！よい子は真似しちゃダメだぞ！！

銀「ぐおっ・・・！！てめえ四季崎イ！！やっぱりてめえは一度やる！！」

四「いいぜかかって来いよ！！Let's party！」

楓「二人とも進まないから止めるでござるよ！！」

（数分後）

銀「（チーン）

四「へっ、俺に勝というなんて一億五千四百五十三万八千九百九十八早いんだよ」

楓「細かいでござるな・・・というより、銀次殿がいつものとキアラが違つでござる・・・」

銀「ぐう・・・くそ、四季崎め・・・ぜってえいつか勝つ・・・まあいい。確か質問は・・・被害額だったか？・・・なあ、これ言わないといけないのか？」

四「一昨日きやがれクソツタレ……ていつかそんなに多いのか？」

銀「ああ……正直途中で数えるのを止めたぐらいだ……」

楓「そ、そんなにあるのでござるか……？」

銀「ああ……お前や真名やらが壊しまくるからよお……お前らだけでもかなりの額だぞ？」

楓「じ、じぎ……」

四「んでいくらなんだ？」

銀「……う円」

四「あ？なんだって」

銀「……五兆九千億五千百五十万九千七百八十三円だ」

四「楓」

銀「度重なる修理費、増築費……しかも修理するたびに強化するから資金は倍増するわ増築するからさらに増えるわ……正直、火の車レベルの話じゃねえよ火達磨なレベルなんだよ……」

楓「で、でも、普通の食事はそんなに変わっておらぬでござるよ……」

銀「そりやお前、働いている変体刀や隔刀の中にある食材で保っているからだよ……それがなかったらすでに餓死しているわ」

楓「そ、そうでござったか・・・なんかゴメンでござる」

四「そっぴゃお前おからよく食ってたな・・・今度飲みに行くか？」

銀「できねえだろう・・・だったら金くれ金。むしろなんなら金塊くれ。売るから」

四「ムリダナ・・・まあ銀次が死にそうなのはザマアと言うことにして次の質問に行くぞ」

楓「あいあい・・・拙者ももう少し暴れないように頑張るでござる・・・それでは次はシ八猫さんからの質問でござる」

銀四「「おう」」

楓「え〜と・・・『銀次さん、もしも貴方が漫画世界で大暴：大活躍したい世界があるなら、教えて下さい！！』・・・だそうでござる」

銀「俺宛か・・・そうだなア暴りたい世界か・・・これって小説も含まれんのか？」

四「じゃねえか？んで？どこかあんのかよ？」

銀「あ〜・・・ぶつちやけ世界のおかげで色々な世界に（借金返済）で色々といっているからな・・・」

楓「ほほう・・・それは初耳でござる。今度拙者も是非とも行きたいでござるな」

銀「機会があればな・・・そうだな、あえて行きたいとすれば・・・インフィニット・ストラトスかな？」

四「ああ、あの女しか使えないとかいう欠陥兵器がある世界か？あの世界なら俺も行ったことあるな・・・でもまたなんでだ？」

銀「いや、ただ単にISとかいう兵器と戦ってみたいだけだよ・・・でもまあ、この前狂がそのISのキャラにソックリな人型変体刀を作っていたからな、その心配もなくなった・・・まあ装備は若干違うがな（いえねえ・・・あの世界の篠ノ之箒の巫女服を見たいといえねえ・・・）あとは・・・緋弾のエリアかな？」

楓「緋弾の・・・？それはどんな話でござるか？」

銀「まあ、武装探偵、通称武偵が活躍する話しでな・・・少し変わった力を持っている主人公を中心に話を進める話だ（これも星伽白雪の巫女服姿を見たいからとか言えないな・・・言ったら間違いなく殺されるような気がする・・・主に楓に）」

四「（あの世界には確か巫女服姿の女がいたな・・・ハハアそれが目当てか）」

楓「ござ・・・拙者全然ついていけなかったでござる」

銀「しょうがねえよ・・・コレばっかしは別世界いったことがないと付いていけねえよ・・・さて、次の質問に行くぞ」

楓四「はい」

銀「え」とこれもシハ猫さんからの質問だな・・・『四季崎さん、貴方は鑢一根さんと親友でいらっしやいましたね。もしも鑢一根さんに再会したらどうしますか?』・・・こいつは明らかに四季崎宛てだな」

楓「鑢一根・・・って誰でござるか?」

銀「俺はあまり使わないが・・・虚刀流あるだろ?あれの開祖だ」

四「まあ俺が色々と教えたんだがな・・・まあ再会したらか・・・そうだな再会したら取り合えず・・・ド突く?」

銀「なんで疑問系!?!しかもなんでド突くんだよ!!」

四「いや〜ほらアレだよ・・・アレ。うん、男同士の友情を確認しあう・・・みたいなの?」

銀「最後だけギャル風にされても気持ち悪いんだよ・・・まあなんだ?出会い頭に殴り会つのがお前と鑢のやり取りなのか?」

四「ああ、懐かしいなあ・・・あいつ刀ぶんぶん振りましているのが子供がちゃんばらしているみたいだよ、『なにそれ剣術?プギヤアWWW』って笑ったら刀投げつけられたっけな。んでド突き合いいや〜楽しかったぜ?ちょうど柔術の技を少しやっていたからなポンポン投げまくったぜ」

銀「いや、それ明らかにお前が悪いだろ」

楓「十中八九そうでござるな・・・」

四「ま、細かいことは気にすんなよ」

銀「まあそれはいいとして・・・次の質問だ」

四「おう」

楓「あいあい」

銀「パルパレーパさんからの質問だな・・・一番質問数が多かった
ので感謝します・・・」結構広い印象を受ける桐野邸、その大きさは？」・・・か。これは俺宛なのかな？」

楓「だと思つてくれる」

四「てか間違いなくそうだろう」

銀「うるせえ・・・そうだな広さか・・・地上はそれなりに広いな、
四方それぞれ五十メートルぐらいだな」

四「随分と広いなおい・・・ああ、変体刀達が住んでいるのか？」

銀「ああ、まあ俺や楓に真名に鈴・・・そして家事全般をしてくれている
女刀や楔やら・・・まあ、そこらへんだな。大体は地下の住宅地で暮らしている」

四「へえ・・・っておい地下ってどれくらいあるんだよ？」

銀「・・・正直に言えば地下は俺でも把握してないんだよ。地下は
完全に変体刀たちの領域になっていてな、知らない間に増えている・・・
なんて当たり前前だぜ？あと一階一階が広すぎる・・・なぜか知ら

ないんだが、地平線が見えるんだぞ？」

四「ああ・・・それはアレだな俺の家の地下でもあったな。なんだか知らないうちに地下に町ができてたから驚いたぜ」

楓「うむ、確かにアレには驚いたでござる・・・だって地下にいきなり町ができたでござるからなア・・・」

銀「しかもそれが何十層もあるからな・・・つとそんなことより質問に答えようか。まあ、地上の桐野邸でいえばかなり広い。平屋造りで一部屋が大きくてな、一人の部屋も広いんだ・・・畳十畳だったかな？それが十部屋ぐらいある。台所は居間と並立していて合わせて二十畳ぐらい・・・広いけど、よく変体刀達が入り浸ってるから狭く感じるな。庭は井戸があつたり物干しがあつたり・・・まあ広めの武家屋敷をイメージしてくれたらわかると思う」

楓「確かにそのほうがわかりやすいでござるな・・・」

四「まあ、広いと色々とできるからいいけどな」

銀「ああ、その代わり掃除が大変でな・・・まあ、家庭事情はまたの機会に話すとして・・・次行くぞ」

楓「あいあい」

四「おう」

銀「これもパールパレーパさんからの質問だな・・・俺宛か」

楓「なら拙者が変わりに読むでござるよ」

銀「ああ、なら頼んだ」

楓「任せるでござるよ・・・えーと」銀次が今まで戦ってきた変体刀の中でまず一番に勝ちたい相手は？」

四「これまた率直な質問だな」

銀「ああ・・・勝ちたい変体刀か・・・そうだな正直ほとんどの変体刀に負けたりしてるから全員といたいところだが・・・」

四「まあ、お前も弱くはねえんだがな・・・」

楓「変体刀達が”ちーと”すぎるでござるよ。体力は無限にあるでござるし、特殊な力を使ったりもするでござるから・・・でも人間相手なら銀次殿は甲賀忍軍の中でも抜群でござる!!」

銀「まあ親父には負けるがな・・・まあそれをおいて一番勝ちたい相手か・・・あえて言うなら四季かな？」

四「四季イ?・・・ああ確かにあいつめちゃんこ強えけど鎬はどうしたんだ?アイツは冗談抜きで強いぞ?」

銀「ああ、それはわかってるんだが・・・やっぱり以前から勝てなかつた四季を倒すのが先決と思ってな」

楓「よく負けていたでござるからな」

銀「うるせえ楓。ま、そんな理由でまずは四季を倒す。あとはそれからだ」

四「なるほどねよくわかった」

楓「ならば次の質問・・・これは拙者宛でござるな」

銀「なんだかんだで初めじゃねえか？楓宛の質問・・・っておい楓
あにそんなニマニマとした顔になってんだ？」

楓「ん？いやいや何でもないのでござるよ？それではいくでござる・・・
・『楓が銀次を好きになつたきつかけは？』」

銀「」

四「おっ！？こいつは俺としても気なる内容だな・・・（これはある意味チャンスだぜ楓ちゃんよ）」

楓「（ちゃんす・・・でござるか？）」

四「（ああ、こいつは鈍感なのは楓ちゃんが一番わかってると思うけどよ、案外この質問が効果的面するはずだ！！そして今後もしっかりしたら・・・）」

楓「（な、なるほど！！さすがは四季崎殿でござる。拙者では考え付かぬことをこつも容易く・・・ならば早速実行でござる！！）」

銀「（なぐにこそこそ話してんだコイツラ？）てか、なんだこの質問内容？楓が俺に惚れてるとかまずないと思うんだ」黙ってるこの唐変木が！！「くぼっ！？」

四「ふう、やれやれこれだから・・・さあ、楓ちゃん言ってやんな

「!!」

楓「了解でござる!!・・・まあもともと拙者と銀次殿は互いの父上が友人関係でござってな。その関係があつて知り合ったのでござるよ」

四「俗にいう幼馴染だな」

楓「その通りでござる。それで拙者が物心つくころからそばには銀次殿が居たでござる・・・遊ぶときも食事を取るときも寝るときも・・・風呂に入るときも一緒だったでござる」

銀「あれはお前が風呂に乱にゆ」黙って聞いてるKY!!」「ぐばっ!!」

四「たく、これだからKYは・・・ほれ続ける楓ちゃん」

楓「あいあい・・・まあそんなこんなで一緒にいることがほとんどござったが、稽古の際は離れ離れでござった・・・当時の拙者はまだ稽古ができる歳ではござらんかったからしょうがないといえましょうがないでござる。でも、拙者はどうしても銀次殿と一緒に居たかったでござるから、拙者は内緒で稽古場へいったでござる」

楓「そのときに稽古をしていた銀次殿・・・拙者はその姿に見惚れてしまったでござる!!」

楓「強くなろうつとしている銀次殿!!誰かを守ろうつとするために強くなろうつとしている銀次殿・・・気付けば拙者の心臓はもうバクバクと言つて言うつことを聞かずに気付いたら・・・」

四「惚れていたと……おいおい随分と熱いんじゃないかねえか？」

楓「まあそうでござる……で、聞いてたでござるか銀次殿!! 拙者の愛のはじまりを……」

銀「」（さっきの一撃で沈んだまま）

四「あ、やべ、さっきちょっと本気で殴りすぎたかもしれないな・
・てちよつと楓ちゃん？なんでクナイなんか構えてんのかな？さ
すがの俺もそれは刺さったら危な「問答無用でござる!!」「ぎゃあ
あ!!」

〳〳数十分後〳〳

銀「……はっ!？俺はいつたい……?」

楓「大丈夫でござるか？銀次殿」

銀「あ、ああ、大丈夫だ……てか、楓。なんで膝枕？」

楓「なんとなくでござるよ（気絶しているとはいえ、銀次殿の寝顔を見れたのは役得でござる）」

銀「？まあいいか……んで？そっちの」

四「」スプラッタ

銀「……スプラッタになっているのは四季崎か？」

四「・・・はっ！？ここは・・・？」

楓「大丈夫でござるか四季崎殿？」

四「ん？あ、ああ・・・なんだか知らねえけど、なんとか大丈夫だ（なんだろ？楓ちゃんを見ると寒気が・・・気のせいかな？）」

銀「・・・まあ、何があったかはいいとして。さっさと次ぎいくか」

楓「そつでござるな」

四「おう、早くしないと作者の指が彎つちまうからな」

銀「ああ、そつだな・・・え〜と、これは・・・パルパレーパさんからだ。どうやら四季崎宛てだな」

四「お？俺か・・・いいぜ掛かって来い！！」

銀「『四季崎と咲さんの出会いについて』」

四「」

楓「おお、それは是非とも利きたいでござる！！・・・主に今度の参考に」

銀「どんな参考だ？まあ俺も少し気になるな。どうしたら咲さんみたいな別嬪さんがお前みたいに変人奇人と一緒になるのか・・・ほらさっさと吐け」

四「チツ・・・まあしゃーねーな。答えてやるぜ。俺と咲の出会い

をな」

銀楓「「おおー」」

四「まあ、あれは俺が変体刀造ってる最中にちよつと散歩しようと思つてプラプラ不要湖の辺りを歩いていただけだ。そして、その辺に一人の若い女が居てな・・・それが咲だったんだ」

楓「おお、ロマンチックでござるなア」

銀「ふん・・・それで？」

四「チツ、浪漫のねえ奴は嫌われるぜ？・・・まあいい。それで少し気になつてな、当時の咲に話しかけたんだ。『こんなところで何してんだ？』ってな。そして咲はニツコリと笑つて『はい、ただ揺れる水面を見てるだけです』ってな。なだかおっとりした女だと思つたんだが、その場で適当に数回話をした後すぐに別れたんだ」

楓「ほうほう、それでそれで？」

四「慌てえるなつて・・・んで次の日も散歩をしてプラプラ歩いていたらよまた居てな。また『なんでまたこんな所にいるんだ？』って聞いたたら、またニツコリ笑つて『はい、また水面の揺れを見ておりました』・・・ってな、変な女つて思いながらまた次の日、また次の日・・・気付けば俺は毎日咲と一緒にそこで話すことが日課になつていたんだ。まあ、話すつても全然なくてほとんどただ不要湖の水面を見ていただけけどな・・・まあ、そのときには俺達は物は言わなくても何となく惹かれあつてたのは確かだ」

銀「んで？どうなつたんだ？」

四「まあ、その後もしばらくは似たような生活をしていてな・・・だがある日。俺が咲に会いに行こうとしたらそこには咲が居なくなてな・・・そしたら林のほうから女性と複数の男の声が聞こえてきてよ・・・俺はまさかと思ってその林に入ったんだ」

楓「・・・な、なにがあつたでござるか？」

銀「まあ・・・流れるに咲さんが賊に襲われている・・・ってところか？」

四「まあそんな流れだ・・・んで林の中に入っていったら案の定咲が賊に襲われそうになっていてな・・・俺は気付いていたら咲を救うためにその輪の中に飛び込んでいった・・・ま、俺様にとつては賊なんてどうってことなかったんだけどな・・・でもまあ、今に思えばあの賊共には多少の感謝はしているぜ？なにせ、俺は生まれて初めて女に惚れたって自覚がもてたんだからな」

楓「？今まではなかったでござるか？」

四「ああ、それどころか関わりたくないって思っていてなよく見捨てたさ・・・だがよ、咲にだけはそれができなかった。俺は賊を倒した後に咲をすぐに抱きしめた・・・咲は咲で俺に抱きしめられたのに驚いたのか、何度も俺のことを見て『・・・ああ、これが・・・人の温もりというものでしょうか？』って泣いたんだよ」

銀「人の温もり・・・？」

四「まあ俺もよくは知らないんだがよ。なんでも咲はかなり名門な家に生まれたいらしいんだがよ。その家は何かしらの力がないものは

必要としていない家だったらしくつてな・・・咲は力がないということと昔から愛情と言うものを与えられずに育ったらしい・・・んで、しばらくして咲は俺の家に住み着くようになってな。そのまま結婚して、桜花産んで・・・そしてしばらくは三人幸せに暮らしていたんだよ。そして人間は寿命がくれば死ぬからな、咲に桜花に先立たれてそれでも、俺は変体刀を造り続けた・・・んでようやく死んだと思ったら、今度はあの世で咲と桜花が待っていてな・・・んでそのまま幸せな生活を続けているんだ」

銀「・・・なんか、思った以上に重かったんだが・・・」

楓「・・・世界には色々と込み入ったこともあるでござるな」

四「ああ・・・やめだやめだ！！しみつたれた空気は性にあわねえ！！さっさと次行くぞ！！」

銀「お、おうそうだな。え〜と次は・・・また四季崎宛てだな」

四「ん？また俺かまあいい。どーんとこい！！」

銀「パルパレーパさんから・・・」日和号は咲さんをモデルにしたとありますが、実際に日和号を見た咲さんのコメントは？」

四「・・・ああ、あのときか・・・」

楓「し、四季崎殿？なんだか目が遠くを見ておるでござるが、大丈夫でござるか？」

四「ああ・・・あの時は大変だったんだぜ？あくまで咲を元につけて思っただけだよ、やっぱり似せ過ぎると返ってアレじゃ

ね？つて思つてなかなか変えたんだ・・・そしたら、なぜか咲がとてつもなくいい笑顔をしてな・・・大根で頭ぶん殴られた」

銀「まあ・・・確かに本人からしたらそうなるわな」

楓「拙者、見たことないのでなんともいえないでござるが、四季崎殿が悪いのはわかつたでござる」

四「ぐう・・・まあ言い返せねえ・・・それでその後もしばらくは無言で大根アタックが続いてな。その日の晩飯は折れた生大根だけだつたぜ・・・ありやちよつと苦かつた。あとなぜかしょっぱかつた」

銀「（しょっぱいのは十中八九涙だな）・・・まあ、それでも仲がよいのはあんたら夫婦だもんな」

楓「ううむ・・・喧嘩しても最終的には仲直り・・・これぞ真の夫婦でござるな・・・（拙者もいつかは銀次殿と・・・）」

銀「（・・・なんだろ？一瞬寒気が・・・）まあいい。んじゃ最後の質問だ」

楓「おお、やつと最後でござるか」

四「結構長かつたな」

銀「ああ・・・これも四季崎宛か。内容は・・・まあ締めをするには結構いい内容かもしれないな。パルパレーパさんからだ。行くぞ・・・『狂を始めとした何人かの変体刀が変体刀を作っています、そんな彼等について何か一言』」

四「ああ、そのことか・・・まあ色々と言いたいことはあるが・・・これは言っというてやる・・・悩め。物造りに当ってたくさんの壁に当るはずだ。もしその壁にぶつかつたら悩め。悩んで悩んで、悩みまくって、それから得た情報で俺を越える変体刀を造れ。もしそれでもダメなら誰かを頼れ。物を造るのなら機械にもできる。だが、お前らは心を・・・魂を持った変体刀だ。そのときは周りに居る仲間を頼れ・・・自分で、仲間と試行錯誤して最高の変体刀を作り上げる・・・以上だ」

銀「（あ、やべえいま一瞬コイツがカツコいいと、まあどうせ俺を越えることなんざ数京年過ぎても無駄だけどな!!」・・・やっぱこいつうぜえ・・・」

楓「まあまあ銀次殿・・・締めでござるから」

銀「・・・ああ、そうだな。まあ以上『第一回忍の剣士のキャラがあなたのキャラに答えます』のコーナーでした。多分機会があれば似たようなことをすると思うからそのつもりで」

楓「またの機会に会うでござるよ」

四「俺の番外ももしかしたらあるかもしれないぜ？じゃあな」

銀「以上『第一回忍の剣士のキャラがあなたのキャラに答えます』のコーナーでした」

四「……次はどんな風に登場するかな？」

銀「普通でいいわ!!」

第一回忍の剣士のキャラがあなたのキャラに答えます(後書き)

如何でしたか？今回は少し書き方を変えたのでいつもと少し違う気がすると思います・・・やっぱ三人称のが書きやすい。

それでは、また機会があればこのような質問を書きたいと思います。

それでは次回、本編にて！！

最後に質問を下さった紅蓮さん、パルパレーパさん、シハ猫さんありがとうございました。

第五十一話（前書き）

データが何度かぶっ飛んで若干つぶれかけた銀閣です。

どうも皆さん銀閣です。いや、今回は今までで一番酷かったです・・・
・だって執筆した小説を保存しようと思ったらデータが吹き飛び・・・
・ああ、三回ほど書きなおしましたね。多分メモリー量の問題だとは思う・・・外付け買おう。

さて、今回はアドル&刹那に重点を置いたお話です。それではどうぞー！！

まあ、刹那は元々捨て子なような物なので姉妹がいたとは思えない。またいたとしたらもつとシリアスな展開になるはずだ・・・が、ここでさらに混沌となる原因が現れる。

「なんや穹。まだ戦ってへんの？」

関西弁・・・特に刹那には聞きなれた声が聞こえたため、慌ててそちらを見ると

「お、お嬢様！？なぜここに」

「あ、お嬢！！！」

愕然。刹那のその視線の先に居た人物・・・それは彼女が常日頃から守るように言われている少女・・・近衛木乃香であった。だが、違うところがあるとすれば、その少女は黒い和服を着て、腰には白鞘の長ドス。そしてその手には紅い番傘が握られていた。そして何よりその雰囲気違っていた。木乃香ならもつとほんわかとした雰囲気放つのだが、目の前にいる少女からはそんなものは皆無。むしろ威圧感を感じるのだ。

穹と名乗った少女はそのいきなり現れた少女を「お嬢」と呼び、その場まで走っていき、その周りを走りまわっている。

「お初に。私奉刀・少女が「ニヤハハハッ！！！」や。たぶんあんさ「ニヨハハハッ！！！！」と思うんやけど「ニハハハッ！！！！」ちつと黙らんかい穹！！！」

「ひでぶっ！！！」

ドゴンツと手に持っていた番傘で穹と呼ばれる少女の顔面を思いつ

きり番傘でぶん殴った。穹と呼ばれる少女は行きよい顔に番傘を減り込ませながら横へとすっ飛んでいき、そのまま地面で何バウンドかしながら百メートルぐらい吹き飛んでいった・・・因みに見ていた刹那はなんとなく痛かったのは顔が似ていたからだろう。木乃香にの少女は番傘を肩にぽんぽんと当て、

「やれやれ・・・さてと改めてやけど。私は奉刀・少女が一本琴葉や。以後よろしゅう」

「あ、こりゃご丁寧に・・・って違うがな!!」

アドルはぺこりとお辞儀する琴葉につられてぺこりとお辞儀をするも、即座にツッコミを入れる。琴葉はなんや?とちよつと不機嫌な顔になり、

「なに?挨拶は基本ちゃうん?それすらもわからんのかいな教師の癖に」

「いや、そうなんだけだよ・・・でもなんで・・・」

アドルは驚いたように琴葉を見る。琴葉はああ、と呟き、

「なんや私達のこと聞いてへんの?・・・なら説明しよか」

そついい琴葉が説明を始めた。

以前の肅清戦の際、銀次が学園側に賠償請求したときに狂がついでと言つことで『3-Aの人間のDNAが欲しい』といい、3-A全

員の血液を少しずつ拝領したことを皆さんは覚えているだろうか？
その際に集められたDNAを下に、狂がオリジナル本来の数倍の身体能力を持ついわばクローンを作ったのだ。

「まあようは狂はんが自分の身を守るのと実験の助手のために作られたんやけど・・・今はもっぱら鈴蘭様の下で働いているんや。誰にDNAを参考にしているんはまあ見ての通りや」

「でありますよー！！」

そう説明する琴葉の周りを飛び跳ねながら穹も同意する。琴葉ははあため息を吐きながら穹をそのまま放置・・・刹那が若干羨ましそうに見ているのは気のせいということ片付けておこう。

「なるほどな・・・でもその二人はなんでここにいるんだ？」

アドルはなんとなく納得したという顔つきで頷く。そしてその二人がなぜいまここにいるのかと気になり、聞いてみることにした。琴葉が番傘をポンポンと肩で叩きながら答える。

「いやな、私らいま暇なんよ。顔がこれやさかい滅多に外にでれへん。やから暇つぶしに稽古でもしよかと話しになつてなア・・・そしたらちよつと稽古をしようとしている二人組みがおつて・・・」

「ようは手合わせをしたい・・・ってわけか？」

そつや、と頷く琴葉。アドルはうむ・・・と顎をなでながらしばらく考え、

「・・・まあ、いいかもしれないな。折角だから相手してもらえ剎

那

「え！？わ、私ですか!？」

刹那は驚いたようにアドルに聞く。アドルはアドルでああ、と答え

「たまには俺以外の相手と手合わせするのもいい勉強になると思うぜ?・・・それに、もしかしたらお前の探している答えが見つかるかもしれないねえしな」

アドルに言われ、刹那はハツとした顔になる。確かにアドルの言葉にも一理ある・・・刹那はコクリと頷き、琴葉と穹に目を運び、

「よろしくお願いします!!」

「ああ、任しとき」

刹那の言葉に琴葉は了承。その周りを飛び跳ねていた穹も、

「任せるでありマツスルパワー!!!ニヤハハハッ!!!!」

ビシッ!!

穹がギャグを言い放った瞬間・・・周りの空気が液体窒素でもぶつけたかのように固まる。

「「「「「「「」」」」」」」

「アハハハ・・・アハハ?あれ?もしかして・・・外しちゃったで
ありますか?」

「穹……今のはさすがにつまらんかった」

「ガビーンッ！！穹ちゃん大ショック！！」

口でガビーンッといいながら穹はシェーのポーズを取る。傍目で見ればショックを受けずただふざけてるように見えるのだろうが、どうやらこれは本当にショックを受けているようだ。

「……」

「あの……なんでしょう？アドル先生」

「いやなんでも……（これが本当に刹那を元に作られた変体刀なのか……？）」

横にいる刹那。シェーのポーズを取る穹。その二人を見比べながら、アドルはそんなことを思った。

~~~~しばらくして~~~~

「穹ちゃん復・活！！でありますよー！！」

ふう〜と先ほどとあまり変わらないテンションながらもどつやらまたまや元気になったらしい……落ち込んでいるときの基準がよくわからないが。

そしてその穹の前には刹那が立っていた。つまり今回の手合わせは

この二人が行うということになる。

「ほな、私は審判をするさかい。気張りや」

「アイサーお嬢！！全身全霊粉骨砕身戦うであります！！」

「は、はいわかりましたお嬢さ「ああ？」琴葉さん・・・」

ピシツと穹が琴葉に敬礼する。刹那は姿勢好とその声で思わずお嬢様といいそうになるが、琴葉のドスの聞いた声と視線で萎縮してしまった。

「まったく・・・まあ、ええわ。勝負内容は至って簡単や。どちらかが負けを認めるか、相手を戦闘不能にする。武器はなんでもええ。まあ死ぬような怪我おつてもウチが直すさかい、気にせんでもええ」

「（いや、それってだいぶ気にするのですが・・・）」

心の中でツツコミを入れる刹那。でも確かに琴葉から感じる魔力はオリジナルである木乃香をはるかに凌駕している。また本人も治癒魔法が使えるということなので、確かに死なない限りは大丈夫だろう。

「それじゃあーーーーー始めや」

さっと琴葉が手を上げ、試合が開始される。

「突進突撃突貫！！いくでありますよ～～！！」

バヒュンツ！！とものすごい勢いで穹が右手に持った一振りの刀で

刹那へと袈裟に斬りかかる。

「ハアアアアッ！！！！！」

刹那は正面から迫る穹の袈裟斬りを刀で捌き、穹の体を崩し返す刀で穹へ唐竹割りに斬りかかる。

「なんの！！！」

だが穹はその斬撃を体を崩した勢いで前へと踏み込みやり過ごす。そして右ひざを曲げ、左足を伸ばし回転を加えた状態で刹那の後ろ足首。つまりアキレス腱目掛けて地面すれすれから斬撃を加える。

「ふっ！！！」

だが、そこは勿論刹那。バク転の要領でクルリと宙へ舞う。穹の刀は刹那の足を斬らず空振りする。その勢いを殺さず刹那は刀を振り上げ、

「神鳴流奥義——斬岩剣！！！」

神鳴流の奥義の一つ『斬岩剣』を放つ。岩をも断ち斬る斬撃を放つ。だが、穹はそれすらも避ける。

「ニヤハハハッ！！！！さすがは私のオリジナル！！やるでありますな！！！」

「一応ありがとうと言っておこう！！！」

穹は立ち上がり、刹那へと切りかかる。刹那もそれを正面から受け



とめる。そして激しい斬り合い。袈裟に斬れば流して唐竹。それを身を翻してよければ切り上げ、それを避ければ横薙ぎ・・・斬れば捌き、捌けば斬る。二人はそのような激しい攻防が続いている。そしてその攻防の中、穹は二カ二カと笑みを浮かべる。

「いや、刹那さんも中々やるであります・・・が、少し残念でありますね」

「何、がだ!!」

ギンギンギンッ!!と激しい金属の接触音と火花を散らしながら二人は攻防を続ける中でも会話をしている・・・が、二つだけ違う点があった。まず一つは

「何って・・・それは刹那さんが少しばかり人を斬るのに躊躇しているところでありますよ」。確かに一般人なら十分斬れる斬撃ではあるであります、達人級には目くそ鼻くそレベルであります」

「っ」

穹の言葉に刹那は穹の言葉に軽く身を震わす。そう、刹那は『自身自身の正義』とは何かと考えるので『はたして人を斬るのは正義なのか？斬らないのも正義ではないのか？』という葛藤に襲われ太刀筋に力が入らないのだ。だが、対する穹は完全に斬ることしか考えておらず、刀を振るっている。それが違う点の一つ・・・そして、もう一つの点。これは正直見てしまえばわかる問題だった。

「まあそんなのはアレであります。この私とその躊躇いを――取っ払ってしまうでありますよ!!」

ギギンツ!!と穹は『片手』で刹那の夕凧を押し返す。

「なっ!?!」

夕凧を『両手』で持っていた刹那はそれに驚き押し返される。そう、これが二人の違う二つ目の点・・・それは穹は『片手』で刀を振るっていたのだ。

本来刀とは両手で持ち振るうことを考えられている。そのほうが力が出るからだ。片手で扱う技術も勿論ある・・・がそれは抜刀術や馬上からの斬撃がほとんどで、本来はそこまでポピュラーな技ではない。理由としてはやはり体制が崩れるというのが多い。しかし、穹は体を崩しているような点は見当たらない。それどころか余裕で刹那と片手で渡り合っていた・・・しかし、思い出して欲しい。穹が装備している武器は刀一振りではなく『七本』だということ。穹は即座に左手を右腰に持っていき、

「胸がから空きでありますよ!!」

シャツと刀を抜いた。左片手による横なぎの抜刀斬り。刹那の胴体を大根を斬るかのように迫り斬られ、

「うっ!?!」

なかった。すんでのところで後ろに跳び斬撃を避けたのだ。だが、穹の猛攻はとまるわけもなく。

「はいはいはい~~~~~!!!!!!!!」

少し気の抜けたカンフー漫画のキャラが使うような息遣いを使いながら、穹は斬撃を放つ。しかし、その気の抜けた声には似ても似つかない斬撃が刹那を襲う。

「くっ！！（は、早い！！まさか大刀二本でこの速さを出せるとは・・・！！）」

刹那は目の前に居る穹に改めて戦慄する。本来刹那が使用する野太刀は敵を一刀の元に切り伏せることを得意としている重量兵器。対する穹の手に持っているのは打刀と呼ばれる刃渡り60センチ程度の刀。本来長めの武器を持っている刹那のほうが有利に見えるが、人を斬ることを躊躇っている今の刹那ではたとえ気で強化した肉体と神鳴流の技を持ってしても野太刀を最大限に利用できないだろう。

「ほれほれ！！本気を出さないと真つ二つでありますよー！！」

「ちょ、それは死ぬのでは！？」

「大丈夫であります！！お嬢が治してくれますから！！」

そういう問題ではないとは思っただが・・・まあ、いいだろう。刹那はその猛攻を受け後退する。そんな刹那を見て穹はある業を出すことにする。

「むふふふ・・・いくであります！！」

穹はそう叫ぶと刹那へと袈裟に斬りかかる。だが勿論刹那はそれを避ける。すると穹はそのまま不思議な行動にでた。

「あらよつと・・・」

右手の刀をそのままに、穹は右手を地面にあてそのまま刹那のほうに回転するように転がった。もちろん刹那はそれを不思議に思うが・・・すぐにその奇怪な行動の理由がわかる。

だが、刹那はそれに気付かずそのまま攻撃しようとしたとき、

「隙あり!!」

「なっ!?!」

刹那の上から、膝裏に挟まれた刀が振り下ろされた。あまりにも奇抜な斬撃・・・少なくとも刹那が今まで戦ってきた相手にはこのような刀での攻撃をする人間はいなかった。

「フハハハハッ!!!これぞ!!奉刀・少女が一振り穹ちゃんの作り上げた新剣術――混成剣術であります!!」

混成剣術。見て字の通り様々なものを混成させて作った空オリジナルの剣術である。カポエイラを中心に他の格闘技を混入させて作ったのがこの剣術だ。蹴り技や突き技に斬撃を混入して奇想天外の技を繰り出すことができるのだ。だが、これはある意味作られた変体刀である穹だからこそできる剣術だろう。

「まだまだいくでありますよ!!」

そついい穹の猛攻がさらに激しさを増す。袈裟で斬りかかったと思えば即座に前蹴りを放ち、蹴り技を足に攻撃したかと思えば刀が冗談へと横なぎに襲い掛かり、鍔迫り合いのような間合いに入れば体を崩させて肘や拳を放つ・・・あまりにもトリッキー。あまりにも

斬新。おそらく初戦で戦って受けきれぬ人間はそうはいないだろう。いたとしたらそれは同じ変体刀か武の達人くらいだ。

「くっ！！」

刹那はなんとか受けきっているが、所々で刃が服を掠め皮膚を裂く。だが、防戦一方なため中々反撃に移れない。

そんな刹那を見て、穹は

「ふははは！！そんな腕で私に勝とうなど百年早いであります！！  
・まあ生まれて一年ちよいの私が言うのを可笑しいでありますか  
！！！」

一人でポケットを覗く穹にツッコんでやりたいのだが、それすらできない刹那。だが、穹はそれすらお構い無しで攻撃を続ける。

「第一、そのような腕で誰かを守ろうな度と愚の骨頂であります！！」

「なっ・・・なんだと!?!」

穹の言葉に刹那がカチンときたのか、少し攻勢に移る。だが、それでも穹には中々当らない。穹は刹那の攻撃を物ともしないで話し続ける。

「な、なんだと!?!ではないでありますよ」

ガギンツと打ち合った後、二人は距離をとる。刹那は刀を構えながらも肩で息をしており、対する穹は疲れている様子は少しも伺えられない。両手に持った刀をプランと下げたまま刹那と話をしていた。

「誰かを守る、と言うことは他の誰かを傷つけることであります。傷つけるの勿論敵・・・まあザックリ言ってしまうえば斬り殺すことでもあります。で・も・！・！であります！あなたにはその覚悟が見受けられないであります！そんなのでは大切な者など守れないでありますよ？」

穹のその言葉を聞き、刹那はハッと昔の記憶が蘇る。

『ええか刹那。刀は人斬り包丁や。そして剣術とはその刀を自分の身体の一部にするための技術。つまりは殺人術っちゅうことになる。でもよう覚えとき、ただ刀を振るうのはただの暴力に過ぎん。やけどな、誰かを守る為に振るう剣は暴力やなんか無い。大切な者の命を救うために、何が何でも戦って刀を振るう。たとえ周りがなんと言おうと、人殺し言おうと刀を振るう。どんな手を使っても守り通す・・・やからな刹那。剣術でもっとも必要なのは技術や才能やない必要なのは――』

「どんな言葉にも惑わされず、相手を殺してでも守りたい者を絶対に守り抜こうとする・・・心」

その昔、自分に剣を教えてくれた師が教えてくれた教え・・・それは随分前に銀次が言っていたのと似たような言葉だ。その言葉を聞き、刹那は昔に教えられた教えを忘れていたことに若干苦笑するも思い出したことにほっと息をつく。

「（そつえば師匠が惚れたとか言う人は蒼髪で剣術の達人の当時若い男性とかいっていたが・・・まさかな）」

刹那は過去の師匠との会話で出てきた人物がなにやら知っている人

物に思えてきたのだが・・・まあ、後々聞いてみようということにしといた・・・それよりも今は

「おうおうおう？何やら先ほどとはまた違う目をしてますなあ？・・・俗にいう覚悟完了と言うものでありますか？」

若干チンピラ風味な喋り方をする穹に苦笑いを浮かべながら、刹那はああと答える。

「正直、人を斬るのにはまだ躊躇いはある。・・・だが」

キツと今までのような迷いのある顔ではなく、

「たとえ人が斬れなくとも今の私の・・・全力を持って戦う！！」

バサツと刹那の背中で純白の羽が広がる。

それは、刹那が人間と鳥族のハーフとして生まれ、色が違うと言われ迫害され刹那自身も忌み嫌っていた・・・純白の翼。

「まさかこれを自分から出すとはな・・・」

刹那はそんなことを思いながら、チラリと翼を見る。そこにはどこまでも純白な翼が広がっているだけだ。こうして改めてみると、綺麗なものだなと自画自賛・・・は口にださないで置こう。穹は刹那がそんなことを考えているとは露知らず、

「ムハー！羽を出すとはまさかそこまで覚悟を決めるとは！！正直予想外でありますよ〜」

なにやらテンションがボルケーノを通り越したような穹はくるくると回りだし、

「なら私も出すでありますよ！！」

バサツと、穹の背中にも刹那と同じ純白の翼が生えた。刹那は最初こそ驚いたが、すぐに穹が自分のDNAを下にしているということ思い出しまあ当たり前か、と思いそこまで驚かなかった。

「おや？そこまで反応がよろしくありませんな。もっとこう、ブギヤあ！！みたいな反応を期待していたのでありますが・・・」

「なんだそれは？」

刹那は変なポーズと生き物の声真似をしながら言う穹に苦笑いを浮かべる。だが、それも一瞬すぐに顔を引き締める。穹もキリツと顔を引き締め、

「それでは・・・」

「・・・いくでありますよ！！」

バサツと二人は羽ばたき空へと飛ぶ。

「ぶつっ！！」

「はあ！！」



ガギンガギン!!と空へと上りつつ互いの剣を交える。立体的な戦闘を、まるで戦闘機の巴戦をしているようだ。しばらく切り結び離れるというのを繰り返す。すると穹と切り結んだあと刹那が、

「神鳴流——斬空閃!!」

斬空閃を放つ。この技は相手に刃化させた気を飛ばすいわば飛び道具だ。斬空閃の刃が穹へと迫るも、

「なんの!!」

穹はそれをすべて刀で打ち消す。ぶっちゃけた話、これをほかの神鳴流剣士が見たら普通ではありえないと思いきや驚愕するだろう・・・が、今の刹那はそんなのは常識の範疇と考えてるため当たり前かと納得する。すると穹が加速して、

「とっつけぎ~~~~!!」

弾丸のように螺旋しながら刹那のほうへと斬りかかって行った。

「ふっ!!」

それに対して刹那は迎え撃つように正面から突っ込む。そして、すれ違うさいに互いの刀と刀・・・刹那は野太刀の一振りを、穹は二振りの刀をぶつけ合う。

ギヤリギヤリッ!!

いやな金属音と共に互いの刀が悲鳴を上げる。そして、しばらくそのようなことを何度も行う……。

「いくでありますよ……刹那!!」

「ああ来い、穹!!」

二人はまたぶつかり合う。

少し、ほんの少しではあるが刹那は自分の正義を探すべき一歩を踏み出すことができたであろう。

「そいで？地面に置いてけぼりされた私はどないせつちゅうねん。

あのバカ二人は……」

空中で戦う二人を見ながら、地上でそのようなことを呟く琴葉……正直、その顔は非常に『素敵な』笑みを浮かべており正直よほどのようがない限りは声をかけたくない。

……はたして、空を飛んでいる二人はこの後に起きるであろう

惨事に気づかず戦っているが・・・大丈夫だろうか？

〳〳そこから離れた場所〳〳

「・・・どうやら、刹那は少しばかり吹っ切れたようだな」

空を翔る二人の少女・・・そのうちの一人である刹那をチラリと見ながらアドルはそう呟いた。

「ほう、余所見とは余裕ではないかアドル殿」

「ってうお!？」

ヒュンツ!!とすばやい音をさせながら迫る刃にアドルは手に持った両刃剣で受け止める。そのままギリギリと鏝迫り合いを行う。

「〳〳〳もちつと手加減してくれてもいいんじゃないか!？天魔さんよ!?!」

「断る。わが主からお主を鍛えろといわれた際に『死なない程度に手加減してやれ』といわれている」

天魔という男はアドルの言葉に淡々と答える。一見相手を挑発して

いるような言葉だが、この男に関してはそれもしようがないだろう。

完結系変体刀・天魔<sup>てんま</sup>

『因果律を断ち切る』ことに主眼を置いた人型変体刀で、すべての独立型変体刀の管理者。銀髪緑眼で額右から眉間を通り左下顎に傷があり、口元だけを露出した仮面を被っている。メタルブラックのジャケットと耐刃ベストを纏い日の光により黒く光っている漆黒の衣服を身に着けている。

また通称『五十補百補<sup>ごじゅっほひゃくほ</sup>』の五十補中の十補にてその末席に位置する実力ある変体刀でもあるのだ。銀次を主と慕い、銀次の不利益になるとわかればどのような存在でも斬り殺す冷酷な一面もある。

さて、そんな天魔。なぜアドルと戦っているのかといえば、まあもちろんアドルの鍛錬でもある。刹那を鍛錬に誘ったのはいいものの、穹と琴葉に取られてしまったアドルは誰か居ないか探していたところ、

『アドル殿。わが主銀次殿よりお主の鍛錬相手を頼まれた・・・行くぞ』

いきなり現れた天魔はそう言い放ちアドルへと切りかかり・・・現在に至る。

「(ぐう……!! まあ天魔さんが本気で斬りに来たら俺なんか勝てねえからな……)」

鏢迫り合いをしながら目の前に居る天魔を睨む。だが、闘争心が燃え滾っているアドルに比べ天魔はまるで別のもっと遠いところを見るような目でアドルと対峙していた。

「うむ、闘争心旺盛なのはいいが……一つの敵にやたらと個固執するのは頂けんな」

そういふなり、アドルは背中にいやな気配を感じ、

「魔法の射手・連弾・光の三矢!!」

即座に背後に魔法の射手を放った。すると、

『むづー!!』

ちょうど目の前で鏢迫り合いをしている男とまったく同じ声でそれをすべて弾いた。

「ちよ、分身はなしだろ!？」

「安心しろ。今のは背後がから空きだったからしたに過ぎん。それに殺るなら分身を出さずともこのまま押し斬ればどうにでもなる」

冷や汗を流すアドルに天魔はしらっと答える。確かに天魔ならこの状態から押し斬りアドルを真っ二つにできるだろう。だが、それをしていないのはやはり加減をしているからだろつ。

「それではこれはどうかな？・・・ふんっ！！」

ヒュンヒュンヒュンッ！！

天魔は凄まじい速さで剣を振るう。ぱつと見では一振りしかふるっていないように見えるが、その実天魔は三度振るっている。

「く、おおおおおっ！！！！！！」

アドルはその三撃をなんとか目に捉え、

ギンギンギンッ！！

なんとか、受けきる。そして、アドルは返すように両刃剣を振るう。ヒュオン、と音を立てる両刃の剣・・・だが、天魔はそれをなんなく受け止める。だが、もちろんこれでアドルの攻撃は終わりではない。

「（いまだ！！）魔法の射手・連弾・光の十矢！！」

左片手を天魔へと向け、アドルは魔法の射手を放つ。アドルの手が輝いたかと思うとすぐさまその光が天魔へと襲い掛かる・・・

「甘い！！」

だがすぐに天魔はそれを宙で身を翻し避ける。矢が襲い掛かる中を

バック転や宙返りを繰り返して避ける天魔。そして最後の矢を避けきったと思うと

「貰ったああッ！！！！！！！！」

「ほう……！！」

すぐさまにアドルが追いつがる。魔力で脚力を最大限まで上げて斬りにきた。天魔はそれに感嘆の声をあげ驚く。もしほかの魔法剣士なら追ってはこず仕留めたと満足しているところだったのだろうが、アドルは魔法ごときでこの天魔を倒せるとは思っておらず、すぐに追いつき斬りにきたのだ。

「なかなかやるな……が！！」

天魔がグンと体を捻らせ、

「まだまだだ！！」

上から袈裟斬りに斬る。しかも全体重を乗せた斬撃……まともに受け止めても斬られてしまう。正攻法なら後ろに下がり避けるのだろうか、

「うおおおッ！！！！！！！！」

「！？」

アドルはそのまま正面へと突っ込んでいった。自らの体を白刃の元へと晒しに出たのだ。本来ならあまりにも無謀なことにも見えるが、一撃必殺の剣術の世界では案外、多少の傷覚悟でこの方法が一番斬

られずに相手を斬る事ができるのだ。

「くっ!!」

天魔はなんとかその攻撃をやり過ぎす。そして、

スパッ

斬った。と言っても着ている服・・・だが防刃使用の特注品だ。それをアドルは斬ったのだ。天魔はそれを見て感嘆の声を上げると共に・・・

「・・・フフ」

笑みをこぼした。服とはいえ、天魔は人間に服を斬られたことは早々ない。銀次や四季崎に幾度か斬られたことは幾度かあったが・・・ゆえに天魔は笑みをこぼす。

「くっ・・・いいなあアドル。貴殿とは少し・・・本気でやってみたくなった」

「おいおい・・・頼むから勘弁してくれ。あんたの相手をしていて助かるような気がしないぜ」

急に本気を出したいといった天魔に苦笑いをしながらも、手に持った剣を握りこむ――天魔の仮面の下から見える目が案外本気だったからだ。



「まあそういうな・・・正直主である銀次殿を裏切るような形になるが・・・これは変体刀・天魔としてではなく一人の剣士・天魔として試合たいのだ・・・いいであろう?」

天魔のその言葉を聞き、アドルはきよとんとした顔になるが・・・すぐにクスリと笑い、

「そう言われちゃあ・・・受けるしかないよな」

アドルもスチャツと剣を構える。

「・・・」

「・・・」

沈黙・・・ほんの数秒ではあるだろうが、二人にはかなり長い時間を感じただろう・・・そして、

「いくぞ!!」

互いに斬り結ぶ。はたして、結果はどうなるか・・・?

アドルはさらなる己の鍛錬に励み、刹那は鍛錬と共に己の正義を見

つめ直そうと新たな決意のもと戦いを続ける・・・果たしてそれが  
どのような結果になるか・・・それは今では誰にもわからない。

## 第五十一話（後書き）

如何でした？本来なら銀次の修行も終わらそうかと思っただのですが、データが吹き飛んだり区切りがよかつたりで今回はここまでです。

次回こそは銀次の修行に入る・・・！！

というわけで次回予告！！

アドルと刹那が修行する中・・・銀次も修行を続けていた。

「・・・どうしました銀次殿。私に触れてもいないのにそのなりでは到底勝てませんよ？」

四季との修行

「オラオラオラ！！ぶっ殺しちまうぞ！！」

鎬との修行・・・その二つの修行を果たして銀次は無事に乗り越えることはできるのだろうか！？

「無傷は無理だ！！」

次回ご期待！！

最後にオリジナル変体刀の案を考えて下さったルファイトさん、パ  
ルパレーパさん、ありがとうございました！！

## 第五十二話（前書き）

この季節になると手がよく荒れる銀閣です。

皆さんどうも銀閣です。いやはや、先週は投稿出来なくて申し訳ありませんでした。期末テストがあるのをすっかり忘れてしまいその勉強に追われ投稿できませんでした。え？結果？・・・聞かないで。

さて、今回はようやく修行編完結です。最後を締めくくるのは我らが主人公銀次です！！

よし見てやろう！！という人は

どうぞー！！

## 第五十二話

瀬流彦は自分の師である愚地独歩の元へ、アドルと刹那が隔刀内で稽古に励んでいる中・・・銀次は地下鍛練場で鍛錬を行っていた。

〓地下鍛練場〓

「・・・」

「・・・」

「・・・あふ」

静まる空間・・・本来ならかなり騒がしいはずの鍛練場も、なぜかこの三人の周りだけかなり静かだった。

「・・・準備はよろしいですか？銀次殿」

「ああ、いつでもいけるぜ」

四季の呼び掛けに、銀次は答える。今回、この三人のとる稽古方法はいたって単純・・・一人ずつ戦うということだ。最初は両方纏めてという意見が鎬からでたが、

『んなもんすぐに終わるのが目に見えてるわ!!』

という銀次の意見と、

『お前と共闘などこちらからお断りだ』

という四季の言葉により渋々と断念・・・その後は一対一で戦うことにして鎬と四季がじゃんけんして勝負の順番を決めたのだ。そして一番目に戦うことになったのが・・・四季である。鎬は後と言いつつとで今は石の上で待機している。

「それでは・・・始めましょう」

「ああ、いくぞ」

「んじゃ、始めえ〜」

鎬の試合開始の合図がだされると同時に、

「（先手必勝！！）」

先に銀次が仕掛けに動いた。腰の斬刀に手を掛け、一気に踏み込みながら斬りにいこうとした・・・だが、

「・・・」

四季の目を見て・・・動きが止まった。

「!?!」

同時に、ぞわりと脳裏に映像が広がる。

四季の指が目を抉る映像が広がり、

四季の貫手が喉を抉る映像が浮かび、

四季の手刀が首を跳ね飛ばす映像が浮かび、

四季の足刀が身体を貫く映像が浮かび、

四季の踵落としが脳天から股まで切り裂く映像が浮かんだ。

「……！！！」

それだけで、銀次の動きが止まってしまった。銀次は先ほどの場所から一步も動けずにピタリと動きを止めてしまった。

『かくていじゆう 未来死』……敵対した相手に自分のこれから受けるだろう死を見せる四季の技の一つ……いくら数多くの修羅場を乗り越え、死線を潜ってきた銀次でも、いまだに克服できない技の一つだ。

「……どうしました？主自ら自分を鍛えてほしいと頼んできたというのに、死など恐れずに掛つて来ない」と

動きが止まった銀次を見て、四季がそう促す。確かに自分で頼んどいて動きをとめるというのは失礼……というものだとは思うが動けないモンは動けない。むしろ以前は未来死を見せられただけで足から崩れ落ちていたのだから倒れないだけでも大きな進歩だ……。だが、銀次はさらにその一步先へと踏み出さなければならぬ。大切な者を守る為、自分自身を守る為……。銀次はとまってなどいられない。

「……ウ、オオオオオオオオオッ！！！！！」



瞬間、銀次の体が前へと突き進む。そして、目の前にいる四季を倒す為はどうしたらいいかという考えが浮かび上がり、

「（まずは動きを止める！！）青刀・凍せいとう いてつき！！」

まずは動きを封じる。そう考えた銀次は脳裏に浮かぶ変体刀の中の一つを即座に選択した。

青刀・凍せいとう いてつき 『極寒』に主眼を置いた変体刀で、持ち手と刀身の間が金という以外は全て青に染まっていて形は七支刀で持ち手の下に青い宝玉が付いている刀だ。二刀で常に冷気を放出している鉱石で作られ、軽く刀身に触れるだけでたちまち凍り付いてしまう変体刀だ。

「フツ！！」

銀次はこの二振りの変体刀を四季の足に投げつける。二振りの刀はそのまま吸い込まれるように四季の足元へと突き刺さり、

「むっ？」

四季の足を氷りつかせる。ピキピキと四季の足首から下を氷が覆い尽くす。その間にさらに銀次が素早く近づく。そして、

「虚刀流・薔薇！！」

やや離れた場所から虚刀流の技が一つ薔薇を放つ。薔薇は四季のちよつど眉間に決まり、四季の首からゴキリという嫌な音をさせながら変な方向へと首を曲げる。だが、銀次の攻撃は止まらない。

「虚刀流最終奥義・七花八烈・改！！」

虚刀流七代目当主・鑢七花が編み出した最終奥義『七花八烈・改』。  
柳緑花紅、鏡花水月、飛花落葉、落花狼藉、百花繚乱、錦上添花、  
花鳥風月の七つの奥義を同時に叩き込む奥義だ。銀次は文字通り手  
加減抜きで四季の身体へと叩き込む。

四季の足元の氷が砕け、宙へと舞う。だが、まだ終わらない。銀次  
は腰の斬刀に手を伸ばし、

「零閃――十機――！」

シャリンシャリンシャリンシャリンシャリンシャリンシャリンシャ  
リンシャリンシャリン――！！

十回、周りに鐸鳴音が響く。音の出所は銀次の腰に差してある斬刀  
からだ。零閃は抜いてから鞘に収めるまでの動きをまったく相手に  
悟られることもなく斬ることができる技の一つだ。

ブシャツ！

四季の身体から血が噴出す。だが、ここで動きを止めない。刀身に  
ついた血を拭かずにそのまま鞘に収める。本来ならこのようなこと  
をすれば鞘が血で腐ってしまうのだが・・・この斬刀ではこの血が  
刀の抜き出しを滑らかにするいわゆる潤滑油代わりとなる。

「最後だ――！斬刀・鈍限定奥義――！斬刀狩り――！零閃編隊――  
百機――！」

血を潤滑油とし滑り出しをよくした刀身が、光の速さを超えて四季  
へと襲い掛かる。

ズシャシャシャシャシャツ!!!!!!

まさに刹那。一瞬四季の身体がぶれたかと思えばすぐに身体がバラバラになり、ただの赤い霧に代わってしまった。

「・・・」

チンツ!!と最後に鞘に刀を納める音をさせ、残心。文字通り跡形もなく消された四季。本来なら殺してしまった・・・と考えるのだが、

「いやはや・・・腕を上げましたなあ主」

「!?!?」

銀次の背後。急に発せられた言葉に銀次は驚き、そこから飛びのく。そして少し離れたところに着地したのち、さきほど自分が立っていたところを見ると・・・

「ほぼ迷いのない太刀筋・・・うむ、とても腕を上げましたね」

そこに居たのは、先ほど間違いなく霧に変えてはずの四季がたっていた。

「・・・相変わらずチート臭いなおい・・・」

薔薇、七花八烈、零閃編隊・・・少なくとも通常の人間なら108回は死んでるはずの四季・・・だが、その死んでいるはずの四季は今

ここに平然と立っていた。

『オールフイクション  
大嘘憑き』 知る人ぞ知るかの過負荷・マイナス・これを四季は使ったのだ。四季は様々な世界の技を習得しておりこの大嘘つきもその一つである。

つまり先ほど四季は自らに『死んだことをなかったこと』と嘘をつき、先ほどの攻撃を流していたのだ。まだ銀次が未来死で膝をついていた頃に話を聞いたが、あまりの非常識さに空笑いしかでなかったとか・・・今では苦笑いで済むのでまあ色々成長したのだろう。四季はコキコキと首を鳴らしながら銀次へと死線を向け、

「しかし本当に腕を・・・さては主、さらに守りたい人が増えましたな？」

「・・・ああ、そうだな。確かに守りたい人間は増えたな」

四季の言葉に銀次は脳裏に浮かぶ守りたい者達・・・楓を初めとする者たちの顔が浮かぶ。なにがなんでも守りたい・・・いや、守る者達・・・その顔が浮かぶ中、四季はその銀次の顔を見てクスリと笑い、

「それは良い事です。これからもっと強くなることでしょう。ならばその強くなるために、私も一つ手ほどきをさせていただきますましう」

「・・・それは遠慮したいな」

四季が本気で掛かれば、銀次などまったく反応できずに吹き飛ばさ

れるだろう。だが、もちろん四季にはそんなのは関係ないので、

「駄目です」

一言で一蹴された。

「やっぱり?」

「ええ、では……いきますよ」

ビュゴッ!!

その言葉を聞いた瞬間、銀次の身体全体が警告音を出したようにざわめき、銀次は考えるまもなく横へと避ける。すると、銀次が先ほどまで立っていた顔の部分に四季の拳が突き抜けていた。

「(ああ、あぶねえ!! あんなもん食らったら顔面吹き飛んで「まだまだですよ」「ごっ!?!」」

瞬間。銀次の脇腹に衝撃が走る。最初は何事かと思ったが、すぐに四季の廻し蹴りだと気付き、納得した。

「(ああ、やっぱり……こいつには勝てねえなア……)」

吹き飛ばされ薄れゆく意識の中、銀次はそんなことを思い……意識を飛ばした。

「……（驚いた。まさかあの初手を避けられるとは……）」

蹴った片足を戻した後、四季は心の中でそのようなことを呟いた。

「（今まで私の未来死を耐えたのは魔法世界も含め1002783551人。耐えられたのは10278人、初手を耐えられたのは1312人、弐手目を耐えられたのは655人……少なくとも主殿は両世界の猛者1000人に入れる實力をお持ちです。もつと精進なさればその小さき両手で、救える限りの、救いたいと望む全ての命を救える事でしょう）」

驚くべき数字を述べながら、四季はこれから先さらに成長するであろう目の前の現主を見る。まだまだ弱いが、いずれは必ず成長するであろう主を……

「おいおい、ちょっとやり過ぎじゃねえか？死んでねえだろうな？」

そついつつ、長い黒髪をバリバリ掻きながらシユタツと四季の横に降り立ったのは先ほどまで岩の上で順番を待っていた鎬だった。四季は鎬をジロリと見ながら答える。

「ふん、……どこかの誰かさんとは違ってな、私はちゃんと手加減ができるのでな。後で『大嘘つ憑き』で直せばなんとかなる」

「ああ？……あああるときか。まああの時は銀次が死に掛けたからなアハハハ今ではいい思いでだぜ」

ハハハと悪気もなく笑いながら鎬は過去のことを思い出す。あの時というのは鎬は異世界をプラプラと歩き回っていたのだが、ある日

変体刀達が銀次に呼び出されたのを知り、興味を示した鎬が銀次達が鍛錬中にいきなり鍛錬場に現れドッキリを行い、そしてそのまま銀次と試合・・・結果として銀次は一撃で負けてしまい、しかも瀕死の重傷を負ってしまった。

翌日、銀次は鎬と平然と会話をしたのだが、今までそのような反応をされたことがない鎬はそんな銀次に興味を示し、主として認めるといったのだが銀次としては主従関係より同等の仲間のほうがいいとして、今現在は同等の仲間にいる・・・なおその際に鎬が家をさらに破壊したのはお約束である。

「笑い事ではないぞまったく・・・。さて悪いが主のことを頼むぞ」

「ああ？なんだよどっか行くのかよ？」

『大嘘憑き』で銀次の破裂し掛けた内臓を直した四季はそのまま銀次を鎬に渡してスタスタとどこかに行こうとしたのを見て、鎬が呼び止める。四季はとまるも、振り向かず答える。

「・・・少々やりたりないのでな。魔法世界にいる『千の刃のラカ』というものと戦ってみようと思っただけ」

「ふん・・・あ、お土産古龍でいいぜ？あいつらの肉美味いからよ」

「誰が持つてる来るか」

鎬の願いを断り、四季は突然姿を消し、その場から去る。残された鎬はやれやれと頭を掻きながら寝ている銀次を見る。

「さて・・・コイツどうすっかな？」

四季に能力により完全に回復はしているものの、先ほどの戦いで気を失ったままである。鎬はうくと考え、

「まあ叩けばその内おきるか・・・おい起きやがれ銀次。次は俺と修行だろうが」

ぺしぺしと最初は軽く叩く。

「おきるコラ」

べしべし

「・・・」

バシバシ

「・・・」

バシンバシンッ！！

「うつ・・・いい加減起きやがれこの馬鹿野郎！！」ボガア！？

ドゴンと、拳を握った状態で銀次の顔面に拳を叩き込む鎬・・・先ほどの四季の発言を思いっきり忘れてる。だが、これが案外気付けにもなったのか、銀次は殴られて吹き飛んで言った後すぐさま二立ち上がり、



「~~~~つ！！てえな鎧！！なに人が寝ているところを思いきり殴り飛ばしてんだ！！」

「はっ、さっさと起きねえお前が悪いんだろっがバアカ」

「るっせ！！馬鹿なのは認めるがっつせ！！」

鎧を指を差しながら銀次は文句を言う・・・正直言っていて悲しくないのかと思うが、銀次自身馬鹿だと自覚しているし鎧が自分より頭が良かったため一応は悲しくはないらしい・・・一応は。

「はいはい・・・んなこたアどうでもいいからさっさと修行しよっぜ」

「流された！？てか顔面殴ったことに対しての謝罪はねえのかよ！？」

「ねえな！！」

腕を組みながらきっぱりと答える鎧。ある意味清々しいほどに男らしくはあるが・・・性別は女性だが。

「（・・・いつか絶対にぶっ飛ばす）・・・ハア、それじゃあ悪いが鎧。修行の方を頼む」

「おう、任せとけ」

殴られた頬をなでながら、銀次は斬刀・鈍を腰に差し直す。鎧はコキコキと首を鳴らしながら肩を回したりして準備運動をしている。

「んじゃ……始めッか!!」

肩をまわし終えた瞬間、鎬は五メートルあった銀次との距離を物ともせずにたつたの一步で間合いをつめた。そして

「ウラァ!!」

顔面に貫手……いや、正確には目に貫手を放ちに来た。

「うおっ!?!」

銀次はいきなり攻め込んできたのに驚いたが、こんなのは鎬との修行では当たり前だった。

『戦いに合図なんてねえしルールもねえ。あるのはやるかやらないかだ』

実戦はスポーツではない。ルールなんてものはない。鎬の言葉はまさにそれだった。勿論銀次自身も父親に鍛えられたためその考えを持っていたが、鎬はその上を行く意志の持ち主だった。ゆえに銀次は今回も鎬に修行を頼んだのだ。

「おっ?今の避けたか?前は片目一個持ってけたのによ!!」

「残念だが毎回毎回持ってかれてたまるかってんだ!!お返しだ!ー零閃!!」

距離としてはほぼ零距离。だが、銀次の零閃の攻撃範囲内だ。銀次

の容赦なく放った零閃はヒュオツとすさまじい速さで鎬の胴へと迫り両断……

「おつとあぶねえ」

できなかつた。鎬は焦ることなく、まるでちよつと傾いた本の山を押さえるように銀次の放った零閃を『人差し指と中指』で挟んで受け止めたのだ。

「相変わらずとんでもない握力してるなおい!!」

鎬の握力は尋常ではない……が、勿論握力だけではなくその全身の力も尋常ではない。本来手刀、脚刀を主体として戦う鎬は他の格闘技や剣技も身につけているのだが、その非常識な力を使うため武器を必要としていない。なにせ鎬は古龍を素手で殴り殺したうえにその硬い鱗を素手で筆り取ることができるのだ。しかもそこに努力から生み出された動体視力（本人曰く『ゲーセンで鍛えた』）で銀次の本気で放った零閃をいとも簡単に受け止めることができるのだが、対する鎬はその言葉を聞き笑いながら

「ははは褒め言葉だぜ!!」

と、楽しそうに答える。そして空いている方の手を手刀に固め銀次を切り裂こうと動かそうとした瞬間に、

「させるかよ!!」

銀次は後ろ腰に隠してあつたクナイを取り出し鎬の首……頸動脈を狙って薙ぐ……だが、

「んがつ!!」

ガギン!!と鈍い音をさせながら、鎬はそれを歯で受け止めた・・・というより噛んだ。鎬の顎の力も尋常ではないほど強い・・・しかも

「ンガンガ」

バリンボリンツ!!

そのクナイを・・・噛み砕いてしまった。過去、銀次も組手中に鎬の噛み付きを受けたことがありその肩を食い千切られたがあった。その際は流石の銀次もド肝を抜かされてしまったのを銀次は覚えていた。

「クナイをクツキーみたいにバリバリ食ってんじゃねえよ!!」

「チツ・・・んな堅い事言うんじゃねえ・・・よ!!」

銀次が腕を食い千切られそうになるところを、寸でのところで避けながら銀次は手を引つ込める。鎬はあともうちよいで食えそうだった手を食えなかったのを見て舌打をしながら左足の廻し蹴りを放つ。

「(くつ!!) 斬刀を一旦手放すしかねえ・・・!!!(ふつ!!)」

パツと、鎬の回し蹴りが当る寸前に手に持っていた斬刀を手放す。そしてバク転を決めながら銀次はその場から離れる。そして離れたところに降り立ち。

「絶刀・鉋!!」

『硬さ』に主眼を置いた直刀、絶刀・鉋を呼び出す。銀次は絶刀を右手片手に持ち、

「絶刀・鉋限定奥義 報復絶刀!!」

突進。強靱的な脚力を使い銀次は鎬に真っ直ぐと突く。鎬はそれを見てニヤリと笑い斬刀を持ったまま左足で踏み込み、

「らア!!」

銀次の突進にあわせ、右足の廻し蹴りを放つ。

ガギンツ!!

「っ!!」

銀次の持った絶刀に鎬の右足がぶつかり合い、甲高い音を出しながら・・・絶刀がへし折れた。鎬はそのまま勢いを乗せ、地に着いた右足で左足の跳び後ろ回し蹴りを放つ。

「ぶっ!!」

銀次は地面に沈むように屈みその攻撃を避ける。だが、鎬の攻撃はそこで終わらない。

「うらア!!」

身体を捻り、上段から手に持っていた斬刀を振り下ろす。

「(こいつは受けられねえ!!)(うおお!!)」

銀次は即座にその場からなんとか回避しようとして横へと飛ぶ。銀次は斬刀を得意としているため、その恐ろしさを重々理解している。それに鎬が振るっているのだ、まともに受けたら賊刀・鎧でも身体を両断されてしまう・・・そう思った銀次は即座にその場から離れる・・・が、やはりそこは鎬。ギリギリ回避した銀次の腹を浅くだが斬る。

「ッ!!」

「チツ浅かったか」

舌打ちをしながら離れる銀次を見る。そして持っていた斬刀を銀次目掛けて投げる。

「うおっ!?!ぶね!!」

銀次はそれを身体を捻ることにより回避。斬刀は離れたところに突き刺さる。銀次はその刺さった斬刀の所まで行き、斬刀を引き抜く。鎬はその銀次の所まで瞬歩の如く速さで近づき、

「オラオラオラ!! 氣イ抜いてツとぶつ殺すぞ!!」

手刀、貫手、足刀・・・極限までに鍛えぬいた鎬の手足が文字通り刃と化し、切り裂きに、貫きにくる。

「ぐおおお・・・!!!!」

銀次はギリギリでその猛攻をなんとか回避する。だが、鎬のその猛攻が避けきれないでいるのか、所々でその攻撃を受けてしまい、身

体のあちこちの肉を削がれてゆく。

「（くっ！！さすがにこのままではヤバイ……！！）チイツ！！」

手刀や足刀や貫手で全身に切傷を造りながら、銀次は手に持った抜き身の斬刀を振るう。居合いを主体とした斬刀だが、勿論抜き身でも十分使える。鎧を袈裟斬りに斬刀を振るうも、

「遅え！！」

「っ！！」

ブシャツ！！と銀次の斬撃を回転で避けた鎧はその勢いそのまま回転手刀打ち……いや、最早回転手刀斬りを行う鎧。銀次は両目の下を鼻を横切るように傷を作る。もう少し高けれ危うく目玉を持っていかれただろう。銀次は背筋に冷たいものを感じながら、今度は逆袈裟に斬刀を振るう。

「ッラア！！」

「おっと危ねえ」

ヒュゴツと人間の刀を振るうスピードを越えている銀次の斬撃をいとも容易く避ける鎧。そして少し離れた場所までバク転を決めながら離れてゆく。その鎧を見て血を拭いながら呆れたような声で銀次は喋る。

「ふう……たくっ相変わらず飛んでもねえ奴だよ本当」

「だから言っただろ？そんな褒めんなよ。照れるじゃねえ……」

「かつと!!」

鎬は若干の笑みを浮かべながら、銀次へと突っ込んでいく。銀次は迫りくる鎬を見て、斬刀を腰ダメに構え、

チリンッ

「斬刀・鈍限定奥義——斬刀狩り!!」

ブシュッと自分の左の二の腕を斬る。そしてそこから流れる血を斬刀の鞘の内へと流し込む。そして

「斬刀・鈍限定奥義斬刀狩り——零閃編隊——神風!!」

鞘の内に流れ込んだ血により、摩擦係数を極端に減らし、光速の抜刀を可能にした斬刀・鈍限定奥義斬刀狩り……。そしていま銀次が使ったのは以前銀次が四季崎との戦いの際、本来は捨て身技として使っていた銀次のオリジナル技……。抜刀した斬刀をそのまま鞘に収めず、その収める力を抜刀に注ぐことにより本来の零閃の倍の速さと威力を可能とした技……。それが神風だ。

「ハアアアッ!!!!!!!!!!」

「ラアアアッ!!!!!!!!!!」

銀次の神風が、鎬の右貫手が、相手を殺すために迫る。そして、

ジャシュウッ!!!!

「……」



「・・・」

一瞬の交差。二人は光の如く速さで交差した後数メートル前進し、そのまま動きを止める。しばらく、沈黙が続く・・・だが、

「がっは・・・!!」

ドサリと血を吐きながら倒れたのは・・・銀次だった。銀次の身体のうちようど腹の部分に丸い何かで貫かれたような後がある・・・どうやら、鎬の貫手が一瞬早く銀次の身体を貫いたようだ。

鎬はスツと体勢を戻し、チラリと自分の腕を見る。

「・・・フツ、やりやあ出来るじゃねえか。ま、精々50点。赤点ギリギリって所だな」

鎬の視線にあるもの・・・それは自分の「斬られて肘から先がない」右腕だった。鎬の後ろで送られてボトリと鈍いが軽い音がしたのを聞き、おそらく先ほど斬り飛ばされた自分の右腕だろうと思う。そして、遂に自分の腕を斬り飛ばした銀次に素直に喜ぶ。

「（へへ、確かに四季崎の言ったとおりこいつは面白いぜ）」

以前、たまたま四季崎のところに立ち寄った鎬が銀次とはどのような人物かと聞いたとき、四季崎は

『そうさな・・・一言で言うならどうしようもねえ馬鹿ってところだな』

『はあ？どうしようもねえ馬鹿？だったらなんでお前アイツにあん

な肩入れしてんだ？』

『おいおい人の話しは最後まで聞けよ・・・まあ確かにアイツはどうしようもねえ馬鹿だがよ・・・同時にすげえ面白えんだ・・・まあ、こればっかしは会わないとわからねえわな・・・それに、もしかしたら今までお前が得られなかったモンも手に入るかもしれねえぜ？』

カラカラと笑いながら、刀の土置きを造りながら四季崎が答える。最初は四季崎が何を言っているのかよくわからなかった鎬だが、あってしばらく銀次と一緒に暮らすうちになんとなく四季崎の言葉がわかりかけたような気がしてきた鎬。

「（もつといりゃ・・・さらにわかるかもしれないからな・・・）」  
軽く宙を仰ぎ、右手を振るう。すると、先ほどまでなかった肘から先がいつのまにか元通りになっていた。鎬は楔以上の回復力があるのは勿論だが、完成・完了・完結をする。つまり『終了』すること考えられておらず、死ぬことのない鎬にとって腕一本ぐらいはすぐに生えてくるもので気にするほどのものではないのだ。

鎬は肩をグルグル回し、銀次の元へと近づき傷口に触れる。すると銀次の傷はたちまち塞がり、顔色も先ほどまで土気色だったのに対して今までの青白い色になっている・・・多少意味合いが変わるだけで具合が悪そうというのは共通ではあるが。鎬は未完成だが、治癒術も可能なのである。そして直した銀次を肩に俵を担ぐように担ぎ、近くの岩場まで運びにいった。

「（それに一緒にいてなんだか不思議と心地いいし）」

そんなことをふと考えながら、鎬は銀次を運んでいった。

銀次も、ほんの一步づつだが確実に成長している……そう、それはまるで熱した玉鋼を叩き一振りの刀を作るが如く……

はたして、銀次は名刀になれるか？それとも鈍刀になってしまいうか？……それは今後の成長具合である。

〳〵京都・とある剣術道場〳〵

京都の山奥にある一つの大きい剣術道場……今は道場生がいないのか、かなり静かな道場……だが、

「なんやと！？そ、その情報はまちがいないんやな！？」

急に激しい嬉しがるような、気持ちの高ぶりを押さえつけられないといった感じの音が響き渡る。その響く声の元を辿っていくと……一つの部屋へとたどり着いた。

〳〵とある部屋〳〵

「ふむ、ふむ……わかつたえ、それじゃあ……わかつたわあ。ほなまた今度に……」

ピツと、携帯の電源を切る女性・・・どうやらこの女性が声の発生源のようだ。黒い髪を腰まで伸ばしておりしつかり手入れされているのか絹のように美しい・・・巫女服そ着ており、傍らには白鞄に収まった刀が一振り・・・シユールといえばシユールな光景であるが。容姿はかなり・・・いや、とてつもなく美しく、町を歩けば間違いない呼び止められるであろう美しさを持った女性で所謂京美人と言っ奴だ。その女性は手に持った携帯を机の上に置き、その横にあった写真立てを手に取る・・・そして

「う、ウフフ、ウフフー！」

その写真立てをギューと抱きしめ嬉しそうに笑いながら地面をゴロゴロと転がりだす・・・傍目から見たらただの変態である。だが女性はそのなを気にしていないらしく、ずっとそのような行動をしている。

そして改めてその写真立てに写る青髪をした少年・・・その写真を見つめる。

「ハアハア銀はん・・・やっと京都まできてはるん？もう遅いわア」  
今度はクネクネと身をくねらせ、「ああ、銀はん」やら「そこはダメや」などなど・・・とてもじゃないが十八歳以下の子には見せられないような状況へと変わりつつある。

「うふふ・・・おっと、こないなことしてる場合やない。はよ結納の準備せな」

女性はスクツと立ち上がり、スキップしながら今後のことを妄想しながら白無垢の用意をし始める。

「そういえば最近やたらと京都が騒がしいさかい、もしかしたらそれで銀はんが来るのやもなア・・・そやったらもう銀はんのために何でもせなあかんぞ」

女性はウフフと笑い、思つてやまない少年が移る写真立てを見て、

「今度は絶対に逃がさないえ？・・・この青山鶴子が、必ずやあんなさんの嫁になつたるからなア」

女性・・・神鳴流剣士史上最強を誇る剣士・青山鶴子・・・はたして彼女が思う人とは一体・・・？

〳〳さらに別の某県某所にある旅館にて〳〳

「・・・ああ、わかつたそれではまた後ほどに」

ガチャリと備え付けられている黒電話に受話器を置いた女性・・・黒髪をショートカットにした容姿の整った女性だ。女性は履いているジーンズの後ろポケットを漁り、そこから煙草とライターを取り出す。そして、そこから一本だけ取り出して、口に啜える。そしてライターで火をつけて煙を深く吸い込み、

「ふうー・・・ふふふ」

吐き出す。だが同時に押さえられない喜びのせいか、笑みもこぼれ

る・・・そしてライターと煙草が入っていないほうのポケットに手をいれ、中から手帳を取り出す。そして、その女性はその手帳を開き、中にある写真を眺める・・・その写真に写っているのは蒼髪の少年であった。

「ふふ・・・銀次。待っている。今度こそこの私、浦島はるかが必ずお前の嫁となるからな。そして・・・ふふふふふ」

頬を紅く染めながら、この旅館・・・ひなた荘の管理人・浦島はるかは怪しい笑みを浮かべながら決意したように呟いた・・・

「（え、ちょ、どうしたのよ寮長！？あんなキャラだったっけ！？）」

「（し、知らないよ！！僕だって生まれて初めて見たよ、はるかおばさんがあんな風に笑っているのは！！）」

・・・他の同居人が震えながら見ているのに気付かずに。

はたして、これからの物語はどう進んでいくのだろうか・・・？



## 第五十二話（後書き）

はい如何でしたか・・・え？最後の二人？・・・まあ細かいことは気にしない！！ほかでも出しているところあるんだから！！楽しく、面白くいきましょう！！

さて、それでは次回予告！！

刹那、アドル、瀬流彦、そして銀次・・・それぞれ修行を続けてゆき、少しづつだが確実に成長していくなか・・・遂にその日がやってきた。

「遂に・・・か」

果たしてどのような猛者が現れるのか？そしてどのようなことが起きるのか・・・まったくわからない中、3・Aと銀次一行が京都へと向かう！！

「いたぞ・・・捕まえろ」

「ぶっ潰してやる！！」

現れる強敵たち・・・

「ふふ、銀はんはまだやるか？」

「銀次・・・さあ私はいつでも（結婚する）準備はいいぞ！！」



そしてさらに楓たちにライバル出現か!?

さあ果たしてどのような物語になるのか・・・!?

乞うご期待!!

最後にオリジナル変体刀を考えて下さったDEADPOOL ZE  
ROさん。そして最後の二人青山鶴子、浦島はるかの出演案を下さ  
った完全怠惰宣言さん、ありがとうございました!!

## クリスマス小説（前書き）

そろそろ本棚整理しようと思っている銀閣です。

はいどうも皆さん銀閣です。本来は本編を書いて投稿しようと思いましたが、『あ、そういえば今週クリスマスじゃね？』と気付いてしまい、急遽クリスマス短編を書きました。かなりの急ごしらえのためお見苦しい点もあるとおもいますが、温かい目で見てください。幸いです。

それでは、どうぞ！

あと後書きにちょっとお知らせを書いておきます。

## クリスマス小説

それは、まだ楓が里に居た頃の冬の話し・・・

（甲賀忍軍の隠れ里）

「ふう・・・今日の任務も中々のものだったな・・・」

寒い中、任務から帰って来た当時16歳の銀次。あの守れなかった名瀬陽香のように楓を守れないのを嫌い、次々と多くの任務をこなしている最中だった。先ほども、ヤクザの武器密輸現場を押さえ相手を制圧するといういたって単純な作業をこなしてきたのだ。その帰り、かすり傷などを携えながら銀次は里へと帰ってきた。

「ぶえつくし！！うう寒いな・・・早く家に帰ってくず湯でも「銀次殿」！！」？

クシャミをして、ぶると震えながら銀次は帰ってくず湯でも飲もうかと考えていたそのとき、自分を呼ぶ声に気付いた。最初は誰だろうかと思っただがすぐに聞き覚えのある声だと知り、苦笑いしながらそちらのほうへと向かうと、

「おう、かえ「お帰りでごさる！！銀次殿！！」ごほっ！！」

ズドン！！とまるで大砲の弾のように突っ込んできた塊を腹で受け止めた銀次は後ろによるけて、疲れもあったのかそのまま後ろへと倒れこみ、ドデンと派手な音を立てる。

イテテ・・・といっている、その腹にぶつかった塊がムクリと起

き上げる。

「ござ？銀次殿、大丈夫でござるか？」

その塊はきよとんとした顔で銀次のことを見る。しかし身長は170cm近くあり、体つきも女性特有の丸みやモノをもっていて大人といい勝負で、高校生にも見えなくはない。だが顔にはまだ幼さがあるためか中学生にも・・・と思われる。銀次はその少女の顔を眉を顰めながら見る。

「あのよ楓・・・毎回言ってたがよ、腹に突進するなって言ってるんだろが!!」

そっぴいなながら、銀次は腹の上に居座っている少女を引つpegがそうとする・・・そう、少女とは彼の幼馴染の長瀬楓当時11歳である。銀次は元々楓を守りたいと思っていたのだが、名瀬陽香の事件でその思いはさらに強くなり『死んででも守る』と誓いを立てた少女・・・まあその数年後に色々あり銀次もその思想を変えるのだが、今はいいだろう。

だが楓は銀次が思ってるほど簡単に離れないため、ふうとため息を吐き、

「よっこいしや・・・ふう」

そのまま楓をぶら下げながら銀次は立ち上がった。銀次の身長は当時は178センチ程度だったため、ちょうど楓が浮く程度の高さである。楓はプランプランとぶら下りながら嬉しそうに笑う。

「うふふ、これはこれで中々楽しいでござるな」

「こっちはあまり楽しくはないんだが・・・まあいいか」

ふうとさらにため息を吐く。どうやらこのときにはすでに苦勞人の氣質を持っていたらしい。楓はんしょとぶら下りながら器用に銀次の背中をほつへと回る。どうやら、銀次が動きやすいように自ら回ったようだ・・・だが、しかしその動きに合わせて銀次は眉間に皺を寄せ

「・・・おい楓。なんだか身体にやわらかい物体が当たっているんだが・・・」

「当たってるでござるよ」

ムニムニと、同年代の少女達よりもはるかに大きいモノが銀次の背中に当たっているのだ。確かに銀次は鈍感であり精神的にも三十越え近いのでそういうことに対する耐性は着いてはいるが、身体はまだ若い13歳であるためやはり感じるものは感じるのだが・・・

「だから・・・毎回言ってるだろ？そういうのは好きな男にやれって」

「・・・」

やはり鈍感なのは鈍感で、楓がいくらアプローチしてもこのように冗談として受け止められてしまう。楓はムスツとした顔のまままたアプローチが効果なしと思いつつ腹いせに銀次の背中でパタパタと足を振るう。

「おい楓、足揺らすな。歩きにくい」

「気にしたら負けでござるよ」

「・・・何をそんな不機嫌になってんだ？」

「別になんでもないのでござるよ」

「?・・・変な奴」

そういいながら銀次は家へと向かっていった。その道中銀次は街中で見たことや聞いたことなど、この里ではまず味わえないことを銀次は楓に話していた。楓も楓で、今まで里の外に出たことがないためその話を嬉しそうに聴く・・・そんなとき、銀次はふと気付いたことがあった。

「・・・そっぴや、もうすぐクリスマスだったな」

「うむ?くりすます・・・とは何でござるか？」

銀次のボソリと呟いた言葉が聞こえたのか、楓は銀次に聞く。銀次はああ、といいながら答えた。

「クリスマスって言うのは・・・まあ外国の宗教のお祭りだな。キリスト教っていう宗教の神様であるイエス・キリストの降誕を祝うお祭りだな。色々な料理を食べたり甘いケーキを食べたり・・・おい楓人の背中に涎たらすんじゃないやねえよ!!」

「あ、ごめんでござる。甘いケーキと聞いてつい・・・」

じゅるりと口を手の甲で拭う楓。里から出れない楓ではあるが、以前銀次が仕事帰りにプリンやケーキを買ってきたことがあり、初め

て食べた甘味に感激したことがあった。それ以来、楓は甘いものが好きになり、特に銀次が一番最初に持つてきてくれたプリンが大好物になったのだ。

銀次はたくつとブツブツと文句をいいながら続ける。

「まあいい・・・後はそうだな・・・子供達限定のイベントとしてはサンタクロースという紅い服を着た男が子供達にプレゼントをあげたりする・・・っていうのもあったな」

転生前の子供の頃はよく頼んだっけなあとしみじみと昔のことを思い出した銀次・・・がその背中に居た楓はそれどころではなかった。

「ほ、欲しいものをくれるでござるか！？それは本当でござるか！？」

「あ、ああ・・・でもどうしたんだ急に暴れだし・・・ててて！！髪を掴むな髪を！！」

「な、何でも頼めばくれるでござるか！？」

「い、いやさすがに何でもは無理だと思っただから髪を引っ張るなアアアアツ！！！！」

楓は何度も何度も、質問を繰り返した。しかもそのたびに銀次の髪を掴み暴れるため、先ほどからブチブチと嫌な音が鳴っていてしかも痛い・・・いくら生やせるからってさすがに痛いらしい。

楓はじゃあ！！と銀次の顔の真横に自分の顔を出して、

「拙者、銀次殿の使っている小刀が欲しいでござる！！」

「ああ？俺の？」

ムギユツと、近くにある楓の顔を押し、後ろに戻す。むぎゃつと変な声をだしながら楓は後ろへと顔を下げる。そしてポリポリと後頭部を掻き、

「俺の小刀って・・・あれか？俺が普段使っている奴のことか？」

銀次の言葉に楓はコクコクと頷く。銀次は普段使っている小刀とは別に大したことのない普通の小刀で、刃渡り7センチぐらいの短いものだ。銀次が五歳の頃に彼の父である桐野鉄心が誕生日祝いと言うことでくれたものでもある。以来銀次はそれを今でもずっと使い続けており、軽い切り取り作業や木刀などにできたささくれなどを取るために使っているし、魚なども捌けるため里内にいるときは大体これを携帯していた。

銀次はポリポリと頭を掻きながら、

「・・・隼人さんに頼んでもらえばどうだ？あの人なら新品をくれると思うが・・・」

と銀次は言った。まあ正直に銀次自身は愛着の着いたもののため、あまり手放したくないとは思っているのだが、ぶつちやけて言ってしまうと、かなり汚いのだ。鞘は元々は白鞘だったのだが、銀次が長い間使用しているため垢で黒ずんでしまってる上に、何度も研ぎなおしたため刀身自体がかなり磨耗してしまっている。

・・・正直女の子に上げるにしても人にあげること事体、あまりいいものとは思えないでいる。しかも楓はそれが欲しいのか、駄々をこね始める。



「やだやだ！！銀次殿が使っていた小刀がいいでござる！！」

バタバタと、暴れる楓。見た目はどんなに大人に近くてもやはりそこは子供なのだろう、銀次は微笑ましくもあつたが、背中で暴れられて正直止めてくれとも思った。

「（はあ・・・本当、こいつ言い出したら曲げない頑固さは天下一品だからな・・・）・・・はいはい、多分な」

銀次は適当に言いながら、楓と共に自宅へと向かっていった。その間も楓が背中で騒いでいたが、銀次は気にしないでいた・・・ただ、髪の毛が何本か引っこ抜かれてかなり痛がってはいたが・・・。

〓 桐野家・銀次の部屋〓

「ふう・・・やれやれ困ったもんだ」

楓を長瀬家においてきた銀次は自宅に帰り、父親に今回の任務報告を行いそのまま自室へと向かった。そして自室にて銀次は先ほどの楓の言葉を思い出す。

「俺の小刀をねえ・・・なんだってこんなぼろいもん欲しがるかな・・・」

机の上にぼつんと置いてある小刀・・・鞘は元々白かったのだろうが銀次が長年使っているせいで黒ずんでいる。銀次はそれを手に取り鞘から刀身を引き抜く。するとそこには何度も使用して、磨耗し

て鎬部分がほとんどない小刀・・・だが、切れ味だけはいまだに保っているため銀次はまだ使い続けているこの小刀を楓が欲しがると理由・・・銀次は色々と考えたが、

「・・・ダメださっぱり思いつかん」

結局思いつかなかった。やれやれと重いながら銀次は手に持った小刀を鞘に収め敷いた布団にごろんと転がり、

「・・・どうすつかな」

と呟いてそのまま瞼を閉じた。

~~~~翌日~~~~

翌日。まだ早朝で銀次は今日は任務は休みだが、稽古をしようと思いい早めに起きて稽古場へと向かおうと思いつき替えていこうと里内を歩いていたら、

「ああ、銀次クンじゃないか」

「あ、隼人さん。おはようございます」

歩いていたら目の前から楓の父親である長瀬隼人が歩いてきた。銀次の父親の桐野鉄心と同期で腕前もかなりの物らしいが・・・今では嫁と娘の尻に敷かれているいたって普通の父親である。だが、その隼人。なにやら難しい顔をしている。

「?どうしました隼人さん。随分と難しい顔をしていますか?」
何かありましたか?」

普段温厚な顔つきの隼人は結構思っていることが顔に出やすいため、何か考え事をしているときなどは顔に出やすい。特に難しい考え事をしているときの顔はかなりわかりやすい。

「ん?・・・ああわかつちやつたかね?まあ実際そうなんだが・・・」

隼人は銀次の問いかけに苦笑いを浮かべながら答える・・・銀次はまさかと思いつながら

「まさか・・・楓が俺の小刀が欲しいってサンタに頼んでいるとか・・・ですか?」

銀次の言葉に隼人は驚いたような顔になる。

「よくわかつたね。まさにその通りだよ」

どうやら正解らしい。銀次はああやっぱりと思いつながら、バツが悪そうに頭を掻く。

「すみません隼人さん・・・それ俺のせいですね」

「?どうということだい?」

銀次は申し訳なさそうに、昨日のことを隼人に説明することにした。

～～説明中～～

「・・・なるほどね。そういうことが」

一通り説明の説明にウムと頷く隼人。銀次はボリボリと後頭部を搔く。

「まあ・・・正直に言えば愛着はありますがあげてもいいんですが・・・なんで楓が欲しがるのがわからなくて・・・」

「（あ、やっぱわかってないんだ）」

銀次の言葉に、隼人はやっぱりなと心の中で頷く。楓は以前から銀次に恋心を抱いているのだが、その肝心の銀次はそれに気付いておらず周りはそれを微笑ましく見守っていたりする。

「（まあここはあえて言わないで置こうかな・・・）まあ銀次君。君は気にしないでいいよ。楓には俺がよく言うておくからね、新しいので我慢してもらおう」

隼人のその言葉を聞き、銀次はああ、はいと答える・・・だが、どこかしら納得の行かないような感じでもあった。

「・・・そう、ですね。わかりました」

その後失礼します、と言って銀次は稽古場へと向かっていった。

〳〳クリスマス当日・夜〳〳

「……うむ、これでよじつでござる」

長瀬家の楓の部屋。寒い中、楓は自室でなにやらゴソゴソと作業をしていた。半纏を羽織り炭鉢で暖をとりながら楓が仕上げているのは……

「うんうん、これならさんた殿も困らないでござろう」

ふんすとよくできたという風な顔になる楓。その手には赤い大きな靴下が握られていた。赤い布で作ったのか所々が変に寄っている。楓はうむうむと頷きながらその靴下を枕元に置く。その顔はとても楽しみと言ったような顔をしており、サンタが自分の欲しいと思っているものを届けてくれることを祈っているようにも見えた……。楓は早く寝ようと思ひ布団に入ろうとした……。そのとき

「おい楓。おきてるか？」

聞きなれた声が聞こえた。しかしそれは母親でも父親でもない自分が恋焦がれる一人の男……。桐野銀次の声だった。

「あ、銀次殿！！入ってもいいでござるよ」

勿論楓に断る理由はないためすぐに入るように促す。銀次はんと軽く呟きさつと襖を開ける。

「悪いな夜遅くに……」

「いやいや全然構わないでござるよ？でもどうしたでござるか？」

基本、このように夜中に部屋に来るのはむしろ楓のほうである。こ

のように銀次が尋ねてくるのは滅多にないのだが、楓としては愛しい相手がこのように自分の部屋に来てくれるのは非常に嬉しいことである。楓は部屋の端にある座布団を出そうとしたが、銀次はすぐに済むと言ってそのまま畳みの上に座った。

「どうしたでござる銀次殿？・・・はっ、まさか拙者のことが欲しくて夜這いをしにきたでござるか！？」

「何言ってんのお前？どっかで頭でもぶつけたか？」

楓のある意味本気の言葉に、銀次はザバツと斬り捨てる。

「別にそんなすぐに断らなくてもいいじゃないでござるか・・・」

楓はそのように即座に断る銀次にブツブツと聞こえない程度に文句を述べるも、銀次はそれを見てもただ頭を傾げるだけであつた。

「？・・・まあ、いいや。それよりも楓、ほらよ」

銀次は楓の行動に首を傾げながらも、すでに似たような奇行を何度も見ているためすぐにそれと同じだろうと思ひ、自分がここに来たための行動に移る。

銀次は懐に手を入れて出した後楓のほうにポイツと投げ渡す。楓はいきなり飛んできたそれを両手でしっかりと受け取る。そしてその手に持ったものを見て、驚いたように目を開く。

「おわっ・・・いざ？これって・・・」

楓の手に合つたもの・・・それは楓が欲しい欲しいと言つていた銀次の愛用の小刀だつた。垢で黒ずんだそれ・・・銀次は頬をポリポ

りと掻きながら話します。

「いやな・・・俺のところにサンタが来てな『新しい小刀をあげるから、その小刀を君の幼馴染にあげなさい』って言うてきてな・・・それでまあ、俺も新しいの貰ったからなお古で悪いとは思うが・・・ってどうした楓？そんな震えて・・・」

話している途中、楓がなにやらプルプルと震えているのに気付いた銀次。やっぱりお古はいやだったのか？それとも言い訳が嘘くさいのがダメだったか？とも思ったが・・・楓はバツと顔を上げて

「ありがとうございます銀次殿！！」

「うおっ！？」

ドンツと正座している器用な体勢から楓は銀次に飛びつく。銀次は銀次でその飛びついた楓に驚いて受け止めはしたものの、そのまま後ろに倒れこんでしまった。

「いてて・・・おいおい楓いきなりとびつ」本当に嬉しいでござるよ銀次殿！！」「そ、そうか？ならいいが・・・」

サンタ殿ありがとうございます！！と言いながら楓は嬉しそうにその小刀を胸に抱きしめる・・・その顔は本当に嬉しそうで銀次も思わずクスリと微笑んでしまうほどだった。そして、ポンと頭に手を置き撫でる。

「大事に使ってくれよ？楓」

「もちろんでござる！！」

銀次の問いかけに、にこやかな笑顔で答える楓・・・

こうして、楓は初めてのクリスマスプレゼントを、見事欲しいモノを受け取ることができた。

「次は薄刀が欲しいでござる!!」

「調子にのるな、アホ」

クリスマス小説（後書き）

如何でしたか？銀次と楓の麻帆良に移り住む前の里内での話でした。楽しんでいただけたでしょうか？

・・・さて、前書きにも書きましたがちょっとお知らせを・・・
実は作者来週の金曜日から遠出をする予定でして、帰ってくるのは再来週の水曜日か木曜日あたりです。ゆえに来週は頑張ればいけると思いますが、再来週の投稿は無しと言う形になります。

この小説を楽しみにしてくださっている皆様には大変申し訳ありませんが、ご了承ください。

それではまた本編にてお会いしましょう!!

皆さんよいお年を!!

第五十三話

それぞれが自分自身を鍛えてから早一週間・・・遂に京都への修学旅行が決行された。

〳〵修学旅行初日・早朝 桐野邸銀次の部屋〳〵

「ふう・・・さてと」

まだ日が昇り初めて間もないころ。この家の主である銀次は自室にいた。寝起きなのか首をコキコキと鳴らしつつ眠そうに欠伸をしている。そして一回伸びをして

「久しぶりだからなあ・・・うまくできるといいが」

そういつつ、銀次は自分の顔に両手を当て、

ゴキユリッ

自分の顔を粘土のごとくこね始めた。『忍法骨肉細工』真庭忍軍十二頭領が一人・真庭蝙蝠が使う忍法だ。里に居た頃は潜入任務や暗殺任務でかなりの頻度で使っていたのだが、ココ最近はまったくもって使っていないため、使えるか不安だったが、

「ふう・・・思った以上に大丈夫だったな」

ゴキンと首を一度鳴らす。声も換え、髪の色も蒼髪から白髪混じり

の黒髪へと換える。そして近くに置いてあつた黒い紳士服を手に取り着て、ネクタイを締め外套を羽織ってシルクハットを被る。

「ん・・・こんなもんかな？」

最後にクツと白手袋を嵌める銀次・・・いや、見た目はもはやどこかのいいところの老紳士といったところだろうか？・・・懐は相変わらず寂しいが。

「（なんだろうか・・・いま軽く侮辱されたような気が）・・・まあいいや。んでコイツを持ってツと」

そついいながら銀次（老紳士ver）は壁に立て掛けてあつた黒い一つの杖を手取る。見た目はなんの変哲もないただの杖なのだが・・・勿論ただの杖ではない。銀次は杖の上部の部分を右手で持ち、左手をやや下へおき、

「・・・」

左手の親指で押し上げると杖は簡単に二つに別れる・・・そして中から銀色の刃が現れる。銀次はスラアと刀身を引き抜く・・・どうやら仕込み杖だったらしい。

「・・・」

そして改めてその刀身を眺める。この仕込み杖は銀次が狂に頼んだ特注品で刃渡りは大体五十cmと所謂長脇差の部類に入る刀だ。特に特殊な能力はなく、特殊鋼合金で作られた仕込杖だ。別に変体刀を使っても良かったのだが、いきなり何も無い虚空から刀が出る、という特殊な能力を持っていると思われて警戒されたくないからだ。

それに比べたら仕込み杖はその心配がないため、銀次はその利便性から時に人が大勢居る場所で針仕込みの杖で要人暗殺などを行うこともあった。また今回は傭兵も相手なため油断はできないため、即座に使える武器を用意しとく。今回は仕込み杖に懐にクナイ、そしてポケットの中に分銅鎖を隠していた。

うしともう一度装備を確認した銀次はガラツと部屋を出ると

「もう遅いよ銀次君！……って改めて見ると本当よくわからないね」

チラツとこちらを見ながらそういった少女……神秘変体刀の一振りにして銀次のことを慕う変体刀、秘刀十五番・楔がそこにいた。楔はいつもの黒いラインの入った白を基調としたセーラー服に赤いスカーフといういつもの服装をしていた。

楔はどこぞの老紳士の顔立ちにしたのをマジマジと見つめる。銀次はふうとため息をつきながら答える。

「しょうがねえだろ？こうでもしねえとまずばれること間違いないんだからよ」

ポリポリと、銀次は白手袋を嵌めてる手で後頭部を搔く。そう、今回は護衛任務……しかも銀次とは面識がある3-Aの護衛だ。これが知らない人間ばかりだったら銀次も普段の姿で護衛できるのだが、生憎と面識があるため仮に見つかった場合面倒くさいことになるのは目に見えている。

「(ぜつてえ朝倉辺りが『幼馴染が心配でついできた桐野さん！』とかで麻帆良新聞に載せるだろうからな……それだけは何が何と少しでも避けたい)……てかお前はそのままなのか？」

そういいながら銀次はチラリと楔を見る。楔はいつもどおりの服装をしており特に目立つことがないが・・・楔はそこまで3-Aと面識がないためこのままでも大丈夫だろう。楔はウフフと笑いながら銀次の腕に抱きつく。

「うん、私ほとんどあのクラスと面識ないからね、このままで大丈夫なんだ。・・・それよりもその声のままでもいい調だと違和感あるよ？お・と・う・さ・ん」

ウィンクをしながら、楔は告げる。そう、今回銀次は楔と親子という関係で護衛するのだ。最初はバラバラで護衛してもいいだろうと思っただが、楔のこの容姿からして間違いなくナンパされるだろうと考えた銀次はそれでは任務に支障をきたす可能性があるため今回は親子として出るつもりである・・・最初は楔が「恋人同士で行こう！！」といったのだが、楓たちとの激しい戦闘を家がまたもや破壊されてしまった・・・またもや借金をこさえてしまった銀次であった。

「ん？ああ、そうか・・・まあこんな感じでいいかな楔？」

ニコリと若干苦笑い風に笑う。楔はあう・・・と呻き頬を染める。

「（・・・親子プレイって言うのもありかもしれないな）」

脳内で銀次が父親役で楔が娘役という禁断の劇場が繰り広げられる楔・・・その気配を察知してか、銀次の背筋になぜか冷たいものが走る感覚に襲われた。

「（な、なんだ！？今のおぞましい感覚は・・・！？）・・・まあいい・・・それよりも・・・だ」

クルリと銀次は後ろへと向く。するとそこには・・・

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・お前らは何をそんなにむくれている上に殺気立ってんだ？」

ジーンと、ちょうど曲がり角のところから三つ見慣れた頭がこちらを見て・・・いや、睨みつけていた。そう、もう大体おわかりだろう。楓と真名と鈴である。

「べっつに〜なんでもないのでござるよ？」

「ああ、そつだよ銀次さん何でもないさ・・・本当にね」

「いやはや・・・別に特にこれといったことはないネ」

三者三様の反応・・・ただそれらもなにやら殺気立っている。先ほどから銀次にだけ殺気を向けており気が気でない。

「くっ・・・やっぱり納得できないうござるよ！！楔殿！！そこを変わるでござるー！！」

「いいや楓。ここはこの私が変わるよ。そのほうが断然いいに決まってるからね」

「何を言ってるネ二人とも。ここはこの私が一番ピッタリに決まってるネ」

と三人とも抗議を始める。まあ確かに楓、真名、鈴とでも十分親子として通るだろう・・・が、

「なあに阿呆なことを抜かしてんだ？お前らは近衛木乃香を守るのが仕事だろうが。それに、なんで修学旅行に参加していない奴が知らないおっさんと一緒に旅行先で歩いてたら変な噂が立つぞ？」

「・・・うっ・・・確かに」

確かに、普段の銀次の状態でならまだ多少の言い訳が可能かもしれない。銀次が過保護だのなんだのと言う言い訳ができなくもないが、さすがに知らないおじいさんと一緒・・・となると言い訳しづらいものがある。

うぐぐ・・・と齒軋りをする三人に、楔はニヤニヤとしながら三人を見る。

「まあ、三人はしっかりとあの子と他の子を守ってよ。私は銀次君と一緒に見つからないように見守るかりながら周りのゴミ掃除するからさ」

うふふと笑いながら腕に抱きつく楔・・・確かにこの状態なら旅行中の父親と孫にも見えなくはない・・・ただそれで楓たちの殺気がアップしたのは言うまでもないが。一応念のため楔の身分証明証も作つたため問題はないだろう。

銀次は一度腕時計をチラリと見て、

「うし・・・悪いが俺らは先に行って駅周辺を確認してくる。お前

らは時間を見て出発してくれ」

「他の変体刀の方々はどうするのでござるか？」

楓はまだむすつとした不機嫌顔のまま聞く。一応は任務という意識もちゃんと持っているためそこらへんの区別はできる。

「かなりバラバラだが人型の何人かはすでに京都に向かわせてある」

楓の質問に銀次が答える。もちろん今回の仕事にも変体刀が活躍する。すでに京都に向かったもの、あるいは一緒に出るもの。たとえば遅れたとしても追いつけるものなど、それなりの戦闘力を有した変体刀を選びすぐってきたのだ。・・・それに今回は大量の傭兵や陰陽師。そして神鳴流剣士との戦闘も考えられる大規模戦になるだろうし戦力は大いに越したことはない。

「なるほど・・・了解でござる」

「ああ、それじゃあ悪いが、また後で合流しよう」

「わかった」

「了解ネ」

真名と鈴も顔を引き締める。改めて、今回の戦いが一筋縄でどうにかなるような戦いだとわかったのだろう。

銀次はそんな面々の顔を見てコクリと頷く。

「それじゃあな」

クルリと玄関へと向かう銀次に楔はとてと付いていき・・・途中で止まりクルリと一度楓たちのほうへと向き、

「・・・(ニヤリ)」

「「「!?!?!」」」

ニヤリと、まるで勝ち誇ったような笑みを浮かべたあと、その場を去っていった。残された三人はビキリと額に青筋を浮かべ引き攣った笑みを浮かべていた・・・

今日も今日とて、変わらぬ桐野ファミリーである。

~~~~東京駅~~~~

さて、楓たちと別れた銀次と楔の二人組みは今現在東京駅にきた・・・のだが

「ふ、ふははははははははははッ!?!?!?!遂に!?!?!念願の!?!?!京都に!?!?!行けるぞ!?!?!?!?!ふははははははは!?!?!?!?!」

「ああ、マスター・・・録画中録画中録画中・・・」

「「「・・・」」」

なにやら、頭のネジが三本・・・いや、五十本ぐらい外れたのではないか？と思われるぐらい高笑いする金髪少女とそれを無表情で録画している緑色の髪をした少女二人・・・もうお分かりだろう、最近まるつきり出番のなかったエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルとその従者であり科学・魔法・変体刀の三つを混合させたカラクリ従者である茶々丸である。

「おお、見る茶々丸！！あれは！！あれが話しに聞く新幹線と言うものか！？」

「はいマスターその通りです」

「おお、あれが・・・話しに聞いたり写真で見たりするとおり、やはりどنگりみたいだな！！・・・おお！？これは話しに聞く東バナナではないか！！茶々丸、金を出せ！！買うぞ！！」

「イエス、マイマスター」

アッチにいつてコッチに行つて・・・とにかく目に入るものには何にでも興味を示す・・・と言つた感じに見て回っていた。

「・・・ねえ銀次君・・・確かあの子も今回の仕事請け負つてたよね？」

「ああ・・・確かそのはずなんだが・・・」

二人はボソボソと普通の人間では聞こえない程度の声で話を始める。そう、勿論エヴァも今回の仕事を請け負っている・・・はずなのが。

「う、うまい!?これがあの有名な 京バナナか!?話し以上の美味さではないか!」

「良かったですねマスター・・・録画中録画中・・・アア、これが俗に言う萌えという奴なのでしょうか・・・?」

「・・・明らかに楽しんでいる(な/ね)」

護衛としてというより、明らかに自分達(主従二人して)が楽しんでいるように見える。まあ、仕方のないことといえば仕方のないことだろう。エヴァは今までナギ・スプリングフィールドの登校地獄によって何年も外に出ることができなかつたためその反動が激しいのだろう。するとエヴァがまた何か目新しいものでも見つけたのかそちらのほうへと走っていきこうとしたとき、

「はいはい、そろそろやめようね」黄色い救急車呼ばれても文句がいえなくなるからね」

ガシリと、呆れたような顔でエヴァの後ろ襟を掴み持ち上げる人間が居た。エヴァはイラツとした顔になりながらそちらへと器用に向き、

「ええい瀬流彦離せ!!あちらにこの私は待っているモノがあるのだ!」

「・・・一応だけどね、僕も教師だからね?せめて『さん』とか敬称はつけようね?それと君が向かっている先にあるのはただの駅弁だよ」

「黙れ小童！！この私からさん付けされたいなど千年早いわ！！それよりもいい加減離せ！！私はあの駅弁を食べなければならんのだ！！！」

「・・・何だろう、無性に師匠の『言うこと聞かん子には拳骨で語る』システムを思いつきり行いたくなってきた・・・」

エヴァのその発言に元々沸点の低い瀬流彦が笑顔のまま額に怒りマークを浮かべていた。そして随分と前に彼の師匠である愚地独歩が言うことを聞かない弟子に対して拳骨で語なぐって聞かせたのを思い出しておりそれを実行しようかと考えている・・・が、一応は教師と生徒なのでそれはできないと思い、瀬流彦はそのままエヴァの後ろ襟掴みそのまま猫でも運ぶかのように集合場所へと連れて行った。

「な、貴様瀬流彦！！下ろせ！！私を下ろせー！！」

「だぁー！！んな文句言っていないでさっさと行くよ！！よく見たらもう集合時間になりかけてんだから！！」

ばたばたと暴れるエヴァをそのまま持ち去る瀬流彦・・・後に残るのはピューと吹く空っ風と早めに着いた新幹線の利用客の温かい微笑だけだった。

銀次と楔もそれを呆れ顔で見ている・・・が、

「・・・楔」

「うん・・・わかってるよ」

本の一瞬、二人の顔が真剣になる。だがすぐに微笑むような笑みを浮かべて二人はテクテクと歩き始めた。

「（・・・右手の新聞を読んでいる二人組、後ろにいる男女の二人組・・・そしてあそこで携帯で離れている外人一人）」

「（・・・見た感じは全員何も持っていないように見えるが・・・懐に拳銃を隠しているのがいるな。あとナイフも持っているな）」

二人はそ知らぬ顔で歩きながら周りにいる敵・・・おそらく今回の陰陽師に買われた傭兵の一部だろうその人物達のことを即座に確認する。

「（思った以上に少ないね・・・後10人ぐらいはいると思ったんだけど・・・）」

「（まあ、多分だがこいつらは様子見の別働隊って所だろう。監視をして隙あらば誘拐・・・って所だろうな）」

二人はボソボソと話しながら周りにいる敵を分析する。見た感じ、まだ手を出そうとはしていないらしいが、その視線は先ほどからさりげなくぼちぼちと集まり始めた3-Aの生徒に集中していた。そしてそれぞれが時々ボソボソと襟元や袖部分話す様になっているが、それも襟を正したりするような仕草なため気にとめるような感じではない。

「（多分だが、まだ別にこういう奴らがいるだろうな・・・）」

「（見つけたらどうするの？殺しちゃう？）」

サラリと恐ろしいことを述べる楔。確かにそれは手っ取り早く相手を片付けることができるのだが・・・

「（いや、それはやめておこう。確かにそれが手っ取り早いけど、死体の処理が大変だ）」

そう死体の処理が大変なのだ。森の中などならすぐに埋めたりそのまま放置してもいいのだが、ここは駅。しかも一般人も多くいるため何がおきるかわからない。下手に動いたらそれこそ大惨事になりかねないし、敵の戦力もはっきりしていない。

「（まあ、まだあいつらも手を出そうとは思っていないだろうし・・・しばらくはこちらも様子見としようか）」

「（うん、わかった）・・・お父さん早く行こうよ！！もう新幹線でちやうよ！！」

「ああ、すまないね楔。では行こうとしようか」

そうして二人は自然とした、まるで親子のような仕草で周りと溶け込んでいった。

「・・・こちら紅龍三番。目標が乗車・・・こちらも乗車する」

『紅龍二番了解』

『ケルベロス一番了解』

『暁四番了解』

『エレファント五番了解』

・・・そして、傭兵達も動き出す。

銀次達と傭兵達の戦いが切つて落とされる。

「（ふん・・・傭兵とかあまり気に入らんけど・・・まあええわ。私は私の復讐を遂行するまでや・・・そのためなら何でも利用したるわ）」

そして、一人のメガネを掛けた女性もまた・・・復讐に燃えながら行動に移った。

「さて・・・鶴子とは連絡をとったから宿は大丈夫だな・・・待っている銀次。すぐに私もそっちにいくからな」

また一人、浦島はるかも愛する男を目指して京都へと向かうべく、行動に移った。



銀次達と関西呪術協会・・・そしてイレギュラーも合わさり果たしてこの戦いはたして・・・どうなる？

## 第五十三話（後書き）

如何でしたか？最後は区切りがよかったためつい新幹線に乗るところで切つてしまいました・・・本当、早く話を進めなければ・・・。

そしてそして本当に申し訳ありませんが、前回の短編でも書きましたとおり作者は明後日から少し長旅に向かいます。来週の五日か六日にはこちらに戻つてこれると思いますので投稿は遅めになります。います。

それでは次回予告！！

新幹線に乗った3-Aの生徒達と銀次達一行・・・そこに同時に乗り合わせた傭兵と復讐に燃える女に恋に燃える女・・・様々な思惑を持ちながら、一行は京都へと向かう！！

「さて・・・めんどくせえことになってきやがった・・・」

果たして・・・物語はどう進むのか？

次回、ご期待を！！

それでは皆さん良いお年を!!

## 新年挨拶

ええ、まずは一言

皆さん！！新年明けましておめでとございませう！！

いや、すいません長らく不在で・・・でも中々楽しい旅行を行うことができました。今現在目下新しい話を製作中ですので来週には投稿できると思います。それまで皆さんどうかお待ちのほどを。

さてさて、それでは皆さん本年度もどうか『忍の剣士』をよろしく  
お願いいたします！！

それでは皆さんまた次回お会いしましょう！！

ちよつと文字稼ぎssssssssss

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2480o/>

---

忍の剣士

2012年1月6日10時50分発行